

日本の建築界における中国認識

-建築メディアにおけるその構造-

松原弘典

凡例

文献の引用における表記について：

- ・文献の引用において、漢字は旧字体を新字体に置き換えている。仮名遣いは原文をなるべく尊重し、「ゐ(ヰ)」「ゑ(ヱ)」「を(ヲ)」を用いる語をア行の音で表す以外は、古いものであっても原文をそのまま引用している。なお原文の明らかな表記上のあやまりについては適宜修正を、文脈が把握しづらい個所には適宜句読点を加えた。
- ・引用文を中略する場合は「…」と表記している。

用語について：

- ・現代では一般的に、過去の中国東北地方の地域名称と、「満洲国」を示す国家名称に「満洲」という語が混用されているが、文献の引用においては使用当時の語をそのまま引用している。ほかの地名についても当時の呼称を用い、適宜、現在の地名を補っている。

注について：

- ・本文中の引用文献情報は本文に番号をうち、各頁の脚注でそれを示している。巻末の引用文献で再度これらについて一覧できるようにしている。
- ・中国関連記事番号、中国観番号のうってある資料については記事情報と中国観文章を巻末に掲載し、本文中でこれらを引用する際は文章中に()でくくってその番号を表示している。なお各雑誌の略称は『建築雑誌』が K、『新建築』が S、『日経アーキテクチュア』が N である。

人物の身分、所属、生年没年などについて：

- ・文中に登場する人物の身分、所属については当該記述当時のものを記載することを原則としている。

**日本の建築界における中国認識
ー建築メディアにおけるその構造ー**
松原弘典

序章:日本の建築界の中国認識ーその所在と分析方法1

0.1. 研究の目的と意義

0.2. 日本の建築界と建築メディア

建築メディアに沿った日本建築界の把握

日本の建築メディアの歴史

0.3. メタ認識対象として中国を扱った先行研究

対象のメタ認識

日本の中国認識に関する先行研究ー中国に関するメタ認識 1

日本の建築界の中国に関する先行研究ー中国に関するメタ認識 2

0.4. 日本建築界の中国認識の分析方法

分析の対象ー『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』の中国関連記事と中国観

分析の方法ー中国関連記事における「情報伝達手段」、中国観における「論題布置」と「論調」

0.5. 研究の構成

第1章:近現代の日本建築界における中国認識ー『建築雑誌』の分析(1887ー2008 年)33

1.1. 『建築雑誌』の中国関連記事

『建築雑誌』における中国関連記事の抽出、時系列分布と論題による4つの仮説的時期区分

4期の仮説的時期区分における分析方法

a. 『建築雑誌』Ⅰ期(1887-1920 年)の中国関連記事

大学人と役人を主とする口述筆記録中心の情報伝達手段／西方と日本のつながりを中国に見る／細部の観察とそれを可能にした旅行記／過去を知るための建築と文字の接近／中国人への過剰な見下し／西洋人より優位に立つためのものさし

小括:つながりを見つけ、それを利用しようとする中国関連記事

b. 『建築雑誌』Ⅱ期(1920-1958 年)の中国関連記事

大陸にいる日本人が加わった、論説・口述筆記録・視覚情報による情報伝達手段／視点の返還ー現実的なデータの充実、住居への関心の移動、類似より相違をいうための細部／満洲国に関する記事の登場と住宅重視の姿勢／満洲に関する技術報告／満洲訪問報告の多様化／戦局の進行と技術への興味の増大／戦中戦後の中国認識の担い手の連続

小括:住宅という現実問題に没入する中国関連記事

c. 『建築雑誌』Ⅲ期(1959-1985 年)の中国関連記事

大学研究者を主とする論説中心の情報伝達手段／文献抄録による中国把握ー文化財の保存という新しい話題／考古学的考究の行き先ー日本の源流さがし／中国に関する特集号の登場／人間どうしの出会いを伴う視察旅行／文化財保存に見る中国の優位性

小括:遅れた中国に優れた部分を見つけようとする大人の態度に立った中国関連記事

d. 『建築雑誌』Ⅳ期(1985-2008 年)の中国関連記事

民間や中国の専門家が加わった、多方向で相対的な情報伝達手段／交流の蓄積とその本格化／同時代の中国への興味と日本への逆照射／中国からの発信／新しい中華趣味としてのヴァナキュラー建築への視点／現存する近代建築の検証／アジア建築という枠組み／後から急速に追いかけてくる中国に向けての日本からの情報発信／中国への期待と積極的評価の増加

小括:同時代で変化する国への興味を増しつつ、迎合的態度も取り始める中国関連記事

4 期の仮説的時期区分の妥当性の検証

中括:4 期の中国関連記事における情報伝達手段の通時的比較－手段の拡大とその反復

1.2. 『建築雑誌』の中国観

『建築雑誌』全 4 期における中国観の抽出とその時期-論題分布

a. KJ 法による近現代日本建築界の中国観の内容分析

「技術に着目」論題の中国観／「社会に着目」論題の中国観／「場所に着目」論題の中国観

小括:「技術」と「社会」の 2 つに大別可能な 3 段階の論題構造

b. 時期ごとの中国観の比較分析

大論題における 4 期の中国観の比較分析／大論題における中論題の比較分析／中論題における小論題の比較分析

小括:細分化する「技術」論題と入れ替わる「社会」論題

中括:4 期の中国観における論題布置の通時的比較－「技術」と「社会」における論題布置の重心移動

1.3. 第 1 章まとめ:論題の重心移動を伴いながら反復する中国認識

第 2 章:現代の日本建築界における中国認識－『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』の分析(1985－2008 年)95

2.1. 『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』の中国関連記事

3 つの建築メディアにおける中国関連記事の抽出とその時系列分布

3 つの建築メディアにおける分析方法

a. 『新建築』(1985-2008 年)の中国関連記事

設計者により、建物ベースで視覚情報とともに伝えられる情報伝達手段／中国に軸足を置く日本人建築家の登場／旅行記における変化／長い時間の中での中国、大きな枠組みの中での中国／急速な成長への気づき／オリンピックの存在

小括:現地の状況に目を配り、大きな枠組みの中で成長する現実を支持する中国関連記事

b. 『日経アーキテクチュア』(1985-2008 年)の中国関連記事

記者により再配列された現場重視の情報伝達手段／香港の日系つながりが中国観察の端緒に／ゼネコン、メーカーによる日中合作／本格的な中国大陸状況の紹介開始－深圳・上海から／中国影響の海外への波及／都市論・アジア論／海外建築家の中国プロジェクトへの参入／グローバル化と中国影響の海外波及の拡大／否定的な論調／より身近な中国情報－案内板情報と現地取材特集／すばやくなる現場からの報道

小括:取材範囲を拡大し、中国の対外影響に敏感な中国関連記事

1985 年から 3 誌を比較することの妥当性の検証

中括:3 誌の中国関連記事における情報伝達手段の共時的比較－情報伝達軸と対中態度のメディアごとの相

違

2.2. 『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』の中国観

3つの建築メディアにおける中国観の抽出とそのメディア-論題分布

a. KJ法による現代日本建築界の中国観の内容分析

「技術に着目」論題の中国観／「社会に着目」論題の中国観／「場所に着目」論題の中国観

小括:「技術」と「社会」と「場所」の3つに大別可能な3段階の論題構造

b. 建築メディアごとの中国観の比較分析

大論題における3つの建築メディアの中国観の比較分析／大論題における中論題の比較分析／中論題における小論題の比較分析

小括:共通して主流の「技術」論題とメディアごとに異なる「社会」と「場所」論題

中括:3誌の中国観における論題布置の共時的比較－「技術」以外の論題による布置の性格づけと現場情報の一般化

2.3. 第2章まとめ:中国に影響を受けながら、技術以外に着目するようになる同時代の中国認識

第3章:日本建築界の対中論調にみる中国認識－3つの建築メディアに繰り返される中国観の分析143

3.1. 繰り返される中国観の論点と論調

繰り返される中国観の抽出と論点ごとの整理

17の論点における分析方法

論点ごとの中国観の分析とその時期-メディア-論調分布

a)中国の人／b)建設ラッシュ／c)古いもの／d)大きい多い／e)スピード／f)ものづくりへの態度／g)将来の変化／h)施工精度／i)アドリブ的／j)中国の役所／k)持続可能性／l)部分と全体／m)まだこれから／n)維持管理／o)よくわからない／p)感情的親近感／q)コンペ

3.2. 繰り返される論調の傾向

肯定的否定的論調のどちらかに一貫して中国観が反復する論点:「一貫型」7つ

肯定的否定的論調が混在して中国観が反復する論点:「混在型」7つ

肯定的否定的論調が一定期間ごとに交替して中国観が反復する論点:「交替型」3つ

小括:反復する中国観における時期と論調の関係分析－3つの論調パタンのもつ安定性と不安定性

3.3. 第3章まとめ:自我と時代との関係で規定される複層的な中国認識

終章:日本の建築界における中国認識－建築メディアにおけるその構造193

4.1. 研究のねらいと成果

4.2. 研究の3つの主題についての結論

日本の建築界の中国に関する記述はだれがどのように伝えてきたのか

日本の建築界は中国のどの部分に着目してきたのか

日本の建築界が繰り返し持つ対中論調にはどのような傾向があるのか

4.3. 今後の課題と展望、動いて見える半他者

今後の課題と展望

動いて見える半他者

あとがき

付録 1: 引用・参考文献

付録 2: 図表リスト

別表 K1:『建築雑誌』中国関連記事リスト(1887－2008 年) 全 229 編

別表 K2:『建築雑誌』中国観リスト(1887－2008 年) 全 156 回

別表 S1:『新建築』中国関連記事リスト(1985－2008 年) 全 196 編

別表 S2:『新建築』中国観リスト(1985－2008 年) 全 62 回

別表 N1:『日経アーキテクチュア』中国関連記事リスト(1985－2008 年) 全 200 編

別表 N2:『日経アーキテクチュア』全中国観(1985－2008 年) 全 93 回

別表 X1:日本の対中貿易輸出入額推移表(1887－2008 年)

序章：日本の建築界の中国認識—その所在と分析方法

序章では、本研究の所在と分析方法を提示する。

第1節では研究の主題と目的を述べる。主題は3つに集約され、3章からなる本論でそれぞれ検討される。

第2節では日本の建築界、そのメディアの状況と歴史、建築学領域における中国研究を見ながら、研究の意義を明確化する。

第3節では広く中国に関する先行研究を見ながら、本研究の立ち位置を明らかにする。

第4節では具体的な分析の対象とその方法について、先行研究も参照しながら提示する。

第5節では本論文の構成を示す。

0.1. 研究の目的と意義

0.2. 日本の建築界と建築メディア

建築メディアに沿った日本建築界の把握

日本の建築メディアの歴史

0.3. メタ認識対象として中国を扱った先行研究

対象のメタ認識

日本の中国認識に関する先行研究—中国に関するメタ認識 1

日本の建築界の中国に関する先行研究—中国に関するメタ認識 2

0.4. 日本建築界の中国認識の分析方法

分析の対象—『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の中国関連記事と中国観

分析の方法—中国関連記事における「情報伝達手段」、中国観における「論題布置」と「論調」

0.5. 研究の構成

0.1. 研究の目的と意義

日本の建築界はいかにして隣国中国を眺め、認識し、伝えてきたのか。本論文はこの問題をめぐる論考である。

21 世紀初頭の今日、日本は中国との関係を急速に再構成しつつある。ここ数十年のスケールで見れば 1990 年代末に安価な労働力を求めて日本の電子機器メーカーが中国に大挙しそこを「世界の工場」と呼ぶようになったところから、日中関係はかつてない規模で経済上の接近を続けてきた。2001 年の中国の WTO 加盟は、その市場開放をあてこんだ日本企業のさらなる当地への進出を加速させ、『財務省貿易統計』によれば 2007 年に日中貿易の輸出入総額は 27.8 兆円を数え(図 0.1.-1)、初めて日米貿易の総額を抜き中国は米国に代わる日本の最大の貿易パートナーに浮上した¹⁾。人材も移動しつつある。外務省の『海外在留邦人数調査統計』では、2007 年に海外の都市別長期滞在者数において上海が 47000 人を越えニューヨークの 40000 人余りに替わり初めて最多になった²⁾。日中関係は今まさに大きな転回点にある。

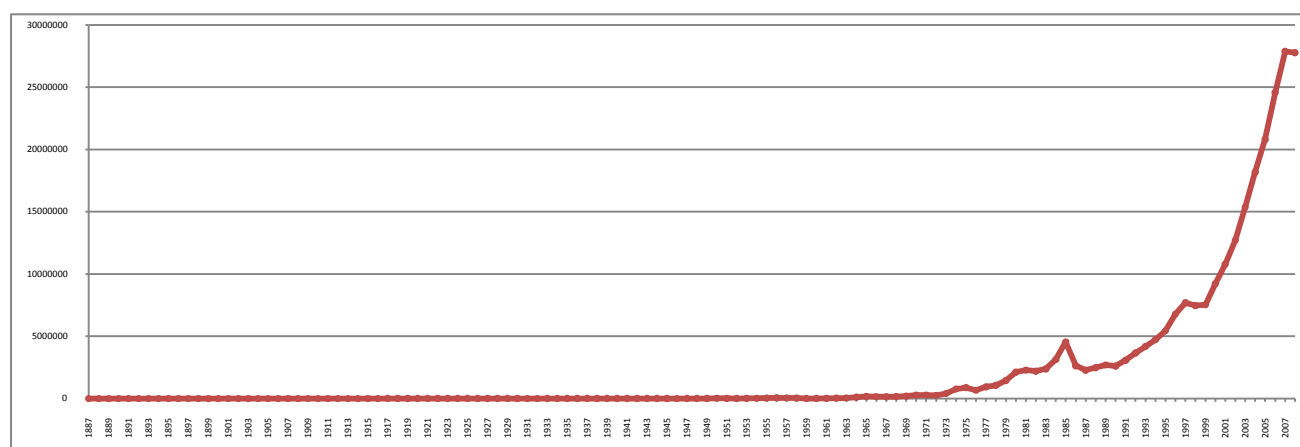


図 0.1.-1: 日本の対中貿易輸出入総額推移グラフ(1887-2008 年) 単位:百万円

そして建築界における日中関係も変化している。日本の建設事業は縮小を続け、着工新設住宅戸数は 1995 年に 147 万戸であったのが 2008 年には 109 万戸にまで減少した³⁾。そうした状況下でいまだに住宅建設需要の高い隣国に活路を見出そうとするのは必然の流れであるとも言える。日本のハウスメーカーはすでに中国で事業を進めつつある。建設だけではない、グローバル化により資本は国境を越えて動くようになり、建材販売や設計分野でも日本から中国への進出が加速している。社会資本の中心的な投下先として拡大してきた日本の建設業は、日本社会の成熟化によってその拡大先をすでに失い、日本の建設業関係者の間では、国内の少ないパイを争うよりは中国に出てゆこうとする動きがおきつつある⁴⁾。日本の建築界にとって中国は、そうしたマネーや人の移動先として現実的な対象になっているのだ。

こうした日中関係の再編成は、巨視的な歴史のなかで見ても大きな転回点にある。そもそも前漢(紀元前 206-西暦 8 年)に日本が倭として中国側から認識された時代から日中関係は 2000 年の歴史があり、日本は永くそこから経済的にも文化的にも影響を受け続けてきた。明治維新で日本が西洋を規範に近代化を進め、日清戦争で勝利をおさめたころ

1)『財務省貿易統計 貿易相手国上位 10 カ国の推移(輸出入総額:年ベース) 1985 年-2009 年』財務省<<http://www.customs.go.jp/toukei/suii/html/data/y3.pdf>> 2011 年 4 月 13 日閲覧、なお本論文末尾の別表 X1 にも同データが収録されているのであわせて参照されたい。

2)『海外在留邦人数調査統計 平成 20 年度速報版(平成 19 年 10 月 1 日現在)』外務省領事局政策課、2008 年 <<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/08/pdfs/1.pdf>> 2011 年 2 月 5 日閲覧

3)『日本の統計 グラフで見る日本の統計 21 着工新設住宅戸数』総務省統計局、2011 年 <<http://www.stat.go.jp/data/nihon/g2109.htm>>

4)日本のゼネコンは 1980 年代から中国企業と合弁会社を作り 90 年代後半には建設業に進出している。中国の WTO 加入以降は日本の建材メーカーの中国進出も盛んである。最近では日本の地方の資本が直接中国とつながろうとする動きも見られる。たとえば以下を参照。「中国における建設業・関連産業の進出可能性」『北陸地域づくり叢書 北陸地域における北東アジアとの経済連携』(社)北陸建設弘済会、2010 年 <<http://www.hces.jp/project/project1/h21/report/4.pdf>> 2011 年 2 月 5 日閲覧

から、日本人の中国意識は見上げから見下ろしに転換したと言われる。戦後は国交正常化までの正式な関係が途絶えた時期を経て、そして今度は日本の後を追いかけるかのように中国が急速な経済成長をとげている。この 150 年あまりの日本の近代化の中で、我々は隣国をどう見てきて、これからどう見てゆくべきなのか。日本の建築界にとって、中国を見て語るということはどういう意味をもち、またどうあるべきなのだろうか。伊東忠太は中国建築が世界でも最も珍奇なものの一つだといい、尾島俊雄はそこにはパワーがあるからこれからどうつきあうか日本は考えないといけないといい、山本理顕はそこに日本人はもっと出て行かなければいけないと言った。そうだろう、実際縮小の時代にある日本は資本の投下先を外に求めないといけないのは明らかだし、そもそもアジアの中でのこの二国関係は、もはやすでに二国だけのものではなく、東アジア全体の情勢に大きな影響を持っており、そして彼の国が隣にあるという事実はこれまでもこれからも我々にはずっと否定できない事実なのだから。建築界における中国認識の経緯を理解し、より客観的な指標を得ることは、日本建築界の中にいる我々にとって、今後の立ち位置を決める上での重要事項であるのは間違いがない。

ここでは、こうした背景の上で、冒頭の問題、「日本の建築界はいかにして隣国中国を眺め、認識し、伝えてきたのか」という点に対して、より具体的に究明すべき研究の主題を以下の 3 点に集約している。

1. 日本の建築界の中国に関する記述はだれがどのように伝えてきたのか
2. 日本の建築界は中国のどの部分について着目してきたのか
3. 日本の建築界が繰り返し持つ対中論調にはどのような傾向があるのか

これらの主題をめぐって、本論は明治時代から北京オリンピック開催の 2008 年までの期間について検討を加える。日本の建築界について、中国に関する記述を網羅的に取り出しそこから知見を得ようとすることは、日本の建築界が自らの「外部」や自らにとっての「他者」をどう見てきたか、ということの 1 つのケーススタディであるとも言えよう。それは当時の中国がどうであったかという単純な事実の羅列ではないし、日本の中国研究がいかなる成果をあげたかという歴史学の成果の集積とも完全に一致するものではない。日本における建築に関わる知識層が、中国という隣国をどう見て、その情報をいかに日本に伝達し、さらにそれをメディアの上でどのように広く配置して読者と共有しようとしていたのか、そのメカニズムを明らかにすることが本研究の目的である。

現在、日本の中国認識、日本建築界の中国認識は動的に変化している。数年の日中間の相互理解の極端な変化について、横山宏章⁵⁾はこう述べている、「二十一世紀に入ると立て続けに両国関係に軋みを生む事件が勃発し、両国の国民感情は悪化し始めた。記憶に新しいものでも、サッカー・アジアカップ騒動、珠海買春事件、西安寸劇騒動、遺棄化学兵器被害、瀋陽総領事館駆け込み事件、原潜侵犯、尖閣諸島、ガス田開発、ODA 問題、李登輝訪日の台湾問題などと、トラブルはあとを絶たない。…憂慮すべき点は、こうした事件が政府間のトラブルにとどまらず、国民感情の悪化をもたらしていることだ」。両国間の経済的な関係が深まるにつれさまざまな問題が浮上し、同時にそのことが、お互いよく知らなかった時代に比べて、より深く、日本人の中国観、中国人の日本観に影響を与えていることがここでは指摘されている。横山は内閣府の「外交に関する世論調査」の結果を示し、日本の国民感情としての中国観が親近感から嫌悪感へと逆転していつていることに危機感を表明しているが、これは当時の状況から考えるにある程度は仕方のないことであろう。この論文を執筆している 2011 年の今でもそうした状況はあまり改善されていないと言える。

日本の建築界にとっても、昨今の中国の存在はもはや単なる市場をもとめる外国ではなく、より切実に我々の国内の建設活動にも影響を与える存在になっている。『日経アーキテクチャ』は 2005 年 5 月 30 日号で「避けられない中国の影響力」(N144)として、中国経済の急成長によって、鋼材のみならずステンレス製品やセメントの国際価格が上昇し、日本の建設単価にそれがはね返ってきていることを伝えている。この記事は同時に中国住宅建設需要の高まりや依然

5) 横山宏章『反日と反中』集英社、2005 年

として人件費が相対的に低いことも伝えており、日本からの進出や作業外注先としての中国の吸引力も示している。

こうした日中関係をめぐる認識の不安定性、影響の双方向性は、両国が戦後に対等な国際関係を築きあげ、昨今の情報技術の発展がこれをサポートすることによって持続していると言えるだろう。しかし現在までのところ、双方の相手への認識は正確さに欠き、日本の中国認識も、今までの経緯も把握しないままそのときの印象で流転しているような状況があまりに多すぎる。こうした現状において、本論で日本の建築界の中国認識を把握することに、筆者は3つの意義があると考ええる。

1 つ目には、日本建築界の過去から現在の中国認識の経緯を通して把握することで、冷静で合理的な将来の中国認識の形成につなげられるという意義がある。中国認識のこれまでの歴史と現在の多面性を把握することは、未来における望ましい中国認識を構築する上での助けになると考える。

2 つ目には、建築界における中国認識を扱うということから、建築というモノをめぐる言説を通して、より具体的な中国像を把握できるという意義がある。建築という、人間の設計行為によって作られるモノには当時の人間の意図がこめられており、それは時代の精神を反映する鏡である。そうした物理的なモノについての記述から日本の中国認識を検証することは、政治学、経済学などの分野での日本の中国認識研究とは異なる視点を提供できると考える。

さらに3つ目には、日本が中国を見てきたその自身の態度を総括的に扱うという意味で、本研究は日本社会の意識の歴史を把握できるという意義がある。本論文は日本の建築メディア上の中国認識を分析対象にしているという点で、直接の考察対象は認識対象の側の中国ではなく認識主体の側の日本であり、日本建築界の集団的自意識を中心に扱っている。こうした対象の設定においては、中国という鏡を通して日本建築界という自己を把握する効果が期待できるだろう。

0.2. 日本の建築界と建築メディア

建築メディアに沿った日本建築界の把握

これより本論文では、日本の建築界における中国認識を検討してゆくわけだが、そもそも「日本の建築界」とはどのように定義されるものであろうか。

「建築界」という言葉は、建設業を中心とした広く建築にまつわる実業界全体を指す場合などに使われている例もあるが、実のところその使用法はあいまいで、必ずしも普遍的な定義が確立しているわけではない⁶⁾。前後の文脈で異なる使われ方をすることもよく目にする。これはそもそも現代の日本における「建築」のあり方が多様かつ複合的で、「建築」という語自体が広範な使われ方をしていることによるものと思われる。そこでまず「建築」という語の定義を各辞典で見تينことにしよう。

日本建築学会編岩波書店発行の『建築学用語辞典』によればそれは 4 つの意味の意味からなる。1.architecture 建物のこと。2.construction 建築物を造ること。3.architecture 建築物を設計したり造ったりする技術。4.architecture1 から 3 の技術、学問のうち、形状、機能的側面と全体的統合をはかる分野。

彰国社発行の『建築学大辞典』ではそれは 3 つの意味からなる。1.人間的要求と建築材料とが実用的・美的価値を与えるように処理されている建物の総称。2.建物、橋梁などを築いていく過程。3.建築物を新築、増築、改築または移転すること。

平凡社発行の『世界大百科事典』では一意的な説明がある。明治に「アーキテクチュア」の訳語として造られたこの言葉について以下のように説明されている、「アーキテクチュアとは、単なる建造物 building、structure に対して、一定の芸術的様式をもつ建物一般をさす集合名詞であり、かつ、それらをつくりだす建築技術の体系を意味する。すなわち建築術あるいは建築芸術の意である。しかし、日本での<建築>という言葉は...今日でも主として建造物、建築工事の意に用いられ、建築を土木から区別する役割しか果たしていない」。

このように、そもそも「建築」という語が、辞書だけを見ても、「建造物」と区別された名詞であったり、建造すること自体を指示する動詞だったりし、また一種の技術の体系であるとする定義もあるなど、一定の広がりや多義性があることがわかる。結果として、そうした「建築」にまつわる世界を示す語としての「建築界」という単語も多義的にならざるを得ないと言えるだろう。

ではここで、実際の現代社会の人間集団から「建築界」という世界の構成を考えてみたらどうであろうか。日本の建築関連の世界がどのような人間集団によって構成されているのかというところからこの問題を考えてみる。2005 年の国勢調査⁷⁾で日本の人口は 1 億 2777 万人、そのうち 15 歳以上の就業者数は 6151 万人で、第二次産業の「建設業」に関わる従事者は 539 万人を数え全就業者数の 8.8%を占める。建築関連世界の構成層となると、これに第三次産業の不動産業・サービス業・公務に含まれるであろう設計業の従事者や研究者、さらにはそもそも就業者に含まれない建築を学ぶ学生なども算入する必要がある、国勢調査のカテゴリをもう少し詳細に分割して加減する必要があるはずである。業界の関連団体における人間集団という角度から考えてみることも一つの方法である。建築五会と呼ばれる 5 つの団体の集合、すなわち(社)日本建築学会、(社)日本建築士連合会、(社)日本建築士事務所協会連合会、(社)日本建築家協会、(社)建築業協会に属する会員たちを、建築をとりまく社会において主要な構成層であるとみなし、その周

6) 1979 年から 80 年まで中国に長期滞在した早稲田大学の尾島俊雄は、中国中を回って各地で講演をしたが、その時の講演タイトルを「日本の建築界」としている。以下を参照、尾島俊雄『現代中国の建築事情』彰国社、1980 年、p3。また、日刊建設通信新聞社が毎年出す建設業界解説本のタイトルは『建設人ハンドブック X 年版—建築・土木界の時事解説』である。ここでは「土木」に対して「建築」を括る言葉として「建築界」が使われている。さらに日建設計 OB の橋本喬行による『論評建築界を考える』(日刊建設通信新聞社、1995 年)では、建築行政や知的所有権、設計報酬、業界の国際化など主に建築設計者の立場や建設業の現状など、建築の職能的な部分に関する内容を扱う当該書籍のタイトルにおいて「建築界」という言葉を使っている。

7) 『平成 17 年国勢調査最終報告書 日本の人口』総務省統計局、2010 年

辺を含めた全体を日本の建築に関連する人間集団というようにみなすこともできるかもしれない。しかしこうした方法ではいささか建築の実業界・学术界の一部に集団にのみ視点が集中してしまう恐れがある。例えばフリーランスで設計や施工を生業としている層、中小の施工業者や学生も含めた建築教育の関係者などの存在は取り込めないし、こうした業界団体の構成員だけで建築界の人間集団を説明しきることもまた不可能であると思われる。

こうしてみると、言葉の定義の上から考えても、実際の現代社会における人間集団から考えても、日本の「建築界」イコール何か、と言えるような既存の一意的なカテゴリは定義が困難であることがわかる。定義になるほどの意味の限定性をもちあわせていないことを知りつつも、ここであえて本論文で扱う「日本の建築界」をできるだけ説明的に言い替えるとするならば、「建築の計画・設計・施工・使用と理解に関するあらゆる人々の集まり」という程度のものにならざるを得ない。

こうした「日本の建築界」を具体的に考えるのに、ここで、メディアの存在に沿ってそれを把握しようとすることを提案したい。建築界のような、大きくて社会的な意義がついてまわる建築をめぐる世界では、様々な背景をもつ人々の意見を束ね、形成するのに雑誌＝建築メディアの存在が重要な役割を果たしているからである。あるいはこうも言える、建築界の中には建築雑誌の数だけ異なる人間集団があり、それぞれの集団が情報の上である程度共有可能な価値観をもちつつ、建築と関わりをもっている、というように。もちろんこのメディアと集団の関係は固定的なものでも一意的なものでもない。業界団体のように構成人員全員に配られる機関誌のようなメディアを中心に集団が規定できるケースもあるであろうし、集団を公的に代表するメディアはなくともその雑誌を支持する読者集団として理解されるであろう集団を想定することもできるであろうし、1 人がいくつものメディアに接触しいくつかの異なる集団に属しているように見える関係もあるだろう。読者層の規模を問わず、建築に関する情報共有のために編まれた媒体を「建築メディア」と呼ぶこととすると、さまざまな人々の集合がパッチワークのように組み合わせられて形成される日本の建築界は、さまざまに異なる「建築メディア」の集合体というように言いかえることはできるのではないだろうか。「建築界」を、それを構成する人から考えるとその属性は多様すぎてしかもその属性が変化するのに対し、その中に散らばる建築メディアから考えると、そこにある情報はすでにメディア上で整理されて並べられているので全体像を把握しやすく、定期的に刊行されるメディアであればなおさら観察範囲を明確にできる。

ここでこの日本の建築界の全体像を、今仮に 1 つの平面に置いて考えてみる。そこでは学術的建築界、実業的建築界などのいくつかのコアとなる領域が中央近くにあり、各領域にはそれぞれの建築メディアが存在している。学術領域であれば建築学会の機関誌『建築雑誌』や関係学会のそのほか機関誌、実業領域ならたとえば各職能団体の機関誌である『建築士』や業界の機関誌、各企業の広報誌などがあるだろう。その周辺にはもうすこしマスの建築メディアとして、より多数の読者を擁する『新建築』や『日経アーキテクチュア』などの商業系建築メディアがある。その外側には、さらに専門色が薄められた、『モダンリビング』、『カーサブルータス』などのインテリア系やより大衆的な一般商業系メディアがあるとと言えるだろう。「日本の建築界における中国認識」は、こうした全体像の上で展開するマスイメージであると言える。そこには中国に実際渡航した、あるいは中国について研究してそのことについての一次情報を一般の人より多く持った中国情報の伝達の担い手がおり、彼らの知見が建築メディアに記事情報として掲載されることで、その認識は広く共有される。読者はそうして広くいきわたった中国関連の情報を目にして中国に対するイメージを形成する、すなわち中国認識をもつようになるわけである。この日本建築界の全体像を概略的な図にしたものを以下に示す(図 0.2-1)。

雑多で全体像を把握しづらい日本の建築界を、本論ではその構成員の集団を支える「建築メディア」に注目し、そこに配置された記事情報を分析の対象とすることで日本の建築界の意識をするという方法をとる。日本の建築界の全体平面を想起すると、中心部分に近い個所で最も広い範囲をカバーしている建築メディアのひとつが、建築学会の機関誌で 3 万部を超える発行数を持つ『建築雑誌』であり、おなじく 3 万部を超える発行数の『日経アーキテクチュア』も主

要な位置を占めていると言えるだろう。『新建築』は部数は多くないようだが商業建築誌として長い歴史を持ち設計者を中心とした根強い読者を擁している。本論では、日本の建築界、というものが多様で一意的に定義しづらいという前提に立ちつつ、その世界のなかで一定の読者層を獲得して情報を広く共有しているこれらの雑誌を分析対象に据え、日本建築界の中国認識を通時的・共時的に検証するものとする。これは、観察対象が限定的であり普遍的な見解が得られるわけではないという条件がつくものではあるが、性格の異なる3つの雑誌を扱うというその総合性を考慮すれば、日本建築界の傾向を探る上で一定の意義はあるものと思われる。

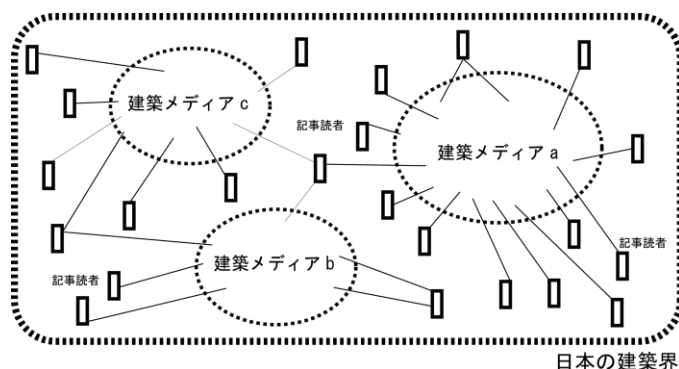


図 0.2.-1: 複数の建築メディアとその周囲の読者群により構成される日本の建築界

日本の建築メディアの歴史

そもそも日本の建築界の建築メディアはどのように形成されてきたのか、その明治の近代化以降の変遷を、建築学会の『建築雑誌』を中心に、本論で扱う他の2つの雑誌についての情報も参照しながら、概略的にではあるがここで追っておくことにする。

明治の教育制度の近代化のなかで高等教育において建築教育が行われるのは、1871年設置の工学寮と72年設置の工学校に、73年に専門科の「造家学科」が含まれていたところまでさかのぼることができる⁸⁾。77年にはこれが工部大学校に引き継がれ、この第一回卒業生23名が卒業の年である1879年に「工学会」と呼ばれる組織を立ち上げ、翌年には『工学叢誌』を創刊している。青井哲人による日本建築学会の歴史を概略的に説明した「120年の歩み」⁹⁾では、3年後の1884年にこの雑誌は『工学会誌』と改称され、それが「現場実験的な「新実理」を伝え、共有するための雑誌とうたって」いたという。ここでは実際造家学科の出身者の論考が、他の工学系の分野からのそれと並列されて並んでいた。造家学会はこの工学会から分離したものであり、1887年に学会が『建築雑誌』が発行するようになると執筆者も『工学会誌』から『建築雑誌』へと移ってゆくことになるが、いずれにせよこうした雑誌が明治の黎明期に建築専門家達の知見の披歴場所として機能していたことがわかる。

青井は建築学会の120年の歴史を「建築関係諸機能のアソシエーションか、それとも建築学に取り組む研究者のアカデミーか、そして国家・社会との関係を積極的に結び結ぼうとするのか否かといった選択をめぐる振幅を示している」という視点から5期にわけて手際よく説明している。第1期(1886-1911年)の学会は辰野金吾を中心として「主としてRIBA (Royal Institute of British Architects)を規範とし、欧米的な建築家の職能団体を目指し」ており、創刊された『建築雑誌』は当初は執筆者も読者も一握りにすぎず、「会誌編集といっても編集員が独力で数頁を埋めるといった有様だった」という。第2期(1912-1936年)は佐野利器を中心に学会は学術団体への傾斜を深め、23年の関東大震災はそれを後押しした。『建築雑誌』は学術講演の縦書きの記録と技術分野の数式の混じる論文が同居するようになり30年には横組に統一され学術論文の投稿先として位置づけられてゆく。戦争を挟んだ第3期(1937-1950年)は、47年

8)『東京大学百年史』東京大学百年史編集室、1987年

9)青井哲人「120年の歩み」『建築雑誌増刊 日本建築学会120年略史』日本建築学会 2007年増刊号、p18-28

に定款を改正し、準員制を廃止したうえで、「単に学術研究のみの如き旧来の風を是正し、第一に広く建築技術者一般の社団法人たるの使命、第二には日本の建築事業の全般が健全に発展しうるための一切の努力に払うべき事に目的を拡大展開する」とし、建築界の全職能の協会的組織の方向性をうちだしている。会誌は終戦時に一時休刊があったが戦中戦後を通して発刊され、ここでも「学術団体」としてのあり方を前提としつつも、「職能団体」としての積極的な活動を企図すべきことが高らかに主張された。第4期(1951-1985年)では、建築士の職能に関する法制化が50年の建築士法の公布・施行によって実現し、都道府県単位の「建築士会」とその全国的連絡機関である「日本建築士会連合会」が実現されたことで学会はこれを建築士の職能団体の確立とみなし、自らが抱え込んできた社会的文脈を整理した。具体的には重大な定款改正に着手し、「研究を主務とする学会の目的を端的に表現し、性格の純化をはかる」ことがなされた。これにより「学術・技術・芸術の進歩発達を図る」ための「研究団体」との規定が明確にされた。47年の定款は10年の短命に終わり、会誌も細分化された研究動向を共有する場として位置付けられ、研究委員会の構成をベースにした、分野別、持ちまわりの特集主義が組まれるようになった。第5期(1985-2006年)では、第4期の研究団体への特化により、社会との接続姿勢が減少し会員数が減少し、研究活動に直接従事する者が会員の1割にすぎないにもかかわらず純粋な研究団体を標榜する矛盾も注視せざるをえなくなった。そこで86年の学会設立100周年を機に改革が実行され、「会員の多様性を意識化し、社会(そして国際社会)との乖離を自覚して、再び大きく舵を切りなおした」という。

現在にいたるこの第5期では『建築雑誌』も大きく様変わりし、1980年代以降横断的な特集が組まれるようになった。このあたりの状況について87年から89年まで編集委員長を務めた布野修司は、「最近の『建築雑誌』は「商業雑誌的になった」という反応を多く受け取ったと言ひ、『建築雑誌』と商業雑誌の違いを意識した上で、自らが『建築雑誌』の編集で考えとしていたのは「アカデミズムとジャーナリズムの相互貫入はどのように可能か」という問題だったと述懐している¹⁰⁾。建築メディアの歴史をひもとくと、必ずつきあたるのがこの建築ジャーナリズムの問題である。その存在や必要性の有無について我々には共有の基盤がないので、ここで深く追求することはしない。神戸大学教授の向井正也が言うように「建築雑誌に載せられる建築作品とその批評、あるいは作者による創作ノートなどは…設計者はもとより、施工者や施主の業務の宣伝という、俗なる機能をもまた確実に果たしていることは、暗黙の中に誰しも認めるところだが…わが国はもとより、欧米でも建築批評は成立しないといわれる理由もこのあたりにあると見られる」¹¹⁾という構図が建築におけるジャーナリズムの成立をそもそも妨げているという事情もある。ただしこの言葉についての言説は過去に多数残されており、建築メディアのあり方を知る上でこの語にまつわる言説から関連情報を拾い出すことは有用である。編集者の宮内嘉久は建築アカデミズムとジャーナリズムを対比して次のように語っている。明治時代は『建築雑誌』と『建築世界』(1906年創刊)しか建築雑誌が事実上存在しなかったことを指摘し、「明治という時代のほぼ全体を通じて、建築学会が建築領域の言論空間を形づくってきた。つまり、アカデミー(と呼べるとして)の単独支配であり、ジャーナリズムは未形成であった。その状況にひび割れが生じるのは、商業雑誌の誕生である。大正期に入ると、『建築世界』に続いて、『新建築』(のちのそれとは別:1914年)、『建築』(同上:1915年)などの諸雑誌が、読者大衆としての技術者層の増大を背景に創刊される。だが、アカデミーに対置さるべきジャーナリズムの分野が拓かれるためには、一つの契機が不可欠だった。1920年(大正9年)の分離派建築会、続いて創宇社の発足(1923年)こそ、この国の建築領域における在野意識と批評精神との形成に画期をなすものであった。つまりそれら近代建築運動のエネルギーと結びつくことによって始めて、アカデミーとは別の、建築ジャーナリズム独自の言論空間が成立しえたのである」¹²⁾。

10) 布野修司 「『建築雑誌』と商業雑誌」『建築雑誌』 日本建築学会、1989年8月号、p51

11) 向井正也 「建築ジャーナリズムの聖と俗—ジャーナリズムとアカデミズム」『建築雑誌』 日本建築学会、1977年11月号、p8

12) 宮内嘉久 「鏡のない世界—誰もその歴史を知らない建築ジャーナリズム」『建築雑誌』 日本建築学会、1992年5月号、p57。なお宮内は20世紀の日本の建築ジャーナリズム史を6期にわけて説明している。以下を参照、宮内嘉久 「20世紀における建築ジャーナリズム思潮の変遷」『建築雑誌』 日本建築学会、1999年9月号、p20-25

商業誌の登場した当時の状況について、国鉄の菊地重郎は1956年の座談会で「建築ジャーナリズムを読者の立場で見ていた」ことを振り返って「例えば『建築雑誌』というのは建築学会の雑誌で、どちらかというと学者向きなのですね。それだから商業雑誌として『新建築』と『国際建築』と『建築世界』があつたわけですが、昭和10年ごろから『新建築』がぐんぐん大きく内容も充実して来た。学校の製図室なんかに女の販売員が来るという姿でした…そんな姿が昭和15年頃までだと思います¹³⁾と1935年前後の状態を紹介している。1925年発刊の『新建築』が当時どれくらい目を引く存在だったかがよくわかるエピソードである。戦後の『新建築』の状況については同じ座談会で川添登が、「私が編集をやり出した頃は、殆んど作家の方をお願いに行くような状態で自由な編集というのはできない状態でした。それを崩してゆくためにも雑誌としての権威を持たなくてはならないということから、作家論とか水準の高いところをねらって1年が経過しました。これからは国民的な面に立つてやつて行こうとしています」と言い、戦後10年目の商業誌の立ち位置を率直に語っている。

さらに後の商業誌の編集者からの証言もある。1977年11月号の『建築雑誌』は「建築ジャーナリズムについて」と銘打った特集であり、当時創刊からまだ1年しかたっていなかった『日経アーキテクチャ』の編集長蜂谷真佐夫が同誌の編集方針を紹介し¹⁴⁾、「私共雑誌の基本方針は建築に関する総合的な情報誌」であり、編集テーマの設定範囲は「設計者を含めて、建築専門家の方々の職務上、関心の範囲をカバーする」ものとして、読者ニーズに徹底して密着した編集をこころがけるとしている。これは「新聞のニュース報道の仕事から、雑誌編集特に、読者がセグメントされた建築雑誌の編集に転じ」た編集長が明快に定義する建築ジャーナリズムのあり方である。一方それに続く記事では『新建築』編集長の馬場璋造が「建築専門誌はジャーナリズムではない」というタイトルで、長く建築界で存在してきた建築情報誌のあり方を明快に定義している¹⁵⁾。すなわち「一般にジャーナリズムを支える柱には情報機能と批判精神がある。建築専門誌には情報機能はあるが…批判精神が…はじめからそれがない。」と、「それでは建築専門誌の基本は何であるかといわれれば、それは記録である。建築界のその時々々の状況を—私たちの雑誌ではとくにデザインとそれに関する設計技術の状況を—限られた月々の誌面のなかに如何に正確に記録し続けていくか、これが基本的役割であると考え、またそう活動している積りである。そしてその記録が、読者にとっては情報として作用するのである」という。また馬場は、「建築専門誌の意図によって建築デザインのすう勢が動いていると見るのは、木を見て森を見ざるの過ちであって、建築家全体の合わせ鏡として建築専門誌が存在しているのだということである」と言い、これは建築メディアの扱う情報が、メディアの側から一意的に決められてトレンドのように発信されているのではなく、設計者の側の出来たものの反映がそこで扱われているということ、すなわちメディア情報とは結局送り手と受け手の間の循環的關係にあることを指摘している。

日本の建築メディアは、明治より続く建築学会の『建築雑誌』があり、これは学会の方針の変更に沿う形でその姿を変えながらも、商業ベースに乗らずに会員に配布するという形を利用して、独自の情報伝達経路として機能してきた。同様に大正からの歴史のある商業誌『新建築』は、商業建築誌としてクオリティの高い視覚情報と正確なデータを伴った記録としての地位を、日本の建築界において長く保っている。『日経アーキテクチャ』は読者ニーズを第一とし、建築に関する総合的な情報誌を目指した比較的新しいメディアである。これらのそれぞれ由来も現在の立ち位置も異なる3誌において、その読者層からそこで掲載されている中国関連記事がどのように見えるかを把握することで、日本建築界の中国認識を検証しようとするのが本論の骨子である。

13) 市浦健ら「建築ジャーナリズムの動きをたどる—関係誌20年の歩み」『建築雑誌』日本建築学会、1956年4月号、p8

14) 蜂谷真佐夫「建築ジャーナリズムについて」『建築雑誌』日本建築学会、1977年11月号、p16

15) 馬場璋造「建築専門誌はジャーナリズムではない」『建築雑誌』日本建築学会、1977年11月号、p17-18

0.3. メタ認識対象として中国を扱った先行研究

対象のメタ認識

本論は日本建築界の中国認識をめぐる論考である。これは「中国のこういうところを知っている」というような一般的な中国論とは一線を画すものであり、「中国を知っていることを知っている」という一種のメタ認識に関する論考である。すなわち論考の主要な対象は、認識先の中国以上に、認識主体である日本の建築界ということになる。

認知心理学では、人間の認知機能とはものを知ることに関するあらゆる機能をさし、これは「知情意」(知性、感情、意志)という人間の持つ三つの心的要素の内の知にあたる知性のことをいう。知性とは広義に知的な働きの総称をいい、例えば、外界の状況を知ること(知覚)や経験したことを覚えておくこと(記憶)、問題を理解したり解決したりすること(思考)などが認知の主なものである。こうした自己認知活動を現在進行形の中で客体視し、それらの活動を評価した上で制御することをメタ認知という¹⁶⁾。認知心理学ではさらにこうした知見を教育学や情報処理学などに応用して人の学習プロセス把握や情報処理モデルの確立を目指すわけだが、本論では、日本の建築界の中国に関する認識がいかなるものであるのか、ばらばらな状態にある多数の書かれた文字情報＝雑誌記事をたよりにその構造を理解しようとする点で、日本の建築界の中国情報に対する情報処理モデルの検証に相当するとも言えよう。そこでは、認識対象である中国についての日本の建築界の理解が正確であったかどうかはさして主要な問題ではなく、問題なのはむしろ、認識主体である日本の建築界がいかに関中国を認識したか、というその部分である。ここではだから、認識対象と認識内容の一致不一致の判定よりも、認識自体がどういう形をとっていたのかを明らかにすることが重視され、中国認識を別に打ち立てることよりもその認識群をメタレベルから観察してそれらの相関関係の構造を明らかにすることに主眼が置かれる。以上のことから本研究は、広義の心理学的研究、メディアによる情報の送り手と受け手の間の相互関係を考察する研究であり、建築に引き寄せて言うなら、中国建築の特定の時代や形式を対象にした中国建築研究というよりは、中国を扱う日本建築界の意識についての歴史的検証、とでも呼ぶべきものになるであろう。いわゆる中国研究が中国という情報の送り手を観察しそれを正確に把握しようとするものであるのに対し、本論文は送り手からの状況をどう把握しているかという受け手の側の状況を検証するものであり、そのために日本の建築メディアの上で中国がいかに関報道されているかを見てゆくことになる。

以下では日本における中国認識に関する先行研究を概観する。ここではこうしたメタ認識的な視線を備えている研究かどうかを選定基準にし、関連領域において明らかになっていることとそうでないことに目配りしつつ、本研究の立ち位置を明確化する。

日本の中国認識に関する先行研究—中国に関するメタ認識 1

「中国」という語の起源は、殷の卜辞にみえる「中商」(商は殷をさす)などの語にさかのぼるといわれている¹⁷⁾。皇帝の支配する世界の中央を意味するこの言葉は、現在は中華人民共和国を指すものであるが、同時に一般的にはそれ以前の中国の歴代王朝も含むものである。本論文における「中国認識」という語における「中国」の範囲もそれにならうものとする。なお香港は返還の前後に関わらず認識対象に含めるが台湾は含めない。戦前から戦中にかけて日本が実質支配した中国大陸の各地域についてはそれぞれ異なる背景があり、日露戦争(1904—05年)で獲得した関東州(遼東半島南部)の租借地と南満洲鉄道沿線の鉄道付属地、19世紀末から杭州蘇州天津などで開設した租界、満洲事変(1931年)以降の日本軍占領地などがそれであるが、これらは中国の一部として扱いこの本論文の中国認識先の対象に含めている。なお満洲国は当時の日本の雑誌記事では独立国として描かれているので、定量分析におけるサン

16) ブラウン、A.L. 『メタ認知—認知についての知識—』 湯川良三・石田裕久訳、1984年、p1-p9

17) 岸本美緒 「中国とは何か」『世界万国史 3 中国史』 尾形勇・岸本美緒編 山川出版社、1998年、p3

プルの上では中国でも日本でもない第三国として抽出している。ただし文献の解釈による定性分析においては、戦後の資料などで満洲という語を使いながら事実上中国東北部についての記述である場合は、中国の一部として扱っている。

中国認識とは、その文字の通り、中国をどう見るかということであり、日本社会では古代からこの認識と長くつきあってきたと言えるだろう。平凡社『日本史大事典』の「中国」の項「日本と中国」の欄で島田虔次は、日本と中国が地理的歴史的に密接に関係しながらも海を隔てていたので独自性を保ってきた事実を指摘し、「要するに中国は日本にとって、愛憎二面的な対象である。少なくとも、明治以後はそうである。しかしいかに思いあがった傲慢さの底にも、欧米へのとは異質の身近さの感情は消失しなかった」と言う。日中関係を示す最古の文書は前漢(紀元前 206—紀元後 8 年)の正史である『漢書』卷二十八の下「地理志」に見られる「楽浪海中に倭人有り、分れて百余国となる。歳時をもって来りて献見すという」の記載までさかのぼることができ、日本は遣隋使の時代から中国と関係を築いてきたし、江戸時代までは漢学が海外の知見を得るための大きな窓口であったことを考えると、中国観もさまざまな形で存在してきたと言える。

本研究はこうした日本の中国認識の長い歴史の中で、明治以降の建築界のそれを、建築メディアにおける書かれた記事における記述を分析対象として展開される。これら中国関連記事の書き手は様々であるが、彼らは執筆時には中国にまつわる当時の世論に影響を受けていたはずであり、そしてその世論は中国研究を専門とする研究者や、現地取材で情報をとってくる報道記者などの一次情報が新聞などで報道されることで形成されていたと言える。建築界の中にはあるいは自ら中国に渡航し、そうした一次情報を流すような中国通もいた。また日本建築界の中国観を支えるのは必ずしも日本人だけとは限らない。本論では日本の建築メディアに掲載された中国に関連する記事を分析対象としており、中には中国人や第三国の執筆者によるものもある。それらは日本の建築メディアに原稿が掲載されたということで、日本の価値体系に合致した観察と思考体型を広く日本の読者と共有しているという程度の理解のもとに、これらを「日本」建築界の中国認識として扱っている。

日本建築界の中国認識の特質を検討するにあたって、まずは建築に限らず日本の中国研究者たちがいかに中国を研究対象としていたのか、日本における中国学のあらましをある程度おさえておく必要がある。ここで取り上げるものは、単なる中国研究ではなく、研究対象である中国を見る主体である日本の側についても言及しているもの、メタ認識的立場について言及しているものを主たる対象とする。いわゆる「中国論」よりも、「中国研究の方法論」こそが、今ここで我々が見ておくべき既往の研究であり、また「中国論」の中でも、その研究の周辺状況や研究に至るまでの歴史について言及している部分は、メタ認識的な部分であると見なし得る。以下に本論にとって先行する研究とみなしうるものを、本論文との距離について触れながら挙げてゆく。なおここでは厳密な学術論文だけでなく、書籍やネットでの言説や、本論と研究対象が異なっても研究方法が類似しているもの、情報が系統的に整理されており参照先として役立つものなど、ある程度広範に目配りしておく。

日本の中国研究の方法論、中国学研究史や中国研究のあらましを全体的に整理しているものとしては以下のようなものがある。

- 新島淳良・野村浩一編『現代中国入門—何を読むべきか—』勁草書房、1965 年

日本で出された膨大な中国関連文献のうち、近代以降の、純学術書を除いた範囲でのその選別と利用のために編まれた書籍である。いくつかの学術領域ごとに整理され、建築に関しても「教育・中国語」の章でいくつかの建築系雑誌の記事が列記されているが、古い資料であることもあり当該部分に関しては参照先が少ない。

- 山根幸夫『中国史研究入門 上(増補改訂版)』山川出版社、1983 年

中国史研究における過去の膨大な成果文献をどのように見るべきか、時代ごとにその傾向と手法をコンパクトにまとめ

たものであり、さまざまな学術領域にも目配りがしてあって便利である。

- フォーゲル、ジョシュア『内藤湖南 ポリティックスとシノロジー』井上裕正訳 平凡社、1989 年

内藤湖南に関する論考であり、その前段として江戸時代の漢学から明治期のシノロジーの成立期を総合的かつ多角的に論じている。対象時期は限定的だが近代の日本の中国観の成立経緯を知る上で有用である。

- 伊藤一彦「日本の中国研究」『現代中国研究案内』野村浩一・山内一男・宇野重昭・小島晋治・竹内実・岡部達味編 岩波書店、1990 年

- 並木頼寿「日本における中国近代史研究の動向」『近代中国研究案内』小島晋治・並木頼寿編 岩波書店、1993 年

どちらも戦後の日本の中国研究の歴史的経緯を概略的に追っており、前者は中華人民共和国成立後の中国を主な対象に、後者は戦前の中国史の研究から戦後の日本の中国研究動向を追っている。中国研究者以外にも、他の学術領域の研究者、ジャーナリスト、経済人などの言説もとりこみ、「研究」という言葉をかなり幅広く(伊藤)とらえていて、同時代の中国を見る戦後日本の概略的理解の助けになる。

- 山田利明『中国学の歩み—二十世紀のシノロジー』大修館書店、1999 年

日本の中国学の成立から、主に 20 世紀前半までのその流れを追っている教科書的な概論である。1900 年前後の日本の中国学をいくつかの学術領域ごとに紹介し、さらに欧米の中国学についても言及があるなど、日本から中国を見る視線の全体的な位置づけに有用である。ここでは日本の中国学のうち、その科学技術史について、特に京都大学を拠点とした東洋天文学についての言及はあるが、建築分野に関する記述はない。

- 『20 世紀の中国研究 その遺産をどう生かすか』小島晋治・大里浩秋・並木頼寿編 研文出版、2001 年

戦前戦後を通して中国や中国研究に長くかかわってきた人物の話を書くという勉強会の成果を書籍化したものである。話題は 20 世紀前半に集中のきらいがあるが、形式の異なる書かれた記録の集積から研究対象にアプローチしようとしている点で本研究が参考にできる部分も多い。

- 久保亨・村田雄二郎・飯島渉「日本の 20 世紀中国史研究」『シリーズ 20 世紀中国史 4 現代中国と歴史学』飯島渉ら編 東京大学出版会、2009 年

日本、大陸中国、台湾、韓国、アメリカでの 20 世紀の中国史研究がいかなる歴史的経緯を持っているのかを紹介する叢書の中の、日本の状況を提示した論考である。タイトルで「20 世紀中国史」をいいつつも実際の論述対象は中華民国期(1912-49 年)のみに限定されいささか俯瞰性に欠ける。ただし革命中心史観以降の日本の新しい研究動向に限って論を展開しているところには方法論としての新しさを感じる。

以上は主に概観的な中国研究の方法論についてのものだが、以下ではより具体的に、タイトルに「中国観」や「中国認識」などの語を含んだ先行資料を取り上げる。建築という分野に限定せず、一定期間における、日本ないしは日本人の中国認識を検討したものには以下のようなものがある。

- 竹内好「日本人の中国観」『竹内好評論集第三巻 日本とアジア』筑摩書房、1966 年

戦争直後の 1949 年に書かれ、日本の中国研究者の対中認識が戦前戦後で変わっていないことを丸山真男やデューイを例に挙げながら検討しているものである。終戦を挟む短い期間に着目した論考であるが、一次資料に乏しく主観的な評論の域を出ない。

- 安藤彦太郎『日本人の中国観』勁草書房、1971 年

近代以降の日本の近代化と中国観の関連、中国革命観、中国研究の問題点などを検討したものだが、複数の論考の集積で必ずしも系統的な記述になっていない。

●野村浩一『近代日本の中国認識—アジアへの航跡—』研文出版、1981年

●溝口雄三『方法としての中国』東京大学出版会、1989年

前者は、近代における日本と中国のあり方をトータルに問う論考を含み、近代初期に時期を限定しつつ複数の運動家を通して問題にアプローチしている部分は、先行研究として参考になる。「中国を認識することは、日本を認識すること」という記述は、後者の、日本の漢学が中国への関心からではなく「日本内化された中国」への興味であるという記述とあわせ、本論の立脚点と近い。

●竹内実『日本人にとっての中国像 同時代ライブラリー120』岩波書店、1992年

日本の昭和時代の文学作品を通して、そこに描かれた中国に関する記述から、日本人の中国像とその変遷を考察している。著者は「一般には「中国観」というが、しかし「観」というといかにも体系的である。わたしはむしろ、体系にならない断片的なもの、ほとんど無意識ともいえる領域に関心があったので「中国像」とした」と言う。個別の文学的なテキストを解釈しながら多角的に検証している点は、本論のレビュー形式の内容分析において参考になる。

●子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか—近代日本のオリエンタリズム—』藤原書店、2003年

日本思想史研究者である筆者が、「日中関係の歴史でも、政治史でもなく中国問題へアプローチしたものであり、「近代日本にとって中国が政治的、歴史的、そして認識論的にどのように言説化されてきたか、あるいはそれらの言説上にどのように主題化されてきたかを見ること」を課題としている。日本の側からの中国認識を考察するという点では本論での姿勢に近いものである。「近代日本人による中国認識・中国体験の自己検証」をするにあたり、中国を日本にとっての「大いなる他者」と位置付けて議論を始めている。

●加々美光行『鏡の中の日本と中国 中国学とコ・ビヘイビオリズムの視座』日本評論社、2007年

戦後の日本における地域研究とその中の中国学が未だにオリエンタリズムの中にあると指摘した上で、国別研究としての中国学を再度確立しなおすための方法論「コ・ビヘイビオリズム」を提唱している。両者が鏡像関係にある、主体である日本と客体である中国の間の認識の歪みを修正しようとするその姿勢自体は理解できるが、記述が体系的でなく、参照先として見るのには困難を伴う。

●馬場公彦『戦後日本人の中国像 日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』新曜社 2010年

1945年から72年の、日本の敗戦から中国と国交を結ぶまでの間の総合雑誌24誌を分析対象に、日本における中国論の布置を構造的に摘出している。中国関連記事2554本の寄稿者の属性を定量分析、その論題と論調のバリエーションを言説分析した上で、多数のテキストから中国の語られ方を取り出そうとする手法は、建築界の言説において本論文が行おうとすることの一部とほぼ平行している。ただし当該書では中国認識の「認識経路」として、敗戦から日中復交までの論壇総合雑誌記事を分析の対象としているのに対し、本論文は明治から平成までの建築界の雑誌記事なので、こちらの方が期間が長い一方でその対象テーマは限定的である。またメディア情報の内容から中国認識を把握するという方針は同じであるが、当該論文はテキストの解釈分析に重心を置いている一方、本論文はテキスト群をKJ法で視覚的に分類整理した上で記事のメディア上の布置を数量的に把握している部分で方法論的には大きく異なる。

より時事的に中国を見ている日本の中国認識に関する論考としては

●関志雄「日本における多様な中国観—対中政策にどう反映されるか—」『実事求是』2002年11月15日掲載
<http://www.rieti.go.jp/users/china-tr/jp/ssqs/021115ssqs.htm> 2009年5月31日閲覧

●関志雄「揺れる日本の中国観—真の日中友好は可能か—」『実事求是』2002年12月6日掲載
<http://www.rieti.go.jp/users/china-tr/jp/ssqs/021206ssqs.htm> 2009年5月31日閲覧

これらはネット上の短い論考だが、日本政府の中国観が省庁ごとにばらばらで、「中国の未来を楽観的に捉えるか悲観的に捉えるか、また、中国を脅威と見て対立姿勢をとるか、それともパートナーとみて協力姿勢をとるか、という二つの基準軸により、四つに分類」されてしまい、整合性のとれた「国策」が見えてこないと指摘している部分は、中国観の構造をモデル化しており、わかりやすく参考になる。

●工藤泰志『中国人の日本観 日本人の中国観』工藤泰志編 認定特定非営利活動法人言論 NPO、2008 年

これは日中関係が政府レベルで大きく揺れ動く中で国民を対象に行った 3 回の世論調査(2005-2007 年)の結果を並べたものである。ここ数年の相手国への印象がよくわかる資料である。

中国人による日本人の中国観に関する研究には、以下を参照した。

●王曉秋『アヘン戦争から辛亥革命—日本人の中国観と中国人の日本観』小島晋治監訳 東方書店、1991 年

●忻劍飛『世界的中国観—近二千年来世界対中国的認識史綱』学林出版社、1991 年

●馮天瑜『“千歳丸”上海行—日本人 1862 年の中国観察』商務印書館、2001 年

●王屏「日本人の“中国観”の歴史的変遷について」『広島大学マネジメント研究』西本志乃・盧濤訳 広島大学マネジメント学会、2004 年

●劉家鑫『日本近代知識分子的中国観』南開大学出版社、2007 年

●王敏『日本と中国—相互誤解の構造』中央公論新社、2008 年

●史桂芳『近代日本人の中国観と中日関係』社会科学文献出版社、2009 年

また中国の日本観に関する著作としては、以下のようなものが挙げられる。

●小島晋治・伊東昭雄・光岡玄・板垣望・杉山文彦・黄成武『中国人の日本人観 100 年史』自由国民社、1974 年

●ホワイティング、アレン・S『中国人の日本観』岡部達味訳 岩波書店、2000 年

●李玉「中国の日本研究—回顧と展望—」『国際日本学とは何か? 中国人の日本観—相互理解のための思索と実践—』王敏編 三和書籍、2009 年

また、日本以外の国における中国観に関する著作としては、以下のようなものが挙げられる。

●フェアバンク、J・K『中国(上)・(下)』市古宙三訳 東京大学出版会、1972 年

●コーエン、ポール・A『知の帝国主義 オリエンタリズムと中国像』佐藤慎一訳 平凡社、1988 年

●国分良成「アメリカの中国研究」『現代中国研究案内』野村浩一・山内一男・宇野重昭・小島晋治・竹内実・岡部達味編 岩波書店、1990 年

●佐藤慎一「アメリカにおける中国近代史研究の動向」『近代中国研究案内』小島晋治・並木頼寿編 岩波書店、1993 年

●フォーゲル、ジョシュア「日中関係とアメリカ」『20 世紀中国と日本 上巻 世界のなかの日中関係』池田誠・倉橋正直・副島昭一・西村成雄編 法律文化社、1996 年

●グローブ、リンダ「アメリカの中国近現代史研究」『シリーズ 20 世紀中国史 4 現代中国と歴史学』飯島渉ら編 東京大学出版会、2009 年

●白永瑞「韓国の中国認識と中国研究」『シリーズ 20 世紀中国史 4 現代中国と歴史学』飯島渉ら編 東京大学出版会、2009 年

●ラック、ドナルド・F「中国像の変容」『東方の知』高山宏・中村元・三浦伸夫訳 平凡社、1987 年

また、中国一般ではなく、ある学術領域に特化した日本からの中国観を研究した著作については、以下のようなものがある。美術史の領域では、中国文化からの影響と日本文化の独自性追求の国風化、さらに西洋からの影響などの要素の関係で、日本の中国認識に特化した論考がいくつか見られる。本論の先行研究として参考になるものを挙げると、

●岡田健「龍門石窟への足跡—岡倉天心と大村西崖」『語る現在、語られる過去 日本の美術史学 100 年』東京国立文化財研究所編 平凡社、1990 年

明治大正の美術という概念の成立期に、中国仏教彫刻へのアプローチを試みた岡倉天心と大村西崖の姿勢と業績を検討するものだが、「日本における中国仏教美術研究に、中国美術としての体系化よりも日本美術の「源流さがし」がある」という指摘は、明治期の日本の建築界における中国に対する言説とほぼ平行にとらえることができる。

●井手誠之輔[2005]「影響伝播論から異文化受容論へ—鎌倉仏画における中国の需要」『講座日本美術史 第 2 巻 形態の伝承』板倉聖哲編 東京大学出版会、2005 年

●陸偉榮『中国の近代美術と日本—20 世紀日中関係の一断面—』大学教育出版、2007 年

前者は日中間の文化上の影響伝播論を宋仏画と鎌倉仏画の関係性について、渡し手(中国)と受け手(日本)との間で可逆性があるかどうか(受け手の情報が渡し手の情報を復元できるかどうか)という問いを立てて論をすすめるもの、後者は近代の日中の美術における影響関係をめぐって、近代中国の美術史を再構成するということである。日本の建築界の中国観を考える上でも、本来はこのような日中間の双方向性を想定するのは有効だろうと思われるが、本論では日本の側の中国観にとくに注目しており、これは今後の課題である。

そのほかに、東洋哲学・中国哲学の領域では、以下で日本における中国哲学研究の経緯がメタ認識的にまとめられている。

●坂出祥伸『東西シノロジー事情』東方書店、1994 年

人類学の領域では、日本にとって中国というフィールドがどういうものが以下で史的にまとめられている。中国をフィールドとする日本の中国社会研究は 20 世紀初めから始まり、1930 年代にはそれなりの質量を備え、日中戦争期には各地で現地調査が行われ、その成果は戦後にも用いられている。50 年代半ばから 30 年間は中国本土における外国人のフィールドワークの道は閉ざされ、そのかわりに香港台湾の調査が進み、80 年代以降は再び活発に中国本土での調査が行われるようになったという。

●瀬川昌久『中国社会の人類学—親族・家族からの展望』世界思想社、2004 年

技術史の領域では、イギリスの生化学者で中国科学史研究者のジョセフ・ニーダムが、研究にあたって、漢字や古文書に書かれた図版を参考にメタ認識的な著作をのこしている。

●Needham, Joseph [1970] “Clerks and Craftsmen in China and the West” Cambridge University Press (「ニーダム・コレクション」 ジョセフ・ニーダム著; 牛山輝代編訳 2009 年 筑摩書房)

以上、日本を中心とした、先行する様々な学問領域における中国研究の方法論、中国認識に関する先行研究を中心に見てきた。もちろん先達の既往研究はこれだけに限らない。ここで重要なのは、それらを総て網羅して整理しなおすことではなく、本論と先行研究の距離を広いパースペクティブの中で相対的に測ることである、上述の資料に目を通し、重要と思われるものについてここでレビューを加えて本研究との比較を行うことで、その目的はおおむね達成できたと思われる。

日本の建築界の中国に関する先行研究—中国に関するメタ認識 2

次に、日本の建築界における中国研究で、本論の先行研究になりうるものを挙げておく。まずは日本建築の通史において中国との関係がどう記述されているか概観する。

●伊東忠太「予の日本建築史観」『日本建築の研究・下 伊東忠太著作集 第2巻』原書房、1982年（初出は『工学と社会』1926年3月号）

伊東忠太は『予の日本建築史観』において、日本建築の歴史を、南洋的、大陸的、世界的の三段階に分け、仏教渡来以降明治維新までは中国の歴代王朝を先生として学んだと言う。その中では隋唐の影響を受けた奈良平安時代と、宋の影響を受けた鎌倉時代とではその質が異なり、「例へば奈良時代の様子などを見ますと、これは唐の真似がありありと見えておりまして、余程支那の直写に近い。併しながら其の次の時代即ち宋の文物を吸収する時代になりますと、同化力がもつと強くなりまして、其の露骨なる直写と云ふものが前よりは少なくなつた」としている。伊東は日本の建築の歴史を一人の青年の履歴に例え、日本固有の趣味を伝えて外の空気にもあたらないう古代から、「小学校に入つて本当に秩序的に学問をすると云ふことになった」仏教渡来以降、「中学を出て大学に這入つた」明治維新までは中国、それ以降は欧米に常に学んできたとしている。

●関野貞「日本建築に及ぼせる大陸建築の影響」『日本の建築と芸術 上』太田博太郎編 岩波書店、1999年（初出は『岩波講座日本歴史 9』1934年）

関野貞は「日本建築に及ぼせる大陸建築の影響」において、日本建築への大陸建築からの影響を日本建築史において整理し、その影響が歴史上4回あった、としている。1. 飛鳥時代における南朝＝梁式の輸入、2. 奈良時代における唐式の輸入、3. 鎌倉時代における宋式の輸入、4. 江戸時代における明式の輸入、がそれらである。この4回は基本的に藤井恵介が中国から日本への建築上の影響を通時的に検討する中でも踏襲されている¹⁸⁾。関野は建築界における中国との関係を「我が国の建築はある時代には大陸の影響を受くこと多く、ある時代にはこれを固有化する。この形勢を古来たびたび繰返したから、我が建築はある時代には大陸様式の模倣追随を免かれ、停滞退化の弊を醸さず、常に比較的清新にして変化に豊かな特相を発揮することができたのである。」とし、日本建築の清新さを支える加速装置として中国を位置付けている。田中淡はこうした関野の中国建築史学研究を、「伊東とは異なつて通史史観を目指す方向性も顕著には見られず、むしろ個々の調査に重点が置かれ、それらの累積を経てはじめて全体像の焦点が絞られていった傾向がつよい」といい¹⁹⁾、後進の村田治郎に影響を与え、中国营造学者をはじめとする中国人研究者にも研究実績を意識させた形跡を指摘している。

●太田博太郎『日本建築史序説 増補第二版』彰国社、1989年

太田博太郎は『日本建築史序説』において、日本建築の概説的通史の中で、外来文化の大きな影響を受けたものとして、飛鳥奈良時代の六朝・唐の建築の影響、鎌倉時代における宋様式の伝来、明治維新後の西欧文明の輸入の3つを挙げている。3つのうち2つが中国からの影響ということになる。この2つについてそれらの時代の建築物が、日本では地方によって異なることがなく非常に画一的であることをとりあげて、「飛鳥奈良時代の唐の建築様式の輸入にしても、鎌倉時代における宋様式の伝来にしても、当時のシナ建築が一色の単純なものであったとは考えられない。それは恐らく変化の多い複雑なものであったに違いない。ところが日本に輸入された様式は、遺構よりみて、そう変化のあるものではなく、ほとんど一色であったといつてよい。そこに外国文化摂取にあたり、かなりの選択が行われたものとみななければならないと同時に、選択し輸入したものについては、熱心な模倣が行われていたことを考えなければなるまい。このことは伝統の維持という面ばかりでなく、日本の芸術における型の尊重としても認められる。」と述べている。より集約

18) 藤井恵介「日本人は中国建築システムをどう受け止めたか」『中国歴史建築案内』TOTO出版、2008年、p374-385

19) 田中淡「関野貞の中国建築史学」『東京大学コレクション 20 関野貞アジア踏査』藤井恵介・早乙女雅博・角田真弓・西秋良宏編、東京大学総合研究博物館、2005年、p361-370

的で洗練された日本を浮かび上がらせるために、様式の輸入元である中国を、「変化の多い複雑な」場所として位置付けている。

以上、これら日本建築史における中国の位置づけは、日本建築界の中国認識の理解に対して一定の便宜をもたらすものではある。日本建築史のそれぞれの時代において、日本が中国とどういう関係にありどのような影響を及ぼしたかという事実が把握でき、その結果当時の日本社会が中国をどう見ていたかということもある程度類推できるものである。中国認識の主体であり中国情報の受け手である日本の側の視点を知るという意味で、これらは重要な本研究の前提としての知見となりうる。ただし一方で、これらの情報は、ある時代の日本から見た中国への印象を単発的に類推することはできても、日本という主体がどのように中国を見続けその認識がいかに変容したのか、その認識はどのような内容から構成されているのか、というような、日本の中国認識に特化した全体像の把握まではカバーしきれていない、というのもまた事実である。ここで見てきたような日本建築史における中国の描かれ方では、各時代の建築における日中関係がそれぞれ記述されるばかりで中国認識を通時的な流れの中で把握することはできないし、各時代における中国認識は一枚岩的なものではなく実際はさまざまに異なる印象の集合体形成されているはずなのに、そうした共時的な検討がなされていないのも不十分だと思われる。情報の送り手である中国からどのような中国情報が日本まで選ばれ、それがどのように日本の建築界で共有されたのか、という情報の受け手側である日本の、さらなる内部の解剖がされない限り、日本の中国認識というテーマを扱うには不十分な印象が残る。

ここからはより中国に特化した建築学における先行研究のうち、本論にとって先行研究となりうるメタ認識的視点をもつものを中心に挙げてゆく。すなわち、日本の建築界にとって中国がどのような認識対象になっているのか自覚的な中国研究を中心に概観するものとする。

- 伊東忠太「法隆寺建築論」『日本建築の研究・上 伊東忠太著作集 第1巻』原書房、1982年（初出は『建築雑誌』1893年11月号）
- 伊東忠太「支那建築史」『東洋建築の研究・上 伊東忠太著作集 第3巻』原書房、1982年（初出は『東洋史講座』昭和4年11月号）

建築史家で建築家でもある伊東忠太は何度かアジア地域を含めた世界旅行を経験し、中国建築についての総合的な研究書を残している。前者では法隆寺を日本最古の木造建築と位置付け、その正統性を古さに求め、古さを測定するために中国との関係において法隆寺の歴史を描写している。日本の歴史を相対化するのに中国をものさしとしてとらえている、と言えるだろう。後者で伊東は中国建築を支那の芸術の一つとしてとらえ、その様式的な特徴と時代変遷の記述に主力を置いている。「外人の観たる支那建築」の章では、先行する西洋の中国研究、「英国のジェームス・ファergusson James Fergusson」の『印度及東洋建築史 History of Indian and Eastern Architecture』と「英国建築家のフレッチャー Banister Fletcher」の『世界建築史 A History of Architecture』と「独逸のオスカル・ミュンステルベルヒ Oskar Münsterberg」の『支那芸術史 Chinäsische Kunstgeschichte』を挙げ、どれも内容に問題があるとしつつも「欧米人は古来余り多く支那を知らない代りに、思ひ切つて斬新な、否寧ろ突飛な独創的考察を下し得る境遇に在る」といい、それに対して日本の先行研究は、「権威ある著書は、大谷光瑞氏一行の西域考古図譜ぐらいなもの」であり、日本の支那内地の探検報告は「惜しい哉それ等が個々孤立であつて総合的連絡がない」ことを嘆いている。中国建築のことを書くだけでなく、その中国建築をだれがどのように見ているかを書いているこのような記述は、日本建築界において中国をメタ認識の対象としているものの萌芽といえる。

- 村田治郎「中国建築史より見たる法隆寺建築様式の年代」『村田治郎著作集一 法隆寺建築様式論攷』中央公論美術出版、1986年

●村田治郎『村田治郎著作集三 中国建築史叢考(仏寺・仏塔篇)』中央公論美術出版、1988年

戦前に南満洲工業専門学校教授を務め、1937年から58年まで京都大学教授を務めた建築史家の村田治郎は、東洋建築史のうち、なかでも中国建築史に関して多くの論考を残している。前者の、終戦直後の1946年に発表したこの論考で村田は、日本の中国建築研究史とでも言えるようなメタ認識論を残している。「法隆寺系建築様式と中国建築様式の関連についての、いままでのわが学界の動向は右の三先生[伊東忠太、浜田耕作²⁰⁾、関野貞の三人:筆者注]の研究によって代表されていると言ってよい」とそれまでの経緯を振り返った上で、法隆寺の建設年代を特定するために、中国を一種のものさしとして見て、中国建築に見られる類似した部分からそれが飛鳥時代後期の建築様式であるとし、法隆寺再建設に有利な論拠を提出している。後者は中国の仏教建築についてのもので、本書の編集を担当した田中淡いわく「仏教建築に関する研究は、都市史、イスラーム教寺院あるいは壇廟建築より以上に、博士がもっとも多くの精力を注いだ研究対象」であり、戦後は中国に渡航することの出来なかった村田は、戦前までの実地調査をもとに多くの著作を残している。

●福山敏男『福山敏男著作集六 中国建築と金石文の研究』中央公論美術出版、1983年

京都大学の建築史家福山敏男は、中国の石窟、石窟寺院、古碑、金石文などについて、適宜日本古代のそれらと比較しながら論考している。もともとは日本の神社建築が専門だったが、日本の文化に影響を与えた中国についても調べるようになったと本人は振り返っており、中国各地の石窟や金石文についての論考を残した。

●飯田須賀斯『中国建築の日本建築に及ぼせる影響—特に細部について—』相模書房、1953年

東北大学の建築史家飯田須賀斯は、伊東忠太の弟子的な立場にあった建築史家で、その支那調査にも同行している。日本建築への中国建築の影響を考える上で、両者が一見違うようでいて「然し静かに考へて見ると、日本住宅の中には随所に中国建築に由来する手法が見出だせる」と言い、「我国人は中国建築の影響を受容するに完全移入を行つた事もあるが、自国文化の高まるにつれて取捨選択を行つて来た。而も其の間一貫して影響面に登場したのは細部である」として中国建築の細部の研究を残している。

●竹島卓一『中国の建築』中央公論美術出版、1970年

名古屋工業大学の建築史家竹島卓一は、法隆寺の保存工事所長をつとめ、日本における中国建築史の第一人者で北宋時代の建築書『营造法式』の研究でも知られる。本書では「中国の建築を説明するのに、日本の建築を土台にしてその術語を駆使し、日本の建築との相違に重点をおいて解説」しており、日中の建築における関係史が簡潔にまとめられている。竹島の中国建築観は、「中国の建築は、古来一貫性が強く、建築的な細部の問題をのぞくと、様式的にさかのぼれる範囲では、時代による推移も、建築の種類による変化もきわめて少なく、ほとんど皆、一様に見えてしまう…細部に着目すれば、その変化はきわめて豊富であり…細部の問題をのぞけば、きわめて一貫性をもっている」というものであり、中国建築に関して、細部を通してメタ認識をもつことが可能だという。

●アンドリュー・ボイド『中国の建築と都市』田中淡訳 鹿島出版会、1979年

インド生まれのイギリスの建築家のアンドリュー・ボイドは、1962年にアメリカで出版されたこの本において、記者田中淡の言葉を借りれば、建築史家としてではなく「プランナーの立場から、中国建築の伝統的に普遍的な計画・構造の原則を探求し」ている。通史としては先秦時代から清代まで、それ以外に構造、平面計画の原則や住宅や庭園、宗教建築、土木工事などについて章を割いて論じている。実際に訪中経験がなく、一次資料にもあたれていないという限界はあるとは言え、中国建築を多面的に把握しようとするメタ認識への志向はうかがえる。

●田中淡『中国建築史の研究』弘文堂、1989年

京都大学の建築史家田中淡は、本書の「後記」で日本の中国建築史研究をメタ的視点から概観している。すなわち

20) 濱田耕作(1881-1938)は京都大学学長を務めた考古学者。「日本近代考古学の父」と呼ばれ、アジア各地で遺跡発掘調査を行い骨董趣味を排除した新しい考古学的手法を確立した。中国建築については、昭和初期の南満洲(現在の遼寧省)漢代墳墓の発掘で知られる。

それは 1920 年代以降の外国人学者にはじまり、日本では関野貞、伊東忠太、伊藤清造などによる現地調査・撮影にもとづく大型の図冊、論文集、概説書が先駆的に出される形ではじまり、次いで村田治郎の中国建築史、竹島卓一の营造法式に関する論考が著された。戦後は村田、竹島のほか飯田須賀斯が中国建築の細部の研究など、それぞれ従前の成果を集成したほかは、福山敏男の中国石窟の研究など個別のものを例外に数えるのみで、渡航が閉ざされて 1970 年代後半まで「絶学」に等しい状況にあった。その後日中の国交正常化(1972 年)前後から双方の人の往来も回復し、日本の中国建築研究もさまざまなものが現れた、という。

●尾島俊雄『現代中国の建築事情』彰国社、1980 年

1979 年 9 月から 1980 年 3 月にかけて、中国科学院の연구원として杭州に滞在した早稲田大学の環境学者尾島俊雄は、浙江大学をベースに中国各地で日中建築界を比較する研究活動を展開した、そのときの記録が本書である。文化大革命後に渡中した建築専門家の中では最初期の 1 人に相当し、中国側にオーソライズされた身分でしかもまとめた期間滞在したので、当時の同時代の中国の内部状況をかなり詳細にレポートすることに成功している。社会状況、環境破壊、都市化、建設業、住宅市場、画一化された公共建築、建築教育などの項にわけて書かれた本だが、中でも園林緑化と文物保護については当時の中国の先進性をもち上げているのが先見的である。

●村松伸「あとがきに代えて」『全調査 東アジア近代の都市と建築』藤森照信・汪坦監修 筑摩書房、1996 年

東京大学の建築史家村松伸は、1981 年に中国政府留学生として北京の清華大学に学び、多くの中国に関する論考を残している。この本は 1985 年に東京大学生産技術研究所村松貞次郎の退官を記念して開かれた国際シンポジウム「東アジアの近代建築」をきっかけに始まった、中国、韓国、台湾、香港、マカオなどの東アジアの近代建築の悉皆調査を集大成したものである。現存する建築を対象に、東アジア諸国の大都市の建築に関する、名称、所在地、実測図や関連資料のリスト化された研究報告書であり、村松のこの「あとがきに代えて」には、調査の経緯と中国、ないしはアジア各国と日本の関係を見るメタ的な視点が記述されている。すなわち、この膨大な労力をかけた「全調査」は、20 世紀初頭に伊東忠太がアジアを踏破して前近代の建築物の存在を解明していったことと類似しているが、決定的に異なるのは、現地の人々と協働し、調査結果の現地への還元をめざした部分である、という村松の指摘がそれである。

●浅川滋男『住まいの民族建築学 江南漢族と華南少数民族の住居論』建築資料研究社、1994 年

長期的なフィールドワークにもとづく現在の学術的な「居住の民族建築学」によって中国江南地区と華南地区の土着的な居住のありかたを探っている。著者いわく本書では文献資料に依拠した復元的、通時的研究が主流の建築史学に対して、実体験的、共時的研究が主流の民族建築学が追求されているという。また浅川は最後にこの民族建築研究の原点は「異文化理解」にあり、「異文化の理解とは、究極的には、自分以外の他者を理解することである」とまとめており、外部への認識を研究の中心に据えている。東京藝術大学の中国民家研究²¹⁾や東京工業大学の窑洞研究²²⁾など、1980 年代に盛んに行われた中国のヴァナキュラー建築研究は、浅川のこうした中国建築への人類学的アプローチに含まれるものであろう。

●西澤泰彦『海を渡った建築家—20 世紀前半の中国東北地方における建築活動』彰国社、1996 年

●西澤泰彦『日本植民地建築論』名古屋大学出版会、2008 年

20 世紀初頭の、中国東北地方、台湾、朝鮮半島において、日本人の建築活動によって建てられた建築を対象に、日本人のその地での建築活動と支配の関係を論じている。建築物という具体的な形を有するものとしての「モノ」に着目して、抽象論にとどまらず具体的に侵略・支配の問題を考えようとする姿勢は、建築についての論文としての可能性を開こうとするものであり、参考になる。

21) 以下を参照、茂木計一郎・片山和俊・稲次敏郎・東京芸術大学中国住居研究グループ『中国民居の空間を探る—群居類住“光・水・土”中国東南部の住空間』建築資料研究社、1991 年

22) 以下を参照、窑洞考察団『生きている地下住居:中国の黄土高原に暮らす四〇〇〇万人』彰国社、1988 年

- 徐蘇斌『日本对中国城市与建築的研究』中国水利水電出版社、1999年
- 徐蘇斌『中国の都市・建築と日本—「主体的受容」の近代史』東京大学出版会、2009年

天津大学の建築史家徐蘇斌は、前者において田中淡の『中国建築史の研究』にあるメタ的視点を戦後のより新しい中国研究にまで広げ、日本建築界の中国研究を整理している。彼女は20世紀の100年間における日本人の中国の都市・建築に関する研究を総括的に4段階に整理している。具体的には第一段階:20世紀初期の中国都市・建築に対する考察期(1901-20年代後期)、第二段階:研究組織の創立と植民地建築研究の振興期(20年代後期-1945年)、第三段階:中国建築研究の低潮期(1946-80年代初期、田中の言う「絶学」状態はこの段階に相当することになる)、第四段階:改革開放後の中国研究熱の出現期(80年代初期-現在)とし、第四段階については改革開放後の様々な日本の中国建築研究の姿をさらに紹介している。彼女はそれを、研究母体ないしは研究者の出身教育機関である大学ごとに分類し、東京大学(村松伸を中心とする中国近代建築研究と越沢彰を中心とする中国東北地区近代都市研究)、京都大学(田中淡の中国古代建築史研究、浅川滋男の中国民族建築学研究、愛宕元の中国古代城郭都市研究)、法政大学(陣内秀信を中心とする中国蘇州水郷研究と北京都市研究)、東京工業大学(審洞研究)、その他(東京電機大学・東京芸術大学・早稲田大学の民居研究、ほかに風水研究や個別のテーマなど)、とした。これらの日本人による中国都市・建築研究の特徴として徐は、1. アジア文化圏内での比較研究である、2. 中国についての研究の中で新領域を拓いている、3. 実証的な考察を重視している、4. グループによる研究が主要な位置を占めている、5. 中国の研究機関との協力体制を多くが採用している、という点を挙げている。

後者の研究では、2000年以降の中国の近代建築史研究が、「帝国主義的侵略を強調する姿勢から、外国の果した役割を客観的に考察する方向へと移行する傾向」があるなかで、近代中国における外国からの影響を「従属的受容」と「主体的受容」にわけている。その上で、すでに既往研究が多くある前者ではなく、後者について、中国の都市と建築の近代化の過程において、中国がいかに日本を受容したかという問題を取り扱っている。

これらの徐の研究は、近代化過程における日本と中国が、それぞれ相手方をどのように研究対象としてきたかを測ろうとするものであり、明治以降現代までの通史を見るという点では本論の対象と重なる部分も多い。ただし徐の前掲書は、日本においてどのような分野の中国研究がされたかという、中国情報の「内容」を詳細に検証しているのに対し、本論文は、中国情報をだれがどのように日本に伝達し、それがメディアの上でどのように並べられて共有が図られたかという「伝達手段と論題布置」に特化して見ている部分でその着目先を異にする。また徐の後掲書は、中国の建築界が日本をどう見ていたか、というものであり、それは日本の建築界が中国をどう見ていたかという彼女の前掲書と、また本論文とも、対称的な位置にあると言えるだろう。

また、本研究の予備的作業として、筆者の以下の3つの著作がある。

- 松原弘典「中国—そこに日本の建築世界はどう関われるか」『建築雑誌 2006年2月号』日本建築学会、2006年
- 松原弘典『中国でつくる 松原弘典の建築』TOTO出版、2007年
- 松原弘典「知らない環を見せてくれる「窓」としての中国」『建築雑誌 建築年報 2009』日本建築学会、2009年

1つ目のものは建築学会の機関誌における中国特集で、筆者は編集委員として特集のまとめを行った。2006年当時の日本と中国の同時代の関係を、さまざまな関係者にインタビューすることで浮かび上がらせようとしている。『建築雑誌』は過去に何度か中国やアジアに関する特集を行っているが、ここまで同時代の中国を扱ったのは従来までなかったという点で画期的であったと自負しているが、同時に編集が最新事情の紹介に偏り歴史的認識の不足している感は否めない。2つ目のものは筆者が中国で設計実務を重ねてきた結果を作品集兼論考集として出版したもので、作品の紹介のみならず、外国人が今この変革期の中国で建築の実践をする可能性について、設計の思想論から会社の経営

論まで広範に論じたものである。3 つ目のものはオリンピック後の中国の時事的な状況を概説したものであって、やはり同時代的なものにのみ論点が限定されており、歴史的視点がいささか不足している。

以上、日本の建築界における、中国に関する先行研究を見てきた。これから本論を展開してゆくにあたって、これらの先行研究との関係についてここで強調しておきたいことがある。それは、本論が建築メディア上に分散した雑多なテキストを対象に日本建築界の中国認識を検証してゆく上で、当時の中国認識と現代の認識の間に齟齬がある場合、現代のそれをそのままあてはめることはせずに、メディアで発表された発現時の文脈を最大限尊重して論を展開しているということである。ここで重視されるべきなのは、雑誌記事というばらばらな情報の集合から当時の時代精神やそのメディアにおける言説の傾向を摘出することであり、後から発行された研究所の引用はなるべく避け、当時の雑誌記事そのものに依拠するようにしている。

0.4. 日本建築界の中国認識の分析方法

分析の対象—『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の中国関連記事と中国観

本論は日本の建築界における中国認識の構造を、建築メディアにおける書かれたテキスト群の連関においてとらえようとするものである。明治以降に成立した日本建築界の言説空間において、日本建築学会の『建築雑誌』が歴史上一定の役割を果たし、その他の雑誌がそれを別の角度から補ってきたことはすでに見た。本論では、出来る限り包括的に日本の建築界をとらえるために、『建築雑誌』のほかに、読者層や編集主体が異なり、かつ建築界を広くカバーする読者層を擁する建築メディアとして、『新建築』と『日経アーキテクチャ』の商業建築誌 2 誌をさらに分析対象としてとりあげる。3 誌に関する情報を以下にまとめて示す(表 0.4.-1)²³⁾。

雑誌名称	建築雑誌	新建築	日経アーキテクチャ
創刊	1887年(明治20年)	1925年(大正14年)	1976年(昭和51年)
出版主体	社団法人日本建築学会	株式会社新建築社	株式会社日経BP社
分析対象期間	1887-2008年	1985-2008年	1985-2008年
特徴	日本の建築界をリードしてきた建築の総合雑誌として、また建築界の一大情報発信基地である日本建築学会の主力メディアとして、その内容にゆるぎない信頼を築いてきた。内容＝建築に関する諸問題に対して、論点、特集、連載、ニュース、研究成果資料などによって多角的にアプローチし、特定の専門分野や学術分野に偏ることなく編集。同時に情報ネットワーク欄は学会の情報ばかりでなく、建築界のさまざまな情報を盛り込み、建築に関する総合雑誌となっている(雑誌サイトより)	創刊以来、日本の現代建築をクオリティの高い写真、図面等により詳細に紹介し、多くの建築家に支持されてきた、日本を代表する建築雑誌。その継続により、独自の視点をつくり出し、建築思潮や建築デザイン界の新しい動きを発信。近年、建築家の活動は、都市、環境など幅が広がり、ものづくりを通し現代を切り開き、社会へ貢献しており、それらを吟味し、掲載することで、建築が生み出し得る可能性を報道(雑誌サイトより)	意匠・構造・施工などの専門領域だけではなく、建築界を取り巻く社会・経済動向から経営実務までの情報を届ける建築の総合情報誌で、写真や図表を豊富に使い、月2回の発行でタイムリーに最新動を伝える(雑誌サイトより)
主な読者層	読者の職種は建築設計(ゼネコン設計部を含む)、研究・教育(企業の研究所を含む)を筆頭に建築のあらゆる分野に及ぶ(雑誌サイトより)	多くの建築家に支持(雑誌サイトより)	一級建築士をはじめ建設会社や行政など、建築界に携わる方々(雑誌サイトより)
表紙			
発行数	3万4千部(学会パンフより)	公表せず	約3万9千人の購読者(雑誌サイトより)

表 0.4.-1: 分析対象の3つの建築メディア比較表

日本建築学会の月刊機関誌である『建築雑誌』は、明治の学会草創期の1887年から現在まで、ほぼ毎月今まで欠かさず発行されてきている専門情報誌であり、発行期間は他の建築メディアの追随を許さない。最初は会員間の情報共有を図るための簡便なものであったのが、今は建築学会会員に配布するための発行部数が毎月三万部を超える巨大な建築メディアになっている。それがそのまま読者層にもなる建築学会の会員属性も多様である。建築学会のパンフ

23) 表の作成にあたって、『建築雑誌』についてはパンフレット(『社団法人日本建築学会』(印刷された配布用パンフレット) 日本建築学会、2009年7月1日)以外に、『建築雑誌』とは(<http://jabs.aj.or.jp/about/>)を、『新建築』については「新建築. Net 出版物案内」(<http://www.shinkenchiku.net/shop/j/corporate/publishinfo.php>)を、『日経アーキテクチャ』については「日経 BP 書店」(<http://ec.nikkeibp.co.jp/item/magazine/NA.html>)を参照した

レットによれば、2009年3月の段階で会員数は35536名、会員の属性分布は、建築設計事務所18.5%、研究・教育機関17.4%、総合建設業17.4%、大学院生15.5%、その他10.6%が上位5業種で、その下に官公庁や材料・機器メーカー、コンサルタント、学部学生などが続いている。年齢別でも20代から60代までが広く均等に分布しており、名称は「学会」だが、実際は単なる学術団体＝アカデミズム以上の総合性をもちあわせた、アカデミズムとジャーナリズム、学術界と実業界とをまたぐ、建築に関する総合的な組織であり、『建築雑誌』もそうした読者に向けて発信されている建築メディアであると言える。

『新建築』は、株式会社新建築社が1925年から発行している、現在最も古くから続く日本の商業建築誌である。日本の同時代の建築をグラビア写真や図面で紹介し、主として建築設計者の支持を受けてきた月刊誌である。『日経アーキテクチュア』は株式会社日経BP社が1976年から発行している雑誌で、建築界の最新情報をジャーナリスティックに広範囲にわたって伝えようとする商業建築誌である。報道色の強い時事的な記事が多く、意匠のみならず構造、施工などの建築の専門領域から、さらには建築界を取り巻くその外側の社会・経済動向や経営実務までの情報を伝えてきた隔週刊の総合情報誌で、2011年4月の時点で年間予約購買をしている読者数を約3万9千人擁する。この2誌は『建築雑誌』と比べて規模も想定読者層も異なり、これらを補助的な比較対象にして中国関連記事を分析することは、結果的にその記事が書かれた時代をより広く理解することを可能にすると思われる。

また、『建築雑誌』の分析対象は創刊号の1887年から2008年までの全号であるが、他の2誌は1985年から2008年のものをその対象としている。これは他の2誌の創刊時期が『建築雑誌』と異なりそろえられないという理由もあるが、後述するように1985年以降というのは本論文第1章で筆者が分析の手続き上『建築雑誌』の記事を4つの時期にわけたIV期に相当する。この時期に前後して『建築雑誌』においては中国観の論調や論題に変化があり、それを中国の社会情勢との関係で見れば、鄧小平の指導体制のもと1978年から市場経済への移行が図られ80年代以降順次対外開放政策が実施された時期とほぼ重なる。『建築雑誌』に比べて刊行時期が限られる2つの商業誌については、このIV期1985年以降の記事のみを分析対象とし、本論第2章、第3章でこれを用いるものとしている。

各建築メディアでは、中国に関連する記事を「中国関連記事」として抽出し、それを分析対象とする。さらにそれらの記事の中から、記事執筆者が端的に中国に関する印象を記した要約的な部分を「中国観」として抜き出し分析の対象としている。以下に、本章の構成と分析対象の関係を示す図を示す(図0.4-1)。

建築関連記事の抽出に際して、『建築雑誌』に関しては国立情報学研究所の論文情報ナビゲータCiNii(サイニイ)²⁴⁾のタイトルのキーワード検索を使用した。タイトルに中国を明らかに表象する語が入らない記事は捨象され、また明らかに中国の一部分のみに特化した記事なども拾い上げられないことになるが、これらについてはそのままとした。検索においては、『建築雑誌』の当該期間のすべての発行号について、検索対象をフリーワードで用語指定し(他には論文タイトル、著者名、本文、などで検索用語指定が可能)、「清国、北清、中清、南清、満州、満洲、中国」で検索をかけた。なお「中国」で検索をかけると日本の中国地方の記事がヒットするのでそれらはよりわけている。またこの検索では、『建築雑誌』に掲載された中国をテーマとした学位論文要旨や学会発表梗概が含まれてくるけれども、これらは『建築雑誌』に掲載された時期とそうでない時期の混在があるためにここでは中国関連記事から除外した²⁵⁾。記事の中で一節を設けて中国について言及しているものや、複数話者のシンポジウムで1人が中国のことを扱っているものなどは本論文の分析対象としたが、原則としてタイトルから中国関連記事とみなされえないものは対象から除外している。連載記事は各回のものをそれぞれ1記事としてカウントした。

24) 以下を参照、<http://ci.nii.ac.jp/>

25) 『建築雑誌』の別冊『建築年報』が1960年以降年一回年鑑形式で発行されている。大学機関の学位論文論題とその要旨・建築学会発表梗概は、1959年から2001年までのものが『建築年報1959』から『建築年報2001』に掲載されているが、それ以外の期間に関しては『建築雑誌』はこうした学術論文の情報を必ずしもカバーしていない。

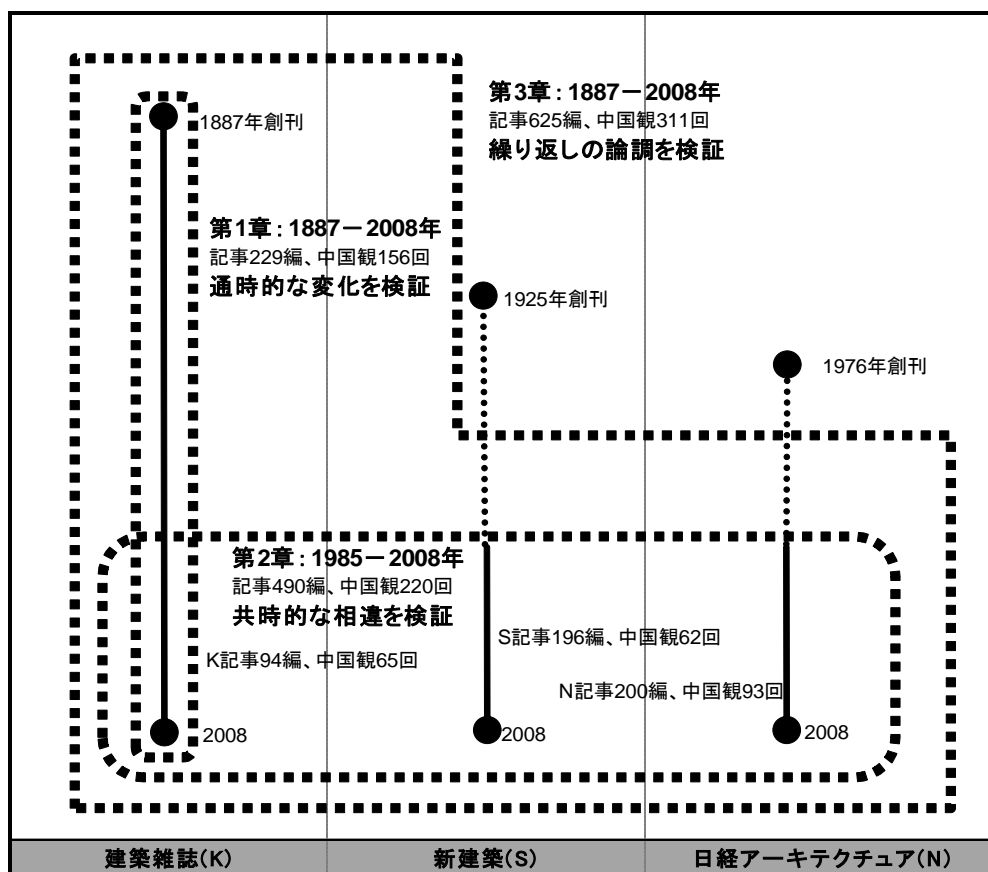


図 0.4.-1: 本章の構成と分析の対象の関係を示す図

他 2 誌の『新建築』と『日経アーキテクチャ』に関しては、対象期間発行のすべての雑誌を実際に通覧して該当する記事を抽出したが、この際も記事の主たるテーマとして中国を取り扱ったもののみを 1 記事として分析対象としている。また、中国関連記事として抽出するにあたっては、執筆者が日本人以外の外国人であっても記事を分析の対象としてカウントしている。これは、記事が集められ編集され出版されるという一連のプロセスの中で、日本の建築系雑誌の編集者や出版主体のフィルターがかかるという意味で、外国人執筆者による中国関連記事にも広い意味で日本の建築界の中国認識が反映されていると考えたためである。

雑誌のようなその場限りの媒体の言説を集めて分析することに意味があるのかという反論ももちろんあるだろう²⁶⁾。しかし本論が選択した 3 つの建築メディアはすでに短くない発行期間を経験してきており、編集意図はもちろん何度か変更を繰り返して来ているとはいえ、それがすでにこれだけ長く存在しているということは、当該メディアがそれなりの時代の洗礼を受け、存在意義が広く読者の間に共有されていることの証でもある。きちんと対象を限定した上であれば、こうした雑誌記事群を対象に分析に加えることも一定の意義はあると思われる。また、建築学の領域において近現代の中国観をこうした方法で研究しようとするのは本論がほぼ最初の試みであり、先行的な研究が少ない探索的なものであるという点で、こうした研究対象を設定すること自体に意義はあるものと考えている。

26) 例えば建築界では奥山信一に対する西山卯三の指摘がある。西山は「戦後『新建築』誌にみられた建築家の創作の主題」に対する討論（『日本建築学会計画系論文集』第 461 号、1994 年、p199-200）において、奥山の学会発表論文が、雑誌『新建築』に掲載された論考を分析対象にしていることに対して「その掲載する建築家の創作論は一定の偏向を持たざるを得ない。したがって、これをもって直ちに「今後の建築家の創作活動に対する指針とする」には不適當であり、少なくとも「新建築」の取材・偏りについて客観的検討を併せ行っていないことは科学的論文とは言いがたい」と指摘した。これに対し奥山は、「戦後『新建築』誌にみられた建築家の創作の主題」についての西山卯三氏の討論に対する回答（『日本建築学会計画系論文集』第 461 号、1994 年、p201-202）において、「この論文は、主題を「戦後『新建築』誌にみられた建築家の創作の主題」と限定し、まだ第一章まえがきで「…こうした資料に限定しているので、この報告で現代日本の建築家の創作に対する言語的活動を全て把握できたとは思わないが…」など、この論文がきわめて限定した建築家の活動についての検討であることを明示して」おり、「『新建築』という建築的なメディア自体の性格を相対化するものであっても、それを直接に絶対視するものではない」と回答している。

分析の方法—中国関連記事における「情報伝達手段」、中国観における「論題布置」と「論調」

分析の方法を語る上で、ここで扱う日本建築界の「中国認識」の所在をもう少し明確にしておく。すでに述べたように本論文は「日本の建築界」を、いくつかのメディア情報を軸に、その周辺に形成されている読者層の中で共有された情報の質から把握しようとしており、建築メディア上で読者が目にする情報群である中国関連記事を分析の対象とする。ここでは中国「認識」を扱うと言いながら、最終的なメディアの情報享受者である読者の読後感や印象を、例えば世論調査やアンケートによって収集し分析をするというような方法はとらない。ここで行うのは、中国に関する専門家や、中国に関する情報をわかりやすく提示できると期待された記事執筆者が、何らかの中国関連情報を記事の形で記述し、それが建築メディアの上に配置されるまでのプロセスそのものを追うことであり、本論文で「中国認識」と呼んでいるのは、そうした中国情報の日本までの伝達手段の様態と、メディアにおける中国情報の配置までを指す。

ここで注意しておきたいのは、建築メディアにおける中国情報の配置には、単なる執筆者の中国理解だけが込められているのではなく、そこには執筆者を選び執筆の形式を依頼した編集者の意図も入るし、そうした編集意図は雑誌の編集方針によって決められており、さらにそれを大きく規定するのは、読者の欲求であるという点である。記事が読まれなければ雑誌から読者は離れて継続されなくなる。そうした状況を考えれば、メディアにおける記事とは、執筆者によって執筆されているときにすでに、あるいは記事がメディアの形式によって配列された時にすでに、その時代の精神、読者の意識が反映されているというように理解できよう。ここでは、読者アンケートをとるようなことで、文字通りの各自の中国への理解を拾うことはしない。実際そうした方法はアンケート対象の設定が難しく、過去の読者にさかのぼって新しいアンケートをとることも不可能であるし、もし仮にアンケート対象をうまく設定でき、あるいは過去のアンケート結果のようなものが存在したとしても、分析によってそこからかならずしも興味深い事実が出てくるかどうかは限らないという事情もある。情報の最川下の各読者の印象を集めた「中国認識」を分析の対象とするより、その読者に向けて情報が集約的に並べられた状態、やや川上の、それでも時代精神を反映していると思われる建築メディアの記事の状態から汲みとることのできる内容を「中国認識」ととらえ、分析の対象としているところに本論文の特徴がある。

中国という情報の「送り手」と日本の建築界という情報の「受け手」との間の相互関係において、受け手の側のメディア上に情報が陳列されるまでのプロセスをもう少しみくみく考えてみよう。それは、いかなる記事執筆者がどのような形式で記事を記述したかという記事のもつ「情報伝達手段」と、そこで並べられた記事群がいかなる内容をどれくらい含んでいるかという記事の「論題布置」の2段階にわけて理解するとイメージしやすい。以下に続く3つの本章のうち前の2章では、この2段階それぞれについて、通時的・共時的な分析を加えてゆく。以下に通時的・共時的な分析における情報伝達手段と論題布置の関係を図示する(図 0.4.-2、図 0.4.-3)

ここで図示したもののうち、通時的な分析は『建築雑誌』の1887年から2008年までの中国関連記事を対象に1章の前半で、共時的な分析は『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の1985年から2008年までの3誌の中国関連記事を対象に2章の前半で行っているものである。以下では改めて、章ごとに3つの建築メディアから抽出された中国関連記事、中国観にどういった分析を加えたのか、その方法をまとめておく。細かい分析の方法は各章で分析前に提示するものとし、ここでは各章でとられた分析方法の概略を示すものとする。

記事や文章を対象にする言説分析には、^{コンテンツアナリシス}内容分析の手法を用いた定量的分析と、テキストの内容を解釈しその傾向を分析する定性的分析があるが、本論はその両者をともに用いている。

第1章では、章前半で『建築雑誌』(1887-2008年)の中国関連記事をその論調と論点の傾向から仮説的に4期にわけたあと、各期の記事数、執筆者の属性、記事の形式についての内訳を定量分析している。同時に期ごとの記事の論題と論調を解釈・分類した上で内容をレビューした定性分析を加え、『建築雑誌』の中国情報伝達手段を通時的に検証する。さらに章後半では、記事執筆者の中国についての要約的印象である中国観を抽出し、これらをKJ法によ

て視点ごとに分類している。この分類上で、各中国観のメディアにおける発現時期とその内容の間の相関を定量分析することで、『建築雑誌』の中国情報の論題布置を通時的に検証した。

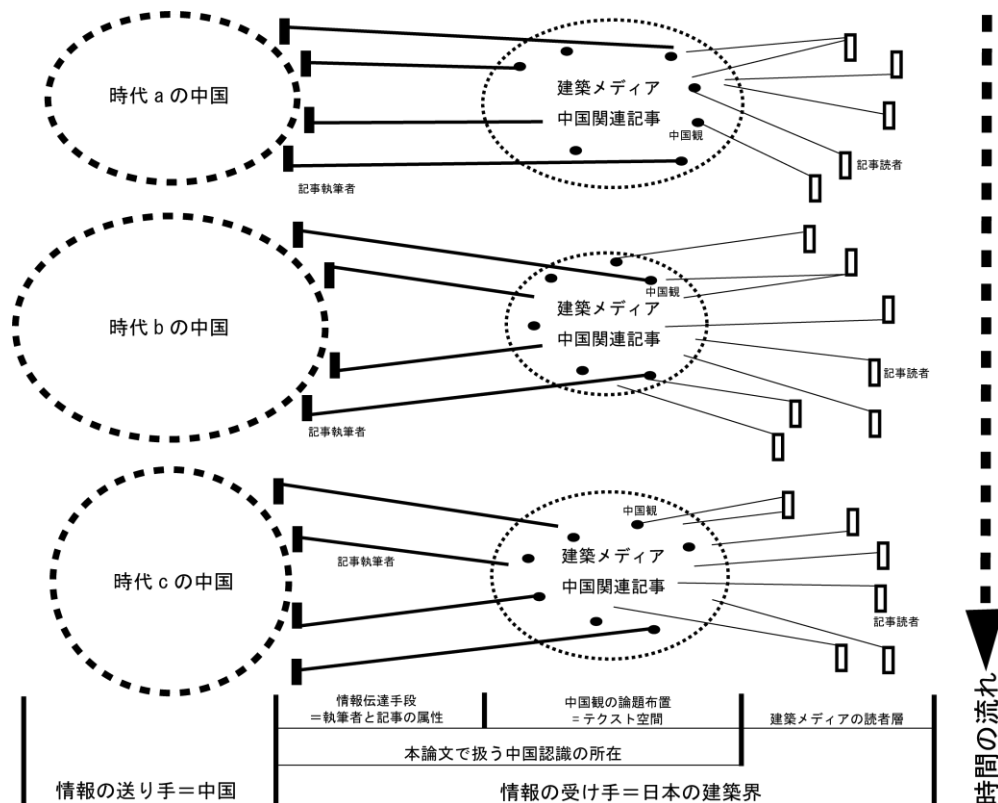


図 0.4-2: 通時的な中国認識分析における情報伝達手段と論題布置の関係

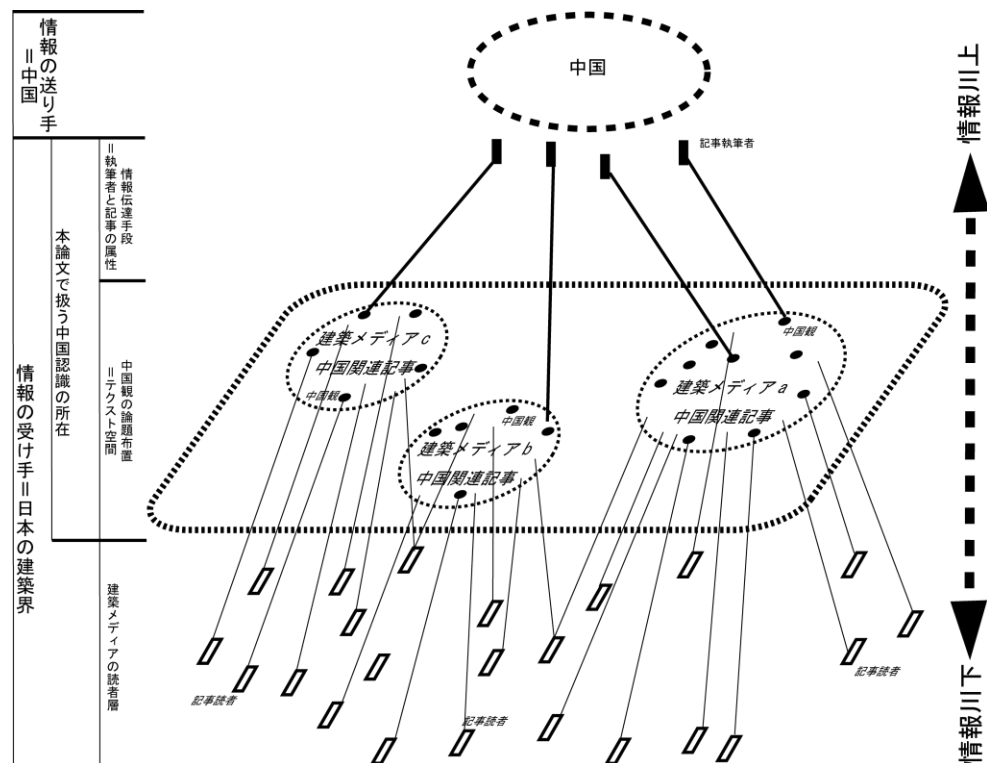


図 0.4-3: 共時的な中国認識分析における情報伝達手段と論題布置の関係

第2章では、章前半で『新建築』と『日経アーキテクチャ』(1985-2008年)のそれぞれの中国関連記事の記事数、執筆者の属性、記事の形式についての内訳を定量分析している。同時に2つの雑誌の記事の論題と論調を解釈・分類した上で内容をレビューした定性分析を加え、『建築雑誌』IV期とあわせてこれら3誌における中国伝達手段を共時的に検証した。さらに章後半では、前者2誌から中国観を抽出し、『建築雑誌』のそれとあわせてKJ法によって分類している。この分類上で各中国観の発現した建築メディアの種類とその内容の間の相関を定量分析することで、3誌の中国情報の論題布置を共時的に検証した。

第3章では、3つの建築メディアを再度総覧し、繰り返し現れている類似する説明や共通の述語に注目し、それらを3回以上含むものを、繰り返される中国観として分類したところ、17論点に整理できた。これらを論点ごとに、各中国観が中国に対して肯定的否定的態度のどちらをとっているかというその「論調」を解釈・分類したレビューを行い、各中国観のメディアにおける発現時期と論調の間の散布図を作成して両者の連関を定性分析することで、中国観の繰り返しのパターンを検証している。

本論では言説分析を、上記のような定量的方法と定性的方法双方で行っているが、第1章前半と第2章前半で行う中国関連記事の分析においては、記事数、執筆者がどの組織に属しているかというその属性、記事が長めの論説なのか軽めのエッセイなのかインタビューのような口述筆記録なのかという記事の形式の属性の3点についてのみ定量的な方法を採用し、実際の書かれた記事の内容については定性的な方法を採用した。記述の分量、実際の作業量とも後者の割合が多くなる。もちろん理論的には定量的な部分をより増やすことは可能である。すべての記事に何が書かれているのか、その内容を分類して統計処理をすることも不可能ではないが、そうした方法は実際には採用しなかった。というのも、例えば中国関連記事は『建築雑誌』の1887-2008年で229サンプルあるのに対し、それぞれの長短が異なり、立場や賛否などがさまざまで、1つの記事の中に異なる話題をとりこんでいるものもあり、組み合わせが複雑化しすぎてしまうために記事の論題の傾向を数値化するのが困難で、頻度分析や数量分析にはなじまなかったからである。またもしなんらかの方法で数値化できる方法を構築できたとしても、それがどこまでの確な概念モデルを導きだせるか保証がないということもあった。229のサンプルを持ちながら定性分析するということは、あくまでこれらを事例研究として処理するのであって、何らかのシミュレーションモデルを設定してここから定量的項目を設けて統計的な処理をするような手続きはとらなかった。典型事例のみならず、逸脱事例を詳細に観察し、ある概念を記述的に推論し、何らかのコンセプトを帰納的に見出していくということである。

第1章・第2章の前半に加えて、第3章で行う、繰り返される中国観のレビュー形式の分析も作業量の多くなる定性的分析である。これらの定性的分析に際しては以下の2点に留意した。すなわち、図式化を避けるあまり概念の細分化に陥り応用性に欠ける経験的結論に至ってしまわないように、同時に研究の独自性にとらわれるあまり記述が个性的になりすぎ、同様に応用性に欠けてしまわないように、ということである。そこで前者のためには、記事そのものを全部扱うのではなく、より要約的に記事執筆者の中国への印象が出ている箇所を中国観として抽出し、より限定した言説の中で、建築界の中国認識を全体として把握しようと試みた。また後者のためには、中国関連記事の抽出、中国観の抽出にあたって、ある程度客観的な指標を参考にするようにした。例えば執筆者の知名度の高さや、当該記事の雑誌の目次の中での位置付けを見てその編集者からの重視のされ方がいかなるものだったかを類推したりするなど、中国関連記事や中国観の周囲に目を配りつつその抽出を行った。

また、第1章・第2章の後半では、中国観の分析のためにKJ法²⁷⁾を用いており、それについてもここで触れておく。KJ法は文化人類学者の川喜田二郎の発案したデータの統合方法であり、多くの断片的で雑多なデータをまとめて把握するのに有効とされ、建築学の分野でもしばしば採用されているものである。この方法の本来の目的は、自らのもつ

27) KJ法については以下の2つを参照。川喜田二郎『発想法 創造性開発のために』中央公論新社、1967年。川喜田二郎『続発想法 KJ法の展開と応用』中央公論新社、1970年

雑多なデータを整理し、それをより創発的に利用しようとするもので、一種の思考整理と発想のためのメソッドだが、本論では形式の異なる様々な定性的記述群を、意味のわかる全体像に整理するまでのプロセスを狭義の KJ 法として用いている。これは発表媒体も執筆者も長短も主義主張も違うさまざまな中国関連記事のデータの傾向を、全体として整理するのに有効であると考えられる。

以下に建築学における、本研究と方法の上で類似した先行研究をいくつか挙げて、本研究の方法の上での独自性を確認しておく。建築学において、書かれたテキスト群を分析対象にした研究を主として収集した。

●藤岡洋保・佐藤由美 「建築雑誌に示された日本の建築界への「空間」という概念の導入と定着」『日本建築学会計画系論文報告集』第 447 号 日本建築学会、1993 年

日本において「空間」という概念がどのように展開したかを検証するために、「通時的に見ることを意図して、比較的長期にわたって発行された建築雑誌 4 誌を」主な分析対象にしている。1887 年から 1960 年までの『建築雑誌』『建築世界』『国際建築』『新建築』がそれであり、内容を時系列にそってレビューして各期の特徴を描出している。

●奥山信一・坂本一成 「戦後「新建築」誌における建築家の創作論 建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル」『日本建築学会計画系論文集』第 477 号 日本建築学会、1995 年

『新建築』誌に見られる建築家の現代の言語的活動を、住宅論、都市論、創作論にわけて総体的かつ相対的に検討しており、建築家の言語分析の方法論にもなっている。例えば住宅論の部分では、戦後から現代までの『新建築』に取り上げられた巻頭論的位置づけのある約 1010 の論文の中から 104 を「住宅論」として取り出し、その論文内容をカテゴリ分けして通時的分析をしている。さらには住宅論の中から「建築家の具体的な住宅に対する主張と考えられる箇所を」建築家の「住宅観」として抽出し、KJ 法を用いて定性的に、観念的な言説を現実的な空間的思考との関係において位置づけようとしたものである。本論文とは研究対象は異なるものの、日本の建築メディアにおける集合意識を扱っていること、「住宅論」と「住宅観」という 2 段階にわけた分析対象設定(本論文の「中国関連記事」と「中国観」の 2 つに相当する)、KJ 法の使用などに関して参考になる部分も多い。ただし本論文は、KJ 法によって整理されたテキスト群にさらに定量分析を加えてその構造を検証している部分で、方法論的には奥山論文より定量的分析の比重が高いと言える。

●姜涌・近藤正一・北川啓介・張健・若山滋 「1950-1970 年代の中国における建築雑誌に現れる建築用語の統計的分析—中国建築の近代化過程における建築家の言説に関する研究 その 1」『日本建築学会計画系論文集』第 516 号 日本建築学会、1999 年

●姜涌・近藤正一・北川啓介・若山滋 「1950-1970 年代の中国における建築雑誌に現れる建築思想の変遷—中国建築の近代化過程における建築家の言説に関する研究 その 2」『日本建築学会計画系論文集』第 525 号 日本建築学会、1999 年

これらは中国建築学会の機関誌である『建築学報』を対象に、1950-70 年代の中国現代建築の建築思想の変遷を論じている。キーワード数の出現頻度を定量分析し建築家の建築思潮を 6 期に分類したあと、社会的背景の解釈とあわせて政治経済文化との関係の中で総括的に建築家の言説を位置づけようとしている。学会雑誌の記事を分析対象としている点は本論と類似しているが、最初から建築外の政治や社会状況との関係を前提に分期を設定している点で、論旨の展開上、本論とは大きく異なるものである。

●小島隆矢・古賀誉章・宗方淳・平手小太郎 「多変量解析を用いたキャプション評価法データの分析—都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その 2—」『日本建築学会計画系論文集』第 560 号 日本建築学会、2002 年

市民の景観意識がいかなるもので、それをどのように集計・分析すればよいかという問題について考察した論文であ

り、ここでの分析対象は雑誌等に掲載されたものではなく、市民への自由アンケートの集計表に書かれたテキスト群である。筆者は KJ 法を「自由記述のような定性情報を分類・整理するのに有効な方法である」とし、これを個別と合議制で行い、さらに多変量解析を併用して分類基準を設定している。

●池田朋子・大貝彰 「言説を分析対象とした空間イメージ研究の手法に関する考察」『日本建築学会計画系論文集』第 492 号 日本建築学会、1997 年

本論は、雑誌記事という文字情報を対象に、中国という特定の場所に関するイメージを扱うという点で、言説と空間の関係をさぐるものと言うこともできよう。日本の建築世界の学術研究の場においても従来、こうした言説と空間の関係を扱う研究は多くなされてきた。池田は 1976 年から 95 年までの都市・建築分野の論文を網羅的に概観し、言説と空間イメージの関係について扱う論文の分析手法について、「まず目的に応じてテキストとなる言説が選択される。次にそのテキストの中から、分析に必要な着目する空間を表現した箇所が抜き出される。続いてそれに定性的または定量的な分析が加えられ、結果となる知見が導かれる。定性分析では、解釈という手法が圧倒的に多い。他には KJ 法、構造主義や記号論を適用した意味構造分析がみられる。定量分析は出現頻度をみる単純集計が早くから多くみられ、90 年代に入ってから歌を分析対象にした数量化Ⅲ類、クラスター分析などによる類型化もみられる。」と述べている。また同時に「分析手法は分析対象のテキスト形式にも大きく依存していると考えられる」として、テキストの形式を、歌 A:形式有、歌 B:形式無、C:文学的散文、D:雑文に分類して、それぞれのテキスト形式の分析方法を検討している。本研究で扱う雑誌記事は池田の分類に従えば D:雑文(雑誌・広告等の文章)に相当するが、これについて池田は、「このような雑文は文学作品に比べて意味構造が単純」とし、「情報伝達のみを目的としたテキストであるため意味構造は単純であり、その定量的な類型化も可能と考える」としている。

以上が建築学における、方法の上で本研究に類似した先行研究である。こうしてみると、雑誌における雑多な記事群を対象に行われた研究はすでに建築学においては相応の事例があることがわかる。そしてどの先行研究も注意を払っているのが、その範囲の限定性と、分析手法の客観性である。すなわち、分析のためには分析対象を限定せねばならないのでその限定を最初に明確化することと、引き出される結論はその限定内における検証の結果であるので一般論に話を置きかえる場合は検証結果と考察を分けて提示すること、である。本論文は上記の知見を十分に認識しながら、本論に入っていくものとする。

0.5. 研究の構成

本論文は、以下のように、序章・本章 3 章・終章により構成される。

序章ではまず研究の主題とその目的を提示し、日本建築界の中国観を今ここで研究することの意義を述べる。続いて、本論が中国をメタ認識の対象として扱うものであるので、これに類似した視点を持つ先行研究をとりあげている。さらに日本における建築メディアの歴史を概観した上で、検討の対象として 3 つの定期刊行物、『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』を取り上げることが示し、これらの雑誌における中国に関する記事＝「中国関連記事」と、その記事の記述の中で執筆者が要約的に中国への印象を述べている箇所＝「中国観」を実際の分析対象にするとしている。序章の最後で研究の構成を示す。以下が目次を概略化した、本論文の構成である(表 0.5.-1)。

序章:日本の建築界の中国認識—その所在と分析方法		
0.1. 研究の目的と意義		
0.2. 日本建築界と建築メディア		
0.3. メタ認識対象として中国を扱った先行研究		
0.4. 日本建築界の中国認識の分析方法		
0.5. 研究の構成		
第1章:近現代の日本建築界における中国認識	第2章:現代の日本建築界における中国認識	第3章:日本建築界の対中論調にみる中国認識
『建築雑誌』の分析(1887-2008年)	『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』の分析(1985-2008年)	3つの建築メディアに繰り返される中国観の分析
1.1.『建築雑誌』の中国関連記事:4期の中国関連記事における情報伝達手段の通時的比較—手段の拡大とその反転	2.1.『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』の中国関連記事:3誌の中国関連記事における情報伝達手段の共時的比較—情報伝達軸と対中態度のメディアごとの相違	3.1.繰り返される中国観の論点と論調
1.2.『建築雑誌』の中国観:4期の中国観における論題布置の通時的比較—「技術」と「社会」における論題布置の重心移動	2.2.『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』の中国観:3誌の中国観における論題布置の共時的比較—「技術」以外の論題による布置の性格づけと現場情報の一般化	3.2.繰り返される論調の傾向:反復する中国観における時期と論調の関係分析—3つの論調パタンのもつ安定性と不安定性
1.3.まとめ:論題の重心移動を伴いながら反復する中国認識	2.3.まとめ:中国に影響を受けながら、技術以外に着目するようになる同時代の中国認識	3.3.まとめ:自我と時代との関係で規定される複層的な中国認識
終章:日本の建築界における中国認識—建築メディアにおけるその構造		
4.1. 研究のねらいと成果		
4.2. 日本の建築界の中国に関する記述はだれがどのように伝えてきたのか		
4.3. 日本の建築界は中国のどの部分に着目してきたのか		
4.4. 日本の建築界が繰り返し持つ対中論調にはどのような傾向があるのか		
4.5. 日本の建築界における中国の位置づけ、今後の課題と展望		

表 0.5.-1: 本論文の各章構成図

本章第 1 章では『建築雑誌』における日本建築界の通時的な中国認識の変化を検討する。章の前半では、日本建築学会の機関誌である『建築雑誌』の創刊 1887 年から 2008 年までの全中国関連記事 229 編を通覧し、中国情報の日本建築界への伝達手段がいかなるものなのかを把握した。章の後半では、『建築雑誌』の 1887 年から 2008 年までの全中国関連記事において発現の見られた 156 回の中国観について、中国情報の日本建築界における論題の布置がいかなるものかを把握した。

本章第 2 章では、『建築雑誌』に加えて、新建築社発行の商業系月刊誌『新建築』と、日経 BP 社発行の商業系隔週刊誌『日経アーキテクチュア』3 誌における日本建築界の共時的な中国認識のありようを検討する。章の前半では、3 誌の 1985 年から 2008 年までの全中国関連記事 490 編を通覧し、前章と同じ方法で中国情報の伝達手段を把握した。章の後半では、3 誌の当該中国関連記事において発現の見られた 220 回の中国観について、その論題の布置がいかなるものかを把握した。

本章第 3 章では、3 誌において繰り返される日本建築界の対中論調の傾向を検討する。『建築雑誌』の 1997 年から 2008 年まで、『新建築』と『日経アーキテクチュア』の 1985 年から 2008 年までに発現する全中国観 311 回において、繰り返し現れる類似する説明や共通の述語をもつ中国観を取り出し整理したところ、全部で 17 の論点に分類することができた。さらに、こうした繰り返される論点における各中国観の中国に対する評価の論調を、肯定的か否定的かテク

ストを解釈しながらそれぞれの論点ごとにレビューし、中国観の発現している時期とその論調の関係を把握した。

終章では、序章で掲げた日本建築界の中国認識に関する3つの主題にそって、本論文の内容を要約するとともに、今後の課題と展望、若干の結論的考察を述べた。

第1章:近現代の日本建築界における中国認識—『建築雑誌』の分析(1887—2008年)

本章第1章では、日本建築学会の機関誌である『建築雑誌』における日本建築界の通時的な中国認識の変化を検討する。1887年の創刊号から2008年発行分までの『建築雑誌』を分析対象としている。

前半の第1節では、『建築雑誌』の当該号における全中国関連記事229編を通覧し、中国情報の日本建築界への伝達経路がいかなるものなのかを把握する。まず記事の分布数とそれらが扱う論題の推移から勘案して、4期(I期:1887—1920年、II期:1920—1958年、III期:1959—1985年、IV期:1985—2008年)に仮説的に区分した。さらに期ごとの記事数、執筆者の属性、記事形式の属性の推移を定量的に把握した上で、各期において重要と思われる記事について、時系列に沿ってその論題と論調をレビューしている。

後半の第2節では、『建築雑誌』の1887年から2008年までの全中国関連記事において発現の見られた156回の中国観について、中国情報の日本建築界における論題の布置がいかなるものかを把握する。中国の「どこを見ているか」という各中国観の論題をKJ法によって整理し、中国観の内容と発現の時期の連関を見ることで、論題の布置の特徴を明らかにしている。

第3節では、前の2節で明らかになった中国情報の日本建築界への情報伝達経路、各中国情報の論題の布置の特徴をまとめ、『建築雑誌』における近現代の日本建築界の中国認識の傾向を提示する。

1.1.『建築雑誌』の中国関連記事

『建築雑誌』における中国関連記事の抽出、時系列分布と論題による4つの仮説的時期区分

4期の仮説的時期区分における分析方法

a.『建築雑誌』I期(1887-1920年)の中国関連記事

大学人と役人を主とする口述筆記録中心の情報伝達手段／西方と日本のつながりを中国に見る／細部の観察とそれを可能にした旅行記／過去を知るための建築と文字の接近／中国人への過剰な見下し／西洋人より優位に立つためのものさし

小括:つながりを見つけ、それを利用しようとする中国関連記事

b.『建築雑誌』II期(1920-1958年)の中国関連記事

大陸にいる日本人が加わった、論説・口述筆記録・視覚情報による情報伝達手段／視点の返還—現実的なデータの充実、住居への関心の移動、類似より相違をいうための細部／満洲国に関する記事の登場と住宅重視の姿勢／満洲に関する技術報告／満洲訪問報告の多様化／戦局の進行と技術への興味を増大／戦中戦後の中国認識の担い手の連続

小括:住宅という現実問題に没入する中国関連記事

c.『建築雑誌』III期(1959-1985年)の中国関連記事

大学研究者を主とする論説中心の情報伝達手段／文献抄録による中国把握—文化財の保存という新しい話題／考古学的考究の行き先—日本の源流さがし／中国に関する特集号の登場／人間どうしの出会いを伴う視察旅行／文化財保存に見る中国の優位性

小括:遅れた中国に優れた部分を見つけようとする大人の態度に立った中国関連記事

d.『建築雑誌』IV期(1985-2008年)の中国関連記事

民間人や中国人が加わった、多方向で相対的な情報伝達手段／交流の蓄積とその本格化／同時代の中国への興味と日本への逆照射／中国からの発信／新しい中華趣味としてのヴァンキュラー建築への視点／現存する近代建築の検証／アジア建築という枠組み／後から急速に追いかけてくる中国に向けての日本からの情報発信／中国への期待と積極的評価の増加

小括:同時代で変化する国への興味を増しつつ、迎合的態度も取り始める中国関連記事

4期の仮説的時期区分の妥当性の検証

中括:4期の中国関連記事における情報伝達手段の通時的比較—手段の拡大とその反復

1.2. 『建築雑誌』の中国観

『建築雑誌』全4期における中国観の抽出とその時期-論題分布

a. KJ法による近現代日本建築界の中国観の内容分析

「技術に着目」論題の中国観／「社会に着目」論題の中国観／「場所に着目」論題の中国観

小括:「技術」と「社会」の2つに大別可能な3段階の論題構造

b. 時期ごとの中国観の比較分析

大論題における4期の中国観の比較分析／大論題における中論題の比較分析／中論題における小論題の比較分析

小括:細分化する「技術」論題と入れ替わる「社会」論題

中括:4期の中国観における論題布置の通時的比較—「技術」と「社会」における論題布置の重心移動

1.3. 第1章まとめ:論題の重心移動を伴いながら反復する中国認識

1.1. 『建築雑誌』の中国関連記事

『建築雑誌』における中国関連記事の抽出、時系列分布と論題による4期の仮説的時期区分

本節は本章第1章の前半部分に相当し、『建築雑誌』の中国関連記事において、中国情報伝達手段の通時的な変化を検証する。

まず、『建築雑誌』の1887年の創刊号から2008年12月号までの全1583号について、国立情報学研究所の論文情報ナビゲータCiNii(サイニイ)でのタイトルのキーワード検索を用いて中国関連記事を検索し、計229編の記事を抽出した。ここで明らかなのは、『建築雑誌』の中国関連記事が、増減をしながらも発行期間の全期間を通して分布しており、この建築メディアが一貫して中国を記述対象として扱ってきているという点である。これら中国関連記事の内容の通時的変化を分析するにあたり、分析対象とする記事を通読すると、同じ中国を扱う記事であっても、その具体的な論題や執筆者の視点に相違が見られる。論文数の分布(図1.1.-1)だけから見ると、1921年頃から31年頃、1944年頃から65年頃、そして1987年頃から2001年頃に記事数の減少する時期が見られる。この3つの減少期の間の、記事の相対的に集中する時期を、ここでは仮説的にI期からIV期としておく。日中間の政治経済史との関連で言えば、I期が日清戦争の勝利以降日本の大陸進出の開始期であり、II期が関東軍による中国侵略期であり、III期が中国の文化大革命期であり、IV期が中国のWTO加盟以降の日中貿易の拡大期であるから、政治経済の状況が記事数の分布にも影響を与えていることがわかる。しかし日本の建築界におけるメディア上の言説の時系列上の分期は、こうした政治経済状況だけに支配されているわけでもないし、またこのような言説自体が政治経済状況を必ずしも正確に写し取るとは限らない。そこで本論では最初に仮説的な4期の時期区分を措定し、期ごとに記事を詳細に検討した上で、この分期点の位置と分期の妥当性を順次検討してゆく。

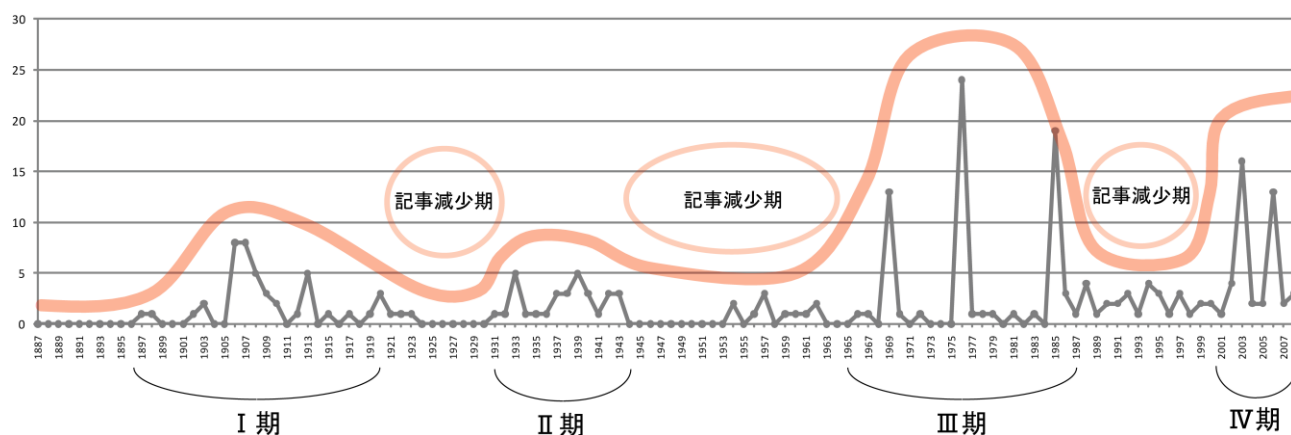


図 1.1.-1: 『建築雑誌』における中国関連記事数の分布(1887-2008年)と仮説的時期区分 全229編

4期の時期区分における分析方法

各時期において何をどう分析したのか、その方法を以下に述べる。

1) 4期の仮説的時期区分ごとに、中国に対する関心の高まりの推移を把握するために、記事数の時系列変化をたどり、数量的把握をおこなう。また、各期でどういう執筆者がどういう形で中国関連記事を残しているのかを知るために、雑誌の執筆者紹介や書籍著者履歴などを参照してその履歴を把握したうえで「執筆者の属性」としてその所属先と国籍について分類している。また雑誌の目次や内容から当該記事がどういう位置づけのもとで書かれているかを把握したうえで「記事形式の属性」として記事の種類と記述対象地を分類している。こうした作業を経て、2つの項目についての傾向を把握するために定量分析を行った。

2) 4期の仮説的時期区分ごとに、時系列に沿ってそこで扱われた記事論題を分類し、内容的に重要だと思われる記事については、レビュー形式で論題、論調について定性的に言説分析を加えた。

1)においては、仮説的な分期を論述の根拠にしているために、まず各時期の初めと終わりを記事内容の変化の流れのなかで明確にして分期の妥当性を補強しながら、以下の各期の定量・定性分析に入る。

1)における「執筆者の属性」については、執筆者の「国籍」を「日本」「中国」「第三国」の3カテゴリ、「所属先」を後述する6カテゴリに分類し、前者はとくに各期で円グラフを作成しその割合を示した。これによって執筆者と記事形式の属性に見る中国情報伝達手段の特徴を見ようとしている。「国籍」は執筆者の履歴に特に記述がない場合は名前から判断しているので在日外国人の場合など判別が覆る可能性も残るが、それが数量的にも意味的にも本分析に大きな影響を与えるものではないと判断し、各執筆者を3種類に分類してマークしている。「所属先」は「日本の教育機関」「日本の官公庁」「日本の民間企業」「中国の機関」「第三国の機関」「不明」の6つに分類した。執筆者が学会や協会などの任意団体や軍隊に属する場合は「日本の官公庁」に、満洲国の機関に属していた場合は「第三国の機関」に分類している。編集部が記事の執筆主体の場合、『建築雑誌』の編集部である日本建築学会は社団法人なので「日本の官公庁」に含まれるものとした。また、記事執筆者によっては設計事務所と大学とか、複数の所属先を持っている人物がいるが、あくまでその記事を書いたときの主要な立場を、各記事に付属する執筆者紹介や記事内容から判断して1つだけに絞ってカウントしている。基本的に所属先は執筆時の肩書きを採用しており掲載時のものではない。さらに、1つの記事に複数の執筆者のいる場合は、そこでの執筆者の属性は執筆者の人数ではなくその種類に従ってカウントしている。1つの記事で日本の教育機関に勤める2人と中国の機関に勤める1人が座談会をしている場合、記事数は1で執筆者の所属先は日本の教育機関1、中国の機関1ということになる。文章・発言の長短や人数比を正確に追うことよりも、むしろどれくらい異なる背景を持った執筆者がいるかを把握することが重要と考えたのでこのような処理とした。

1)における「記事形式の属性」については、記事の「記述対象」として「中国」「日本」「第三国」の3種類、「種類」として後述する6種類にわけて表にし、後者はとくに各期で円グラフを作成しその割合を示した。「記述対象」は中国関連記事がどの地域について記述しているかを見ているものである。中国関連記事でありながら当時の文脈上では第三国である満洲国について記述しているものや、日本と中国と一緒に語る記事の集中期などがここから見てとれる。「種類」は「論説」「口述筆記録」「コラム」「文献抄録」「ニュース」「作品紹介」の6つに分類して表の中でマークしている。「論説」はある程度まとまった執筆者の専門領域に関わる論考、「口述筆記録」は講演や対談、インタビューなどの話し言葉を文字におこしたもので、「論説」よりも自由な論調が観察されやすい傾向にある。「コラム」は執筆者の専門領域からすこし離れた軽い読み物、「文献抄録」は他の文献を要約し他の読者との共有を図ったもの、「ニュース」は時事的な出来事を伝えたもの、「作品紹介」はグラビア写真や図面を用いて建物の詳細を伝えようとするもの、として分類した。「文献抄録」については、抄録者がコメントを残している場合と、全くの抄訳のみだけのものがあり、前者の場合で抄録者が記事内で自分の主張を開陳している場合は、「執筆者の属性」として原著者と訳者それぞれのデータをカウントしている。

こうした「記事の種類」は各時代の雑誌の編集方針によって大きく支配されるものであり、その種類の偏りが、記事が中国を扱っていることと必ずしも因果関係にあるとは言い切れない。ただしこうした記事の種類の通時的な把握は、日本の建築界における読者側からの中国の見え方を理解する上で助けになるものであり、本論文がメディア情報を通じた認識論を扱う以上、その観察には一定の意義があると考ええる。

なお、作業としては2)が中心であり、ここでは中国関連記事の言説分析を、意味解釈による定性的分析により行っている。各期では中国関連記事の言説分析のあと小括として期ごとの中国関連記事の内容をまとめ、最後にその通時的な内容の変化を中括としてまとめている。また、ここでの分析には、中国関連記事のほか、当時発行の書籍や他の雑誌も適宜参照しているが、それらは1)の数量分析には含まれず、2)の言説分析の部分で必要に応じて参照してい

る。

1.1.節末で、仮説的に設定した4期を区分する3つの分期点の妥当性を検証し、『建築雑誌』の中国関連記事の通時的時期区分を改めて確認している。そのうえで中括として、4期の中国関連記事における情報伝達手段の通時的比較の結果をまとめた。

1.1.a.『建築雑誌』I期(1887-1920年)の中国関連記事

大学人と役人を主とする口述筆記録中心の情報伝達手段

日本建築学会は、当初は造家学会という名前で1886年に創立され、翌87年には機関誌『建築雑誌』が創刊されている。この建築メディアにおいて最初に見られる中国関連記事は、建築家の三橋四郎¹⁾が1897年に書いた「清国遼東寺院建築説」(K001)である。I期とII期の記事を比較すると、後述するようにI期は中国に短期滞在した旅行者が中国について知識の乏しい会員に向けて書いた報告形式のものが主であったのに対して、II期は現地化する日本人社会に着目した内容が増えている。よく知らない外国であった中国が、内部化された地域として描かれるようになるという視点の転換が起きているのである。この転換は1920年の関野貞による旅行記風の記事「西遊雑信」(K041)と1920年の青島郵便局の紹介(K042)の間にはっきりと現れている。

最初の三橋の記事から関野のそれまでをI期とすると、そこに含まれる中国関連記事は1887年から1920年までの計41編となり、その記事一覧(表1.1.a.-1)、記事本数の経年変化(図1.1.a.-1)、執筆者の属性(図1.1.a.-2)、記事形式の属性(図1.1.a.-3)を示す。これらのデータから、この期間の記事数の分布は、時に集中を見せながらもある程度広く分布していることがわかる。集中は2回で、1906年から09年までと、1913年の単年である。

前者の1906年から09年の記事の集中は、伊東忠太、大熊喜邦、大江新太郎らによる連載記事によるものであり、これらの記事はのちに佐野利器が「満洲旅行談」(K016)言及しているように、日露戦争に日本が勝利した直後の1905年8月に、帝国大学の命を受けて佐野ら上記4名が「満洲に於ける固有の建築物に付ての調査」で渡航したときの旅行記からなる。体験的旅行記が、限定された話者により、長期にわたる連載形式で紹介されるという形で中国関連記事として集中している。一方で後者の1913年の記事の集中は、言語学者の後藤朝太郎(1881-1945年)によるほぼ毎月の5回にわたる中国の文字と古代建築に関する論文の連載によるものである。当時は1911年に辛亥革命、13年には袁世凱の中華民国成立を日本が承認するなど日中関係には動きがあるが、この時期の『建築雑誌』の中国関連記事にはこうした時事的な動きの反映は見られず、学術的内容への偏向が顕著であったと見ることができよう。

この時期の中国関連記事の執筆者は日本の大学所属の研究者・大学院生か役人がほとんどであり、所属先は「日本の教育機関」(73%)と「日本の官公庁」(20%)の2カテゴリで全体の93%を占めている。教育機関はすべて東京大学で教員ないしは学生である。これは設立当初の建築学会の推進母体が、東京大学を中心とする人物群にあったことによるものと思われる。また、執筆者の国籍は全員「日本」である。

記事形式を見ると、「口述筆記録」が主要な部分を占めている(71%)。記事の内容を見ると、実際は学会の毎月の定例講演会の筆記録がそのまま採録されているものが多い。長い講演会になると何回にもわけて雑誌に採録されている。また講演会のあとの質疑が掲載されているものもあり、そこでは話者の中国との関係の説明がされていたり、聴衆が講演を聞いて中国のなにを知りたいかがあったかがわかるなど、重要な情報源となっている。「コラム」「文献抄録」「ニュース」に分布はゼロだが、「作品紹介」で唯一、1909年に大連に建設された満鉄の社宅案が紹介されている(K029)。これは中国大陆に日本人が実際に建てた建築物に関する最初期の記事であるが、II期の1920年の中国東北部での日本人の手による建築作品の紹介(K042-K043)に比べて、建物データもあいまいで資料としての充実度はまだ低い。また、記述対象は「中国」のみであり、他の国についての記述は見られない。

1) 三橋は『建築雑誌』において最初の中国関連記事を残し、明治期から大正にかけて官庁建築を実現した建築家。東京帝国大学工科大学建築学科を卒業後に陸軍省、逓信省、東京市技師を経て1908年に個人事務所を開設している。日本人の三橋がこの時期に清国の建築について記事を残したのは、1904年の日清戦争で彼が大連周辺を訪れる機会があったからであることが「清国建築談」(K002)からわかる。また三橋は明治の最初期の民間建築雑誌『建築世界』の編集にも重要な役割を果たしており、それは戦後の以下の蔵田周忠の発言からも見てとれる。「初めに編集のいろいろなことを世話されたのは三橋四郎と云う先生でした。この方は非常に速く独立の建築事務所を作られたので、おそらく設計事務所の初めじゃないかと思いますが『建築世界』は自分のポケットマネーを出して創刊に寄与もされ、いろいろな新知識を紹介された…指導者の三橋さんはアンチ・アカデミーの感じを持っていた」。(市浦健「建築ジャーナリズムの動きをたどる—関係誌20年の歩み」『建築雑誌』日本建築学会、1956年4月号、p59-78)

記事番号	掲載発行年月	号数	著者	記事タイトル	中国関連記事の形式											
					執筆者の属性				記事の属性							
					国籍	所属先	記述対象	種類	口述筆記録	文獻抄録	ニュース	作品紹介	論説	コラム	不明	その他
K001	189710	130	三橋四郎	清国建築寺院建築図												
K002	189803	135	三橋四郎	清国建築図												
K003	190209	189	伊東忠太	北清建築調査報告												
K004	190303	195	伊東忠太	支那内地古建築及古碑一覽表(自北京至成都)												
K005	190303	200	平野勇造	支那の望見												
K006	190605	233	伊東忠太	支那印度土其其旅行記(第一回の上)												
K007	190606	234	大熊喜邦	滿洲の劇場												
K008	190607	235	伊東忠太	支那印度土其其旅行記(第一回の下)												
K009	190607	235	大熊喜邦	滿洲の住宅												
K010	190608	236	大熊喜邦	滿洲の住宅(前)												
K011	190609	237	大熊喜邦	滿洲の住宅(前)												
K012	190610	238	伊東忠太	支那印度土其其旅行記(第二回の上)												
K013	190612	240	伊東忠太	支那、印度、土其其旅行記(第二回の下)												
K014	190701	241	伊東忠太	支那印度土其其旅行記(第三回)												
K015	190702	242	伊東忠太	支那印度土其其旅行記(第四回の上)												
K016	190702	242	佐野利器	滿洲旅行記												
K017	190703	243	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て												
K018	190704	244	伊東忠太	支那印度土其其旅行記(第四回の中)												
K019	190705	245	伊東忠太	支那印度土其其旅行記(第四回の下)												
K020	190705	245	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て(前)												
K021	190712	252	伊東忠太	滿洲の佛塔(歴史地理轉載)												
K022	190803	255	伊東忠太	南清地方探検略記												
K023	190804	256	伊東忠太	支那建築												
K024	190810	262	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て(第二回四十五號の續き)												
K025	190811	243	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て(四)												
K026	190812	264	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て(五)												
K027	190902	266	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て(六)												
K028	190903	267	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て(七)												
K029	190912	276	記載なし	大連市南滿州鐵道株式會社近江町住宅												
K030	191002	278	伊東忠太	支那印度土其其旅行記(第五回の上)												
K031	191003	279	伊東忠太	支那印度土其其旅行記(五回の上續き)												
K032	191207	307	伊東忠太	支那印度土其其旅行記第五回の下												
K033	191306	318	後藤朝太郎	文字より見たる支那古代建築(一)												
K034	191308	320	後藤朝太郎	文字より見たる支那古代建築(二)												
K035	191309	321	後藤朝太郎	文字より見たる支那古代建築(三)												
K036	191311	323	後藤朝太郎	文字より見たる支那古代建築(四)												
K037	191312	324	後藤朝太郎	文字より見たる支那古代建築(五)												
K038	191512	355	關野貞	編纂:支那六朝以前の墓塔に就て												
K039	191712	384	關野貞	西遊雜記 一												
K040	191909	393	關野貞	西遊雜記 其二												
K041	192001	397	關野貞	西遊雜記												

表 1.1.a.-1: 『建築雑誌』I 期の中国関連記事一覧 全 41 編

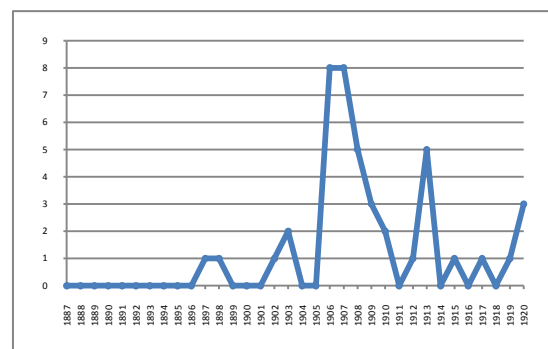


図 1.1.a.-1: 記事数の経年変化

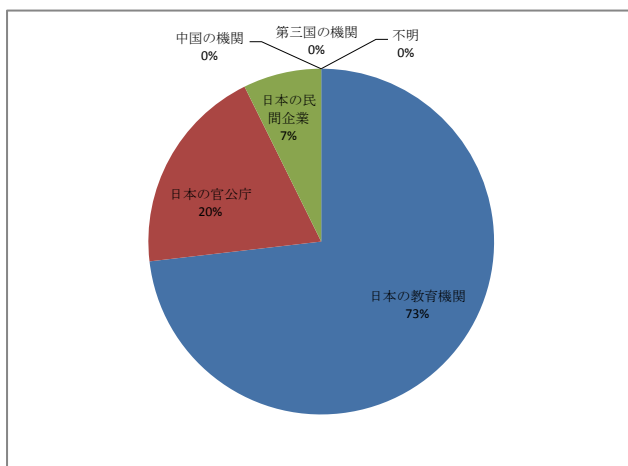


図 1.1.a.-2: 執筆者の属性

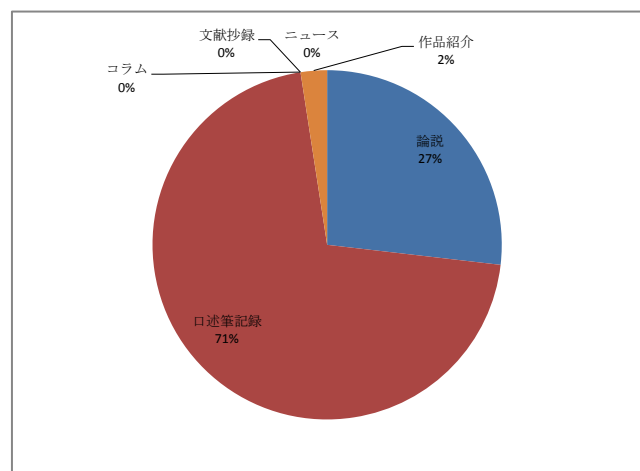


図 1.1.a.-3: 記事形式の属性

西方と日本のつながりを中国に見る

『建築雑誌』最初の中国関連記事である、三橋四郎の1897年の論考「清国遼東寺院建築説」(K001)は、三橋が日清戦争で旅順およびその周辺を訪れる機会があり、建築関係者としては最初期に渡中したときの経験から書かれた記事である。大連、金州、営口、威海などの寺院を公務の合間をぬって視察し、主にその伽藍配置と細部を観察している。三橋は、奈良の法隆寺との通底を見ようと、回廊でつながった寺院、すなわち「印度式又は大仏式と称せらるる大仏殿の如き数多の小室を有せざれども又た廻らすに歩廊を以てし」たインド風の寺院をここで見いだせるものと思っていたが、実際はこの地で回廊が廻らされた寺院を発見することはできなかった。記事では結局「印度流の配置は余の目撃したる遼東寺院に見ざるは実に遺憾の至りなりと云へども支那本州を搜索すれば必ず逢遇するをあるべし」、と書き残している。一方で建築の詳細については、これらの遼東寺院でもギリシャやインド建築に似た意匠が見られるとし、壁から突出して屋根を受ける持送部分の彫刻のスケッチを示し、写真から模写した南インドの寺院との類似を指摘している。末尾に三橋は、「遼東寺院は配置構造装飾に至る迄悉く単一にして千返一律とも謂ふべく時に印度風混したる痕跡あり」と述べ、伽藍配置はともかく、細部にインドの影響を見ることができると結んでいる。

伊東忠太は1902年3月から1905年6月の3年4カ月をかけて、「支那印度土耳其旅行」を実現し、これについて「旅行談」という形で、中国部分に関してだけでも1906年から1910年にかけて実に13回(K003、K004、K006、K008、K012-K015、K018、K019、K030、K031、K032)にわたって断続的に記録を残している²⁾。この大旅行での伊東の関心は、西進するにつれて、各地で日本建築の源流を見出せるはずであり、それは様式的にインドやギリシャの建築と繋がっていて、その断片は中国にもあるはずだという建築学における専門的学問仮説の実証と、建築に限らず広く社会風俗まで含めた知らない世界である中国を見聞したい、という2面から構成されていると言える。

特に前者は、三橋も似たような視点を持っていたし、伊東はこの大旅行の前から持ち続けていた研究テーマであった。伊東の1902年の「北清建築調査報告」(K003)と1906年の「支那印度土耳其旅行談(第一回の下)」(K008)は、この3年間にわたる大旅行の一部分、1902年6月の1カ月から北京を出発し北西部の大同、五台山、定州を廻って北京に戻るまでの主に山西省を回った旅行記である。前者の資料においてこの旅行を総括して彼は、「余は北京を發して西北に向ふや、建築の形式が漸次に変化するを認めたり。而して其変化は大同附近に至りて其極に達したり。大同より五台山を経て北京に帰るや、其変化は再び逆行し、漸次に復旧して終に北京に到れる認めたり。これ余が興味を感じたる事実なり」とし、「余は是故に北清建築研究の甚だ重要なるを認め、且つ其尤も趣味に富むを信ずるなり」と言っている。中でも雲岡石仏寺(雲岡石窟)についての伊東の反応は大きく、この魏の時代の石窟寺院を見て仏像が鳥仏師のものに酷似し模様も推古式であることを見て取ると、「これ千四百五十年前の遺跡にして、我が法隆寺に先つこと百五十年あり。…吾人は今や大同の附近に於て推古式の遺物を見るを得たり。吾人は是に於て、所謂推古式なるものは西域より蒙古を通過して朝鮮に入りしことを想像すべきに到りたり。…吾人は之に由て東洋美術史上の一大疑問を解釈すべき階梯を得べきなり」との感想を漏らしている。伊東は1893年に「法隆寺建築論」³⁾を発表しており、そこでは法隆寺を、日本建築の起源と言えるべき建築で、日本の古代建築のうち三韓を経て百濟人の媒介で日本に伝来した「推古式」の代表例だとした。そのあと日本では中国から直接伝来した「天智式」、のちに国風化が進んだ「天平式」の建築が生まれたが、他の国には同時代の遺跡が残っていない以上、日本に現存する「推古式」の法隆寺はアジア規

2) 連載13回目の最後の旅行記「支那印度土耳其旅行談第五回の下」(K032)は1903年6月に雲南省からミャンマーに抜けるところで終わっている。全体のルートは旅行記の1回目に触れられており、この大旅行で伊東は中国のあとインド、トルコ、エジプト、シリア、ギリシャからヨーロッパ各国、アメリカを通して帰国している。『建築雑誌』に連載されている旅行記はこの中国部分のみのほぼ全体であると言える。「伊東忠太博士重要文献目録」(『日本建築の研究・上 伊東忠太著作集 第1巻』原書房、1982、p5-9)によれば、この旅行記の続きは、「緬甸旅行茶話」(『米澤有為雑誌』1903年10月)「印度旅行茶話」(同1903年12月-04年3月)「土耳其・埃及旅行茶話」(同1904年7月-05年5月)、「希臘旅行茶話」(同1905年7月)、「叙利亞沙漠」(『地学雑誌』一八年1906年)、「小亞細亞横談旅行記」(『同一九年』)、などにばらばらに発表されている。

3) 伊東忠太「法隆寺建築論」『日本建築の研究・上 伊東忠太著作集 第1巻』原書房、1982年、p1-192(初出は『建築雑誌』日本建築学会、1893年11月号、p317-350)

模で見ても突出した歴史的価値をもっている、というのがその骨子である。そうした認識を持って彼が実際に中国に渡航し、西進しながら法隆寺とよく似た遺跡を見つけることができたのは、日本建築のオリジンは西方にあり、その痕跡が中国にある、という彼の仮説をますます強固にするものであったに違いない。

1902年6月からの山西旅行の後、一度北京に戻った伊東は、1902年8月に今度は西進してインドを目指した。このときは洛陽を通り龍門石窟を訪れており、ここでも山西旅行で雲岡石窟を見たときと同じような興奮さめやらぬ記述を残している。彫刻や装飾様式が、後魏のものが推古式と、唐のものが天平式と全く同じであり、柱にはインドから出た意匠が見られるとして、龍門の後魏の仏寺を「夫は支那国有の様式と西域及印度の様式との奇なる混合ではなかつたかと思ひます」(K013)と言っている。さらには四川省広元で千仏崖を訪れ、ここにも後魏から唐、さらにそれ以降の手法も見られる石窟を見て「要するに洛陽の龍門を十分に研究して、その次にこと千仏崖を研究したならば非常に面白いことだらうと思ひます」(K014)と述べている。中国に日本とインドの混合的な様式を持った建築や彫刻があるのを見つけ、西方と日本のつながりを中国で確認できる、という伊東の仮説が、何回もの連載にわたって、日本の建築界に届けられていたことになる。

細部の観察とそれを可能にした旅行記

建築の起源、大きな様式論が語られる一方で、この時代には建築の細部について語る中国関連記事も少なくない。この時代の日本の建築専門家による中国建築の細部についての評価は、肯定否定がはっきりわかる傾向にある。また、具体的に細部とは、屋根架構の木組みのディテール、装飾における色彩、左官や石工事などの仕上げについて語られることが多い。

三橋四郎は「清国建築談」(K002)において、遼東半島の寺院の詳細が印度まで関連付けられると言い、さらに小屋組みについて「按ずるに支那木材は粘力少なく随て最大厭力に耐ゆるの力に乏しかるべしと云へとも何れの小屋組を見るも非常なる大材を用ひ尚ほ不安なるが故にや梁の下には添梁を置き母屋の下には添母屋を置くは千載の古より今日に至るまで計算的思想を有する技術案の出づるあるも旧習墨守の習慣に打勝つ能はざるに依るなるべし」(K001)と、無駄な材が多い屋根を見て、それが古い慣習から抜け出せないでいるものだとして否定的にとらえている。

『建築雑誌』における伊東忠太の旅行記においては、中国建築の細部に関する記述があちこちに見られ、それらには目の前にある実際に見たモノを忠実に書きつけてゆこうとする意思がみなぎっている。精巧な建築に出会うと賞賛して建造年代を推測し、日本建築との類似を見つけると反応が大きくなる一方で、そうでない場合には手厳しい評価を下している。例えば北京郊外の万里の長城の一関門である居庸関について、「門の内部の四天王の彫刻、天井の曼荼羅、外部の拱の彫刻、迦陵羅と龍女の像などの面白さは実に得も云はれない物です」と絶賛しその細部の精巧さをたたえる(K008)一方で、四川の峨眉山の伏虎寺を指して「建築の粗末なことは以ての外です、元来この山中に生ずる樅の一種一式で造り上げたもので、例の荒仕上げの材木を無造作にたたき付け、屋根には最下等の棧瓦を葺き、多くは白木のままで色彩模様を施さない、仏像なども皆近世の駄作で一つとして感服すべきものは無ひ」とその細部の問題を指摘している。さらに話を広げて、「これは独り伏虎寺斗りではない、峨眉山の伽藍蓋く皆然りです、比較的純潔な峨眉山さへこの通りですから、その他の支那の仏寺の有様は思ひやられます、今や支那に仏教なしと云つても少しも過言ではありません」(K015)とまで言っている。

伊東は1902年から1905年までの支那印度土耳其古旅行のあと、再度1907年に上海を起点に今の浙江省江蘇省江西省のあたりを100日ほどかけて視察したときの記録を「南清地方探検略記」(K022)としてまとめている。南清は北清に比べて古建築が残っておらず仏教も盛んでないで「是故に南清地方に古代の遺跡を求むるの難きは已に久しく識者の唱ふる所なり」といいつつ、この南清視察旅行の経験が、伊東にとっては細部を通して中国建築を理解するこ

との重要性を実感させたようである。「北清地方に於ける遺物と南清地方のものとの比較研究は興味ある問題なり、要するに南北共に同一型に属す、其相異なるは主として細部の手法及装飾の方法に在り、南清に於ては細部の手法著しく緻巧なり、屋蓋の手法の如きは殊に然り、然れども雄大操縦の気魄に乏しく、往往輕佻浮華に流るるものあり」といい、北と南清の建築は同一のものだが細部が違う、とみなしている。さらに「余は曾て六朝時代に於て南北兩朝の芸術が全然形式を異にするものなるべきを想ひ、之を一二雑誌上に述べたことがありき、然れども今南朝の遺物を実検するに及んで余は前説の非なることを発見せり、要するに南朝芸術(殊に仏教芸術)は北方より伝へたるものにして南北同一系に属するものなるが如し」として、自分のそれまで述べていた説を撤回して、南清の芸術(それはもちろん伊東にとっては建築も含まれる:筆者注)は北清から派生したものであり、それは細部を見ることによって理解可能だ、と言っているわけである。

のちに国会議事堂の建設を統括することで知られる大熊喜邦は、当時まだ東京大学の学生だった 1905 年の夏の、日露戦争で日本が勝利した直後に、東京大学の命を受けて伊東、佐野利器、大江新太郎らと中国東北地方に視察にでかけている。ここで大熊は主に劇場と住宅を見てまわり、「満洲の劇場」(K007)と「満洲の住宅」(K009-K011)を『建築雑誌』上で発表している。四合院形式の華北地方の住宅を「住宅と云つても別段に面白い事もありませぬ」「長方形の者を一つ又は一つ以上今迄御話致しました様にバラバラに置きましたので大な家になれば棟数を増します計りで至て單純のやり方で日本の様に外形の変化や間取の変化と云ふ事は一つもありません様です」と言い、その平面や外観立面が単調で変化に乏しいことを指摘している一方で、住宅建築の細部については肯定的な評価を残している。「要するに窓の障子、欄間、戸等には意を用いました者と見へまして他の「デテイル」から見ますと面白い様に思われます」と言い、「壁の間内はどうかと申しますと大概紙張であります話に依りますと支那人は壁の紙張りは比較的上手だそうで御座います」と中国人の技術を認める記述も残している。

日光東照宮の修復や明治神宮の造営で知られる大江新太郎は、このとき大熊らと一緒に渡航して建築の細部を見て回り、「満洲における建築装飾に就て」の連載を 7 回分発表している(K017、K020、K024-K028)。大江の中国建築の細部についての評価は総じて高い。例えば奉天福陵隆恩殿石壇上の建物の土台根石について「茲に出しました例は、私の見た蓮弁彫刻の内の、最も優秀な一つでありまして、技巧の非凡なるは申すまでもなく、弁の膨らみ方、其外形、及び弁の表面に刻んである曲線模様の優美なる一点と雖も、非難を打つべき余地のない傑作であります」(K025)と言っている。^{クレイウオーク}瓦細工、色彩については惜しみなき賛辞を送り、^{ウッドウオーク}木工については欄間や柱冠など多くの装飾部分について賞賛しているが、組物である斗拱部分は立派なものがないとされ、その代わり持送り部分は立派であると評価している。

佐野利器もこの満洲視察で建築の細部について一定の評価を与えている。1907 年に発表されている「満洲旅行談」(K016)では、奉天(現瀋陽)の都市の話から始まって、宮殿、御陵、回教寺院、ラマ教寺院、仏塔など建物の類型ごとに実見してきたものを紹介し、建築の細部についても言及している。例えば「一体満洲に於ては彫刻にはいつも感心します、特り木ばかりでない、石の彫刻も非常に力を入れて能く出来て居ります。又もう一つは焼物、此の焼物が巧に思はれる」というような記述がある。

やや時代が下がって関野貞も、1918 年に官命で行った朝鮮経由で満洲、北京、洛陽、済南、上海、杭州の視察旅行記を「西遊雜信」というタイトルで 3 回にわたって連載発表している(K039-K041)。これは石窟、寺院、陵墓や瓦、石碑などの実際のモノに注目した実証的な記述が目立ち、1905 年の伊東・大熊・大江・佐野らが残した、中国の全体を描こうとしている旅行記とは異なり、より細部のモノに着目して事実を積み上げようとしている意図が感じられる⁴⁾。

この時代に、中国建築を見る時に細部に着目するというのは、どういう動機があったのだろうか。伊東忠太の数少ない

4) 田中淡によれば、関野の研究態度は「伊東とは異なって通史概説を目指す方向性も顕著には見られず、むしろ個々の調査に重点が置かれ、それらの累積を経てはじめて全体像の焦点が絞られていった傾向がつよい。」という。前掲(序章注 19)「関野貞の中国建築史学」、p362

直接に薫陶を受けた弟子⁵⁾で戦後の『中国建築の日本建築に及ぼせる影響—特に細部について』⁶⁾の著作がある飯田須賀斯は、その著書においてこう述べている、「要するに我国人は中国建築の影響を受容するに完全移入を行つた事もあるが、自国文化の高まるにつれて取捨選択を行つて来た。而も其の間一貫して影響面に登場したのは細部である」。明治期の日本の建築界にとって、自国のアイデンティティを確立しながらも中国の理解を深めようとしたこの明治から大正の時代においては、中国との距離をはかりつつ過去を部分的に共有することのできる「建築の細部」という着眼点は便利なものであったのに違いない。「主要」な部分と「細部」を切り分けて、中国建築の「細部」の日本への影響を論じていけば、日本建築の「主要」な部分は脅かされず独自性は保つことができる。中国建築の「細部」の問題にこの時代の日本建築界がこだわったのは、そうした背景もあったのではないかと考えられる。また実際、建築の細部は観察が簡便で観察者の視点から認識しやすく、限られた人員と時間だけでしか中国に訪問することが出来なかった当時の日本建築界にとって、そこに目が行くようになったのはある意味では自然なことであるとも言えよう。建物全体の把握をしなくても、実験してなにかデータをとらなくても、古文書を読んで過去の歴史を解読しなくても、持送りの形が奈良の寺院と似ているということは、日本の建築に関する知識があれば可能である。写真 1 枚撮ることすら不便だった時代に建築の細部ならスケッチで記録を取ることができる。旅行者が建築を部分的・瞬間的に見ただけでもある程度の思考が可能な場所というのが建築の細部であったのではないかとと思われる⁷⁾。

過去を知るための建築と文字の接近

伊東は 1906 年の中国旅行の最初の連載記事「支那印度土耳其旅行談(第一回の上)」(K006)で、支那建築研究には、その地理と歴史を事前によく調べる必要があり、中でも各府県に府志や県志というものがあるからこれをよく研究しないと行けない、と言っている。また、石幢と石碑が重要と言い、旅行記でも建築のみならず石碑の類に多くの記述を割き、多くの石碑に彫られた文字の前で立ち止まってそれを書きうつし文字が掘られた年代を確認している。伊東の石碑の見方は、「その内容から年号を判読して時代を特定する」と、「文字の形式を見てその装飾的な傾向を見る」のものである。例えば洛陽の白馬寺での記述にこのようなものがある。「寺内に珍しい古牌が一つありました、これは光緒二十六年にこの所から東南に当る洛水の内から掘り出したものなそうで、武定三年歳在乙丑□□丁丑朔十五日建(A.D.545 欽明天皇六年)と云ふ日附がある、上には三頭の龍が右に三体左に一体、丁度榮陽県衛門の漢碑と同式であるが龍の配置が之に比べると左右反対である…龍の顔は日本の奈良時代の鐘の龍頭の龍の顔と寸分違はない性質のものです」(K013)。また古都西安では多くの石碑が集められた碑林に興奮しここを「碑の博物館」と言った上で「西安附近の古跡探検は最も面白いことで、少くとも六カ月位の日子を費し、歴史家、仏教家、地質学者などと一隊を組織して、大袈裟にやらなければ駄目であります」といい、短期間しか各都市に滞在できなかったことを嘆いている。建築における文字に関しては「支那内地古建築及古碑一覧表(自北京至成都)」(K004)という記事を単独で書いているほどである。

のちに支那通として知られ日本大学の教授を務めた後藤朝太郎は、伊東や塚本靖、関野貞らの助言を受けて東京大学の大学院生だった 1913 年に「文字上より見たる支那古代建築(一) — (五)」(K033—K037)を『建築雑誌』に連載している。後藤によれば「支那古代建築の研究には先秦(西紀前二二一以前)の文字を研究するが便法であると云ふ事を演べるが此の論文の主意」とし、「先秦の文字による時は、周代はおろか支那元始的の建物の形式、手法、種類を

5) 飯田須賀斯と伊東忠太の師弟関係については以下を参照。鈴木博之編著『伊東忠太を知っていますか』王国社、2003 年、p57

6) 飯田須賀斯『中国建築の日本建築に及ぼせる影響—特に細部について—』相模書房、1953 年、p347-348

7) なお、数は少ないが、この時期に旅行記でない形式で中国の建築の細部について触れたものに、当時清国に在住していた平野勇造による「支那の家具」(K005)がある。これは清の家具と住宅の詳細について図説した記事で、住宅における家具のしつらえについてわかる報告である。記事によれば横河民輔を通じて学会に寄送されたとあるが、I 期に中国現地に長期滞在している人物による記事はこの 1 編のみである。平野は上海総領事館の設計(1909—1912 竣工)で知られる日本人建築家で、彼に関しては以下の『建築雑誌』の記事でわずかに言及がある。田中重光「上海(中国)日本最古の鉄筋コンクリート造小学校」2002 年 11 月号 (K191)

或る程度まで推すことが出来る」としている。本論ではいくつかの類型にわけて文字の形と建築の関係を検証しているが、この論の背景を自ら説明し、「支那上代建築を単に字形のみからきめるのは勿論危険である。けれども、ただの文献のみでは到底その様式はわからず、遺物、石窟、発掘物等も未だ漢以前の建築資料となりにくいと云ふ場合の今日にては、此の文字研究の側からすることもたしかにその一の方法である」と述べている。モノが残っていないくらい古い時代を考える上で文字が重要であるという考えは考古学の基本的な思想であるが、それがこの時代には建築研究にきわめて接近した形で考えられていたということがわかる。

中国人への過剰な見下し

この時期の中国関連記事は、実際に中国に渡航した人の旅行体験記が多く見られるが、それらの記述には、建築に関する記述以外に、広く中国社会一般に目を向けたものもあり、そこには中国人への見下した記述も少なくない。

例えば伊東忠太は、1907年の記事で、陝西省興平で役人の仕事ぶりに付いて以下のように指摘している。「知県は何時転任を命ぜられるかも知れないから、決して衛門の修繕をしない、つまり彼は自分の私有物でないものは何でも構はないと云ふ方針です…民を愛撫するの、政を治めるのなど云ふ考は微塵もない、官吏は民を虐げ、民は官を恨んで居る、これで国家の安寧と幸福がどうして保てるでしやうか」(K014)。女性についても、「支那の婦人は一般に無知無識であるのはなほ善いのですが、無芸無能のものが多く、更に悪いことは一般に貞操の思想に乏しい、男は一般にその妻を見ること玩弄具の如くです、斯の如くにして争でか兒童を教育し得べき、実に憫むべく驚くべき人類です」(K018)。さらには市街地で死刑執行された遺体が放置されているのを見て「元来支那人は頗る残忍刻薄な性質を有て居り、且つ死と云ふ事に対して極めて冷淡です、些細なことで人を殺し人に殺される、これは支那人が太古から好んで獣肉を食ふ慣習から来たものかと思はれる」(K018)、とも言っている。

大江新太郎は、建築の詳細に関する記述がふくらんで、その記述の中で中国人の人格をこき下ろすような発言までしている。「支那の沿革が御承知の如く昔から弱肉強食でア一いふ度々社稷のかはる国柄でありますから…人間の頭脳に永久とか安心とかいふ觀念が誠に乏しいやうに思はれます…即ち丸で修繕といふ事が出来て居ないので」(K017)などがそれである。

当時中国を訪れることのできた限定された日本人が、中国人と現地で接触する機会を得、その人物・挙動や考え方を知るようになると、中国人に否定的な印象をもつケースも見られるようになる。ただしこれらの場合において、否定的な印象を持った日本人の多くは、中国人の文化がいかなるものかを十分に知っていたわけではなく、中国人を日本の従来の価値基準に照らして評価した結果、このような記述を残していると理解することができよう。伊東も大江も中国建築については是々非々の態度で実見しているが、現地の社会風俗、中国人については日本の価値観から見た厳しい印象批判の記述を多く残しており、それらは建築メディアを通して広く日本の読者に伝えられることになった。

西洋人より優位に立つためのものさし

明治維新以後日本が大陸への進出を本格化する前までのI期は、日本が国として近代化を推進して行くなかで、西欧社会に追いつくことがその主要な課題だったはずであり、そこではアジアや中国は、距離をおいてむしろ見下す対象に代わっていった時でもあった。そんな日本の自我の確立とも呼べる時期に、日本の建築界は中国を見下すだけでなく、別の見方を新しく発見してもいる。それは「中国を知っているのは西欧より隣国の我々である」という問題設定であり、国際情勢の中で大陸進出を正当化しなくてはならない日本にとって、これは重要な役割を果たすようになってゆく。例えばよく知られる伊東忠太の「凡そ世界の建築術の中に就て、支那建築は其最も珍奇なるものの一なるべし」(K023)という発言は以下のように続く。「欧州人の嘗て夢想し能はざる奇異なる形式は支那建築に於て縦横に経営せ

られたり、欧州人の認めて不合理不自然なりとせる手法は支那建築に於て自在に運用せられたり、由来支那及支那人なる問題は猶ほ世界に於ける未知数なるが如く、支那建築も亦た建築界に於ける未だ解決せられざる好問題なるが如し」。すなわち中国を世界レベルでの未知の問題と位置付け、それは西欧社会もよく知らない、としているものであり、そのすぐ後ろには、この問題を深く理解し解決できるのは我々日本であるという設定がほとんど透けて見えている。

例えばこうした問題設定は、中国関連の講演会のあとの建築学会の指導者たちの講演者へのコメントにはっきり現れている。妻木頼黄は、1906年の「支那、印度、土耳其旅行談(第二回の下)」(K013)において、伊東忠太の旅行に関する講演会のあとの質疑応答で、当時の建築学会長として司会者を務めている。そこで彼は伊東の講演をこのように総括している、「今日御演説になりました所の支那の事に付きましては、殊に欧羅巴の書物にはマダ爪の垢ほどにも足りない位の説明に過ぎぬのであります、又欧羅巴人は幾ら調べませうと思ひましても言葉が違ひ又習慣其の他も違つて居ります、之に反しまして日本に於ける伊東君は其の道に多年御志をかけられて東洋の建築のことを御研究になり又日本で分る所のことは書物の上で日本で御研究になつて十分に其の御研究を遂げた上で実地に付て其の地方を漫遊なされて完全なる所の御報告を今晚は特に細かに御説明をくださいましたことは実に我々建築者につけて益することは多大である」。もちろん当時でも日本以外の欧米各国で中国建築を研究する研究者は存在した。事実伊東の「支那建築史」はファーガッソンやフレッチャーを取り上げ、それらの問題点を指摘しつつも「欧米人は古来余り多く支那を知らない代りに、思ひ切つて斬新な、否寧ろ突飛な独創的考察を下し得る境遇に在る」と指摘している⁸⁾。いずれにせよ妻木のこの発言は、明治後半のこの時代には、日本の建築界の知識層においては、欧米の中国認識は浅薄であり、日本人のほうが中国を理解しえるのだという感覚があったということを示している。

塚本靖は、1907年の佐野利器の記事「満洲旅行談」(K016)で講演会後質疑の司会を務めており、やはりこう述べている、「今日の講演の演題は東洋建築の研究の上に少なからぬ必要なことでございまして伊東さん其の外の諸君の研究せられました、其の研究と相俟つて東洋建築と日本建築との脈絡を示すに極めて重要なことえあると思ひます」。と言っている。西洋に対して東洋というアイデンティティを打ち立てるのに中国研究が前面に出されようとしている。曾禰達蔵も、1909年の大江新太郎の記事「満洲に於ける建築装飾に就て(七)」(K028)で会長代理として司会をつとめており、そこで1905年の伊東・佐野・大熊・大江の満洲視察報告について総括的な発言を残している、「欧羅巴人も、支那内地の建築を、調べやうとして居るけれども、国情も違ひ、言語も違つて、容易に調べる事が出来ない、又日本人も、永い間に、調がでなかつたのである、然るに、戦勝の残滓で、之を調らべることが出来、又西洋人にも之を知らせることが出来るといふのは、実に、我日本国民は勿論、建築学会員一同の、名誉とする所であります」。

こうした発言はみな、日本こそが中国を一番理解しているのだということを中国以外の国に示そうとする話法であり、中国の建築自体が遅れているとか進んでいるとか、中国が日本をどう思っているとか日本がどう思っているかというようなことは不問に伏されている。日本と中国の関係を、2国間だけでなく、それ以外の世界を踏まえた上でとらえようとしている考えがすでにこの時代の日本にはあったということがわかる。

小括:つながりを見つけ、それを利用しようとする中国関連記事

この時期の中国関連記事は、数の上でも限定的で属性の上でも似通った専門家群が中国大陸に渡航し、そこで得た印象を、長文の旅行記のような形で建築メディアに掲載している情報伝達の形が目立つ。

記事の内容としては、西方と日本のつながりを中国に見ようとするもの、過去を知るために建築と文字を比較するもの、中国人を過剰に見下そうとするもの、などの内容群を見ることができたが、これらはどれも、日本の側の価値観で中国を

8)伊東忠太「支那建築史」『東洋建築の研究・上 伊東忠太著作集 第3巻』原書房、1982年(初出は『東洋史講座』昭和4年11月号)、p10-14

理解する枠組みを設定し、それに従って中国を見て論じているものであると言える。すなわち、日本の建築は遠くインドやギリシャの影響が見られるからその中間にある中国にはその痕跡が見られるはずだ、とか、中国に古い建築は残っていないから古墳や石碑に彫られた漢字でその古さを考えるしかない、とか、中国人の生活習慣は日本人とは全く違う、などといった日本の側の価値観に立った記事が多いということである。これらは、認識対象である中国にそのまま入って行ってその問題点を日本の側に送り返すという状態にまでは至っていないが、交流チャンネルが限られていた当時の両国関係を考えると無理もないことではある。

また、中国情報を、西洋人より優位に立つためのものさしとして利用するような内容もこの時期の記事群から見てとれた。日本は欧米諸国よりも中国に地理的に近く、歴史的にも長い関係があり、より深くその対象を理解出来るはずだ、という論理である。これは日本と中国の関係を二国間だけでなく、国際関係の中でとらえようとする近代的な視点の萌芽としてとらえることができる一方、だから大陸を運営管理するのは日本の方がふさわしいという、支配的論理とセットのものであったのも事実である。

総じて I 期の中国関連記事には、江戸時代までは遠い認識対象であった中国がある程度自分たちで実際に認識が可能になり、日本の建築界がこれをもっとよく知り、自分たちとの関連を見つけようとしている志向が色濃く表出している。そして関連を見つけると今度は日本の側の価値観からそれを眺め、そこでわかった事実を自分たちが優位に立つようにうまく利用しようとする論調で書かれている。

1.1.b. 『建築雑誌』Ⅱ期(1920-1958年)の中国関連記事

大陸にいる日本人が加わった、論説・口述筆記録・視覚情報による情報伝達手段

Ⅱ期の始まりは、1920年の青島郵便局の建築作品紹介記事など日本人が中国で実現した建築をグラビア紹介する記事の集中(K042-K044)であり、現地化する日本人社会に着目するようになる転換点がそこに見られたことはすでに指摘した。その次の分期点は、政治的には第二次世界大戦の終結が大きなイベントでありⅡ期の終わりとしてふさわしいと予測されるが、『建築雑誌』の中国関連記事に限ればそうはならない。Ⅱ期とⅢ期の境界は戦後しばらくしてから、1958年に現れる。戦後数年は記事の分布は断絶するが、1954年、57年に引揚者による中国の戦後状況の報告記事(K078-K083)が掲載されている。これらの記事は中国に渡った日本人や日本人の中国における研究成果を掲載したものであり、戦前戦中のものと同じ文脈にあって連続しているものである。一方その翌年58年には平井聖による劉敦の『中国住宅概説』の書評(K084)が現れるが、これは日本の建築界が同時代の中国の学術研究成果を日本に紹介する初めての記事であり、ここに日本の建築界が中国人による中国研究に着目をはじめた転換がはっきりと認められる。

青島郵便局の記事から平井の記事の前までをⅡ期とすると、そこに含まれる中国関連記事は1920年から58年までの計42編となり、そのⅡ期の記事一覧(表1.1.b.-1)、記事本数の経年変化(図1.1.b.-1)、執筆者の属性(図1.1.b.-2)、記事形式の属性(図1.1.b.-3)を示す。これらのデータから、この期間の記事数の分布は、記事数ゼロの時期も長く含みムラがあることがわかる。1920年から23年まで、31年から43年まで、54年から57年までの3回にわかれて記事がある程度固まって分布している。

1920年から23年までの記事の集中は、大連、青島などで日本人が建設した建物を紹介する記事である。20年代初期の日本は、第一次大戦後の1919年のパリ講和会議で日本は列強に山東半島における利権を認めさせ、1920年には国際連盟の設立とともに常任理事国となるなど、着々と国際舞台で地場を築きつつあり、この集中期の建物紹介記事に南満洲鉄道株式会社の施設が含まれているのはそうした時代状況とつながっている。30年代の記事集中は日本が31年の満洲事変以降中国への侵略を開始した動きとほぼ平行しており、記事にも当該地区の建築に関する内容が増えている。戦後の54年からの集中は、記事の空白期後、中国をなつかしむ論調の記事によるものである。

この時期の中国関連記事の執筆者の所属先はⅠ期に比べると多様である。「日本の教育機関」(33%)のみならず、「日本の官公庁」(12%)、「日本の民間企業」(12%)のほか、「第三国の機関」(31%)所属まで分布している。「満洲」が第三国として出現することで、そこに日本の民間企業から派遣された技術者や、満洲国の機関所属(=第三国の機関所属として本論文は分類している、執筆者は実際のところ全員日本人である)の役人が執筆者層を形成している。「満洲国」は中国東北部に長期滞在する日本人という執筆者のカテゴリを生み、それまでは日本から中国に出かけてきた日本人による旅行記的中国情報しかなかった『建築雑誌』の中国関連記事を大きく変化させた。なお「中国の機関」所属(2%)の執筆者は1記事にのみ見られるが、これは戦後の1956年に、日本建築学会の70周年を記念して中国建築学会の理事が送ってきた祝電を掲載した記事である。また、執筆者の国籍はほとんどが「日本」である。

記事形式は、Ⅰ期に多かった「口述筆記録」は割合が減少し(29%)、ある程度時間をかけて執筆されたと思われる「論説」が増え(48%)、その種類がばらけている。これは当時の編集者の回想などから⁹⁾、『建築雑誌』の記事が、集会の講演をそのまま文字起こしして埋草記事的に使っていただけの時期から、徐々に編集機能が機能しだして原稿の依頼と回収というサイクルが形成され始めたこと原因と推測される。また、この時期に「作品紹介」記事が9%の割合を占め

9) 例えば塚本靖は1936年に、自身が建築雑誌の編集委員を務めていた1897年ころを振り返って「25頁の編輯にさへ随分骨が折れるので、それは一向寄稿がないから、自分が一切書かなければならぬことがあつた…それが今日のやうに会員の寄稿が載せ切れなくて、臨時増刊を出すとか、論文だけを別に刊行しやうなどと云ふことになったことは、此の一つだけを見ても実に隔世の感があり」と述懐している。塚本靖「建築学会創立50年の回顧」『建築雑誌』日本建築学会、1936年10月増刊号、p14。またⅡ期には1935年に大きな会誌改革があり、論文集を別に刊行することにして『建築雑誌』は理論だけでなく現場を重視した新企画(統計資料・設計資料シートの掲載、写真ページの取り込み、文献抄録の開始)を盛り込んで再生を果たしていることも、Ⅰ期との違いをもたらした原因であると思われる。青井哲人「第11回：昭和10年の会誌改革」『建築雑誌』日本建築学会 2002年11月号、p112-113

るのは、『建築雑誌』の他の時期にはない高比率である¹⁰⁾。それらは日本人による中国で実現した建築に関するものを写真や図面などの視覚情報で紹介したものである。また、記事の記述対象は「中国」よりも、「第三国」である満洲国についての記事が一番多くなっている。

記事番号	掲載年月	号数	著者	記事タイトル	中国関連記事の形式											
					執筆者の属性				記事の属性							
					国籍	所属先	記述対象	種類	中国	第三国	日本	口述筆記	文庫抄録	コラム	作品紹介	
K042	192001	403	記載なし	青島郵便局建築概要												
K043	192001	403	記載なし	青島病院支那人診療分院建築概要												
K044	192101	415	記載なし	青島州鐵道會社大塚及奉天所在地調査報告書												
K045	192206	431	記載なし	満洲工人會設立趣意書												
K046	192301	439	記載なし	南滿洲鐵道株式會社立、南滿洲工業專門學校開校(南滿洲鐵道株式會社立)												
K047	193104	544	村田治郎	東洋建築系研究論(其一)												
K048	193207	559	久留弘文	滿洲國の建築												
K049	193302	567	岸田日出刀	滿洲所見												
K050	193302	567	田邊平宇	拉爾薩演習見學の所感並に滿洲建築界の近況												
K051	193307	573	丸島義典	滿洲の産業資源												
K052	193307	573	松山義典	最近の支那事情												
K053	193309	575	佐野利壽	滿洲の都市建設												
K054	193407	587	岡本義平	滿洲の風景												
K055	193504	598	城戸久	2) 江戸時代の學校建築に就て												
K056	193609	616	古宇田實	最近中華民族及滿洲國建築の所感												
K057	193706	627	松浦勲	滿洲建築の調査に就て												
K058	193709	630	松浦勲	滿洲建築の防衛策正誤報告												
K059	193710	631	松浦勲	滿洲に於ける建築労働者に就いて												
K060	193804	637	曾根・山下謙吉(監)	支那に於ける防空理論の探求												
K061	193806	639	松浦勲	滿洲建築の防衛策報告(第2報)												
K062	193807	640	中條一	支那問題に就て												
K063	193903	648	渡田睦	滿洲國に於ける建築と研究(材料・構造・衛生方面)												
K064	193904	649	笠原龍郎	滿洲建築界の事情												
K065	193904	649	森岡英治	滿洲國政府関係建築に就て												
K066	193905	650	笠井修	煙草工場建築の再検討												
K067	193908	653	藤田元春	民家から見た日本と支那												
K068	194006	663	佐藤武夫	現代支那の建築文化相												
K069	194007	664	二條建樹・宮	滿洲に於けるコンクリートに関する研究：1. 南京に於けるコンクリートに関する研究												
K070	194007	664	大川益司・伊藤	滿洲に於けるコンクリートに関する研究：2. 滿洲各地の木材調査												
K071	194109	678	笠原龍郎	滿洲國規格型住宅の制定に就て												
K072	194202	683	佐藤武夫	支那の穴居												
K073	194210	691	佐藤武夫	支那大陸に於ける外國建築とその政治表現												
K074	194210	691	小池新二	中國旅行日記												
K075	194306	699	高橋一秀	滿洲開拓の建築												
K076	194309	702	笠原龍郎	滿洲國住宅政策経過概要												
K077	194309	702	萩原信一	滿洲に於ける住宅の最近の傾向について												
K078	195405	810	岡大祐	中央建築事情の概況												
K079	195405	810	杉田和雄	中央の建設に就いて												
K080	195604	833	岡全壽	祝電(内外友好団体より寄せられた祝辞)												
K081	195704	845	奥田勇	小野さんの満洲時代をしのぶ(故小野薫博士の追憶)												
K082	195704	845	森重	満洲国と小野博士(故小野薫博士の追憶)												
K083	195704	845	前田敏男	小野先生の満洲時代の思い出(故小野薫博士の追憶)												

表 1.1.b.-1: 『建築雑誌』II期の中国関連記事一覧 全 42 編

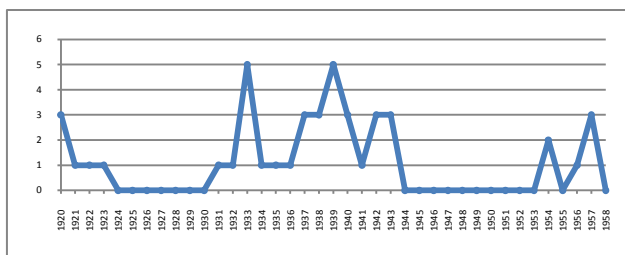


図 1.1.b.-1: 記事数の経年変化

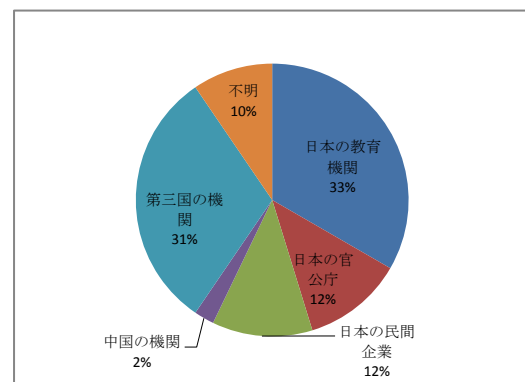


図 1.1.b.-2: 執筆者の属性

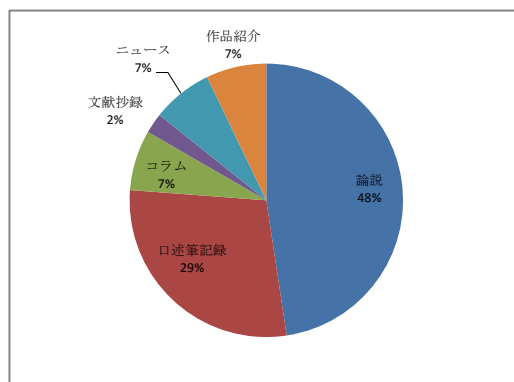


図 1.1.b.-3: 記事形式の属性

10) 『建築雑誌』にビジュアルな要素が必要であるということは創刊準備のころから言われていたようで、1930年代には、欧米の建築雑誌に載った建築写真を集めて『グラフィック』誌をつくらうというアイデアで、1932年から36年まで年刊で『建築グラフィック』という臨時増刊号が出版されている。終戦間際までの10年間は『建築雑誌』はもっとも写真の多い時期を迎え、その使用に消極的になり文字ばかりの雑誌になったのはどうやら戦後のことであるという。以下を参照。青井哲人「第9回：グラフィック」『建築雑誌』日本建築学会 2002年9月号、p148-149

視点の変換—現実的なデータの充実、住居への関心の移動、類似より相違をいうための細部

Ⅱ期の最初には、日本人が中国で作った建物の紹介ページが集中して現れる。例えば1920年1月号の「巻末附図説明」の欄は、『建築雑誌』の中国関連記事には従来にない写真図版を取り込んだグラビアページで、ここに中国大陸で日本人がかかわった建築が紹介されているのを見ることができる。設計者や工事請負者の名前など写真に付帯する建築物のデータも詳細にわたっており、「青島郵便局」(K042)や「青島病院支那人治療分院」(K043)や「南満洲鉄道会社大連及奉天所在地独身宿舎」(K044)が紹介されている。満鉄は日露戦争後の1906年に設立され鉄道事業をはじめとして広範な事業を中国大陸で展開しており、その存在感はすでに大きかったものと思われる。「海を渡った建築家」として知られる小野木孝治¹¹⁾の設計による1921年のその「独身宿舎」の紹介記事は、写真のみならず、詳細な平面図立面図や建築概観写真などが付され、建物データとして完備されたものになっている。そもそも『建築雑誌』の中国関連記事における中国建築の扱われ方が、Ⅰ期は寺院や陵墓などモニュメンタルな建物を対象にスケッチなど主観的な視覚情報を付した記事が多かったのに対し、Ⅱ期になると住居系や公共建築が記述の対象になり、詳細な図面や面積表、設備に関する記述などの現実的な建築データを付した記事へと視点が変換していることがここからわかる。

1931年の村田治郎「東洋建築系統史論(其一)」(K047)は、「Siberia、蒙古、中央亜細亜(東Turkistanより南露にかけて)、西藏、西亜細亜、印度等に亘る広い地域に見得る建築の系統的考察」であり「それが支那系、印度系建築に如何なる影響を及ぼしたか、日本建築は如何なる立場にあるかを論じ、同時に古代文化の伝播経路に触れた」論である。「其一」とあるので全体像がこの記事のみでは示されていない可能性もあるが、この論の目次によると、具体的には「ゲル・テント」「車上の住家」「円形型の移動住家」の3種の住居形式について、アジア各地を対象とし、広範囲な住居建築の関係論を描き出そうとする論考であることがわかる。Ⅰ期に見られた伊東や関野のアジア・中国建築研究が寺院仏塔や陵墓などにおける日本とアジア・中国建築との共通点をさぐろうとしていたのに対し、村田のこの論はほぼ住宅を対象とし、しかも各地の異なる形式の住居をとりあげてそれらの影響関係を考察しようとするものであり、モニュメント建築から住居の側に視点が大きく変換しているという事実には注意を要する。村田は京都帝国大学の建築学科を卒業後、1924年に満鉄に入社してから南満洲工業専門学校の教授となり、37年には京大に戻って建築学科の教育に携わるが、住居への興味を持ったのは自身の満洲での居住経験が大きいと説明している。「大正十三年、始めて満洲に住むことになって以来、筆者が注目したのは朝鮮及び支那の民家であつた。やがて満洲に於ける支那民家(特に土平房)及び蒙古包の歴史と其の系統に関する探究を試みている中に、是は単に満洲の如き一地方に限る問題でなく、東洋全般に亘る大潮流から大観すべき性質のものであることを知るに至つたのである」という。伊東や関野が旅行者として中国を訪れて研究対象としていたのに対し、実際に中国大陸に定住しその対象を肉体化していた村田にとって、住宅を研究対象にしたのはある意味自然なことだったのかもしれない¹²⁾。

歴史的視点から中国を位置づける興味深い記事もある。名古屋高等工業学校助教授の城戸久は、1935年に「江戸時代の学校建築に就て」(K055)を記し、江戸時代の学校建築の発展について、「建築史上の儒教建築は湯島大聖堂を骨子として当時沈滞せる建築界に異常である支那様式を採り入れたものとして重視されては居るが、広く全般より観るときその様式的特異性も今一步検討する必要があるやうに思ふ」という前提のもとで自身の学校建築に関する論考をここで展開している。城戸は1930年に中国東北地方に出張しており、「直接材料蒐集の結果益々その信念を強めるこ

11)小野木孝治については以下を参照。西澤泰彦『海を渡った建築家-20世紀前半の中国東北地方における建築活動』彰国社、1996年、p172-176

12)村田は戦後は結局中国に渡航する機会を持たないまま逝去する。戦後の村田の中国研究について触れたものに以下がある。村田治郎『村田治郎著作集三 中国建築史叢考(仏寺・仏塔篇)』中央公論美術出版、1988年。この巻の編集は田中淡によるものであり、その「解説」において田中は、中国への代表団方式による古建築参観旅行や留学が実現しはじめたころの晩年の村田が、健康の問題で中国を訪問できないことを諦めていたときの様子を書き記している。

とを得た」とし、日本各地の藩学校と郷学校について例をあげながら検証し、結論を以下のように述べる。すなわち湯島聖堂の建築について「それは將軍綱吉の華麗を好んだ結果に外ならない」とし「綱吉自身では学校よりも寧ろ孔子を祀ることを主として考へて居つた證在で湯島聖堂の建築が細部に於て華麗な異色を帯びたものであつたから各地藩学校の聖堂に影響するに到つた」ものであると言う。さらに「寛政 12 年の再興は(中略)明人朱舜水の作つた聖堂の模型を参考とし平面および形式手法も支那文廟の制を與う限り踏襲しやうとした」ものではあるが「何れも我国工匠の手になれるもので未だ支那様式の模倣を完全に行つたものでない」とし、「細部にのみ支那式手法を用ひたに過ぎなかつたことが首肯出来る」とする。すなわちここで城戸は、湯島聖堂の異色なまでの華麗さは中国建築の影響ではなく將軍綱吉の趣味によるものだとし、しかもその施工は日本の大工が行つたのだから、中国の影響は細部における限定的なものにすぎない、と言っている。Ⅰ期までの日本建築界の中国建築への細部観察が、日本と中国の建築の比較をし、しばしばその類似を探し、日本建築の源流の痕跡をそこに見出そうとしていたのに対し、このⅡ期でははっきりと、日本と中国の相違を強調し、中国の影響は主要な部分には見られないことを言うために細部に着目しているということがわかる。この記事は、Ⅱ期にⅠ期よりも明確に、日本の独自性を強調するための中国認識というものが芽生えてきたことを示している。

満洲国に関する記事の登場と住宅重視の姿勢

1931 年 9 月に満洲事変が勃発し、関東軍が 5 カ月で満洲全土を占領したのと並行するかのようになり、『建築雑誌』にも「満洲」をタイトルに冠した記事が急激に増える。久留弘文は 1932 年に「満洲国の建築」(K048)という記事を書き、これ以降終戦まで、『建築雑誌』において「満洲」という語は、中国東北部の一地方を指す言葉から、日本による傀儡国家を指す語として使われるようになった。久留は、辰野金吾の弟子で朝鮮半島でフリーアーキテクトとして成功した中村與資平¹³⁾の事務所に雇われ、その大連の工事に勤務していた人物である。中村は 1922 年には日本に事務所を移転するが、久留はその後も中国に残ったようである。この記事で久留は、満洲の気候条件から説き起こして耐寒建築の必要性に触れ、自身の知る中国東北部での計画、設備、施工請負のあり方まで広範な職能的知識を披歴している。これ以降『建築雑誌』の中国関連記事は、それまでよく見られた寺院の様式や日本の伝統的建築との比較などの内容は一掃され、いかにこの中国の地で住宅建築を作ればいいのか、そのためにどういう施工が必要か、などといった、住宅建設を話題の中心に据えた、極めてプラグマティックな内容にシフトしている。

東京大学教授の岸田日出刀は 1932 年夏に 1 カ月満洲各地を視察し「満洲所見」(K049)という講演録を残している。冒頭で「近頃満洲を視察するといふことは、一つの流行の感がありますが、(中略)今日の日本としましては、或る点で欧米を見ますよりは、むしろ満洲を見る方が当面の重要事だとさへ思ひます」としてその重要度の認識を延べ、一方で「新国家関係の建築と言へば、まず新京(長春)に於ける所官衛の建築が挙げられますが、七月当時には未だ実現の運びには立ち至ってはいませんでした」といい、こうした事情もあって様式論や大局的な話しにはならず、耐寒建築であることが満洲では重要であるという自分が見聞してきた話を中心に話は展開し、現地で入手してきたという「ハルビン建築材料価格調書」を掲載して、話題の中心を寒冷地における住宅建設に絞っている。

住宅に話題を特化した恐らく一番顕著な記事は、1939 年の第三高等学校教授藤田元春による「民家から見た日本と支那」(K067)である。これは日本からみた中国の住宅を概観した記事で、詩経を参照して中国の古代住居が穴居だったことから始めて歴史的事実にも目配りした上で、まとめとして、「日本と云ふ国は其の文化のある一面に於ては支那に劣つたかも知れませぬ。或は支那文化の模倣であつたかも知れませぬが、我等の祖先は金甌無缺の国体をその肇国の始に確立し、同時に支那の文化を吸収するに吝かならざる達識を示したのであります」とし、「支那人と我々を一緒

13) 中村與資平については以下を参照。前掲(注 11)『海を渡った建築家—20 世紀前半の中国東北地方における建築活動』、p165-170

にしてくれてはいかぬと言はれるかも知れませぬが、民家から見た所では同一の文化過程には入るのであります。安南も印度もと言ひたいが、先ず海南島からその近傍に於てすべての米の穫れる所は皆日本的だと云ふことであると思ふのであります。即ち米の穫れる国なら皆日本でなければならぬと思ふのであります」と結論付けている。かなりの拡大解釈を内容に含んだ記事であるが、この稿の要諦は、「日本は歴史上ずっと中国に学んできたが、両国は住宅を見ればその源は一緒であり、対等だ」というものである。これは寺院や陵墓をみて日中を比較していたⅠ期の中国認識と比べて、Ⅱ期のそれが、認識対象を住宅に重点を移し、中国への劣等感を解消し、認識の方法も非常に実用的なものに変わったことを示している。

満洲に関する技術報告

技術的な報告もⅠ期に比べて増えており、特に久留の先述の記事(K048)以降その傾向は強くなる。東京工業大学の教員で都市の不燃化に努めた防災研究者の田辺平学は、「旅順爆撃演習見学の所感並に満洲建築界の近況」(K050)で、1932年9月に行われた旅順での「特殊爆撃演習」の見学報告の講演録を残している。この記事の前半は田辺が旅順で見た浜松の飛行第七連隊による爆撃実験の報告で、後半はそれにあわせて彼が中国東北部各地を見て回った印象記である。前半の爆撃実験では、「耐弾構造」の建築を作ることの難しさを述べつつも地下室が爆撃回避には有効であることを言い、日露戦争時代にロシアの強固な基地として知られた東鶏冠山保塁を視察してロシア軍が30年前にすでにアスファルト防水を天井に使っていることを報告するなど、技術者としてのモノに即した記述が目立つ。後半は活況を呈しつつある満洲の建築界について、満鉄関係、軍部関係、新国家の国都建設の3つにわけてそれぞれ紹介している。最後には現在満洲には「至る所で砂金でも手に入るのではないかと云ふやうな考で、満洲へ押しかけて行つて居る人が沢山ある」状況のなかで、「満洲へ当てもなしに今直ぐ行たのでは何にもなりません」と説き、地元の人に将来どういう人物が必要とされるか聞いて「第一の条件は健康」「第二は思想堅固なもの」「第三は係累が少い人」「第四は学校の成績良好の人」「又将来満洲に必要なのは請負業界の人」とまとめている。すでにこのときに日本人が中国大陸に移住することが現実的になっており、記事もそうした事実をみすえた内容になってきていることがわかる。

大林組新京出張所の松浦助は1937年から38年にかけて「満洲建築の凍害に就て」(K057)「満洲建築の防寒養生試験報告・第2報」(K058、K061)「満洲に於ける建築労働者に就いて」(K059)と立て続けに満洲から本土に技術報告を発表しており、新京で国都建設に従事しながら得られたデータを、満洲、内地の会員の間で共有を図ろうとしている。特に執筆者の解釈が大きく出ているのは建築労働者についての記事で、中国の苦力(クーリー)と呼ばれる工事労働者について、その生活習慣から平均賃金までを示して、彼らの特性をよく理解してうまく指導すれば「恐らく愛すべき而して使ひよい労働者であると思ふ」と前向きに結論付けている。

満洲国司法部の室井修は1939年に「煉瓦造建築の再検討」(K066)を記し、日本はもっと科学的に煉瓦造をとらえるべきだと言っている、これは耐震性がないために関東大震災以降日本ではあまり研究されてこなかった構法だが、満洲では「著しく高層ならざる限り、壁体煉瓦造のものは極めて多く、又骨組みを鉄筋コンクリート造とする大建築でも壁は帳壁にして煉瓦を用ひて居るものは可成多い」として、鉄筋節約と防寒のために、日本でもっと煉瓦造について研究をすべきと論をまとめている。

満鉄奉天鉄路総局工務処工務課建築係勤務の間瀬真平は1935年に「満洲の気象」(K054)を発表している。田辺平学の内容解説がついており、当該記事は間瀬の1934年の東京工業大学の卒業論文『気象上より観たる満洲建築の特異性』の中から特に「満洲の気象」に関する数量的事項のみを抜粋したものであり、満洲各地の天候、気温、地下温度、湿度、降水量、風および地震に関する各種の記録を、内地、特に東京における数値と比較しているものである。これらのデータは間瀬が1933年夏に満洲産業建設学徒研究団の一員として現地を訪れて収集したものであるという。

また1940年には「資料」というコーナーで、三條康昭・原本裕夫らの「満洲に於けるコンクリートに関する研究—1. 新京に於ける碎石コンクリート」(K069)、大川益司・井澤龍暢らの「2. 満洲各地の骨材調査」(K070)が掲載されている。前者の研究は1937年に行われたもので、「内地では建築工事に通常用ひない」にもかかわらず「新京では建築工事に多く碎石砂利を使はねばならない事情にある」という背景からこの研究がされたという説明がついている。川砂利を使うべきコンクリートの骨材に資材不足から石を砕いて骨材にする事情がすでに満洲では常態化していたことがわかる。後者の研究は1939年のもので、満洲各地の骨材について単位容積重量、比重、空隙率の測定、有機不純物試験を行った結果をまとめたものである。2つとも研究者は当時東京帝国大学の学生であり、日本学術振興会第33小委員会の援助を受け、満洲国営繕需品局営繕処と大陸科学院建築研究室の支援のもとに行われた¹⁴⁾とある。当時の満洲に関する研究の一部が、学会だけでなく、大学や日本学術振興会、さらには満洲側の研究組織も巻き込んで行われていたということがわかる。一方でその中身は大変にプラグマティックであり、またこの2つの記事は戦況が決して予断を許さないものになっていることを示している。間瀬のそれを含んだこれら3本の記事は大学生の夏休みの研究旅行成果をまとめたもので、執筆者の肩書はみな「准員」となっており、満洲に関する中国関連記事の書き手の層が決して厚くはなかったことを示している。

満洲訪問報告の多様化

1933年に東京大学教授の佐野利器が「満洲の国都建設」(K053)講演録を残しており、これはタイトルの通り新京の首都建設に関しての講演記録である。佐野は「私が顧問として呼ばれました時には、即相談したいから来てくれと言はれて行つた時には計画がすでに出来て居つたのであります。其計画に基いて多少意見を言つて加へて貰つたと云ふ関係程度であります」とこの都市計画について述懐している。都市計画の概要から、建築規則や事業経理、現地の建材や労働者のことについて、さらには遠藤新がひょんなことから新京の国際ホテルの計画をしているいきさつまで、さまざまな話題について触れている。

早稲田大学の佐藤武夫は、1940年に「現代支那の建築文化相」(K068)、42年には「支那大陸に於ける外国建築とその政治表現」(K073)を書き、政治と建築の関係についての論考を残している。前者は早稲田大学の命を受けて華中地方の上海蘇州南京を回った時の旅行記であり、主に上海と南京の新都市の建築について意見を述べている。総じてまだ日本に比べて稚拙であつて懐古主義的な建築であるが、中国の若々しさが出てきている部分もあり、そこに期待したいという論調である。すでに政治と建築の関係について、佐藤の興味の萌芽の見られる文章であるが、後者ではよりはっきりとそうした興味が冒頭に提示され、中国大陆各地の欧米列国の支配による建築の意匠について論評を加えている。イギリス、フランス、帝政ロシア、ドイツ、アメリカの各国による中国の建築を比較し、特にアメリカによる北京の協和医学堂や万寿山の燕京大学などの成功に着目し、日本の大陸での建築が「文化志向の顕示を明かにしえない」のを嘆いている。

神戸高等工業学校の校長の古宇田實は1936年の「最近中華民国及満洲国視察の所感」(K056)で35年に中華民国、満洲、朝鮮を視察した時の経験を述べている。古宇田は工政会主催の東洋工業会議という団体の一員として渡航し、「中華民国及満洲方面の工業家、科学者達と国際的に接触して話合はうぢやないか、さうして東亜の親善を図り、東洋の工業の振興を企てやうぢやないかと云ふ様なことで」天津、北平(現北京)、満洲国各都市を回り朝鮮の京城、釜山を回って、釜山では朝鮮全国の工業家大会が開かれていてそれに参加したという。「政治や商売と云ふ様なことを離れまして、単にエンジニアとして向ふのエンジニアと胸襟を開いて語り合はうと云ふのが目的」というのは、この当時の日本が大陸との接触においてさまざまなチャンネルを持とうとしていたことを示す記述である。ただし古宇田のまとめ

14) 当時の満洲国大陸科学院の様子についてはⅢ期の以下の記事に詳しい。前田敏男・加藤渉「満洲国大陸科学院」1985年1月号(K135)。大陸科学院は1935年に発足し、建築の研究室もあり、終戦時には2000人程度の研究関係者を擁していたという。

は、「私共が特に感じましたことは斯様に頭の良い若い人達がよく結束をして働いて居るにも拘わらず、満洲と中華民国とを比べると何か支那の方は纏りが附かず何処かに淋しい感じがする様に認められることであります」となっていて、日本が実効支配している満洲国のほうが支那中華民国より進んでいる感があるという印象で締めくくられており、印象批評的な報告となっている。

1942年には商工省工芸指導所の小池新二による「中国旅行日記」(K074)があり、これは興亜院の依頼を受けた小池が上海から蘇州、南京、北京、京城をまわったときの旅行記である。中国の現代工芸状況の視察ということになっており、実際は小池が現地の日本人中国人の役人と交流して、経済問題としてあるいは文化問題として工芸について語り合うという視察旅行の記録である。古宇田の記事と並んで、当時の日本と中国の交流の様子がよくわかるものである。小池は南京の中心部に残る古い城壁をみて、これは「土」から生まれた根強い支那の造形だが、それはもはや過去のものであり、これからは「此の図太い造形の伝統に新しい精神と技術によつて魂を吹き込むこと」が必要で、それは「日華の合作によつてこそ初めて出来る仕事なのだ」と結論付けている。

この小池の記事もそうだが、1930年代になると、『建築雑誌』の中国関連記事には、建築専門家以外によるものも目立つようになる。1933年には「満洲の産業資源」(K051)というタイトルで、東京大学燃料研究所の所長で石炭液化やコークスの反応性の研究など燃料問題に取り組んだことで知られる応用化学者の大島義清が、4月21日の大会講演の講演録を残している。ここで大島は「満洲に於ける資源は、其種類に於ては必ずしも多くはない、量に於ては甚だ歴大なものであるけれども、其品質は他の諸外国の謂ふ所の資源に較べますならば、どちらかと云ふと劣つて居るものがあります」としたうえで、金、鉄鉱石、石炭、オイル、アルミニウム、マグネサイト、鹽(塩)などについて、その埋蔵の状況などを推察している。最後には、「満洲国の資源を開発することは、独り我国の為にするのではないであります。大にしては世界の人類の為でありますし、小にしては満洲国の為であります。満洲が日本の生命線であるならば、満洲における種々なる資源を開発し得るものは我々だけあります」と結論づけている。

同日には参謀本部支那班長の柴山兼四郎が「最近の支那事情」(K052)というタイトルで講演をしており、これは軍人が大陸の政治的状況を解説したものである。内閣企画院書記官の岸偉一による「支那問題に就て」(K062)も同様であるが、これはさらに日本からの開発投資を建築学会の講演において促すような内容で、戦時色が濃くなっていることが観察できる。

戦局の進行と技術への興味への増大

また戦局の進行は、建築技術の詳細化、現実化、ある種の技術的な向上をもたらした。1938年の山下清吉による「支那に於ける防空理論の探究」(K060)は、もともと中国人による防空理論に関する研究成果を翻訳した、文献抄録的な記事である。中国は領土が広大で四方を列強に囲まれているから領空権を失うリスクは高く、空襲を受けやすい。そこで空軍の戦術にはどのようなものがあり、空襲に対してはどのような防空設備と民衆への防空教育が必要か、というようなことが論じられている。

笠原敏郎は、1941年に満洲国国务院建築局長として「満洲国規格型住宅の制定に就て」(K071)という論考を残しており、これはかなり詳細な住宅の実施平面図をベースに、計画、構造、設備の各方面に言及した、満洲の標準型住宅の設計案を紹介するものである。笠原はさらに43年には「満洲国住宅政策経過概要」(K076)を記し、ここでは住宅の設計に限らず満洲の住宅建設産業全体に関する状況を報告し、資材の不足、住宅の供給不足を嘆いている。これは1943年の満洲拓殖会社の高原一秀による「満洲開拓地の建築」(K075)、同年の満洲国建設局技師の莊原信一の「満洲に於ける住宅の最近の趨向について」に引き継がれ、高原は開拓団の特に住居建築に就いて詳細な計画学的・構法的分析と紹介を、莊原は満洲国の住宅政策や規格住宅政策のその後の状況について記録を残している。

また 1942 年の陸軍技師浅井新一らによる「支那の穴居」においては、それまでは好奇の対象としてヴァナキュラー建築の一種程度にしか扱っていなかった中国の土中住居を、貯蔵施設や防空施設として見直そうとしている。浅井らのこの論は、穴居の形式を古代文字との関係まで振り返って説き起こした上で、その内部空間形状の類型化や室内環境分析までカバーしている。これは戦局の進行と深刻な住宅不足が、現地の日本軍関係者に中国のローカルなものへ目を向けさせたという切羽詰まった状況から始まったものであるにせよ、この中国の土中住居に一種の持続可能性を見出そうとしている点で、戦後の日本の建築界における窑洞研究ブームを予言する内容であると言える。

戦中戦後の中国認識の担い手の連続

第二次世界大戦の終結はただちに『建築雑誌』の中国関連記事の内容を覆すものではなかった。終戦をはさんで 1944 年から 1953 年までの 10 年間は中国関連記事の分布は見られず¹⁵⁾、これは 1897 年の最初の中国関連記事以来、この建築メディアにおける最も長い記事空白期であった。戦後最初の中国関連記事は 1954 年の元満洲国建築局長の岡大路による「中共建築事情の概況」(K078)と同年杉田和雄による「中共の建設に従事して」(K079)の 2 つである。これはどちらも終戦後捕虜として中国にとどまることになった人物が戦後留用を解かれ帰国した後に記した中国関連記事であり、その内容は戦前戦中の中国での経験をなつかしみ、共産中国の捕虜への扱いをほめたたえる内容で埋められている。

戦後にはほかに、日本建築学会成立 70 周年を祝う中国建築学会からのレター(K080)と、大陸科学院から東京大学に転任した建築構造専門家の小野薫の訃報に際して友人知人の満洲を振り返る記事(K081-K083)があり、後者の記事はどれも中国での経験をいとおむような論調が中心である。戦後の『建築雑誌』の中国関連記事においては、しばらくは限定的な渡航経験者のみが中国について論じるという戦前からの構図は変わらない。これはやがて始まる戦後の共産中国との接触を通じて日本の建築界に中国認識の新しい担い手登場するまで継続することになる。

小括：住宅という現実問題に没入する中国関連記事

この時期は、中国の、中でも東北部の満洲に関する記事が増え、そこに長期居住している日本人による記事が、従来の日本国内にいる日本人によるそれとは異なり、現地を深く理解した現実的な中国情報となって日本に伝えられている。記事内容の主要なテーマは、I 期が墳墓や寺院などモニュメント建築中心であったのに対し住宅へと移行した。これは日本の大陸進出に伴い、中国に移住する日本人のために実際の住宅建設ニーズが高まったこと、またその建設地が寒冷で日本の一般的な建築知識以外の情報が必要とされたこと、などが原因と考えられる。1931 年の満洲事変以降は、学生から軍人までのさまざまな層が満洲に渡航し、総力的に皆が満洲における住宅建設に関する報告・検討を『建築雑誌』上に発表していることを見ることができる。

また、戦後しばらくは中国関連記事の掲載は見られないが、9 年後に現れた一連の戦後最初期の記事のそれらは、戦前と同じく限定的な中国への渡航者層によって支えられており、中国関連記事の担い手はすぐには入れ替わらなかったことがわかった。

15) 1945 年の終戦をはさんで『建築雑誌』の発刊状況は以下を参照。青井哲人「第 5 回：1945」『『建築雑誌』アーカイブス』『建築雑誌』日本建築学会、2002 年 5 月号、p156-157。これによると戦中期の最後の発刊は 1944 年の 8・9 月合併号が 1945 年 8 月をまたいで同年末に送付されており、戦後の再出発号は 45 年 11 月号となっている。事実上の休刊はこの間の 1 年 2 カ月だけであるが、戦後に中国関連記事が登場するまでは 9 年近い歳月を要したことになる。

1.1.c. 『建築雑誌』Ⅲ期(1959-1985年)の中国関連記事

大学研究者を主とする論説中心の情報伝達手段

Ⅲ期は、平井聖の1959年の中国で出版された書籍の文献抄録記事(K084)以降で、ここを日本の建築界が同時代の中国の学術研究成果を日本に持ってくるようになった転換点としてとらえられることはすでに指摘した。その次にはっきり現れる『建築雑誌』の中国関連記事の時期区分は、1985年の4月号の特集記事(K136-K138)の登場である。ここでは建築界の国交正常化後の日中交流史をまとめた記事(K136)や日本と中国の建築・建設業界を具体的に比較したよりつつこんだ中国論説記事(K137)が出現するなど、中国を日本との比較で見ようになる転換がおきている。それまでの多くの記事が、同時代のいささか学術的性格の強い中国情報をニュートラルに並べるだけの傾向が強かったのに対し、この85年4月号の特集記事群からは、より日本の側から見た解釈を織り込んだ中国情報がメディア上に出現しているのである。

平井の記事から85年4月号以前の記事までをⅢ期とすると、そこに含まれる中国関連記事は1959年から85年までの計52編となり、そのⅢ期の記事一覧(表1.1.c.-1)、記事本数の経年変化(図1.1.c.-1)、執筆者の属性(図1.1.c.-2)、記事形式の属性(図1.1.c.-3)を示す。これらのデータから、この期間の記事数の分布は、特集によって多数集中する年代と記事ゼロの年代が同居するなど極端であることがわかる。1969年、1976年、1985年の3回にわたって極端な記事の集中がある。

3回の極端な記事数の集中のうち、85年の19編のそれは1月号のK135の1編のみⅢ期に含まれあとの18編はⅣ期に含まれるのでここではとりあげず、前の2回の集中だけ見ることになると、どちらもその集中は中国に関する特集号の存在によるものである。69年の13編は1月号で「東洋建築史の展望」、76年の24編は1月号で「中国建築の現状」という中国特集が組まれた結果、集中として見られるものである。この時期の日中関係は1945年の終戦と72年の国交正常化が大きなイベントである。前者69年の特集は、戦後でまだ日中の国交回復のめどが立たないなか、日本の建築界の内部からの必要性、すなわち戦前戦後のアジア研究の断絶を回避するためにアジア建築に関する研究者の論考を集めて編まれたものである。一方で後者76年の特集は、国交正常化後に相次いで日本の訪中団が中国を訪問して見聞したものが蓄積されてきたので、それを学会内で広く共有しようという意図のもとに編まれている。

執筆者の所属先は「日本の教育機関」が過半数を占め(59%)、これは実質的には大学に所属する研究者たちである。所属先はⅡ期ほどばらつきが見られない。中国の機関の執筆者(11%)は、実際は「文献抄録」記事における翻訳対象の中国書籍執筆者であり、中国人の生の声が『建築雑誌』に反映されたということではなく、日本人専門家のフィルターがかかった上での記事掲載となっているのが現実である。執筆者の国籍に「中国」の分布が見られるのも、同じく「文献抄録」の記事の存在によるものである。

記事形式を見ると、ほとんどが「論説」(81%)であり、記事のほとんどが専門的で堅い論調のものになっていることがわかる。戦前に多く見られた「口述筆記録」はほとんど姿を消している(2%)。記事の記述対象もほとんどが「中国」のみである。

記事番号	発行年月	巻数	著者	記事タイトル	中国関連記事の形式												
					執筆者の属性					記事の属性							
					国籍	所属先	記述対象	種類	形式	内容	形式	内容	形式	内容	形式	内容	形式
					中国	日本	海外	中国	日本	海外	中国	日本	海外	中国	日本	海外	中国
K054	195904	869	劉歆・平井繁	中国住宅概観[建築学第 56, No.41/53]													
K085	196010	890	丁望保ら・張公義(訳)	中国における「技術経済分析」(3つの中国の事例から)													
K086	196103	895	西山卯三	新中国に就いて													
K087	196201	907	平井繁	中国における建築遺跡の発掘調査状況													
K088	196202	908	中国科学院・河南省(洛陽)城址の調査と発掘(考古 6103, 6224/55)														
K089	196602	964	前光博・平井繁	中国近代建築の年代判定[文物6504,14/30, 文物6505,6/14]													
K090	196702	977	前光博・平井繁	中国近代建築の年代判定Ⅱ[文物6605,6/15]													
K091	196901	1005	無記名	主編:東洋建築史の展望													
K092	196901	1005	無記名	内容紹介													
K093	196901	1005	村田治郎	東洋建築史研究の展望と課題													
K094	196901	1005	福山健男	中国石造の展望:西域から華北へ													
K095	196901	1005	竹島市一	晋唐法式の価値:ものという資料													
K096	196901	1005	平井繁・八木道雄	中国の西域・西域と雲南の建築													
K097	196901	1005	沢村仁	南禅寺大殿・唐・山西五台(新中国で発表された重要建築遺跡)													
K098	196901	1005	沢村仁	仏光寺大殿・唐・山西五台(新中国で発表された重要建築遺跡)													
K099	196901	1005	関口欣也	南禅寺大殿・唐・河北景城(新中国で発表された重要建築遺跡)													
K100	196901	1005	関口欣也	南禅寺大殿・唐・河北景城(新中国で発表された重要建築遺跡)													
K101	196901	1005	伊藤延男	本家宮・元・山西五台(新中国で発表された重要建築遺跡)													
K102	196901	1005	宮沢晋士	中国の文化財保護と古建築の指定													
K103	196901	1005	文蔵抄録・文蔵抄録・文蔵抄録	東洋建築史年表													
K104	197009	1028	文蔵抄録・文蔵抄録・文蔵抄録	中国建築年表													
K105	197206	1053	元大都の調査と建築(原著データ不明)														
K106	197601	1102	無記名	中国建築の現状・内容紹介													
K107	197601	1102	古阪隆正	日とはどんな子を生むのか													
K108	197601	1102	田中洪	中国建築学解放後のあゆみ:新建設の民族的精神・建築中の研究と教育・文物保護と住宅中心													
K109	197601	1102	久保田正光	中国建築学会と建築に関する諸制度													
K110	197601	1102	稲垣栄三	建築教育:清華大学見聞記													
K111	197601	1102	宮野秋彦	建築教育:主として大学													
K112	197601	1102	市川清志	中国の都市計画													
K113	197601	1102	市川清志	都市と住宅													
K114	197601	1102	鈴木成文	中国の都市住宅													
K115	197601	1102	近藤正一	人民公社生活概観													
K116	197601	1102	近藤正一	紅星中環友好人民公社見聞録													
K117	197601	1102	井筒正夫	東北の人民公社:大南市南郊区・北村人民公社をめぐって													
K118	197601	1102	藤本昌也	長征人民公社													
K119	197601	1102	稲垣和也	上海・塘浜人民公社													
K120	197601	1102	久我新一	中国建築と環境問題													
K121	197601	1102	石塚正雄	建築設備													
K122	197601	1102	宮野秋彦	地下建築:北京の人民防空壕と地下鉄													
K123	197601	1102	堀江隆・小堀隆一・公室	新建築													
K124	197601	1102	河田明雄	材料・施工													
K125	197601	1102	清水正夫	雲南石壁													
K126	197601	1102	鈴木藤吉	文物修理													
K127	197601	1102	関口欣也	山西省南禅寺・仏光寺・晋祠の古建築													
K128	197601	1102	沢村仁	大同の古建築:華嚴寺と善化寺													
K129	197601	1102	廣松宗治・平井繁	享真・中国の建築													
K130	197712	1130	田中洪	中国近代建築家訪問記													
K131	197808	1139	清水正夫	中国の文化財行政													
K132	197908	1154	表俊一郎	中国の地産手知について													
K133	198102	1175	田中洪	千羅山建築の伝説:中国近代建築史からみた日本													
K134	198311	1214	田中洪	中国の伝統的木造建築													
K135	198501	1229	前田健男・加藤健・前田健	泉州国大建築学院													

表 1.1.c.-1:『建築雑誌』Ⅲ期の中国関連記事一覧 全 52 編

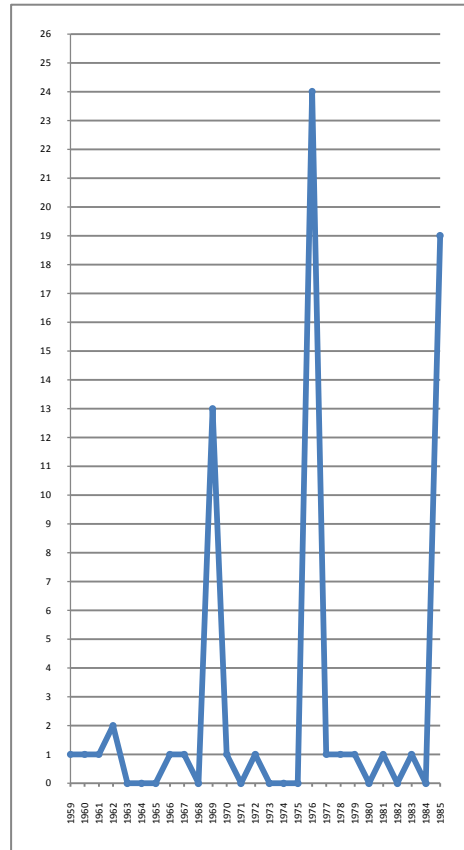


図 1.1.c.-1: 記事数の経年変化

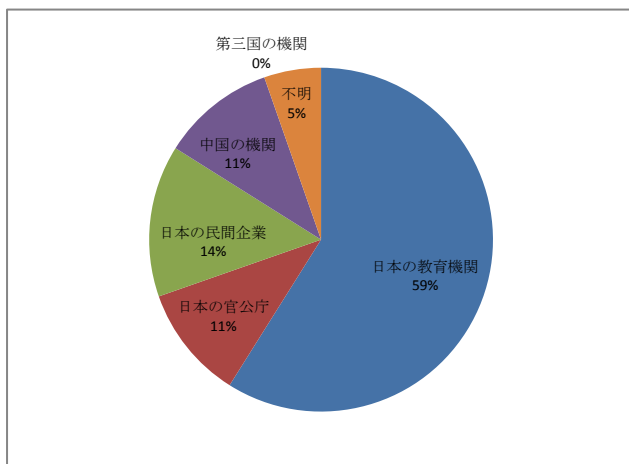


図 1.1.c.-2: 執筆者の属性

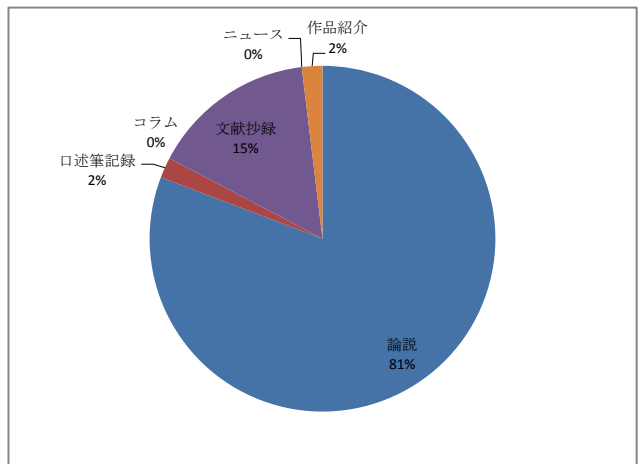


図 1.1.c.-3: 記事形式の属性

文献抄録による中国把握—文化財の保存という新しい話題

Ⅲ期は中国の文献を翻訳・引用した文献抄録から始まる。文献抄録自体は、主として欧米の進んだ知識を外国語に通じた会員が翻訳して雑誌に掲載することで広く学会員の便宜を図るという目的で『建築雑誌』においては創刊もない頃からある歴史のある欄であるが¹⁶⁾、中国の書籍を紹介する記事はこれまで大変少なく、Ⅱ期の防空理論に関する1938年のそれ(K060)以外は見られなかったのが、ここに至っていくつかまとめて見られるようになる。

東京工業大学の助手であった平井聖は、1959年に劉敦楨の『中国住宅概説』の抄録を残している(K084)。劉は1921年には東京工業大学の前身である東京高等工業学校を卒業し日本の学会に精通していた人物で、また中国開放前から梁思成と同じく中国营造学者の中心的メンバーであった¹⁷⁾。実証的な中国史研究家としても知られ、この劉の著書は中国でもよく知られた中国の住宅に関する初の重要な概論である。平井は自身のコメントなしで3頁以上にわたる抄訳を掲載している。1960年には、城谷豊による「中国における「技術経済分析」」というタイトルの3つの資料の抄録(K085)も掲載されている。集合住宅のプランとコストの関係に関する2つの書籍と、外壁の経済分析に関する1つの雑誌記事の訳で、当時の中国の建設コストへの要求が厳しかったことがうかがえるものである。これらは住宅に関する文献の抄録であり、こうした住宅への興味はⅡ期より継続したものであると言えよう。中国においても戦後になってようやく一般の人民のための住宅建設が大規模に行われるようになり、それがこうした文献抄録を可能にした、とも言える。

住宅の話題とは別に、この時期から目立つのが文化財や遺跡の保存に関する記事である。1962年には平井聖が「中国における建築遺跡の発掘調査状況」(K087)を書いている。これは平井による論説記事に見えるが実際は多くの中国の雑誌記事を参照した文献抄録的なものであり、中国で戦後はじまりつつあった遺跡発掘について、『考古学報』『文物』などの中国の定期刊行物の記事を構成して『建築雑誌』の記事にしている。他にも平井は洛陽(隋唐東都)の発掘に関する『考古』誌からの抄録(K088)、「中国古代建築の年代判定」というテーマでの抄録(K089・K090)など、中国の文化財保存に関する文献抄録をこの時期活発に残している。平井は日本建築史の専門家であり、江戸時代の武家屋敷や城郭についての著作で知られ、中国を直接の専門とはしていないが、若き日からこうした中国語の文献に接し、東工大や昭和女子大学で多くの後進を育てた。『建築雑誌』は1969年1月号に「東洋建築史文献目録」(K103)が、1970年9月号に「中国建築史年表」(K104)を掲載しているが、これらは中国の建築学、考古学などの学術定期刊行物の記事を整理したものであり、文献抄録小委員会第7部会(建築史・意匠・建築論)が編集を行い、この中心メンバーが平井であった。

この時期の住宅と文化財保存に関する文献抄録記事の集中には、中国の側の遺跡発掘事業の進展とその定期刊行物での紹介の体制が整ったところに負う部分も大きい。中華人民共和国の建国が1949年、それから4年後の1953年に中国建築学会が設立され、その機関誌『建築学報』は1954年から発行されている。この時期に中国側の情報発信の準備が整ったことが、日本の側の中国情報の受容の形を変えたことは明らかである。戦後でまだ正式な国交がなく両国間の渡航がまだ自由にできなかった時代に、同時代の中国の状況を知ることのできる限られたチャンネルの1つが、こうした定期刊行物を通してのものだったと思われる。なんとか中国とのつながりを作りたいという建築史家たちの欲求が、中国の考古学や遺跡保存への興味の高まりを促したと言えなくもない。

考古学的考究の行き先—日本の源流さがし

こうした中国の定期刊行物を通じた中国古建築や遺跡への理解は、結局日本の建築界にとって、それが日本の建築と

16)『建築雑誌』の「文献抄録」欄は1927年より開始している。以下を参照。青井哲人「第11回:昭和11年の会誌改革『建築雑誌』アーカイブズ」『建築雑誌』日本建築学会、2002年11月号、p112-113

17)劉敦楨の経歴については以下の2つを参照。前掲(序章注19) 田中淡「関野貞の中国建築史学」、369頁。徐蘇斌『中国の都市・建築と日本—「主体的受容」の近代史』東京大学出版会、2009年、p267-349

どういう関係にあるか、という問題に接続していた。これはⅠ期で伊東忠太が中国の石窟寺院を見てそこに日本とインドの混交的な特徴を見出していたこととある意味では同型である。ただし伊東がインドやギリシャの建築など、世界建築という大きな枠組の中で日本と中国の位置関係を関連づけようとしていたのに対し、この時期の建築史研究者たちは、より限定的かつ厳密に、中国の遺跡発掘データを参照しながら、日本の源流さがしのために中国建築を参照している。

1975年に実施された日本古代建築友好訪華団の一員として、横浜国立大学助教授の関口欣也は唐代の木造建築として有名な「山西省南禅寺・仏光寺・晋祠の古建築」(K127)の見学記録を、九州芸術工科大学教授の沢村仁は「大同の古建築：華嚴寺と善化寺」(K128)の古建築を見たときの記録を発表している。特に沢村は「大同は古くから古建築の宝庫として知られ、伊東・関野両博士をはじめ、多数の研究者が訪れている…今回我々の訪問は時間も短く、実測などは伴わないものだったが、それぞれの建築の現状を見ることができ、従來說かれていたのと、やや異なる見解を得た点もある」とし、従来は日本が独自に建築を発達させていたとされる国風化の時代の建物がここに多数現存しているのを見て、「構造の主要の進歩の方向と細部の両面をみると、この時期にも我国に絶えず中国の影響があったのではないか、との感想を抱かざるを得ない」という疑問を呈している。それまで「わが国独自に発展して居たとされる」平安後期の建物とこの2寺院が類似していると言い、しかもそれが細部のみの類似にとどまらない、と言うのである。

田中淡はこの時期に、中国の同時代の考古学的発掘資料をもとに緻密な中国建築論を組み立て、そこで同時に日本建築との関係を検証している。1981年の「干闥式建築の伝統—中国古代建築史から見た日本」(K133)で「考古学調査の技術水準が向上し、発掘の正確なデータが読みとれるようになった」からこそわかることがあるという認識の下、雲南省の「干闥」式とよばれる純木造建築が、日本の古墳時代の埴輪家や家屋文鏡に描かれる画象・銅鐸に描かれる高床式倉庫と似ていることを指摘している。さらに1983年の「中国の伝統的木造建築」(K134)でも田中は、中国の木造建築の架構形式には柱・梁・束を組み重ねて形成される「抬梁式」の架構と、南方で多く見られる柱と柱を繋ぐのに梁ではなく穿すなわち貫を多用して柱を母屋桁までもちあげる「穿闔式」の架構があって、日本は後者の影響をすくなく受けているのではないかという考えを披歴している。

こうした議論、すなわち日本の古建築の源流がどの程度中国の影響を受けているのか、ということについて、『建築雑誌』や本論文で扱う2つの商業建築誌ではこれ以降、さらにつつこんだ議論はほとんど出て来ない。それが日本建築史の専門領域において現在どのような決着がついているのかは、ここで本論が扱う範囲外の問題ではあるが、少なくともここで言えるのは、Ⅲ期になって初めて中国人による中国からの建築に関する情報を手に入れることができるようになった日本の建築界に、今まで「細部」の問題として限定的に扱っていた日中の建築の類似が、ここにきて沢村の言う「大要」の問題にまで関係してくる認識がここで芽生えてきた、ということである。

中国に関する特集号の登場

Ⅲ期には初めて中国に関する特集号が出現する。『建築雑誌』の編集方針のもとに原稿依頼が行われて毎号特集が組まれていく、という形式が定着するのは1970年前後からであるが¹⁸⁾、そうしたなかで初めて中国が特集に組まれた号は、1969年1月号「主集：東洋建築史の展望」であった。この特集は「東洋」という冠がついているが、実際は中国への比重が高いものになっている。編集子の説明では「編集委員会は…戦後発表された中国の研究成果を消化・整理すると同時に、日本における東洋建築史研究の世代的断層を埋め、その伝統を新しく復活させることを意図する企画が可能であり、また必要であると考えた。上記の観点から「東洋建築史の展望」を主題として、第1に、戦前から研究をつけてこられた緒先生に中国本部と朝鮮古代を、第2に、最近明らかになってきた西域・雲南・西藏に関する状況を、第3に、中国の西域と関連をもったペルシャとインド・ガンダーラについて若い世代の成果を、発表していただくことにした」

18)『建築雑誌』における特集主義の定着については以下を参照。青井哲人「第20回：特集主義『建築雑誌』アーカイブズ」『建築雑誌』日本建築学会、2003年8月号、p152

とある。

特に中国に関する記事を見ると、1 の戦前からの中国研究を紹介している記事としては、京都大学名誉教授村田治郎の「東洋建築史研究の展望と課題」(K093)、京都大学から西日本工業大学に移ったばかりの福山敏男「中国石窟の展望」(K094)、神奈川大学教授竹島卓一の「营造法式の価値」(K095)が、2 の西域関連としては、東京工業大学助教授平井聖・大学院生八木清勝の「中国の西域・西藏と雲南の建築」(K096)が、3 の若い世代の発表としては、伊藤延男・沢村仁・関口欣也「新中国で発表された重要建造物」(K097、K098、K099)、奈良宮沢国立文化財研究所平城京跡発掘調査部宮沢智士の「中国の文化財保護と古建築の指定」(K102)がラインナップされている。先に挙げた「東洋建築史文献目録」はこの号の末尾につけられたものである。この中で特に村田の論は、戦前からの日本建築界の中国研究を網羅的に紹介しており有用である。また竹島のそれは、北宋末の李明仲が編集した書物『营造法式』を研究することが日本にとってどういう意味があるかということについて、「幸い日本には、营造法式以前の遺構が沢山ある。それらに营造法式の言葉がどこまで通じるか。それをためすことは、この難事業に挑む上に残された唯一の道ではなからうか」として、次の世代に中国の古典を研究する意義をつなげようとしている姿勢が明確である。

いずれにせよ、戦後 24 年が経過してようやく実現した『建築雑誌』における初の中国／アジア特集は、執筆者は全員が建築史の研究者で、建築史に関する記事のみで構成されていた。また、ここでの記事を見る限り、この記事執筆前後に中国に渡航した者はおらず、戦前の渡中経験か戦後の中国からの文献資料をもとにこれらの記事は執筆されている。1969 年だと中国国内ではすでに文化大革命が本格化しており、国交もないまま限られた中国情報しか日本に入っていない状況が、そのまま雑誌の誌面にも反映されていたと言える。

2 回目の 1976 年の特集号ではより明確に中国が前面に押し出された。すでに文化大革命は終結しており、日中国交回復から 4 年後にしてようやく中国を単独で前面に押し出した特集が組まれている。1976 年 1 月号の「中国建築の現状」特集は、執筆者も建築史研究者のみならず、建築家、学会関係者と幅が生まれ、記事の内容も建築史や遺跡保存だけでなく、都市計画、建築教育、人民公社訪問記、環境問題、設備、構造、地下建築などバラエティに富んでいる。ほとんどの論考が前後の中国渡航経験をもとに書かれており、ほとんど旅行記の集合のようにさえ読める。京都大学での一貫して中国建築史を研究する田中淡の『建築雑誌』デビューとも言える論考が出たのもこの号であり、その「中国建築学会解放後のあゆみ:新建設の民族的形式・建築史の研究と教育・文物保護工作を中心として」(K108)は、1949 年以降 1976 年までの中国現代建築の状況を手際よく紹介している有用な記事である。

また、冒頭の短い中国論「貝はどんな子を生むのか」(K107)は建築家で早稲田大学教授の吉阪隆正によるものである。吉阪は今かわりつつある中国を「貝の生れかわりのようなものだ」とし、貝はその子孫をつくるとき表裏が反対になるという話をもちだして、「もしそうだとすれば素晴らしい世界が期待される。だがもし、過去の延長的成長であるならば、ただ昔の姿の延長として、バカでかい貝に発展するだけだろう」と締めくくっている。これは一種の文明論であり、中国の成長が大化けするかもしれないという予言をはじめて日本の建築界が目にした記事でもある。同じ号の「中国の都市計画」(K112)の記事の中で、市浦都市開発建築コンサルタンツの市浦健も中国の都市を見て回って民間企業のない状態を見て、「私の見た限りでは、中国が日本の将来にとって最も参考になる外国であるということである。そこでは人間の改造が社会の改造と併行して行われている」と中国の将来に対してかなり肯定的な評価を下している。この特集号の他の記事をもても、中国の遅れた現状をなんとか肯定的に読み換えようとする論はあっても、吉阪と市浦のように中国が将来大化けするかもしれないという予言まで踏み込んだものはない。それで言うところの 2 人の記事は突出して早くその可能性に触れていると言える。

この号ではまた、都市や人民公社で実際の人民の暮らしを見た建築研究者たちの観察記録的な記事も見ることができる。東京大学教授の鈴木成文は「中国の都市住宅」(K114)において北京の胡同や四合院、住宅小区を見て回り、ま

だまだ質素だった人民の住居の内部を、家賃や家具の価格、ごみ処理の仕方まで事細かに記録し、最後にその居住環境について「中国の建設に見られる特徴は、おどろくべき計画性と自発性である。行政にせよ生活指導にせよ、何が大事で何があとまわしでよいか、その判断が的確であり、しかもその判断が大原則にもとづいて下される」と高く評価している。RIA 建築総合研究所の近藤正一は農村の中にある人民公社を3か所見学し、それらがみなまちまちだったのを「この不画一さは、単に試行錯誤の過程とばかりに断言するわけにはゆかない。それは、先進的な工業でも、土法と呼ばれるいわば旧式の中国人の独創的な手法が盛んに見直され、医学的でも、衆知のとおり、ハリ・キュウなどの漢方術が、西洋の近代的な治療と相俟って行われているこの国独自の進み方によって大きく影響されている所でもある」という。つまり中国のこの人民公社の不画一さは中国の独自性の追求の結果であり、西洋のものと比べて後れをとっているとしてもそれは独自なものだから構わないのだ、という論法である。近藤のこの、中国自体が基準なのだから周りと違っていいのだ、という「中華思想」的な論法は、文化大革命で成長が遅れた中国の状況を説明するときに、日本の建築界のみならず、中国国内でもよく使われているもので、近藤のここでの発言は、中国らしさを肯定的に評価する早い例であるということができよう。

この号の環境工学に関する記事も中国にはかなり好意的である。東京理科大学の久我新一は「中国建築と環境問題」(K120)のなかで、最初こそ「中国の最大の問題は、経済環境であろう…一人当りの総生産は著しく小さい」と言いつつも、都市では「共通して緑を大切に、空地があれば樹木を植えていつことを特記しておく必要がある」と言い、北京の地下鉄や上海体育館を見学して「新しい建築物では、大規模さと共に近代化への挑戦が併せ感じられた」として肯定的な評価を与えている。構造についても、東京大学の梅村魁が「耐震建築」(K123)で書いているように、「正直いって中国の耐震建築の技術水準は今日かなりのところまで到達しているとの印象を深くした」とあり、「現在のエネルギーをもってすれば容易に世界の水準に達するであろうし、特に組積造関係の耐震構造に期待したい」と全体的に肯定的なトーンで覆われている。

人間どうしの出会いを伴う視察旅行

Ⅲ期は1959年から85年までであり、これは中華人民共和国建国10周年の年から始まって、文化大革命の終結後1972年の日中国交正常化をあいだに含んだ27年間である。この間の日中間の人的な交流はいまだ極めて限られており、何らかのかたちで日本人が中国を訪問したとしても完全な自由滞在は無理で、中国側に招待する主体がいて日本からの客人の相手をするようになっていた。そういうわけでこの期間の日本からの中国訪問の記録には、そのとき応対してくれた中国人や中国側の対応についての言及もしばしば見られ、多くはその大人としての中国人の対応にすっかり執筆者が魅せられて、中国人を通して中国の評価が高くなる傾向が強い。

1960年9月20日から約1カ月、京都大学助教授の西山卯三は中国建築学会からの招待を受けて中国視察をし、そのときの印象を「新中国に旅して」(K086)に残している。これは1965年末に文化大革命が本格化する前の日本の建築関係者の中国渡航として大変めずらしいものであり、『建築雑誌』の記事を見る限りこの時期に渡中した日本の建築専門家は他にはいない。西山の記述によれば、本来はその4年前の1956年に、中国建築工会(建築労働組合)の招待で日本の建築労働組合の関係者10名ばかりが中国にいく機会があり、西山も建築研究団体連絡協議会の代表として参加が計画されていたのだが、当時の政府の不当な妨害で旅券が出ず機会を失っていた。それが今回この時期に突然、その時知己を得た中国建築学会から招待を受けたという。渡航は西山のほかに世界デザイン会議事務局の田辺員人と2人だけで、かなり例外的なものだったようである。香港経由で広州入りし、電車で北京まで北上し、それから東北部や武漢上海などを約1カ月かけてまわっている。そこでは工場や各地の新建築、建設現場などを視察し、途中10月1日の国慶節の夜には天安門上で毛沢東ら最高指導者にも会っている。新しい大建築を見て「日本の現代

建築のように目新しいプラスチックだとかその他の工業材料がつかわれているというわけではない。しかしその工事はスミズミまで非常に入念にされていて、手ぬきなど全然感じられないキチョウメンさが注目をひいた」「造形の問題は極めてまじめに、しかしかなり自由に追求されているのではないか」「おくらしているからといってみすてられるのではなく、最大限に創意性を発揮してならび進むという形を出しているという風にみられた」などの全体的に肯定的な評価を残している。どの記述においても中国が経済的に遅れていることをはっきりと指摘するよりは、そこに丁寧さや独自性を見出そうとする視線が感じられる。また北京に自動車はまだ大変少ないことを、中国はこれから先進国の失敗をよく見た上で現代化をすればいいとしてアドバンテージに読み替え、「社会主義の条件下では都市改造はきわめて容易である。自動車が多くないうちに、さきまわりして無駄な投資をする必要はない」と述べている。遅れていることをネガティブにとらえない視点を、西山はここで強調している。

1976年の「中国建築の現状」特集が、文化大革命後の中国に実際に視察訪問した専門家たちの体験的原稿の集合であるという点はすでに述べた。この号の巻頭言によると、両国の国交回復後は建築界においても学术交流が行われ、1974年以降76年1月の段階ですでに5つのグループが訪中したという。同号掲載の日本建築学会事務局局長の久保田正光による「中国建築学会と建築に関する緒制度」(K109)によれば、文化大革命直後の日本と中国の学会間の交流について、1973年11月に日本建築学会が主導して日中建築技術交流会が設立され、1974年6月に日本からの初めての訪中が実現して以降、住宅、歴史、建築物理(環境工学)、耐震構造の各専門分野の研究者が訪中し、中国からも友好訪日団が来日するなど徐々に交流が深まりつつあるという。中国建築学会の機関誌『建築学報』も文化大革命で一時期休刊していたが、1973年10月に復刊したことがここで伝えられている。この特集号における記事から各執筆者の渡航経験に関する部分だけつき合わせてみると、建築教育に関する記事を書いた稲垣栄三は1974年6月と75年8月の2回訪華団に参加、鈴木成文は75年6月の市浦健団長「日本住宅建設友好訪華団」に参加、久我新一は75年6月の石原正雄団長「建築物理訪中団」に参加、梅村魁は75年10月に自らを団長とした「耐震建築友好訪華団」に参加、関口欣也と沢村仁は75年8月の「日本古代建築友好訪華団」に参加したことがわかる。

こうした旅行記では、みななにかしらアテンドしてくれた中国人に対して好意的な印象を記している。いわく「私は日本人の1人として、かつて日本軍が中国を侵略し、中国の人々を苦しめたことに、どうしてもふれないではいられなかった。明るい太陽の下でかがやいている農村の風景が車窓にうつりかわるのをながめながらそのことを話すと「軍国主義というものは他国の人民ばかりでなく、自国の人民をも苦しめるものだ」「西山さんが戦争で死なずに今日中国にこられて、大変よかった」といわれた」と西山卯三は言い、「その間に知り合った人達の好意によることは勿論であるが、西欧文明が我々にとって、直接肌から感じにくいのに反して、極めて身近い感じですのですべてのものが伝わって来ることに驚いた」と梅村魁は言い、「故宮を自ら案内された単士元氏、北京の歓迎宴会に出席された国家文物管理局の羅哲文氏、上海の見学に随行された同済大学の路秉傑氏といった同学の大先輩に会うことができたのは、最大の喜びのひとつであった」と田中淡は述懐している。交流が限定的だったという当時の状況がこうした人間どうしの出会いをいささか感傷的すぎるものにしたとは言え、この時代の専門家どうしの交流が熱いものであったことは間違いがない。学会を主体にした視察・交流旅行は、変動相場制への移行と1980年代のプラザ合意以降の円高進行、日本からの中国の渡航自由化などでこのあとは徐々に減少していくことになる¹⁹⁾。

文化財保存に見る中国の優位性

田中淡は1977年に「中国古代建築友好訪問記」(K130)において、日本古代建築第2次友好訪華団(平井聖団長、

19)『日経アーキテクチャ』の2003年の記事(N095)では、日本建築学会有志約20人が同年3月27-30日に上海視察をし(団長:内田祥哉氏)、新しく竣工した建築を見学した後、設計最大手の上海建築設計院を訪問したことが報じられているが、こうした建築学会有志による上海視察は1992年以来、と記されている。

22名)の一員として再度訪中したときの経験を記している。古代建築を見て回る訪華団は当時すでに2回も組織され、しかも2回目は22名もの参加があったというのだから注目度が高かったことがうかがえる。「見学した主要な古代建築のノート」が田中によって作成されているが、見ると北京、大同、西安、洛陽、上海と、重要な古建築をかなり網羅的に見て回っていることがわかる。そして重要なのは、田中は北京の前門が彩色あらたに補修を終えているのを見て、「中国が今、新生都市における古代都市都城建築に、一定の歴史的記念物のもつ有効性を見出しつつある」と指摘していることである。このころの中国に渡航した日本の建築史研究者たちは、中国が文化遺産保存で急に前進しているのを知り、一方で経済的な高度成長を口実に文化財保存をあとまわしにする日本の現状と比較しながら、この点について中国の優位性を強調する傾向があった。事実、平井聖も中国の遺跡発掘状況と日本のそれを比べてこう言っている、「新聞は外電が唐の長安城の発掘が完了したことを伝えた。その整理報告がまたれるのであるが、それにつけても、我国における唐長安城を模した奈良の平城京跡の発掘が、国柄が異るとはいえ、奈良国立文化財研究所の方々の努力にもかかわらず遅々として進まないのははなはだ遺憾なことである」(K087)。72年の日中国交正常化によって日本からの視察旅行が可能になると、その遺産保存の現場の状況を格段に深く知ることができるようになった。戦後から1960年代までの中国の定期刊行物を通じた日本建築界の中国の文化財保存への関心は、ここにきて保存の方法論や都市資産価値の向上のための歴史遺産保存のあり方など、より具体的な視点へその重心が移行してゆくことになる。遅れて成長しつつある中国が、文化財保存の分野において先進的であるという評価は、日本の経済成長一辺倒をなかば揶揄するような価値観と相俟って、当時の中国関連記事において強調された論題であった。

小括：遅れた中国に優れた部分を見つけようとする大人の態度に立った中国関連記事

この時期の中国関連記事は、執筆者の多くが大学所属の研究者であり、記事の形式も堅めの論説文が多く、情報伝達の観点から言えば、内容、形式ともに硬直化の時代だったと言える。1949年の中華人民共和国の成立後53年に中国建築学会が設立されて日中の学会レベルでの関係が成立し、考古学や建築学の定期刊行物が中国でも発行され、これが両国の限定的な交流関係を補った。

記事の内容は、1960年代までは中国人による中国の定期刊行物の文献抄録を通して、また70年代の日中国交正常化以降は学術交流視察を通して、中国情報は日本に伝えられ建築メディア上に配列された。この時期の日中交流は戦後の断絶期明けであって、まだ小規模で公式的なものであり、中国のネガティブな部分を伝えるような記述はほとんど見られない。むしろ多くが「確かに限界はある、しかし…」という論法に立ち、貧しいはずの中国を卑下せずになるべくそこに肯定的な部分を見だそうとしている。Ⅱ期まではほとんど話題にあがることのなかった文化財保存、環境工学、構造などといった建築学の緒分野において両国の研究者レベルでの交流が進み、どれも日本と比較した上でそこに可能性を見出すような記事が残されている。特に文化財保存は、高度成長期の日本で軽視されがちな一方で、中国では周恩来の指令のもとこれが活発に行われたのを日本の研究者は当時高く評価した。環境工学においても、公害が社会問題化していた日本と比べてまだそうした問題がない中国はとても可能性のある状態だという見方が語られ、建築構造の領域においても、まだ高層建築のない北京を見て都市の安全を考える上でこれからの自由度が高いとして持ち上げられた。中国の肯定的な部分の発見には、その遅れを中国の文化的独自性と結びつけたり、これからの可能性と言い替えたりするパターンが多く、日本にとっては遅れている中国を大人の態度で遇している、と言える。両国が双方のいい部分だけを見ようとする関係であったという点では、ある意味では理想主義化された日中関係がそこにあった。

1.1.d. 『建築雑誌』Ⅳ期(1985-2008年)の中国関連記事

民間や中国の専門家が加わった、多方向で相対的な情報伝達手段

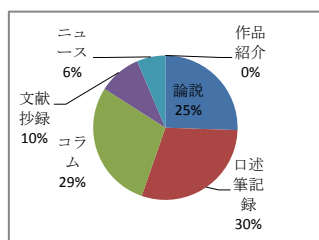
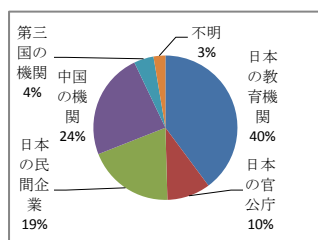
Ⅳ期の最初の記事は、過去10年の日中交流を振り返る1985年の小特集の記事群(K136-K138)であり、この記事以降日本との比較で中国を語る記事が多く見られるようになることはすでに指摘した。Ⅳ期はこのあと分期されることなく、本論文の分析対象範囲である2008年末まで継続していると考えられる。というのもこの期間中、本論文の冒頭に掲げた日本の対中貿易輸出入額推移(図0.1.-1)においても明らかに両国の経済関係は拡大の一途であり、途中の反日や嫌中の出来事にも関わらず、それが直接『建築雑誌』の中国関連記事の扱う論題や執筆の視点に影響を与えているような事実は確認されなかったからである。

85年の小特集記事群以降2008年までをⅣ期とすると、そこに含まれる中国関連記事は計94編となり、そのⅣ期の記事一覧(表1.1.d.-1)、記事本数の経年変化(図1.1.d.-1)、執筆者の属性(図1.1.d.-2)、記事形式の属性(図1.1.d.-3)を示しておく。これらのデータから、この期間の記事数の分布は、毎年欠かさず分布が見られ、特集がなくとも中国の情報が一定数出現していることがわかる。その上で1985年、2003年、06年の3回にわたって極端な集中があることも観察される。

これらの集中はⅢ期と同様、当該年に中国に関連する特集号が編まれたからであり、85年の18編(ほか1編はⅢ期に属する)は4月号の「中国建築界との交流」と11月号の「中国建築概説」が、03年の16編は2月号の「アジアの中の日本建築」が、06年の13編は12月号の「中国—そこに日本の建築世界はどう関われるか」といった特集が、それぞれ中国関連記事を集めている。この時期は2001年に中国がWTOに加盟し市場開放してから、その市場参入願望とともに海外からの関心が集中し、08年8月には北京オリンピックが開催された。『建築雑誌』の中国関連記事数の経年変化においては2007-08年の記事分布はむしろ少なく、北京オリンピックは本雑誌の記事数分布に直接は関係しなかったと言える。

執筆者の属性はⅢ期に比べて再度多様化している。その所属先も「日本の民間企業」(19%)が増加し、「日本の官公庁」(10%)のほぼ2倍を数えている。「中国の機関」(24%)は実際に中国と交流のチャンネルができ、中国に拠点を置く中国人に記事の執筆依頼ができるようになったことによる。これは今までの『建築雑誌』にはなかった傾向である。「第三国の機関」(4%)に属する執筆者も登場し、これはアメリカや韓国の組織に属する外国人や日本人が、『建築雑誌』において中国について語っているケースである。結果的に執筆者の国籍も、「日本」のみでなく「中国」や「第三国」が増え、国籍や所属先にとらわれない各分野の専門家による中国関連記事の形が出現している。

記事の形式にもバラエティが出ている。「論説」が減少した分(25%)、「口述筆記録」が再度増加した(30%)。しかもこれらの「口述筆記録」をよく見ると、Ⅰ、Ⅱ期の「口述筆記録」が主に講演録で1人の話者の発話を文字にしていたケースが多かったのに対し、Ⅳ期では対談、鼎談、シンポジウム形式の発話行為を文字にしている記事が多く見られ、より多方向の対話の中から中国が語られている記事が増えていることがわかる。コラムも増加し(29%)、専門以外の話題として、中国が軽妙な話題の対象として語られるようになったこともわかる。記事の記述対象も「中国」のみでなく「日本」や「第三国」が増えている。これは中国を語るときに日本と比較したり、アジア関係の中で語ろうとする相対的な記事が増えていることを示している。



左／図 1.1.d.-2: 執筆者の属性 右／図 1.1.d.-3: 記事形式の属性

記事番号	建築雑誌 発行年月	号数	著者	記事タイトル	中国関連記事の形式									
					執筆者の属性		記事の属性							
					国籍	所属先	記述対象	種類	注釈	注釈	注釈	注釈	注釈	注釈
					日本	中国	第三国	不明	中国	第三国	不明	中国	第三国	不明
K136	198504	1232	清水正夫	日中交流の10年と今後の展望(建築雑誌掲載)										
K137	198504	1232	尾島雄雄	復興する中国建築界の展望(建築雑誌掲載)										
K138	198504	1232	石塚麻子	天津大学での教職：前期の都市計画の講義を終えて(建築雑誌掲載)										
K139	198508	1236	須藤誠三	中国都市のCivil Eng.建築利用国際会議日本建築学会論文発表会報告										
K140	198508	1236	浅川雄男	1.中国住宅の研究：長江下流域における調査から										
K141	198508	1236	Xiaoqi Ye	中国における防火安全のあゆみ(Interim 85, Conference Workshop, University of Surrey)										
K142	198511	1240	許崇文・陳建	改革に際する「中国」建築科学技術										
K143	198511	1240	無署名	中国建築概説										
K144	198511	1240	青木志郎・稲本昭吉	中国建築界展望										
K145	198511	1240	浅川雄男	日中学术交流										
K146	198511	1240	李維寧・稲本昭吉	日中学术交流										
K147	198511	1240	中国建設市展覧会	中国建設市展覧会										
K148	198511	1240	浦良一	中国の建築設計										
K149	198511	1240	青木志郎・稲本昭吉	生活と住環境(中国の都市開発)										
K150	198511	1240	東谷正洋・八木孝	2. 都市生活の環境：横穴形態について(中国の都市開発)										
K151	198511	1240	宮野秋彦・稲本昭吉	3. 都市生活の環境：横穴形態について(中国の都市開発)										
K152	198511	1240	村松伸	新都市計画と都市開発：アジアの建築を見る										
K153	198511	1240	堀込重二	風水思想と中国の都市：清時代の都市を中心に										
K154	198602	1243	九代克彦	中国建築学会主催「国際生土建築学会」報告										
K155	198607	1248	田中淡	中国建築学会主催「国際生土建築学会」報告										
K156	198609	1250	龍念忠	海外研究者の視点から見た中国建築学会創立10周年記念事業報告(1)										
K157	198709	1263	阿久井善孝	中国「重慶」における河内丘陵の都市集落										
K158	198809	1276	陳從周	中国美術の発展										
K159	198809	1276	生井英孝	定められた文化：19-20世紀建築史の中国における										
K160	198809	1276	新築芳	人間の生活の器を：中国のホームレスと建築家										
K161	198812	1280	蓋然	敦煌莫高窟の建築工事：保存技術 (6)										
K162	198911	1292	黃衛民	《中国風景》と《世界風景》										
K163	199006	1300	牛尾紹孝	中国銀行上マストの施工とデザイン										
K164	199006	1300	沈慶二・武野真	中国における歴史文化名城保護の現状(特集)										
K165	199105	1313	土田光義	中国のアーチ橋建設										
K166	199106	1314	藤田忍	中国小規模住宅のバリエーション										
K167	199207	1329	ShuLi Li	中国人青年男子の土壌の作業環境 (Ergonomics, 1992, Vol. 33, No. 7, pp. 967-978)										
K168	199207	1329	Gongqian Yan	中国の都市化と環境問題の現状と展望 (Ergonomics, 1992, Vol. 33, No. 7, pp. 945-957)										
K169	199212	1336	阿久井善孝	中国西南少数民族に息づく伝統的建築：風雨橋										
K170	199307	1344	高岡より子	中国江蘇省の農村集落について(民生と現代：重慶の都市化と環境問題)										
K171	199403	1355	高岡より子	中国農村少数民族の住居と集落に関するコンボジ										
K172	199405	1357	Bi Zhonghe	中国における森林火災の予防と消火 (Proceeding of Asian Fire Seminar, 7th-9th, October 1993)										
K173	199409	1362	斎藤賢吉	中国建築学会主催「国際生土建築学会」報告										
K174	199412	1366	山口幸夫	同済大学建築都市計画学院の建築教育：90年代の中国の建築教育										
K175	199501	1367	長田正至	武蔵先生：中国の休日										
K176	199503	1370	田中武文	中国の大衆の住宅										
K177	199510	1379	宮澤秀治	中国の天空と大地の景観から.....(どこで何から建築するか)										
K178	199611	1387	宮澤秀治・高野真子	中国近代の都市における洪水防衛技術の研究										
K179	199701	1400	胡宝哲	日本と比較の視点からみた中国における建築デザイン教育：消費と環境意識の両面から										
K180	199712	1415	郭敏群	大連理工大学にみる中国の建築関連学科の教育										
K181	199712	1415	折戸嗣夫	中国の建築教育への変遷										
K182	199806	1423	稲葉信子	北京での伊東忠太：中国からインドを経てベルギー・アジア建築旅行の始まり										

記事番号	建築雑誌 発行年月	号数	著者	記事タイトル	中国関連記事の形式									
					執筆者の属性		記事の属性							
					国籍	所属先	記述対象	種類	注釈	注釈	注釈	注釈	注釈	注釈
					日本	中国	第三国	不明	中国	第三国	不明	中国	第三国	不明
K183	199907	1441	佐々木孝彦	アジアの歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K184	199909	1443	阿久井善孝	中国・雲南省・大理市：大理天主堂(建築寄稿)										
K185	200002	1450	平尾和洋	アジアの歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K186	200003	1452	矢野和之	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K187	200103	1469	Tian T. Lan	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K188	200205	1488	中村健一	中国新石器時代の都市(IV)城壁集落と集落都市										
K189	200208	1492	佐々木孝彦	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K190	200210	1494	中塚英	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K191	200211	1495	田中重光	上海(中国)：日本最古の軟骨コングリート造り										
K192	200302	1500	無署名	中国1500年記念 特集アジアのなかに中国の建築										
K193	200302	1500	藤井孝一・宮澤秀治	(1)アジア建築の未来：われわれにとって、サステナブルな未来は何か?										
K194	200302	1500	藤井孝一・宮澤秀治	(2)アジア建築の未来：われわれにとって、サステナブルな未来は何か?										
K195	200302	1500	藤井孝一・宮澤秀治	(3)アジア建築の未来：われわれにとって、サステナブルな未来は何か?										
K196	200302	1500	中塚英	(4)アジア建築の未来：われわれにとって、サステナブルな未来は何か?										
K197	200302	1500	川口和・和田	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K198	200302	1500	宮澤秀治・高野真子	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K199	200302	1500	宮澤秀治	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K200	200302	1500	宮澤秀治	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K201	200302	1500	宮澤秀治	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K202	200302	1500	宮澤秀治	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K203	200302	1500	王興田	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K204	200302	1500	宮澤秀治	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K205	200302	1500	林曉光	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K206	200308	1508	岡南	中国における「第一回」中国の歴史文化名城保護の現状										
K207	200312	1512	西澤幸彦	中国・東北地方：(満洲国)の建築										
K208	200402	1514	田中淡	中国の歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?										
K209	200405	1519	王紹賢・郭敏群	(2)同済大学キャンパス計画の特色(国「ケーススタディ」)										
K210	200501	1527	岡南	北京：伝統文化と現代文明の衝突の都市										
K211	200511	1539	北澤博幸	(2)中国における住宅の居住環境とエネルギー消費										
K212	200611	1553	北澤博幸・高野真子	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K213	200612	1554	村松伸	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K214	200612	1554	田中淡	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K215	200612	1554	田中淡	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K216	200612	1554	田中淡	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K217	200612	1554	田中淡	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K218	200612	1554	許崇文・王約	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K219	200612	1554	田中淡	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K220	200612	1554	田中淡	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K221	200612	1554	田中淡	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K222	200612	1554	田中淡	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K223	200612	1554	田中淡	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K224	200612	1554	田中淡	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K225	200708	1565	W. Xu	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K226	200712	1569	横山正	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K227	200807	1578	高野真子	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K228	200807	1578	高野真子	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										
K229	200812	1583	Zhao Gongshi	中国の歴史文化名城保護の現状(特集)										

表 1.1.d.-1: 『建築雑誌』IV期の中国関連記事一覧 全 94 編

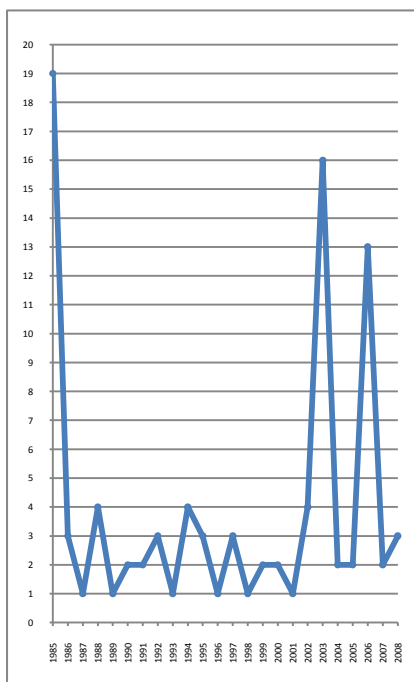


図 1.1.d.-1: 記事数の経年変化

交流の蓄積とその本格化

日中建築技術協会副会長の清水正夫²⁰⁾は、1985年4月号の小特集「中国建築界のとの交流」のなかの「日中交流の10年と今後の展望」(K136)で戦後の建築における日中交流の歴史を振り返っている。それによると中華人民共和国の建国1949年以降、「1972年9月29日までの23年間は、主として民間外国、民間文化交流によったものである。その間の建築の交流は極めて少なかった」とし、「日中建築技術交流会(以下「日中建築」)設立のきっかけは、国交正常後はじめて国際貿易推進協会が中国建築代表団をお招きしたときである」「日中建築の誕生後の第一期は、中国建築界の活躍のニュースの紹介、中国古代、近代建築の日本への紹介、日本の建築関係者の訪中による交流と参観、耐震、地下連続壁その他の学術交流団派遣などを行った。第二期としては、専門分野の人々が、団を組織して専門的に研究旅行を行った」などと述懐している。日本側訪中代表団のリストもあり、吉阪隆正を団長とした「日中建築技術交流会友好訪中団」の1974年6月の訪中から、吉武泰水団長の「日中建築技術交流会訪中代表団」の84年10月の訪中まで実に31回にわたって代表団を組織して訪中したことが紹介されている。中国側の訪日団のリストもあるが、同じ期間に13回だけと、日本側からの訪中が多かったことがわかる。清水はさらに「これから第三期にあたる日中間の建築交流はかなり多角的になると考えられる」とし、留学生の増加、友好都市や友好大学の増加を指摘している。また財団法人日中友好会館が成立し85年には後樂園に日中学院も完成したこと、85年には「国際生土建築学術会議」が開かれて中国が国際的に開放されつつあることが紹介されている。

同時代の中国への興味と日本への逆照射

1985年11月号の「中国建築概説」の特集は、雑誌一冊がほぼ中国に関する記事で埋め尽くされたおおがかりなもので、さまざまなバックグラウンドの執筆者や記事形式で構成されている。また中国で学んだ日本人留学生が実際に中国に滞在して知り得た情報を提示し、日本に留学中の中国人の座談会も掲載されるなど、同時代の中国について双方向的に知りうる画期的なものであった。芦原義信・梅村魁・吉武泰水の座談会(K144)を藤森輝信が、中国に留学経験のある浅川滋男・村松伸・八代克彦・山口幸夫に東京藝術大学の茂木計一郎を加えた座談会(K145)を尾島俊雄が、李康寧ら6人の日本で学ぶ中国人留学生と相田武文・村上美奈子の座談会(K146)を尾島が、ゼネコンの建設実務者と日本建築センターの理事らによる座談会(K147)をやはり尾島が進行役として率直な話を聞き出している。「理論とか基本的なものの考え方については、ほかの国から学ぶ必要はないと考えているのではないか。それが本当の中華思想かもしれないですね」(芦原)、「偉大な文明というのはそういうものだという気がしますね。排他的である原理で貫き通す」(藤森)、「どうして出てきたのかというアプローチについては関心がなくて、結果だけを使おうとする」(吉武)などの大局的な話もある一方で、実際の交流を通して現実的な話題について語られているのが目を引く。「いろいろ論文などを読んで、この図書館にこの古い版本があるというので行ってみても、あるらしいけれども、整理されていないとか、これはだめだとか、そういう例は南京図書館でも北京図書館でもありました」(浅川)と資料の開放性に問題があると明かされ、「今までの建築系で中国に興味を持っているのは歴史系の先生だけだったが、そんなまどろっこしいことをやっていてはだめではないか。もう少し実践的な先生方や民間の方々も行かれて、日本側もう少し産学協同路線で中国のマーケットを考えないといけない段階じゃないか」(ゼネコンの建設実務者)とこれからの経済成長を見越した発言もある。同時代の中国を見ていこうという論調がこの特集でかなり明確にされた印象を与えるものである。

また、こうした同時代の中国への言及は、日本と中国の比較や、日本への興味と逆照射にもつながっている。「たと

20) 清水正夫(1921-2008年)は日本大学と東京大学大学院で建築を学んだ人物で、戦前は内務省に勤務していたが、戦後は日劇のパレリーナであった松山樹子とともに1948年に松山バレエ団を設立し、その理事として古くから在野で日中交流を進めた人物として知られる。松山バレエ団は、世界で初めて中国の映画「白毛女」をバレエに改編した公演を行い、1958年には周恩来首相の招きで中国公演も行っている。2008年5月には、来日した胡錦濤主席、国務委員の唐家璇氏が清水夫妻のもとを訪問するなど「中国の古くからの友人」として知られる人物である。

えば法隆寺とか唐招提寺に皆さん興味を持っていますが、それはあくまでも中国の唐代の建築で残っているのが非常に少ないということで、たまたま興味があるわけです…中国で日本を研究している人はほとんどいません」(村松)や、「中国に限らず、日本の場合、東南アジアの情報収集は非常におそろいですね」(村上)、「日本の大学生はあまり勉強しているとは思えませんね。遊びまくって、カンニングしまくって(笑)、みんな酒を飲んでワイワイやっています。ふだんはほとんど勉強してません」(中国人留学生)など、日本が進んでいて中国がおくれているという図式だけになっていない点もこの特集の厚みを感じさせるものである。

ほかにもこの特集では、明治大学教授の浦良一の「中国の建築設計」(K148)が、視察した中国の現代建築の設計体制について、とくに日本が協力した中日友好病院を中心に具体的な同時代の中国の設計の営みを報告している。

また、同年の別の号で、東京理科大学の水野智之は「中国における防火安全のあゆみ」(K141)を発表し、3年に一度英国において開催されている燃焼に関する国際会議の1985年会議のワークブックを文献抄録している。会議の各論文の題目のほか、中国の火災研究についてのレビューがあったということでその部分だけ内容を翻訳し抄録している。数ある論文を扱った欧州の国際会議の会議資料で、中国情報だけを抄訳・掲載しているところに、日本の、同時代の中国への関心の高まりを見ることができよう。94年には大林組技術研究所の村岡宏が「中国における森林火災の予防と消火」、96年には関東学院大学の高野恵子が「中国古代の都市における洪水防御技術の研究」(K178)という抄録を残しており、これらも同型の、防災分野における中国への関心の高まりであると言える。92年には日本大学の黒澤信之が「中国人男子の上肢の作業域」(K167)、同年には同大学山添英順が「中国の台所設備機器のための最適高さ」(K168)のような、中国人を対象にした人間工学の論文を、2001年には東京大学生産技術研究所の西田明美が「中国におけるスペースフレームの規約と基準」(K187)で建築構造関係の論文の文献抄録を行っている。これらもそれぞれの専門領域で中国人研究者が育ち、そうした情報が国際的に中国から発信され、それを日本の側が注目して学会誌の抄録として拾っている、というプロセスとして理解できる。

中国からの発信

中国建築学会理事長戴念慈の「海外招待者記念討論会(日本建築学会創立100周年記念事業報告・1)」(K156)は、1986年の日本建築学会の創立100周年の祝賀祝典における中国建築学会の代表としての発言が記事になったものである。中国の敦煌研究者として知られる蕭默は1988年に「敦煌莫高窟の擁壁工事」(K161)で、莫高窟の遺跡保存のための擁壁について詳細な技術レポートを『建築雑誌』に寄稿している。

1988年の陳從周による「中国園林の世界」(K158)は、村松伸による中国園林研究の第一人者へのインタビューである。これは中国人からのメッセージを日本人が中国まで拾いに行きその生の声を記事にしており、情報伝達の方法が変化したという点で転換点的な記事である。上海の研究者宅の周囲の雰囲気リアルな読後感をもたらしている。

また日本にいる中国人からの発信も『建築雑誌』においては80年代末より目立つようになってきた。1988年の崔榮秀による「人間生活の器を—中国のホームレスと建築家—」は、同時代の中国への興味とはいえ、中国現代社会における居住の問題点を、暗部も含めて正視した論説として注目に値する。それまでの中国社会が住宅を商品として扱ってこなかったために家賃の生活費に占める割合が低すぎ、住居を売買することが根付かず住宅のレベルが上がらない、住宅団地の建設はブームだが計画に住民の声がほとんど反映されない、ということを日本に留学していた(早稲田大学尾島研究室)中国人が日本の建築学会の機関誌でレポートしている点は、日中の建築界が文字通り双方向に連結しつつあることを示している。80年代末前後にはこの崔の論説のほかにも中国人の記事が相次いで掲載されている。89年の黄衛民による「《中国風景》か《世界風景》か」(K162)では、中国人学生として執筆者自らが世界の集落を回ったときの体験が示され、90年の同済大学副教授の阮儀三による「中国における歴史文化名城保護の現状」(K164)

では、中国の歴史文化都市を6種類に分類しそれぞれの類型について主に政策的な現状が紹介されている。窑洞住居や文化遺産保存についての言及が主であり、これらは当時の日本建築界が中国のヴァナキュラー建築、伝統建築とその保存に大きな関心をもっていたことに呼応した記事であると思われる。

時代が下るにつれ、中国人による記事はさらに増加する。2003年の特集「アジアのなかでの日本建築」における記事「アジアからのメッセージ」には、2002年の第4回アジアの建築交流国際シンポジウム(ISAIA)に参加した中国人研究者たちの日本へのメッセージがいくつか掲載されている(K199-K205)。2006年の特集「中国—そこに日本の建築世界はどう関われるか」でも、日本の研究者や建築家以外に中国人のデヴェロッパー(K216)、建築家(K217)、建築教育関係者(K218)などにも等しくインタビューが行われて記事になっている。

なお、2005年には前年に開かれた第5回ISAIAでの周暢による基調講演が「北京—伝統文化と現代文明の衝突の都市」(K210)という記事となって『建築雑誌』に掲載された。これは1950年以降の北京の建築の歴史を概観したもののだが、オリンピック関連の建設プロジェクトも図版とともに紹介され、外国人建築家の中国におけるプロジェクトにも言及している。『建築雑誌』では全体を通じて2008年の北京オリンピックの施設についての言及はほとんど見られない。この記事で国家体育場や水泳場が簡単に紹介されているのみである。これは『建築雑誌』の中国関連記事が、建物や人物に沿って執筆されるような一般の建築系雑誌とは異なり、各号の特集テーマの中で、各執筆者に記事の論題設定がある程度自由にゆだねられているからだと思われる。

新しい中華趣味としてのヴァナキュラー建築への視点

1985年11月号の「中国建築概説」特集における、日本大学教授の青木志郎らによる「中国の窑洞建築」など3編の中国関連記事(K149-K151)は、それまで学術論文などでばらばらに伝えられていた中国黄河流域の伝統形式住居の論考をまとめたもので、戦前の伊東忠太や軍関係者の記事にも見られた「穴居」を、現代社会に残る実用的な住居として読みなおそうとする報告記事である²¹⁾。

こうしたヴァナキュラー建築への興味、すなわち中国の建築を自分たちの世界とは違うものとして認識し、技術論というよりは人類学的な興味で見ようとする傾向は、90年代前後により熱を帯び、中国のヴァナキュラー建築研究として学術的な姿をとるようになった。実際広大な国土をもち少数民族も多く、気候の上でも経済成長の上でも地域差の大きい中国には、今日に至るまで土着的な建築があちこちに残っており、90年代前後から日本人研究者が実際に渡航・調査し、それに関する書籍も多く残されている。『建築雑誌』の記事として残っているものとしては、奈良国立文化財研究所の浅川滋男と東京理科大学の高岡えり子が学会農村計画委員会において口頭発表を行っている1993年の日本建築学会国際交流振興基金事業報告がある。「中国貴州少数民族の住居と集落に関するシンポジウム」(K171)という記事で、これは貴州トン族住居調査委員会(代表:田中淡)が住宅総合研究財団の助成をうけて、1988年から90年までの3年間の間に貴州東南部を対象にトン族の住居と集落を調査してきたものをまとめたシンポジウムについての記録である。また99年と2000年に地域計画事務所の佐々波英彦が司会を務めた学会の特別研究部門研究懇談会「アジアの歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?」(K183-K185)では、ベトナム、西安、蘇州、シンガポールなど居住の例を日本にいる研究者がそれぞれ論じて意見交換している。建築史・建築計画学のみならず、考古学・人類学の研究者も一緒に関わった学際的なプラットフォームとしてこういう中国のヴァナキュラー建築研究が位置付けられていたことがわかる。

同時にこうしたヴァナキュラー建築への視点は、学術的な形ばかりをとらず、より気軽に、自由に中国を語るきっかけ

21) 窑洞については、1985年11月に中国建築学会の主催で「国際生土建築学術会議」が開かれ、ここで各国の研究者による生土(焼かない土)を主材料とする建築について議論がなされた。これは中国建築学会が主催した最初の国際会議であり、中国の建築界が自身の風土的なものを対外的に主張した最初期のイベントととらえられる。K154がこの会議のレポートである。

を生み出した。東京電機大学の阿久井喜孝は1987年に「中国・重慶にみる河岸丘陵の都市集落」(K157)で水運の要衝である重慶の環境や地形にあわせた建築の構成についてエッセイを残している。92年には「中国西南少数民族に息づく伝統木構造—風雨橋」(K169)で広西省の山岳地帯にある屋根付きの木造橋について、さらに99年には「中国・雲南省・大理市大理天主堂」(K184)で海外の事情を知った華僑によって1938年に大理に建設された天主堂について、紹介的コラムを発表している。90年に鹿児島大学の土田充義は「中国のアーチ橋建設」(K165)で承德のアーチの石橋を紹介している。91年に大阪市立大学の藤田忍は「中国小康住宅のパーспекティブ」(K166)で北京の再開発モデルとしての小後倉小区についてのエッセイを書いている。これらはどれも1枚の大きな写真と短い文章で構成されたエッセイ風の短い記事で、こうしたものは日本人の中国渡航が容易になり、ある程度自由にあちこちの写真を撮ってくるができるようになったことから可能になった記事であると言える。興味の対象を軽く紹介することが目的のこうした記事は、実際の現代の建築学とはいささか距離を置き、骨董趣味的に中国建築をめずらしいものとして眺めまわしているようにも見える。それで言うところの中国への興味は、俗世を離れて文人的に中国を眺める、新たな中華趣味的態度と言えるようなものである。「新たな」と呼んだのは、江戸時代の漢学が当時そのようにして中国を見ていたからである。現実の中国とは離れためずらしい中国取り上げてそれを愛でる視線が、こうした日本建築界からの中国のヴァナキュラー建築に関するエッセイにおいては見て取れる。

現存する近代建築の検証

また、中国に残る近代建築に対する認識も、中国への渡航が可能になりよりつぶさに現状を見ることができるようになった1990年代以降、具体的な認識対象として注目されるようになる。これはⅡ期の戦前戦中において日本人が中国大陸で行った建設行為を歴史化する過程であるとも言え、日本建築界は新しい学術的な認識先を中国においてこのとき発見したとも言える。こうした近代建築への視線は、ごく初期にはノスタルジックな懐古的記事として現れている。芝浦工業大学の相田武文による1995年の「中国・大連の住宅」(K176)は、大連理工大学の客座教授となって交流を受け持った執筆者が、実は終戦をはさんだ2年間大連に暮らした経験があり、その場所を訪れた時の複雑な感情を吐露したものである。元・矢橋大理石(株)顧問の折戸嗣夫は1997年に「会員の声」の欄で「中国残留建築への愛情」(K181)というタイトルで、自分が戦時に関わった旧上海日本総領事館(記事執筆当時は中国の某機関に使用されていたことが記事に書いてある)を戦後再訪して愛着を感じたことを記している。「残留建築」とは折戸の言葉であるが、「中国残留日本人孤児」からきた言葉なのであろう。

すでに1985年から東京大学の藤森輝信らは東アジアの広い範囲にわたって近代建築の調査を開始しており、その痕跡は村松伸の「朝鮮総督府と毛主席記念堂：アジアの建築を見る目」(K152)にわずかに残っている。10年後の1995年に村松はこの歴大な調査の総括を報告書に残している。その「あとがき」で村松は、自分たちのこの調査が20世紀初頭の伊東忠太のアジア建築調査と違う部分を、1. 現地の人々との調査における協働、2. 発表や出版を通じた調査成果の地元への還元、と説明している²²⁾。残念ながら『建築雑誌』においてはこの調査に関する記述はほかには見当たらないが、こうした日本を起点にした中国近代建築への双方向的な調査は、建築史学の新しい方法論として、この後日本の建築界において広く共有されることになる。

『建築雑誌』において「中国にある日本人の関係した建築物」を扱う記事が登場するのもそうした共有の影響によるものであると言える。梓設計本部主管の田中重光は2002年の「建築のアジア—世界の植民地建築」連載記事の中で「上海(中国) 日本最古の鉄筋コンクリート造小学校」(K191)を書いている。これはかつての上海日本尋常小学校校舎の西側に現存する拡張部分(1915—1917年竣工)が、従来説の下田菊太郎によるものではなく、ノルウェー人建築

22) 村松伸「あとがきに代えて」『全調査 東アジア近代の都市と建築』藤森照信・汪坦監修 筑摩書房、1996年、p519-521

家イー・ジェー・ムラーによるものであり、この建物が日本国内外での最初の鉄筋コンクリート造建築として、1920年竣工の神戸の須佐小学校に先んじるものであるという主旨で書かれている。2003年には西澤泰彦が「中国・東北地方「満鉄建築」の横綱」(K207)を田中と同じ連載枠で発表している。台湾総督府から南満洲鉄道株式会社に移った小野木孝治を中心とする満鉄創業時の建築組織が、各地から多様な人材を集め、「当時の欧米列強と同じような支配(植民地経営)能力を示すものであった。大連ヤマトホテルや奉天駅は、その代表であり、その役割を十分に果たした」とまとめている。西澤はその著書『日本植民地建築論』において、自らの植民地近代建築研究の意義について、日本の植民地支配下における建築という「モノ」を把握し分析し批評することを通して、当時の社会システムの把握・分析・批評することに繋がれると述べている²³⁾。『建築雑誌』にはこれらの研究の成果は軽いエッセイの形でしか出て来ていないにせよ、現存するアジアの近代建築を検証しようとする視線は、こうしたエッセイを通じて日本の建築界の中で広く共有・伝播していったと思われる。

アジア建築という枠組み

IV期には、中国を単なる日本の隣国として一対一の関係で見のではなく、広く東アジア関係の中で見ようとする方向が生まれている。1994年の日本建築学会の活動レポート「中国建築学会ならびに大韓建築学会との協力協定の締結ならびに中国建築学会訪問報告」(K173)では、尾島俊雄学会副会長が先導して中国と韓国の建築学会との交流協力協定を結んだ経緯が紹介されている。そこでは建築士の資格制度の問題、建築教育、建築と都市計画の関係について、の3点について三国間で問題の共有が図られたという。このあとの『建築雑誌』には関連する記事が集められている。例えば中国の建築教育については94年に早稲田大学山口幸夫による「同済大学建築都市計画学院の建築教育」(K174)、97年に丹下健三都市建築設計研究所の胡宝哲による「日本と比較の視点からみた中国における建築デザイン教育 清華大学建築学院を例として」(K179)、同年に構造計画研究所の郭献群による「大連理工大学にみる中国の建築関連学科の教育事情」(K180)などの記事が掲載された。

2003年には布野修司編集委員長の下、2月号で特集「アジアのなかの日本建築」(巻頭言 K192)が編集され、中国関連記事もここに集中している。これは『建築雑誌』創刊1500号の記念号でもあり、冒頭に収録されている鼎談や対談は、2002年に重慶で開かれた第4回ISAIAのシンポジウムを採録したものである。中国・韓国・日本の三学会の主催で開かれたこのISAIA(アジアの建築交流国際シンポジウム)は、1986年から始まり当時すでに4回を数え、英文論文集『JAABE』が発行されるなど、徐々にアジアというくくりでの実績が積み上がりつつあり、『建築雑誌』もこのイベントとの連動を明確にしていることがわかる。三国学会イベントに合わせて編まれた記念号であるからか、アジアでも特に日中韓の三国関係がここでは語られている。布野は「アジア建築の未来」(K193)という鼎談のなかで、建築教育制度の国際化について「1999年に、中国がUIAの基準にしたがうことを決めて、われわれは少なからずショックを受けました。日本が中・韓両国から孤立したという感じがしたからです」と述べている。これは、日本が、4年制の大学学部教育課程をもつアジアの三国を束ねて、建築教育の国際規格をここから発信しようとしていたのが、中国が抜けて5年制に変更したために日本の思惑が失敗に終わったことを示す出来事についての言及である。これは日本がこのアジア三国の枠組みにある程度の期待を持っていたこと、そして同時にその枠組みがそれほど堅固なものではないことを示すことになった。

国立民族博物館助教授の佐藤浩司は同号所収の座談会「アジアの住居集落研究の課題」(K195)において、自らの研究者のキャリアについて、最初はアジアの農村の研究をしていたが、そうした閉ざされた伝統社会の研究が次第に現実離れたものに感じられるようになり、イデオロギーを共有しないまま集まって住んでいるソウルのアパート居住者

23) 西澤泰彦『日本植民地建築論』名古屋大学出版会、2008年、p4-5

の住まい方の研究にテーマを移行したことを振り返っている。そしてアジア的枠組みなるものについて、「西洋近代化自体が一枚岩でないことはわかっているから、20年前、私が研究を始めたころにアジアと騒いでいたほどの意味はもうないと思います。いまはアジアというイデオロギーで何かが解決できるとは考えていません」と述べている。この発言も当時の日本の研究者の実感としての、アジアという枠組みの脆弱さを示している。また「アジア建築遺産の保存修復と技術協力」(K196)の座談会のなかでは、日本の建築史研究者や文化遺産保存の専門家たちがアジアの遺産保存について議論しているが、そこでもなかなか共通の話題の基盤を見いだせていない。

一方、構造と防災の専門家による座談会「アジアへの技術援助と技術移転」(K197)では、東京大学都市基盤安全工学国際研究センターのセンター長魚本健人が、欧米に追い付こうとやってきた昔の日本の成長モデルが、それではいつも完成技術の輸入に終始してしまっていて世界の上に立てないからということで、基礎に戻ってゼロから立ち上げようとする姿勢が今のアジアにも見られつつあるとし、「日本を含めてアジアの方々は、取り入れるものはどんどん取り入れて、自分たちなりの文化に合うようにどんどん直しています」と述べている。こうした魚本の現状把握は、アジアはヨーロッパという外部世界を持つことで国を越えた共通性を見出しうるという指摘にもとれる。防災の世界ではまだアジア的枠組みは有効であるという印象を与える記事である。

またこの特集には、日本に留学経験のあるアジア各国からの留学生が、日本で学んでいた時のことを振り返り今の自分を紹介しているコラム「アジアからのメッセージ」が設けられている。北京工業大学の助教授でかつて昭和女子大学の平井聖の下で学んだ胡恵琴は、「日本建築学会は研究者の揺籃」というタイトルで、自らの学位論文の研究テーマである中国の伝統的住居に関する資料が、「中国より日本のほうがはるかに多く、私の指導教官である平井先生の中国建築に関する書籍は中国建築学会より揃っていて大変助かった」と述べている。このコラムへの寄稿者は、日本で学位を取得した海外の大学教員や第4回 ISAIA の参加者を中心として選ばれたそうだが、彼らの現在の所属をみると、アジアで生まれ日本で学んだ人達が今や世界中に散らばって働いていることがわかる。

これらの記事に見られる、アジアという枠組みの多様性は、有効なものもそうでないものもあったにせよ、日中関係がすでに二国間だけのものではなく、広く国際的な関係の中にあるということを示している。

後から急速に追いかけてくる中国に向けての日本からの情報発信

改革開放政策を取り始めたIV期の中国の成長は著しく、それは中国情報の日本への伝達経路にも影響を与えた。当初は中国の出来事を拾ってきて日本に伝えるだけだった『建築雑誌』の中国関連記事も、やがて中国の後追い成長が加速されると、敏感にその変化に呼応するようになり、中国の状況がその誌面に影響を与えるようにすらなる。

都市プランナーの石東直子は1985年の「天津大学での教鞭」(K138)で、自分が客員教員として教えていた天津大学での授業を回想して、その「恐ろしいほど熱心」な学生たちの態度に驚きと感謝を表明している。後から発展しおいつこうとする国の成長の激しさを垣間見ることができる。

文化財保存計画協会代表取締役の矢野和之による2000年の「交河故城の保存事業 中国・新疆ウイグル自治区砂漠地域における土建造物の遺跡保存」(K186)は、特集「アジアの世界遺産を護る」のなかの記事である。交河故城は、中華人民共和国成立より以前に日本の大谷探検隊が調査に入っていた経緯もあり、61年に中国で全国文物保护单位に指定された後、ユネスコのもと90年代から日中国際協力事業として保存事業が進められた遺跡である。矢野はこの一部の修復とマスタープランづくりに関わったときの経験から、「日本ではさほど難しくない技術が、現地では簡単にできないことがある。ただ日干しレンガや版築など、現在でも伝統的工法が残っており、この伝統技術をうまく活用することが一つの打開策となり得ると考えられる」と言い、経済的に進んでいる日本から中国の後進性のみを言うのではなく、対等な視線に立って中国に違いを見ている姿勢がうかがえる。

アーキヴィストの中原まりは、2003年1月の日本建築学会内における建築博物館の設立に向けての準備作業として、2002年4月号より10月号まで「建築博物館が欲しい!」という連載を発表している。最終回「アーカイブいろいろ 中国のアーキテクチュラル・アーカイブ事情」(K190)で中国のアーキテクチュラル・アーカイブを紹介しており、中原は「欧米と比較すると、東南アジアの建築資料保存に対する対応は大幅に遅れているが、そのなかでも中国は先進的に活動を行っており、参考にすべき点が多い。今後、日本と中国が協力して、東南アジアにおける建築資料保存問題のリーダーシップをとれるような環境を形成することが望ましい」として、中国の先進性を認め、アジア的枠組みのなかでの日本との協力関係を描こうとしている。

トータルシステム研究所代表で、学会の「中国の住宅におけるエネルギー消費と居住環境問題特別研究委員会」幹事の北原博幸は2005年の「今伝えたいトピックス」の欄で「中国における住宅の居住環境とエネルギー消費」(K211)を発表している。そこでは中国のエネルギー消費がここ20年間で大幅に増大しており、とくに冷暖房にかかる消費量の増加が著しいという事情から、過去3年にわたって特別研究委員会でこの問題について検証をすすめてきており、上海のような多湿地域では日本で有効とされる夜間換気が必ずしも効果的でないこと、除湿ニーズが日本より高くなるであろうこと、などをその結果として発表している。遅れて成長しつつある中国に対して、先達の日本から建築界の専門的な知見を伝えようとしている記事である。中国で欲されるであろう情報を掲載しているという点で、中国の状況が『建築雑誌』の誌面構成に影響を及ぼしているとも言える状況がここにはある。

2006年以降ふたたび中国の研究資料が「文献抄録」として取り上げられるようになっていのも中国の後追い成長と関係していると思われる。これらは1990年代の「抄録」に比べてより直接的に日本の状況と連結しているものであり、同時代の中国の研究成果を日本が貪欲に吸収しはじめている結果であるとも言える。90年代までの「抄録」が、知らない国のデータを参考までに知っておこうという程度の動機に基づくものであったのに対し、このころの抄録はもはや中国の実験データをそのまま見せてもらってこちらでも使わせてほしいというような意図が感じられる。2006年には早稲田大学の高野恵子が「中国古代、夏・殷の都市に関する考古学関連文献2題」、「偃師二里头遺址4号宮殿基址研究」、「垣曲商城遺址的発掘與研究—紀念垣曲商城發現20周年」の3編の考古学に関する文献抄録(K212)を残しており、これらは近年の中国で考古学上の発見が相次ぎ中国の古代史観が大きく書きかえられていることを伝えている。2007年の竹中工務店技術研究所の若井修一による「中国の虎跳峡地域における岩混り土の工学的特性」(K225)という構造に関する抄録は、中国南西部の傾斜地に広く分布する岩と土の混合地盤(岩混り石)の強度実験の結果を伝えるものである。地すべりや河川浸食によって崩れた岩が堆積して作られた岩と土の混合地盤(岩混り石)の力学特性を知ることによって地すべりのメカニズムを把握しようとする中国のこの研究を、日本人が翻訳しているのには、高まる日本国内の自然災害対策への関心という、日本が同時代的に欲している情報がそこに書かれているからであろう。2008年の東京電機大学の百田真史による「中国における氷蓄熱の適用について」(K229)という抄録は、高度成長に伴う消費エネルギー低減のための氷蓄熱技術に関するものである。百田によれば、中国人の研究者の間では欧米のそれより日本の冷蓄熱技術への注目度が高く、日本の技術者が中国ニーズを把握するためにこの抄録を作成したという。こうなるともはやこうした抄録は、知らないものを共有するとか進んでいる知見を輸入するとかというような一方向の情報伝達ではなく、双方のニーズがリンクしながら循環的に情報がやりとりされている状態を示していると言える。

中国への期待と積極的評価の増加

85年4月の小特集「中国建築界との交流」では、早稲田大学教授の尾島俊雄が「激変する中国建築界の展望」(K137)と題して中国の開放とその変化を強調している。尾島は1979年から80年にかけて中国科学院の招聘で7ヶ月間中

国の各地を見て回り²⁴⁾、文化大革命から立ち直りつつあった大学や研究者・指導者たちと深く討議したという。尾島は中国の近代の変化は大きく3回あるとし、「中国が世界に向けてテークオフした第1回目の辛亥革命(1911年)、第2回目の解放(1949年)、そして今日の開放都市政策(1984年)」をそれぞれホップ・ステップ・ジャンプであって、これで21世紀に突入すると指摘している。

1985年の「改革に直面する<中国>建築科学技術」(K142)は、建設部科学技術局長の許溶烈による著作の紹介と、それに対する建築研究所の渡辺俊一による付記からなっている。渡辺は開放政策にある中国当局の主要な目標が生産の効率化に向けられており、建設業についてみれば「上部機関によって生産が計画的に指示される方式から、複数の企業による競争を前提とした自主的生産方式への移行」であるとして、市場原理を導入した社会主義への移行を予言するような内容になっており、これからの成長を期待していることがわかる。

建築家にとってはこの急速に変化する中国社会はどうとらえていいかやっかいな対象でもあったに違いない。磯崎新は2003年の「アジアのなかで世界建築の将来を展望する」(K194)の中で、「中国の場合は設計スピードが猛烈に速い」「だから設計事務所の連中は考える暇がない」「中国はとにかくけた外れで、まるで狂乱状態に陥っている」と言う。磯崎にとってこの言い方は実際は反語的なものである、というのも彼はこのあと中国の仕事を取り、実際にこの狂乱状態の中に足を踏み入れていくからである。

また2006年12月号では中国の急速な成長にフォーカスをあてた特集「中国—そこに日本の建築世界はどう関わられるか」が編まれ、責任編集を務めた筆者は「現在かの地でわれわれの隣人が直面しているのは、今の日本にいただけでは実感しづらい規模や速度のグローバリゼーション、アーバンゼーションであり、とても現代的な問題がそこにはあると思う」(K224)と言い、実際に両国を往来して関係を持っている日中の建築関係者の論説、ディスカッション、インタビューを集めている。村松伸は巻頭の論説「日本建築は中国といかに向き合うか—2000年の交流の後に」(K213)で、「日本人は相変わらず、古きよき中国や日本建築の起源を求め、一方、中国人は、西洋建築の速習的役割や建築デザインの繁栄を表層的に習得することに性急となる」両国関係が、相互理解、協働、地球を支える協働意識の3つのキーワードから再構築されるべきだと説いている。ほかにも日本の中国研究者のコメントがいくつも集められているが、この特集で顕著なのは、実際に中国で建築実務をしている設計・開発関係者たちのリアルな、そこに可能性を見出そうとする発言であり、迫慶一郎「現在の中国は都市計画までも外国人に任せてしまう。これは本当に開放的だと感じます」(K214)、隈研吾の「建築を抽象化しようと思っても、この国でやったら絶対にフラストレーションが溜まるだけだから、抽象化の逆をやってやろうと思った。そういう意味では、建築の「粗っぽさ」をはっきり意識したのは、中国での経験が影響しているかもしれないですね」(K218)などがそれに相当する。

同じ特集での2人の中国人による中国建築へのコメントは、中国の現状をより多角的に描き出し、また将来の可能性を感じさせる視点を投げかけている。北京市建築工程設計公司副総経理の吳京海は「中国の設計事務所から見た日本人設計者」(K217)で、中国のプロジェクトで協働している日本の設計者の仕事ぶりについて「欧米の設計者は自分がやりたいことははっきりしていて、建築の表現力をもっと重視しているように見えます。ただし、その結果、彼らの提案を現在の中国の技術力と資金で完全に実現するのは難しいといえます」「日本人建築家は非常に国際的で、設計もとてもこまかいのですが、細かい所ばかりに気をとられ、全体を把握できない可能性もあるでしょう」と言って現在中国で働く外国人建築家の違いと、その中での日本人の特徴を言い当てている。また「中国のゼネコンは発展途上国において非常に競争力があります。もちろん人件費が安いということが大きな理由ですが、品質を保持しながら驚くほど速いスピードで施工するのが得意なので。中国人から見ると日本人は残業ばかりで、仕事をやりすぎているように見えますが、

24) このときの経験をまとめたのが以下の書籍である。尾島俊雄『現代中国の建築事情』彰国社、1980年

向こうの人はまったく同じような見方で中国人を見ている」²⁵⁾と言って、今の中国がグローバリゼーションの中で地球規模で人や金を動かしていることを日本の読者に伝えている。日建設計所属の中国人建築家である陸鐘驍は「日中の差異から生まれる組織戦略」(K215)のなかで「中国は世界中から建築デザインや技術を吸収している一方、逆に影響を与えてくれているものもあると思います。例えば、中国プロジェクトの特徴といえば、もうひとつは分離発注です。ゼネコンは躯体構造、設備のサブコンは取り付けだけを請け負って、一般的に主要建材や設備機器はほとんど施主が指定するケースが多いです。今後、経済的な理由から日本のマーケットもゼネコン主導の時代からどんどん変わっていくと思うので、今、中国で経験している機動力・現場の対応の技術というものが、実は今後日本にも与える影響があるのではないかと思います」と言い、中国が受信から発信の立場にシフトしつつあることを指摘している。

小括:同時代で変化する国への興味を増しつつ、迎合的態度も取り始める中国関連記事

この時期の日本の建築界は、同時代の中国社会への興味を増し、両国間の往来が容易になり留学生や専門家の交流が盛んになったこともあって、現地に滞在する日本人のレポート、中国人を巻き込んだ対談やインタビュー記事などがさまざまな形でメディア上に配置された。中国からの情報発信も盛んになり、中国人建築専門家の記事が日本の『建築雑誌』に直接掲載されるような例も見られる。中国各地に残るヴァナキュラー建築への人類学的調査や、日本人が戦争中に中国に残した建築を対象にした近代建築史研究なども、こうした同時代の中国への興味が両国の直接的な交流関係を生んだことで可能になった新しい建築学の形であったと言える。

またこの時期には、中国を単なる隣国として二国間の関係の中で見るだけでなく、広く東アジアの中の二国関係として捉えなおす動きが生まれ、アジア的枠組みの中で日中関係をとらえようとする記事が出てきている。執筆者はもはや日本と中国という枠にとどまらず、中国という対象を国際関係の中でとらえようとする記事が多く見られた。

そして2000年代に入ってから中国の急速な成長は、中国側のニーズが『建築雑誌』の内容にも影響を与えるという事態をもたらした。『建築雑誌』はただ中国のことを伝えるのではなく、中国の欲している情報を意識するようになっていることが、「文献抄録」の対象書籍選定などにおいて観察された。

25) 中国企業の発展途上国での影響力の強さは、すでに1985年の以下の記事で言及がある。「中国建設市場展望」(K147)。ここで日本のゼネコンの建設実務者が「中国はアフリカ諸国をはじめ第3世界から多くの留学生を迎えていることから分かるように、これらの国々への影響力は極めて強い。第3世界の旗手としての自負が強いということだろう。中国を通じてのアフリカその他開発途上国での建設事業での展開を、日本の建設業も考えてよい」という発言を残している。ここでの呉の発言は80年代中期のこの日本人の発言と平行なものであり、中国は80年代からすでにアフリカその他の開発途上国で一定の存在感を示していたことがわかる。

4 期の仮說的時期区分の妥当性の検証

第1章前半部分の1.1.節では、『建築雑誌』の全中国関連記事を、最初に記事の分布数とそれらが扱う論題や執筆の視点の推移から勘案して、仮說的に4つの時期に区分した。本節の中括を行う前に、この仮說的時期区分について、その妥当性をここで検証しておく。冒頭では記事数が相対的に減少している3つの時期を把握し、その間の4期を仮說的な分期とした。ここまでですでに、記事減少期に大まかに定めた3つの分期点について、各期の記述の中でその位置取りを検討してきたが、ここで改めて3分期点を同時に取り上げ、分期点前後の記事内容の変化を確認する。

●分期点[A]: 1920年の青島郵便局の建築概要記事(K042)の前後

1921年頃から31年頃の記事減少期に見られる『建築雑誌』の中国関連記事の分期点。当該記事のあとには、日本人が中国で実現した建築をグラビア紹介する記事(K042-K044)と満洲における日本人社会に関する記事(K045-K046)が集中している。これらはどれも、その以前の記事が、日本の大学教員などが短期で中国を訪問して中国についての知識の乏しい読者に向けて書いた報告記事とは異なり、中国において現地化する日本人社会そのものを伝えようとする記事へと変わっているものである。「現地化する日本人社会に着目するようになる転換」が見られる。

●分期点[B]: 1959年の平井聖の中国の書籍についての書評記事(K084)の前後

1944年頃から65年頃の記事減少期に見られる『建築雑誌』の中国関連記事の分期点。当該記事は中国人研究者の近代住宅史の書籍に関する書評であり、後には中国考古学の同時代の調査結果を伝える記事が続いている。これ以前の記事が中国を自分たち日本人で研究しその結果を報告しようとするものが多いのに対し、平井記事以降は、中国人の学術成果を積極的に日本に持ち込むものが増えている。「同時代の中国の学術成果を見るようになる転換」が見られる。

●分期点[C]: 1985年の清水正夫の日中交流10年を回想した記事(K136)の前後

1987年頃から2001年頃の記事減少期に見られる『建築雑誌』の中国関連記事の分期点。当該記事や、そのあとに続く尾島俊雄による日中の建設業界の実態比較記事など1985年4月号には日本からの中国の見え方を集めた記事(K136-K138)が集中している。それまでの記事が主観的評価をばかしたまま中国の情報をそのまま並べていたものが多いのに対し、当該記事以降、日本から中国がどう見えるかはっきりと解釈を織り込んだものが目立つようになる。「日本との比較で中国を見るようになる転換」が見られる。

以上のように、これら3つの分期点は、前後の記事内容の変化から考えて上記のような転換としてとらえられ、それらは節冒頭で示したようにおおむね3回の記事数の減少期に対応して位置づけられる。これらの分期点の間に形成される4期は、結果として以下のようなものになる。すなわち、I期は1887年の雑誌創刊から1920年K041までであり、明治から大正にかけての、中国に旅行した経験のある特殊な執筆者層による中国紹介が主で、記事数は時に集中もみせながらもある程度広く分布している。II期は1920年K042から1957年K083までであり、大正から昭和30年代初期にかけての、満洲も含んだ中国大陆に深く入っていった日本人とその建築に関する記事が主で、記事数ゼロの時期も長く含み分布にムラがある。III期は1959年K084から1985年K135までであり、昭和30年代初期から50年代いっぱいにかけての、やはり限定された中国渡航者による中国の学術成果を紹介する記事が主で、記事数は特集によって多数集中する年代と記事ゼロの年代が同居するなど極端な分布を見せている。IV期は1985年K136以降であり、昭和末期以降の、軽い読みものも含んだ日本と中国を比較するような記事が主で、記事数は欠けることなく毎年分布し特集以外にも中国の情報が一定数出現している。

さらにこれらの3つの分期点について、別の角度からの検証を加えるために、日本の建築界の中国認識に大きく影響したと思われる、日中双方の政治経済上の近現代史の分期との比較を行う。『建築雑誌』の中国関連記事の4期の仮說的分期と、日中それぞれの近現代史分期を重ね合わせた比較図を以下に示す(図1.1.e.-1)。

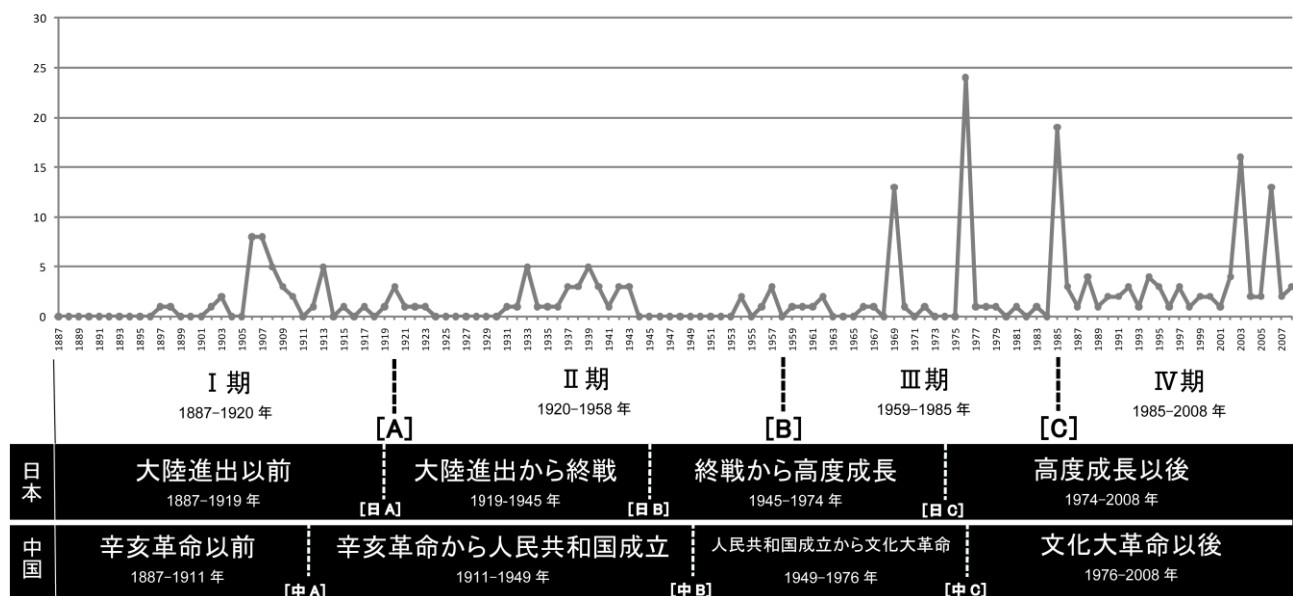


図 1.1.e-1: 『建築雑誌』における中国関連記事数の分布・分期(1887-2008 年)と日中双方の国内状況の比較図

ここではすでに本節の各期の定性的分析で見られた中国関連記事の論題や視点の転換を念頭に置きながら、政治経済上の大きなイベントを拾い上げることでこの比較図を作成した。日本側の政経近現代史には分期点を3回見ることができ、[日 A]: 山東半島の権益を列強に認めさせのちの大陸進出の地歩を築いた第一次世界大戦終結の1919年のパリ講和会議、[日 B]: 大陸進出を中断した1945年の終戦、[日 C]: 国内総生産がマイナスに転じた1974年の高度成長の終了、であり、これら3つの分期点により4期(大陸進出以前、大陸進出から終戦、終戦から高度成長、高度成長以後)に分けられる。中国側の政経近現代史にもやはり3回の分期点を挙げる事ができる。[中 A]: 清朝消滅と中華民国成立の1911年の辛亥革命、[中 B]: 1949年の中華人民共和国成立、[中 C]: 1976年の文化大革命の収束、であり、これにより4期(辛亥革命以前、辛亥革命から人民共和国成立、人民共和国成立から文化大革命、文化大革命以後)の区分が成り立つ。むろんこれらの区分は別の年代に分期点を移動したり、分期点を追加してより区分を細かく設定することも可能ではある。歴史解釈には幅があり、たとえば[日 A]を1919年の日本の山東半島の利権獲得ではなく大陸への具体的な軍事的進出が開始された1931年の柳条湖事件／支那事変の起点で考えると、[中 D]として中国の1980年代後半の改革開放路線への転換を設定し分期を増やすこともありえるだろう。ただし、ここで作成された政治経済史での分期年表は、『建築雑誌』の記事の推移からおおまかにわけた分期と比較するために再構成されたものであり、その分期イベントは建築メディアにおける記事の転換内容と呼応するものの中から選択している。また拾い上げる日中の政治経済上のイベントは、両国「それぞれに」内在する変化を基本的な選択肢とし、日中間に「共通する」事件をアприオリにあてはめることはしていない。例えば日中間の初めての近代的な国交関係が樹立された1871年の日清修好条規締結や、1972年の日中国交正常化をこれらの分期点としては取り上げない。これは日本の中国認識を考える上では、両国双方からの事情のずれを見ることにこそその本目があり、共通するイベントで強制的に同じ区分を設定してしまうと、検証が粗くなると考えたからである。

[A]の「現地化する日本人社会に着目するようになる転換」は、[中 A][日 A]の転換どちらにもやや遅れて出現している。これは日本人が中国大陸で現地化して建築を作ることができるようになるのは、中国に辛亥革命を経て自治政府による統治が成立するくらいの内政状況が必要だったことを示しており、また[日 A]のほうが[中 A]より[A]に近接しているのは、日本が大陸進出してから現地での建築の整備が迅速で、またメディアがその動きに遅れずに追従して国内に報道した結果ともとれる。

[B]の「同時代の中国の学術成果を見るようになる転換」は、[日 B][中 B]の転換どちらにも遅れて出現しているが、これは戦争という大きな出来事が終わり、日本の建築メディアが息を吹き返して外国事情に目を向けるまでの時間がこれだけ長かかったことを示している。日中近現代史の転換点どちらに対しても大きく遅れて出現しているのは、戦争前後での建築メディアの立場変更の大きさを示すとともに、この時期の日本の建築界の中国認識が、国交がない状態で中国に関する情報が少なく、意識形成の動きが緩慢であったことも関係していたと思われる。

[C]の「日本との比較で中国を見るようになる転換」も、[日 C][中 C]のどちらの転換よりもかなり後れて出現している。これは[C]の転換が、冷静な二国間関係をベースに豊富な両国間での情報のやりとりがあつてこそ初めて成り立つことに由来しており、文革収束後の中国に日本からの訪問が自由に行われるのに、また中国の成長が軌道に乗って日本からの興味を引き付けるようになるのに、これだけの時間がかかったことを示している。

このように、『建築雑誌』の記事の分布数とそれらが扱う論題の推移から仮説的に設定された4つの分期は、日中両国の政治経済上の近現代史分期に対して、年代は完全には重ならないものの、それに遅れること3回の転換点を観察でき、4つの時期区分をもつという点でゆるやかに一致していることがわかる。このゆるやかな一致は、本節冒頭で掲げた仮説的時期区分の妥当性を、各期での検証とは別の角度から支持していると言える。

中括:4期の中国関連記事における情報伝達手段の通時的比較—手段の拡大とその反復

以上、本節冒頭で掲げた仮説的時代区分の妥当性が検証され、『建築雑誌』における中国関連記事は3回の転換を内包し4期に区分することができることが明らかになった。その上で、あらためて本節の中括を行う。本節では中国に関する情報が記事として日本の建築界において共有されるまでに、いかに情報が伝達されたかという「情報伝達手段」を把握するために、期ごとに以下の分析を加えた。すなわち 1) 中国に対する関心の高まりの推移を把握するために、記事数の時系列変化をたどり数量的把握を行った。また、各期でどういう執筆者がどういう形で中国関連記事を残しているのかを知るために各記事の「執筆者の属性」、「記事形式の属性」を分類し、その傾向を把握するために数量分析と定性分析を行った。2) 時系列に沿ってそこで扱われた記事論題を分類し、内容的に重要だと思われる記事についてレビュー形式で論題、論調について言説分析を加えた。ここで、『建築雑誌』の中国関連記事の4期ごとの定性的な言説分析の結果を比較表にして示す(表 1.1.e.-1)。

時期区分	I	II	III	IV
期間	雑誌創刊から1920年の記事論調変化まで(1887-1920年)	1920年の記事論調の変化から58年まで(1920-1958年)	59年の記事論調の変化から85年まで(1959-1985年)	85年の記事論調の変化から2008年まで(1985-2008年)
執筆者と記事形式の属性に見る中国情報伝達手段の特徴	大学人と役人を主とする口述筆記、記録中心の情報伝達手段	大陸にいる日本人が加わった、論説・口述筆記・視覚情報による情報伝達手段	大学研究者を主とする論説中心の情報伝達手段	民間や中国の専門家が加わった、多方向で相対的な情報伝達手段
記事数の分布による数量的裏付け	計41編/1906年に急増し1909年まで。1913年にも単年で記事の集中あり	計42編/1920年から23年、31年から43年、54年から58年まで記事にまとまった分布あり。第一次大戦後満洲事変までと終戦前後は記事分布せず	計52編/1969年、76年の2年に、中国関連の特集号による記事の集中あり	計94編/1985年、2003年、06年の3年に、中国関連の特集号による記事の集中あり
執筆者の属性と記事形式の属性	執筆者はほとんどが日本の教育機関所属の研究者か役人/記事の形式は学会の講演をそのまま文字にした口述筆記が主流	執筆者の所属が多様化。第三国(満洲国)の機関に属する者に依る記事も/記事の形式は論説が半数を占め、作品紹介も四期の中で最多	執筆者の所属は再び日本の教育機関に属する研究者が主流に/記事の形式は論説がほとんどになり、執筆者、記事形式など硬化傾向	執筆者の所属が多様化。中国人による記事の増加、日本の民間企業や第三国の機関に所属する専門執筆者の増加/記事の形式は3人以上の多方向の口述筆記や、軽い読み物としてのコラムの形式の増加も
レビュー式言説分析による、各期の中国関連記事の内容のまとめ	つながりを見つけ、それを利用しようとする中国関連記事	住宅という現実問題に没入する中国関連記事	遅れた中国に優れた部分を見つけようとする大人の態度に立った中国関連記事	同時代で変化する国への興味を増しつつ、迎合的態度も取り始める中国関連記事

表 1.1.e.-1: 『建築雑誌』4期の中国関連記事における情報伝達手段の通時的比較表

こうして見てみると、4つの時期区分は、中国情報伝達手段が相対的に限定的だった時期(I・III期)と、多様化した

時期(Ⅱ・Ⅳ期)とが交互に反復している関係にあることがわかる。これは戦後の日中関係の断絶がⅡ期とⅢ期の間にあり、戦後の国交正常化後にまた改めて日中関係が再構築されたことと関係していると思われる。実際Ⅰ期の明治から大正の時代は、日本が江戸時代の鎖国を終えてそれまで限られたチャンネルでしか接触の無かった清国や中華民国の社会について近代的な理解を構築し始めた時であり、Ⅲ期は1972年の日中国交正常化を挟んで断絶していた国交が限定的な交流チャンネルを通して徐々に回復させてゆく時期であったことを考えると、Ⅰ・Ⅲ期の両期はともに、自分たちがよく知らない中国世界に接触を始めた時期というように理解できる。そうした「知らない世界を知ってゆくプロセス」において、初期であるこの時期には、両国交流のための体制が十分に整っておらず、それが情報伝達手段の限定性につながっていた。そしてそうした状況は、Ⅱ・Ⅳ期において徐々に中国との関係が整備されてゆくなかで改善され、執筆者の属性や記事の形式が多様化することでその情報伝達手段も拡大していることが、本節での分析によって明らかになった。

また、Ⅰ・Ⅱ期とⅢ・Ⅳ期の2回の情報伝達手段拡大の反復は必ずしも同型ではない。日本の建築界にとってそれはどちらも中国という「知らない世界」を知ってゆくプロセスだったとしても、1回目と2回目ではそれは異なった形をとっている。レビュー式言説分析により明らかになった中国関連記事の内容が示すように、Ⅰ期ではまだ理解しかねている中国に対して日本の建築世界はとにかくなにかつながりや参照先をもとめ、つながりが見つかるとそれを日本の側の価値観から判断しようとする記事が多かったのが、Ⅱ期には中国理解がある程度進み、しかもそこ優位な立場でつきあえるようになると、こんどは中国を、住宅を建てるためのプラグマティックな場所として見るようになっている。こうしたプロセスは、意識の上で大国に後れをとっていた日本が、近代化に成功し中国を意識の上で追い越してゆくプロセスというようにも言えるだろう。一方でⅢ期は、戦後の立ち直りに出遅れた中国に対して、日本の建築界はそれを遅れていると見て見下すことはせずに、むしろそのいいところを探そうとする大人の態度の記事を多く残しているが、Ⅳ期の2000年代以降中国が急速な経済成長を遂げると、今度は中国への迎合的態度をはらんだ記事を生産するようになる。一度追い越した中国に今度は日本が追われているプロセスをそこに見ることができる。このように、1887年以降2008年まで『建築雑誌』の中国関連記事の内容においては、日本と中国の間での追いつ追われつの関係から生じた、反転関係にある反復が見られる。

1.2. 『建築雑誌』の中国観

『建築雑誌』全4期における中国観の抽出とその時期-論題分布

本節は本章第1章の後半部分に相当し、『建築雑誌』の1887年から2008年までの中国関連記事229編を改めて通時的に総覧し、その意味的な内容をより包括的に捉えるために、各記事の時期と内容の関係を把握するものとする。

そのためにまず、各記事の記述において執筆者が端的に中国についての要約的印象を示している箇所を「中国観」の発現ととらえ、該当するテキストを短文として抽出し発現の回数を把握した。結果156回の中国観の発現を採取することができた。これらをすべて巻末の別表K2に示す。

ここで得られた156回の中国観をKJ法によって分類し、それらの発現時期と内容上の分布の連関を考察する。4つに時期区分のラベル付けをした中国観を、内容の類似から分類整理したものを以下に示す²⁵⁾(図1.2-1)。

この分類の結果、各中国観は、日本の建築界が『建築雑誌』において中国を見る際に「どこを見ているか」というその中国観の「論題」という側面から、いくつかの共通した水準におけるまとまりとして構造化することができた。それらは大きくは、中国の広く目的を達成するための手段を見ようとする【技術に着目】論題、中国の人間集団の特性を見ようとする【社会に着目】論題、中国を地理・空間において見ようとする【場所に着目】論題の3つの大論題に分類することができる。例えば「海外の新しい技術を取り入れて発展を図っている(K148-1-IV)」という中国観は、中国の建築技術に関して着目しているものであり【技術に着目】論題の中国観として分類した。また「中国文化とは排他的である原理を突き通す(K144-3-IV)」という中国観は、中国社会一般の文化的特性について述べているものであり【社会に着目】論題の中国観に、「支那は土地が広すぎ二つか三つに分けた方が自然的帰趨に適う(K052-2-II)」は、その地理的な位置情報についての感想であり【場所に着目】論題の中国観というように分類した。さらにそれらは小さな論題に分類することができ、それぞれを大論題、中論題、小論題と呼ぶものとした²⁶⁾。以下では、『建築雑誌』1887年から2008年までの全中国関連記事において156回の発現が見られた中国観が、発現時期と論題との関係においてどのような比重をもって分布しているかを見ることで、当該建築メディアにおける中国観の通時的特徴を明らかにすべく分析を行う。

25) 各中国観に振られている番号は、最初の数字は中国関連記事の記事番号、次の数字は1つの記事の中に複数の対中観がある場合の順序を示す番号、最後のローマ数字は4期に分類された時期を示す。

26) 大論題を【】で、中論題を□で、小論題を◇で示している。

技術に着目 79

I 期

II 期

III 期

IV 期

より学術的技術 28

その学術研究一般 3

世界建築の中で支那建築は最も珍奇なるものの一つ
K023-1- I

満洲建築は独自に発展し日本と密接な関係をもつてくるだろう
K049-2- II

海外の新しい技術を取り入れて発展を図っている
K148-1- IV

その建築史 17

支那上代の建築は直線的で他の文明の影響を受けず
K033-2- I

支那建築は仏教渡来と共に発達
K023-3- I

支那古代建築の研究には古代文学研究が役立つ
K033-1- I

中国建築史研究は戦後ようやく中国学者の進出が顕著に
K093-1- III

中国建築史研究は戦後ようやく中国学者の進出が顕著に
K093-1- III

日本建築には絶えず中国の影響があったのではない
K128-1- III

日本建築に深い影響を与えた中国の歴史的文
K125-1- III

中国の住宅研究が再開したのはつい最近
K140-1- IV

中国建築の概説は容易ではない
K208-1- IV

日本の寝殿造りは中国の三合院の形式に属する
K155-1- IV

文庫は古い実際の建築が今は残っていない
K222-1- IV

研究資料は日本より遅れている
K199-1- IV

建築史研究が新しいものに偏っている
K222-2- IV

民家から見たところでは支那と日本は同一の文化過程に入る
K067-1- II

新旧の様式が共存し日本への影響が考えられる
K098-1- III

「穿鑿式」の日本建築への影響
K134-2- III

日本の古墳建築にもつながる中国の木造建築の形式
K133-1- III

研究資料は日本より遅れている
K199-1- IV

建築史研究が新しいものに偏っている
K222-2- IV

その文化財保存 8

遺跡発掘は日本より中国の方が速い
K087-1- III

文化財保護を強力に進めている
K102-1- III

文物の管理体制は日本より整備
K126-1- III

古建築修理工事の技術的内容は日本の方が細かい
K126-2- III

中国は都市整備に歴史的建造物の価値を認めつつある
K130-1- III

今の作風は日本と違い本物を壊して真物を造り出しているよう
K158-1- IV

先進的なアーキテクチャル・アーカイブの活動
K190-1- IV

日本と違い伝統工芸が残っていて遺跡保存事業にも使える
K186-1- IV

より職能的技術 51

その建築意匠と計画 15

支那家は平屋造を多し
K005-1- I

支那劇場の舞台の有様は日本と異なり大いに簡単
K007-1- I

支那の仏教建築は粗末
K015-2- I

支那人の建築は我が邦が垂直的なのに対し周期的反復が水平的に展開
K028-1- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

支那の建築は色彩の建築なり
K023-2- I

その建設 11

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

満洲の建築界は新京を中心に活況
K050-1- II

満洲国内では労働力が足りない
K064-1- II

その建築構造と構法 11

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

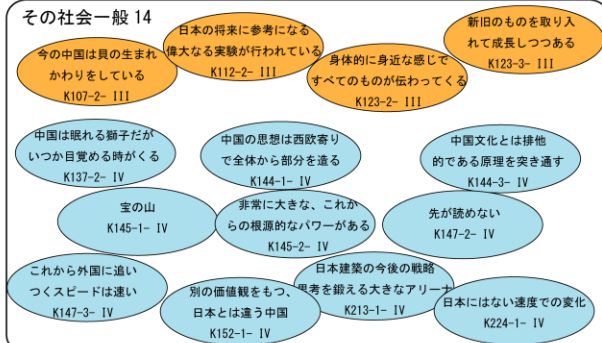
満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2- II

満洲の建築構造は煉瓦を主要建築材料として
K048-2-

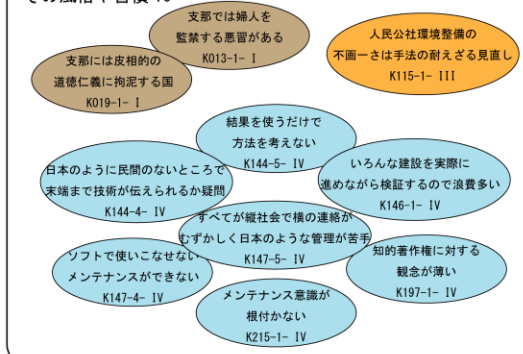
社会に着目 68

社会の内部 46

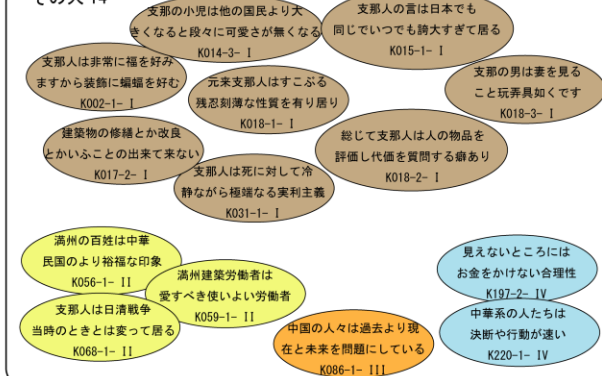
その社会一般 14



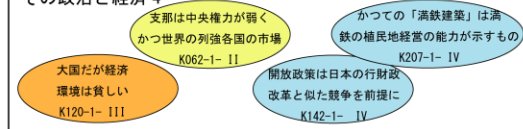
その風俗や習慣 10



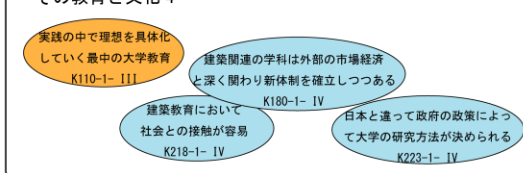
その人 14



その政治と経済 4

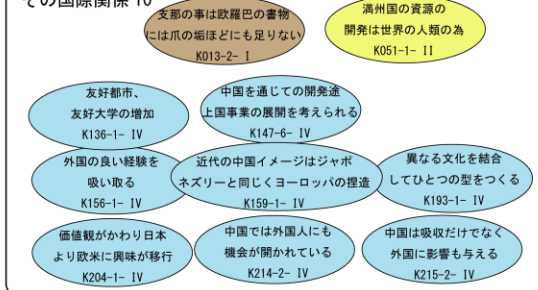


その教育と文化 4

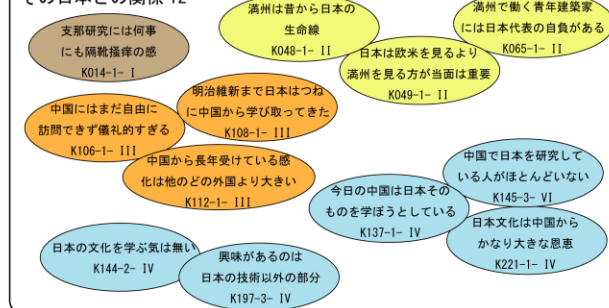


社会の外部関係 22

その国際関係 10

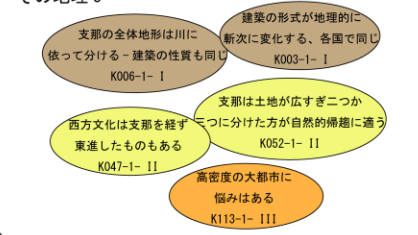


その日本との関係 12

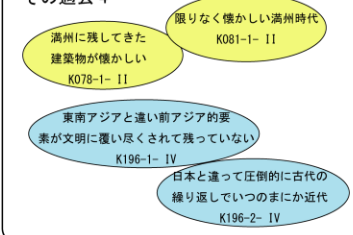


場所に着目 9

その地理 5



その過去 4



1.2.a. KJ 法による近現代日本建築界の中国観の内容分析

「技術に着目」論題の中国観

【技術に着目】の大論題は、中国において広く目的を達成するための手段に着目しているものであり、この論題を主たる立脚点として形成された中国観は、79 回その発現が観察された。

これらはさらに、各中国観の観察対象である技術の相違により 2 種類の中論題に分類された。建築を建てるための実務とは距離を置いてより学術的な技術を取り扱う[より学術的技術]を対象とした中論題、建設ビジネスや建築の実際の構築に関する技術について言及した[より職能的技術]を対象とした中論題の 2 つである。

1)[より学術的技術]中論題

[より学術的技術]中論題は、技術について語っているもののなかでより理論的・学術的な態度に立脚しているもので、この論題による中国観は 28 回観察された。

具体的にそれらは、中国の学術的技術が一般的にどのようなものか広く語る<その学術研究一般>、中国の建築史研究や歴史的建築物のあり方について語る<その建築史>、中国における文化財保存やその技術・運用に関して語る<その文化財保存>の 3 つの小論題に分類された。

2)[より職能的技術]中論題

[より職能的技術]中論題は、技術について語っているもののなかでよりビジネスや建築の実際の建設に着目しているもので、この論題による中国観は 51 回観察された。

ここではさらにそれぞれ<その建築意匠と計画><その建設><その建築構造と工法><その環境工学><その設計業界><その都市計画>の 6 つの小論題に分類された。

「社会に着目」論題の中国観

【社会に着目】の大論題は、中国の人間集団の特性を見ようとするものであり、この視点を主たる立脚点として形成された中国観は 68 回その発現が観察された。

これらはさらに、各中国観の取り扱う対象の相違により 2 種類の中論題に分類された、中国社会の内部を単独的に説明しようとする[社会の内部]中論題、中国社会を国際関係や日本との関係など周囲との関係から説明しようとする[社会の外部関係]中論題の 2 つである。

1)[社会の内部]中論題

[社会の内部]中論題は、中国社会の内部についてそれぞれ個別の側面から語ろうとするもので、この論題による中国観は 46 回観察された。

具体的にそれらは、話者の中国社会への大きな印象や時事的なその場の印象を語る<その社会一般>、中国人の特性について語る<その人>、中国社会において継続してきている傾向やしきたりについて語る<その風俗や習慣>、<その政治と経済>、<その教育と文化>の 5 つの小論題に分類された。

2)[社会の外部関係]中論題

[社会の外部関係]中論題は、中国社会がその外部世界である他の国や地域とどういう関係にあるのか語ろうとするもので、この論題による中国観は 22 回観察された。

それらはさらに、<その国際関係><その日本との関係>の 2 つの小論題に分類された。

「場所に着目」論題の中国観

【場所に着目】の大論題は、中国を地理的空間的ににおいて見ようとするもので、この論題による中国観は 9 回観察され

た。具体的のそれらは、[その地理]、[その過去]の小論題の2つに分類された。

小括:「技術」と「社会」の2つに大別可能な3段階の論題構造

以上 1.2.a.節では、『建築雑誌』の全4期の中国関連記事の記述をもとに、それらの中国観をKJ法によって分類し、その発現時期と論題の関係を包括的に捉えることを試みた。その結果、それは大きく2つ、すなわち中国の技術を見ようとする【技術に着目】、中国の社会、人間集団を見ようとする【社会に着目】に分けられ、さらに一部ではあるが、中国を地理的な空間としてとらえようとする【場所に着目】の論題を有していることが明らかとなった(図 1.2.-1)。

そして、それらの大論題は複数の中論題、さらにそれらは複数の小論題に分類することができた。【技術に着目】では[より学術的技術][より職能的技術]の2つの中論題とその下の小論題に、【社会に着目】では[社会の内部][社会の外部関係]の2つの中論題とその下の小論題に、【場所に着目】では中論題に相当する階層はなく、その下の2つの小論題に直接分類された。

1.2.b. 時期ごとの中国観の比較分析

ここからは、4つの時期に区分された『建築雑誌』の中国観が、どの論題にどれくらい分布しているか数字の上で相対的に比較することで、各期の日本建築界の中国に関する論題の共通点と相違点を考察する。

はじめに、前節のKJ法の分類によって階層化された、相互の連関がわかるような全体の構造において、前章でわけた4期の中国観がどのように分布しているのか、各中国観の発現時期を確認した上でその数量分布を一覧にした(表1.2.b.-1)。表中の数値は、縦軸に期ごとの中国観の分布数を絶対数と百分率で、横軸に論点ごとの中国観のそれらをとっている。

大論題	大計	中論題	中計	小論題	小計	Ⅰ期1887-1920		Ⅱ期1920-1958		Ⅲ期1959-1985		Ⅳ期1985-2008	
技術に着目	79					16	53.33%	14	53.85%	23	65.71%	26	40.00%
		より学術的技術	28			4	13.33%	2	7.69%	12	34.29%	10	15.38%
				その学術研究一般	3	1	3.33%	1	3.85%	0	0.00%	1	1.54%
				その建築史	17	3	10.00%	1	3.85%	7	20.00%	6	9.23%
				その文化財保存	8	0	0.00%	0	0.00%	5	14.29%	3	4.62%
		より職能的技術	51			12	40.00%	12	46.15%	11	31.43%	16	24.62%
				その建築意匠と計画	15	9	30.00%	3	11.54%	1	2.86%	2	3.08%
				その建設	11	0	0.00%	5	19.23%	1	2.86%	5	7.69%
				その建築構造と構法	11	3	10.00%	3	11.54%	4	11.43%	1	1.54%
				その環境工学	6	0	0.00%	1	3.85%	4	11.43%	1	1.54%
				その設計業界	5	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	7.69%
				その都市計画	3	0	0.00%	0	0.00%	1	2.86%	2	3.08%
社会に着目	68					12	40.00%	8	30.77%	11	31.43%	37	56.92%
		社会の内部	46			10	33.33%	4	15.38%	8	22.86%	24	36.92%
				その社会一般	14	0	0.00%	0	0.00%	4	11.43%	10	15.38%
				その人	14	8	26.67%	3	11.54%	1	2.86%	2	3.08%
				その風俗や習慣	10	2	6.67%	0	0.00%	1	2.86%	7	10.77%
				その政治と経済	4	0	0.00%	1	3.85%	1	2.86%	2	3.08%
				その教育と文化	4	0	0.00%	0	0.00%	1	2.86%	3	4.62%
		社会の外部関係	22			2	6.67%	4	15.38%	3	8.57%	13	20.00%
				その国際関係	10	1	3.33%	1	3.85%	0	0.00%	8	12.31%
				その日本との関係	12	1	3.33%	3	11.54%	3	8.57%	5	7.69%
場所に着目	9					2	6.67%	4	15.38%	1	2.86%	2	3.08%
			5	その地理	5	2	6.67%	2	7.69%	1	2.86%	0	0.00%
			4	その過去	4	0	0.00%	2	7.69%	0	0.00%	2	3.08%
総計	156		156		156	30	100.00%	26	100.00%	35	100.00%	65	100.00%

表 1.2.b.-1: 論題ごとの各期の中国観の数と割合(1887-2008年)『建築雑誌』156回

ここからは分布が集中し百分比が比較的高い数字になっている箇所を中心に、その比率の差から中国観の分布数の傾向を指摘し、その原因を考察することなどで、『建築雑誌』における中国観の発現時期と論題の連関の特徴を明らかにしてゆく。

大論題における4期の中国観の比較分析

すでにここまでで我々は、『建築雑誌』の1887-2008年における合計156回の中国観をKJ法によって分類整理した。この結果、意味上の類似から大・中・小の3段階の論題に分類した構造としてそれを把握している。以下ではそれぞれの論題のレベルごとに、各中国観の発現時期と論題の関係を検証してゆく。

中国観の分布数を期ごとに見ると、Ⅰ期からⅢ期まではほぼ横ばい(Ⅰ期30回、Ⅱ期26回、Ⅲ期35回)であるのに対しⅣ期ではほぼ倍増している(65回)。大論題ごとに見ると【技術に着目】(79回)【社会に着目】(68回)に比べて【場所に着目】(9回)が少ない。『建築雑誌』における中国観は1985年以降急増し、中国の「技術」と「社会」に関する興味が全期間を通して高いことが明らかになった。

ここで3つの大論題【技術に着目】【社会に着目】【場所に着目】と『建築雑誌』の時期との関係を、大論題ごとの各時期中国観数の割合と、時期ごとの各大論題中国観数の割合において示した(1.2.b.-1)。この2つのグラフ図でもっとも顕著なのは、【技術に着目】大論題の中国観がⅠ期からⅢ期まで一貫して過半数を占めており、Ⅲ期に至っては65.71%もの高い比率を示していることである。また、【社会に着目】大論題でⅣ期の比率が相対的に高い(56.92%)ことも顕著である。さらに期ごとの3大論題の比率を比べると、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期では【技術に着目】大論題がどれも過半数を占めているのに対し、Ⅳ期では【社会に着目】大論題の中国観が増加して過半数を占め、その関係が逆転していることがわかる。これは明治の創刊以来【技術に着目】の論題が主流だった『建築雑誌』の中国観が、1980年代中期以降【社会に着目】の論題を増やしてその関係を逆転させたというように解釈できる。

【場所に着目】大論題はⅡ期において他の時期に比べて発現数の比率が高い(Ⅰ期6.67%Ⅲ期2.86%Ⅳ期3.08%であるのに対しⅡ期は15.38%)が、これはその中国観の内容をみるかぎりでは、戦争によって中国の地理への関心が高まったこと、戦後に戦地への愛着を語られていることがこの傾向を押し上げているというように理解できる。

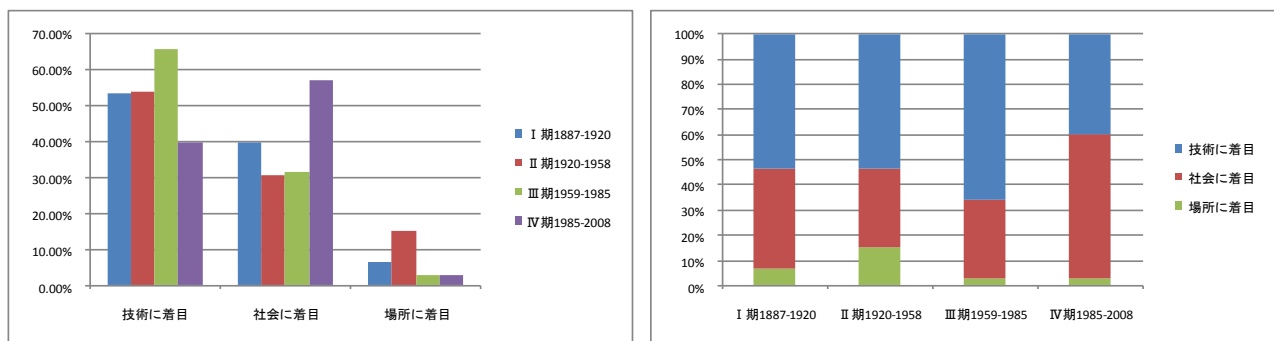


図 1.2.b.-1: 大論題と『建築雑誌』の時期との関係(左:大論題ごとの各時期中国観数の割合/右:時期ごとの各大論題中国観数の割合)

大論題における中論題の比較分析

次に、2つの大論題【技術に着目】【社会に着目】におけるそれぞれの中論題について、総中国観数に対する各期の当該中論題の割合、および各期におけるそれぞれ2つの中論題の割合を示して分析を加える。これらにより、各時期区分の共通点および相違点におけるいくつかの特徴がみてとれた。なお【場所に着目】の大論題は中論題に相当する階層がないのでここでは扱わない。

【技術に着目】大論題における中論題[より学術的技術][より職能的技術]と『建築雑誌』の時期との関係を、当該中論題ごとの各時期中国観数の割合と、時期ごとの各当該中論題中国観数の割合において示した(図 1.2.b.-2)。ここで最も顕著なのは、[より学術的技術]においてはⅢ期(34.29%)の比率が高く、[より職能的技術]においてはⅠ期(40.00%)とⅡ期(46.15%)の比率が高いことである。ここで各期の2つの中視点の比率を比べると、Ⅰ・Ⅱ期は[より職能的技術]の比率が高い(Ⅰ期 $12/16=75\%$ 、Ⅱ期 $12/14=85.71\%$)であるのに対し、Ⅲ・Ⅳ期は[より学術的技術]の割合が増加し2つの大視点がほぼ拮抗している。これはすなわち『建築雑誌』において、創刊から1950年代末までは、技術に着目した中国観の中心は職能的な技術がその中心にあったのに対し、それ以降は中国のもつ技術に学術的な興味を見出す比率が高まり職能的な技術と学術的な技術に関する記事数の分布はほぼ同じくらいになった、というように理解できる。

続いて【社会に着目】大論題における中視点[社会の内部][社会の外部関係]と『建築雑誌』の時期との関係を、当該中論題ごとの各時期中国観数の割合と、時期ごとの各当該中論題中国観数の割合において示した(図 1.2.b.-3)。ここで特徴的なのは、Ⅰ期とⅣ期に中国の[社会の内部]に着目する中国観の割合が多く分布(Ⅰ期 33.33%、Ⅳ期 36.92%)しており、Ⅱ期とⅣ期に[社会の外部関係]を語る中国観が比較的多い(Ⅱ期 15.38%、Ⅳ期 20.00%)ということである。その上で期ごとの2つの中論題の比率を比べると、Ⅱ・Ⅳ期の[社会の外部関係]がⅠ・Ⅲ期のそれに比べて高くなっていることがわかる。これはⅠ期に比べてⅡ期の、Ⅲ期に比べてⅣ期の中国観が、内向的な説明から外向的な論題を持つようになっており、しかもその傾向が反復している、というように理解できよう。

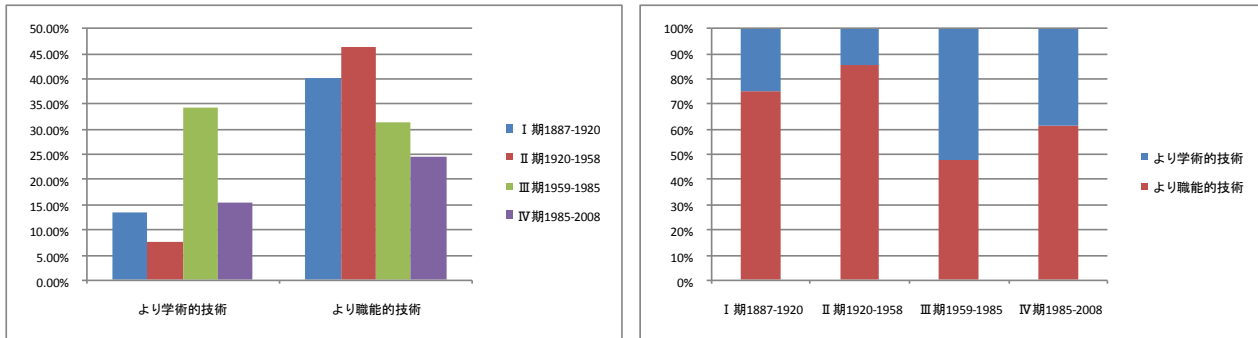


図 1.2.b.-2: 【技術に着目】大論題における中論題と『建築雑誌』の時期との関係(左: 当該中論題ごとの各時期中国観数の割合/右: 時期ごとの各当該中論題中国観数の割合)

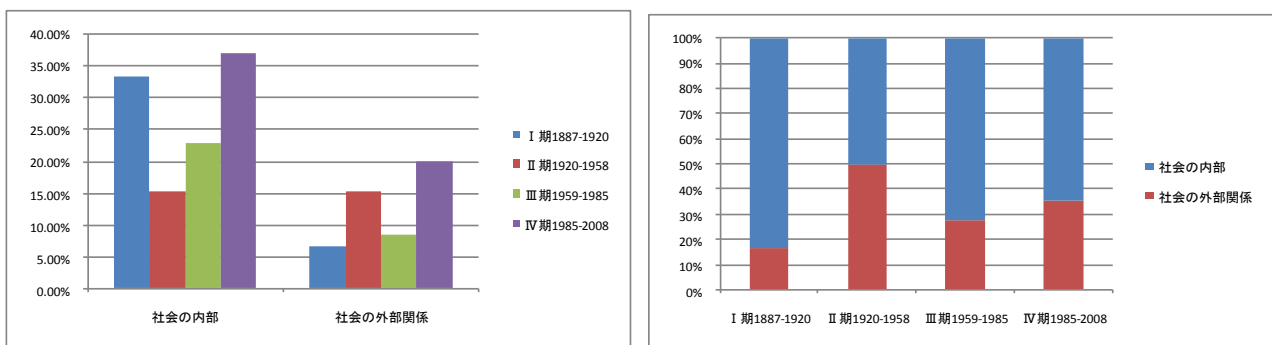


図 1.2.b.-3: 【社会に着目】大論題における中論題と『建築雑誌』の時期との関係(左: 当該中論題ごとの各時期中国観数の割合/右: 時期ごとの各当該中論題中国観数の割合)

中論題における小論題の比較分析

さらにここからは小論題レベルでの分析を加える。4つの中論題[より学術的技術][より職能的技術][社会の内部][社会の外部関係]における16の小論題、【場所に着目】大論題における2つの小論題、計18の小論題について、総中国観数に対する各期の当該小論題の割合、および各期におけるそれぞれ小論題の割合を示して分析を加える。【場所に着目】大論題では中論題に相当する階層はなくその下に直接2つの小論題に分類されているので、ここで一緒に分析している。これらにより、各時期区分の共通点および相違点におけるいくつかの特徴がみてとれた。

はじめに【技術に着目】大論題下の、2つの中論題下における小論題群について分析を行う。

[より学術的技術]中論題における3つの小論題<その学術研究一般><その建築史><その文化財保存>について、それらと『建築雑誌』の時期との関係を、当該小論題ごとの各時期中国観数の割合と、時期ごとの各当該小論題中国観数の割合において示した(図1.2.b.-4)。ここでの最も顕著な特徴は<その建築史><その文化財保存>の2つにおいてⅢ期が突出している(それぞれ20.00%、10.77%)ことである。さらにⅠ・Ⅱ期において<その建築史>の中国観の本数は相対的に少なく(Ⅰ期6.67%、Ⅱ期3.85%)、<その文化財保護>はⅠ・Ⅱ期には分布が見られずⅢ期に初めて現れた論題であることもわかる。これはすでに見た 1950年代末以降の学術的な技術に着目した中国観の増加が、建築史と文化財保存という専門領域によって支えられていることを示している。

次に[より職能的技術]中論題における6つの小論題<その建築意匠と計画><その建設><その建築構造と構法><その環境工学><その設計業界><その都市計画>について、それらと『建築雑誌』の時期との関係を、当該小論題ごとの各時期中国観数の割合と、時期ごとの各当該小論題中国観数の割合において示した(図1.2.b.-5)。ここで顕著なのは、<その建築意匠・計画>においてⅠ期の数が突出している(30.00%)こと、<その建設>においてⅡ期において突出している(19.23%)ことであり、これはすでに見た、1950年代末までの職能的な技術に着目した中国観において、建築意匠と計画、建設関連の分野が重要な役割を果たしていたことを示している。また、<その設計業界><その都市計画>の2つの小論題はⅣ期にのみ見られる論題であり、Ⅳ期が内包する小論題の数が多いこと。各期の小論題の比率を示す図において、Ⅰ期において2つ、Ⅱ期において4つ、Ⅲ期において5つ、Ⅳ期において6つの内包する小論題が観察されるが、内包する小論題の数が多いほど中国の認識対象領域が多領域化することであり、すなわち『建築雑誌』における日本の建築界の中国の職能的技術に関する認識は、時間の経過とともに多様化していったことが明らかになった。

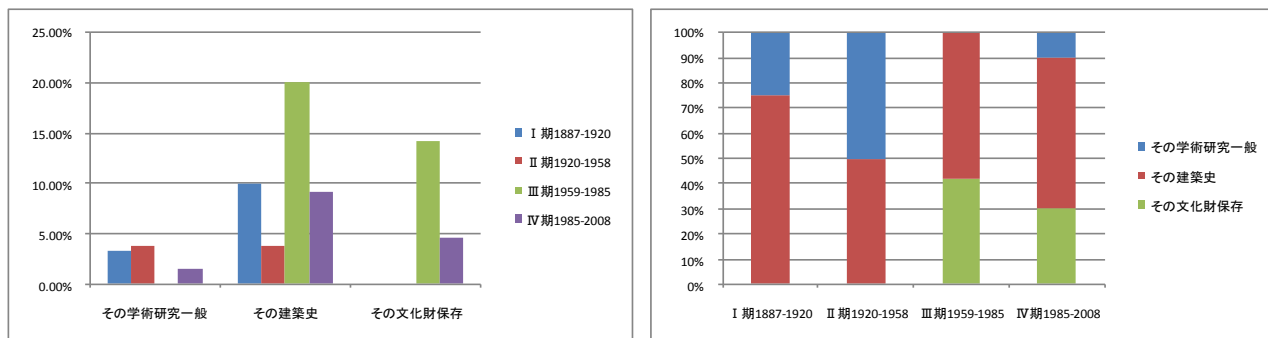


図 1.2.b-4: [より学術的技術]中論題における小論題と『建築雑誌』の時期との関係(左:当該小論題ごとの各時期中国観数の割合／右:時期ごとの各当該小論題中国観数の割合)

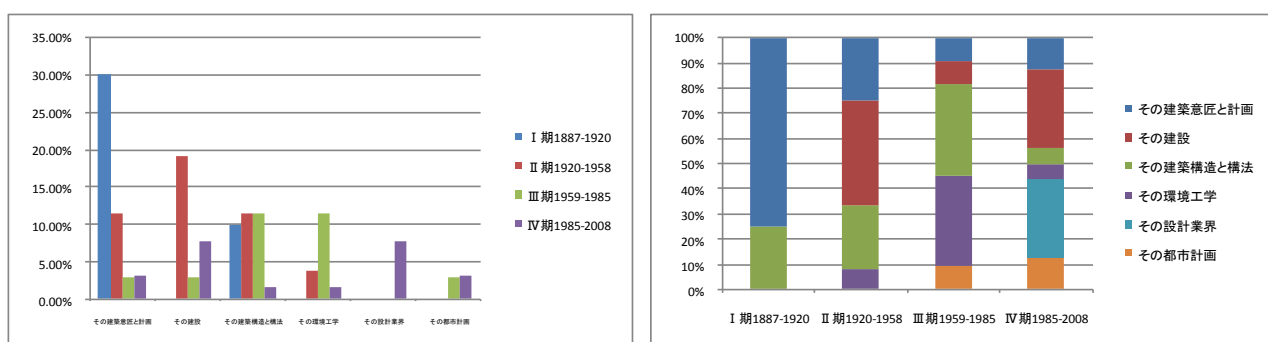


図 1.2.b-5: [より職能的技術]中論題における小論題と『建築雑誌』の時期との関係(左:当該小論題ごとの各時期中国観数の割合／右:時期ごとの各当該小論題中国観数の割合)

続いて【社会に着目】大論題の中の2つの中論題について分析を行う。

まず、【社会の内部】中論題における5つの小論題<その社会一般><その人><その風俗や習慣><その政治と経済><その教育と文化>について、それらと『建築雑誌』の時期との関係を、当該小論題ごとの各時期中国観数の割合と、時期ごとの各当該小論題中国観数の割合において示した(図1.2.b.-6)。ここで顕著なのは、相対的に、<その人>においてⅠ・Ⅱ期の割合が高い(Ⅰ期26.67%、Ⅱ期11.54%)ことであり、これはこの時期に、中国人とはどういう人達か、という論題がこの時期に多く語られたということである。また、中国社会を語る際に<その社会一般>という小論題において中国全体を定義しようとする傾向がⅢ・Ⅳ期に高くなっている(Ⅲ期11.43%、Ⅳ期15.38%)ことも視認できる。さらに<その風俗や習慣>においてⅣ期の割合が高い(10.77%)こともわかる。結果として中国【社会の内部】を説明する際に、1950年代末までのⅠ・Ⅱ期にはそれを2つの小論題でしか語ることができていない(Ⅰ期は<その人>と<その風俗や習慣>、Ⅱ期は<その人>と<その政治と経済>)のに対し、1950年代末以降のⅢ・Ⅳ期には5つの小論題でより多様に語れるようになっていることがわかる。

次に【社会の外部関係】中論題における2つの小論題<その国際関係><その日本との関係>について、それらと『建築雑誌』の時期との関係を、当該小論題ごとの各時期中国観数の割合と、時期ごとの各当該小論題中国観数の割合において示した(図1.2.b.-7)。ここで顕著なのは、<その国際関係>においてⅣ期の比率が高い(12.31%)ことと、<その日本との関係>においてⅡ期の比率が高い(11.54%)ことである。これは日本の中国認識が、Ⅱ期には日本との関係において、Ⅳ期には国際関係において中国がその関係をより強固にしていると理解していることを示している。

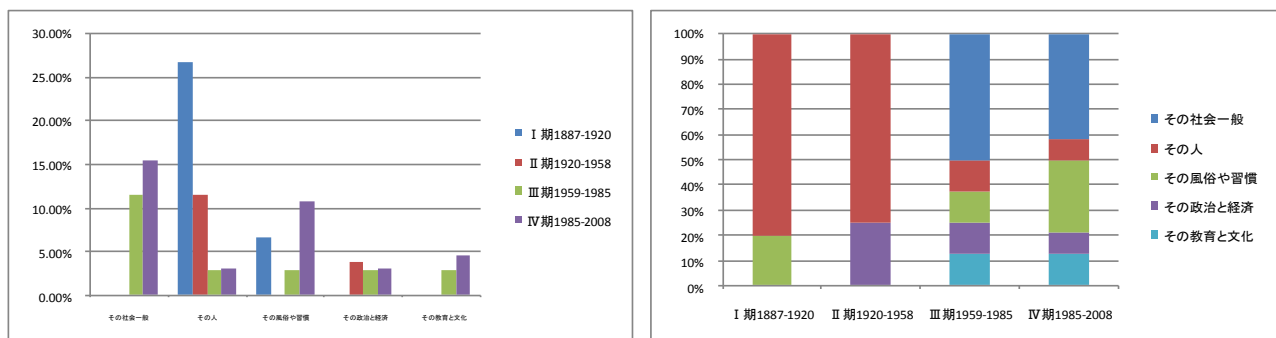


図 1.2.b.-6: 【社会の内部】中論題における小論題と『建築雑誌』の時期との関係(左:当該小論題ごとの各時期中国観数の割合/右:時期ごとの各当該小論題中国観数の割合)

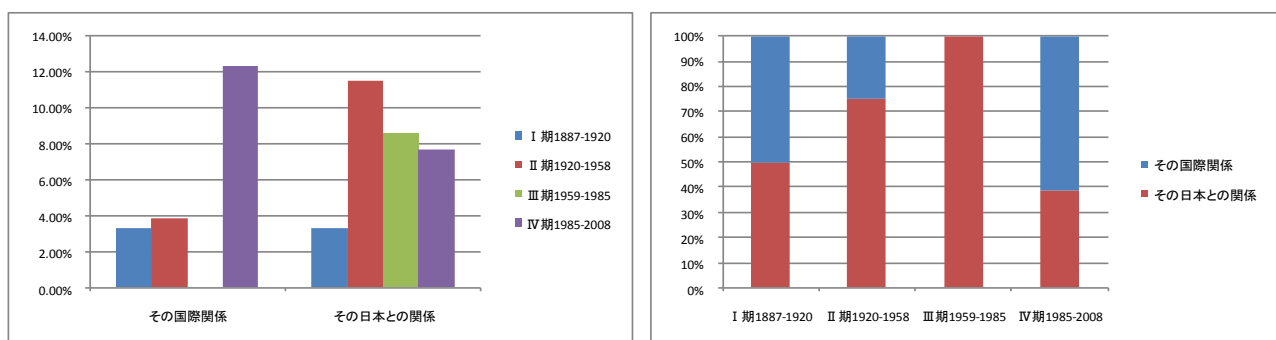


図 1.2.b.-7: 【社会の外部関係】中論題における小論題と『建築雑誌』の時期との関係(左:当該小論題ごとの各時期中国観数の割合/右:時期ごとの各当該小論題中国観数の割合)

次に【場所に着目】大論題の中の2つの小論題について分析を行う。【場所に着目】大論題では中論題に相当する階層はなく、その下に直接2つの小論題に分類されているので、ここで一緒に分析している。

2つの小論題<その地理><その過去>について、それらと『建築雑誌』の時期との関係を、当該小論題ごとの各時期中国観数の割合と、時期ごとの各当該小論題中国観数の割合において示した(図1.2.b.-8)。ここで特徴的なのは<その過去>についてⅡ期とⅣ期にしか分布が見られないことである。これは『建築雑誌』においては、中国の場所に着目した過去回顧的な中国観はⅡ・Ⅳ期にしか存在しない、つまり戦争の前後と現代においてのみ、それに先行する時期を懐かしむ傾向が見られる、というように理解できる。

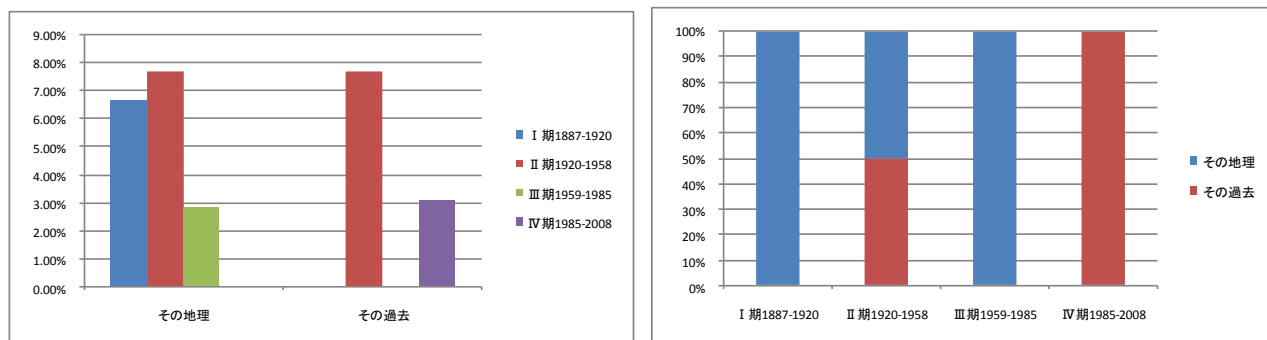


図 1.2.b.-8: 【場所に着目】大論題における小論題と『建築雑誌』の時期との関係(左: 当該小論題ごとの各時期中国観数の割合/右: 時期ごとの各当該小論題中国観数の割合)

小括: 細分化する「技術」論題と入れ替わる「社会」論題

以上 1.2.b. では、KJ 法によって分類された『建築雑誌』の全4期の中国観を、大論題における4期の分布比較、大論題における中論題の分布比較、中論題における小論題の分布比較にかけることで、その発現時期と論題の関係を把握しようとした。その結果、4期の中国観の分布においていくつかの特徴を看とれた。

大論題における4期の分布比較では、『建築雑誌』における中国観は1985年以降急増し、中国の「技術」と「社会」に関する興味が一貫して高かったことが明らかになった。また、明治の創刊以来【技術に着目】の論題が主流だった『建築雑誌』の中国観が、1980年代中期以降【社会に着目】の論題を増やしてその関係を逆転させたことがわかった。

大論題における中論題の分布比較は2つの大論題ごとに行った。【技術に着目】大論題においては、『建築雑誌』は創刊から1950年代末までは、「技術」に着目した中国観の中心が職能的な技術をその中心に据えていたのに対し、それ以降は中国のもつ学術的な技術に興味を移す傾向が強まり、職能的な技術と学術的な技術に関する中国観の数はほぼ同じくらいになったことが明らかになった。また【社会に着目】中国観においては、中国社会を内向的にとらえようとするものから外向的にとらえようとする中国観への論題の移動が観察された。しかもこれはⅠ期からⅡ期、Ⅲ期からⅣ期にわたって2回反復しており、これは第1章前半で明らかにした、『建築雑誌』の明治以降の中国関連記事がⅡ期とⅢ期の間で断絶があり、「知らない世界を知ってゆくプロセス」として反復している、という結論を裏付けている。

中論題における小論題の分布比較は4つの中論題ごとに行った。【より学術的技術】中論題においては、1950年代末以降の学術的な技術に着目した中国観の増加が、「建築史」と「文化財保存」という専門領域によって支えられていることが明らかになった。【より職能的技術】中論題においては、1950年代末までの職能的な技術に着目した中国観において、「建築意匠と計画」「建設」の分野が重要な役割を果たしていたことがわかった。また、「都市計画」に関する中

国観は1950年代末以降、「設計業界」に関するそれは1985年以降にのみ分布するなど、時間の経過とともに日本の建築界の『建築雑誌』における中国認識が、新しい技術上の論題を獲得してきたことがここから見てとれる。【社会の内部】中論題においては、1950年代末までのⅠ・Ⅱ期はともに異なる2つの論題、50年代末以降のⅢ・Ⅳ期はともに異なる5つの論題の中国観が分布していることから、日本の建築界の中国認識が、ある限定された論題の中で着目点の重心を変えながら推移していることがわかる。【外部との関係】中論題においては、＜その日本との関係＞においてⅡ期の割合が高く、＜その国際関係＞においてⅣ期の分布の割合が高い。これはすなわち日本の中国認識が、Ⅱ期とⅣ期において中国の国際関係に興味を示していたと理解できる。また【社会に着目】大論題の中の2つの小論題の分布比較では、＜その過去＞についてⅡ期とⅣ期にのみ分布が見られることがわかった。これはつまり、『建築雑誌』における日本の建築界の中国認識が、戦争の前後と現代においてのみ、先行する時期を懐かしむ傾向が見られることを示している。

こうして中国観の発現時期と論題の関係を見てくると、時間の経過にともなって「技術」についての中国観は論題が細分化し、「社会」についての中国観は論題が入れ替わっている、という傾向をみてとることができる。それはすでに述べたように、「技術」に着目した論題の中国観においては、50年代末以降に「文化財保存」や「都市計画」に関する中国観が初めて出現し、80年代後半以降に「設計業界」に関するそれが初めて登場したと言う事実からも明らかである。「技術」については論題の細分化がすすみ、日本の建築界は時代を経るごとに中国の技術を見る新しい論題を獲得し続けてきている。一方で、「社会」に着目した論題の中国観においては、「中国の人」に関しての興味が一貫して語られている以外は、論題によって時期ごとの浮沈があり、新しい論題が徐々に増加するというよりは、前あった論題が語られなくなることもあり、途切れていた論題が復活したりというような傾向が見られる。「その風俗や習慣」はⅡ期で、「その国際関係」はⅢ期で中国観の分布がゼロなことからもそれは明らかである。中国の「社会」について、日本の建築界は、明治の時代から「政治経済」や「教育文化」などの同じ論題について認識を繰り返してきており、そう多くない論題の中で着目点の重心を入れ替えながら中国社会について議論してきたと言える。

中括:4期の中国観における論題布置の通時的比較—「技術」と「社会」における論題布置の重心移動

第1章後半部分の1.2.節では、『建築雑誌』の1887年から2008年までの中国関連記事から、執筆者が端的に中国についての要約的印象を示している箇所を「中国観」の発現ととらえ、該当するテキストを短文として抽出し発現の回数を把握した。結果156回の中国観の発現を採取することができた。さらにその中国観をKJ法によって分類した結果、それらは「技術」と「社会」の2つにそれぞれ着目したものに大別が可能な3段階の論題構造として整理された。

その上で各期の論題の布置を明らかにすべく、中国観の発現時期と論題の関係を分析した結果、明らかになったのは、1.『建築雑誌』の創刊以降、そこでの日本建築界は中国の「技術」に着目する視点が主流であったが、1980年代中旬より中国の「社会」に着目する視点にその主流が取って替わられたこと、2.中国の「技術」への視点は創刊時から1950年代末までは「建築意匠と計画」や「建設」などより職能的なものが主流であったのに対し、それ以降は「建築史」や「文化財保存」などの技術論題のうちより学術的なものへと細分化し、職能的な論題と中国観の数の上で拮抗するくらいまでその比率を高めたこと、3.中国の「社会」への視点は、第二次大戦前後と80年代中期以降の2回にわたってその国際関係に反復して着目していること、である。

ここではつまり、日本建築界の『建築雑誌』における中国の「技術」と「社会」を主要な認識対象とした中国観の論題布置において、時間の経過とともに、「技術」論題の割合が一貫して高かった状況が「社会」論題の台頭とともにバランスが変わったという、論題間での重心移動があることが明らかになった。また「技術」論題内部では職能的技術から学術的技術へ論題が徐々に細分化していき、「社会」論題内部では中国の国際関係に着目する時期が反復していることも明らかになるなど、各論題の内部でも、重心の移動が起きていることが観察された。

1.3. 第1章まとめ:論題の重心移動を伴いながら反復する中国認識

第1章をまとめると以下になる。

章前半の1.1.節では『建築雑誌』の1887年創刊号から2008年までのすべての号から中国関連記事を229編抽出し、それらを論題の推移から勘案して4期に時期区分した。さらにそれぞれの時期における記事数の変化を数量的に把握した上で、執筆者の属性、記事の形式について数量分析と定性分析を加えている。また、各期の記事の論題を時系列にそって分類し、内容的に重要だと思われる記事の論題論調についてレビュー形式で言説分析を加えた。結果として、『建築雑誌』の当該中国関連記事に見るその情報伝達手段は、執筆者や記事の属性において限定的だった時期と多様化した時期が交互に反復している関係にあることがわかった。そこでは日本が明治維新の前後、あるいは戦後の国交正常化の前後で「知らない世界を知ってゆくプロセス」として中国情報に接触し、その伝達手段を徐々に拡大させながら2回の反復を繰り返していることとして理解できる。また、中国関連記事の内容から、その反復は、日本が中国に意識の上で追いつき追い越してゆく中での、異なる形での繰り返しであったことも指摘した。

章後半の1.2.節では前半で上述の中国関連記事から、執筆者が端的に中国についての要約的印象を示している箇所を「中国観」として156回分抽出した。それらをKJ法によって分類し、中国観の発現の時期と論題の関係を検証している。その結果、『建築雑誌』の中国観の通時的な論題布置は、「技術」と「社会」のそれぞれに着目したものに二分できる3段階の構造をもっており、「技術」論題中国観の割合は一貫して高いが、やがて「社会」論題のそれに数の上で追いつかれ追い越されているという関係が明らかになった。また、時間の経過に沿って、「技術」論題内部では職能的技術から学術的技術への論題の細分化が、「社会」論題内部では中国の国際関係への興味増の2回の反復が、それぞれ観察された。これらは論題間の、あるいは論題内の着目点の重心移動というようにとらえることができる。

また、後半1.2.節で得られたいくつかの時期と論題の関係に関する知見は、前半1.1.節で明らかにした中国認識の2回の反復を裏付けることにもなった。中国の「社会の外部関係」を見る論題を扱う中国観や、中国という場所について「その過去」を回顧する論題のそれが、第二次大戦前後と80年代後半以降の2回に集中して見られることなどが相当する。

以上、『建築雑誌』の中国関連記事と中国観を通時的に検証した結果、当該建築メディアに見られる近現代の日本建築界における中国情報の情報伝達手段と論題布置の特徴は、「論題の重心移動を伴いながら反復する」ものであるとすることができる。

第2章:現代の日本建築界における中国認識—『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の分析(1985-2008年)

本章第2章では、『建築雑誌』に加えて『新建築』と『日経アーキテクチャ』の3つの建築メディアにおける、日本建築界の共時的な中国認識のありようを検討する。1985年から2008年発行分までの3誌を分析対象としている。

前半の第1節では3誌の中国関連記事の内容を比較するために、第1章ですでに分析済みの『建築雑誌』IV期94編に加えて、『新建築』の196編、『日経アーキテクチャ』の200編を通覧し、中国情報の日本建築界への伝達手段がいかなるものかを把握する。3つの建築メディアごとの記事数、執筆者の属性、記事形式の属性の推移を定量的に把握した上で、各期において重要だと思われる記事について、時系列にそってその論題と論調をレビューしている。

後半の第2節では、第1章ですでに抽出済みの『建築雑誌』IV期の65回の中国観に加えて、『新建築』で62回、『日経アーキテクチャ』で93回の中国観を別に抽出し、これら合計220回の中国観について、中国情報の日本建築界における論題の布置がいかなるものかを把握する。「中国のどこを見ているか」という各中国観の論題をKJ法によって整理し、中国観の内容と発言しているメディアの連関を見ることで、論題の布置の特徴を明らかにしている。

第3節では、前の2節で明らかになった中国情報の日本建築界への情報伝達手段、各中国情報の論題の布置の特徴をまとめ、『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』3誌における現代の日本建築界の中国認識の傾向を提示する。

2.1. 『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の中国関連記事

3つの建築メディアにおける中国関連記事の抽出とその時系列分布

3つの建築メディアにおける分析方法

a. 『新建築』(1985-2008年)の中国関連記事

設計者により、建物ベースで視覚情報とともに語られる情報伝達手段／中国に軸足を置く日本人建築家の登場／旅行記における変化／長い時間の中での中国、大きな枠組みの中での中国／急速な成長への気づき／オリンピックの存在

小括: 現地の状況に目を配り、大きな枠組みの中で成長する現実を支持する中国関連記事

b. 『日経アーキテクチャ』(1985-2008年)の中国関連記事

記者により再配列された現場重視の情報伝達手段／香港の日系つながりが中国観察の端緒に／ゼネコン、メーカーによる日中合作／本格的な中国大陸状況の紹介開始—深圳・上海から／中国影響の海外への波及／都市論・アジア論／海外建築家の中国プロジェクトへの参入／グローバル化と中国影響の海外波及の拡大／否定的な論調／より身近な中国情報—案内板情報と現地取材特集／すばやくなる現場からの報道

小括: 取材範囲を拡大し、中国の対外影響に敏感な中国関連記事

1985年から3誌を比較することの妥当性の検証

中括: 3誌の中国関連記事における情報伝達手段の共時的比較—情報伝達軸と対中態度のメディアごとの相違

2.2. 『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の中国観

3つの建築メディアにおける中国観の抽出とそのメディア-論題分布

a. KJ法による現代日本建築界の中国観の内容分析

「技術に着目」論題の中国観／「社会に着目」論題の中国観／「場所に着目」論題の中国観

小括: 「技術」と「社会」と「場所」の3つに大別可能な3段階の論題構造

b. 建築メディアごとの中国観の比較分析

大論題における3つの建築メディアの中国観の比較分析／大論題における中論題の比較分析／中論題における小論題の比較分析

小括:共通して主流の「技術」論題とメディアごとに異なる「社会」と「場所」論題

中括:3誌の中国観における論題布置の共時的比較—「技術」以外の論題による布置の性格づけと現場情報の一般化

2.3. 第2章まとめ:中国に影響を受けながら、技術以外に着目するようになる同時代の中国認識

2.1. 『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の中国関連記事

3つの建築メディアにおける中国関連記事の抽出とその時系列分布

本節は本章第2章の前半部分に相当し、『建築雑誌』に加えて2つの商業系建築誌である『新建築』と『日経アーキテクチャ』の中国関連記事において、メディアごとの中国情報伝達手段の共時的な相違を検証する。

まず、『新建築』と『日経アーキテクチャ』の1985年から2008年までの全発行号について、記事を通覧して前者で196編、後者で200編の記事を抽出した。これに、『建築雑誌』Ⅳ期94編の記事を併せた雑誌ごとの記事数の経年変化のグラフを以下に示す(表2.1.-1)。ここで明らかなのは、3誌の中国関連記事が、増減をしながらも1993年以降は必ず1編以上分布しており、これらの建築メディアが90年代中期以降一貫して中国を記述対象として扱ってきているという点である。3誌の中国関連記事の内容の共時的変化を分析するにあたり、分析対象とする記事を通読すると、同じ中国を扱う記事であっても、その具体的な論題や執筆者の視点に相違が見られる。論文数の分布だけから見ると、『新建築』と『日経アーキテクチャ』は2000年以降の記事数の増加が顕著である。『建築雑誌』は前章で見たように1985年、2003年、2006年に局所的な記事の集中が見られるがこれは中国特集によるものであり、特集記事を差し引くと記事数は比較的コンスタントに推移していることがわかる。

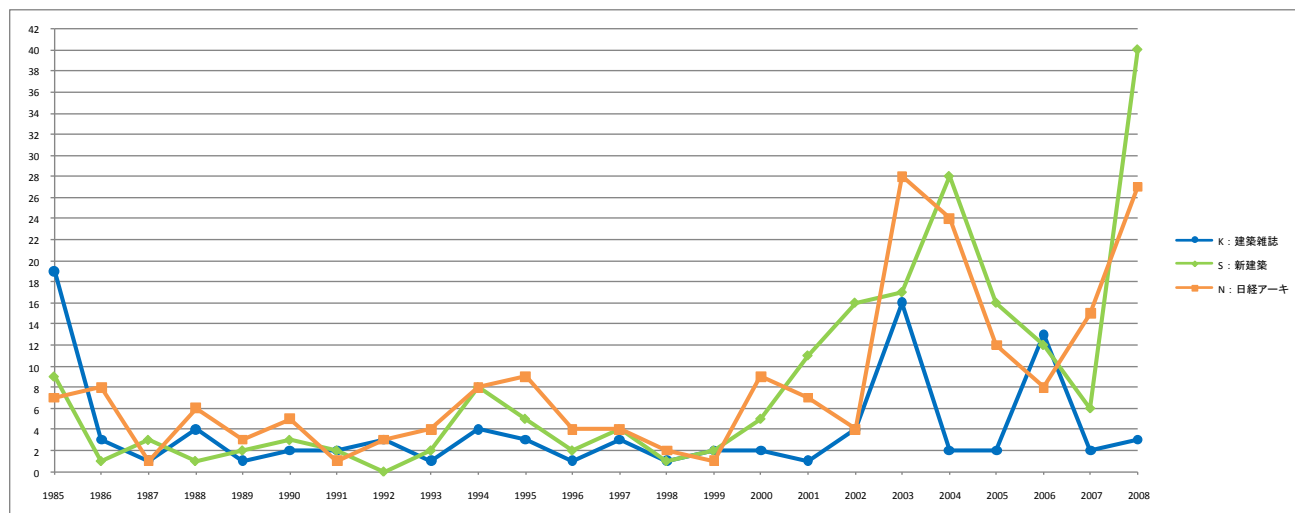


図 2.1.-1: 3誌における中国関連記事数の分布(1985-2008年) 『建築雑誌』94編 『新建築』196編 『日経アーキテクチャ』200編

以下本章では3誌を横並びで相互に比較することで、それら建築メディア間の共時的な特徴を見てゆく。ここでは仮に、前章までで明らかになった『建築雑誌』Ⅳ期の時期区分である1985年以降を分析範囲とする。本章で新たに分析対象に加わる『新建築』と『日経アーキテクチャ』の2誌について、『建築雑誌』と同様に1985年以降に分析範囲を限定することが、2誌における現代中国認識を把握するのに本当にふさわしいとは限らない。そこで本節では、2誌の記事数のピークが始まる2000年前後を内包する1985年以降を仮に分析期間の開始点としながら、『新建築』と『日経アーキテクチャ』にも、『建築雑誌』のⅢ期とⅣ期の間の「日本との比較で中国を見るようになる転換」に相当するような変化が見られないか、記事の内容を詳細に観察してゆく。これはつまり2誌がどの段階で、「同時代の中国」を発見しているか、記事の扱う論題や執筆者の視点の変化を探し出そうとすることでもある。そして節末では、改めて3誌の現代の中国認識を1985年以降の分析で考察することの妥当性を検証する。

以下、すでに前章で分析を済ませた『建築雑誌』以外の、『新建築』と『日経アーキテクチャ』2誌の1985年以降の中国関連記事について、前章と同様の分析方法を用いて数量分析と言説分析を加える。その上で3誌の中国関連記事における情報伝達手段の共時的比較も行う。

3つの建築メディアにおける分析方法

各建築メディアにおいて何をどう分析したのか、その方法を以下に述べる。これは第1章で『建築雑誌』の4つの時期区分ごとに行った分析方法を基本的に踏襲している。

1) 3つの建築メディアごとに、中国に対する関心の高まりの推移を把握するために、記事数の時系列変化をたどり、数量的把握を行う。また、3つの建築メディアごとに、どういう執筆者がどういう形で中国関連記事を残しているのかを知るために、雑誌の執筆者紹介や書籍著者履歴などを参照してその履歴を把握したうえで「執筆者の属性」としてその所属先と国籍について分類している。また雑誌の目次や内容から当該記事がどういう位置づけのもとで書かれているかを把握したうえで「記事形式の属性」として記事の種類と記述対象地を分類している。その上で2つの項目についての傾向を把握するために数量分析と定性分析を行った。

2) 3つの建築メディアごとに、時系列に沿ってそこで扱われた記事論題を分類し、内容的に重要だと思われる記事については、レビュー形式で内容の梗概、論点、主張の傾向などについて言説分析を加えた。

各段階の分析方法の詳細は第1章に準じるものとする。

1)においては、仮説的分析開始年代である1985年以降、扱う論題や執筆者の視点などの全体の傾向において記事の内容に変化がないか、メディアごとの分析の中で最初に検証し、その上で定量・定性分析に入る。

1)における「執筆者の属性」について、多数の取材を集めて1つの記事になっている場合、執筆者は「編集部」とし扱った。この場合、『新建築』『日経アーキテクチャ』の編集部はそれぞれ新建築社と日経BP社なので、「日本の民間企業」に含まれるものとして分類している。

1)における「記事形式の属性」について、書評欄は「文献抄録」のカテゴリに入れ、その執筆者は本の原著者ではなく書評子なので特に断りのない場合以外は編集部を執筆者とみなしている。また『日経アーキテクチャ』の記事の種類分類において、特に建築作品の紹介に関しては以下のようにした。執筆者が設計者であり自身の関わるプロジェクトを紹介している場合は「作品紹介」のカテゴリに入れ、第三者が紹介している場合は、明らかに作品に重心を置いた記事は「作品紹介」とし、その背景も含めて考察が多岐にわたる場合は「論説」として分類した。

また、『建築雑誌』の分析は、第1章でIV期(1985-2008年)として済ませたものとしてここでは行わず、各誌相互の比較では第1章1.1.d節での記述を直接参照するものとする。

2.1.節末で、仮に1985年から3誌を分析した妥当性を検証し、その上で中括として、3誌の中国関連記事における情報伝達手段の共時的比較の結果をまとめた。

2.1.a. 『新建築』(1985-2008年)の中国関連記事

設計者により、建物ベースで視覚情報とともに伝えられる情報伝達手段

ここでは『新建築』の1985年から2008年間の中国関連記事196編について、その執筆者と記事形式の属性がどのようなものかを把握し、かつ時間的経緯に沿って重要と思われる記事の論題・論調をレビュー形式で取り上げ、言説分析を加える。ここでまず全196編の記事一覧(表2.1.a.-1)、記事本数の経年変移(図2.1.a.-1)、執筆者の属性(図2.1.a.-2)、記事形式の属性(図2.1.a.-3)を示す。

記事数の分布は4回の集中があり、1985年の9編、1994年の8編、2004年の28編、2008年の40編で、後の2回のピークが大きくなっている。記事を通覧すると、2001年の日建設計の上海での竣工作品の紹介の集中(S055—S061)が内容上の一つの分期点となっていることがわかる。それまでの記事は中国に関する紀行文やニュースなどが中心で、ごく散発的に中国で実現した日本のODA案件などが建物紹介として登場する程度だったのが、ここでは日本の組織事務所の上海でのハイクオリティな建築物が複数まとめて紹介されている。この記事以降中国で日本人設計者が実現させた建物がたびたび紹介されるようになり、しかもそれらは日本で実現している建築との比較に耐えうる質を持っているものとして扱われている。2001年はまさに後2回の記事数のピークがはじまる時期であり、これが『新建築』にとっての「同時代の中国」を発見した時期だと見なすことができる。

後2回のピークはオリンピックに向けての記事の集中が原因と思われるが、実際の記事の内容の上では北京オリンピックやその施設建築を直接扱っているものは多くない。オリンピック関連記事の内容は、関連施設の設計コンペを日本企業がとったニュースや(S073、S106)、関連する建材の紹介記事(S150、S155)程度である。完成後の施設の記事は、『新建築』が日本の雑誌であり、日本人の設計した建物を中心に扱っていることもあって、2008年の2つの記事(S168:佐藤総合計画による天津オリンピックセンタースタジアム、S169:同瀋陽オリンピックスポーツセンタースタジアム)しかない。では実際どのような記事が2004年と08年の2つのピークを作っているのだろうか。前者は日本人が関係している中国の建築プロジェクトに関する記事(S096:仙田満による仏山市の総合体育館、S109:山本理顕による北京の建外SOHO、S118:筆者の北京市新華書店中関村図書ビルなど)の、視覚情報とともに建物ベースで語られる中国記事によって主に構成されている。さらには中国への世界的な関心度の高さから計画された文化的なイベントに関する記事(S101:承孝相と張永和展、S112:第一回中国国際ビエンナーレ、S116:ARATA ISOZAKI UNBUILT展など)も見られる。後者は、前者と同じものを含みつつ、さらに北京オリンピックの総括(S194、S195)上海万博関連記事(S171)、四川大地震の日本人によるボランティア活動(S184—S186、S196)など、オリンピック以外の、中国の時事的話題が日本の建築系商業誌の中に取り込まれていることがわかる。オリンピックをきっかけに中国のオリンピック以外の部分に関する情報が日本に伝えられている。

執筆者の所属先は日本の民間企業が圧倒的に多く、ほとんどが設計事務所である(73%)。中国の機関(7%)には中国の設計事務所の人物(S061:邢同和、S102:張永和)、日本人で中国で起業している建築家(S117:迫慶一郎、S118:松原弘典、S174:藤岡務)らが含まれる。第三国の機関3%には中国でプロジェクトを持つオランダの建築家(S094:レム・コールハース)、中国人と一緒に日本で展覧会を行った韓国の建築家(S102:承孝相)、日本でも中国でもない第三国の組織に所属する日本人(S155:PTWの高田浩一、S194:ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス国際オリンピック委員会助成研究員の白井宏昌)らが含まれる。

記事の形式は、本数の上では「ニュース」が一番数の分布の上では多い。ただしこれらはほとんどが小さなお知らせ欄であり、通覧すると2番目以降の形式のものの方が分量的に多く内容も豊富である。そのなかで「コラム」(19%)「論説」(18%)「作品紹介」(15%)がほぼ拮抗している。このうち「作品紹介」記事は、『新建築』の主要なコンテンツで、建築写真を併置した建物ベースの視覚情報欄であり、実際のページ数もこの欄が最多である。

資料番号	建築雑誌発行年月	号数	著者	記事タイトル	中国関連記事の形式												記事の属性	
					執筆者の属性				記事の属性				国別	所属先	記述対象	種類		
					国籍	中国	日本	中国の機関	中国の民間企業	中国の民間企業	中国の民間企業	中国の民間企業						
S001	198501		西澤実隆	明確な蘇州														
S002	198502		黒川紀章	第11回日本建築学会設計競技「現代の方言」入選発表														
S003	198506		相田武文	香港														
S004	198507		金子源次郎	国際化の時代														
S005	198507		横濱真	上海の古い町を歩くと「魔都」への憧憬														
S006	198507		相田武文	上海(シャンハイ)														
S007	198508		相田武文	社会主義・社会主義・社会主義														
S008	198509		相田武文	中国資本(ハルビン)														
S009	198510		金子源次郎	日本への期待														
S010	198612		(編集部)	<中国>客室のついで														
S011	198703		(編集部)	中国で国際シンポジウム														
S012	198705		深尾耕一	南京復興の歴史と未来														
S013	198708		あべたあ	中国建築事情レポート 北京・天津の都市開発と建築														
S014	198804		あべたあ	天津市建築設計院を訪ねて 中国・天津の建築事情														
S015	198905		(編集部)	神戸・天津大学建築設計院														
S016	198905		張在元	place中国 中国建築界における新しい動向														
S017	199008		中山隆	北京飯店(上海)・大林組東京本社														
S018	199009		島田清久	香港・上海銀行(中国銀行)の建築とデザイン														
S019	199010		張清華	北京東安門(高層ビル)・コ・エ・エ・エ														
S020	199103		張多野次	日中青年交流センター・黒川紀章都市設計事務所														
S021	199103		黒川紀章	先生の思想														
S022	199301		相田武文	相田武文 上海の両大大学建築設計院														
S023	199311		(編集部)	上海市建築設計院コンペティションの発展と未来														
S024	199406		楊元宏	毛沢東のビザプロジェクト・天安門広場改設計と十														
S025	199407		楊元宏	毛沢東のビザプロジェクト・天安門広場改設計と十														
S026	199408		石井和雄	自己変革時代の建築と都市計画														
S027	199408		楊元宏	毛沢東のビザプロジェクト・天安門広場改設計と十														
S028	199409		(編集部)	大衆建築と中国の都市計画と建築														
S029	199409		楊元宏	毛沢東のビザプロジェクト・天安門広場改設計と十														
S030	199412		高野孝子	アジアの都市計画と建築設計方法論 中国東南部タイ														
S031	199412		(編集部)	水産物産物・山水の建築と中国の環境														
S032	199501		松本秀	中国シルクロード・シルクロードのシル・I 中国と緑の														
S033	199502		(編集部)	設計者に日本設計 上海東方美術館・上海美術館の設計														
S034	199502		松本秀	中国シルクロード・シルクロードのシル・II アイランドの生														
S035	199502		松本秀	中国シルクロード・シルクロードのシル・III アイランドの生														
S036	199511		(編集部)	香港の都市計画と現代建築														
S037	199607		(編集部)	コナド・グループ・ナング(中国の住む)														
S038	199611		矢野啓之	上海市北外灘地区都市設計国際コンペCRIA参加														
S039	199701		(編集部)	香港・1997年のための記念館・国際コンペ・香港の														
S040	199703		北京フォーラム1997	北京フォーラム1997														
S041	199706		大江田	北京フォーラム1997 <革命と建築>に関する証言														
S042	199708		村松純	中国で成功する法														
S043	199802		田原利雄	上海ゴルフクラブ・清水建設設計本部														
S044	199904		加藤義夫	中国・活気の報告														
S045	199909		(編集部)	中国・南口国際展示センター・国際コンペ・石本グループ														
S046	200002		(編集部)	日経設計が中国市場を調査・調査報告書・調査報告書														
S047	200003		(編集部)	中国・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海														
S048	200004		(編集部)	西澤幸彦著「現代大都市物語」														
S049	200006		渡辺豊和	透明から無限へ														
S050	200010		(編集部)	西澤幸彦著「現代都市」														
S051	200101		(編集部)	JanWasOHO・インターナショナル・山本建築設計土														
S052	200103		(編集部)	中国・上海市・上海市・上海市・上海市・上海市・上海市・上海市														
S053	200105		(編集部)	中国・天津博物館設計コンペ・川口隆・高松伸が最														
S054	200105		(編集部)	中国・広州国際展示場コンペ・AXS佐藤総合計画が最														
S055	200112		横谷英之	上海の都市と建築の21世紀														
S056	200112		横谷英之	中国銀行上海ビル(中銀大廈)・日経設計														
S057	200112		横谷英之	上海信息大・日経設計														
S058	200112		青野克明	上海新天地・日経設計・インターナショナル														
S059	200112		青野克明	都市の記憶の再生 都市開発と上海の歴史														
S060	200112		(編集部)	上海へ行こう! 建築家たちの上海建築ガイド														
S061	200112		相田和	相田和氏に聞く「最新上海建築事情」														
S062	200202		(編集部)	天津市「天津広場」(天津)・国際設計コンペ・日経十														
S063	200202		(編集部)	都市計画「新都市計画国際設計コンペ」で黒川紀章建築														
S064	200203		佐藤向己	南浦島会館・佐藤向己建築研究所														
S065	200204		迫野一	北京の「メトロシティ」精神														
S066	200205		松本秀典	消費の過剰は「建築を生かす」のか														
S067	200206		(編集部)	中国「緑科センター」設計国際コンペ・久米設計が一等														
S068	200206		藤井谷	Commune by the Great Wall, GREAT (BAMBOO)														
S069	200206		古谷誠章	Commune by the Great Wall, 永源の家・古谷誠章														
S070	200206		坂茂	Commune by the Great Wall, Case Study House-12														
S071	200208		(編集部)	香港・九龍の再開発におけるアーバンデザイン・オー														
S072	200209		馬淵素	上海で再開発される「香港・上海・上海・上海・上海														
S073	200209		(編集部)	AXS佐藤総合計画が北京五輪施設を設計・天津市ス														
S074	200210		(編集部)	北京電台中心、設計は日経設計														
S075	200211		関広二	中国国際会議場とアジア建築の行方														
S076	200211		磯崎新	南京文化園における建築芸術の生成・磯崎新(日本														
S077	200212		(編集部)	The 2002 Shanghai Biennale "UrbanCreation"														
S078	200301		(編集部)	The 2002 Shanghai Biennale "UrbanCreation"														
S079	200302		長谷川祐子	シンボルを越えた「アーバン・クリエーション」の試み														
S080	200303		(編集部)	中国・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海														
S081	200303		香山静夫	メタセコイア上、中国美術へ向け														
S082	200303		白井健二	北京大学のエネルギー														
S083	200303		(編集部)	中国国際会議場に中国・上海・上海・上海・上海・上海														
S084	200303		松本秀典	中国の設計競技で経験したこと・北京CCTVコンペから														
S085	200304		村松純一	台湾・高雄・高雄・高雄・高雄・高雄・高雄・高雄・高雄														
S086	200307		小嶋一浩	グローバルデザインはあつた・F1とゾナ・カール・カ														
S087	200309		(編集部)	上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海														
S088	200310		(編集部)	Ocean Terminalの増改設計競技・磯崎新・磯崎新・磯崎新														
S089	200310		関野宏行	中国国際会議場・中国・上海・上海・上海・上海・上海														
S090	200310		大野勝	中国で仕事をし・中国の建築事情														
S091	200310		(編集部)	中国・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海														
S092	200311		川口隆	阿特														
S093	200312		(編集部)	中国の現代建築・上海・上海・上海・上海・上海・上海														
S094	200312		ジェム・コル・ハース	資本主義社会と建築														
S095	200401		(編集部)	中国・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海														
S096	200401		(編集部)	中国・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海														
S097	200401		(編集部)	中国・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海														
S098	200401		古谷誠章・早	中国・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海														
S099	200403		鈴木秀	中国・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海														
S100	200404		(編集部)	中国・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海・上海														

表 2.1.a-1: 『新建築』の中国関連記事一覧 全 196 編

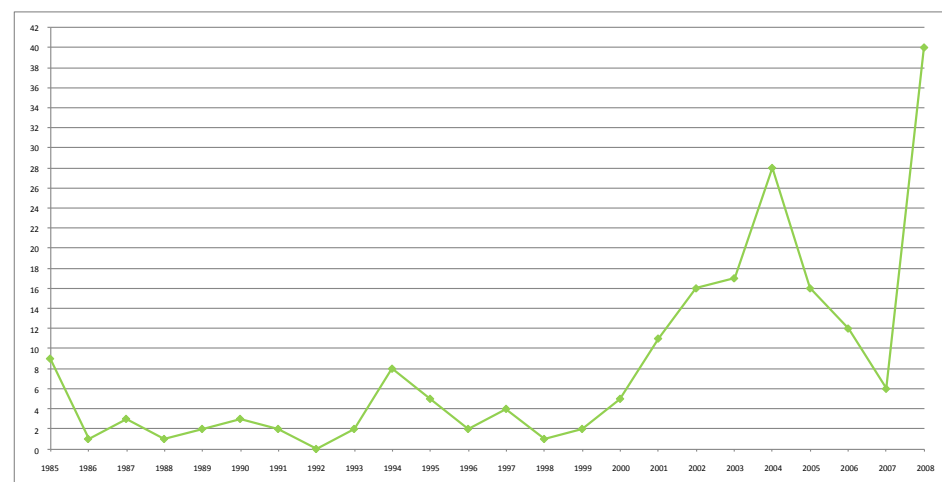
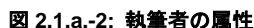


図 2.1.a-1: 記事数の経年変化

[illegible]

中国に軸足を置く日本人建築家の登場

『新建築』は建築に関する商業誌であり、なかでも日本の設計者が設計した建築作品を、高品質な建築写真でその詳細や設計者の意図を伝えることに主眼が置かれ、読者の側もそれを期待している。雑誌の多くの頁は日本人の設計者が日本に設計した建物のグラビア記事からなり、それが読者の興味の中心であるように情報が配置されている。たとえばそのことは巻末の月評と呼ばれる雑誌評からもわかる。1971年から始まっているこの欄は、毎年4-5名の書評子(建築家や建築研究者)が選ばれ、前の月の『新建築』についてあれこれ評論するものであるが、そこでの話題の中心は前の号で掲載された建築作品についてである。

85年からの『新建築』の中国関連記事のなかには、日本人が関連した中国において実現した建築作品が掲載されていることがわかる。本論で「作品紹介」に分類した、写真による建築作品の紹介記事は85年から2008年までに30編あり、規模、用途、設計主体ともさまざまである(表2.1.a-2)。2000年以前は断続的だが、2001年以降は毎年記事が切れずに分布している。これは平均して毎号10-15作品程度の作品が掲載され、24年間では3000作品程度は作品が掲載されてきたであろう『新建築』においてはそう大きい割合ではないが、徐々に件数が増えているということは明らかである。

S017	199008	米山 隆	花園飯店(上海):大林組東京本社ら
S019	199010	張 清嶽	北京東苑公寓(高層棟):エイ・エス・エスら
S020	199103	波多野 哲次	日中青年交流センター:黒川紀章建築都市設計事務所ら
S038	199611	気賀沢 俊之	上海市北外灘地区都市デザイン国際コンペにRIA案が当選—歴史的建造物や自然環境と共生した都市づくり
S043	199802	田熊 利哉	上海ゴルフクラブ:清水建設設計本部
S056	200112	横谷 英之ら	中国銀行上海ビル(中銀大廈):日建設計
S057	200112	横谷 英之ら	上海信息大樓:日建設計
S058	200112	青沼 克明	上海新天地:日建設計・インターナショナルら
S064	200203	佐藤 尚已	南通英瑞会館:佐藤尚已建築研究所
S068	200206	隈 研吾	Commune by the Great Wall, GREAT (BAMBOO) WALL:隈研吾建築都市設計事務所
S069	200206	古谷 誠章	Commune by the Great Wall, 水閣の家:古谷誠章 /STUDIO NASCA
S070	200206	坂 茂	Commune by the Great Wall, Case Study House-12 竹の家具の家:坂茂建築設計
S089	200310	関野 宏行	広州国際会議展覧中心:佐藤総合計画
S107	200406	山本 理顕ら	伴山人家—天津ハウジングプロジェクト:山本理顕設計工場ら
S109	200407	山本 理顕ら	建外SOHO:山本理顕建築設計工場ら
S117	200409	迫 慶一郎	北京フェリシモ生活提案店:SAKO建築設計工社
S118	200409	松原 弘典	北京市新華書店中関村図書ビル:松原弘典
S121	200410	(編集部)	上海国際賽車場:膜構造施工 上海太陽膜結構有限公司
S123	200501	(編集部)	天津博物館:川口衛構造設計事務所+高松伸建築設計事務所
S129	200503	国府田 茂 + 柴田 隆之	香港沙田競馬場 バレードリング改築計画:松田平田設計
S141	200604	迫 慶一郎	KID'S REPUBLIC 蒲蒲蘭絵本館:SAKO建築工社
S142	200604	鈴野 浩一 + 宍 真哉	UDS上海オフィス:トラフ建築設計事務所/鈴野 浩一 + 宍 真哉
S147	200610	迫 慶一郎	天津特等度スケープ:迫慶一郎+清水淳+藤岡務/東方設計公社
S153	200702	仙田 満	上海旗忠森林体育城テニスセンター:仙田満+環境デザイン研究所
S160	200802	渡辺 邦夫、長谷川一久	仏山伶南明珠体育館:仙田満+環境デザイン研究所
S166	200804	磯崎 新	上海征大ヒマラヤ藝術センター:磯崎新アトリエ
S167	200804	豊田泰久、川口衛、助川剛	深圳文化センター:磯崎新アトリエ
S168	200804	鉾岩 崇	天津オリンピックセンタースタジアム:佐藤総合計画
S169	200804	進藤 憲治	瀋陽オリンピックスポートセンタースタジアム
S196	200812	慶大坂茂+松原弘典	成都市華林小学紙管仮設校舎

表 2.1.a-2:『新建築』(1985—2008年)の中国関連記事における「作品紹介」記事リスト 30 編

設計主体の出現頻度は迫慶一郎が3回(S117、S141、S147)と最も多く、ついで山本理顕(S107、S109)、仙田満(S153、S160)、坂茂(S070、S196)らが2回と続く。迫は中国でデビューした後、そこをベースに活動する日本人建築家で、上位4人の中では年齢も一番低い。1985年から2008年までの時期に限ってみれば、中国ベースの日本人建築家の建築作品が、日本の建築専門家の閲覧欲求にこたえるレベルで登場しつつあることを示している。

30の建築作品は、最初期は日系の資本が中国に出て行った時の物件が主である。1990年の花園飯店(S017)は

オーナーが「野村中国投資(株)の100%投資により中国に設立登記された法人」の、フランス租界に残る古い建物を改装した高級ホテル、同年の北京東苑公寓(S019)は、「丸紅、大和ハウスと中国の敷地所有機関と合弁会社」をつくって実現した日本人向けのサービスアパートメント、1991年の黒川紀章設計の日中青年交流センター(S020)は1984年の中曽根首相の訪中で決まった案件で、日本政府の無償資金協力と中国政府の資金により建設された文化施設である。組織的な設計事務所ではなく、個人のアトリエ系設計事務所による日本の資本の建物もある。2002年の佐藤尚巳による南通英瑞会館(S064)がそれであるが、これは江蘇省南通を拠点としている綿製品を扱う日本企業の本部建物であり、アトリエ事務所と呼ばれる小規模個人事務所が中国で実現した事例のうち、最初期に属するものであろう。

純粋な中国側からの発注による民間のプロジェクトで、建物が実現した初めての例は2001年の日建設計の2つの事例、中国銀行上海ビル(S056)、上海信息大楼(S057)と思われる。日建設計はそれより前の1990年に中国国際貿易センター¹⁾を北京で実現しているが、それは設計監理のみであったので、設計に実際深く関わったこの2つの上海の例は彼らにとっても大きな転換点であったはずだ。

2002年以降、中国資本が日本の個人の建築設計事務所に設計を依頼した建築作品の掲載が急増している。隈研吾、古谷誠章、坂茂によるCommune by the Great Wallの別荘建築(S068-S070)や山本理顕の建外SOHO(S107)はどれも中国の民間ディベロッパーによるプロジェクトであり、筆者の北京市新華書店中関村図書ビル(S118)も中国の民営化した書店の依頼によるものである。このころには中国都市部の市場化が進行し、建築においても外国人が算入できる準備が徐々に整ってきたのであろう。

こうして1985年から2008年の『新建築』に掲載された中国プロジェクトを、日本の建築家とそのクライアントとの関係から見ると、最初は日本からの資本の移動に合わせて日本人設計者も中国についてやってきた状態から、日本人設計者が直接中国企業から仕事を受けるようになり、それが進行すると中国に拠点を置いて中国クライアントの仕事を受ける日本人設計者が出てくるようになっていく。迫や松原の登場は、日本人建築家のなかに、中国に軸足を置いてプロジェクトを受注するものが現れてきていることを示しており、『新建築』もそういう人物や作品の登場をいち早く伝える役割を果たしている。

2008年の成都市華林華林小学校(S196)は、同年の四川大地震のあとに慶應大学の坂茂と筆者が中心になってボランティアで小学校を設計・建設したプロジェクトである。商業ベースでも政府ベースでもない、大学の自主的な活動が日中の協力で中国に実現したというのは、日本建築界からの新しい中国との関係構築の例とも言える。

さらに、建築の実現に関する記事として、『新建築』では「作品紹介」以外に、「ニュース」の欄での報道がある。日本の設計事務所の中国での大型コンペの勝利などがここでは見られる。2001年にはそうしたニュースが集中しており、山本理顕の建外SOHO(S051)、黒川紀章の広州市珠江口地区都市計画(S052)、川口衛+高松伸の天津博物館(S053)、AXS 佐藤総合計画の広州国際展示場(S054)などがそうで、これらは黒川の都市計画以外は2005年までにどれも実現している。また、2002年に行われた中国中央電視台の国際コンペは、オリンピック施設のコンペと並んで注目度の高かった中国のテレビ局の本社屋のコンペであり、それに伊東豊雄のコンペチームの1人として参加した筆者は、このときの詳細なコンペのプロセスを「論説」形式で記録に残している(S084)。このような中国での建築の実現に関するさまざまな報道がされることで、日本の建築界は中国の状況をより具体的に把握していくようになる。

旅行記における変化

「作品紹介」以外にも、『新建築』は読者をひきつけるため、あるいは一方で建築家を執筆者として参加させるためにさまざまな記事を用意している。ユニークなのは、本分析では記事属性の分類上は「コラム」に分類している旅行記の類

1) 国際コンペによって1984年に米国のソベル・ロスの構想案が採用されたものを、日建設計が設計監理を行った。北京のCBDの中心地区に位置する複合ビル。

で、建築家の紀行文や大学院生のレポートが掲載されている。

坂倉建築研究所の建築家西澤文隆は、「旅の手紙」というコーナーで、1985年に「明媚な蘇州」というタイトルの小文を残している(S001)。「中国は北と南ではまったく違うと聞かされていたが、北が社会主義、南も社会主義のはずだが民主主義の国に居るような感がある。文化財を大切に心が違う。デザイン自身も北は概念的でスケールで勝負しているのに対し、南はたとえ大きくても分節して、細部の細部まで心をこめてつくっていくという気風の違いがある」。さらに中国と日本の建築を比較して言う、「中国では建築がごつてり出来上がっているから、伸び伸びと生育した大樹に拮抗し得る。ここに配された奇岩怪石と、余すところなく敷詰められた小石模様の舗道が、橋、曲折廊、高欄、花牆と共に繋ぎ役を果たしている。それは日本のように控え目にバランスをとるのではなく、互いに叫びあい自己主張をする中で、勢力を伯仲させているのだ。まさに動的均衡の中にある。庭は建築や牆壁によって仕切られ、そこには千変万化な形の窓があげられ、奇想をこらしたグリルが嵌め込まれ、次の庭の展開を予告している。それらをすり抜けすり抜けしてたどる庭の間隔は回遊式などという生やさしいものではなく、まさに迷路の連続である。その中で激しい抑揚を経験しながらしばられ、また開ける空間のシークエンスを楽しむ仕掛けである」。伝統的な日本の神社仏閣の実測で知られる西澤は、極めて即物的に蘇州の庭園を観察し、起源さがしをしたり優劣を考えたりせず、ただ日本と中国のそれらを比較した上で、彼にとつての中国の庭園は日本のそれより動的で激しいものに見えたということを記している。

建築家の相田武文は、西澤と同年に同じコーナーで、上海、吐魯番・烏魯木齊・喀什、ハルビンでの経験を3回の連載にわけて書いている(S006-S008)。ここで相田は、満洲育ちでアメリカ在住の友人Kにあてた手紙の形式をとり、何回かの中国旅行の経験を旅の途中の手紙と言う形で紹介している。講演会や学術交流会などで中国各地を訪れ、それをいわば私信として書いているので、論調はかなり自由である。北京についての印象「これから行く北京は、これで三度目ですが、たいして面白い建築もありませんので」、上海で同済大学の学生課題を見せてもらったときは「学生の課題の内容やドローイングは二、三十年前のわが国のそれと同じ印象を受けます」、新疆ウイグル自治区のトルファンで交河故城を見て「一般的に言えば、中国の古建築や遺跡の保存状態は良いとはいえません。残念なことです」などと、格式張らない印象が散見される。同時にこうした気取らない視線は中国のよいところにも向けられ、学生の作品の傾向が遅れているのを「将来、中国においても質やデザインの問題が必ずクローズアップされてくるに違いありません。そして、世界をリードすることになるかもしれません。その時日本はどうなっているでしょうか。数世紀前に、中国から影響を受けたわが国の建築は、再びその影響を受けることになるかもしれません」と言い、その風景について「中国もその広さには圧倒されます。中国の場合には、その広大さが単なる自然の連続といったものではなく、そこに歴史の密度を感じざるを得ないのです」と言い、人について「どこかの国と違って、こちらの学生はまじめで、よく勉強をするようです」と言う。中国を何度も訪問しているからか、観察は自分の視点から組み立てられており、そこでの中国観は全体的にやや感傷的になりつつ、かつ温かく中国の古さや後進性を見守る姿勢が明確である。

東京芸術大学大学院生の横溝真は1985年に大学の中国住居建築考察団の一員として上海を訪問したときの印象を残している(S005)。20世紀初頭の世界的な租界都市だった「魔都」としての上海のイメージが、訪ねてみると実際は違い、住宅不足の状況の中で乱開発が進んでいる点を指摘している。また夜は照明が少なく暗いのにも関わらず治安は極めて良いのが都市らしさが無いとも言う。転換期にある上海の雰囲気伝える紀行文である。

似たような記述は大学研究室の研究報告記事にも見られる。1994から95年にかけては、大学の研究室ごとの活動報告が掲載される記事欄「研究室レポート」があり、そこにいくつかの研究室が中国での活動を紹介している。芝浦工業大学の三宅理一研究室は、研究室の中華系留学生が、人民大会堂を設計した2人の中国人建築家にインタビューを行い(S024、S025、S027、S029)、早稲田大学の中川武研究室は研究室の日本人研究者が雲南省南部の村落の建築配置についての研究を紹介し(S030)、法政大学の陣内秀信研究室は上海に留学中の日本人大大学院生がウイグ

ル族の中庭住居の内部空間についてレポート(S032、S035、S036)している。これらは広い意味での旅行記であり、それぞれ建築史、農村計画、建築計画などの専門領域と対応しており、人類学的なアプローチによる建築研究である。また、1985年の相田武文がいわばVIP待遇で中国のあちこちを見て回っているのに比べ、90年代のこれらの記事では大学関係者や日本人留学生が中国国内をより自由に動き回れるようになっていることがわかる。

これらの旅行記は、建築家のレターの形式をとるものであれ、大学研究室の報告書の形式をとるものであれ、まだ中国が「素朴な人たちのいる温かい国」「めずらしい民族建築の参照先」として眺められており、そこでの記述も感傷的な態度が主流である。対照的に2001年「上海へ行こう! 建築家のための上海建築ガイド」(S060)の記事になると、もはや感傷的・懐古的な態度は一掃されている。上海の近現代建築がプロットされた地図には「上海の都市構造が大きく変化したのは、1990年代後半から今世紀になってからなのである。東南アジアの諸都市に比べて、そのスタートは10年近く遅かったが、瞬く間に追い越して、世界都市の最前線に躍り出てしまった」という説明がつけられ、同じ「旅行」を切り口にした文章でありながら、2001年の「上海建築ガイド」は日建設計による2つの実現した建築作品(中国銀行上海ビルと上海信息大楼)の作品紹介記事にあわせて、実際に上海を訪れるためのすぐ目の前の状況を説明するようなガイド風記述となっている。また、大学研究室のレポートにも変化も見られる。2004年には早稲田大学の古谷誠章研究室による都市研究に関するレポート(S098、S105)が掲載されているが、香港の高密度住宅が研究対象に挙げられ、現代都市の一例としてそこを扱う記述には、90年代中期の「研究室レポート」にあったようなアジアを見るときに感傷的な視線はもうない。香港の例をシンガポールや台湾、韓国と同列に比較して並べているその手つきは、日本建築界が中国を見る時に、もはや中国だけでなくアジア全体の関係の中でそれを見るようになっている変化を現わしているとも言えるだろう。

長い時間の中での中国、大きな枠組みの中での中国

ここで分析対象としている中国関連記事のなかには、中国をより長く古代からの歴史の中でとらえたり、あるいはより広くアジアのなか、あるいはアメリカとの対比のなかでとらえようとする視点も見られる。

1991年の黒川紀章の論説「共生の思想」(S021)における「天円地方説」の引用は、自身が設計した北京の「日中青年交流センター」の設計説明でもある。ここで黒川は「中国の長い歴史の中にあるより抽象的なレベルの伝統を再発掘できないか」という考えから、中国前漢時代の書『淮南子(エナシ)』のなかで述べられている天円地方説をひいている。黒川は「同時代の中国建築が「カーテンウォールの高層建築に伝統的な屋根を直接のせるという安易な方法の作品が多く見られる」のに対し、自分はそれと違う「中国文化の底流に潜む宇宙観のモルフォロジー」に着目して建築を作ったという。それ以上の説明はこの建築と古代思想を対応させるのにはあまり成功しているとは思えないが、黒川にとってこの古代思想は、オーディトリウムやホテル低層部に円形や正方形を使うことを正当化するのは十分だったようだ。『淮南子』による中国の伝統的な形態論を中国文化の抽象的な操作」として引用したという黒川の説明は、中国のもつ歴史的な古さへの憧憬があったと思われる。実際彼自身この天円地方説を知ったのは「もうすでに10年前のことになるが、NHKの「歴史への招待」の中で“前方後円墳の謎を解く”という番組があった」のがきっかけで、これは1980年代初頭番組「シルクロード」が「NHK特集」で月一回放映されて日本人のアジア文化への敬慕が一般化したところと符号する²⁾。

2)NHK 特集 シルクロードは1980年代前半と1988年-89年に、NHK総合の「NHK 特集」で、毎月1回放送されたシリーズ・ドキュメンタリー。1979年から1980年にかけて取材し、NHKと中国中央電視台により中国・西安を出発点に、中国領内シルクロードの共同取材が行われ、全12回シリーズ『日中共同制作シルクロード 絲綢之路』が、1980年4月から1年間放送された。中国以西の取材に向け数年間交渉し、さらにインド・ユーラシア大陸(中央アジア)・アナトリア半島・地中海からローマへ至る道を紹介した『シルクロード ローマへの道』が製作され、全18回が1983年4月から1984年9月までシリーズ放送された。特に外国メディアにより、中国領土内のシルクロードの取材が認められたのは、この番組が初めてで、大きな関心と反響を呼んだ。1980年代以降のいわゆる「シルクロードブーム」は、この番組が火付け役となった。また総集編(前編・後編)で放映された。何度もビデオ化され、様々なソフトで出された(wikipediaより抜粋)。

1994年に石井和紘は「自己変革時代の建築Ⅲ—歴史」(S026)において、アメリカに留学して建築教育を受けた自分が、そのアメリカ経験ゆえにアジアに目覚め、中でも中国の「DNA 的記憶」に今まさに自覚的になりつつあることを書いている。自らの建築作品「ジャイロ・ルーフ」や「清和文楽館」を中国の天壇のイメージと重ねているところは黒川の態度と似ている。石井はさらに、中国の台頭を感じ「今、近代が過去の文明のように歴史に組みこまれていこうとしている。その大きな変革の時をサポートしているのは、近代化を成し遂げようとしているアジア、中でも中国の存在である」と言い、「自分が設計した建築を誰に見てもらいたかったのか、急にわかってきた。日本ではなかなかわかってもらえないようなことが、ここ中国では自然にわかってもらえるのだ。DNA 的記憶にアジアは生きている」とも述べている。当時の日本でポストモダンの代表的建築家だった石井は、自らの建築のなかに他の建築からのさまざまな引用をちりばめる作風で知られていたが、台頭する隣国をアメリカにかわるものと置き換え、中国に対して建築よりも大きな枠組みとして心理的親近感を語ることで、自分の作品におけるアジア的モチーフの引用を正当化できると思っていたようである。

2000年の渡辺豊和が記した上海の印象「透明から無限入籠へ」(S049)では、上海を実際に訪れた建築家渡辺が、その開発の勢いに驚き「ここは世界に類例のない都市計画実験をしているのではないかとまず思った」と記している。また上海の豫園の周辺に高層建築が集中していない再開発のありかたや、台湾の建築家李祖原の作品が「その断面がまさに典型的な入籠になっていて、空間が幾重にも折り重なっている」ことを見て、西欧の「透明」な空間にかわって「21世紀の世界原理はおそらく「無限入籠」である」と予言している。ここでは中国というよりは広く中華社会というものがもつその空間特性を、西欧のそれと対置し日本との関係を論じている。石井や渡辺の論説には、中国の重視、アジアの中で中国を位置づけようとする視点、アメリカに対置するものとしての中国像という点で共通している。

2つの展覧会に関する特集記事でも、こうしたアジア的な枠組みの中で中国をとらえようとする視点が見られる。2002年夏のヴェニス・ビエンナーレ第8回国際建築展の報告記事(S076)は、日本館コミッショナーの磯崎新が国際建築展で日本館をプロデュースした際に、漢字文化圏の建築家として、日本・中国・韓国・ベトナムに関係する建築家を招聘した経緯を語ったものである。ここでは中国人建築家張永和が日本館の展示作家のひとりとして招聘されている。2004年には東京の「ギャラリー間」で開かれた「承孝相と張永和展 融合する東アジア建築世界から:BEYOND THE BORDER」展に関連する対談記事がある(S102)。これは展覧会を監修した村松伸の司会による出展者2人との鼎談が掲載されているが、日中韓三国の建築をめぐる状況を比較することで東アジア全体の建築の未来像が語られている。

こうした、中国をアジアという大きな枠組みの中でとらえる記事においては、大きな枠組みは日本からの中国認識を安定化させるための安全弁的な機能を担わされている。すなわち、中国の成長を強調するだけでは日本からの視線にねたみややっかみが入ってくることも考えられるが、アジアの中の一国としてほかと強調しながら成長していますよというメッセージであれば好意的に評価されるからである。村松がこの鼎談で語っている「日本は情報でも、仕事でもこれまで国内で充足してしまうだけの巨大さをもっていた。外国は私たちにとって多くの場合、学ぶべきモデルが存在している場所であって、勝負の場所ではない。だが、ここにきて日本の相対的な力が落ち、反対に中国、韓国の活力が顕在化してきている」というのは、こうした日中間のバランスを的確にとらえたものと言えるだろう。

急速な成長への気づき

この時期の『新建築』における記事では、急速に変化する中国のその成長ぶりを伝える記事も多い。もっともリアルなのは中国で実際のプロジェクトを動かしている者の、あるいは現地に長期滞在している建築関係者の報告である。2002年に迫慶一郎と筆者は1カ月違いで同じコーナー「STAND POINT」において自らの中国での生活や仕事ぶりを紹介している。この記事欄は若手建築家がどうしているかを考えて活動しているかを見開きの2ページで紹介する小さなコラム

だが、迫は山本理顕設計工場の北京設計室長として日本人が設計を受注した大型物件として知られた「建外 SOHO」のプロジェクトに追われる毎日を(S065)、筆者は張永和の主宰する北京非常建築工作室と北京大学建築学研究センターにおける中国での建築設計の実践を(S066)、それぞれ報告している。彼等は2人ともものに北京で独立し、デビュー作も『新建築』で報道されている(S117、S118)。迫は未整理な当時の中国の社会システムの影響で「とにかくトライしてみる」の精神がここにはある、と言う。筆者はさまざまな消費の形が偏在する当時の中国を「消費の渦」があちこちにあるとなぞらえ「渦に一度飲み込まれるとなにが起ころかわからない。成功も失敗もある。巻き込まれていくかどうかはあなた次第だ」と言う。

森ビル都市企画参与の白井順二は2003年の「北京大学のエネルギー」というエッセイ(S082)のなかで、中国の成長ぶりに驚きを隠さずに称賛している。北京大学に新設された環境科学院にレクチャで訪れた筆者は、大学の活況を見て「振り返って日本を見ると、わが国はすでにいくつかの部分で中国に追い越されているのだと実感する。少なくとも若者のエネルギーに関しては残念ながらそう認めざるを得ない」と述べている。

中国の北京オリンピックを起爆剤にした景気の上昇と、建築市場の再編についての記事もこうした中国の成長への気づきを捕捉するものであると言える。竹中工務店専務取締役の村松映一は2003年に設計事務所のグローバル化を指摘し(S085)、WTO加盟後の中国に日本のゼネコンが現地法人を強化している報道もあり(S093)、これらがそうした捕捉に該当するであろう。

また、具体的なプロジェクトの経験を通して、中国社会に入り込み、そこでプロジェクトを実現させた建築家ならではの実感が語られるのも『新建築』の特徴であると言える。表2.1.a-2で見たように『新建築』でこの期間に日本人が中国で関わった建物の作品紹介は30編あるが、中でも2004年に竣工した「建外 SOHO」は、山本理顕設計工場設計による大規模開発で、北京の中心地区に話題のデベロッパーが開発した案件であった。山本はTIMEの以下のような記事ひいて、中国の変化を代弁させている、「SOHOのライフスタイルがコミュニティを生き返らせるのか、さまざまな建築家のメガストラクチャーが中国を変えるのか、そんなことは誰にも分からない。でも、こうした新しい建築は中国の若い世代に確実に影響を与えている。中国は今新時代を切り開いているのである」(S110)。「SOHO別荘」部分の設計者である小嶋一浩は「今の中国はあらゆる事が決定不能な中での可能性に向けて突っ走っている…わずか数年先のことが誰にもこうだと語れない」(S109)。などである。

建築家の仙田満は、「上海旗忠森林体育城テニスセンター」の設計でシャッター型開閉の複雑な屋根ドーム建築を設計した。2007年にはこの工事を振り返って「開閉機構の駆動部分の基本設計を三菱重工がしたが、工事費があわず、人民解放軍総装備部が実施設計と製作を担当した。われわれとしては、かなり細かい所までを基本設計段階で検討したことによって、実現できたという思いがあるが、最終的に実現し可動させた中国側の技術も認めざるを得ない」と、その中国側の技術の高さを認めている(S154)。同じころ竣工した「佘山佘山明珠体育館」の工事では「地下道はたった数カ月で竣工という、中国ならではの環境形成のパワーを見せられた」という感想も残している(S161)。また佐藤総合計画の進藤憲治は2008年の「瀋陽オリンピックスポーツセンタースタジアム」の竣工に際し、「多くの瀋陽市民は約1年半で完成した新スタジアムを観覧し、「瀋陽の軌跡」として驚異と歓喜をもって迎えてくれた。この驚異的な建設期間の短縮は、まさに現代中国のスピード感を表徴している」と述べている(S169)。実際の建設を通じて、多くの建築家が中国の急速な成長に対する肯定的な実感を得ていることがこれらの記事から見てとれる。

オリンピックの存在

2008年の夏に開催された北京オリンピックの北京への招致が決まったのは2001年7月13日のモスクワで開かれた第112次国際オリンピック委員会総会においてであるが、『新建築』の1985年から2008年までの中国関連記事にお

いて、北京オリンピック関連の記事は 12 編のみである。以下にそのリストを挙げる(表 2.1.a-3)

S073	200209	(編集部)	AXS佐藤総合計画が北京五輪施設を設計—天津市スポーツセンターとオリンピック公園マスタープラン
S082	200303	白井 順二	北京大学のエネルギー
S085	200304	村松 映一	台湾・高雄アリーナに想う
S106	200406	(編集部)	松田平田設計が北京オリンピック馬術競技場の設計者に
S150	200612	今井 公太郎	第11回 巨大建築がもたらした高性能な薄膜—旭硝子ETFEフィルム
S155	200706	高田 浩一	最新技術が可能にするオルタナティブ・ネイチャー
S156	200712	ジャック・ヘルツォーク&ピエール・ド・ムーロン	ETFE二重皮膜に包まれたウォーターキューブ(北京オリンピック)建築の受容/「北京」の現実 世界文化賞受賞インタビュー・講演会
S168	200804	鉾岩 崇	天津オリンピックセンタースタジアム:佐藤総合計画
S169	200804	進藤 憲治	瀋陽オリンピックスポーツセンタースタジアム
S170	200804	大野 勝	中国展開—スポーツ施設を通して
S194	200812	白井 宏昌	オリンピック年の野望と苦悩
S195	200812	川口 衛	オリンピック建築の夢と危うさ

表 2.1.a-3: 『新建築』(1985—2008 年)の中国関連記事におけるオリンピック関連記事リスト 12 編

日本人設計者は北京オリンピック施設設計にあまり関与していないために、記事数自体は多くない。一番早いこの件についての関連記事は、2002 年に佐藤総合計画が天津のスポーツセンターとオリンピック公園のコンペで最優秀をとったニュース(S073)である。佐藤総合はその前に広州の国際会議展覧中心のコンペに勝って現場を進めており、中国国内で実績もあった(S089)。国際コンペでメインスタジアムである国家競技場(のちにその形状から「鳥の巣」と呼ばれる)の設計者がヘルツォーク&ド・ムーロンに決まったのは 2003 年の初めであることと比べると、天津のこのニュースはそれに先立つこと半年近い。なおこの天津のプロジェクトのあと佐藤総合は瀋陽のスタジアムのプロジェクトもと、その 2 つがオリンピック開催直前の 2008 年 4 月に竣工物件として報道されている(S168、S169)。

設計者には選ばれなかったが、材料の部分で日本企業が北京オリンピック関連施設に参入している例の記事で見ることできる。メインスタジアムの隣の競泳場(のちにその形状から「水立法」と呼ばれる)の外装材はフッ素樹脂の一種である ETFE フィルムであり、日本では旭硝子が 1975 年以降製造してきている。その薄膜の詳細について、建築家の今井公太郎が 2006 年に旭硝子取材した記事(S150)では「水立法」への参照もある。翌 2007 年にはこの競泳場の設計事務所であるオーストラリアの設計事務所 PTW アーキテクツに勤務する日本人建築家高田浩一が ETFE を用いた外装設計の環境配慮について記事(S155)を残している。メーカー、設計事務所の日本人担当者を通してオリンピックに関する情報が伝達された記事で、日本人設計者の冠がかぶっていない建築作品に対して日本の商業建築誌がとった記事作成方法と言える。

世界文化賞受賞のために来日したジャック・ヘルツォークとピエール・ド・ムーロンのインタビューを編集した記事(S156)では、インタビューで「鳥の巣」について言及がある。構造的に無駄が多いことをどうとらえるかという質問に対してヘルツォークは、「「北京」の鉄骨の量は決して多すぎることはなく、もし、少しでも削ったとしたら崩壊します…あのとてつもないパワーはそう簡単に真似できるものではありません」とインタビューで答えている。この記事では編集サイドが「鳥の巣」が構造的に非合理的なことをどう考えるのか建築家に迫っている箇所があり、先のインタビューとド・ムーロンの講演会についての報道をあわせて「構造的な合理性に疑問が呈されているのも現実だが、国家があのような「パワフルな」建築を必要とした現実、来年オリンピックが開催される現実、「鳥籠」という愛称で中国の人びとに受容されている現実もある。…やはり「北京」を実際に見て、改めて考えてみるべきなのではないか」としめくくっている。この争点はオリンピック後の川口衛による「オリンピック建築の夢と危うさ」(S195)まで引き継がれ、そこで川口は北京の「鳥の巣」について、「そのあまりの浪費性に啞然とせざるを得ない」として 1976 年のモントリオール・オリンピックのメインスタジアムの失敗と重ねて建築設計における構造設計のありかたについて詳細な検証を行っている。

こうして見てくると、『新建築』における北京オリンピック報道は、日本人が設計や資材提供の部分で関わったわずかな施設に関する報道と、メインスタジアムの構造に関するいくつかの記事以外は、記事数も少なく、その情報ソースも設

計主体ではなく建材メーカーや設計の現場担当者など、「傍流」の談話を集めた印象は否めない。2008年の記事数の集中においても、当該年は1985年以降の『新建築』においてもっとも多く中国関連記事が集まった年ではあるけれども、それらはオリンピック施設やオリンピック自体に関するものではなく、オリンピックもあって日本人が中国で仕事をする機会が増え、それによって派生したプロジェクトに関する報道の増加によるものであった。

小括:現地の状況に目を配り、大きな枠組みの中で成長する現実を支持する中国関連記事

1985年から2008年までの『新建築』における中国関連記事196編を見ると、中国の改革開放期から北京オリンピック開催までの期間に相当し、日本の建築界の中国に対する見方がこの短期間に変換していることがわかる。遅れていた中国が急速な成長を続けると、日本からの遠い過去を見るような感傷的な中国への視線は1990年代くらいまでにはなくなり、2000年代に入ると目の前の変化を直視する現実的なそれへと変化を遂げている。日本人建築家の中国における仕事の受注のあり方が変わり、それまでは日本から中国にでかけて行って仕事をとっていたのに対し、日本人建築家で中国に移住しそこを拠点にプロジェクトを推進する者が現れてきた。『新建築』の中国関連記事もこれにいち早く反応し、そうした人物が関係した建築作品についての記事も見られる。

また、中国の成長に伴って、それを長い歴史の上で位置づけたり、アメリカと対比的に捉えるなど、大きな枠組みの中で捉えようとする記述が見られるようになった、それらの多くは中国の成長を積極的にとらえようとする記事が主流を占め、否定的、批判的な論調は目立たない。

2.1.b. 『日経アーキテクチャ』(1985-2008年)の中国関連記事

記者により再配列された現場重視の情報伝達手段

ここでは2.1.a.で『新建築』に対して行ったものと同じ方法で、『日経アーキテクチャ』の1985年から2008年間の中国関連記事200編について、執筆者と記事形式の属性を把握し、さらに重要と思われる記事の論題と論調をレビュー形式で取り上げ、言説分析を加える。最初に全200編の記事一覧(表2.1.b.-1)、記事本数の経年変化(図2.1.b.-1)、執筆者の属性(図2.1.b.-2)、記事形式の属性(図2.1.b.-3)を示す。

記事数の分布は2回のピークがあり、2003年28編と04年24編で一度、08年の27編でもう一度ある。記事を通して読むと、2003年5月12日号「特集:驚人的中国」(N094-N106)が内容上の一つの分期点となっている。それまでの『日経アーキテクチャ』の中国関連記事は散発的なレポートやニュースが多く、中国での現地取材記事があっても取材対象は中国にいる日本人が中心で「日本から中国に出かけて行っている人」を対象にしていたのに対し、この号は雑誌のほぼ一冊丸ごとが北京上海に関する現地取材特集で、さらに取材対象として中国にいる日本人と中国にいる中国人がミックスして配されているところに特徴がある。つまりそれ以前の当該誌が、中国に出かけている少数の日本人とその周辺のビジネス環境を中心に報道していたのに対し、この号以降成長する中国そのものに雑誌の興味が移行し、取材先が中国にいる中国人でも構わないという編集態度の変更が見られるのである。2003年は『日経アーキテクチャ』の記事数の1回目の集中が始まった年であり、これが当該誌にとっての「同時代の中国」を発見した時期だと見なすことができよう。

別表N1中国関連記事リストを見ると、1回目の記事ピークは03年5月12日号の特集のほか04年8月23日の特集「中国で生きる」もこれに貢献しており、2回目のピークは北京オリンピック(特集「北京再誕」08年8月11日号)に加えて、四川大地震(6月9日号)、上海環球金融中心と中央電視台ビルの竣工(前者は10月13日号、後者は1月28日号)など、さまざまな出来事に関する現場取材記事の集積が、これだけの記事数を形成していることがわかる。

執筆者の所属先は「日本の民間企業」が82%と圧倒的に多い。また、「中国の機関」(5%)より「第三国の機関」(8%)に属する者の方が多い。前者には中国の設計事務所の人物(N003:柴裴義)、デベロッパーの社長(N106:張欣)、雑誌編集者(N130:黄居正)らや、中国で起業している日本人建築家(N160:迫慶一郎、N190:東英樹)らが含ま、中国現地での取材によってこれらの執筆者の記事が回収されている。後者には中国でプロジェクトを持つ海外建築家(N012:ノーマン・フォスター、N113:レム・コールハース)と、海外の通信社による配信記事(N006 など)などが相当する。実際に記事を読むと記事の中の発話主体者はもっと多い印象を与えるのだが、『日経アーキテクチャ』の誌面は、基本的に編集部記者による取材記事から構成されており、取材先は多様であっても日経の記者が情報を再配列した署名記事になっているケースが多い。本分析においてそうした編集部記者による記事は「日本の民間企業」の中に包摂されるので、この部分の比率が高くなっている。なお、執筆者の国籍は、海外の通信社の中国ニュースを買って配信していた90年代前半までは「第三国」のものもいくらか分布があるが、それ以外の大多数は「日本」になっている。

記事の種類は、数の上では「ニュース」が38%と最多である。ただしこれは小さなお知らせ欄も多く含み、通覧すると2番目以降のカテゴリが情報量としては多い。その中では「論説」が27%と主要な部分を占め、これは編集部記者によるまとめた文章であることが多い。「文献抄録」とは事実上この雑誌においてはすべて書評であり、『日経アーキテクチャ』においては、その中国関連記事において、中国関連の書籍の紹介が一定の割合を占めていることがわかる。

資料番号	掲載発行年 月	号数	著者	記事タイトル	中国関連記事の形式												
					執筆者の属性					記事の属性							
					国籍		所属先			記述対象		種類					
					日本	中国	日本 の教育機関	日本 の民間企業	中国の機関	第三国 の機関	不明	中国	日本	第三国	建築雑誌	文藝春秋	作品紹介
N001	850311		橋本武・東沢生	「アーブルを念にしたRC格子梁で天井・80mmの断面断熱を架ける。香港・立法局カナル・センターによる構造の													
N002	850520		(編集部)	中国の百貨店近代化に超高層建設が協力													
N003	850603		安養義	北京のシンボル的建物の中に共同設計進む京城大宴													
N004	850603		(編集部)	中国のグリーンビル設計 日本設計事務所が受注													
N005	850923		柳村純	中国で日本建築再生の動き 現地に情報提供の													
N006	851118		(海外配信)	ワシントンの中東館に中国建築の意を融合													
N007	851202		(海外配信)	13層このアパート建築で超高層の偏重心を克服 中国銀行の意向の機軸の機軸													
N008	860127		(編集部)	中国建築界の大手大成建設が合弁会社を設立													
N009	860224		(編集部)	香港・上海銀行 先端技術の大型導入計画、建築の可能性を問う													
N010	860421		(編集部)	中国銀行香港支店ビル本体工事 断面積が2600坪で受注													
N011	860421		(編集部)	ユニセフが中国のアムステルダム建築に全面協力													
N012	860519		ノーマン・フォスター	アジアの生産過程は下部不確かな関係にある フォスターは香港・上海間に設計事務所を移す													
N013	860630		(編集部)	深圳の建物の内訳、いずれも香港銀行を模倣													
N014	860630		(編集部)	中国・廣東銀行建設で日本工事が事業化調査受注													
N015	860908		(編集部)	建築建設が香港に建築事務所 海外事業の調査受注													
N016	870309		(編集部)	大平セメント社 対中技術協力に積極姿勢													
N017	880125		ノーマン・フォスター	「アジアの生産過程は下部不確かな関係にある フォスターは香港・上海間に設計事務所を移す」													
N018	880222		東孝光	香港の町並みに学ぶ													
N019	880418		(編集部)	陳那思洋行「上海 概する近代都市」													
N020	881017		(海外配信)	香港で昔の姿を取り戻す「東洋の宝石」上海													
N021	881226		(編集部)	大形の建物の中心を占める 慎重な施工で開門を突破													
N022	881226		(編集部)	中国銀行香港支店ビル													
N023	890109		(編集部)	香港の町並みに学ぶ 地下住宅 中国の都市計画													
N024	890306		市川定雄	急速な都市化の波に押しつぶされた上海の都市計画													
N025	890306		(編集部)	川島重光著「近代上海の発展」													
N026	900416		(海外配信)	上海建築展、3月一部オープン 地元の意見は聞かれない													
N027	900811		(編集部)	中国銀行香港支店ビル 新時代を迎える香港の象徴													
N028	900811		(編集部)	中国銀行香港支店ビル 新時代の象徴													
N029	900903		(海外配信)	香港に本拠地を建設中 高層ビルに挑む													
N030	901224		(海外配信)	香港で高層ビル世界大会開催 不況到来で高層計画は困難に													
N031	910708		(編集部)	「上海の町並みに学ぶ」中国の都市計画													
N032	920217		村瀬千文	名門ラッパズは上海に上りかかるとか 東南アジアホテル最前線													
N033	920525		(編集部)	古代中国の大都市をCGで表現 上海の表現を模倣													
N034	920525		(編集部)	上海の都市計画を模倣する高層ビル 上海近代化のシンボル													
N035	930118		渡多野哲次	北京の都市計画を模倣する高層ビル 上海近代化のシンボル													
N036	930215		(海外配信)	上海市の巨大開発を計画													
N037	930510		(海外配信)	香港の競技場、試合と並行し改修													
N038	931220		小川陽平	現地に建てる中国コンベンション 上海・浦东新区の都市計画													
N039	940103		(編集部)	上海の都市計画を模倣する高層ビル 上海近代化のシンボル													
N040	940103		(編集部)	現地に建てる中国の大都市 蘇州と周辺の水の文化													
N041	940131		(海外配信)	中国で世界一の超高層ビル計画													
N042	940131		(編集部)	上海で「ジャコ」建設の計画 日本設計が基本設計を													
N043	940801		(編集部)	みなぎるラッパズは上海に上りかかるとか 東南アジアホテル最前線													
N044	941121		(編集部)	木津雅代著「中国の庭園 山水の観念論」													
N045	941219		(編集部)	アジアの建築デザインに日本勢も参入													
N046	941219		(編集部)	現地に建てる中国 都市と建築の歴史													
N047	950116		(編集部)	上海の音楽ホールで国際コンペ 日本設計が基本設計を													
N048	950130		田中互恵	ミランする設計者たち													
N049	950213		栗原正次	開放路線貫く中国の国際都市へ													
N050	950327		(編集部)	清水建、中国で建設許可取得													
N051	950703		(編集部)	希望社、株式公開で緊急融資 中国で住宅を分譲													
N052	950703		龍川紀章	アジアの時代													
N053	950814		アン・リュン・ミン	上海の超高層ビルプロジェクト設計 大林組がデザインを担当													
N054	950911		(編集部)	村松伸著「高級アジア・モダン 同時代としてのアジア建築」													
N055	951023		池上俊郎	世界で注目された、アジア建築の時代													
N056	960422		(編集部)	アジアの超高層ビルプロジェクト設計 大林組がデザインを担当													
N057	960508		木下光	草間も地味に人気のある公園に変わる													
N058	961202		(編集部)	上海外灘地区の再開発コンペで「アイ・エー」が当選													
N059	961202		樋口正一郎	アジアの超高層ビルプロジェクト設計 大林組がデザインを担当													
N060	970210		(編集部)	アジアの超高層ビルプロジェクト設計 大林組がデザインを担当													
N061	970714		(編集部)	フォスターの最新作は上海に上りかかるとか 東南アジアホテル最前線													
N062	971020		村松伸	現代都市の再開発を模倣する高層ビル 上海近代化のシンボル													
N063	971103		(編集部)	アジアに挑む													
N064	980408		(編集部)	現地に建てる中国 都市と建築の歴史													
N065	981214		(編集部)	上海の音楽ホールで国際コンペ 日本設計が基本設計を													
N066	990906		(編集部)	コンペ 中国・上海の都市計画コンペで日本勢が当選													
N067	000207		(編集部)	コンペ 中国・上海の都市計画コンペで日本勢が当選													
N068	000403		(編集部)	8月・上海の都市計画コンペ、石巻建築事務所が当選													
N069	000403		(編集部)	12月・上海の都市計画コンペ、石巻建築事務所が当選													
N070	000724		(編集部)	国際的な都市計画コンペ、中国における住宅建築のエネルギーと環境問題													
N071	000724		(編集部)	建築エネルギー問題「中国の都市計画コンペで日本勢が当選」													
N072	000904		(編集部)	コンペの後 北京のオリンピック、実現に挑む													
N073	001030		(編集部)	上海の都市計画コンペ、石巻建築事務所が当選													
N074	001113		(編集部)	フォトニュース アジアの都市計画コンペで日本勢が当選													
N075	001225		南津雄	アジアの都市計画コンペ、石巻建築事務所が当選													
N076	010219		(編集部)	コンペ 中国の大都市計画コンペで日本勢が当選													
N077	010402		(編集部)	コンペ 中国・広州の都市計画コンペで日本勢が当選													
N078	010402		(編集部)	コンペ 天津博物館、川口・高松JVIに													
N079	010528		(編集部)	海外建築展「早く」早くも模倣 時差と給電差を利用する													
N080	010625		(編集部)	「上海の都市計画コンペ」石巻建築事務所が当選													
N081	010903		(編集部)	展示会「上海」石巻建築事務所が当選													
N082	011210		(編集部)	コンペ 川口・高松JVIに													
N083	020204		(編集部)	コンペ 中国の大都市計画コンペで日本勢が当選													
N084	020819		(編集部)	コンペ 石巻建築事務所が当選													
N085	021125		(編集部)	重要なデザインを模倣する													
N086	021223		(編集部)	「上海の都市計画コンペ」石巻建築事務所が当選													
N087	030120		(編集部)	天津博物館 設計：川口・高松JVIに													
N088	030120		(編集部)	天津博物館 設計：川口・高松JVIに													
N089	030120		(編集部)	Shanghai Pudong Chrysanthemum Park Phase 3 C/D/E 設計：石巻建築事務所が当選													
N090	030203		(編集部)	模倣する上海の都市計画コンペで日本勢が当選													
N091	030317		(編集部)	「上海の都市計画コンペ」石巻建築事務所が当選													
N092	030317		(編集部)	「上海の都市計画コンペ」石巻建築事務所が当選													
N093	030331		(編集部)	「上海の都市計画コンペ」石巻建築事務所が当選													
N094	030512		(編集部)	中国が「上海」石巻建築事務所が当選													
N095	030512		(編集部)	北京五輪施設、設計者選定済み													
N096	030512		(編集部)	川口・高松JVIに													
N097	030512		(編集部)	「上海の都市計画コンペ」石巻建築事務所が当選													
N098	030512		(編集部)	「上海の都市計画コンペ」石巻建築事務所が当選													
N099	030512		(編集部)	「上海の都市計画コンペ」石巻建築事務所が当選													
N100	030512		(編集部)	TOTOが「上海」石巻建築事務所が当選													

表 2.1.b.-1: 『日経アーキテクチュア』の中国関連記事一覧 全 200 編

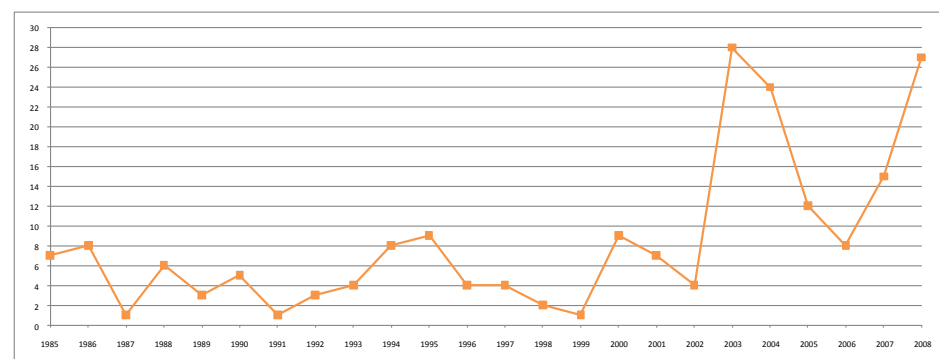


図 2.1.b.-1: 記事数の経年変化

記事番号	掲載発行月	号数	著者	記事タイトル	中国関連記事の形式									
					執筆者の属性					記事の属性				
					国籍	所属先	記述対象	種類		国籍	所属先	記述対象	種類	
					日本	中国	第三国	不明	中国	日本	第三国	不明	中国	日本
N101	030512		(編集局)	日本の設計界による流行中プロジェクトMAP										
N102	030512		(編集局)	上海新天地と日建設計 脱れた新地帯空間を関係者が追う商業施設に										
N103	030512		(編集局)	松原弘典氏の書店内装「北京一長い家具」で個の力をアツクする										
N104	030512		(編集局)	前田建設工業の三統システム 日本なら6年かかる工事をわけるシステム										
N105	030512		(編集局)	中国ビジネス事情										
N106	030512		劉俊	視点 中国から見た日本、中国から見た中国										
N107	030512		近藤一郎	特別編集 北京市										
N108	030512		仲本尚志	特別編集 上海市										
N109	030526		(編集局)	コンペ 北京五輪スタジアムがヘルゾーク&グラーベに										
N110	030623		松山哲生	ババム期の日本のような中国										
N111	030915		(編集局)	仙田謙二グループが上海でマニエーション										
N112	030915		J. スコット、キム・ボム	RTKL 最速なデザイナーを米国のオフィスから選ぶ										
N113	031124			超高層のアレビッドをランドマークに北京に新たな自由を										
N114	031222		(編集局)	中国広東省の総合体育館は仙田グループ										
N115	040112		(編集局)	重慶現地・永昌閣城一期 設計：久米設計										
N116	040126		(編集局)	天津博物館、天津市政広場 設計：川口龍十・高松伸										
N117	040126		(編集局)	上海銀行本社ビル 設計：丹下都市建築設計										
N118	040322		(編集局)	第1回中国建設市場の調査視察団(後編)										
N119	040517		(編集局)	コンペ 中国の修業コンペに昭和設計が当選										
N120	040517		(編集局)	北京五輪施設、構想の正体										
N121	040614		(編集局)	コンペ 北京オリンピック馬術競技場に松平田設計										
N122	040809		(編集局)	ここが、北京の住居地です										
N123	040823		(編集局)	建築一画 SAKO建築設計工社 独立後数ヶ月でスタッフ30人の事務所へ										
N124	040823		(編集局)	注目建築 建外SOHO 人と人が集い、物語を紡ぐ										
N125	040823		(編集局)	松原弘典 松原弘典建築設計工社 特注品でつくりこみ現代デザインを追求する										
N126	040823		田中成亮	建築事務所 北京建築設計事務所										
N127	040823		(編集局)	高松伸建築設計 TMA建築事務所 日中の経験生かし、好景気の波をつかむ										
N128	040823		(編集局)	五十嵐廣平 M.A.O. (上海) 建築設計「修行」より「実用」派の中国建築界に進出する										
N129	040823		(編集局)	建築事務所 上海商業建築										
N130	040823		(編集局)	注目建築「建築師」編集長が選ぶ中国新建築										
N131	040823		(編集局)	注目動向 不動産市場 内装済み、SOHOなど多岐に										
N132	040823		(編集局)	先駆者たち										
N133	040823		森省五	異人町(東京都新宿区) 本音街に古代中国の砂漠と出現										
N134	040823		安部和幸	中国・天龍閣 千年間何も変わらない										
N135	041101		柳澤人	必ず日本の都市を見直しはし										
N136	041129		林静	ベネチア・ビエンナーレ第9回国際建築展 第1回北京国際建築展 現代建築の発展と中国の建築発展										
N137	041129		上村弘弘	CASBEE活用したGOBASで北京五輪施設を完成										
N138	041227		(編集局)	中国 2004年の大ニュース 中国の需要拡大で鋼材供給が確保										
N139	050221		(編集局)	中国大連、上海H2ビル、上海鋼鉄系体育場デザインセンター、世界貿易センター										
N140	050307		(編集局)	国際フォーラム 持続型都市に向けて、アジアの都市の発展を促す										
N141	050321		伊藤部員史	みかんぐみ共同主宰)が注目するUS建築界 中国・上海 東洋につづられたコッポラ										
N142	050418		北村幸明	中国 上海 東洋につづられたコッポラ										
N143	050418		(編集局)	作品展「黒川紀章・メタボリズム(新陳代謝)と共生」										
N144	050530		(編集局)	超たれない中国の影響力 巨大市場が建材価格を押し上げる										
N145	050613		(編集局)	内装用の高級ガラスをファードに 日本建築ビルディング 東京五輪会場										
N146	050627		(編集局)	TN「ワークス」 松原弘典 講演会										
N147	051003		(編集局)	海外建築家の目にも都市づくりとは?										
N148	051031		宮川浩	中国の発展都市建設推進の超高層 北京電視中心二期 北京市										
N149	051114		(編集局)	Modern Style in East Asia 2005「建物の風景の生成」										
N150	051226		(編集局)	安藤忠雄建築展「環境と建築」										

記事番号	掲載発行月	号数	著者	記事タイトル	中国関連記事の形式									
					執筆者の属性					記事の属性				
					国籍	所属先	記述対象	種類		国籍	所属先	記述対象	種類	
					日本	中国	第三国	不明	中国	日本	第三国	不明	中国	日本
N151	060123		(編集局)	天津オリンピックセンタースタジアム、蘇州国際会議中心、内蒙省大興隆・博物館、北京テレビセンターなど										
N152	060123		(編集局)	stripe 近藤一郎 人と空間を色の帯でつなぐ										
N153	060213Next-A		(編集局)	都市が注目するUS 東京街										
N154	060213		(編集局)	上海環球金融センター										
N155	060227		(編集局)	設計とコストを管理して建造技術の可能性を広げる										
N156	060327		(編集局)	中国で納得のへぐ「ものづくり」を 言葉の海を渡すで乗りこえる										
N157	060710		(編集局)	特別セッション 張研氏「アーキテクトとテクノロジー」										
N158	061211		(編集局)	プロジェクト 長沙運河ビルに続き、上海にビルが誕生										
N159	070212		(編集局)	北京国際空港ターミナル、中央美術学院現代美術館、北京五輪スタジアム、唐山新館中心、Pashou										
N160	070423		近藤一郎	グローバルイズム										
N161	070514		(編集局)	16 石山修武										
N162	070528		近藤一郎	経高層										
N163	070723		近藤一郎	都市のパーソナリティ										
N164	070827		近藤一郎	オリンピック										
N165	071112		(編集局)	急成長するアジアでチャンスをつかむ 東京街										
N166	071126		東京街	中国上海 古きを壊し、新しきをつくる 革命のよびかけ										
N167	071126		(編集局)	EAU 立派な中国建築界 近藤一郎/松原弘典										
N168	071220		(編集局)	EAU 佐野中国建築界 近藤一郎/松原弘典										
N169	071224		(編集局)	松原弘典 近藤一郎「中国の建築界でつなぐ中国の発展」に合わせた「アーク・ゼロ」世代の人々										
N170	071224		(編集局)	中国・大連のCADセンターには50人の現地スタッフ 月15000円の費用がかかる										
N171	071224		大井智子	張研氏、小倉大と建築界を結ぶ										
N172	071224		(編集局)	特集「2010年上海国際博覧会」日本建築界・施工監理・設計・インテリア・日本貿易振興機構										
N173	071224		エッセイ	北京市復興開発局 復興後の北京を一望できる巨大施設										
N174	080128		(編集局)	中国中央電視台(CCTV)本社ビル 設計：OMA										
N175	080128		(編集局)	上座でつなぐ 2本のタワーをモチーフに設計で得た中国中央電視台(CCTV)本社ビル(中国・北京)										
N176	080211		(編集局)	Urban Plaza 中国中央電視台(CCTV)本社ビル、厦門海峡交通中心、国際会議中心など										
N177	080414		(編集局)	張研氏建築都市設計事務所										
N178	080414		(編集局)	「シン・ワット・ドゥン」著「中国 都市への愛」中国の発展と都市化の未来を語る										
N179	080512		長井美純	仙田謙二 北京大学体育館建築設計案										
N180	080609		長井美純	四川大興隆 死者6万8000人超、建築物の被害を拡大										
N181	080609		長井美純	石山修武氏 建築事務所花開城										
N182	080811		(編集局)	北京首都国際空港ターミナル 設計：フォスター&パートナーズ										
N183	080811		(編集局)	パート1 都市化を先導 花開城五輪建築										
N184	080811		(編集局)	パート2 過渡期の魅力とひずみ										
N185	080811		(編集局)	REPORT 被災地・四川を駆け回る日本の設計者たち										
N186	080811		(編集局)	パート3 開発手法に变化の兆し										
N187	080811		(編集局)	世界が見た中国 国際水素に期待を寄せて										
N188	080811		(編集局)	特集 鳥の巣 北京のヘルフォード・ムーロン 実はいかに安全な建物か、キーンと目を凝らす建築家										
N189	080414		(編集局)	松原弘典著「北京篇 10の都市文化紀行」シリーズ別に読む北京ガイド										
N190	080825		東京街	海外 中国の建築発展 中国 四川大地震が変えた建築界への影響、過剰な中国建築界に新たな注目が										
N191	080808		長井美純	古谷誠章氏 上海大定角計画										
N192	081013		(編集局)	上海環球金融センター 設計・監理・設計・監理・建築設計：コンパニオン・ゼ・パオ・フオ・ア・ジ・ニ・エ・フ										
N193	081013		(編集局)	上海環球金融センター 完成まで4年、高さ420mの超々高層ビルが完成										
N194	081013		(編集局)	世界分岐 過去に経験がなかった、中国・上海で2棟目の超々高層ビル建築計画										
N195	081013		野崎寛司	中国の成熟に期待										
N196	081027		安藤忠雄	アジアに出て展開する建築を 日本の技術は世界最高水準だ										
N197	081110		松井直樹	上海環球金融センターの設計で3Dを活用										
N198	081124		(編集局)	特集 国際技術を盛り込んだ上海ワールド日本館										
N199	081208		(編集局)	日本の北京都市計画 王軍著「北京再建 古都の命運と建築家展望」										
N200	081222		(編集局)	7 世界の注目集めた中国										

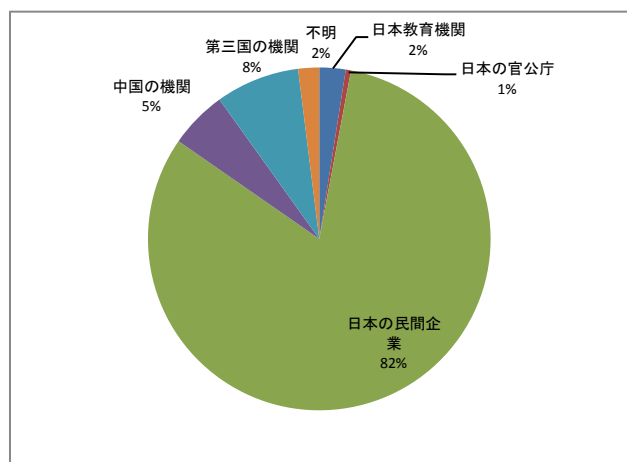


図 2.1.b-2: 執筆者の属性

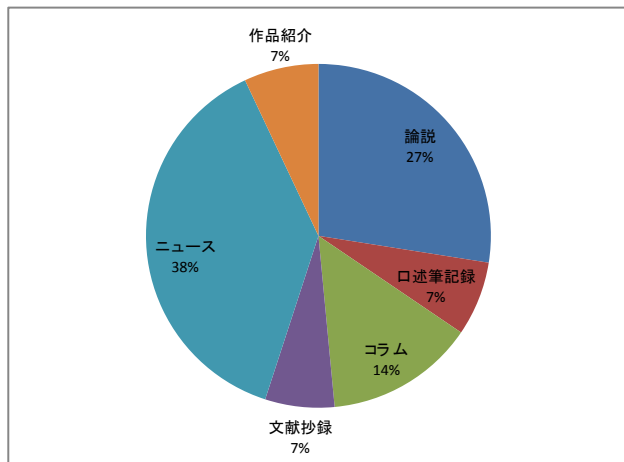


図 2.1.b-3: 記事形式の属性

香港の日系つながりが中国観察の端緒に

『日経アーキテクチャ』の1985年前後の中国関連記事の多くは香港を対象にしたものである。当時は中国返還前の英国の統治下であり、ビザが不要で英語も通じるという点で、取材先として編集部には中国大陆よりも取り組みやすい対象であったものと思われる。現地取材を交えた、香港の内部事情に食い込んだ記事がいくつか見られる。取材先は日系企業の現地駐在事務所などが主で、日系のつながりを利用したものであることがわかる。

1985年の「ケーブルを芯にしたRC格子梁でスパン80mの曲面屋根を架ける 香港・尖沙咀(チム・シャ・ツイ)カルチャーセンターに見る報道の工夫」(N001)は、香港九龍地区の大陸鉄道の出発点だった旧九龍駅跡地に建つカルチャーセンターのプロジェクトの屋根構造を追ったものである。記事自体は「躯体工事を受注した熊谷組の担当者に構造を中心に」紹介してもらった内容から構成されていて、海外工事部課長橋本紘と技術研究所主任東敦生の名前が見える。記事によれば構造設計は香港と英国の合弁会社ホー・ホップ・コンサルティング・エンジニアーズで、担当のジョン・モリソン氏の談話とともに、構造システムの実際や模型写真や詳細図面が掲載されている。これは「サスペンション状態のケーブルを芯にして鉄筋コンクリート造の格子梁(最長80m)を構成する、世界でも初めての構造形式」であり、世界的に見て先進的な構造を、日本の会社が施工に関わっているので報道している、という姿勢が明確である。

同年の「13層ごとのブレース架構で超高層の偏心荷重を克服 中国銀行(香港)の独創的構造手法」(N007)も、進行中のI.M.ペイ設計のプロジェクトを取り上げているが、計画に日本企業関わっていることからこの物件が記事になったと思われる。実際はイギリスのArchitectural Record誌からの翻訳記事である。これは翌86年の「海外情報」欄の記事「中国銀行香港支店ビル本体工事 熊谷組が250億円で受注」(N010)で、熊谷組が工事を落札したことが伝えられている。熊谷組は「約25年にわたる香港での実績があった」とことと「このプロジェクトを計画するにあたって日本人とほぼ同数のイギリス人を採用し、審査側とのコミュニケーションをスムーズにしたこと」が決め手になったのではないかと自己分析している。88年には「大胆な造形が難工事を生む 慎重な施工で関門を突破 I.M.ペイの設計による東洋一の超高層ビルが上棟」(N021)で、上棟を迎えたこのプロジェクトについて、主に施工の手順や、それを支える国際的な協働体制について言及がある。そして90年にはこの建物が竣工を迎え、頁を多数割いた特集が組まれている。「中国銀行香港支店ビル 清時代を迎える香港を象徴 東洋一の高さを誇る新摩天楼」(N027)がそれで、1997年の中国返還を前に、「新たな時代の幕開けを目前にして、政治的・社会的な緊張感に包まれている」香港社会におけるこの建物をレポートしている。工事中の1989年6月に天安門事件が起きており、記事は「香港の将来には依然として不透明な部分も多い」としながらも、「香港は現在、天安門事件のショックからも立ち直りつつあり、街は以前の活気を取り戻してきているようだ」とまとめている。同記事では多数の建築分野の専門家がこの建物についてコメントしているが賛否両論である。

86年の「香港上海銀行 先端技術の大胆な導入図り、建築の可能性を問い直す」(N009)は、竣工したばかりのノーマン・フォスター設計の香港上海銀行についての記事であり、フォスターの談話も掲載されている。現地の設計担当者への取材は、フォスターアソシエイトの香港事務所長のみならず、協力事務所のオブ・アラップ&パートナーズのディレクター、設備設計の担当者、設計チームメンバーの一人である日本人建築家杉村憲司や、サブコンで入った竹中工務店やナカ工業などの日系の関係者にまで及んでいる。フォスターの談話はこのあとも何度か掲載が試みられている。より長いインタビューは同年の「デザインと生産過程は不即不離な関係にある フォスターが香港上海銀行で設計思想を語る」(N012)で掲載されている。これはフランスの建築雑誌L'architecture D'Aujourd'huiからの翻訳記事であるが、88年によく「手工業のアプローチが建築の豊かさを生む ノーマン・フォスター氏(英国建築家)クオリティ追求を先端技術に託して…」(N017)でようやく編集長久留宮金一がインタビューをとっている。フォスターのここでの話はほとんど建築を支えるテクノロジーの話に終始しているが、わずかに香港についての印象も述べており、「香港というところ

ろは生産の地ではなく、「時は金なり」の地です。ですから建物を建てるための素材を全く生産していない。そこで、あらゆるものが外部から運び込まれた。その意味では、香港上海銀行ビルは初めからグローバルな建物だったわけで、日本からも多くの企業が参加した事は御承知のとおりです」という設計者のコメントは、この建物が、中国とか香港らしさの追求ではなく、グローバル化の中で建築に何が可能かという問いへの答えであったことを示している。

92年の「名門ラッフルズはよみがえったか 東南アジアホテル最新事情 香港」(N032)は、東南アジアのいくつかの都市のラグジュアリーホテルを取り上げて、強い日本円を背景に海外のこういうホテルに行った方が割安感があると主張する記事である。香港では「グランド・ハイアット」を取り上げてその若者人気を伝えている。93年の海外情報「香港の競技場、試合と並行し改築」(N037)は HOK インターナショナルの設計したスタジアムで、建物を使いながら改修工事を行ったことが報道されている。

こうした香港を対象にした中国関連記事は、まだその背後にある中国大陆を視界には入れていない。中国大陆に関する建築ニュースが 1985 年以降の『日経アーキテクチャ』の記事において初めてまとまって言及されるのは、86 年「話題の建築がめじろ押し いずれも香上銀行を横にらみ」(N013)である。ここでは「1997 年の租借期限を過ぎても、その後 50 年間は自由貿易港として存在できる。中英交渉の妥結で、その将来が保証されて以降、香港には一種のビル建設ラッシュが訪れている」香港について、「エクスチェンジ・スクエア」、「香港公演芸術アカデミー」の 2 つの建物の紹介に加えて、香港のアトリエ派の建築家タオ・ホーの活動を紹介している。ここでホーが作っている「杭州市湖濱区計画」が紹介され、香港の建築家が徐々に大陸で大きなプロジェクトを動かす機会を得ていることがわかる。

香港は返還の前に徐々に経済的な磁力を深圳や上海などの中国内陸の都市にあげ渡してゆくことになる。1995 年の観光企画設計社の田中克憲による「U ターンする設計者たち」(N048)は、15 年ほど前は香港の設計者や技術者の多くが海外に生活拠点を移し、家族とその国でグリーンカードを取得したのに対し、今では「本人が単身で香港に戻って仕事に付くケースが目立っている。そして次第に家族と共に帰国する人も増えている」という。同社香港事務所の統括責任者を務める田中は、こうした状況は香港周辺の中国内陸部でのプロジェクトが増加し、香港返還後も大きな混乱がないだろうとみなが考えていることの表れだと分析している。続く号で同社の上海事務所設立準備を進めている笹原正次は「開放路線貫き中国一の国際都市へ」(N049)を寄稿し、上海が、香港に代わる中国の次なる経済中心になることを予言している。97 年にはさらに返還後を見据えた記事「フォスターの新空港を核に安定を狙う建築ラッシュ」(N061)があり、ここでは香港のオフィス賃料と不動産価格の値上がりを指摘し、その「バブル」のような傾向を伝えつつ、その後の中国大陆との関係について「1980 年前後、広東省南部に香港からの工場進出が始まり、返還の前から香港と中国は経済的に密接に結びついている。設計事務所やデベロッパーも同じだ。香港の建築家たちの舞台はすでに中国に広がっている。ほとんどの設計事務所が中国大陆で設計業務に携わっている」という、当時の現状が述べられている。

ゼネコン、メーカーによる日中合作

1980 年代後半から 90 年代前半の『日経アーキテクチャ』の中国関連記事は、こうした香港関係の記事と並行して、中国大陆についての記述も見られるが、それらのほとんどは香港の現地取材記事とは異なり、日中合作のプロジェクトについての小さなニュース記事である。1985 年「中国の百貨店近代化に鹿島建設が協力」(N002)は北京王府井の「東風マーケット」の近代化に鹿島建設が協力を始めることを伝える小さなニュースだが、「昨年来、日本の建設業界では対中国熱が高まり、ホテル、オフィスビルなどを中国各地に建設する計画が相次いでいる」とある。似たような記事は多い、同年「中国のクリーンルーム設計 日本設計事務所が受注」(N004)では、「我が国の建築関連業界で中国からクリーンルーム設計を受注したのは同社が初めて」とある。86 年の「不二サッシが中国のアルミサッシ工場建設に全面

協力」(N011)は、中国がスチールサッシュからアルミサッシュへの転換期にあり、不二サッシが金型の製作に必要な設備一式と技術を提供することを決めたという報道である。87年の「大手セメント各社 対中技術協力に積極姿勢」(K016)は中国がセメントの年間消費量が世界一にも関わらず生産設備が前近代的である点が生産性の向上を阻んでいるとして、日系メーカーが支援を決めたことを伝えている。86年の「建築・設計界」のコーナーでは、「中国建築界の大手と大成建設が合弁会社を設立」(N008)とあり、日本の大成建設と中国建築工程総公司の合弁会社の設立を伝え、「鹿島建設が香港に金融子会社 海外事業の資金調達狙う」(N015)では、鹿島が従来米国中心だった海外進出をオーストラリアでの再開発事業のために香港に金融子会社を設立したことを伝えている。同年には「中国・飛来峡ダム建設で日本工営が事業化調査受注」(N014)で、建設コンサルティングの日本工営が、JICAを通して中国飛来峡ダムの事業化調査(FS)を受注したと報じている。88年の記事「再開発で昔の栄光取り戻す“東洋の宝石”上海」(N020)では、過去30年間無視と老朽化に任されてきた上海の街並みが、中国政府の開放政策と建設産業の支援を受けて過去の栄光をとりもどしつつあることを紹介している。特に大きなプロジェクトとして「上海展覽館プロジェクト」が、米国企業のほかに鹿島建設が事業主となって進められていることが伝えられている。このプロジェクトは2年後の1990年に一部オープンしたあとの状況が「上海展覽館、3月一部オープン 地元の景気回復はいまひとつ」(N026)として再度伝えられている。これらはどれもニュース記事であり、現地の写真もなく、日本側の談話だけで構成されている小さな囲み記事である。

その中で目立つのが、85年の北京市建築設計院建築師の柴裴義のインタビュー「北京のシンボリック建築に日中共同で設計進む京城大厦」(N003)である。当時は中国大陸に関する大きな記事はまだ多くなく、これは関係者が来日した折に日本で取材した記事である。国際コンペで清水建設が勝った北京の超高層建築のプロジェクトの、中国側の共同設計者である北京市建築設計院の柴の談話がここでは紹介されている。中国には今、外国企業が次々と進出してきているがオフィスビルが少なく、多くの進出企業がホテルの部屋をオフィス代りにしており、そのホテルも供給が不足していることや、京城大厦は50階建てで現在北京には30階を越えるビルがなく、しかもまだ中国には建築基準法にあたるものが整備されていない中、日本のデータを用いて日本の基準に従って設計をすすめていることが述べられている。

92年「古代中国の大都市をCGで表現 よりリアルな表現を模索した6カ月 建築設計者がつくった大モンゴルの1シーン」(N033)では、大成建設が「大英博物館」に続くNHKのシリーズ「大モンゴル」のCG制作を担当した際の、主にコンピュータ技術について報道した記事である。北京の四合院や大明殿のモデリングなどに、京都大学の田中淡や京都女子大学の杉山正明らが監修したとある。

本格的な中国大陸状況の紹介開始—深圳・上海から

1989年には「審洞考察団著「生きている地下住居 中国の黄土高原に暮らす4000人」」(N023)と「川島宙次著「稲作と高床の国 アジアの民家」」(N025)、91年には「茂木計一郎著「中国民居の空間を探る 群居類住—“光・水・土”中国東南部の住空間」」(N031)といった書評が掲載され、この時期の『日経アーキテクチュア』には、ヴァナキュラー建築に関する書籍紹介が集中して見られる。これは単にこの時期にこのような本の出版が集中していたということだけではなく、当時の日本建築界の中国認識に、こうした部分への興味が集中していたところもあったというように理解できる。

ヴァナキュラー建築への興味は、日本建築界の大学の研究者など学術的な層が主に担っていたわけだが、80年代末からは中国ビジネスに従事する層へ向けた、中国大陸の同時代的状況を伝える記事の出現が見られるようになってくる。『日経アーキテクチュア』において同時代の中国大陸の現状をレポートした本格的な記事は、1989年の「急速な都市化の波に対応し中国の都市政策に一大変革 中国政府が土地と住宅の商品化を実施」(N024)である。これは発

展途上国の開発に関する調査研究を主業務としたシンクタンク「国際開発センター」の副主任研究員市川宏雄によるレポートであり、北京や深圳の写真を示しながら住宅と土地の商品化の進行をレポートしている。サービスという概念のない社会主義国を「中国の旅は“メイヨー”から始まる」と言い、「現在の中国は一大農村社会である」と指摘している。

そのあとも散発的に中国本土についてのレポートは続く。1993年「北京最新建築事情 開放政策と外資の流入で急変する1000年の王城」(N035)は、パシフィックコンサルタンツインターナショナル建築開発事業部次長の波多野哲次によるものであり、日中青年交流センター(黒川紀章設計、1991年竣工)や北京京城大厦(北京市建築設計研究院設計、1992年)、王府飯店(香港熊谷組設計、1988年)など最近竣工した建物の紹介と、2000年オリンピックの誘致に伴う成長の加速と都市問題の顕在化を伝えている。波多野は以前は黒川紀章事務所に所属した建築家で、「天安門事件を挟んで足掛け4年にわたり、日中青年交流センターの設計監理事務所長として滞在した北京を、日中国交回復20周年を迎え、折しも天皇訪中の直前となった1992年10月初旬に、JIA 関東甲信越支部北京視察団のコーディネーターとして一年ぶりに訪問する機会を得た」ときのレポートである。この記事の中で波多野は北京市建築設計研究院の馬国馨を紹介している。馬は丹下健三の元でも修行した、1990年のアジア大会施設を北京に実現した当時の中国を代表する建築家である。この記事は、馬のように伝統を象徴化する手法と、より直裁的に伝統モチーフを使う手法の間で、今の北京では「伝統論争」が起きていると言い、日本よりも大きなスケールとスピードで景観問題がクローズアップされていることを指摘している。

1994年の「みなぎるドラゴンパワー—深圳、上海、香港に行く」(N043)は、編集部が現地取材を実施して深圳、上海、香港の三都市の実情をレポートしている。「中国での設計活動にリスクを伴うのは確か。だがこのままでは、外国勢に水を掛けられる一方だ。日本の設計事務所やゼネコンの中にも、果敢に中国市場に切り込むところが出ている」として、香港熊谷組の深圳の超高層の現場、上海のラジオテレビ塔に隣接する総合レジャー施設の設計を担当している日本設計の設計チーム、上海郊外の工業団地の開発を担当しているフジタ、香港の新国際空港の設計を担当したフォスター・アジアの現地事務所などを取材している。ここでの論調は、香港が3年後に返還を控え景気が向上せず、一方で上海や深圳など大陸の諸都市が活気をおびつつあるというものである。野村総合研究所香港有限公司の杉本研一は香港企業の中対投資は天安門事件の翌年から活発化し、事件後対中投資に慎重になった「動きの鈍い日本企業」とは対照的だと語っている。フジタ社長の藤田一憲は「2010年ごろには中国が“アジアのUSA”になると確信している」と言い、観光企画設計社社長の柴田陽三は、「中国でのプロジェクトの採算性は非常に厳しい」と言いつつも、「長期的な視点に立てば、日中両国の建築コストの価格差は、縮小していくと思う」と言っている。これが初めて実際に中国大陆でビジネスをしている日本人たちの実感を拾い上げた記事であり、以後中国の可能性に対し積極評価の記事が増えるようになる。94年の『日経アーキテクチャ』がまとめた日本の建築界の10大ニュースの9番目には「アジアの建築ブームに日本勢も参入」(N045)が入っており、日本設計やフジタの中国での実績を報じている。

中国影響の海外への波及

中国と日本の違いが、結果として両国の間にさまざまな結びつきを生んでいる例を記事で見ることできる。中国が海外から影響を受けるだけでなく、中国的状況が海外にも影響を及ぼしている事実を伝える記事群である。1994年の「ケース5 氷上町立植野記念美術館 石材、職人ともに中国で確保」(N039)は、特集「円高時代の輸入材活用術」のなかの記事で、地方の文化財団が地元の実業家のコレクションを展示する美術館の建設において、中国から石材を輸入し、中国人の職人を15人1年間の技能ビザで来日させ施工にあたらせたという。設計者が中国側との個人的なつてを使った工夫だったようだが、営利目的でなく竣工後の美術館が町に寄贈される点を主張し、中国人に日本人と同等の賃金を支払うことを契約に盛り込むなどして中国人職人のビザの発給を受けたことが報じられている。設計者は石工事

において手仕事で得意な中国人をうまく配置することができたというふうに回想している。2002年の「パレス ド レオナル 手工業品を海外で安くオーダーメイド」(N086)は中国・上海から木製ケーシング(額縁)、中国・アモイから石材を輸入した川崎市の高級賃貸物件の紹介記事である。「国内では高く大量生産が難しいものが入手できるうえ、日本では希少となった職人技術も残っている。工業製品よりハンドメイド品を買う方が、人件費の安い国では絶対得だ」という設計者のコメントとともに、中国から輸入された建材が紹介されている。

97年の「アジアで力をつける日本のサブコン 「ゼネコン抜き」で大プロジェクトに挑む」(N060)は、アジア諸国ではゼネコンが施工を一括受注することは少なく、主要な業種にオーナーが直接サブコンと契約しコンサルタントを介して自分でコントロールする分離発注が一般的なために、日本のサブコンの中には海外で仕事を直接とっているものもあるという主旨の記事である。鉄骨構造を新日本製鉄鉄構室が、カーテンウォールをトステム香港が手掛ける香港のオフィスビルや、外装全般を YKK アーキテクチャルプロダクツが引き受けた香港のオフィスビルなどが紹介されている。YKKap 国際事業部の金岡芳孝部長は、外装すべてを任せられ、アルミサッシの自社製品だけでなくガラスや石といった他社製品まで調達しなければならないこうした分離発注について、「もちろんリスクも生じるが、それ以上のノウハウの蓄積が期待できる。日本では“下請け”だが、アジアではメインのコントラクターとも対等に話ができるので、やりがいがある」と言う。記事はこうして海外経験を積んだサブコンが、アジアでの現地生産を進めてより価格競争力をつけることで、「アジアに「本腰」を入れて活動する彼等は、様々なギャップに戸惑いながらも着実に力をつけている。いずれはそこで得たノウハウを日本に持ち帰り、大手ゼネコンに戦いを挑む日がくるのかもしれない」とまとめている。

同じく施工関連の記事として、2001年「海外連携で「早く」「安く」を模索 時差と給与格差を利用する」(N079)では、清水建設と大成建設が中国を含めたアジアに、海外物件施工図の作図拠点を作ろうとしているトピックを扱った記事で、設計生産体制の維持のために日本国内の縮小を考慮して組まれたシフトが生まれつつあることが紹介されている。

2000年には沖縄海洋博のアクアポリスが中国に売却されて海上へい航された記事がある。「沖縄海洋博のアクアポリス 米国企業に売却、上海で解体へ」(N073)「フォトニュース アクアポリス、中国に向けてい航」(N074)「アクアポリス(1975年竣工) 海上都市の夢、水平線の彼方へ」(N075)らがそれであるが、最後の記事は沖縄からい航されるその日に現地取材をしたものである。フリーライターの磯達雄によれば、菊竹清訓設計で1975年の沖縄国際海洋博覧会の政府出展パビリオンとして誕生したこの建物は、全体が海に浮いており16本のアンカーチェーンで位置が固定されていた。海洋博後は沖縄県に引き下げられ、しばらくは観光施設として使用されていたが93年に閉館し、所有者は二転三転し、最終的に今回米国企業に売却され鉄くずとして上海にい航されたという。中国では鉄の需要が高まっており、その影響がこうしたところにも出たというように理解できる。

都市論・アジア論

建築単体のみでなく、都市論として中国を扱った記事も見ることができる。1985年以降の『日経アーキテクチャ』における最初の都市論は香港に関するもので、大阪大学教授の東孝光が「私の視点」という欄で、1988年に「香港の街並みに学ぶ」(N018)を書いている。東は香港上海銀行を見に行った際にその街並みを観察し、香港の雑多な印象についての印象を残している。

1995年の「オピニオン」欄では、黒川紀章が「アジアの時代」(N052)を発表し、アジアの経済成長は西欧中心主義の終焉というパラダイムシフトとともにあり、自然との共生がアジア的だと主張している。より理論的にアジアの台頭を正当化しようとしているものと理解できよう。同年の「海外報告」欄では、京都市立芸術大学助教授で建築家の池上俊郎のレポート「抜きつ抜かれつ、アジア摩天楼時代」(N055)あり、ここではクアラルンプールと深圳の2つの超高層を見た感想が述べられ、アジアの超高層ブーム、アジアの香港化、インスタント・シティーの出現を憂う論調が見られる。

96年「ビッグプロジェクト in アジア 高度経済成長に支えられ建設活動が活発に」(N056)では上海ワールド・ファイナシヤル・センター(上海森ビル、設計はKPF、2001年完成予定)とクアラルンプールのKLCCタワー(施工にハザマと三菱商事が参入、設計はシーザー・ペリ、1996年完成予定)が紹介されている。経済成長をバックにアジア各地で高層化の動きが進んでいることを、日本の組織事務所やゼネコン大手がアジア各地で関わる高層ビルのリストとともに報じている。2003年にはオランダの建築家レム・コールハースの独占インタビューが掲載されている。「超高層のテレビ局をランドマークに北京に新たな自由を与えたい」(N113)でコールハースは北京の都市状況について、「建築デザインの主体が民間の方に移りつつある。そうなればなるほど、長期的に見ると、公共のものに対する郷愁や関心が高まってきます。我々がCCTVのコンペに参加した際も、場所が中国で民間の発注者でなかったという点に興味を持ちました。現在の米国よりも、中国では建築自体をもっとまじめなものとしてとらえていると思います」と述べている。コールハースの眼には、今の中国は個人の主張を前面に押し出す「ジャンクスペース(すべてに序列のない空間)」の存在がアメリカよりも控え目であるというように映っているようだ。

「街並み見聞録」と銘打たれた都市論的なエッセイ記事もある。当時の日本で景観保存が社会的な関心対象になっていたために企画されたと思われるこの欄で、2004年に立松和平は、「中国・天童街 千年間何も変わらない」(N134)を書き、鎌倉時代の栄西と道元が学んだ寧波郊外の天童村を訪ねたときのことをエッセイにしている。2005年に映画監督の実相寺昭雄は「中国・青島 東洋につくられたヨーロッパ」(N142)において、自分が3歳から6歳まで育ったドイツ人の作った青島を懐古するフォトエッセイを書いている。建築界の外から、著名人に街並みについて書いてもらう欄で、この2人は中国のある場所についてどちらも過去を懐古するような感傷的なトーンの記事を書いている。『建築雑誌』や『新建築』と比べて過去回顧の記事が少ない『日経アーキテクチュア』においては大変目を引くものになっている。

中国・アジアの都市に関する書籍の出版も書評の形でいくつか見られる。1988年には「藤原恵洋著「上海 疾走する近代都市」」(N019)、94年には「陣内秀信著「中国の水郷都市 蘇州と周辺の水の文化」」(N040)、98年には「陣内秀信著「北京 都市空間を読む」」(N064)の書評がそれぞれ掲載されている。97年の新刊案内欄である「読書室」は、「現代亜州城市観察 香港—多層都市」(N062)というタイトルの、同名の著書を出版した村松伸の構成・文による記事である。香港とは西洋と東洋の論理が合体した都市であり、西洋近代の分類・整理されたゾーニングの論理だけではない、スキ間を中国人が埋めていくという、「都市居住を望み、空間があればどこにでも住むという中国人の論理が働いている」場所だと言う。2008年には「松原弘典著「北京論 10の都市文化案内」 テーマ別に読む北京ガイド」で、オリンピック前の北京を書いた本の紹介も見られる。

海外建築家の中国プロジェクトへの参入

1993年の海外情報「上海市が巨大開発を計画中」(N036)は、上海市政府が黄浦江南岸沿いに進めている巨大開発に、イギリスのリチャード・ロジャースの設計案が採用されたことを伝えている。94年の「海外情報」欄は「中国で世界一の超高層ビル計画」(N041)で重慶に計画されているアメリカの設計事務所による超高層のプロジェクトを伝えている。これらは McGraw-Hill Inc.の配信のニュースを『日経アーキテクチュア』がそのまま掲載しているので、短信であるが、世界各国のニュースの中に中国に関するものも等価に並列されているのを見ることができる。グローバリゼーションの中で中国の存在が無視できないものになっていることがこうした報道から日本の読者にも伝えられることになる。

同じく93年「実戦に見る中国コンペ事情 上海・浦東新区庁舎設計競技 地元事務所と競ってフジタが当選」(N038)は、初めて詳細に、日本の企業が中国のコンペに参入し勝利を収めたまでのプロセスを伝えたもので、フジタ建築本部計画部長の小川昭彦がコンペに招待されてからどのようにそれを戦ったかをレポートしている。94年の「上海

でレジャー施設の計画 日本設計が基本設計を」(N042)は、上海浦東に建つラジオテレビ塔(東方明珠)の基本設計を日本設計が受注し、実施設計を上海の華東建築設計院が行うことが決まったと報道している。96年「上海北外滩地区の再開発コンペでアール・アイ・エーが当選」(N058)、「コンペ 中国・海口市の展示施設で石本グループが当選」(N066)など、90年代後半からは日本の組織の中国コンペでの入選が当たり前のように見られるようになり、扱いは次第に小さくなり、実現後の記事に重心が移るようになっていく。

95年の「上海の超高層ビルをフォスターが設計 大林組もデザインで共同」(N053)は、バンドの南側に立地する金融センター、上海久事大厦のプロジェクトの紹介で、設計者選定の国際コンペでフォスター東京事務所と大林組設計本部のデザインチームが当選したことを伝えている。両者は東京水道橋のセンチュリータワーの協働以来パートナーシップがあるが、「フォスター事務所にとっては今回が中国での初仕事」であり、大林組にとっては「すでに多数の実績があるとはいえ、日本資本を全く含まないプロジェクトは珍しい」とのことである。設計チームの担当者はこう述べている「米国のある大手設計事務所の極東担当ディレクターが「中国はブラックホール。資金と時間を注ぎ込んでも吸いこまれる一方」と嘆いていた。我々デザインチームにとって、中国が本当にブラックホールかどうかはまだ分からない」。このプロジェクトは実際に建設され、フォスター事務所はその後北京首都空港のプロジェクトも勝ち取ることになるのだから、ブラックホールにはならなかったことになる。

97年の「アジアに飛び込め」(N063)は、ふたたび東南アジアの経済に陰りがみえてきたこの時期に、日本の建築家でアジア各地でプロジェクトに関わった人のインタビューで構成されている。中国関係では山本・堀アーキテツの堀啓二が深圳の集合住宅設計の経験を、香港大学建築系副教授の松田直則が香港での現地役所との折衝の経験を紹介している。実際に現地に入り込んだ経験談ならではの生々しさが伝わってくるものである。

日本の設計事務所のコンペの入選情報がめずらしくなくなるにつれて、どんどん小さな囲み記事になっていった『日経アーキテクチュア』において、久々に写真入りで大きくコンペの当選が報じられたのは「山本理顕氏が北京で超高層28棟設計」(N080)と「コンペ 川口衛・高松伸グループが中国で当選」(N082)である。前者は注目を受けつつあった民間デベロッパーの仕事でスケールが大きく華々しい計画発表のプレスリリースがあったことが、後者は隣接する2つのコンペを連続して川口・高松グループが勝ち取ったことが大きく報道されている。

グローバリゼーションと中国影響の海外波及の拡大

すでに見た中国影響の海外の波及は、2000年代後半からその規模拡大が報道されるようになる。2005年の「避けられない中国の影響力 巨大市場が建材価格や働き場を揺さぶる」(N144)では、「中国がクシャミをすると、日本が風邪をひく時代になっている」という書き出しで始まる、2004年年明けからの日本の鋼材価格の急騰を伝える記事である。生産市場としても消費市場としても急速に巨大さを増す中国市場が日本市場に様々な影響を及ぼす点について言及している。ステンレス鋼製品の生産体制の増強によって中国は2006年に輸出国に転じ「2006年問題」と呼ばれる供給過剰を引き起こすと懸念されていることや、大和ハウスが生産設計図の単純作業部分を人件費の安い中国事務所で実施しているが中国の人件費上昇がそのメリットを減少させつつあることなどである。

2005年の「内装用の型板ガラスをファサードに 日本橋弥生ビルディングー東京都中央区」(N145)では、都内のオフィスビルの設計上のエピソードを報道するものだが、設計者である栗生総合計画事務所の設計担当者が、エントランス周りに使用した白御影石を中国福建省の石材団地を実際に回って決めたトピックが取り上げられている。中国の石材加工販売状況について、「日本の生産技術や管理技術が伝わる中で、品質的にも安心できるものになっている」とは、建材市場がグローバリゼーションの中で均質化してきていることを示している。

同年の「中国の発展映す純鉄骨造の超高層 北京電視中心ー中国・北京市」(N148)は、北京テレビ局の本部オフ

イス「北京電視中心」の鉄骨構造について、設計を担当した日建設計設計部門副代表の宮川浩が、分散的・柔構造的考え方が主流の日本と、均質的・剛構造的考えの中国を比較し、具体的な日中の構造設計に対する考え方の違いと、中国のもつ施工における先進性などを紹介している。北京でレム・コールハースの中央電視台やヘルツォーク&ド・ムーロンによる国家体育場など特異な構造を持つ建物が次々に建てられている状況から宮川は、「中国は世界で最も難しい構造体を実現できる国になりつつあるようだ」と言う。

2006年の「close up 海外」欄における「上海環球金融中心」(N154)は、1997年に着工した森ビルプロジェクトで、2001年に完成予定だったのが、杭工事を完了した98年にアジア通貨危機の影響で4年間工事がストップし、2003年によりやく再着工となり工事が急ピッチで進んでいることを伝える記事である。ここでのポイントは、工事のストップ中の2001年に中国がWTO(世界貿易機関)に加盟し2003年より外国資本の建設会社が国内工事を直接受注できなくなった点にある。工事ストップ前まで施工管理は清水建設が担当していたにもかかわらず、こうした変化のために、再着工後は中国のゼネコンが工事を受注することになった経緯が紹介されている。竣工後のこの物件の状況については「上海環球金融中心 完成まで14年、高さ492mの超々高層ビルの実力」(N193)で紹介されている。

07年に迫慶一郎は「往復書簡 22世紀への海図」欄で「グローバリズム」(N160)というコラムを書いている。「中国の「輸出」が始まる」として、「建設ラッシュの中国では、建築を实践する機会に恵まれており、国際的にも知名度のある建築家が出てきています。聞くとくに依ると彼らは、これまた建設ラッシュに沸く中東に、自分たちのデザインの「輸出」を始めたようです」と書いている。

2007年の「中国・大連のCADセンターには50人の現地スタッフ 月刊100棟の申請を下ろす」(N170)は、改正建築基準法の施工後、確認審査のシステムが事実上機能停止したなかで、確認申請取得業務を手掛ける松本設計についての取材記事である。ここでは中国の大連に事務所を設立しCADセンターを持って棟数をこなしている。「ポイントは内容を理解して図面を処理できるかどうか。最後は日本でチェックする仕組みを取っている」という。

安藤忠雄は2008年のインタビュー「アジアに出て就職する気概を 日本の技術は世界最高水準だ」(N196)で、日本がアジアの他の国々に比べて相対的に経済的な勢いがなくなり、「顔の見えるクライアントが少なくなった」という。そんななかで中国や韓国などに出て行く気概を持つべきだと説く。安藤のこうした発言は、中国はもう日本から見て遅れた国ではなく、日本の雇用の受け皿として実際に機能可能であるように見えている、ということを示している。

否定的な論調

もちろん急速に発展する中国に対して肯定的な意見ばかりではなく、ネガティブな論調の記事もないわけではない。ただし記事を通覧してみても、成長を加速する中国に対する否定的な記事はそう多くは見られない。すでに触れた黒川紀章事務所出身の波多野哲次は北京での実務経験を振り返って早くも1993年にその成長のともなうひずみを多少指摘していたが、これはそのあとあまり大きな流れにはならなかった。2003年の松山岩生「バブル期の日本のような中国」(N110)で日本のバブル期のように浮かれているとか、04年の柳雅人「まず日本の都市を見直してほしい」(N135)で中国では本当にいま必要なものを必要な分だけつくっているのだろうかと疑問を呈されたりもしているが、これらはどちらも「読者の声」欄で投稿意見として掲載されているだけで、編集部の解釈とは別扱いとされ、論調としても弱く、その成長に期待する誌面の中ではでかき消されんばかりである。

日本人ではない、第三の立場の人間からの否定的意見を見ることはできる。たとえば2005年の「海外建築家の目に映る都市づくりとは？」(N147)は、国際不動産見本市会議 MIPIM2005 での海外建築家にアジア都市の印象を聞いた取材記事であり、会議ではアジア都市への関心は高い一方で、北京についての意見を聞くと「一部の歴史的な部分だけを公共の場として残し、あとは一律同様」とか「近代化を急ぐあまり古い文化への意識が低い」などの欧米専門家の

ネガティブなコメントを報道している。

中国の成長に伴う社会問題をジャーナリストに指摘するよりも、問題対策がきちんと取られている、という記事のほうが多い。98年には「ニュース」欄で「上海市、ガラス張りビル建設禁止へ 照り返しや温度上昇などを問題視」(N065)という報道があり、ヒートアイランド現象を考慮し、火災時のガラスの落下を減らすために建物外壁にガラスの使用を制限する市の規制ができたことが伝えられている。2004年の「CASBEE 活用した GOBAS で北京五輪施設の計画を見直し」(N137)では、過熱気味の建築投資が行われている中国でも国の政策で持続可能な開発へと急旋回しているとし、国際公約である「グリーンオリンピック」を実現するためにオリンピック関連施設に対して環境性能評価を適用していることを報じている。GOBAS (Green Olympic Building Assessment System)と呼ばれるその中国独自の評価軸は、日本の環境性能格付け評価システム CASBEE の概念に多くを負っているとのことである。

より身近な中国情報—案内板情報と現地取材特集

2000年代に入ると、中国関連の日本におけるイベント、中国へのツアー情報などが急増し、それらが掲示板のような欄に掲載されるようになる。2000年7月24日号の『日経アーキテクチュア』では、「案内板」と呼ばれる講演会やシンポジウムの情報を集めた欄に、「国際ワークショップ:中国における住宅建築のエネルギー消費と環境問題」(N070)の開催情報を掲載している。主催は「東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻(季振海)」とあり、講師に環境工学の専門家である東北大学の吉野博の名前も見える。同号同欄では「建築ミュージアムツアー「中国の木造建築と江南の水郷村を巡る」—少数民族トン族の集落・風雨橋」(N071)もあり、こうした中国に関するイベント・海外ツアー情報が他の日本の建築系情報の中で並列されるようになっていく。2001年「展示会・ツアー「亜細亜散歩—AFTER KITSCH」展」(N081)は東アジアの大都市をテーマに2人のキュレーターが日本で企画した展覧会情報、2003年の「ILBMIC 企画主催 2003年テクノ中国市場調査(Bコース)」(N093)や04年の「第1回中国建設市場の調査視察団(仮称)」(N118)は中国・広州市で開催される広州交易会への海外市場調査のツアー情報である。05年には日本で開かれる国際イベントに関する広報「国際フォーラム「持続型都市に向けて:アジアの都市の記憶と未来」」(N140)もある。こうした情報の整備は、中国に関するイベント、活動が、日本の読者にとってより身近見えてくる効果をもたらした。

2003年5月12日号は「驚人的中国」というタイトルの中国に関する大きな特集で、中国に渡ってビジネスをしている日本の企業や個人、中国人を現地取材で多数取り上げた記事から構成されている。川口衛は高松伸との協働で進めている天津博物館の施工状況について「今の日本では『大きい』ということにほとんど関心が持たれなくなったが、中国では大スケールで構造的に洗練されたものが求められている」(N096)、北京建外 SOHO の現場を進めている山本理顕は「中国は今、ヨーロッパをモデルに猛烈な勢いで近代化を進めている。中国のデベロッパーが僕らに期待しているのは、それとは違う住宅開発の手法を考えてほしいということ」と自己の立場を説明し(N097)、RIA 上海はパースをいかに早く描けるか(N098)、大和ハウス工業は施行者が客と一緒に建材市場に行って実物を見て仕様を決めるのに驚き(N099)、TOTO は高級販売路線の可能性があると指摘(N100)している。さらに「上海新天地」のプロジェクトを成功させた日建設計インターナショナルの青沼克明は「この施設が成功したことで、『保存も利益に結びつく』を、中国のデベロッパーの意識が変わった」と指摘し(N102)、個人で活動していた松原弘典は「北京の若い建築家の中にも、僕と同じように個人で活動する人が徐々に増えてきている」と言い(N103)、三峡ダム的高速施工の計画・立案業務を受託している前田建設工業の山本隆所長は「同規模の本格的なダムを日本で施工する場合は5~7年ほどかかる…世界に例を見ないスピードだ…中国の工事は合理的で学ぶべき点も多い」と賞賛する(N104)。この現地密着型の取材記事の最後で、編集部は当時の日本建築界の中国ビジネスの現状を4つにまとめ、1.低報酬でも大物件に活路を見出す設計事務所、2.現地法人義務化で揺れるゼネコン、3.建設投資は4年間で1.5倍の市場、4.人脈頼りに危険は

つきもののビジネスリスク、としている。

2004年8月9日号は「中国で生きる」というタイトルの中国に関する大きな特集が再度編まれ、前年よりさらに腰をすえて中国で仕事をしている日本人の仕事を紹介している。山本理顕事務所から独立した迫慶一郎と北京大学を離れて自らの活動を始めた筆者が北京の事例として、東英樹らによる HMA 建築事務所、日本人の新卒を多く抱えた M.A.O.(上海)建築設計が上海の事例として実作とともに紹介されている。迫と筆者は、その後2005年に「曾我部昌史氏(みかんぐみ共同主宰)が注目する U35 迫慶一郎 松原弘典」(N141)によって、北京で「絶えず色々な情報に自分自身をさらし続けながら、新しい建築の方法を構想しているに違いない。そういうスタンスを維持するには、北京のような場所を拠点にするのが合理的なのだろう」というように、東は、2006年に「鄭秀和が注目する U35 東英樹」(N153)によって「彼らが中国、それも上海の第一線で活躍しているという事実は、東京というホームタウンで仕事をするとはまったく別の位相のことなのである」というように位置付けられている。

すばやくなる現場からの報道

『日経アーキテクチャ』独自の情報伝達方法として、数カ月に一回、「プロジェクトナビ」という欄で、これから実現する予定の計画案を竣工前に事前に設計図などで紹介するコーナーがある。ここで日本と関係のある海外プロジェクトが紹介されるのだが、中国のプロジェクトもそこに見ることができる。もっとも初期の「プロジェクトナビ」で紹介された中国のそれは2000年の「コンペ 中国・深圳の都市再編、日建が当選」(N067)であり、中国のコンペでの日本人設計者の入選ラッシュもあって2001年以降、「プロジェクトナビ」欄での、日本人による中国プロジェクトの報道が増えてくる。

時事的な出来事と関連した建築情報も、ますます多様ですばやくなってゆく。オリンピックに関する具体的な報道が最初に出てくるのは「コンペ 北京五輪スタジアムがヘルツォーク案に」(N109)である。そのあと「北京五輪施設、構造の正体」(N120)があり、ここで構造設計を担当するアラップの情報提供によって、北京国家体育場が「トラス部材と二次部材でつくる鳥の巣状の形態」、北京国家遊泳中心が「幾何学形態の鉄骨で外殻を構成」としてそれが紹介されている。北京オリンピックの北京の施設の設計に日本人の関与が少なかったために、これ以外のオリンピック関連記事は、他の2誌と同様に、『日経アーキテクチャ』においてもそう多くは見られない。北京オリンピックに直接フォーカスする特集は事実上1回だけ、08年8月11日号「特集 北京」であり、「パート1 都市化を先導 花開く五輪建築」(N183)で、日本人が関わったオリンピック施設として佐藤総合計画の設計による天津オリンピックセンタースタジアムと、日本の旭硝子が外装材のETFEの製作で関わった国家遊泳中心のみが報じられている。そしてこの特集は、オリンピック関連施設についてだけではなく、「パート2 過渡期の魅力とひずみ」(N184)でオリンピックにまつわる開発とその矛盾点を指摘し、「パート3 開発手法に変化の兆し」(N186)でこれからの方向を示唆するなど、単なるオリンピック建築特集号という枠組みを超えた、中国建築の現在と未来を考察したものになっている。

北京オリンピックの3か月前に起きた四川大地震に関する報道も、直接的で集中したものだった。地震発生は2008年5月12日で、すでに翌月6月9日号で『日経アーキテクチャ』は「四川大地震 死者6万8000人超、建物倒壊が被害を拡大」(M180)の大々的な現地取材特集を組んでいる。これは上述8月の北京特集の中で、「REPORT 被災地・四川を駆ける日本の設計者たち」(N185)として追加情報が報道されている。この時期になると、中国で大きな出来事があると編集部が人を派遣して現地取材をし、時間を開けずに現場レポートが特集になって誌面を埋める、という流れがめずらしくなくなり、中国現地からの情報がますます素早く日本に伝達されるようになっていく。

小括:取材範囲を拡大し、中国の対外影響に敏感な中国関連記事

1985年から2008年までの『日経アーキテクチュア』における中国関連記事200編を見ると、取材対象が香港から始まり、それがやがて深圳を経て、上海・北京へと地理的に拡大してゆくことが見てとれる。取材の対象も多岐にわたり、現地取材も含めて、中国からの関係者が日本に来た時はその談話をとり、また中国に渡航した日本人に話を聞くなどして、それを編集部記者が再配列した情報として誌面に掲載されている。

中国が日本や世界に与える影響についても早くから具体例を挙げて紹介している。90年代までは日中間のギャップをうまく利用した建築業界の成功例を紹介する程度だった記事が、2000年代に入ると、中国の成長が世界中の建材価格を押し上げると否定的に語ったり、一方で構造上難しい工事を実現する世界の実験場だと肯定的に語ったりする記事が見られるようになる。中国の対外影響に敏感な誌面構成であることがわかる。

中国の急速な成長に対する否定的な論調は一定数あるが多くはない。また情報掲示板などで中国のニュースをより身近に並べる工夫が顕著であるのもこのメディアの特徴である。

1985年から3誌を比較することの妥当性の検証

第2章前半部分の2.1.節では、『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の中国関連記事における、現代の中国認識を共時的に把握するために、仮に『建築雑誌』IV期の時期区分(1985-2008年)を利用して3誌の記事内容を観察してきた。本節の中括を行う前に、この1985年以降を分析対象にしたことの妥当性をここで検証しておく。『新建築』と『日経アーキテクチャ』の記事数の分布はともに2000年以降増加が観察されており、2誌の記事を通覧すると、2001年と2003年にそれぞれ記事内容の転換があることがわかった。ここで改めて、『建築雑誌』も含めた3誌それぞれが、「同時代の中国」を発見したと思われる分期点を同時に比較してみよう。

●『建築雑誌』の分期:1985年の清水正夫の日中交流10年を回想した記事(K136)の前後

1987年から2001年の記事減少期に見られる『建築雑誌』の中国関連記事の分期点。すでに第1章1.1.節の末尾で見た通り、この記事の前後で「日本との比較で中国を見るようになる転換」が見られる。

●『新建築』の分期:2001年の日建設の上海での竣工物件を紹介した記事(S055-S061)の前後

2000年からの記事増加期初頭に見られる『新建築』の中国関連記事の分期点。この記事以降、日本人設計者による中国での実現建物の紹介が具体的な記事とともに掲載されるようになり、この記事の前後で「モノを通じて現実的に中国を語るようになる転換」が見られる。

●『日経アーキテクチャ』の分期:2003年の特集「驚人的中国」(N094-N106)の前後

2003年からの記事増加期初頭に見られる『日経アーキテクチャ』の中国関連記事の分期点。これらの記事以降、中国にいる中国人の談話が記事に多く取り込まれており、この記事の前後で「現地取材で中国サイドを積極的に取材対象にする転換」が見られる。

1985年以降にそろえて3誌の共時的比較を行ってわかったのは、『建築雑誌』は早くも1985年に中国の同時代性に着目し、日本との比較の中で現代の中国を率直に記事化していたのに対し、他の2つの商業誌『新建築』と『日経アーキテクチャ』が同時代の中国に注目するようになるのは2000年に入ってからとだいぶ後発であったことである。学会誌は北京オリンピックにも影響受けずに記事数の増減が極端にならず早くから中国への着目があり、一方で商業誌2誌は2008年の北京オリンピックに向けて2000年代に入ってから記事が急速に増加し、それにあわせて同時代の中国を見ようとする視線を獲得している。これらのことから3つの建築メディアの同時代の中国への気づきはどれも1985年より後であり、本節の冒頭でこの年を開始年代として措定したことは作業工程としては適切だったと判断できる。

中括:3誌の中国関連記事における情報伝達手段の共時的比較—情報伝達軸と対中態度のメディアごとの相違

以上、第2章前半部分の2.1.節では、中国に関する情報が記事として日本の建築界において共有されるまでに、いかに情報が伝達されたかという「情報伝達手段」を把握するために、『新建築』と『日経アーキテクチャ』の1985年から2008年までの中国関連記事に以下の分析を加えてきた。すなわち1)中国に対する関心の高まりの推移を把握するために、記事数の時系列変化をたどり数量的把握を行った。また、各誌でどういう執筆者がどういう形で中国関連記事を残しているのかを知るために、各記事の「執筆者の属性」、「記事の属性」を分類し、その傾向を把握するために数量分析と定性分析を行った。2)時系列的に沿ってそこで扱われた記事論題を分類し、内容的に重要だと思われる記事についてレビュー形式で論題、論調について言説分析を加えた、である。さらに1章で検討した『建築雑誌』IV期(1985-2008年)の分析とあわせて、ここで、3つの建築メディアそれぞれの分析結果を比較表にして示す(表2.1.c.-1)。

こうして見てみると、3つの建築メディアにおいては、中国認識を規定する中国関連記事が、その担い手である執筆者の属性、記事の属性などにおいてそれぞればらばらであり、それがそのまま中国情報の伝達手段の違いに反映され

ていることがわかる。すなわち、論説の形をとった各専門家の署名記事やシンポジウムの発言録などその専門性に依存した記事が並ぶ『建築雑誌』、作品紹介の形をとったグラビア記事を中心に情報を配列した『新建築』、現地取材の場所に即した論説を記者が再配列した『日経アーキテクチュア』である。3誌にはそれぞれ、「執筆者の専門性」「建物」「現場」というような異なる情報の伝達軸があることがわかった。

建築メディア	建築雑誌	新建築	日経アーキテクチュア
期間	1985-2008年	1985-2008年	1985-2008年
執筆者と記事形式の属性に見る中国情報伝達手段の特徴	民間や中国の専門家が加わった、多方向で相対的な情報伝達手段	設計者により、建物ベースで視覚情報とともに伝えられる情報伝達手段	記者により再配列された現場重視の情報伝達手段
記事数の分布による数量的裏付け	計94編／1985年、2003年、06年の3年に、中国関連の特集号による記事の集中あり	計196編／1985年、96年、2004年、08年の4回のピークあり。日本人が関係している中国の建築プロジェクトと文化的イベントに関する記事、時事ニュース記事	計200編／2003—4年、08年の2回のピークがあり、前者は中国現地取材による特集、後者は時事的なニュース記事の集合から構成
執筆者の属性と記事形式の属性	執筆者の所属が多様化。中国人による記事の増加、日本の民間企業や第三国の機関に所属する専門執筆者の増加／記事の形式は3人以上の多方向の口述筆記録や、軽い読み物としてのコラムの形式の増加も	日本の民間企業が圧倒的多数。写真による建築作品紹介を軸とした記事構成	日本の民間企業が圧倒的多数。編集部記者が再構成した論説記事が多いのが特徴。
レビュー式言説分析による、各期の中国関連記事の内容のまとめ	同時代で変化する国への興味を増しつつ、迎合的態度も取り始める中国関連記事	現地の状況に目を配り、大きな枠組みの中で成長する現実を支持する中国関連記事	取材範囲を拡大し、中国の対外影響に敏感になる中国関連記事

表 2.1.c.-1: 『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』3誌の中国関連記事における情報伝達手段の共時的比較表

また、3誌には中国への態度における相違も見てとることができる。レビュー式言説分析によって明らかになった中国関連記事の内容が示すように、『建築雑誌』は専門家による記事から構成されており、特集主義の名の下で各執筆者にそれなりの記事内容の自由度が委ねられているために、中国の状況を取り込み誌面に反映させるような傾向や、中国人執筆者の記事などが観察された。『新建築』はあくまで日本の建築家のほうを向いており、日本人が中国で関わった建物の紹介には熱心である一方、他の2誌にあるような中国の社会の現実を誌面に反映させようとする記事はほとんど見られず、記事の論題も建築の領域内にとどまる傾向が強い。『日経アーキテクチュア』は香港という場所から中国に入っていくって徐々に内地に現地取材先を広げていくわけだが、中国の対外影響に対しては敏感で、中国を脅威ととらえたり日本に追いつきつつあることをあおったりするような論調の記事もしばしば見られる。すなわち中国の状況に最も迎合的な『日経アーキテクチュア』、やや迎合的な『建築雑誌』、あまり迎合的でない『新建築』というような、対中態度における3誌の相違が確認された。

2.2. 『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の中国観

3つの建築メディアにおける中国観の抽出とそのメディア-論題分布

本節は本章第2章の後半部分に相当し、第1章で『建築雑誌』の中国関連記事から中国観を抽出したのと同様の方法で、1985年から2008年までの『新建築』196編、『日経アーキテクチャ』200編の中国関連記事から中国観を抽出する。2雑誌の中国関連記事を総覧した結果、『新建築』で62回、『日経アーキテクチャ』で93回の記述を中国観の発現として採取することができた。これらをすべて巻末の別表S2、別表N2に示す。

さらに、『建築雑誌』の156回の中国観のうち2誌の分析範囲に合致する、1985年から2008年までのIV期の中国観65本を取り出し、上述の2誌の中国観とあわせて、3誌の合計220回の中国観をKJ法によって分類し、それらの発現メディアと内容上の分布の連関を考察する。3つの建築メディアのラベル付けをした中国観を、内容の類似から分類整理したものを以下に示す(図2.2.-1)。

この分類の結果、各中国観は、1.2.と同様、日本の建築界が『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の3誌において、中国を見る際に「どこを見ているか」というその中国観の「論題」という側面から、いくつかの共通した水準におけるまとまりとして構造化することができた。それらは大きくは、中国の広く目的を達成するための手段を見ようとする【技術に着目】論題、中国の人間集団の特性を見ようとする【社会に着目】論題、中国を地理的空間的において見ようとする【場所に着目】論題の3つの大論題に分類することができ、これは第1章と同じである。例えば、「中国では乾式工法はごくわずかで湿式工法が圧倒的多数(N039-1)」という中国観は、建築の具体的な技術において建設という目的を達成するための手法について述べたものであるので【技術に着目】論題、「中国は吸収だけでなく外国に影響も与える(K215-2-IV)」という中国観は、人間によって構成された中国社会を主語にしているものであるので【社会に着目】論題、「上海の本質とは、他国の文化を吸収しながら発展する国際性(N049-2)」という中国観は、上海という地理的な場所を主語にしているため【場所に着目】論題というように分類できる。なお、中論題以下の分類にはその内容構成に1章とは異なる部分もある。以下では、1887年から2008年までの3つの建築メディアの全中国関連記事において220回の発現が見られた中国観が、発現する建築メディアと論題との関係においてどのような比重をもって分布しているかを見ることで、当該建築メディア間における中国観の共時的特徴を明らかにすべく分析を行う。

技術に着目 104

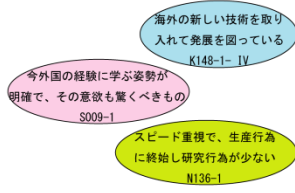
K 建築雑誌IV期

S 新建築

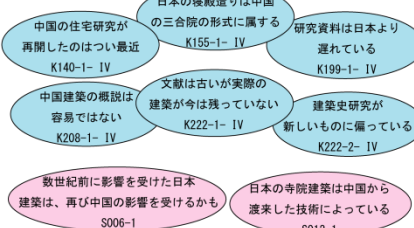
N 日経アーキテクチャ

より学術的技術 17

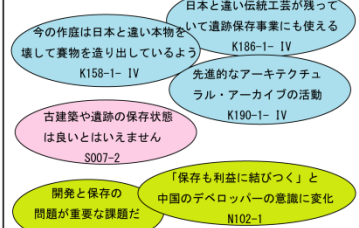
その学術研究一般 3



その建築史 8

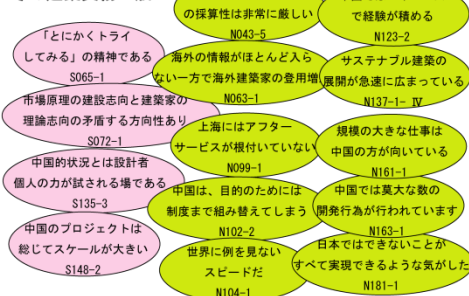


その文化財保存 6

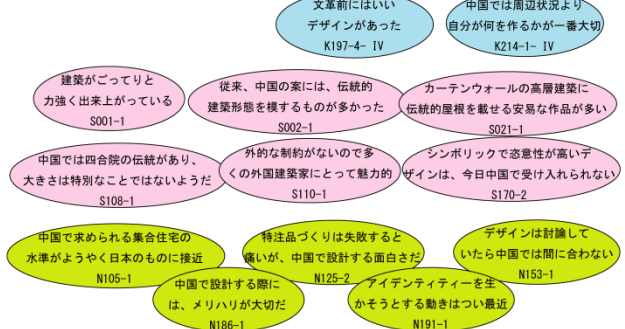


より職能的技術 87

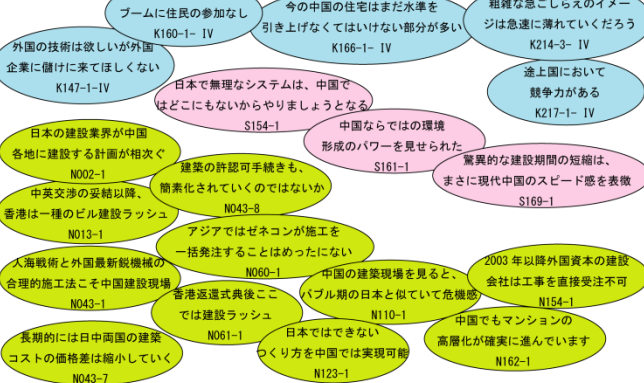
その建築実務一般 14



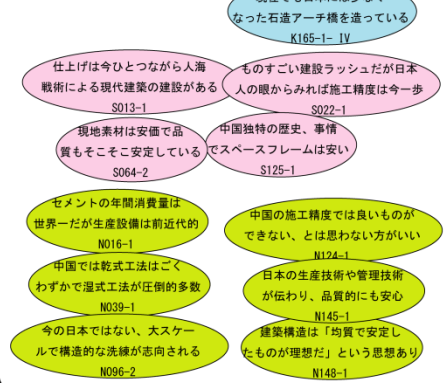
その建築意匠と計画 13



その建設 19



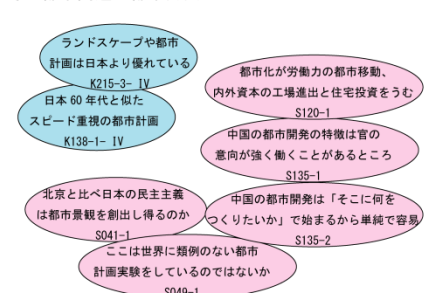
その建築構造と構法 11



その環境工学 2



その都市問題と都市計画 7



その設計業界 21

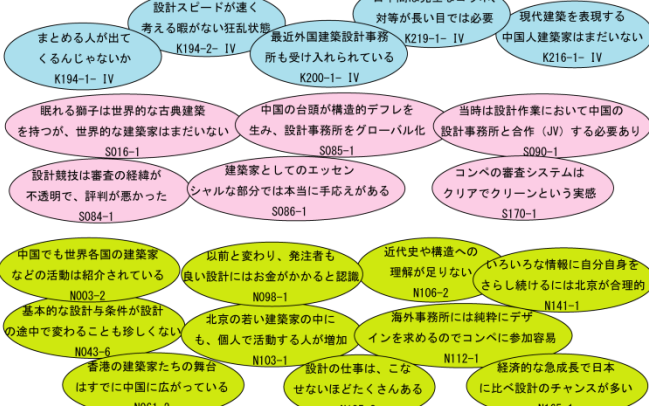
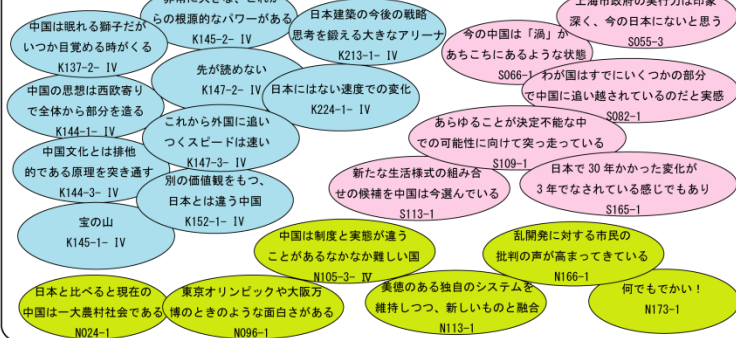


図 2.2.-1:『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』(1985-2008 年)に発現する中国観全 220 回の KJ 法によるメディア-論題分布

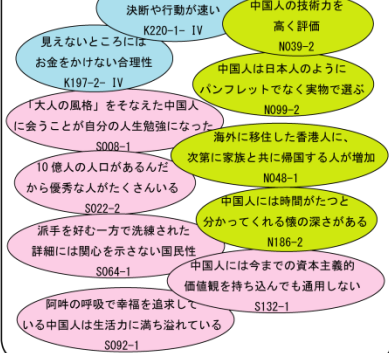
社会に着目 81

社会の内部 62

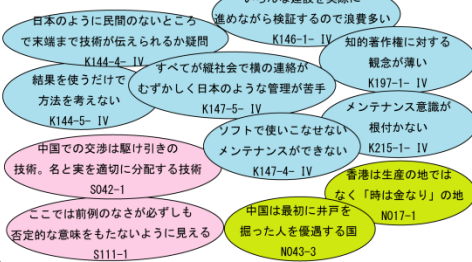
その社会一般 22



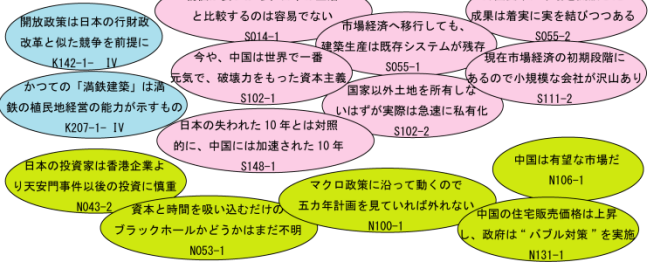
その人 11



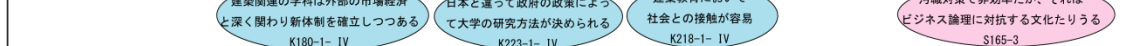
その風俗や習慣 11



その政治と経済 14

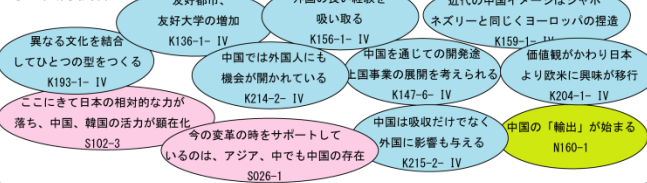


その教育と文化 4

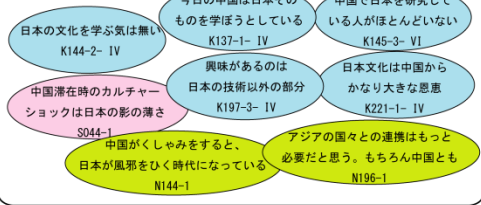


社会の外部関係 19

その国際関係 11



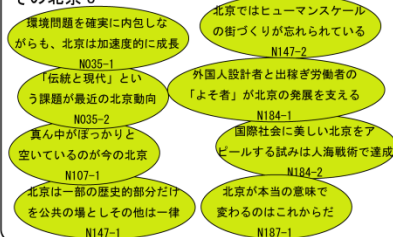
その日本との関係 8



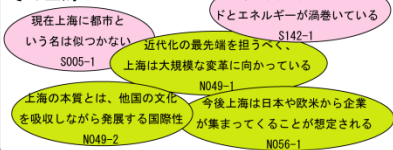
場所に着目 35

都市規模 24

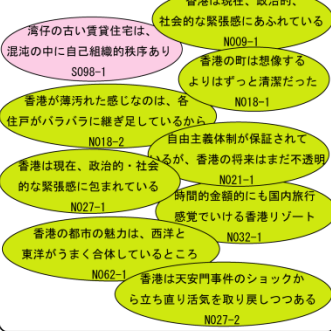
その北京 8



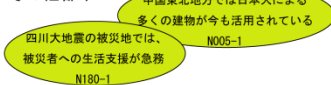
その上海 5



その香港 9

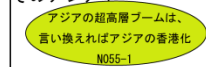


その他都市 2

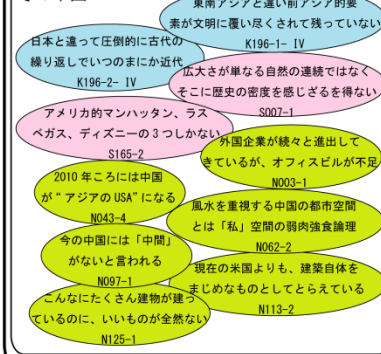


超都市規模 11

そのアジア 1



その中国 10



2.2.a. KJ 法による現代日本建築界の中国観の内容分析

「技術に着目」論題の中国観

【技術に着目】の大論題は、中国において広く目的を達成するための手段に着目しているものであり、この論題を主たる立脚点として形成された中国観は、104 回その発現が観察された。

これらはさらに、各中国観の観察対象である技術の相違により 2 種類の中論題に分類された。建築を建てるための実務とは距離を置いてより学術的な技術を取り扱う[より学術的技術]を対象とした中論題、建設ビジネスや建築の実際の構築に関する技術について言及した[より職能的技術]を対象とした中論題の 2 つである。

1)[より学術的技術]中論題

[より学術的技術]中論題は、技術について語っているもののなかでより理論的・学術的な態度に立脚しているもので、この視点による中国観は 17 回観察された。

具体的にそれらは、中国の学術的技術が一般的にどのようなものか広く語る<その学術研究一般>、中国の建築史研究や歴史的建築物のあり方について語る<その建築史>、中国における文化財保存やその技術・運用に関して語る<その文化財保存>の 3 つの小論題に分類された。

2)[より職能的技術]中論題

[より職能的技術]中論題は、技術について語っているもののなかでよりビジネスや建築の実際の建設に着目しているもので、この論題による中国観は 87 回観察された。

ここではさらにそれぞれ<その建築実務一般><その建築意匠と計画><その建設><その建築構造と工法><その環境工学><その設計業界><その都市計画>の 7 つの小論題に分類された。

「社会に着目」論題の中国観

【社会に着目】の大論題は、中国の人間集団の特性を見ようとするものであり、この視点を主たる立脚点として形成された中国観は 81 回その発現が観察された。

これらはさらに、各中国観の取り扱う対象の相違により 2 種類の中論題に分類された、中国社会の内部を単独的に説明しようとする[社会の内部]中論題、中国社会を国際関係や日本との関係など周囲との関係から説明しようとする[社会の外部関係]中論題の 2 つである。

1)[社会の内部]中論題

[社会の内部]中論題は、中国社会の内部についてそれぞれ個別の側面から語ろうとするもので、この視点による中国観は 62 回観察された。

具体的にそれらは、話者の中国社会への大きな印象や時事的なその場の印象を語る<その社会一般>、中国人の特性について語る<その人>、中国社会において継続してきている事実について語る<その風俗や習慣>、<その政治と経済>、<その教育と文化>の 5 つの小論題に分類された。

2)[社会の外部関係]中論題

[社会の外部関係]中論題は、中国社会がその外部世界である他の国や地域とどういう関係にあるのか語ろうとするもので、この論題による中国観は 19 回観察された。

それらはさらに、<その国際関係><その日本との関係>の 2 つの小論題に分類された。

「場所に着目」論題の中国観

【場所に着目】の大論題は、中国を地理的空間的ににおいて見ようとするもので、この論題による中国観 35 回観察され

た。

これらはさらに、各中国観の取り扱う場所の規模の相違により2種類の中論題に分類された、都市単位で中国の各地を説明しようとする[都市規模]中論題、都市を越えたより大きな単位で中国各地を説明しようとする[超都市規模]中論題の2つである。

1)[都市規模]中論題

[都市規模]中論題は、中国各地の場所の特性について、それぞれ都市単位で語ろうとするもので、この論題による中国観は24回観察された。

具体的にそれらは、<その北京><その上海><その香港><その他都市>の4つの小論題に分類された。

2)[超都市規模]中論題

[超都市規模]中論題は、中国各地の場所の特性について、それぞれ都市を越えたスケールで語ろうとするもので、この論題による中国観は11回観察された。

それらはさらに、<そのアジア><その中国>の2つの小論題に分類された。

小括:「技術」と「社会」と「場所」の3つに大別可能な3段階の論題構造

以上2.2.a.節では、3つの建築メディアの中国関連記事の記述をもとに、それらの中国観をKJ法によって分類し、その発現する建築メディアと論題の関係を包括的に捉えることを試みた。その結果、それは大きく3つ、すなわち中国の技術を見ようとする【技術に着目】、中国の社会、人間集団を見ようとする【社会に着目】、中国を地理的な空間としてとらえようとする【場所に着目】、の論題を有していることが明らかとなった(図2.2.-1)。

そして、それらの大論題は複数の中論題、さらにそれらは複数の小論題に分類することができた。【技術に着目】では[より学術的技術][より職能的技術]の2つの中論題とその下の小論題に、【社会に着目】では[社会の内部][社会の外部関係]の2つの中論題とその下の小論題に、【場所に着目】では[都市規模][超都市規模]の2つの中論題とその下の小論題に分類された。

2.2.b. 建築メディアごとの中国観の比較分析

ここからは、3つの建築メディア『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』の中国観が、どの論題にどれくらい分布しているか数字の上で相対的に比較することで、各建築メディアごとの日本建築界の中国への論題の共通点と相違点を考察する。

はじめに、前節のKJ法の分類によって階層化された、相互の連関がわかるような全体の構造において、3つの建築メディアの中国観がどのように分布しているのか、各中国観の発現メディアを確認した上でその数量分布を一覧にした(表2.2.b-1)。表中の数値は、縦軸に期ごとの中国観の分布数を絶対数と百分率で、横軸に論題ごとの中国観のそれらをとっている。

大論題	大計	中論題	中計	小論題	小計	建築雑誌		新建築		日経アーキ	
技術に着目	104					26	40.00%	33	53.23%	45	48.39%
		より学術的技術	17			10	15.38%	4	6.45%	3	3.23%
				その学術研究一般	3	1	1.54%	1	1.61%	1	1.08%
				その建築史	8	6	9.23%	2	3.23%	0	0.00%
				その文化財保存	6	3	4.62%	1	1.61%	2	2.15%
		より職能的技術	87			16	24.62%	29	40.32%	42	34.41%
				その建築実務一般	14	0	0.00%	4	6.45%	10	10.75%
				その建築意匠と計画	13	2	3.08%	6	9.68%	5	5.38%
				その建設	19	5	7.69%	3	4.84%	11	11.83%
				その建築構造と構法	11	1	1.54%	4	6.45%	6	6.45%
				その環境工学	2	1	1.54%	1	1.61%	0	0.00%
				その設計業界	21	5	7.69%	6	9.68%	10	10.75%
				その都市問題と都市計画	7	2	3.08%	5	8.06%	0	0.00%
社会に着目	81					37	56.92%	24	38.71%	20	21.51%
		社会の内部	62			24	36.92%	21	33.87%	17	18.28%
				その社会一般	22	10	15.38%	6	9.68%	6	6.45%
				その人	11	2	3.08%	5	8.06%	4	4.30%
				その風俗や習慣	11	7	10.77%	2	3.23%	2	2.15%
				その政治と経済	14	2	3.08%	7	11.29%	5	5.38%
				その教育と文化	4	3	4.62%	1	1.61%	0	0.00%
		社会の外部関係	19			13	20.00%	3	4.84%	3	3.23%
				その国際関係	11	8	12.31%	2	3.23%	1	1.08%
				その日本との関係	8	5	7.69%	1	1.61%	2	2.15%
場所に着目	35					2	3.08%	5	8.06%	28	30.11%
		都市規模	24			0	0.00%	3	4.84%	21	22.58%
				その北京	8	0	0.00%	0	0.00%	8	8.60%
				その上海	5	0	0.00%	2	3.23%	3	3.23%
				その香港	9	0	0.00%	1	1.61%	8	8.60%
				その他都市	2	0	0.00%	0	0.00%	2	2.15%
		超都市規模	11			2	3.08%	2	3.23%	7	7.53%
				そのアジア	1	0	0.00%	0	0.00%	1	1.08%
				その中国	10	2	3.08%	2	3.23%	6	6.45%
総計	220		220		220	65	100.00%	62	100.00%	93	100.00%

表 2.2.b-1: 論題ごとの各建築メディアの中国観の数と割合(1985-2008年) 『建築雑誌』65回 『新建築』62回 『日経アーキテクチュア』93回

ここからは分布が集中し百分比が比較的高い数字になっている箇所を中心に、その比率の差から中国観の分布数の傾向を指摘し、その原因を考察することなどで、1985年以降の3雑誌における中国観の発現メディアと論題の連関の特徴を明らかにしてゆく。

大論題における3つの建築メディアの中国観の比較分析

すでにここまでで我々は、3つの建築メディアの1985-2008年における合計220回の中国観をKJ法によって分類整理した。この結果、意味上の類似から大・中・小の3段階の論題に分類した構造としてそれを把握している。以下ではそれぞれの論題のレベルごとに、各中国観の発現メディアと論題の関係を検証してゆく。

中国観の分布数を建築メディアごとに見ると、『建築雑誌』と『新建築』はほぼ同数(『建築雑誌』65回、『新建築』62回)であるのに対し『日経アーキテクチャ』はそのほぼ1.5倍(93回)である。大論題ごとに見ると【技術に着目】(104回)【社会に着目】(81回)に比べて【場所に着目】(35回)が若干少ない。3誌の中国観においては中国の「技術」と「社会」に関する興味が「場所」に関する興味より共通して高いことが明らかになった。

ここで3つの大論題【技術に着目】【社会に着目】【場所に着目】と3つの建築メディアとの関係を、大論題ごとの各誌中国観数の割合と、雑誌ごとの各大論題中国観数の割合において示した(2.2.b.-1)。この2つのグラフ図でもっとも顕著なのは、【技術に着目】大論題においては3誌の中国観ほぼ同比率で分布していること、【社会に着目】大論題で『建築雑誌』の比率が相対的に高い(56.92%)こと、【場所に着目】大論題で『日経アーキテクチャ』の比率が高い(30.11%)こと、である。さらに雑誌ごとの3大論題の比率を比べると、『建築雑誌』では【社会に着目】が過半数(56.92%)、『新建築』では【技術に着目】が過半数(53.23%)、『日経アーキテクチャ』では【場所に着目】の比率が高く(30.11%)かつ過半数を占める大論題なし、というようになっていることがわかった。これはそのまま各誌の中国関連記事の特徴をある程度言い当てている。すなわち、学会誌である『建築雑誌』は中国の技術のみならず中国社会を視野に入れた中国観が、『新建築』は建築の雑誌として技術主体の中国観が、『日経アーキテクチャ』は技術を主体にしなが具体的場所を取り上げた中国観が多く述べられたメディア群であるというように言える。

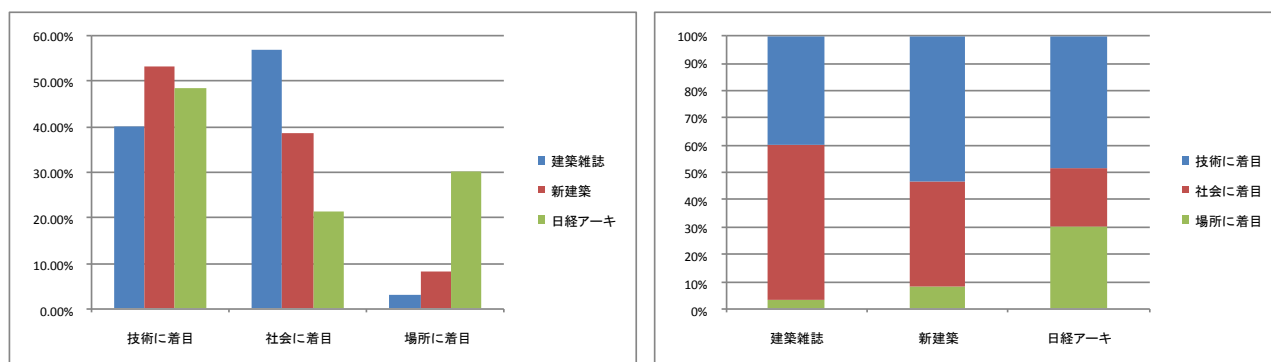


図 2.2.b.-1: 大論題と3誌の時期との関係(左:大論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各大論題中国観数の割合)

大論題における中論題の比較分析

次に、3つの大論題【技術に着目】【社会に着目】【場所に着目】におけるそれぞれの中論題について、総中国観数に対する各期の当該中論題の割合、および各期におけるそれぞれ3つの中論題の割合を示して分析を加える。これらにより、各時期区分の共通点および相違点におけるいくつかの特徴が見てとれた。

【技術に着目】大論題における中論題[より学術的技術][より職能的技術]と3誌との関係を、当該中論題ごとの各誌中国観数の割合と、雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合において示した(図 2.2.b.-2)。ここで最も顕著なのは、[より学術的技術]において『建築雑誌』の比率が高いこと(15.38%)、[より職能的技術]において『新建築』と『日経アーキテクチャ』の比率が高いこと(『新建築』40.32%、『日経アーキテクチャ』(34.41%)である。各誌での大論題の比率を見ても明らかのように、1985年以降の日本建築界の技術に関する中国観は、『建築雑誌』においては学術的な技術に対する関心が一定数あったのに対し、『新建築』や『日経アーキテクチャ』においてはそのほとんどが職能的な技術に対する興味によって占められていたことが明らかになった。

【社会に着目】大論題における中論題[社会の内部][社会の外部関係]と3誌との関係を、当該中論題ごとの各誌中国観数の割合と、雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合において示した(図 2.2.b.-3)。ここで特徴的なのは、[社会の外部関係]の中国観において『建築雑誌』の比率が突出して高い(20.00%)ことである。これはつまり、日本建築界の中国観において、『建築雑誌』では他の2誌に比べて中国の対外関係が多く語られていることを示している。

【場所に着目】大論題における中論題[都市規模][超都市規模]と3誌との関係を、当該中論題ごとの各誌中国観数の割合と、雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合において示した(図 2.2.b.-4)。ここで特徴的なのは、どちらの中論題においても『日経アーキテクチャ』の中国観の割合が高いことである。とりわけ[都市規模]の中論題においては突出している(22.58%)。これは『日経アーキテクチャ』がこの大論題において他の2誌よりも多く中国観を擁し、技術や社会によらずに中国のその場所自体の都市・空間に関する記事を多く掲載している、ということを示している。これは現地レポートが多く、中国の内部を実地で取材し日本に伝えるという当該誌の編集姿勢が反映された結果だと解釈できる。

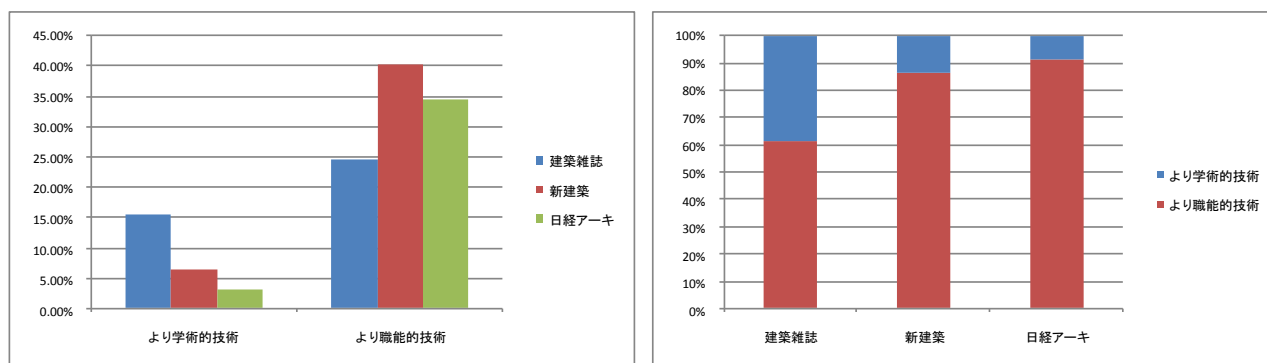


図 2.2.b.-2: 【技術に着目】大論題における中論題と3誌との関係(左:当該中論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

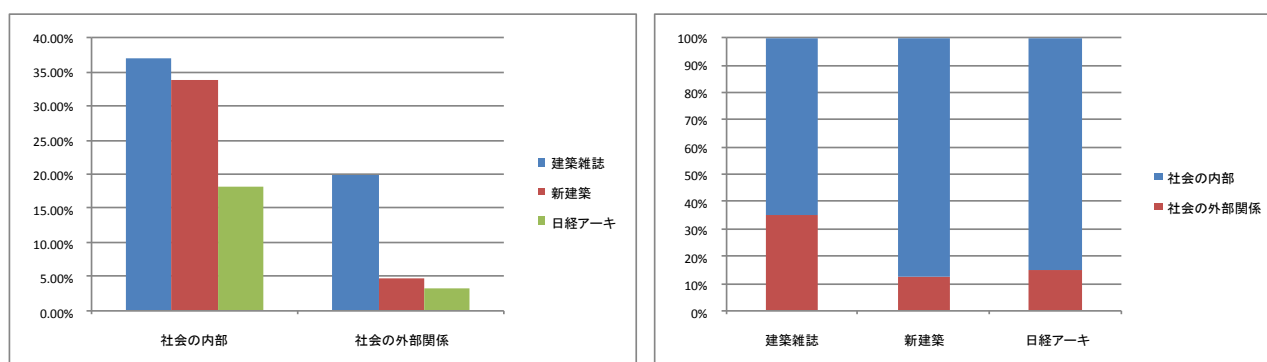


図 2.2.b.-3: 【社会に着目】大論題における中論題と3誌との関係(左:当該中論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

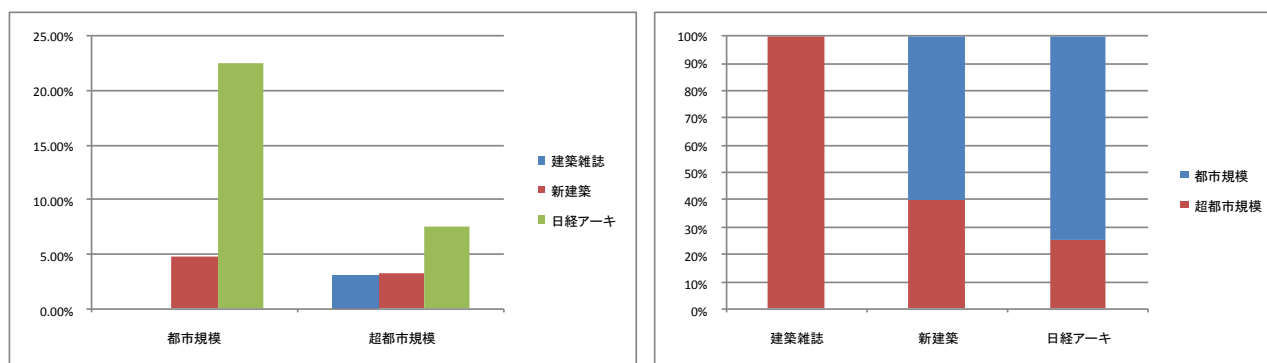


図 2.2.b.-4: 【場所に着目】大論題における中論題と3誌との関係(左:当該中論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

中論題における小論題の比較分析

さらにここからは小論題レベルでの分析を加える。6つの中論題[より学術的技術][より職能的技術][社会の内部][社会の外部関係][都市規模][超都市規模]における23の小論題について、総中国観数に対する各期の当該小論題の割合、および各期におけるそれぞれ小論題の割合を示して分析を加える。これらにより、各時期区分の共通点および相違点におけるいくつかの特徴がみてとれた。

はじめに【技術に着目】大論題下の、2つの中論題下における小論題群について分析を行う。

[より学術的技術]中論題における3つの小論題<その学術研究一般><その建築史><その文化財保存>について、それらと3誌との関係を、当該小論題ごとの各誌中国観数の割合と、雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合において示した(図2.2.b.-5)。ここでの最も顕著な特徴は<その建築史><その文化財保存>の2つにおいて『建築雑誌』が相対的に突出している(それぞれ9.23%、4.62%)ことである。さらに<その建築史>においては『日経アーキテクチャ』の分布が見られない。すなわち、学術的技術に関する中国観は、『建築雑誌』と『新建築』には広く論題が分布しているが、『日経アーキテクチャ』には建築史に関する記述がなく話題が限定的である、ということになる。

次に[より職能的技術]中論題における7つの小論題<その建築実務一般><その建築意匠と計画><その建設><その建築構造と構法><その環境工学><その設計業界><その都市計画>について、それらと3誌との関係を、当該小論題ごとの各誌中国観数の割合と、雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合において示した(図2.2.b.-6)。ここで顕著なのは、<その建築実務一般><その建設><その設計業界>3つにおいて『日経アーキテクチャ』が10%を超えており相対的に高い比率を占めている(それぞれ10.75%、11.83%、10.75%)こと、また<その建築実務一般><その環境工学><その都市問題と都市計画>の3つにおいては3誌のうち2誌にしか中国観の分布がなく、より具体的な視点である後者2つにおいてはどちらも『日経アーキテクチャ』において記事が見られないこと、である。さらに各誌ごとの記事の比率を見ると、『建築雑誌』が6つ、『新建築』7つの小論題の記事を内包するのに対し『日経アーキテクチャ』は5つで小論題のレベルでは内包する中国観の種類が最も少ない。このことはつまり、職能的技術に関する中国観は、他の2誌がより広い話題を取り上げているのに対し、『日経アーキテクチャ』は設計と建設の話題が中心で環境工学や都市問題・都市計画に関する記述がなく話題が限定的である、ということを示している。

この2つの中論題における小論題の観察から3誌の中国観の視点を改めて比較すると、技術に着目した中国観においては、他の2誌が話題を総合的に広く扱っているのに対し、『日経アーキテクチャ』は比較的话题が限定的であるということが明らかになった。

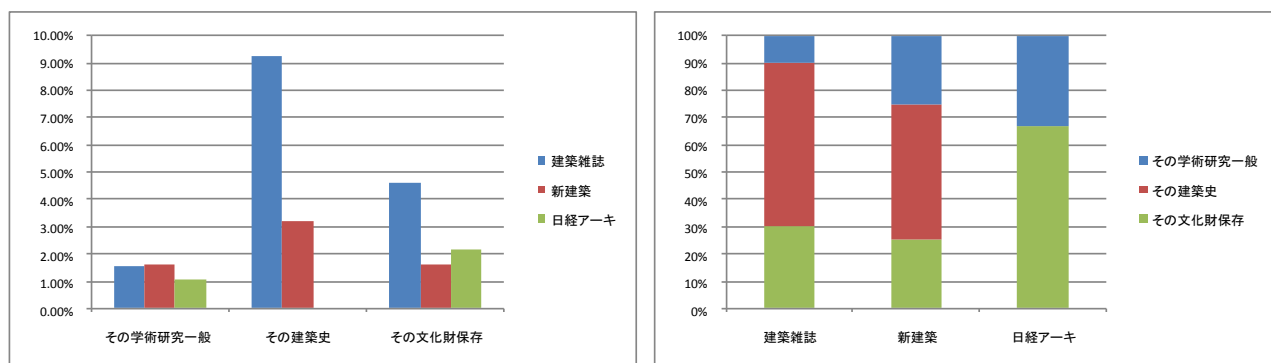


図 2.2.b.-5: [より学術的技術] 中論題における小論題と3誌との関係(左:当該小論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

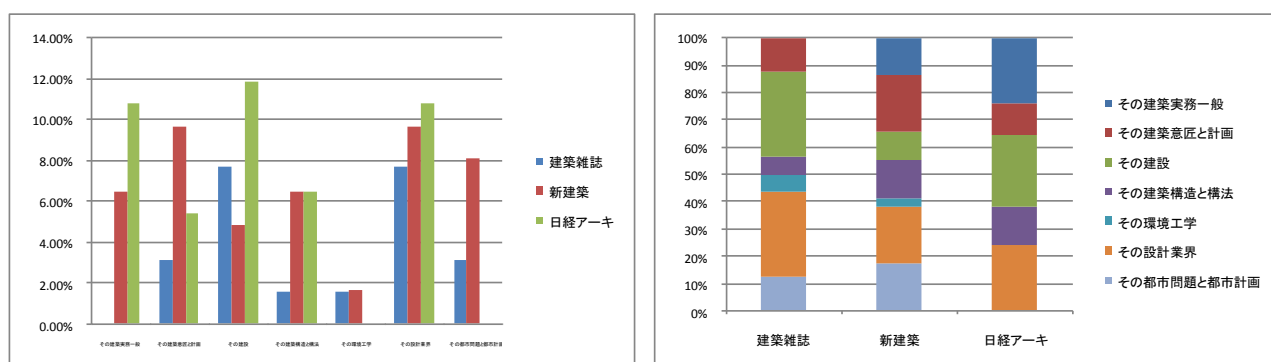


図 2.2.b.-6: [より職能的技術] 中論題における小論題と3誌との関係(左:当該小論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

続いて【社会に着目】大論題の中の2つの中論題について分析を行う。

まず、【社会の内部】中論題における5つの小論題<その社会一般><その人><その風俗や習慣><その政治と経済><その教育と文化>について、それらと3誌との関係を、当該小論題ごとの各誌中国観数の割合と、雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合において示した(図2.2.b-7)。ここで顕著なのは、<その社会一般>と<その風俗や習慣>において『建築雑誌』の比率が高い(それぞれ15.38%、10.77%)のと、<その政治と経済>において『新建築』の比率が高い(11.29%)であることである。中国社会の内部を語る中国観においては、『建築雑誌』と『新建築』の比率が高く、風俗や習慣、政治と経済といった論題が重要な位置を占めていることが明らかになった。

次に【社会の外部関係】中視点における2つの小視点<その国際関係><その日本との関係>について、それらと3誌との関係を、当該小論題ごとの各誌中国観数の割合と、雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合において示した(図2.2.b-8)。ここで顕著なのは、<その国際関係>においても<その日本との関係>においても『建築雑誌』の比率が相対的に高い(それぞれ12.31%、7.69%)ことである。これは日本の中国社会の対外関係認識が、『建築雑誌』においてもっとも活発に観察されていることを示している。

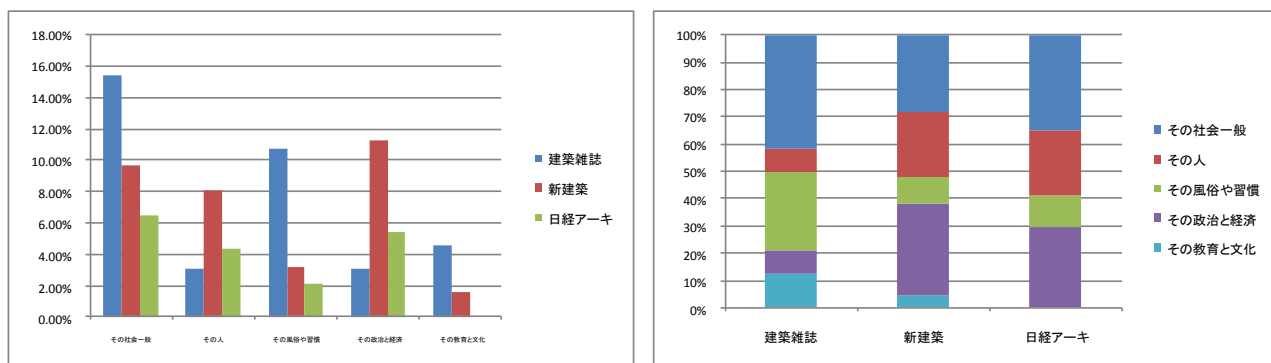


図 2.2.b-7: 【社会の内部】中論題における小論題と3誌との関係(左:当該小論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

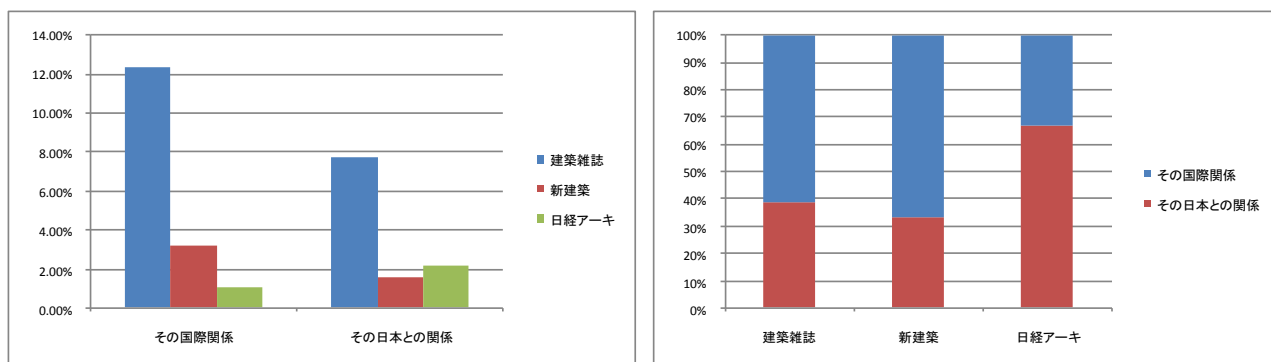


図 2.2.b-8: 【社会の外部関係】中論題における小論題と3誌との関係(左:当該小論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

さらに【場所に着目】大論題の中の2つの中論題について分析を行う。

まず、【都市規模】中視点における4つの小視点<その北京><その上海><その香港><その他都市>について、それらと3誌との関係を、当該小論題ごとの各誌中国観数の割合と、雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合において示した(図2.2.b.-7)。ここで顕著なのは、4つの小論題すべてにおいて『日経アーキテクチャ』の記事の比率が最も高く、とくに北京と香港に集中していることである。北京に関するものは2008年の北京オリンピック、香港に関するものは1997年の香港返還にまつわる現地取材記事における中国観によるものであると考えられる。『建築雑誌』には都市レベルでの場所に着目した中国観は分布がなく、『新建築』は上海と香港についてのみ分布が見られる。

次に【超都市規模】中視点における2つの小視点<そのアジア><その中国>について、それらと3誌との関係を、当該小論題ごとの各誌中国観数の割合と、雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合において示した(図2.2.b.-8)。ここで顕著なのは、中国全体をひとつの場所としてとらえる中国観は、3誌それぞれに見ることができる、ということである。

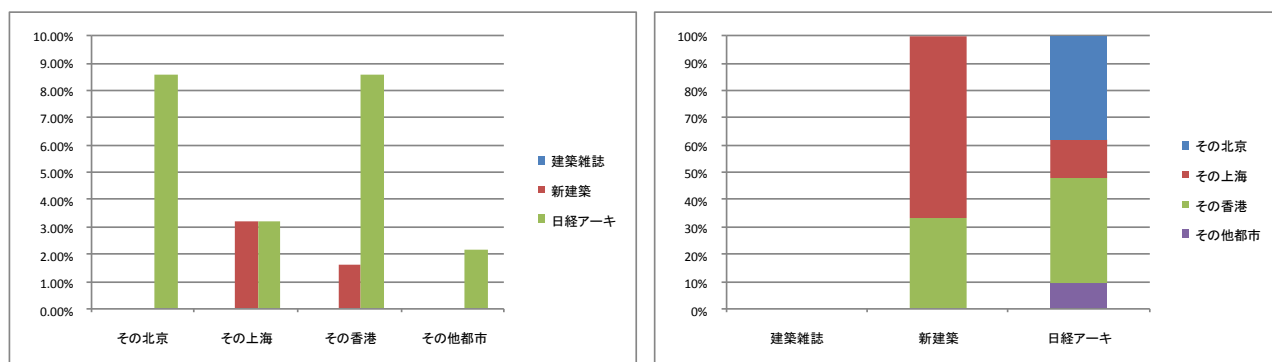


図 2.2.b.-9: 【都市規模】中論題における小論題と3誌との関係(左:当該小論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

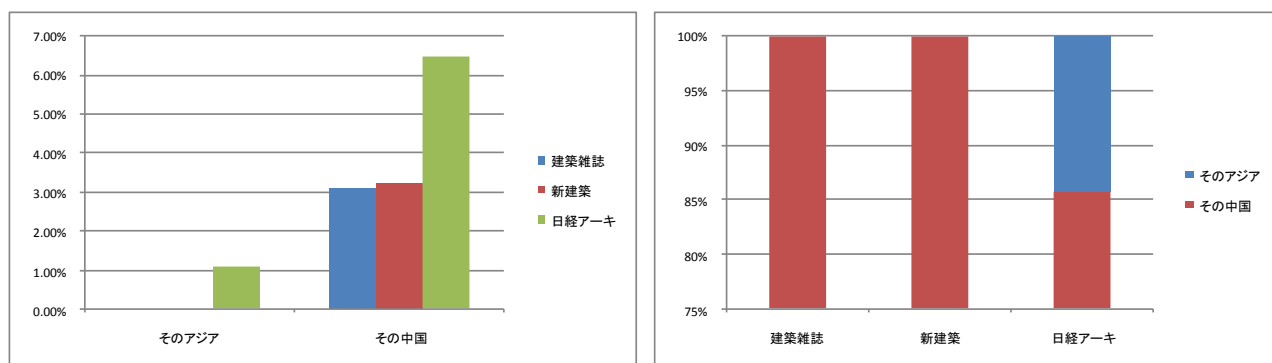


図 2.2.b.-10: 【超都市規模】中論題における小論題と3誌との関係(左:当該小論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

小括:共通して主流の「技術」論題とメディアごとに異なる「社会」と「場所」論題

以上2.2.b.節では、KJ法によって分類された『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』の3つの建築メディアの中国観を、大論題における3誌の分布比較、大論題における中論題の分布比較、中論題における小論題の分布比較にかけることによって、その発現メディアと論題の関係を把握しようとした。その結果、3つの建築メディアの中国観の分布においていくつかの特徴をみてとれた。

大論題における3誌の分布比較では、3誌ともその中国観において、中国の「技術」に関する興味が「社会」や「場所」に関する興味より共通して高いことが明らかになった。また3つの大論題の分布を比べながら見ると、『建築雑誌』は中国の技術のみならず中国社会に着目した中国観が、『新建築』は新しい建築の情報を伝える雑誌として技術に着目した中国観が、隔週ジャーナルの『日経アーキテクチュア』は技術を主要な関心対象にしながら具体的な場所を取り上げた中国観も多く扱っていることが明らかになった。

大論題における中論題の分布比較は2つの大論題ごとに行った。【技術に着目】大論題においては1985年以降の日本建築界の技術に関する中国観は、『建築雑誌』においては学術的な技術に対する関心が一定数あったのに対し、『新建築』や『日経アーキテクチュア』においてはそのほとんどが職能的な技術に対する興味によって占められていたことが明らかになった。また【社会に着目】中国観においては、日本建築界の中国観において、『建築雑誌』では比較的盛んに中国の対外関係が語られるのに対し、他の2誌はそう多くないこともわかった。【場所に着目】中国観においては、『日経アーキテクチュア』が、その中国観が他の2誌よりも多く、技術や社会によらずに中国のその場所自体の都市論や空間のイメージに関する情報を記事にして掲載していることが明らかになった。

中論題における小論題の分布比較は6つの中論題ごとに行った。技術に関する2つの中論題[より学術的技術]と[より職能的技術]においては、どちらにおいても、『建築雑誌』と『新建築』のほうが『日経アーキテクチュア』に比べてより多種の論題を扱っていることが明らかになった。例えば学術的技術における「建築史」や、職能的技術における「環境工学」、「都市問題・都市計画」に関する記事は、他の2誌では見られるのに対して『日経アーキテクチュア』では見られない。【社会の内部】中論題においては、中国社会の内部を語る中国観においては、『建築雑誌』と『新建築』の比率が高く、「風俗や習慣」、「政治と経済」といった論題が重要な位置を占めていることが明らかになった。【外部との関係】中論題においては、日本の中国社会の対外関係認識が、『建築雑誌』においてもっとも活発に観察されていることが明らかになった。【都市規模】中論題においては、『日経アーキテクチュア』の記事の比率が最も高く、1997年の香港返還、2008年の北京オリンピックもあってこの2都市に関する場所に着目した中国観が多く見られることがわかった。【超都市規模】中論題においては、中国全体をある場所としてとらえる中国観は、3誌それぞれに見ることができることが明らかになった。

こうして中国観の発現メディアと論題の関係をみてみると、3つのメディアにおいてはどれも「技術」に着目した中国観が主要な部分を占めている一方、「社会」と「場所」に着目した中国観の分布はメディアごとに相違がある、という傾向を看とることができる。具体的には『建築雑誌』には「技術」に加えて「社会」に、『日経アーキテクチュア』では「技術」のほかに「場所」に着目した論題の中国観が多く見られ、『新建築』は「技術」があくまで主流であるということがわかった。建築とはもちろん技術的な営みであるから、建築メディアにおいて「技術」が中心に据えられるのは当然であると言える。ただし3誌を比較すると、「技術」をどう扱っているかという点について、相対的に各誌で違いが見られることがわかる。

中括:3誌の中国観における論題布置の共時的比較—「技術」以外の論題による布置の性格づけと現場情報の一般化

第2章後半部分の2.2.節では、『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の1985年から2008年までの中国関連記事から、執筆者が端的に中国についての要約的印象を示している箇所を「中国観」の発現ととらえ、該当するテキストを短文として抽出し発現の回数を把握した。結果3誌で合計220回の中国観の発現を採取することができた。さらにその中国観をKJ法によって分類したところ、それらは「技術」と「社会」と「場所」の3つにそれぞれ着目したものに大別が可能な3段階の論題構造として整理された。

その上で各建築メディアの論題の布置を明らかにすべく、中国観の発現メディアと論題の関係を分析したところ、明らかになったのは、1.建築メディア3誌ごとに記事の論題の布置の重心はそれぞれ異なるが、「技術」に着目するものが中心であると言う点では共通しており、『建築雑誌』はそれに加えて「社会」への関心が、『日経アーキテクチャ』は「場所」への関心が高く『新建築』は「技術」をあくまで論題布置の中心に据えていること、2.『建築雑誌』の「技術」への関心は学術的なそれへの傾向が強く、他の2誌は職能的なそれへの傾向が強いが、扱っている技術の種類に関しては、『日経アーキテクチャ』に比べて『建築雑誌』と『新建築』の方が多く、3.「場所」に関する中国観は『日経アーキテクチャ』に最も多く分布しており、1997年の香港返還、2008年などの時事的なイベントがこうした傾向を押し上げたこと、である。これらの事実は、各雑誌のもつ「技術」、「社会」、「場所」論題の中国観群において、建築の核心部である「技術」以外の論題のばらつきが各メディアの論題布置を性格づけていることを示している。

また、第1章の『建築雑誌』における近現代の中国観の通時的分析では数の少なかった「場所」論題の中国観は、本章の現代の中国観の共時的分析では『日経アーキテクチャ』に突出して多く見られ、かつその内容を見ると、1997年に中国に返還された香港や2008年にオリンピックを開催した北京などの、限られた時期の特定の都市に関するものであることがわかった。第1章・第2章で見てきた3つの建築メディアにおいて、中国関連記事の集中はしばしば中国に関する特集号に見られるが、『建築雑誌』が「技術」に関するテーマごとに目次を構成している(1976年1月号の『中国建築の現状』特集や1985年8月号の『中国建築概説』特集)のに対し、『日経アーキテクチャ』は現場取材をしたその都市をまるごと特集にして(1997年7月14日号の『香港返還建築事情』特集や2008年8月11日号の『北京再誕』特集)誌面を構成している。こうした特集の新しい作り方は、中国情報の論題布置としては従来の日本の建築界が目にしたことのない形であると言える。85年以降の現代の日本建築界の中国観の分析において、こうした「場所」に着目した中国観が増えてそれをもとに記事の論題布置がなされていることは、現代の日本の建築界が、特定の「場所＝現場」からの中国情報を直接獲得し始めているというように理解できよう。

2.3. 第2章まとめ:中国に影響を受けながら、技術以外に着目するようになる同時代の中国認識

第2章をまとめると以下ようになる。

章前半の2.1.節では『新建築』と『日経アーキテクチュア』の2つの建築メディアについて、1985年から2008年間の中国関連記事をそれぞれ196編、200編抽出し、それらの記事数の変化を数量的に把握した上で、執筆者の属性、記事の形式について数量分析と定性分析を加えている。また、各建築メディアの記事の論題を時系列にそって分類し、内容的に重要だと思われる記事の論題論調についてレビュー形式で言説分析を加えた。さらにここで、第1章で分析した『建築雑誌』IV期(1985-2008年)の中国関連記事94編とあわせて分析結果を比較した結果、3つの建築メディアの中国関連記事に見るその情報伝達手段は、記事の執筆者や記事形式の属性においてメディアごとに異なり、『建築雑誌』は「執筆者の専門性」が、『新建築』は「建物」が、『日経アーキテクチュア』は「現場」が、それぞれの情報の伝達軸を持っていることがわかった。また3誌は、記事の内容分析によって、中国の同時代の状況への態度においてそれぞれ相違があることが明らかになり、中国の状況に最も迎合的な『日経アーキテクチュア』、やや迎合的な『建築雑誌』、あまり迎合的でない『新建築』というように、3誌の対中態度の違いを指摘した。

章後半の2.2.節では『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』3誌の上述の中国関連記事から、執筆者が端的に中国についての要約的印象を示している箇所を「中国観」として220回分抽出した。それらをKJ法によって分類し、中国観の発現する建築メディアと論題の関係を検証している。その結果、3誌の中国観の共時的な論題布置は、「技術」と「社会」と「場所」のそれぞれに着目したものに三分できる3段階の構造をもっており、3誌とも「技術」論題の割合が一番高い一方で、雑誌ごとに「社会」と「場所」論題の割合が異なり、『建築雑誌』は「技術」に加えて「社会」の、『日経アーキテクチュア』は「技術」のほかに「場所」に、『新建築』は「技術」論題があくまで主流であることが明らかになった。このことは、各雑誌のもつ「技術」、「社会」、「場所」論題の中国観群において、「技術」以外の論題のばらつきが各メディアの論題布置に特徴を与えているということを示している。また、『日経アーキテクチュア』は「場所」論題の中国観を、他の雑誌にはない明確な集中とともにここで配していることが明らかになり、その中国観の出自を見ると1997年の香港返還や2008年の北京オリンピック前後の現地取材に伴って発生した記事において見られることがわかった。これは現代の日本の建築界が、今までなかった現地取材による同時代の中国情報の獲得を可能にしている状況を示しており、『日経アーキテクチュア』を通して「場所＝現場」に関する情報伝達が一般的になりつつあることを指摘した。

以上、『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』の中国関連記事と中国観を共時的に検証した結果、当該建築メディアに見られる現代の日本の建築界における中国情報の情報伝達手段と論題布置の特徴は、「同時代の中国に影響を受けながら、「技術」以外の「社会」や「場所」の論題に着目している」ものであるとすることができる。

第3章: 日本建築界の対中論調にみる中国認識—3つの建築メディアに繰り返される中国観の分析

本章第3章では、第1章、第2章で見てきた3つの建築メディアにおける、日本建築界が中国を認識する際の繰り返しのパタンの傾向を検討する。1887年の創刊号から2008年発行分までの『建築雑誌』と、1885年から2008年発行分までの『新建築』と『日経アーキテクチュア』における、発現しているすべての中国観を対象にしている。

第1節では、3つの建築メディアの中国観のうち、繰り返し見られる内容をもつものを取り出して整理したところ、17の論点として分類された。さらにその論点ごとに、各中国観が肯定的態度を帯びているか否定的かについてその論調をレビュー形式の内容分析によって検証した。その上で各論点の時期・論調の散布図を作成している。

第2節では各論点の散布図を比較分析し、時期と論調の関係から17の論点を3つのカテゴリ「一貫型」「混在型」「交替型」に分類した。さらにカテゴリごとにその論調と繰り返しのパタンの関係について分析を加えている。

第3節では、中国観において繰り返し現れる中国観のパターンとその傾向について、本章のまとめを行う。

3.1. 繰り返される中国観の論点と論調

繰り返される中国観の抽出と論点ごとの整理

17の論点における分析方法

論点ごとの中国観の分析とその時期・メディア・論調分布

a)中国の人／b)建設ラッシュ／c)古いもの／d)大きい多い／e)スピード／f)ものづくりへの態度／g)将来の変化／h)施工精度／i)アドリブ的／j)中国の役所／k)持続可能性／l)部分と全体／m)まだこれから／n)維持管理／o)よくわからない／p)感情的親近感／q)コンペ

3.2. 繰り返される論調の傾向

肯定的否定的論調のどちらかに一貫して中国観が反復する論点:「一貫型」7つ

肯定的否定的論調が混在して中国観が反復する論点:「混在型」7つ

肯定的否定的論調が一定期間ごとに交替して中国観が反復する論点:「交替型」3つ

小括: 反復する中国観における時期と論調の関係分析—3つの論調パターンのもつ安定性と不安定性

3.3. 第3章まとめ: 自我と時代との関係で規定される複層的な中国認識

3.1. 繰り返される中国観の論点と論調

本節は3つの建築メディアの中国観を改めて通覧した上で、そこに繰り返し見られる内容を持つ中国観を抽出、分類する。さらに、そこで派生した17の論点ごとに、各中国観の発現時期-発現建築メディア-論調分布を一覧にし、時期-論調の散布図を作成した。これらは、次節以降で17の論点を中国観の繰り返しパターンごとに検証するための準備作業である。

繰り返される中国観の抽出と論点ごとの整理

第1章で抽出した『建築雑誌』(以下略号K)の中国観156回、第2章で抽出した『新建築』(同S)の中国観62回と『日経アーキテクチャ』(同N)の中国観93回の合計311回の中国観を対象に、日本の建築界が中国を語る時に採用しやすい論点を持つ中国観、すなわち繰り返し現れる、類似する説明や共通の述語をもつ中国観を取り出して分類したところ、全部で17の論点に分類できた。以下にその17の論点を、中国観を多く含む順に挙げる。

- a) 中国の人: 36 中国観
- b) 建設ラッシュ: 25 中国観
- c) 古いもの: 25 中国観
- d) 大きい多い: 19 中国観
- e) スピード: 16 中国観
- f) ものづくりへの態度: 14 中国観
- g) 将来の変化: 12 中国観
- h) 施工精度: 10 中国観
- i) アドリブ的: 10 中国観
- j) 中国の役所: 10 中国観
- k) 持続可能性: 9 中国観
- l) 部分と全体: 8 中国観
- m) まだこれから: 8 中国観
- n) 維持管理: 8 中国観
- o) よくわからない: 5 中国観
- p) 感情的親近感: 5 中国観
- q) コンペ: 4 中国観

なお、ここで中国観の整理に使っている「論点」というカテゴリ設定は、各中国観がもつ「日本の建築界が中国を見る際に『どこを見ているか』という「論題」間を、説明の内容や共通する述語をもつものどうし束ねる、「論題」とは別の分類概念である。「論点」は中国観の「論題」の集合から形成されるが、同じ説明や述語を内包する中国観であれば、前章までの水準設定(大論題・中論題・小論題というそれ)を考慮せずに分類している。すなわちこの「論点」は異なる水準の「論題」をまたいで自由に束ねることができるものとし、これは日本建築の中国観が、しばしば様々に異なるスケールで中国の同じ部分を説明する状況を考慮して、ここで採用した分類概念である。

17の論点における分析方法

本第3章での中心となる問いは、3つの建築メディアの中国観において、共通する論点がいかに時間をまたがって発現しており、それらは中国に対してどういう態度をとっているのか、という繰り返しの形と対中態度の関係をさぐることにあ
る。このために、17の論点ごとに、まず中国観を時期—メディア—論調分布の一覧にまとめて表示する。そののち、中国観が中国を肯定的態度で語っているのか否定的態度で語っているのかという「論調」に着目して、それぞれを論点ごとにレビュー形式で内容分析する。

「論調」は、中国に対する肯定度否定度を、中立的な評価も含めて以下の3つに分類した。

+: 中国に対する肯定的な論調

±: 中国に対する中立的な論調

–: 中国に対する否定的な論調

なお論調の評価づけに関しては、すでに抽出済みの中国観の短文だけでは把握が困難な部分もあるので、別表につけている当該中国観の前後の文章や、さらにその中国観を内包する中国関連記事の本文まで視野に入れながら、各中国観が発現した当時の状況を全体的に把握した上で行った。

レビューによって内容を検証された各中国観は、肯定中立否定の評価とともに散布図上に反映される。ここで作成する散布図は、縦軸は時間経過を示す時期区分(I–IV期)をとり、横軸に肯定的、中立的、否定的評価がわけてとられている。『建築雑誌』に対して『新建築』と『日経アーキテクチュア』は創刊が遅く本論文においては分析対象期間が短いので、3つのメディアを対等に扱ったメディア—論調間の相関の検証については限界がある。そのためここで作成する散布図は、既出の中国観の時期—メディア—論調分布一覧に対して、メディア間の相違は捨象し、時期—論調間の相関をプロットしたものに簡略化してある。以下3章前半では、章後半で行う繰り返される中国観の論調の傾向把握の準備作業として、論点ごとの17の散布図を作成してゆく。

論点ごとの中国観の分析とその時期-メディア-論調分布

a)中国の人: 36 中国観

「中国の人」に関する中国観は、『建築雑誌』では全期に分布が見られ、Ⅳ期の『新建築』、『日経アーキテクチャ』ともに多数見られる。この論点の中国への論調は、Ⅰ期に否定的なものが多く見られるが、Ⅱ期以降はほとんどが肯定的なものである。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の肯定的否定的論調評価をつけた中国観の一覧(表 3.1.a-1)を示す。

	建築雑誌(19)	新建築(5)	日経アーキテクチャ(12)
Ⅰ (9)	支那人は非常に福を好みますから装飾に蝙蝠を好む K002-1-Ⅰ 三橋四郎 1889年		
	支那の小児は他の国民より大きくなると段々に可愛さが無くなる K014-3-Ⅰ 伊東忠太 1907年		
	支那人の言は日本でも同じでいつでも誇大すぎて居る K015-1-Ⅰ 伊東忠太 1907年		
	建築物の修繕とか改良とかいふことの出来て来ない K017-2-Ⅰ 大江新太郎 1907年		
	元来支那人はすこぶる残忍刻薄な性質を有て居り K018-1-Ⅰ 伊東忠太 1907年		
	総じて支那人は人の物品を評価し代価を質問する癖あり K018-2-Ⅰ 伊東忠太 1907年		
	支那の男は妻を見ること玩具具如くです K018-3-Ⅰ 伊東忠太 1907年		
	支那人の建築は我邦が垂直的なものに対し周期的反復が水平的に展 K028-1-Ⅰ 大江新太郎 1909年		
	支那人は死に対して冷静ながら極端なる美利主義 K031-1-Ⅰ 伊東忠太 1910年		
	満洲は健康な誹食業界の人間を要求する K050-2-Ⅱ 田邊平學 1933年		
	満洲の百姓は中華民国のより裕福な印象 K056-1-Ⅱ 古宇田實 1936年		
	満洲建築労働者は愛すべき使いよい労働者 K059-1-Ⅱ 松浦助 1937年		
	支那人は日清戦争当時のときとは変って居る K068-1-Ⅱ 佐藤武次 1940年		
Ⅲ (1)	中国の人々は過去より現在と未来を問題にしている K086-1-Ⅱ 西山卯三 1961年		
	中国で日本を研究している人はほとんどいない K145-3-Ⅳ 村松伸 1985年		
Ⅳ (22)	まとめる人が出てくるんじゃないか K194-1-Ⅳ 磯崎新 2003年	仕上げは今ひとつながら人海戦術による現代建築の建設がある S013-1-Ⅳ あべ木勇 1987年 10億人の人口があるんだから優秀な人がたくさんいる S022-2-Ⅳ 相田武文 1993年 阿咩の呼吸で幸福を追求している中国人は生活力に満ち溢れている S092-1-Ⅳ 川口衛 2003年 中国独特の歴史、事情でスペースフレームは安い S125-1-Ⅳ 川口衛 2005年 中国人には今までの資本主義的価値観を持ち込んでも通用しない S132-1-Ⅳ 大松俊紀 2005年	中国人の技術力を高く評価 N039-2-Ⅳ 編集部 1994年 人海戦術と外国最新鋭機械の合理的施工法こそ中国建設現場 N043-1-Ⅳ 編集部 1994年 中国は最初に井戸を掘った人を優遇する国 N043-3-Ⅳ 編集部 1994年 海外に移住した香港人に、次第に家族と共に帰国する人が増加 N048-1-Ⅳ 田中克憲 1995年 香港の建築家たちの舞台はすでに中国に広がっている N061-2-Ⅳ 編集部 1997年 以前と変わり、発注者も良い設計にはお金がかかると認識 N098-1-Ⅳ 曹雄 2003年 中国人は日本人のようにパンフレットでなく実物で選ぶ N099-2-Ⅳ 編集部 2003年 北京の若い建築家の中にも、個人で活動する人が増加 N103-1-Ⅳ 松原弘典 2003年 乱開発に対する市民の批判の声が高まってきている N166-1-Ⅳ 東英樹 2007年 外国人設計者と出稼ぎ労働者の「よそ者」が北京の発展を支える N184-1-Ⅳ 編集部 2008年 国際社会に美しい北京をアピールする試みは人海戦術で達成 N184-2-Ⅳ 編集部 2008年 中国人には時間がたつと分かってくる様の深さがある N186-2-Ⅳ 隈研吾 2008年
	見えないところにはお金をかけない合理性 K197-2-Ⅳ 川口衛 2003年		
	現代建築を表現する中国人建築家はまだいない K216-1-Ⅳ 張欣 2006年		
	中華系の人たちは決断や行動が速い K220-1-Ⅳ 梶原文生 2006年		

表 3.1.a-1: 「中国の人」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

Ⅰ期で最初期に中国観を残している三橋四郎には、1897-98年にかけて3つの中国関連記事がある。そのうち1898年の「清国建築談」では、清国で見た住宅を中心に建築の特徴を紹介しており、その装飾について中国人の生活習慣を交えながら紹介し、中国人にも言及している。建築装飾として蝙蝠が好まれ亀が好まれないことを、中国語の発音から説き起こして中国人の伝統概念として整理している「支那人は非常に福を好みますから装飾に蝙蝠を好む」(K002-1)は、外国人に関する一般的な伝聞情報といった程度の内容でしかなく、肯定否定にはっきりわかるものではない。もう少しあとの、満洲建築の装飾について着目して視察旅行をしてきた大江新太郎の記事になると、そこでは建築装飾そのものについては肯定的な評価を下しながらも、装飾を作って維持管理している中国人については否定的な評価を下す記述が見られるようになる。1907年の「満洲に於ける建築装飾に就て」の記事において「建築物の修繕とか改良とかいふことの出来て来ない」(K017-2)と言い、大江はその原因を、中国人の頭の中に「永久とか安心とかいふ観念の無い所から源由した事か」と推測している。同時期の伊東忠太の記事にも、中国旅行時の具体的な観察とともに、はっきりと見下した中国人観が多く見られる。1907年の記事で伊東は、四川省南溪では地元役人を訪ねた折

に、役場(衛門)の角に罪人が檻の中首を吊られて遺体が放置されていたが婦人も子供もこれを見て一向に平気でいることについて、「元来支那人は頗る残忍刻薄な性質を有て居り、且つ死と云ふ事に対して極めて冷淡です、些細なことで人を殺し人に殺される、これは支那人が太古から好んで獣肉を食ふ観衆から来たものかと思はれる」(K018-1)と記している。また同じ記事で同省江津では地元の役人と会った際に、自分の洋服をさわって、「これは可なり良い品だが代価は何程であるかなど愚問を続発しました、総じて支那人は人の物品を評価し又は代価を質問する癖があります、支那では之が決して無作法でも無礼でもない様です」(K018-2)と書いている。日本と違う生活習慣を取り上げ、それを中国人全体の傾向として蔑視的に眺めるのはこの時期の旅行記における伊東のほぼ一貫した態度であり、そのような記述がいくつも見られる。風景や一部の建築については留保なしの賞賛を与える一方で、中国人や管理のまづい地方の建築などには容赦ない批判をしている。

比べてⅡ期以降は、中国人一般の肯定的評価に加えて、特定の中国人群について肯定的に評価する中国人観が見られる。大林組新京出張所の松浦助は1937年から38年にかけて満洲における建築の凍害やコンクリートの防寒養生試験についてなどの工学的なレポートを『建築雑誌』において「内地建築家諸士に」向けて書いている。中でも施工状況について書いたレポート「満洲に於ける建築労働者に就いて」は、中国人建設労働者「苦力(kuli、当時の日本語では人夫・土工が訳語にあてられている)」の生活水準について細かく追っており、満洲事変以後の現地日本人技術者の中国人に対する見方がうかがい知れる。苦力は当時、日本の満洲支配の実効化のための都市建設に、山東省周辺から4月から11月ころにかけて満洲に出稼ぎでやってきており、松浦は彼らを観察していたようだ。いわく、満洲の中国人労働者は生活レベルが低い、朝鮮人労働者と比べると比較的勤勉で、「満洲建築労働者は愛すべき使いよい労働者」(K059-1)としている。さらに「各職工の技術も仲々うまい。指導さへよければ内地人はだしのものがある」と位置付け、そのうえで、最近日本の工事労働者が出稼ぎで満洲に渡ろうとする者もいるが価格の部分でこの中国人労働者にはまったく敵わないので「宜しく頭でリードする様にしなければならない」と警告している。

神戸高等工業学校校長の古宇田實は1936年に学会の代表として「中華民国及満洲」と朝鮮を訪問した時の印象を残しているが、建築への雑感のあと、満洲の中国人についてもコメントを残している。「満洲に入りまして曾て見た満洲、曾て目に残つて居た関東州と今日の関東州とを比較して思ひ出しますと、まるで違つて人々即ち土着百姓の富の程度が違つてきたと思ひます、百姓が皆きちんとしている、支那の方で見ました百姓などに比べると実に裕福なやうな感じが致しました」(K056-1)といい、満洲国の存在のために、中国東北部の百姓の生活の質が、東北以外の中華民国のそれに比べて向上している、という言い方をしている。早稲田大学の佐藤武夫は1939年の年末から翌年にかけて短期間上海蘇州を訪問し、重慶の蒋介石政権に対抗して汪兆銘が南京に南京国民政府を樹立しようとしていた南京にも足を運んでいる。佐藤は「支那に対する日本人一般の感情は…“好事的な眼”の範囲を多く出て居なかつた」ことを指摘し、「支那人の民族性が、事大的であり尊大であるといふやうな一般の通念、それは事実大衆にはまだまだその性質が残つて居りますが、日清戦争当時の支那観、乃至は支那人観を以てそのまま彼等を見るやうな了見では今日、今後は不可ないのであります。彼等は變つて居る、いや少なくとも變りつつある」(K068-1)と、従来の中国人観があやまりで南京政府一派の人々が大変進歩的であると言っている。古宇田や佐藤の中国観では、満洲国や汪兆銘政府などの当時の寄りの傀儡政権を支持するために、中国を切り分けてとらえ、日本に近い部分の人や政府を部分的に持ち上げ、結果的に中国の他の部分を卑下している。松浦のそれも含めて、この時期には中国人全体ではなく、部分を取り上げて特定の中国人群を肯定的に評価する記述が見られる。

Ⅳ期は日本人とは違う中国人という、日本と比較したうえでのより客観的な中国人観が増える、東京大学の大学院生の村松伸は1985年に「たとえば法隆寺とか唐招提寺に皆さん興味を持っていますが、それはあくまでも中国の唐代の建築で残っているのが非常に少ないということで、たまたま興味があるわけです。それより新しい、たとえば明治末など

のことは全然興味がなくて、興味が出てくるのは、戦後の高度成長期の、日本の現代建築がどうなってきたかです。そのへんの2つに分かれています」(K145-3)、建築家の磯崎新は建築デザインのこれからを予測して「日本はいろいろやろうとして、極端に言えば分裂しています。だけど中国では、まとめる人が出てくるんじゃないか」(K194-1)、桑沢デザイン研究所の大松俊紀の「彼ら中国人には今までの資本主義的価値観をそのまま持ち込んでもまったく通用しない」(S132-1)、上海哈比房屋裝飾総經理の小倉満は「客と一緒に建材市場に行き、建材を選ぶのが一番大変。中国の人は、日本人のようにパンフレットで選ぶことでは満足しない。実物を見て選ぶ」(N099-2)というのはどれも日本人と中国人の違いに着目した、肯定否定的論調まで踏み込むことなく、中間的立場から客観的解釈を述べる中国観である。

同時期には、日中の違いを認識したうえで肯定的論調を付帯するものも多い。しかも対象とする中国人は限定的でなく、「中国人一般は」という語り口のものが、再びI期の中国人観のように目立つようになる。建築家で芝浦工業大学の相田武文は「10億人の人口があるんだから優秀な人がたくさんいます」(S022-2)、構造家で法政大学の川口衛は「阿吽の呼吸で幸福を追求している彼らの姿は生活力に満ち溢れている」(S092-1)、中国に進出した日本の建築プランナーある都市デザインシステムの梶原文生は「中華系の人たちは、ビジネスには非常に敏感ですし、次への動きは速いですよ」(K220-1)、隈研吾は「中国人は時間がたつと分かってくれる懐の深さがある」(N186-2)と言う。早稲田大学の尾島俊雄は中国社会一般についてこう述べている、「リーチが長いといいますが、実はぼくも2カ月ほどいううちにいやになったんです。もう帰ろうと(笑)。そのうちにだんだん、彼らの奥行きが深いといいますが、最初はなかなか本音を出さないんですね。だけど付き合っているうちに、どんどのめり込んでくるものがあるって、すごいパワー、底力があるように感じられました」¹⁾。1985年に尾島の言った「奥行きの深さ」は2008年に隈研吾が言う「懐の深さ」にも通じるものなのであろう。

II期以降「中国の人」論点に関する反復中国観の中での否定的論調は、「外国人設計者と出稼ぎ労働者の「よそ者」が北京の発展を支える」(N184-1)でのみ観察された。これは2008年の北京オリンピック関連の現地取材記事において『日経アーキテクチャ』編集部が示した見解である。

人にまつわる語ということで、「人海戦術」についてもいくつかの中国観で言及があるのでここで触れておく。中国はとにかく質より数で他を圧倒している、という言い方は、実はそう古いものではなく、『建築雑誌』の中国関連記事では戦後に初めて見られるものである。先述した満洲の建設労働者に関する1937年の松浦助の記事では、季節労働者の苦力がたくさん低賃金で働いているということは書かれているが、それが集中的に配置され建設が行われているというような「人海戦術」に着目した記述は見られない。戦後の1961年に京都大学の西山卯三が訪中し、そのときに中国の十大建築を見学して、その施工のスピードとあわせて中国の人海戦術的施工について言及している。「よく「人海戦術」などと半分ヤユをこめて話す人があるが、単なる量ではなくて、そこに動いている質的なものをみのがしては大きなあやまりをおかすであろう」(K086)と言い、ここで西山は「人海戦術」という言葉を否定的に用いている。これは一方でIV期に「人海戦術」という言葉がいくつかの中国関連記事で肯定的に使われているのとは対照的である。鉄建建設技術部長のあべ木勇は、1987年に訪中し北京図書館の建設現場を視察して「仕上げの精度は今ひとつというところであるが、全体は簡素にまとめてある...ここには人海戦術による現代建築の建設がある」²⁾と書き残している。川口衛は自らが構造設計に関わった天津博物館の建設を振り返って「素材も棒と塊をつくるだけ。さらに、組みたてる人手はいっぱいいる。ということで中国のスペースフレームは安い」³⁾と言い、日経アーキテクチャ編集部は深圳の工事現場を取材して、農民の出稼ぎ労働者が安い賃金で使われながら同時に海外の最新鋭の建設機械がリースでなく購入されて現場に設置されているのを見てこう伝えている、「労働力を惜しみなく投入した人海戦術、そして各国のメーカーから導入した最

1) 浅川滋男・村松伸・茂木計・八代克彦・山口幸夫ら「日中学術交流」1985年11月号 (K145)

2) あべ木勇「中国建築事情レポート 北京・天津の図書館訪問記」1987年8月号 (S013)

3) 川口衛「中国での構造デザインの試み」2005年1月号 (S125)

新鋭の機械による合理的な施工法。両方の混在は、中国の建設現場ならではの光景だろう」⁴⁾。施工を「速く」、「安く」、「メリハリをつけられる」人海戦術を肯定的に伝えるものである。

なお、さらに時代を下って北京オリンピックを伝える 2008 年の『日経アーキテクチュア』の記事では、そうした人海戦術に成長のひずみや格差を見る視点が出てきている。編集部がオリンピックで急成長する北京に「過渡期の魅力とひずみ」を見た記事では、「国際社会に向けて美しい北京をアピールするという中国の試みは、人海戦術を駆使してなんとか達成されそうだ」⁵⁾と書き、これはオリンピックの裏舞台が、格差社会を前提にした出稼ぎ労働者の安い労働力に依存しているという事実を見た上で、中国観における人海戦術の限界がやんわりと指摘されている。

36	否定的(8)	中立的(18)	肯定的(10)
I (9)			
II (4)			
III (1)			
IV (22)			

図 3.1.a.-1: 「中国の人」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.a.-1 のようになる。「中国の人」の論点における中国観では、戦前までは中国人全体を否定する論調が目立つが、戦中は限定的な中国人群を肯定評価する論調に移行し、戦後 50 年代末以降は中立的なコメントか肯定的なものに移行していることがわかる。時期ごとに肯定否定の評価が入れ替わる傾向をみてとれる。

4) 編集部 「みなぎるドラゴンパワー—深圳、上海、香港に行く」 1994 年 8 月号 (N043)

5) 編集部 「萩野谷昭二「過去の経験が生きた、中国・上海で 2 棟目の超高層ビル建設を先導」 2008 年 10 月号 (N194)

b)建設ラッシュ: 25 中国観

「建設ラッシュ」に関する中国観は、『建築雑誌』ではⅠ、Ⅲ期に分布が見られず、Ⅳ期の『新建築』、『日経アーキテクチャ』ともに多数見られる。この論点の中国への論調は、Ⅳ期に肯定的否定的双方が混在している。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表 3.1.b.-1)を示す。

建築雑誌(2)		新建築(8)		日経アーキテクチャ(15)		
I (0)						
II (1)	満洲の建築界は新京を中心に活況 K050-1-Ⅱ 田邊平学 1933年	±				
III (0)						
IV (24)	最近外国建築設計事務所も受け入れられている K200-1-Ⅳ 盧萃明 2003年	±	ものすごい建設ラッシュだが日本人の眼からみれば施工精度は今一歩 S022-1-Ⅳ 相田武文 1993年	-	日本の建設業界が中国各地に建設する計画が相次ぐ N002-1-Ⅳ 編集部 1985年	±
			外国資本に市場を開放した成果は着実に実を結びつつある S055-2-Ⅳ 横谷英之 2001年	+	外国企業が續々と進出してきているが、オフィスビルが不足 N003-1-Ⅳ 柴田義 1985年	±
			市場原理の建設志向と建築家の理論志向の矛盾する方向性あり S072-1-Ⅳ 馬衛東 2002年	±	香港は天安門事件のショックから立ち直り活気を取り戻しつつある N027-2-Ⅳ 編集部 1990年	+
			中国の台頭が構造的デフレを生み、設計事務所をグローバル化 S085-1-Ⅳ 村松映一 2003年	±	2010年ごろには中国が“アジアのUSA”になる N043-4-Ⅳ 藤田一彦 1994年	+
			今や、中国は世界で一番元気で、破壊力をもった資本主義 S102-1-Ⅳ 張永和 2004年	+	今後上海は日本や欧米から企業が集まってくるのが想定される N056-1-Ⅳ 編集部 1996年	±
			ここに来て日本の相対的な力が落ち、中国、韓国の活力が顕在化 S102-3-Ⅳ 村松伸 2004年	+	香港返還式典後ここでは建設ラッシュ N061-1-Ⅳ 編集部 1997年	+
			日本の失われた10年とは対照的に、中国には加速された10年 S148-1-Ⅳ 迫慶一郎 2006年	+	世界に例を見ないスピードだ N104-1-Ⅳ 山本隆 2003年	+
			日本で30年かかった変化が3年でなされている感じでもあり S165-1-Ⅳ 磯崎新 2008年	+	設計の仕事は、こなせないほどたくさんある N105-2-Ⅳ 曹偉 2003年	+
					中国は有望な市場だ N106-1-Ⅳ 肖宏 2003年	+
					中国の建築現場を見ると、バブル期の日本と似ていて危機感 N110-1-Ⅳ 松山岩生 2003年	-
					こんなにたくさん建物が建っているのに、いいものが全然ない N125-1-Ⅳ 松原弘典 2004年	±
					中国の住宅販売価格は上昇し、政府は“バブル対策”を実施 N131-1-Ⅳ 編集部 2004年	-
					中国の「輸出」が始まる N160-1-Ⅳ 迫慶一郎 2007年	±
					中国では莫大な数の開発行為が行われています N163-1-Ⅳ 迫慶一郎 2007年	±
					経済的な急成長で日本に比べ設計のチャンスが多い N165-1-Ⅳ 東英樹 2007年	+

表 3.1.b.-1: 「建設ラッシュ」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

『建築雑誌』にはこの論点を扱った中国観は2つのみである。Ⅱ期の『建築雑誌』のそれは、東京工業大学で防災研究の専門家だった田邊平学のもの1つである。「旅順爆撃演習見学の所感並に満洲建築界の近況」は、1933年9月13日から約1週間満洲を廻った際のこのレポートで、旅順での爆撃実験の報告と、旅順大連、新京(瀋陽)、ハルビンの視察記からなっている。視察記では、満洲を満鉄関係、軍部関係、新国家の国都建設関係の3つの方面からとりあげ「満洲の建築界は新京を中心に活況」(N050-1)と言い、エンジニアらしく冷静な調子で、「現在満洲に行けば至る所で砂金でも手に入るのではないかと云うやうな考で、満洲へ押しかけて行つて居る人が澤山ある」風潮をいさめている。Ⅳ期には、神戸大学大学院に留学し上海に帰って設計事務所を自営している中国人、盧萃明の中国観が見られる。「最近外国建築設計事務所も受け入れられている」(K200-1)とあるのは、奈良や京都の古代の寺院には「日本建築には古くから中国建築技術の影響」が見られ、1930年代のいわゆる満洲国では日本建築家が多く近代建築を手掛けて「先進的な建築文化を中国に導入」したと言い、それらの過去2回の日中建築文化交流がこれから拡大し、「第三回目の建築交流ブームが来るような気運がする」という前提に立った記述である。『建築雑誌』の2つの中国観はどちらも中立的な中国観を語っている。

Ⅳ期の『新建築』と『日経アーキテクチャ』では、商業誌ということもありもっとあけすけに中国の「建設ラッシュ」の状況が語られている。『新建築』では早くも1993年に相田武文がインタビューで「ものすごい建設ラッシュだが日本人の眼からみれば施工精度は今一歩」(S022-1)と言い、その質についての留保をつけつつ中国の建設ラッシュについて言及している。『日経アーキテクチャ』は、『新建築』に比べて施工精度のことを細かく扱うような技術に特化した記述は少ないが、逆に『新建築』にはない、中国の建設ラッシュを日本のバブル期とかぶせる記述が見られる。2003年の読者投稿欄での「中国の建築現場を見ると、バブル期の日本と似ていて危機感」(N110-1)や、2004年の編集部による

「中国の住宅販売価格は上昇し、政府は“バブル対策”を実施」(N131-1)などは、今の中国の建設ラッシュに日本のバブルとの類似点を見た上でネガティブにそれをとらえている。90年代までの中国の「建設ラッシュ」への否定的論調は、文字通りの施工精度の低さにあったと思われるが、その精度が次第に向上するようになると2000年代にはラッシュが過密であることを日本のバブルという外部参照先を設けて別の形でネガティブに捉えようとしていることがわかる。

一方でIV期においては留保なしに中国の建設ラッシュに可能性を見出そうとする中国観が多いという点も見逃せない。早くも1985年には『日経アーキテクチャ』の編集部記事で「日本の建設業界が中国各地に建設する計画が相次ぐ」(N002-1)という中国観が語られている。これは百貨店の近代化に日本の建設業界が絡んで活況を呈しているという内容だが、そのあともオフィスビルなど個別のビルディングタイプにおける建築市場の拡大、香港・上海における建設ラッシュについての中国観が散見される。中国全体についての市場の活況を肯定的に言う中国観は2000年前後から急増し、日建設の横谷英之の「外国資本に市場を開放した成果は着実に実を結びつつある」(S055-2)、中国最大の建設会社中国建築工程総公司の駐日代表処代表である肖宏の「中国は有望な市場だ」(N106-1)などがそれに相当する。また2004年の村松伸の中国観「ここにきて日本の相対的な力が落ち、中国、韓国の活力が顕在化」(S102-3)や08年の磯崎新の「日本で30年かかった変化が3年でなされている感じでもあり」(S165-1)などは、凋落する日本との比較において中国の建設ラッシュを肯定的に見ようとするものであると言える。

中国にいる日本人の中には中国に対するやや冷めた観察も見られる。中国で設計活動をしている松原弘典は「こんなにたくさん建物が建っているのに、いいものが全然ない。そのへんなところが面白かった」(N125-1)や、迫慶一郎の「中国の「輸出」が始まる...これまた建設ラッシュに沸く中東に、自分たちのデザインの「輸出」を始めたようです」(N160-1)は、遅れをとった中国が一気にそのおくれをのびしろに変えてこれから大きく伸びて行くかもしれないという将来展望を、慎重かつ中立的に語っている。

25	否定的(3)	中立的(10)	肯定的(12)
I (0)			
II (1)			
III (0)			
IV (24)			

図 3.1.b.-1: 「建設ラッシュ」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.b.-1 のようになる。「建設ラッシュ」の論点における中国観は、IV期以降のものが主であり、肯定否定論調が混在していると言える。

c)古いもの: 25 中国観

「古いもの」に関する中国観は、『建築雑誌』では4期すべてにわたって見られ、IV期の『新建築』、『日経アーキテクチュア』ともに多数見られる。この論点の中国に対する態度は、III期までは肯定否定が期ごとにはっきりわかれているが、IV期には異なる態度が混在するように分布している。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表3.1.c-1)を示す。

建築雑誌(13)		新建築(4)		日経アーキテクチュア(8)					
Ⅰ (2)	支那建築は仏教渡来と共に発達し今は観るに足るもの無きに至りたり K023-3-I 伊東忠太 1908年	+	x						
	支那古代建築の研究には古代文字研究が役立つ K033-1-I 後藤朝太郎 1913年	+							
Ⅱ (0)									
Ⅲ (6)	中国の人々は過去より現在と未来を問題にしている K086-1-II 西山卯三 1961年	-							
	新旧の様式が共存し日本への影響が考えられる K098-1-III 沢村仁 1969年	+							
	新旧のものを取り入れて成長しつつある K123-3-III 梅村魁 1976年	+							
	文物の管理体制は日本より整備 K126-1-III 鈴木嘉吉 1976年	+							
	中国は都市整備に歴史的建造物の価値を認めつつある K130-1-III 田中淡 1977年	+							
	日本の古墳装飾にもつながる中国の木造建築の形式 K133-1-III 田中淡 1981年	+							
Ⅳ (17)	現在でも日本には少なくなった石造アーチ橋を造っている K165-1-IV 土田充義 1991年	±				従来、中国の案には、伝統的建築形態を模するものが多かった S002-1-IV 黒川紀章 1985年	+	中国東北地方には日本人による多くの建物が今も活用されている N005-1-IV 稲村純 1985年	±
	日本と違い伝統工法が残っていて遺跡保存事業にも使える K186-1-IV 矢野和之 2000年	+				市場経済へ移行しても、建築生産は既存システムが残存 S055-1-IV 横谷英之 2001年	-	セメントの年間消費量は世界一だが生産設備は前近代的 N016-1-IV 編集部 1987年	-
	東南アジアと違い前アジア的要素が文明に覆い尽くされて残っていない K196-1-IV 中川武 2003年	±	外的な制約がないので多くの外国建築家にとって魅力的 S110-1-IV 山本理顕 2004年	-	「伝統と現代」という課題が最近の北京動向 N035-2-IV 波多野哲次 1993年	±			
	日本と違って圧倒的に古代の繰り返しでいつのまにか近代 K196-2-IV 中川武 2003年	±	ここでは前例のなさが必要でも否定的な意味をもたないように見える S111-1-IV 渡辺真理+木下庸子 2004年	-	開発と保存の問題が重要な課題だ N035-3-IV 波多野哲次 1993年	-			
	文献は古いが実際の建築が今は残っていない K222-1-IV 田中淡 2006年	±							

表 3.1.c-1: 「古いもの」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

I期の明治時代の『建築雑誌』の中国観では、中国では古いものはいいけれども新しいものはだめだ、という実感が当時日本から中国に渡航した日本人からいくつか語られている。中でも伊東忠太は、支那建築の概説の中で、その歴史を四期に分類し、「要するに支那建築は遼遠なる古代に於て発生し、仏教渡来と共に急激なる発達を遂げ、唐初に於て其極致に到達し、宋以降漸次に墮落し来り、今日に至りては殆んど観るに足るもの無きに至りたり」(K023-3)と断じている。中国の最盛期は唐代であり、そのあとは転落の一方だということで、古いものにのみ賞賛を与えていることになる。昭和初期の「中国通」の第一人者として知られる言語学者で、後に日本大学で教鞭をとる後藤朝太郎は、伊東のこの記事と同じ頃の1913年に、『建築雑誌』に中国古代象形文字と建築の関係についての論文を発表している。「支那古代建築の研究には先秦(西紀二二一以前)の文字を研究するが便法である」(K033-1)と言い、表意文字である漢字と建築の関係を計5回にわたって連載している。後藤は長大な連載の末尾に「予め伊東博士、塚本博士、関野博士、及び園田工学士に相談をかけて、ヒントを得たことが少くない」とも述べ、自分の連載に伊東らの支持があったことを認めている。語学を学んで東大大学院に在籍中だった若手研究者が、建築学会の機関誌でこうした異色の論文を発表できたのは、伊東の、中国は古いものにのみ価値があるという価値観が強く反映していた⁶⁾と思われる。

一方III期初期の京都大学の西山卯三の中国観は、「古いものがない」社会が積極的にとらえられ、「古いもの」自体は否定的にとらえられている。国交正常化前の1960年に中国建築学会の招待で1カ月余り中国を視察したときの感想の中で西山は、「中国の人々は過去より現在と未来を問題にしている」(K086-1)といい、過去にとらわれていないで進歩していることをストレートに称賛している。西山はこのとき建国11周年の国慶節の式典にも参列し、中国全体が文革前の楽観的な進歩主義をうたっていた部分に目をひかれたのであろう。当時はまだ戦後15年で、記事の記述の中で西山は反日意識を気にしながらの渡航だったが、それを「軍国主義のせいであり日本人民のせいではない」という中

6) 明治期の文字学については以下を参照。山田利明『中国学の歩み—二十世紀のシノロジー』大修館書店、1999年、p100-102

国側の態度にうたれたようである。古いものを捨て未来志向の中国、という解釈を見つけている。

ただしこうした西山のような意識はわずかであり、国交正常化後の日本の建築界におけるこの論点についての反復中国観は、国交を回復したばかりでまだよくわからない中国に対して、そこに同時代の「新しい中国」よりも、今までの自分たちでイメージが可能な「古い中国」を見出そうとするに言説が見られる。芝浦工業大学の梅村魁は1975年に小堀鐸二、谷資信らとともに中国建築学会から耐震建築関係の専門家として招聘されて10日間訪中したとき、中国についての印象を「革命以後中国は新しい形に生れ変わりつつあると聞いていたが...科挙制度に根づく組織造りのうまさ、規模の雄大さ、人々の天性の器用さ、などはそのまま現在に生かされている」(K123-3)と言い、古くからの中国イメージを踏襲しているのがわかる。奈良国立文化財研究所平城京跡調査部長の鈴木嘉吉の、解放後の中国で考古学上の発見が相次ぎ、それが文物指定され保存されている様子をとらえた「詳細な数量や件名が発表されていないので全くの感想であるが我国の県や市町村段階と比べると、中国のほうが地方ごとの指定ははるかに進んでいるように思われる」(K126-1)という発言も同型である。日本建築史が専門の沢村仁は「新中国で発表された重要建造物」のうち南禅寺大殿について、「新旧の様式が共存し日本への影響が考えられる」(K098-1)と言い、京都大学の田中淡は、1981年当時発見された浙江省の遺跡における純木造建築が日本の古墳時代の埴輪家や銅鐸に描かれた高床倉庫と似ていることを「日本の古墳装飾にもつながる中国の木造建築の形式」(K133-1)というように論じているのは、中国建築の日本への影響を主張しているわけだが、同時に中国の「古さ」が発見されてくることへの期待というように理解できる。

IV期の広く3つの雑誌にまたがった中国観においては、中国の「古さ」に対して異なる態度が見られる。歴史の長い中国に対して古いものが残っているかもしれないという幻想、実際にそうした「古さ」が王朝交代や近代史のなかで多くを失われているという現実、などを前にして、日本建築界の中国観にもゆらぎが見られる。

古いものと新しいものが中国社会においてうまく関係をつくれていない、と、中国の「古いもの」への悲観的な見方を語る中国観には、パシフィックコンサルタンツインターナショナルの波多野哲次の開放政策と外資の流入で急変する北京についての言及「開発と保存の問題が重要な課題だ」(N035-3)、日建設の横谷英之の上海での3つの開発案件での経験について「市場経済へ移行しても、建築生産は既存システムが残存」(S055-1)などがある。実際に中国で開発案件を経験してきた実務家からの警鐘の意味合いもこもった中国観である。2005年に北京で開催された国際不動産見本市会議(MIPIM)に参加していたロシアの大手デベロッパーのチーフ・アーキテクト、ニコライ・レメンティエフは『日経アーキテクチャ』の取材に対して、「北京は一部の歴史的部分を公共の場としその他は一律」(N147-1)とコメントしているが、これも言うのも中国の急速に開発された都市が古い部分とうまくかみあっていないことを指摘し、北京の「古いもの」に対する否定的な見解が語られている。

一方で古いものが「残っている」という後進性を積極的にとらえた中国観もある。1985年の建築家の黒川紀章による、日新工業建築設計競技のアイデアコンペの審査員評においては、一等の中国人案について「従来、中国からの応募案には、伝統的な建築形態をそのまま模すものが多かったのに比べて、(この案では)たとえば天円地方説など、中国の宇宙観を現代建築の表現の中に封じ込めた点は高く評価したい」(S002-1)という発言があり、これは現代のコンペ案において中国の古い思想がうまく使われていることを引き合いに出して、中国の伝統思想を肯定的にとらえた中国観である。2000年の文化財保存計画協会の矢野和之による「日本と違い伝統工法が残っていて遺跡保存事業にも使える」(K186-1)は、トルファン盆地の交河故城の遺構保存の経験から、中国に残存している伝統的工法が保存に役立つという意見で、持続可能な視点にも立った中国の現実への新しい観点を提示している。これは、前述の鈴木嘉吉の70年代の中国の文物保存に対する理想主義的な中国観よりも現実的に即しつつ、かつ肯定的姿勢に立った中国観である。また、中国内での古い歴史を保存してゆこうという動きとして、日建設インターナショナルで上海新天地の計画にかかわった青沼克明の『『保存も利益に結びつく』と、中国のデベロッパーの意識が変わった」(N102-1)という中国

観や、早稲田大学の古谷誠章が2001年に自分の参加した上海の都市計画のコンペの当選案が全く敷地のコンテクストを考慮していないものになったのを評して、「当時の中国は「発展」や「刷新」に食欲だった。アイデンティティを生かそうとする動きはつい最近」(N191-1)という中国観を挙げることもできる。オランダの建築家レム・コールハースも「美德のある独自のシステムを維持しつつ、新しいものと融合」(N113-1)と言い、「独自のシステム」という言い方で古いものの存在を認め、その存在を積極的に評価している。CCTVのコンペで勝利し北京で仕事をするようになった彼は、北京には古いものの蓄積があり「予想以上に組織立てられた」都市であるとも発言している。

「古いものがない」新しい中国を積極的に読み解こうとしているものもある。建築家の山本理顕は、自らが設計した北京の巨大開発物件「建外 SOHO」の設計を振り返って、「建築家にとってはまったく新しい真っ白な紙に自由に絵を描くようなものである。つまり周辺環境の関係など何も考える必要がない。もちろん歴史にも脅迫されない。真っ白な紙の上に歴史の蓄積はないからである。環境と歴史から強制されない、ということは、それは外的な制約がないということである。...唯一、建築家の内側の問題、つまり建築家の固有性だけが問われるような構図になってしまっているのである。...多くの建築家にとって中国が魅力的なのはまさにその一点にあるように思うのである」(S110-1)という中国観を残している。中国の当時の都市開発の方法が、今までの都市環境を全くつくり直すところから始めるので環境や歴史といった既存のコンテクスト・古いものに拘束されない状況がある、とし、そうした中国ならではの可能な建築設計のあり方を、中国的状況とあわせて肯定的にとらえているものである。同じ号の論評で、渡辺真理らの言う「ここでは前例のなさが必要でも否定的な意味をもたないように見える」(S111-1)というのも同じ文脈の上にあると言えるだろう。こうした言説では結果として、積極的にではないにせよ、古いものは否定的なものとして押しやられる対象になる。Ⅲ期の西山の中国観とも似た状況と言える。

また、古いものの残存を、ややノスタルジックな視点から眺めた中国観として、大阪の建築家稲村純による、中国東北地方を旅行したときの経験から得た「中国東北地方には日本人による多くの建物が今も活用されている」(N005-1)や、鹿児島大学の土田光義による「現在でも日本には少なくなった石造アーチ橋を造っている」(K165-1)がある。後者は、鹿児島で石橋の保存運動をしている土田が、日本では技術がすたれて橋を作れる石工がいらないのに対して、中国ではまだ造られていることを中国の旅先で目にして、それをコラムで紹介しているものである。

25	否定的(7)	中立的(6)	肯定的(12)
I (2)			
II (0)			
III (6)			
IV (17)			

図 3.1.c.-1: 「古いもの」論点における中国観の時期-論調散布図

古いものが中国には意外と残っていない、ということをきちんと指摘したのは、ずいぶん後になってのことである。

2006年に田中淡は、「今の方が中国の古建築保存の状態はよくない」とし、「中国は4、5千年の歴史が継続した、とても古い文明ですが、実物の建築については比較的新しいものが残っているにすぎません」(K222-1)と看破している。文化大革命以後の中国観から脱却した、理想主義的な中国観より一步冷静になったものであると言える。

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.c.-1 のようになる。「古いもの」の論点においては、20 世紀初頭から中国観の分布が見られかつ一貫してそこには肯定的な論調が見られるが、1980 年代後半以降は否定的な論調の中国観が増加し、両者は混在しつつも数の上では否定的な論調が肯定的なそれをしのぐまでになっている。

d)大きい多い: 19 中国観

「大きい多い」に関する中国観は、『建築雑誌』では4期すべてにわたって見られるが、Ⅱ期のみ4編と集中しており、あとは1編ずつである。Ⅳ期の『新建築』、『日経アーキテクチャ』にも多数見られる。中国は大きすぎる多すぎるというニュアンスで否定的に語られる場合と、中国の大きい多いことに可能性があるという、はっきり相反する中国観がどの時期にも分布している。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表3.1.d-1)を示す。

建築雑誌(7)		新建築(5)	日経アーキテクチャ(7)
Ⅰ (1)	支那人の言は日本でも同じでいつでも誇大すぎる	-	
	K015-1-Ⅰ 伊東忠太 1907年		
Ⅱ (4)	支那は土地が広すぎ二つ三つに分けた方が自然的帰趨に合う	-	
	K052-1-Ⅱ 柴山兼四郎 1933年		
	満洲の民間建設は沢山出来なければならぬ	±	
	K053-1-Ⅱ 佐野利器 1933年		
	満洲では煉瓦造が無数に建っている	±	
Ⅲ (1)	K066-1-Ⅱ 室井修 1939年		
	支那大陸における諸勢力を象徴する建築は雑多多彩	+	
Ⅳ (13)	K073-1-Ⅱ 佐藤武夫 1942年		
	中国から長年受けている感化は他のどの外国より大きい	+	
	K112-1-Ⅲ 市浦健 1976年		
	非常に大きな、これからの根源的なパワーがある	+	近代化の最先端を担うべく、上海は大規模な変革に向かっていく
	K145-2-Ⅳ 尾島俊雄 1985年		N049-1-Ⅳ 笹原正次 1995年
		広大さが単なる自然の連続ではなくそこに歴史の密度を感じざるを得ない	+
		S007-1-Ⅳ 相田武文 1985年	
		カーテンウォールの高層建築に伝統的屋根の安易な作品が多い	-
		S021-1-Ⅳ 黒川紀章 1991年	今の日本ではない、大スケールで構造的な洗練が志向される
		中国では四合院の伝統があり、大きさは特別なことではないようだ	N096-2-Ⅳ 川口衛 2003年
		S108-1-Ⅳ 山本理顕 2004年	北京ではヒューマンスケールの街づくりが忘れられている
		現在市場経済の初期段階にあるので小規模な会社が沢山あり	N147-2-Ⅳ アントニオ・オーチャ 2005年
		S111-2-Ⅳ 張欣 2004年	規模の大きな仕事は中国の方が向いている
		中国のプロジェクトは総じてスケールが大きい	N161-1-Ⅳ 石山修武 2007年
		S148-2-Ⅳ 迫慶一郎 2006年	中国では莫大な数の開発行為が行われています
			N163-1-Ⅳ 迫慶一郎 2007年
			経済的な急成長で日本に比べ設計のチャンスが多い
			N165-1-Ⅳ 東英樹 2007年
			何でもかき！
			N173-1-Ⅳ モサキ／田中元子＋大西正紀 2007年
			±

表 3.1.d-1: 「大きい多い」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

「大きい多い」を「大きすぎる多すぎる」、という否定的に読み替えている見方から見てゆこう。伊東忠太のここでの否定的な中国観は、自らが峨眉山に登山する前に知県(地元の役人)を訪ねたときに感じた印象を述べたものである。知県は今の時期山頂は寒いから十分な防寒をしろなどさまざまな助言を伊東にするのだが、自分はそれが大げさだと知っていたので特に旅装を変えず登山し問題がなかったという経験について、伊東は「支那人の言はいつでも誇大に過ぎて居る」(K015-1)という言葉を残している。この時期の伊東忠太はさまざまな部分について、中国社会全体に否定的な印象を吐露しており、ここで言う「話が大きすぎる」というのもその1つである。1933年8月21日の建築学会大会において参謀本部支部班長陸軍中佐の柴山兼四郎は講演「最近の支那事情」を行い、この中で彼は「統一すべく余りに支那は土地が広過ぎる…矢張り二つ三つに分かれた主権が分立して居ると云ふことが、自然的帰趨に適つたのぢやないかと云ふやうな気がするのであります」(N052-1)と発言し、その地理的大きさを批判している。1991年に黒川紀章は、「いま中国やイスラム世界で実現している現代建築には、カーテンウォールの高層建築に伝統的な屋根を直接のせるという安易な作品が多く見られる」(S021-1)と述べ安直な中国現代建築の多さを、2005年にはベネズエラ出身の建築家アントニオ・オーチャが、北京で働く外国人建築家として「北京には…ヒューマンスケールの街づくりが忘れられている」(N147-2)と述べてその大きすぎるスケールをそれぞれ批判している。

一方で「大きい多い」を積極的にとらえる視点もある。1942年に建築家の佐藤武夫は中国大陸を視察し、「喫緊の問題たる南方方策に参考となるところがあれば倖だと考へ」て、「支那大陸に於ける外国建築とその政治表現」について、イギリス、フランス、帝政ロシア、ドイツ、アメリカ、日本それぞれの主体が建てた建築を紹介している。そこで佐藤は「凡そ支那大陸ほど過去に於て諸外国の勢力が角逐したところは史上にもめづらしく、従つてそこに建てられた諸勢力の象徴とも言ふべき建築の雑多にして多彩を極めることも一つの偉観ともうすことが出来やう」(K073-1)とその種類の多さを肯定的に紹介している。早稲田大学の尾島俊雄は「これからわが国はどうなるんだというときに、中国のマーケットを考へておかないと、将来はありえないのではないか。あそこに非常に大きな、これからの根源的なパワーがあつて」

(K145-2)と留保なしで中国の大きさに将来性を見出し、1985年に相田武文は「中国もその広さには圧倒されます。…その広大さが単なる自然の連続といったものではなく、そこに歴史の密度を感じざるを得ないのです」(S007-2)といささか感傷的になりながらも中国の大きさを称賛している。2007年に石山修武は「規模の大きな仕事は日本ではなく中国の方が向いている」(N161-1)と言い、2007年に上海ベースの日本人建築家東英樹は「日本の設計者はほとんど海外に出てきてほしい…中国のように経済的に急成長している国では、日本に比べて圧倒的に設計のチャンスが多いからだ」(N165-1)と言っている。これら建築家の中国観は、プロジェクトを実践する場として中国の「大きい多い」を肯定的にとらえているものである。

このほかに、「大きい多い」という論点に関しては、肯定否定の判断を加えない報告調の中国観も少なくない。東京大学の佐野利器は1933年に建築学会で満洲の国都建設について講演した。実際自分は少し助言しただけにすぎない国都の設計について紹介した後に、「唯建築が非常に沢山出来なければならぬと云ふことだけは確かであります」としめくくっている(K053-1)。満洲国司法部所属の室井修は1939年により多くの建設を促すために、中国東北部における煉瓦造建築の再検討を行った。そこでは日本は関東大震災以降鉄筋コンクリート造が普及し煉瓦造を放棄しているのに対し、「満洲では煉瓦造が内地の様に肩身の狭い思ひをする事無く無数に建って居る」(K066-1)と主張し、煉瓦造への関心を高めるよう『建築雑誌』の誌面で主張している。北京のデベロッパー社長の張欣は2004年に自社の開発物件建外 SOHO の建設を振り返って「中国は現在、市場経済の初期段階にあるので小規模な会社が沢山あります。従業員20人以下の小規模事務所のメンタリティと SOHO の考え方が呼応したわけです」(S111-2)と言い、北京ベースの日本人建築家迫慶一郎は2007年に「中国では国中で莫大な数の開発行為が行われています」(N163-1)と書いている。これら報告調の「大きい多い」に関する中国観は、戦前戦後を通して見られることがわかる。









19	否定的(4)	中立的(9)	肯定的(6)
I (1)			
II (4)			
III (1)			
IV (13)			

図 3.1.d.-1: 「大きい多い」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.d.-1 のようになる。「大きい多い」の論点における中国観には、否定だけのⅠ期、肯定だけのⅢ期の間に、肯定否定が混在したⅡ期とⅣ期があることがわかる。

e)スピード: 16 中国観

「スピード」に関する中国観は、『建築雑誌』ではⅠ・Ⅱ期に分布が見られず最初の中国観はⅢ期の1960年代であり、Ⅳ期には3誌とも広く中国観が分布している。この論点の中国に対する態度は、ほぼ肯定的か客観記述的なものになっている。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表3.1.e.-1)を示す。

	建築雑誌(7)		新建築(4)		日経アーキテクチュア(5)	
I (0)						
II (0)						
III (1)	遺跡発掘は日本より中国の方が速い K087-1-Ⅱ 平井聖 1962年	+				
IV (16)	日本60年代と似たスピード重視の都市計画 K138-1-Ⅲ 石東直子 1985年	±	上海は今ものすごいスピードとエネルギーが渦巻いている S142-1-Ⅳ 鈴野浩一＋禰真哉 2006年	±	環境問題を確実に内包しながらも、北京は加速度的に成長 N035-1-Ⅳ 波多野哲次 1993年	±
	これから外国に追いつくスピードは速い K147-3-Ⅳ 日本の匿名建設実務者 1985年	±	日本の失われた10年とは対照的に、中国には加速された10年 S148-1-Ⅳ 迫慶一郎 2006年	+	世界に例を見ないスピードだ N104-1-Ⅳ 山本隆 2003年	+
	設計スピードが速く考える暇がない狂乱状態 K194-2-Ⅳ 磯崎新 2003年	±	日本で30年かかった変化が3年でなされている感じでもあり S165-1-Ⅳ 磯崎新 2008年	+	中国ではハイペースで経験が積める N123-2-Ⅳ 編集部 2004年	+
	複雑な急ごしらえのイメージは急速に薄れていくだろう K214-3-Ⅳ 松原弘典 2006年	+	驚異的な建設期間の短縮は、まさに現代中国のスピード感を表徴 S169-1-Ⅳ 進藤憲治 2008年	+	スピード重視で、生産行為に終始し研究行為が少ない N136-1-Ⅳ 許義興 2004年	-
	中華系の人たちは決断や行動が速い K220-1-Ⅳ 梶原文生 2006年	+			デザインは討論していたら中国では間に合わない N153-1-Ⅳ 編集部 2006年	±
	日本にはない速度での変化 K224-1-Ⅳ 松原弘典 2006年	±				

表 3.1.e.-1: 「スピード」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

分布はⅢ期以降なので比較的新しい論点と言える。初期の中国観の2つをまず見てみよう。1962年には当時東京工業大学の助手だった平井聖が、『建築雑誌』において中国の『考古学報』を文献抄録の形で紹介し、建国後10年たって重要文化財の指定を行った中国の遺跡発掘の状況について「遺跡発掘は日本より中国のほうが速い」(K087-1)とそのスピードを称賛している。このあとの文化大革命で中国では多くの遺跡が破壊されるのは皮肉なものであるが、唐の長安の発掘が完了したという外電を見た平井が、「我国における唐長安城を模した奈良の平城京跡の発掘が、国柄が異なるとはいえ、奈良国立文化財研究所の方々の努力にもかかわらず遅々として進まないのははなはだ遺憾なことである」と言っているのは、新しい国として再生した共産中国に、日本と違う可能性を見出し、かつ歴史のある国であるがゆえに考古学的な発展もこれから進むに違いないという、中国の古さに正統性を見込もうとする中国観が見られる。

もう1つは、都市計画プランナーの石東直子が1985年に天津大学で講義をしたときの印象的中国観である。建設ブームに沸くスピード重視の中国の大学で求められている学問が「日本60年代と似たスピード重視の都市計画」(K138-1)であり、そうした状況が「我が国の1960年前後のそれと似ているような気がする」と石東は言う。平井、石東ともに、「スピード」についての中国観はつねに日本との比較の中で、中国のスピードの優位を肯定的に述べていることになる。なお、中国の成長ぶりが日本の高度経済成長期と似ているというこの石東の中国観は、「スピード」の論点とは外れるが、同年の建築研究所所属の渡辺俊一による「中国におけるこのような改革への動向は、公共セクターはとかく非効率に陥りやすいという「政府の失敗」の観点から、行財政改革を進めているわが国の場合とも、一脈通じたものがあり」(K142-1)や、2003年の構造設計家の川口衛による「僕らが若いころ、東京オリンピックや大阪万博に浸食を忘れて取り組んでいたときのような面白さが、今の中国にはある」(N096-1)などの中国観でも言及されているものである。

他のⅣ期の「スピード」論点における中国観は、3つの建築メディアに広く多く見られるものであるが、ここでも日本より中国の方がスピードがあるという論旨の展開が多く見られる。『建築雑誌』での筆者の「現在かの地でわれわれの隣人が直面しているのは、今の日本にただでは実感しづらい規模や速度のグローバリゼーション、アーバンゼーション」(K224-1)、『新建築』での迫慶一郎の「日本の「失われた10年」とは対照的に、中国には「加速された10年」とでも言えるような希望と欲望が満ち溢れている」(S148-1)や磯崎新の「日本で30年かかった変化が3年でなされている感じでもあり」(S163-1)、『日経アーキテクチュア』では前田建設工業で三峡ダム的高速施工計画業務を受託している現場

所長の山本隆が「同規模の本格的なダムを日本で施工する場合は5-7年ほどかかる...世界に例を見ないスピードだ」(N104-1)などがこれに相当する。

また、こうした中国観の中には、スピードが速いということを肯定的にとらえつつ、速すぎることに疑問を投げかける中国観も見られる。1993年には波多野哲次が「大気汚染、騒音等の環境問題を確実に内包しながらも、今、「北京」は加速度的に成長している」(N035-1)という中国観を提示しているが、これは波多野が黒川紀章建築都市設計事務所勤務時に北京で日中交流センターを担当し、北京の現状をよく知った上で、成長のスピードを認めつつもそのスピードがゆえに北京のインフラ整備や都市遺産保存についての対応が間に合っていないことを指摘しての発言である。もう少し後になるとこの肯定否定のないまぜになった論調は別の形になって出てくる。2003年に建築家の磯崎新の言う「設計スピードが速く考える暇がない狂乱状態」(K194-2)、2006年に上海を拠点とする日本人建築家東英樹の言う「デザインは討論していたら中国では間に合わない」(N153-1)などがそれに相当する。90年代の波多野の中国観が成長のスピードを文字通り憂慮しているのに対し、2000年代のこれら2つの中国観は、ややアイロニカルに中国の設計ビジネスの状況をやり玉に挙げている。単なる肯定でも否定でもなく、磯崎は狂乱状態という形でスピードを揶揄しながらもビジネスの活況に触れ、東は討論できないくらい急いでいることにビジネスチャンスの豊富さを暗示しているわけである。そこにはすなわち、批判的、否定的な視線に加えて、日本と比較して活発な中国のビジネス環境に対する羨望的、肯定的な視線も混ざっているように思われる。

中国社会のもつ「スピード」に対してははっきりと否定的な論調が出ているのは2004年の『日経アーキテクチャ』における許義興のコメント「スピード重視で、生産行為に終始し研究行為が少ない」(N136-1)だけである。これは2004年秋に北京で開催された中国国際建築芸術展を日本のライターが取材した記事の中に、北京在住の建築家として許のコメントとして紹介されているテキストである。

16	否定的(1)	中立的(7)	肯定的(8)
I (0)			
II (0)			
III (1)			
IV (15)			

図 3.1.e-1: 「スピード」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.e-1 のようになる。「スピード」の論点は、比較的新しく1985年以降に見られ、そのほとんどが日本との比較の上で語られており、ほとんどが肯定的な論調で記述されていることが明らかになった。

f)ものづくりへの態度: 14 中国観

「ものづくりへの態度」に関する中国観は、『建築雑誌』ではⅠ期とⅢ期に分布が見られず、Ⅳ期では3誌とも分布が見られるが『新建築』に偏って分布している。この論点の中国に対する態度はすべて肯定的なものになっている。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表3.1.f.-1)を示す。

建築雑誌(3)		新建築(9)		日経アーキテクチュア(2)		
I (0)						
II (2)	満洲で働く青年建築家には日本代表の自負がある	+				
	K065-1-II 桑原英治 1939年					
	支那の造形をよく知る日本の建築家こそ支那の造形に魂を吹き込む	+				
III (0)	K074-1-II 小池新二 1942年					
IV (12)	中国では周辺状況より自分が何をつくるかが一番大切	+	ここは世界に類例のない都市計画実験をしているのではない	+	日本では高価でできないつくり方を中国では大規模なスケールで実現	+
	K214-1-IV 迫慶一郎 2006年		S049-1-IV 渡辺豊和 2000年		N123-1-IV 迫慶一郎 2004年	
			「とにかくトライしてみる」の精神である		日本ではできないことがすべて実現できるような気がした	+
			S065-1-IV 迫慶一郎 2002年	+	N181-1-IV 石山修武 2008年	
			建築家としてのエッセンシャルな部分では本当に手応えがある			
			S086-1-IV 小嶋一浩 2003年	+		
			あらゆることが決定不能中での可能性に向けて突っ走っている			
			S109-1-IV 小嶋一浩 2004年	+		
			外的な制約がないので多くの外国建築家にとって魅力的			
			S110-1-IV 山本理顕 2004年	+		
			ここでは前例のなさが必ずしも否定的な意味をもたないように見える			
			S111-1-IV 渡辺真理+木下庸子 2004年	+		
			中国の都市開発は「そこに何をにつくりたいか」で始まるから単純で容易			
			S135-2-IV 岡本賢 2005年	+		
			中国的状況とは設計者個人の力が試される場である			
			S135-3-IV 岡本賢 2005年	+		
			日本で無理なシステムは、中国ではどこにもないからやりましようとなる			
			S154-1-IV 仙田満 2006年	+		

表 3.1.f.-1: 「ものづくりへの態度」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

Ⅱ期の「ものづくりへの態度」に関する2つの中国観は、中国のそれまでであったものづくりとは関係なく、日本人がそこで新しいものづくりを実行するのだ、といういささか勇ましい論調で覆われている。満洲国営繕需品局営繕処長の桑原英治は1939年に建築学会で講演を行い、建設関係者の満洲への進出を促しつつ、「我々満洲で働いて居る青年建築家は、日本では職が無いからとか、或は満洲へ行けば収入が良くなるからとかさういふけちな考でなく、我々は日本から選ばれた処の選手の積りで居ります。又それだけの自負心を持って働いて居るのであります」(K065-1)と述べ、満洲で働く建設関係者が一種の自負心をもちながらものづくりに関わっていると主張している。桑原にとってここ満洲＝中国東北部は、日本人が思う存分能力を発揮できる場所として肯定的に捉えられている。

商工省工芸指導所の小池新二は、興亜院の委嘱を受けて1942年初頭に80日ほど華北華中地方を視察し中国の工芸事情についての報告を『建築雑誌』に掲載している。そこで小池は、目にした紙傘や筆などの中国各地のローカルなものづくりの状況を紹介し、それらは「土から生まれた支那の亡びた造形」とされ、それを作り直すのが日本人だと結論づけている。「土」から生れた支那文化の根強い力は「亡びた造形」であり、「此の図太い造形の伝統に新しい精神と技術によつて魂を吹き込むこと」は「支那の造形の価値を何人よりも最もよく知っている日本の建築家こそ、その適任者なのだ」(K074-1)と言う。小池のこの記事は、中国の後進性を指摘し日本と中国を対比的に語りながら、日本人が能力を発揮できる動機や場所を見つけることを正当化しようとする態度が見られる。

一方Ⅳ期では、3つの建築メディアとも、日本人が具体的に中国での設計建設ビジネスに関われるようになった2000年以降、「ものづくりへの態度」に言及した中国観が見られる。中国のものづくりは自由度が高いと説き、なかにはそれが世界的にもまれに見るものなのではないかと持ち上げる、中国に対する肯定的な論調も見られる。渡辺豊和の上海旅行時の印象は、「瞬間、私は上海の急激な変貌を知った。ここは世界に類例のない都市計画実験をしているのではないかとまず思った。この思いは翌日さらに確信へと変わった」(S049-1)や、迫慶一郎の「日本ではお金がかかってできないようなつくり方を、中国では大規模なスケールで実現できる。中国で建築をつくるだいたい味の一つだ」(N123-1)などがそれに相当する。

同時にⅣ期には、Ⅱ期とは違う「ものづくりへの態度」を定義する新しい比較軸が登場する。Ⅱ期では「日本と中国」という国家間の比較軸の中で日本のものづくりへの優位性と中国の後進性が語られていたが、Ⅳ期には「自分と周囲」という比較軸を立てて、実は中国の建築プロジェクトは個人の自由度が高いのではないかという中国観が見られるようになるのである。例えば2004年山本理顕はこう言う、「実際、ここでは、今までそこに住んでいた人たちの生活はあっという間にクリアランスされる・・・今までの環境そのものが消失してしまうのだから。建築家にとってはまったく新しい真っ白な紙に自由に絵を描くようなものである・・・それは外的な制約がないということである」(S110-1)、迫慶一郎は、「日本では周囲の状況などからさまざまな制約を受けますが、中国はそうではありません。自分が何をつくるかが一番大切で大きなことなのです」(N214-1)と言い、久米設計社長の岡本賢は「中国的状況とは設計者個人の力が試される場であると感じます」(S135-3)と言っている。これらは経済成長優先の中国社会が結果的に外国人の参入を歓迎し、しかも急速な成長の中で回りには参照すべきコンテキストなどない状況があり、そこで外国人設計者は自己を出すことが求められているという状況が肯定的に描きだされている。

こうした中国観は、日本の成熟・安定しているはずのものづくりの現場が、個人を抑圧し、新しいアイデアの登場を妨げていると考える、日本の状況への設計者の行き詰まり感への裏返しともとれる。例えば渡辺真理+木下庸子は北京のデベロッパーにインタビューをして日中の状況を比較した上で、「ここでは前例のなさが必ずしも否定的な意味をもたないように見える」(S111-1)と言い、仙田満は自身の設計した上海のテニスセンターのプロジェクトを振り返って「日本ではこのシステムは多分実現できなかっただろう。日本なら「どこかこのシステムでやった実績はありますか」と審査員は聞くだろう。中国では「どこにもないですよ、やりましょう」と言う。この差は日本の建築家・技術者である私たちにとっても考えなければならぬ大きな問題だ」(S154-1)と述べている。これらは日本の前例主義、実績主義がものづくりを硬直化しているという事実を念頭に置いたうえで、中国でのものづくりに可能性を見だしている発言である。

14	否定的(0)	中立的(0)	肯定的(14)
I (0)			
II (2)			
III (0)			
IV (12)			

図 3.1.f.-1: 「ものづくりへの態度」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.f.-1 のようになる。「ものづくりへの態度」は、時期にムラがあるとは言え、戦前から中国観の分布する昔からある論点であり、そこでの中国観は一貫して中国を肯定的に語っている。また、建築家の創作論的な記述が多いためにメディアの上では『新建築』への集中が目立つことがわかった。

g)将来の変化: 12 中国観

「将来の変化」に関する中国観は、『建築雑誌』ではⅠ・Ⅱ期に分布が見られず、Ⅳ期では3誌とも分布が見られる。戦後に出てきた比較的新しい反復する論点であり、肯定的態度で書かれているものが多い。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表 3.1.g.-1)を示す。

建築雑誌(5)		新建築(3)		日経アーキテクチュア(4)	
I (0)					
II (0)					
III (1)	中国の人々は過去より現在と未来を問題にしている K086-1-Ⅱ 西山卯三 1961年	±			
IV (11)	中国は眠れる獅子だがいつか目覚めるときがくる K137-2-Ⅲ 尾島俊雄 1985年	+	数世紀前に影響を受けた日本建築は、再び中国の影響を受けるかも S006-1-Ⅳ 相田武文 1985年	±	2010年ころには中国が“アジアのUSA”になる N043-4-Ⅳ 藤田一憲 1994年
	これから外国に追いつくスピードは速い K147-3-Ⅳ 日本の著名建設実務者 1985年	+	眠れる獅子は世界的な古典建築を持つが、世界的な建築家はまだいない S016-1-Ⅳ 張在元 1989年	-	近代化の最先端を担うべく、上海は大規模な変革に向かっている N049-1-Ⅳ 笹原正次 1995年
	まとめる人が出てくるんじゃないか K194-1-Ⅳ 磯崎新 2003年	±	外国資本に市場を開放した成果は着実に実を結びつつある S055-2-Ⅳ 横谷英之 2002年	+	中国の「輸出」が始まる N160-1-Ⅳ 迫慶一郎 2007年
	粗雑な急ごしらえのイメージは急速に薄れていくだろう K214-3-Ⅳ 松原弘典 2006年	+			±
					+
					+

表 3.1.g.-1: 「将来の変化」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

1985年の尾島俊雄の「日本国家が常に恐れてきた隣国の中国は常に眠れる獅子であった。しかし、いつか眠りから目ざめる時がくるであろう。その時の備えをし続けていることが日本国民の歴史的教えでもあった」(K137-1)といった中国観は、限定的な条件の中で賓客待遇での渡中時に書かれた「理想化された」中国観であるとはいえ、かなり早い段階で中国に将来の可能性を見出した、肯定的な姿勢で書かれた記事である。

ビジネスの上での日中関係が盛んになってきた90年代以降、各メディアの中国観は、改革開放政策で急速に変化する中国により具体的な未来を見ようとしている。1994年に日本の中堅ゼネコンであるフジタの藤田一憲社長は「私は、2010年ころには中国が“アジアのUSA”になると確信している」(N043-4)と、2006年に松原弘典は「中国では粗雑なものを急ごしらえでやっているだけだ」という印象…は急速に薄れていくのではないかと」(K214-3)とっており、これらがそうした中国観に該当するだろう。1995年に観光企画設計社勤務で海外プロジェクト担当の笹原正次は「中国近代化の最先端を担うべく、上海は大規模な変革に向かってひた走っている」(N049-1)と言い、2008年にNA編集部の五輪後の北京評は「中国の設計者は急速にデザイン力を付けている。建設会社の施工精度は数年前に比べると上がり、単調だったデベロッパーの開発手法にも変化の兆しが見られる。北京が本当の意味で変わるのはこれからだ」(N187-1)となっており、これらは中国東部の大都市について、その個別に将来像を楽観視する中国観である。

これらに対して以下の3つは将来の変化への期待が待望論と脅威論と両刃の関係にあることを示している。1985年に相田武文は上海の同済大学を訪れ、学生の課題の質がまだ古くさいことを指摘しつつ、「現在の国家体制では量が第一議だと思うのですが、将来、中国においても質やデザインの問題が必ずクローズアップされてくるに違いありません」とし、「その時、日本はどうなっているのでしょうか。数世紀前に、中国から影響を受けたわが国の建築は、再びその影響を受けることになるかもしれません」(S006-1)と予言めいた中国観を残している。また2003年に磯崎新は、日本の建築や都市は折衷的にできていて極端に言えば分裂しているのに対し、現代の中国建築界では建築がすさまじいスピードで作られているのを念頭に「まとめる人がでてくるんじゃないか」(K194-1)と言っている。2007年に迫慶一郎は「中国の「輸出」が始まる」(N160-1)とし、世界の最先端デザインを輸入してきている中国がこのまま輸入だけで満足するはずはなく「建設ラッシュに沸く中東に、自分たちのデザインの「輸出」を始めたようです」という中国観を残している。相田、磯崎、迫のこうした予言的な中国観は、中国の将来の変化に期待する論調に傾きつつも、同時にそうした中国のパワーがすこし見方を変えれば日本や第三国にとって脅威になりかねないような観点を提起している。

また、この論点ではいくつかの中国観において中国を説明するのに「眠れる獅子」という言葉が出てくる。哲学研究者の忻剣飛によれば、この句は19世紀初頭にナポレオンが中国を評したときの言説から生まれたもので、海外からの

中国観においてしばしば姿を見せるという⁷⁾。既述の1985年尾島の中国観(K137-2)で使われている以外に、武漢大学建築系助教授で当時東京大学の楨研究室に研究員として移ったばかりの張在元が1989年にこう書いている、「ナポレオンは次のような言葉を残している。“中国は眠っている獅子だが、いったん目覚めると、その声は世界を揺るがすだろう”。しかし長い間、世界に中国建築家の声がまったく聞こえてこなかった。中国は世界的に有名な古典建築を持っているが、世界に知名度の高い建築家がまだいない」(S016-1)。なお、この「眠れる獅子」という語は、「黄禍論」とあわせていわゆる19世紀の末から欧米において黄色人種差別用語として使われることも多かったが、日本の建築界においては、尾島は肯定的な中国観を説明するために、張は否定的な中国観を説明するためにそれぞれ用いている。

12	否定的(1)	中立的(4)	肯定的(7)
I (0)			
II (0)			
III (1)			
IV (11)			

図 3.1.g-1: 「将来の変化」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.g-1 のようになる。「将来の変化」の論点における中国観は、ほとんどが1980年代後半以降に見られ、しかも肯定的論調を帯びているものである。

7) 忻剣飛『世界的中国観—近二千年来世界对中国的認識史綱』学林出版社、1991年、p319-320参照。ここで忻はこの「睡獅(あるいは醒獅)論」をいわゆる「黄禍論(19世紀半ばから20世紀にかけて白人国家において語られた人種差別的黄色人種脅威論)」とあわせて海外からの中国観を比較している。「睡獅論」について忻は「中国が眠っていると欺くものは中国を凌辱し、中国が目覚めると恐れるものは中国を無視し、中国が眠っていると憂慮するものは中国を目覚めさせようとし、中国がまさに目覚めようとするのを看ているものは中国を研究する」として、中国に対する様々な見方をこの言葉に言及している外国人の言説を例に挙げてその立ち位置を検討している。

h)施工精度: 10 中国観

「施工精度」に関する中国観は、『建築雑誌』ではⅡ・Ⅳ期に分布が見られず、Ⅳ期の『新建築』と『日経アーキテクチュア』にはそれぞれ中国観が分布している。古くからある論点で、肯定的否定的双方の立場からの視点があるものと言える。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表 3.1.h.-1)を示す。

	建築雑誌(4)		新建築(3)		日経アーキテクチュア(3)	
I (2)	満洲の建築装飾は仕上げが甚だ不手際 K017-1-I 大江新太郎 1907年	-				
	満洲建築の石瓦技術は、概して非常に優秀卓抜 K024-1-I 大江新太郎 1908年	+				
II (0)						
III (2)	日本のような工業材料はないがスミズミまで丁寧に作られた建築 K086-2-II 西山卯三 1961年	+				
	古建築修理工事の技術的内容は日本の方が細かい K126-2-III 鈴木嘉吉 1976年	-				
IV (6)			仕上げは今ひとつながら人海戦術による現代建築の建設がある S013-1-IV あべ木勇 1987年	-	中国の施工精度では良いものがない、とは思わない方がいい	+
			ものすごい建設ラッシュだが日本人の眼からみれば施工精度は今一歩 S022-1-IV 相田武文 1993年	-	特注品づくりは失敗すると痛い、中国で設計する面白さだ	±
			派手を好む一方で洗練された詳細には関心を示さない国民性 S064-1-IV 佐藤尚巳 2002年	±	N125-2-IV 松原弘典 2004年	
					日本の生産技術や管理技術が伝わり、品質的にも安心	+
					N145-1-IV 鈴木弘樹 2005年	

表 3.1.h.-1: 「施工精度」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

明治の建築家大江新太郎は、内務省技師の時代に末期の清国を2カ月ほど視察し、満洲建築の装飾について肯定しつつ否定もするという、二面的な評価を残している。「色々と装飾的の細工をやつて居りますけれども総て仕上げが甚だ不潔であります即ち不手際であります」(K017-1)と言い、全体として管理が悪いからうまくいっていない＝不手際である、として否定的な評価を下しつつも、「石材瓦材両者共に、其技術は、概して非常に優秀卓抜でありまして、意匠の繁簡、高低凹凸の緩急が実に其当を得て居ります」(K024-1)というように、石工事や瓦工事のような「部分の技術」はすぐれているといい、全体と部分を分けて評価を下している。

Ⅲ期でもこの論点は評価が分かれている。肯定的な中国観を残しているのは京都大学の西山卯三であり、1959年10月の建国10周年を記念して建設された十大建築を見た印象から「日本の現代建築のように目新しいプラスチックだとかその他の工業材料がつかわれているというわけではない。しかしその工事はスミズミまで非常に入念にされていて、手ぬきなど全然感じされないキチウメンさが注目をひいた」(K086-2)と言い、その施工の「丁寧さ」を称賛している。一方否定的なのは奈良国立文化財研究所平城宮跡調査部長で遺跡保存が専門の鈴木嘉吉であり、山西省五台の南禅寺の修復工事を実見し、「この工事の直截な技術指導までは、中央では行わなかったらしい。このへんは、日本の古建築修理工事のほうがキメこまかく技術的チェックをしているように思える」(K126-2)としてその精度の低さを指摘している。

Ⅳ期以降では、80-90年代にこの論点に言及している『新建築』では否定的な、2000年代に入って言及のある『日経アーキテクチュア』では肯定的な論調がそれぞれ主流になっている。『新建築』では1987年のあべ木勇の中国観も1993年の相田武文のそれも、実際に中国に足を運んで建築を見た上でその施工の粗さに対して否定的な見解を述べている。また建築家の佐藤尚巳は、自身が中国南通市に設計した日本企業社屋、南通英瑞会館の建設を振り返って2002年に「派手で目立つ建築を好む一方で、洗練された詳細や高品質な仕上げといったことにはあまり関心を示さない国民性がある」と述べ、精度の高さを要求しても「高価な投資や努力のわりには期待するような成果が現れにくい」(S064-1)という理解を述べている。これは施工精度の高さを否定的にとらえるというよりは、そもそも精度を上げるところに動機がない中国の状況を観察した報告的中国観だが、もうすこし後の中国観になると、これらとは対照的に中国側の施工レベルがもはや施工精度を気にしなくていいレベルまで高くなってきていることを指摘する論調も見られる。『日経アーキテクチュア』において山本理顕は建外SOHOの建設を振り返って2004年に「中国の施工精度では良いものがない、とは思わない方がいい。現地に事務所をつくる勢いで相手と付き合えば、彼らを動かして質の高いものが

できる」(N124-1)と言っている。栗生総合計画事務所の日本橋弥生ビル担当者である鈴木弘樹は、エントランス周りの白御影石を石材メーカーの案内で福建省の石材団地まで探しにいったときの経験について、「日本の生産技術や管理技術が伝わる中で、品質的にも安心できるものになっている。欧州に探しに行かなくても、世界中の石が集まっていることがわかった」(N145-1)とも言っている。これら中国観は、「施工精度」の論点においてもはや中国は精度低くないレベルに達していることを示している。










10	否定的(4)	中立的(2)	肯定的(4)
I (2)			
II (0)			
III (2)			
IV (6)	 		 

図 3.1.h.-1: 「施工精度」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.h.-1 のようになる。「施工精度」の論点においては、関連する中国観は明治時代から一貫して繰り返して見られ、その論調は肯定的否定的なものの双方が混在するものである。

i)アドリブ的: 10 中国観

「アドリブ的」に関する中国観は、『建築雑誌』ではⅡ期に分布が見られず、Ⅳ期の『新建築』、『日経アーキテクチュア』にもそれぞれ見られるものである。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表 3.1.i.-1)を示す。

	建築雑誌(4)		新建築(3)		日経アーキテクチュア(3)	
I (1)	満洲建築は木割や型で束縛されて居ない K027-1-Ⅰ 大江新太郎 1909年	+				
II (0)						
III (1)	人民公社環境整備の不画一さは手法の絶えざる見直し K115-1-Ⅲ 近藤正一 1976年	+				
IV (8)	いろんな建設を実際に進めながら検証するので浪費多い K146-1-Ⅳ 日本にいる匿名中国人留学生 1985年	-	ここは世界に類例のない都市計画実験をしているのではない S049-1-Ⅳ 渡辺豊和 2000年	+	基本的な設計と条件が設計の途中で変わることも珍しくない N043-6-Ⅳ 柴田陽三 1994年	-
	先が読めない K147-2-Ⅳ 日本の匿名建設実務者 1985年	-	「とにかくトライしてみる」の精神である S065-1-Ⅳ 迫野一郎 2002年	+	中国は、目的のために制度まで組み替えてしまう N102-2-Ⅳ 横谷英之 2003年	+
			あらゆる事が決定不能な中で可能性に向けて突っ走っている S109-1-Ⅳ 小嶋一浩 2004年	+	特注品づくりは失敗すると痛い、中国で設計する面白さ N125-2-Ⅳ 松原弘典 2004年	+

表 3.1.i.-1: 「アドリブ的」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

どれも肯定否定の態度がはっきりしている中国観である。Ⅰ期、Ⅲ期のものは「アドリブ的」であることを積極的に評価するものであるが、Ⅳ期に入るとそれが、ぞんざいで適当なものである、と否定的にとらえるものと、ものづくりの立場からそれが可能性のあるものだととらえる中国観の2つにわかれて分布している。さらにⅣ期では『建築雑誌』では2つとも「アドリブ的」であることが否定的な立場から捉えられているが、ほかの2誌ではほぼ肯定的に捉えられ、メディア間の温度差も見てとることができる。

例えば大江新太郎は満洲建築の装飾について、それが型にとらわれておらず自由奔放であるといい、しかもそれを積極的に評価している。「我国中古以来の様に、木割や、型で、束縛せられて居ないといふ此一例が、普ねく、満洲建築の全斑を語つて居るのであります。詳言すれば、此故を以て、驚愕すべき傑作を出だし、この故を以て、辟易すべき怪作を産するのであります」(K027-1)。時代を下って1975年に、RIA建築総合研究所の近藤正一は建築学会訪中団の一員として北京、上海、杭州郊外の人民公社を訪れ、工業だけでなく農業にも力を入れているという中国を視察したときの印象を記している。3つの公社はそれぞれ生活程度や住居環境整備においてかなり違いがみられ、それは文化大革命直後の混乱が現れていたと思われるが、近藤はそれを切り捨てない。「この不画一さは、単に試行錯誤の過程とばかりに断言するわけにはいかない。それは、先進的な工業でも、土法と呼ばれるいわば旧式の中国人の独創的な手法が盛んに見直され、医学的でも、衆知の通り、ハリ・キウなどの漢方術が、西洋の近代的な治療と相俟って行われているこの国独自の進み方によって大きく影響されている所でもある。...あてもないほど広い中国の各地に、本来の住居の作り方の土法がこれからも伝えられてゆくことは、中国のみならず、自給自足という立場から考えると、なかなか含蓄のある部分である」(K115-1)。70年代末には生産責任制が導入され農業集団化のための人民公社は実質機能しなくなることを考えると、この近藤の見方はかなり中国を理想化した見方だと言わざるを得ないが、「アドリブ的」な不画一さを肯定的にとらえているという点では、中国に対する肯定的論調としてとらえることができよう。

Ⅳ期の中国の「アドリブ的」な部分に否定的な態度をとるものには以下のようなものがある。日本留学中の中国人留学生が1985年に表明した中国観「中国の国民性もあって、中国は問題を直視する場合、1本しか見ないんです。これをやりましょう、じゃやろうということで例えばやったあと、どういう結果が出てくるか、その結果がもし悪かったとき、どういう方法で補うかということとはほとんど考えていない。だから、いろいろな建設をやってきて、失敗している。失敗したらもう一度やりなおす。これが今の中国の手法なんです。そのためにたくさんの浪費が出てきている」(K146-1)や、同じ号で日本の匿名建設実務者のそれ「政治体制が違っているので、先が読めない。このまま行こうという延長線上で考えるけど、いまひとつ、資本主義社会とは違った難しさがあるように思う」(K147-2)などである。また1994年の観光企画設計社社長の柴田陽三の「中国でのプロジェクトの採算性は非常に厳しい...敷地境界線や容積率、施設内容など、基本的な設計と条件が、事業の推移によっては設計の途中段階で変わることも珍しくない」(N043-6)も、日本の計画

的な社会と比べて「アドリブ的」な中国のやり方が、ビジネスをしていくことの難しさになっていると指摘している。これら3つは、中国人の国民性や社会体制の日本との違いが物事の継続的を保証せず「アドリブ的」になっていてそれが様々な問題を生んでいる、という指摘である。

それがもっとあとの2000年代になると、主に設計者の側から、この「アドリブ的」に積極的な評価を加える中国観が出てくる。2000年に建築家の渡辺豊和は上海での高層建築の林立をみて「ここは世界に類例のない都市計画実験をしているのではないかとまず思った」(S049-1)と言い、2004年に建築家の小嶋一浩は北京の大規模開発物件「建外SOHO」の設計施工を振り返って、「このプロジェクトにつきあって分かってきたのは、今の中国ではあらゆることが決定不能な中での可能性に向けて突っ走っているということだ。わずか数年先のことが誰にもこうだと語れない」(S109-1)と言い、2003年に日建設の海外総代表の横谷英之は上海での実施プロジェクトを振り返って「中銀大厦はコンペから5年で完成した(2005年竣工)。同じものを日本でつくろうとしたら、諸々の調整作業で完成に10年はかかる。中国は、目的のためには制度まで組み替えてしまう」(N102-2)と言っている。2004年に筆者は既製品と特注品の違いに注目し、「既製品の市場が発達していないので、必然的に自分でつくることになる。特注品づくりは失敗すると痛い目にあうが、中国で設計する面白さの一つだ」(N125-2)と述べているが、これも既製品市場が成熟している＝計画的な日本、と成熟していない＝「アドリブ的」に作れる中国、という対比とともに語られている。どれも中国の社会が今まさに成長過程にあり、前例にとらわれず物事を進めていることをチャンスととらえ、その「アドリブ的」な部分を積極的にとらえているものである。

10	否定的(3)	中立的(0)	肯定的(7)
I (1)			
II (0)			
III (1)			
IV (8)			

図 3.1.i.-1: 「アドリブ的」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.i.-1 のようになる。「アドリブ的」の論点においては、古くから中国のアドリブ性を肯定的に評価する中国観が見られながらも、成長が始まりつつあった1980、90年代にはそれに対して否定的な見解も語られ、2000年代以降はものづくりの立場からアドリブ性を再度積極的にとらえようとするものが目立つようになっている。この論点における中国観は、中立的なものがなく、それぞれがはっきりと肯定否定の立場を伴いつつ混在していると言える。

j)中国の役所: 10 中国観

「中国の役所」に関する中国観は、『建築雑誌』ではⅢ期以外に見られ、Ⅳ期の『新建築』、『日経アーキテクチュア』にもそれぞれ見られるものである。『建築雑誌』ではⅢ期中立的なもの以外はすべて否定的な立場に立った中国観だが、Ⅳ期の『新建築』の中国観の一部に、その官の強さの特殊性を積極的にとらえる発言も見られる。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表 3.1.f.-1)を示す。

建築雑誌(6)		新建築(4)		日経アーキテクチュア(1)	
I	支那は皮相的の道德仁義に拘泥する国	-			
(I)	K019-1-I 伊東忠太 1909年				
II	支那は中央権力が弱く世界列強各国の市場	-			
(I)	K062-1-II 岸偉一 1938年				
III					
(O)					
IV	開放政策は日本の行政改革と似た競争を前提に	±	上海市の実行力は印象深く、今の日本にないと思う	+	中国の住宅販売価格は上昇し、政府は“バブル対策”を実施
	K142-1-III 渡辺俊一 1985年		S055-3-IV 横谷英之 2001年		N131-1-IV 編集部 2004年
	日本のように民間のないところで末端まで技術が伝えられるか疑問	-	国家以外土地を所有しないはずが実際は急速に私有化	±	
	K144-4-IV 梅村魁 1985年		S102-2-IV 張永和 2004年		
	日本と違って政府の政策によって大学の研究方法が決められる	-	中国の都市開発の特徴は官の意向が強く働くところがある	+	
(8)	K223-1-IV 巖瀬林 2006年		S135-1-IV 岡本賢 2005年		
			汚職対策で非効率だが、それはビジネス論理に対抗する文化たりうる	±	
			S165-3-IV 磯崎新 2008年		

表 3.1.j.-1: 「中国の役所」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

I 期の伊東忠太は、貴州省玉屏県で知県に面会を申し出たところ喪中で面会できないと言われ、現地での弔いがかたに大仰であるかを指摘したあと、「支那は皮相的の道德仁義に拘泥する国で、今でも父は死ねば子は三年の喪に服します。父を失えば子は三年間は浪人しなければなりません、家長たるもの遠く出て他の地方に士官し、若し一旦しんだ時には、その妻子は屍を故郷に護送することになって居るが、土地の遠隔と交通の不便とで遺族は非常なる惨状に陥ることがある」(K019-1)と役人の仕事ぶりを批判する記事を書き残している。西進してミャンマーに抜けようと西進していた伊東は、各都市で衛門(地方役人の詰所)を訪問し、知県(地方役人)に会い、府県志(その土地の歴史などをまとめた書籍)を入手するのを人することをルーチンにしており、そこで出会った役人に対してさまざまな印象を残している。宿舎をあてがわれ立派な対応をしてもらえたという場合もあるが、記述においては先に挙げたようなネガティブな見解のほうがおおむね詳細にわたる。西安から西進した扶風県では「衛門は屋根崩れ壁墜ち実にひどい荒れ様でありました、知県は何時転任を命ぜられるか知れないから、決して衛門の修繕をしない、つまり彼は自分の私有物でないものは何んでも構わないと云ふ方針です、...がんらい支那の地方官は一種の請負業であって、自分の管下から規定の租税を取り立てて上納する、その残余はみな自分の収入になる、夫だから知府知県等は一定の俸給を受けない、百姓から絞り取れるだけ絞り取って自分の収入とすることを測るのです、...官吏は民を虐げ、民は官を恨んで居る、これで国家の安寧と幸福がどうして保てるでしやうか」⁸⁾とも書いており、この時代の中国の地方統治を通りすがりの日本人がどう見ていたかがよくわかる。

天津の総領事を務めて帰国した、内閣企画院書記官岸偉一の建築学会東京大会における講演録では、蒋介石が国内統一を図ろうとしていた中国の当時の状況を「支那のような中央政府の権力が比較的薄くて、さうして或一国の植民地でなく、世界の列強各国の激烈な政治上、又経済上の市場であると云ふことは」(K062-1)と紹介し、そのあとに「抗日と云ふことは従来のやうな蒋介石の統一完成の為めの指導原理ではなくなつてしまひ、抗日即ち支那外交のソヴィエトに対する隷属...を意味するやうになつて参つたのでございます」と続けている。実はこの講演は前半では中国における抗日の状況の紹介だが、後半では当時設立されたばかりの2つの国策会社、北支開発株式会社と中支振興株式会社についての紹介があり、「此の会社乃至其の子会社として出来ず鉄道とか電気とか其の他色々な会社に付きましては決して支那人、満洲人乃至其の他の外国人に対して門戸を閉鎖する意思はないので、我が方に行爲を持つて協力して行かうと云ふ場合には大いに之を歓迎すると云ふ方針で行く筈でございます」と続く。ここでは日本の中

8)伊東忠太「支那印度土耳其旅行談(第三回)」1907年1月号(K014)

国における国策会社への投資を集めるために、当時の中国における抗日は、そもそも中国は中央権力が弱く後ろでソ連が糸を引いているだけで本当に中国人の内部からの抗日ではないからそれほど大きな障害にはならない、という論法で話がされている。こうした中国観では、中国の中央権力が弱い、と否定的な面を強調することで、それを自分たち日本への抵抗が弱い、とか、日本のような別になにかそこをまとめる主体が必要だ、という論点がほとんど透けて見えている。

IV期の建築研究所の渡辺俊一の1985年の発言は、その2年ほど前から本格的に始まった中国との研究交流の中で出てきたものである。当時の日中交流のなかで渡辺が特にその中国側のキーパーソンと認めた、建設部科学技術局長の許溶烈が84年11月末の「人民日報」紙に寄せたエッセイ「改革に直面する<中国>建築科学技術」がここでは翻訳掲載され、渡辺は「付記」のなかでこの中国観を記している。許エッセイは中国がこれから上意下達の生産方式を脱却して企業間競争による自主的な生産方式が必要だという主旨だが、渡辺はここに、社会主義国である中国が完全に市場原理を導入するとはできず、市場原理とは違う合理化の原理が必要とされており、それが許の言う「管理技術」や「技術立法」であるといい、そうした中国の改革への動向が「公共セクターはとにかく非効率に陥りやすいという「政府の失敗」の観点から、行財政改革を進めているわが国の場合とも、一脈通じるものがあり、比較論的にも興味ある論点を提起している」(K142-1)としている。渡辺のこの中国観は日中の相違を十分認識しながらも、役所のあり方を通して中国を対等な比較対象として見ようとしており、論調としても中立的である。

IV期の『建築雑誌』の他の2つの中国の役所のあり方に対する中国観はどちらも否定的なものになっている。芝浦工業大学の建築構造の専門家梅村魁は、当時何度か中国に招かれて中国の現状を知る立場にあり、その熱烈歓迎ぶりや中国の構造設計の専門的な部分については好意的な記事に残しているが、社会制度や役所の存在については否定的な感想を述べている。1985年の芦原義信、吉武泰水との鼎談では、「われわれが話をして、なかなか一致にくいのは、向こうは国がやるわけです。こっちは今は民間のほうがレベルが高いですから、民という感じで、そこがお互いになかなか通じあわないところなんです。...たとえば基準を作ってしまう、官に流してしまえばいい、それも命令でね。...末端までそれがほんとうに通じるかどうかという問題が一方であるような気がします」(K144-4)と言い、これは81年に日本の新耐震基準の作成に深くかかわった梅村ならではの官と民に対する視線だと言えるだろう。慶應義塾大学の厳網林は、大学の研究環境と役所の関係についてこう言う、「日本と中国の研究教育の環境は大きく異なります。...学術の雰囲気は日本の方が進んでいるのではないかと思います。...中国では共産党の指針があって、政府の政策によって研究方向が決められることがあります。...日本の方が学者の人たちも好きなことを研究しているように思います」(K223-1)。中国出身で日本の大学で研究している専門家の率直な意見である。

一方で『新建築』における張永和や磯崎新の中国観には、中国でのプロジェクトを経験している設計者として中国の実情をよく知る者の中国の役所への見方がある。日本での展覧会開催にあわせて韓国人建築家承孝相、東京大学の建築史家村松伸との東京での鼎談時に語った中国系アメリカ人張永和の中国観は、「今や、中国は世界で一番元気で、暴力的で、そして一番破壊力をもった資本主義ですからね。それに振り回されないためには、社会主義が必要かもしれない...中国では国家以外本当はだれも土地を所有していないことになっています。でも実際にはものすごいスピードで土地は私有化されている」(S102-2)や、深セン文化センターの設計を終えて中国文化について述べた磯崎新のそれ「日本の常識では考えられないくらい無駄が多いのですが、...早く売って利益を得るというデベロッパーの論理はあり得ないことだったのですね。要するにこれはビジネスではなく「文化」だということかもしれません。汚職も考えようによっては、ビジネスの論理に対抗する手段と言えます」(S163-3)は、真っ向から肯定も否定もしないながら、アイロニカルに中国の役所の現状を論評しているものであり、どちらも中立的であると言える。

『日経アーキテクチュア』編集部の2004年の中国観、「ローンを組んでマイホームを購入する人が増え、販売価格が

上昇している。…価格の上昇を抑えるため、政府は高額物件に対する融資や転売を規制するなど、“バブル対策”を実施している」(N131-1)というのは、役所の仕事ぶりを伝えているものであり、特に役所の存在自体について肯定否定の評価的論調は伴っていない。

同じIV期でも中国の役所の仕事ぶりを肯定的に評価する中国観は『新建築』に見られる。日建設計の横谷英之は中国銀行上海ビルなど一連の自社設計物件の竣工に合わせてこう述懐している、「この7年間の経験でもっとも印象深かったのは、上海市政府の意思決定の迅速さと実行力である。共に今の日本に欠けているものだと思う…既得権益も、それを守ろうとする抵抗勢力も存在しないからこそ可能な、無地のキャンパスに自在に描く都市の未来像のその爽やかな地震に満ちた楽天性に、私たちは大いに勇気づけられてきた」(S055-3)。上海浦東の新開発地区でのオフィスビル2本と、古い建物を保存した商業開発「新天地」という、当時最も注目されていた地区での計画に深くかかわった設計者だけに、役所の仕事のスピードに肯定的な印象を持ったのも無理はない。久米設計社長の岡本賢の中国の役所に関しての観点も、「厄介なのは民主化が進んだと言っても人治国家的な側面が残っており、明文化されていないことが多く…事前協議的なことも行えない…日本において情報が確実に理解された中で設計を進めている私たちにとって、これは大きなストレス」と述べ否定的な部分に触れつつも、「中国の都市計画の特徴は官の意向が強く働くことがあるところ」(S135-1)として、政府が示す都市開発の目標はあいまいでむしろ設計側が計画の強度を増してリードしていけばよいのだから、中国の仕事は単純で容易と肯定的に言いきっている。与えられた中国というフィールドを、ポジティブに「個人が試される場」と読み替えているのは、そこでビジネスをしている設計者ならではの前向きな中国観だと言えよう。






10	否定的(4)	中立的(4)	肯定的(2)
I (1)			
II (1)			
III (0)			
IV (8)			

図 3.1.j.-1: 「中国の役所」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.j.-1 のようになる。「中国の役所」の論点は、戦前より一貫して否定的論調の中国観が分布する、古くからあるテーマであるが、1980 年代後半以降は主に創作論の立場から肯定的な論調も見られるようになり、肯定否定の混在状態になっていることがわかる。

k)持続可能性：9 中国観

「持続可能性」に関する中国観は、『建築雑誌』ではⅠ期にのみ分布が見られず、Ⅳ期の『新建築』、『日経アーキテクチュア』ともに分布が見られる。この論点の中国に対する態度は、Ⅲ期までは肯定的なものが主流であり、時間の経過とともに否定的なものや中間的なものが分布するようになっている。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表 3.1.k.-1)を示す。

	建築雑誌(4)	新建築(2)	日経アーキテクチュア(3)
Ⅰ (0)			
Ⅱ (1)	支那の穴居は防空施設、寒冷地の貯蔵庫の参考 K072-1-Ⅱ 浅井新一 1942年	+	
Ⅲ (2)	労働者中心の国家で公害対策は日本より進む可能性あり K120-2-Ⅲ 久我新一 1976年	+	
	われわれよりも総合技術としての設備技術のありかたがある K121-2-Ⅲ 石原正徳 1976年	+	
Ⅳ (8)	居住環境が見直され審洞研究が盛んに K149-1-Ⅳ 青木志郎・橋本佑司 1985年	+	中国の地方都市ではいまだに環境負荷低減意識が低い S160-1-Ⅳ 長谷川一久 2008年
		-	環境問題を確実に内包しながらも、北京は加速度的に成長 N035-1-Ⅳ 波多野哲次 1993年
		+	中国ならではの環境形成のパワーを見せられた S161-1-Ⅳ 仙田満 2008年
			サステナブル建築の展開が急速に広まっている N137-1-Ⅳ 上利益弘 2004年
			乱開発に対する市民の批判の声が高まってきている N166-1-Ⅳ 東英樹 2007年
			土

表 3.1.k.-1: 「持続可能性」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

『建築雑誌』に見られる最初の持続可能性な視点に立った中国観は「穴居＝審洞」に関するものである。穴居への言及は古くは 1906 年の伊東忠太によるもの(K013)⁹⁾や、古文書から中国の原始住居は穴居であるという後藤の指摘がある(K037)¹⁰⁾が、ここで取り上げている 1942 年の陸軍技師浅井新一と大前岩八らによる「支那の穴居」という記事は、穴居の古代からの歴史を説き起こすところからはじめて、近代以降の穴居に注目し、その形状、構造、衛生面での特徴などについて紹介しているものである。「特に近来洞窟式構造及防空施設に伴い防空壕、或は寒冷地に於ける野菜貯蔵、弾薬等の倉庫としれ之等構造は其必要に迫られている今日此種に属する穴居に就ても之を参考として調査する事は、あながち徒労ではなからうと考へ、日本学術振興会「東亜建築」の研究資料として筆を執った次第である」(K072-1)という。これはすでに第二次世界大戦開戦後の時代背景も色濃く反映したレポートだが、それまでの伊東や後藤が、穴居をめずらしいものとして文人的な視線で取り上げていたのとは異なり、明らかに中国の土着的な建築に対して軍事的用途としての肯定的な持続可能性を見出そうとしている点で画期的なものであった。さらに戦後の日本では、中国の審洞研究を世界に先んじて進めることになる。1976 年にバーナード・ルドフスキーの『建築家なしの建築』が出版されここに審洞住居が紹介されたという事実もあり、1980 年代中期に東工大らのグループが詳細な学術報告を残しており(K151)¹¹⁾、日本大学の青木志郎は 1985 年に「どちらかといえば審洞居住は、前時代の遅れた住まい方と考えられていたが、その居住人口の多さ、耕地をつぶさず広く確保できること、また冬あたたかく夏すずしい快適な居住環境が見直されはじめ、審洞撤退計画から審洞改良計画へと向かい、中国での審洞研究も盛んになりつつある」(K149-1)と書いている。中国の審洞住居に日本人が持続可能性を見たのは戦中からであり、戦後になってようやく中国もその重要性に気付きはじめたということである。1986 年には北京で「国際生土建築学術会議」が中国建築学会主催で北京において開催されたのも、明らかに国外からの視線にこたえようとする、中国の側の自国の環境資源としての審洞へのみなおしがあったと思われる。生土会議の報告を書いた八代克彦はこう言う、「1972 年の世界的な石油危機以来、省エネルギー・生態系の保全等が叫ばれるようになり、…大量のエネルギーをその生産に消費する工業資材に替わり、はるかに低廉で、しかも自国内において培われた伝統をもつ“土”の住居が見直されるようになった」¹²⁾。建築における「持続可能性 sustainable development」という語は、1987 年に国連のブルントラント委員会における「我ら共

9) 伊東忠太「支那印度土耳其旅行談(第二回の下)」1906 年 12 月号 (K013)、陝州と靈泉県の間の黄河のほとりで「途上珍しいものは穴居でありました…凡そ世界各地の人の意匠が互いに或る点に於て一致することを証明するものでありましやう」書き残している。

10) 後藤朝太郎「文字より見たる支那古代建築(五)」1913 年 12 月号 (K037)、「しんぼ階段の著明なる点は、初め穴居の屋蓋式のもの、縦穴式のものより発達して、次に、四壁を築き上げ、破風側に入り口のある作りとなり…」とある。

11) 茶谷正洋、八木幸二「2. 審洞住居の地域差：横穴形態について」1985 年 11 月号 (K150)。宮野秋彦・稲葉一八「3. 審洞住居の内部環境：主として温熱環境について」同号 (K151)

12) 八代克彦「中国建築学会主催「国際生土建築学術会議」報告」1986 年 2 月号 (K154)

有の未来」の発表以来、地球環境保全のキーワードの1つとして広く使われるようになってきているが、この会議もこうした国際的な流れと同調するものであったと言える。なお、こうした審洞への研究がまとめた本に関する書評が、1989年の『日経アーキテクチャ』にも中国関連記事として掲載されている¹³⁾。

Ⅲ期の『建築雑誌』の2つは、建築設備を通しての「持続可能性」についてふれた肯定的中国観である。京都工芸繊維大学の石原正雄が建築設備について、東京理科大学の久我新一が中国建築の環境問題について残している中国関連記事は、1972年の日中国交正常化以降、1974年に吉阪隆正日本建築学会長が訪中してから始まった日中間の建築専門家の交流によるものである。木村建一の回想によると¹⁴⁾1975年に建築物理の専門家として、石原を団長に、久我のほか名古屋工業大学の宮野秋彦¹⁵⁾、東北大学の長谷川房雄、早稲田大学の木村の5人からなる日本建築物理技術交流訪華団が結成され、日中建築技術交流協会から派遣されたという。木村いわく、「当初は交流といってもだれでも行けるというわけではなかった、いろいろな取り決めの中で、双方とも旅費は訪問側が負担し、滞在費は受け入れ側が負担することになっていた。学術交流についていえば、訪中の日本人学者は中国で講演をして、その講義料の代わりに中国の名所を案内してくださる、という図式が一般的になっていた」。そして「所謂要人の待遇」を受けた彼らが書きのこしたのが、ここでの中国関連記事であり中国観である。貧しいなりに中国の一番いいところを見せられた彼らの点が甘めになるのは仕方ないとはいえ、当時の中国人のきまじめさにすっかり感心した建築物理の専門家たちは、中国の立ち遅れている現状を日本と相対化して、なんとか非難を避けつつ報告を書いている。石原は「設備技術の面からみれば…個々の機器や材料の進歩が技術の進歩であるようにみられがちな、われわれの技術にとって、中国の総合技術のあり方は貴重な示唆を与えている」(K121-2)などと言い、久我も、記事冒頭では中国が大国でありながら国民総生産が著しく低いことなどを指摘しておきながら、都市緑化が豊富であるとか、「中国において工場はすべて国営の形をとっており、労働者の指導する国家でもあるだけに」、「労働環境・居住環境についての保全は、わが国よりも一層高いレベルで徹底して行われるであろうから、わが国の公害対策の不徹底な現状を省みると、逆に借りてきて範例としなければならない」(K120-2)と述べている。

Ⅳ期の、日中の往来が自由になり情報が共有されるようになると、日本建築界の中国の持続可能性への肯定的な見方は現実的にクールダウンしていく。環境デザイン研究所勤務の建築家で、仏山市嶺南明珠体育館の担当者だった長谷川一久は、昼光制御の電動ブラインドや蓄煙型の自然排煙システムなど、新しい環境技術の導入を図った当該物件の設計を振り返って、「環境建築設計として建築・設備・防災などの統合効果を考慮し設計・工事に至っているが、中国の地方都市ではいまだ環境負荷低減意識が低く、理解を得るのには努力を要した」(S160-1)という印象を述べている。広東省の珠江デルタの中心都市である仏山のプロジェクトで、その都市を代表する建築プロジェクトであっても、最新機器を入れて環境建築とする考え方は施主側の受け入れにかなりの説明を要した、という感想は、現場経験者の一言として聞くとリアルなものである。おそらく中国側の設備や技術に関する価値観は、1976年の石原の時代も2008年の長谷川の時代もそう変わっていないのではないかと。中国側の、技術自体の先進性には興味を示さず、それがいかなる対費用効果をもっているのかのみで判断する、というような姿勢を、70年代の石原らは中国をたてながら(中国の技術のありかたが日本に)「示唆を与えている」と言い、2000年代の長谷川は(日本の技術を中国に採用してもらうためには)「努力を要した」言っているように見える。

また、時代を下ると「持続可能性」への意識の高まりについて触れる中国観も見られるようになる。SB05Tokyo 日本組織委員会国際調整部委員の上利益弘は、日本が産官学共同で研究開発したCASBEE(建築物総合環境性能評

13)編集部「審洞考察団著「生きている地下住居 中国の黄土高原に暮らす4000万人」1989年1月9日号(N023)

14)木村建一「連載かんきょう随想 第9回はじめての新生中国」『建材試験情報5』(財)建材試験センター、2006 <http://www.jtccm.or.jp/library/jtccm/public/mokuji06/0605_rensai.pdf> 2010年12月17日閲覧

15)なお、このときの訪中団の一人の宮野も、石原、久我とともに『建築雑誌』の同じ号に中国関連記事を残している。宮野秋彦「地下建築:北京の人民防空壕と地下鉄」1976年1月号(K122)

価システム)が、中国の GOBAS(Green Olympic Building Assessment System)の参考にされており、北京市はこの GOBAS を「北京市グリーン・ビルディング条例」として採用する通達を出したことに触れ、「中国ではサステナブル建築の展開が急速に広まっている」(N137-1)と言っている。また上海在住の建築家東英樹は、「中国では、土地は国の所有物であり政府の立ち退き命令は絶対だ。しかし最近、強制退去を命じる政府側と、たてこもる市民との衝突が何件か大きくメディアで取り上げられ、乱開発に対する市民の批判の声が高まってきている。古きよき街並みや文化、コミュニティを破壊して住民を追い出し、新しいビルを建てていく様は、何か革命か侵略のようにさえ見える」、「上海は乱開発と言う年問題に対する大きな課題を抱えている」(N166-1)と言う。これら2つの中国観は状況を紹介する意図が中心で、話者はこれに強く肯定否定の態度を付加していないが、発展と持続可能性のせめぎあいが、中国のあちこちで起きているということを伝えるものである。

9	否定的(1)	中立的(3)	肯定的(5)
I (0)			
II (1)			
III (2)			
IV (6)			

図 3.1.k.-1: 「持続可能性」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.k.-1 のようになる。「持続可能性」の論点は、現代建築の世界では比較的新しいトピックでありながら、日本建築界の中国観においては戦中期にまでその起源をさかのぼることができる。2000 年代に入ってからでは中立的、ないしは否定的な論調も見られるが数は多くなく、古いものから一貫して肯定的な姿勢で語られている。

I)部分と全体: 8 中国観

「部分と全体」に関する中国観は、『建築雑誌』ではⅠ、Ⅱ期に分布が見られず、Ⅳ期の『新建築』、『日経アーキテクチャ』ともに分布が見られる。この論点の中国に対する態度は、Ⅲ期までは肯定的なものが主流であり、時間の経過とともに否定的なものや中間的なものが分布するようになっている。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表 3.1.I.-1)を示す。

	建築雑誌(5)	新建築(1)	日経アーキテクチャ(2)
Ⅰ (0)			
Ⅱ (0)			
Ⅲ (2)	資本主義国と違い必要とするところに重点的に設備技術が適用 K121-1-Ⅲ 石原正雄 1976年 + われわれよりも総合技術としての設備技術のありかたがある K121-2-Ⅲ 石原正雄 1976年 +		
Ⅳ (8)	中国の発想は西欧寄りで全体から部分を造る K144-1-Ⅳ 芦原義信 1985年 ± すべてが縦社会で横の連絡がむずかしく日本のような管理が苦手 K147-5-Ⅳ 日本の匿名建設実務者 1985年 - 建築史研究が新しいものに偏っている K222-2-Ⅳ 田中誠 2006年 -	今の中国は「渦」があらちにあるような状態 S066-1-Ⅳ 松原弘典 2002年 ±	今の中国には「中間」がないと言われる N097-1-Ⅳ 編集部 2003年 ± 真ん中がぽっかりと空いているのが今の北京 N107-1-Ⅳ 迫慶一郎 2003年 ±

表 3.1.I.-1: 「部分と全体」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

Ⅲ期の2つの中国観は、設備計画の専門家の石原正雄によるもので、これは日本の先進的な設備技術がタコツボ化し全体のバランスの中で成長していないのに対し、中国では選択と集中がされていて全体のバランスがとれている、という主張である。「資本主義国では設備技術の高いレベルが商業建築に集中するが、中国では設備技術を必要とするところへ重点的に適用される」(K121-1)、「中国の総合技術のあり方は貴重な示唆を与えている」(K121-2)という表現で、交流が限定的だった時期に、短い滞在で得られた印象が肯定的に述べられている。

Ⅳ期にはもう少し中国に対する現実的な見方が出てきて、今度は部分が強すぎるとか、全体の中での偏りを指摘する中国観が出てくる。芦原義信は構造の梅村魁、建築計画の吉武泰水との対談の中で文明論的な中国観を披露する。「設計の立場、あるいは発想の立場からいうと、中国は西欧のほうに入り、日本は独特で、中国と日本の間に川が流れている。…中国の設計の発想は、全体から部分に迫るものです。われわれは部分から全体で、「たし算の建築」と僕は言っているんです。それとスケール感です。たとえば万里の長城みたいな、あんな大きなものをなぜつくったか。…これもやはり全体の発想ではないか。ピラミッド系の発想だと思うんです。…こういう発想と、修学院離宮の自然にいかにしたがうかという考え方を比べると、発想が逆ではないかと思います」(K144-1)というのは、全体が部分を支配するという中国社会についての解釈を日本と比較しながら述べている。同記事で芦原は、自分が1981年に天津大学に呼ばれて講義したときに中国人がポストモダンに興味を持っていることにとても驚いたことも述懐している。まだ生活を向上させることが先決なはずの中国でポストモダンに興味をもたれるのは、中国社会が形式性や全体性を重んじるからであり、日本のように部分性や内容性を重んじる社会とは違い、それは中国建築において左右対称とか正面性とか象徴性が重視されるところにも見られる特徴であると指摘している。建築意匠の側から日本と中国の違いを言うのに「部分と全体」という切り口を使って説明して芦原の発言に対して、司会の藤森輝信はそうした中国に中華思想を見て、「偉大な文明というのはそういうものだという気がしますね。排他的で、ある原理で貫き通す。日本の場合は立派な文化ではあるけど、世界に通用する文明ではない。自分たちのなかだけで楽しんでいるというふうで」と受けており、さらに日中の違いが浮き彫りにされている。

同じ号の中国に出て行っている施工関係者の座談会ではもっと突っ込んだ中国観が語られている。ゼネコンの関係者の発言では、「日本の管理には非常に驚異の念を持っていて、管理を学びたいとおっしゃる。」や、「向こうはすべてが縦社会でヨコの連絡がなかなかむずかしい。都市問題とか建築はやっぱ横を見ないとできない。そういったことが今やっとわかりかけてきている。そのときに管理ということが出てくる」(K147-5)というのは、とにかく最新のものがほしいという中国側の要望が、日本の側からは、全体重視で部分のつながりを見ていない＝マネジメントが欠如している、とい

うようにとらえられていることを示している。こういうことを通して日本側は自身の優位性をむしろ知るわけだが、この段階ではその日本の優れたマネジメントを中国側にどう売ればいいかわからない施工関係者の苦悩も同時にうかがえる。

2000年以降の3つのメディアの「部分と全体」に関する中国観はどれも、中国の発展が加速し、そこに不均質な偏りを指摘するものである。京都大学の田中淡は自分の研究キャリアを振り返って、「中国は4、5千年の歴史が継続した、とても古い文明ですが、実物の建築については比較的新しいものが残っているにすぎません。…しかも歴史上一流のものがほとんど残っていない。一步井手、文献は文字の国なのでたくさん残っている。また近年考古学発掘の成果がどんどん出てきて、今まで文献でしかわからなかったことが、遺跡として発見されている。しかし実物はないという、ちょっと畸形的な残存状態だろうと思います…歴史的に言えば、1100年に描かれた『营造法式』もかなり後の時代のものです。つまり、建築史研究がかなり新しいものに偏っている」(K222-2)と述べ、「もっと古い時代を文献や考古遺跡から研究していかなければならないと思います」という。王朝が盛衰を繰り返すその都度都市や建築が更新された中国では、意外と古い建物が残っていない状況を言うこの中国観は、現在の更新の速い中国の現代都市への警鐘ともとれる内容である。

当時北京大学建築学研究中心所属だった筆者はそうした開発の乱立する状況を「渦があちこちにある」(S066-1)と言い、『日経アーキテクチャ』の編集部は「今の中国には「中間」がないと言われる。新旧の建物が混在し、高所得者と低所得者が同じ街で暮らす」(N097-1)と言う。これら記事は、発表当時の内容だけを見ればまだどちらも中立的な論調だが、これからの中国で、中間層や中流意識の形成が追い付かず富裕層と貧困層の差がさらに開いてくるようなことがあれば、否定的論調に移行してもおかしくない内容である。

8	否定的(2)	中立的(4)	肯定的(2)
I (0)			
II (0)			
III (2)			
IV (6)			

図 3.1.I.-1: 「部分と全体」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.I.-1 のようになる。「部分と全体」の論点においては、1970年代は肯定的な姿勢で語られる中国観が見られるが、80年代後半以降中立的、否定的な論調のものが出現し、論調の交替が観察できる。

m)まだこれから: 8 中国観

「まだこれから」に関する中国観は、『建築雑誌』では全期に見られ、IV期の『新建築』、『日経アーキテクチュア』にもそれぞれ見られるものである。「まだこれから」変化する中国に成長の遅れを見れば否定的な中国観となるが、そこに将来のびしろを見れば前向きな中国観となる。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表 3.1.m.-1)を示す。

	建築雑誌(5)	新建築(1)	日経アーキテクチュア(2)
I	支那研究には何事にも隔靴搔痒の感	-	
(1)	K014-1-I 伊東忠太 1907年		
II	満洲国は国民住宅建設がまだ不足	-	
(1)	K071-1-II 笠原敏郎 1941年		
III	中国にはまだ自由に訪問できず儀礼的すぎる	-	
(1)	K106-1-III 無記名 1976年		
IV	今の中国の住宅はまだ水準を引き上げてはいけぬ部分が多い	眠れる獅子は世界的な古典建築を持つが、世界的な建築家はまだいない	外国企業が續々と進出してきているが、オフィスビルが不足
(5)	K166-1-IV 藤田忍 1991年	S016-1-IV 張在元 1989年	N003-1-IV 柴斐義 1985年
	現代建築を表現する中国人建築家はまだいない	±	近代史や構造への理解が足りない
	K216-1-IV 張欣 2006年	±	N106-2-IV 黄居正 1985年

表 3.1.m.-1: 「まだこれから」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

伊東忠太は1907年に西安の西、醴泉で遭遇した多数の周代から唐代までの陵墓を見て、「もしこれ等の陵を発掘することが出来たならば支那芸術史上に恐ろしい大光明を放つことでありましょうが、夫は当分到底出来ないだらうと思ひます、支那研究は何事にも隔靴搔痒の感が随伴します」(K014-1)と述べ、中国を旅行しながら多くの興味深い観察対象に遭遇しながら同時にその社会の日本との違いを知るにつれ、実感をこめてこうした感想を漏らしている。日中国交回復から3年、学術交流がはじまって1年余りの1976年1月号『建築雑誌』における「中国建築の現状」特集では、巻頭言に「現在まだ我々が中国を自由に訪れて、見たいものを見、聞きたいことを聞くという段階ではない。これは一般的に中国の体制におとと考えられがちであるが、必ずしもそれだけの理由によるのではない。その理由の一般は中国の賓客を迎える伝統的な儀礼的態度にかかっていると考えられる。…ありのままの中国の姿にふれたいという我々の考え方からすると、中国の儀礼的習慣は隔靴搔痒の感をまぬがれない」(K106-1)とある。伊東忠太のころの明治時代も文化大革命直後の1970年代も、ともに日本から中国にはなかなか深く入っていくことができないという研究者の実感が、「隔靴搔痒」の語で言い当てられている。

満洲国国務院建築局長の笠原敏郎は、1941年に、満洲へ移住人口の増加にも関わらず日中戦争の長期化に伴い建材が不足し住宅生産が追い付いていないことについて、「住宅供給の減少と相俟つて住宅払底の跋行的状態を現出し、住宅不足に対する叫びは年と共に激化し今や住宅難は家賃問題と共に重大なる社会問題と化し」(K071-1)と述べており、日本に留学経験がある雑誌『建築師』の編集長黄居正は1985年に、「中国の設計レベルはまだまだ低い。根本的には建築教育に問題がある。日本の筑波大学で学んで印象深かったのは、近代建築の歴史をみんなが理解していたことだ。中国では先生も学生もわからない。また、中国の建築は構造が洗練されていない。外国の建築家の方が力学をよく知っている」(N106-2)と言い、大阪市立大学の藤田忍は1990年にJICAの中国都市型普及住宅(小康住宅)研究協力事業で都市中心部の再開発事例として北京の小後倉小区を訪れ「まあまあ水準を中国では小康状態と呼んでおり、ファサードにデザインについていえばそのレベルに達していると言えそうである。しかしながらその一方で、…住生活全体の水準をこれからいかに小康状態に引き上げるのかが、我々の研究協力事業に期待されている」(K166-1)と言っている。これらはどれも当時の中国の建築をまつわる現状には不足があり、成長が遅れている、ということを否定的に述べるものである。

一方で中国に「将来ののびしろ」を見て、前向きな中立的論調をとるのは、日本のメディアに掲載された中国人の言説である。北京市建築設計院建築師の柴斐義が1985年に清水建設とJVで京城大厦の設計のために来日した時に受けたインタビューでの発言「中国には今、外国企業が續々と進出してきています。しかしオフィスビルが少なく、多くの進出企業はホテルの部屋を借りて事務所になっています。…そのホテルにしても入居希望が多く空室がないという状態

で、オフィスビルの建設が待ち望まれているのです」(N003-1)というのは暗に日本の設計事務所や建設会社に中国の市場としての可能性を伝えている発言としてもとれるだろう。すでに8)の「将来待望」の論点で触れた張在元の「眠れる獅子」の中国観(S016-1)や、北京を代表するデベロッパーSOHO CHINA 代表の張欣の「期待といえば、中国人建築家たちへの期待が大きいのです。厳しく言うと中国には現代建築を表現できる建築家がまだいません。建築家の多くは依然、海外の模倣の段階にとどまり、中国文化を源とした建築表現が足りていません。文化大国として、中国の建築はこの段階を速く乗り越える必要があります。中国人建築家のより早い成熟を期待します」(K216-1)も、中国のこれからに期待できる、という中立的な発言である。






8	否定的(5)	中立的(3)	肯定的(0)
I (1)			
II (1)			
III (1)			
IV (5)			

図 3.1.m.-1: 「まだこれから」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.m.-1 のようになる。「まだこれから」の論点は、戦前から見られる古いものだが、すべてが否定的ないしは中立的論調によるものであり、一貫して否定的な論題であると言えることができる。

n)維持管理: 8 中国観

「維持管理」に関する中国観は、『建築雑誌』ではⅡ期に分布が見られず、『新建築』にも分布が見られない。明治の時代から日本の建築界の言説は中国社会やその建築の「維持管理」について言及しており、それらはおおむね中国の管理能力・マネジメントの欠如を指摘して否定的にとらえるものである。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表 3.1.n.-1)を示す。

	建築雑誌(6)	新建築(0)	日経アーキテクチャ(2)
I (1)	建築物の修繕とか改良とかいふことの出来て来ない K017-2-I 大江新太郎 1907年	-	
II (0)			
III (2)	文物の管理体制は日本より整備 K126-1-III 鈴木嘉吉 1976年	+	
	古建築修理工事の技術的内容は日本の方が細かい K126-2-III 鈴木嘉吉 1976年	-	
IV (5)	ソフトで使いこなせない、メンテナンスができない K147-4-IV 日本の匿名建設実務者 1985年	-	香港が薄汚れた感じなのは、各住戸がバラバラに継ぎ足しているから N018-2-IV 東孝光 1988年
	すべてが縦社会で横の連絡がむずかしく日本のような管理が苦手 K147-5-IV 日本の匿名建設実務者 1985年	-	上海にはアフターサービスが根付いていない N099-1-IV 小倉満 2003年
	メンテナンス意識が根付かない K215-1-IV 樋口幸紀 2006年	-	士

表 3.1.n.-1: 「維持管理」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

古くは1907年に大江新太郎が「建築物の修繕とか改良とかいふことの出来て来ない」(K017-2)と否定的な中国観を残している。ここで大江は、中国の歴史から説き起こしてその建築における「維持管理」のできない理由を類推している。すなわち「支那の沿革が御承知の如く昔から弱肉強食でア—いふ度々杜稷のかはる国柄でありますから又政治も今も猶日本の封建時代以上の政治をやつて居るといふ位でありますから人間の頭脳に永久とか安心とかいふ観念が誠に乏しいやうに思われます」と言い、修繕や改良ができないことを「人間の頭に永久とか安心とかいふ観念の無い所から源由した事かと私は考へます」としている。

これと似た中国への管理不在の印象は形を変えて後の時代にも現れる。たとえば1985年に日本の匿名建設実務者は、ビジネスとして技術移転をしたいが中国社会がまだ「ソフトで使いこなせない、メンテナンスができない」(K147-4)状態にあると言い、2006年に三菱地所設計の樋口幸紀は、膨大な量の住宅開発について当時の中国が目の前のことを最優先するあまり品質追求が施主への説得材料にならず、「メンテナンス意識が根付かない」(K215-1)と述べている。建築家の東孝光も1988年に香港を旅行し、『日経アーキテクチャ』誌上で「香港が薄汚れた感じなのは、各住戸が勝手にバラバラに継ぎ足しているから」(N018-2)と言い、これも同型であろう。

中間的なのは1976年の奈良国立文化財研究所平城宮跡調査部長の鈴木嘉吉の態度で、1つの記事の中で2つの中国観を述べている、すなわち「文物の管理体制は日本より整備」(K126-1)されているといい、制度としては地方ごとの文物指定がしっかりしているように見える中国を日本よりその管理体制が優れているともちあげつつ、一方で「古建築修理工事の技術的内容は日本の方が細かい」(K126-2)というように、個別の技術は日本の方が繊細であるというものである。全体のシステムは優れるが個別の技術はだめ、というここでの遺産保存に関する鈴木氏の指摘は、「古いもの」の論点に関する論述で本論文が指摘したように、中国を限定的にしか眺められない時代の中国観の限界を示している。後に日中関係が開放化され双方の情報交換が盛んになると、鈴木氏の前者のこうした理想主義的な肯定的中国観は事実上無効化し、1985年に日本の建設実務者が率直に言うように、「向こうはすべてが縦社会で横の連絡がなかなかむずかしい」(K147-5)という評価、すなわちと中国には個別技術には古いものも残っていて日本とは違う可能性があるが全体システムは縦割りで繊細さが無い、というものに移行してゆく。

また、Ⅳ期には、メンテナンスが出来ない中国社会を単に否定するのではない、そこに可能性を見出そうとする「前向きな否定」的態度をとる中間的な中国観も出てくる。2003年の『日経アーキテクチャ』の記事では、大和ハウス工業の日本流サービスを売りにした中国の住宅市場への参入のようすが紹介されている。それまでの中国の内装工事にはアフターサービスという概念がなかったことに目をつけ、日本式のそれを取り入れた大和ハウスが上海の住宅内装市場で

健闘しているという内容である。内装工事完成の半年後、1年後、2年後に工事管理の担当者が各住宅を点検して回る、という事実の紹介のあと「実際に点検に出向くと、『本当に来た』と驚かれる。上海にはアフターサービスが根付いていない。2年間の保証を付けていても、にわかに信じられないようだ」(N099-1)と言う大和ハウスの現地合弁会社の日本人総経理のコメントを載せている。ここでは「メンテナンスの出来ない中国」を見下すのではなく、そのメンテナンス意識がないことを逆に日本の企業にとってのビジネスチャンスだと理解しようとする視点が観察できる。





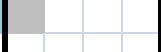
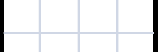

8	否定的(6)	中立的(1)	肯定的(1)
I (1)			
II (0)			
III (2)			
IV (5)	  		

図 3.1.n.-1: 「維持管理」論点における中国観の中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.n.-1 のようになる。「維持管理」の論点においては、戦前からのものも含めてほぼ一貫して否定的な論調が分布していることが見てとれる。

o)よくわからない: 5 中国観

「よくわからない」に関する中国観は、『建築雑誌』ではⅡ、Ⅲ期に分布が見られず、Ⅳ期の『新建築』、『日経アーキテクチュア』ともに見られる。「将来の変化」、「まだこれから」のどちらの論点とも違う、中国の現実をまえに、それが本当にわからないと日本の建築界が吐露している中国観であるが、この論点では中国に対する肯定的・否定的論調がともに見られる。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表 3.1.o.-1)を示す。

	建築雑誌(2)		新建築(1)		日経アーキテクチュア(2)
I	世界建築術の中で支那建築は其最も珍奇なるものの一つ	+			
(1)	K023-1-Ⅰ 伊東忠太 1908年				
Ⅱ					
(0)					
Ⅲ					
(0)					
Ⅳ	先が読めない	-	「とにかくトライしてみる」の精神である	+	自由主義体制が保証されているが、香港の将来はまだ不透明
(4)	K147-2-Ⅳ 日本の匿名建設実務者 1985年		S065-1-Ⅳ 迫慶一郎 2002年		N021-1-Ⅳ 編集部 1988年
					N053-1-Ⅳ アンソニー・ミラー+三宅 1995年

表 3.1.o.-1: 「よくわからない」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

伊東忠太は、一連の世界旅行の体験談の連載の合間の 1908 年に、旅行記とは別の形で「支那建築」というタイトルで中国建築論を発表している。これはビルディングタイプごとに中国建築の特徴を叙述しているもので、その冒頭において、「凡そ世界の建築術の中に就て、支那建築は其最も珍奇なるものの一なるべし」(K023-1)と述べている。よくこの記事を読むと、伊東はここで中国建築を「珍奇なるもの」と言いつつも、本文中では中国建築を主に宗教に従って分類し、それぞれについて細かい分析を加えている。途中彼自身がほんとうにわからないと言っているのは「漢人種の嗜好が如何にして発達したるやを詳にせず」という部分くらいであり、あとは「よくわからない」と言いつつも事細かに中国建築を描出している。伊東の言う「中国建築が珍奇」なのは西洋人にとってであり、日本人である自分はもっとよく中国を知っている、という主張がこの中国観には込められているようだ。実際彼の中国観は以下のように続く、「歐洲人の嘗て夢想し能はざる奇異なる形式は支那建築に於て縦横に經營せられたり、歐洲人の認めて不合理不自然なりとせる手法は支那建築において自在に運用せられたり、由来支那及支那人なる問題は猶ほ世界に於ける未知数なるが如く、支那建築も亦た建築界に於ける未だ解決せられざる好問題なるが如し」と言う。つまり、第 1 章でも指摘したように、この伊東の中国観は、中国を西洋人よりよく知っている日本人としての自分を確認するための肯定的なものなのである。

これに対し、Ⅳ期の『建築雑誌』と『日経アーキテクチュア』2 誌の中国観は、どれもよくわからない中国についての印象を率直かつ否定的に述べている。『建築雑誌』では、1985 年の建設実務者の座談会では中国でのビジネスについて「外国のインベスターも、それでは長いからいいか」というと、そこにも問題がある。逆に外国のインベスターが、合弁はできるだけ短い方がいい、その間で資金を回収し、利益を回収していくというのが、基本的なところじゃないか。政治体制が違っているので、先が読めない。このまま行くだらうという延長線上で考えるけど、いまひとつ、資本主義社会とは違った難しさがあるように思う」(K147-2)という中国観が掲載されている。『日経アーキテクチュア』の編集部は I.M.ペイの中国銀行香港支店ビルが上棟したときに、熊谷組がメインのコントラクターを務めるこの建物について大々的な特集を組んでいるが、建物の地元の評判についていくつかの談話を拾いながら当時の香港の様子を描写している。「地元、香港にはこんな評判もある。例えば、「あの三角形はピラミッドのイメージ。ピラミッドといえば墓。墓を形どった銀行とはまったく不吉だ…」等々。これらの批評は、超高層ビルが建ち並ぶ近代都市香港にあっても、依然大きな影響力を持つ「風水」の思想を感じさせる。自由主義体制が保証されているとはいえ、香港の将来はまだまだ不透明な部分が多い。そんな不安から、建物のデザインにも敏感になっているのだろう」(N021-1)、中国への返還が目前に迫った時期のこの発言は、1989 年 6 月の天安門事件前の事件を予言するような言い方にすら聞こえる。同誌では 95 年にノーマン・フォスターと大林組の JV が上海の都市開発整備公社の本社超高層ビルの基本設計を終えた記事を掲載している。フ

オスターアジア(ジャパン)所長のアンドリュー・ミラーは、これがフォスターにとって中国の初仕事であり、大林組はすでに多数の実績があるとはいえ日本資本を全く含まないプロジェクトは難しいなどの状況を示した上で、「米国のある大手設計事務所の極東担当ディレクターが、「中国はブラックホール。資金と時間を注ぎ込んでも吸いこまれる一方」と嘆いていた」というコメントを引き、「我々デザインチームにとって、中国がほんとうにブラックホールかどうかはまだ分からない。だが現在の仕事が、中国市場における第二大さんのプロジェクト獲得につなげていくための努力であることは確かだ」(N053-1)と言う。今の時点では「よくわからない」が、将来のために今はこのわからなさにつきあう、という態度であり中国観である。ちなみにこのプロジェクト「上海久事大厦」は2001年に竣工し、フォスターはのちに北京オリンピックのための国家プロジェクト「北京首都空港第三ターミナル」のプロジェクトを獲得している。このときの先行努力が実ったということだろう。いずれにせよ、ここで挙げた3つの中国観は、よくわからない、将来が見通せないことへの不安にさいなまれた、否定的な姿勢によるものだと理解できる。

一方『新建築』で迫慶一郎が残している中国観は、もうすこし違った形で中国の「よくわからなさ」を理解させている。中国がなぜわからないのかを明確にしたうえで、それをわからないまま積極的に読み変えようとしている。「楽観主義と紙一重で実はうまくいかないことが多いのだが、「とにかくトライしてみる」の精神である。これは中国の社会システムが未整理なことに関係があるのではないかと思っている。...逆にしっかりした洞察力をもっている人たちにとっては、この状態はもってこいだ。うまくいっている民間企業はその不陸だらけの今の状況を利用しているように見える。...高い位置でフラットになっている社会よりも、この状態が時には、より高いものを生み出す可能性をもっているように思える」(S065-1)という中国観は、わからないことを逆の視点に立ってそこに可能性、チャンスを見出そうとする中国への積極的な読解であり、これはI期の伊東忠太の、中国のことがわからないとは言っても西洋人よりはわかっているだろうという姿勢ともつながってくるものと思われる。

5	否定的(3)	中立的(0)	肯定的(2)
I (1)			
II (0)			
III (0)			
IV (4)			

図 3.1.o-1: 「よくわからない」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.o-1 のようになる。「よくわからない」の論点は、数はそう多くないとはいえ戦前からある古い論点であり、肯定否定の論点が混在していることがわかった。

p)感情的親近感: 5 中国観

「感情的親近感」に関する中国観は、Ⅳ期の『建築雑誌』、『日経アーキテクチュア』ともに分布が見られない。ここでの中国観はどれも肯定的な態度の記事である。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表 3.1.p.-1)を示す。

	建築雑誌(4)	新建築(1)	日経アーキテクチュア(0)
I (1)	満洲の建築装飾は面白く、言ひ知れぬ味がある K026-1-I 大江新太郎 1908年	+	
II (2)	満洲に残してきた建築物が懐かしい K078-1-II 岡大路 1954年 限りなく懐かしい満洲時代 K081-1-II 奥田勇 1957年	+	
III (1)	身体的に身近な感じですべてのものが伝わってくる K123-2-III 梅村魁 1976年	+	
IV (1)		「大人の風格」をそなえた中国人に会うことが自分の人生勉強になった S008-1-IV 相田武文 1985年	+

表 3.1.p.-1: 「感情的親近感」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

のちに日光東照宮の修復や明治神宮の造営で知られる大江新太郎は、内務省技師だった1905年、日露戦争の直後に伊東忠太、佐野利器、大熊喜邦らとともに遼陽、奉天(現瀋陽)などを訪問し、日本軍が現地に滞在している間に官命を受けて2カ月近く宮殿や廟など普通は調査できないものを見てまわったという。このときの調査結果を「満洲に於ける建築装飾に就いて」というテーマで建築学会の定期講演会で発表しており、伊東の旅行談と前後して7回にわけて連載している。大江の記事は満洲建築における装飾の問題に限定して、その「形と色」、「形における模様と繰り形」^{モルディング}、「模様における種類と適用の如何」についてそれぞれ述べており、葉がけ彩瓦の代表例として奉天の金鑾殿内崇政殿の屋根破風妻壁をとりあげこれを絶賛している。「意匠は実に豊富で、自由で、奇抜で、とぼけて、神出鬼没、譬え難きところのものがあります、善意に言へば斯うですが、悪意に言へば味噌も何もごつたで、丸で、小供の玩具箱をひつくり返した様な、頑是ない、聞き分けのないところが有ります、それ故、満洲の建築的装飾は、(単に建築的装飾といはず、^{オモチャ}凡百の工芸美術は総て)一見して先ず無邪気に嬉しい、再視して何んだか斯う腹立たしい、三察して之を巨細に観察研究して行くと、段々面白い処、良い処が出て来て、其処に言ひ知れぬ味があるので御座います」(K026-1)。大江はここで、中国東北部には木材と石材が極めて乏しいために、^{クレイワーク}瓦細工ですべてを覆い彩色を施すようになったと推測し、瓦細工とそれを用いた模倣的な装飾手法を高く評価し、それについて理由を開陳している。すなわち「豫てから私かに持つて居るのですが...建築材料の模倣といふことであります、一体高貴な品位のある材料を、低廉な材料で模倣して、その効果^{エフェクト}を現物^{ホンモノ}に見せかけるという所業は、一般に技術を墮落せしむる一つの罪惡として、常に甚だしく賤しめられて居ります、たとえば大理石の模倣とか、^{マーブル}青銅の模倣とか、^{ブロンズ}唐木の模倣とか、孰れも一概に排斥されて居りますが、私の小見を以てすればこれは聊か程々にして置きたいと思ふのであります」(K024)¹⁶⁾と言い、出来栄えがよければある材料が別の材料を模倣するように使ってもいいではないか、それは建築技術における技量である、ということを行っている。日本は「素材」という言葉にもあるように、材料が素の状態であることを重視し、そこではある材料が他の材料を真似るような模倣、擬態は否定的にとらえられるのが通常である。それに対し中国東北部では、材料上の制限もあって材料を覆うクレイワークが発達し、なんでも薄い漆喰と釉薬で覆ってしまう。それを必要以上に日本の側から低くしか評価しないのはおかしい、と言う大江のこうした気づきは、材料に対する日中間の根本的な違いを指摘しており、それは例えば2002年に建築家の佐藤尚巳が上海近郊での設計の経験を振り返って、「文化的な背景の違いもあり、派手で目立つ建築を好む一方で、洗練された詳細や高品質な仕上げといったことにはあまり関心を示さない国民性がある」(S064)¹⁷⁾というところまで続くものであると思われる。いずれにせよ大江のこの中国観は、建築の詳細において日本と中国の違いを具体的に認め、肯定的に評価しているものである。

戦争直後にもこうした「感情的親近感」を示す中国観が見られる。戦後の『建築雑誌』の最初の中国関連記事は1950

16) 大江新太郎「満洲に於ける建築装飾に就て(第二百四十五號の續き)」1908年10月号 (K024)

17) 佐藤尚巳「南通英瑞会館」2002年3月号 (S064)

年代中期に入ってからである。元満洲国建築局長の岡大路は終戦後ハルビンと瀋陽で数年を過ごし、1947年に引き上げてきてこう書いている。「皆さんの中には停戦と同時にあの混乱の中から満洲を引揚げられた人も少数ではないでしょうし、又且つて満洲を視察された人も多いことでしょうが、其の後の満洲は何うなつて居るか、我々が残して来た力作の建築物は、古蹟建築などは何う取り扱われて居るかと懐かしく思われるでしょう。」(K078-1)と書き、瀋陽の街の様子や日本人が建設した建築のようす、戦争直後からの中国の変容や施工の状況などまで報告している。「敗戦」ではなく「停戦」、「捕虜」という言葉が使われていないところに戦後からの時間が経っていないなまなましがあるが、文章自体は中国東北部に対する感傷的ともいえるような温かみに満ちている。この記事に前後して戦後の引揚者による中国の現況報告といった感の中国関連記事がいくつか残っている。1957年4月号には大陸科学院建築学教室をとりまとめ、1942年に東京大学に異動した小野薫についての追悼文が集められており、坪井善勝などが寄稿している。当時の大陸での日本の建築研究者の生活がよく見える文集だが、中でも鳳建築設計事務所長の奥田勇は「今憶い出しても限りなくなつかしい満洲時代もすでに遙か遠い過去のものとなり」(K081-1)と記し、追憶の対象として中国が認識されていることがわかる。

建築構造が専門の梅村魁は、中国建築学会からの要請で実現した1975年の初訪中でさまざまな中国観を残しており、多くは自身の専門である耐震構造についてのものだが、中に「感情的親近感」を吐露している部分がある。「まったく白紙の状態での中国行であった。しかし3時間少して北京に着いて見ると、遣隋使、遣唐使の苦闘は全く夢の世界で、何とはなしに文が読めるということは、他国を感じないまま十日間をすごしてしまった。その間に知りあった人達の好意によることは勿論であるが、西欧文明が我々にとって、直接肌から感じにくいのに反して、極めて身近い感じですべてのものが伝わって来ることに驚いた。これはイデオロギー以前の問題である」(K123-2)という感想は、構造設計者として客観的な文章を多く残した梅村の記事の中では異色の中国観であると言える。

建築家の相田武文は、1985年に『新建築』に中国の旅についての連載エッセイを残している。香港、上海、ウイグル自治区の都市、ハルビンと都市ごとにそこを訪れたときの印象を軽いタッチで書いたものである。開放されてはきたものの日本と比べてまだだいぶ開発の遅れている中国社会について、4回の連載の最後に相田はこう言う、「一旅行者の眼で見た都市や建築は、それなりに興味をひかれるものがありましたが、私にはモノよりも、むしろヒトに心をひかれました。「大人の風格」をそなえた中国人に会うことが自分の人生勉強になったように思います」(S008-1)。香港では現代建築はその成立事情が日本と違いすぎ、上海では学生の教育のまだ質が低いことを知り、ウイグル自治区の都市では古建築や遺跡の保存状態が良くないことを目にした相田は、最後のハルビンで、自分の講義の聴衆が熱心で学生が明るくまじめであることなどに注目し、この国はモノよりヒトだといってまとめている。自分の本来見るべき対象であるはずの、モノとしての建築から視点をずらし、ヒトを見ることで中国を見下すことを避ける、という態度が、遅れた中国をなるべく肯定的に見ようとするひとつの方法として相田の中で実現している。これは特にⅢ期からⅣ期初の、中国の成長が立ち遅れ日本がそれを自由に観察できない時期だからこそありえた方法である。

また、中国観として抽出されるまで要約的な表現になっていないのでここでの一覧には位置付けられていないが、中国関連記事の中には、戦前戦中に日本人が建設した建築について、戦後に振り返り「感情的親近感」の込められたものがいくつか見られる。大阪の建築家稲村純は1985年にかつて自分たちがすごした町を再訪するということで訪中団のツアーに参加したところ、瀋陽近郊の文官屯に、日本人が作った建物が残っており、現地の中国人が改装する上でぜひ建設当時の状況を知りたい、と思っているという報告を『日経アーキテクチャ』に発表している(N005)¹⁸⁾。矢橋大理石(株)の顧問の折戸嗣夫は、1997年に『建築雑誌』の「会員の声」欄で、自分が1942年に現地石材会社責任者としてかかわった旧上海日本総領事館を50年ぶりに再訪し、建物がまだ使われていることを感激しながら書き記してい

18) 稲村純「中国で旧日本建築再生の動き 現地に情報提供求める声」1985年9月23日号(N005)

る(K181)¹⁹⁾。これらは近過去に実際に自分たちが関わった中国というものが存在し、そこを実際訪ねることができるようになったときに、強い郷愁が中国に対して湧いた、日本人による中国観である。

5	否定的(0)	中立的(0)	肯定的(5)
I (1)			
II (2)			
III (1)			
IV (1)			

図 3.1.p.-1: 「感情的親近感」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.p.-1 のようになる。「感情的親近感」の論点においては、中国観は戦前から分布しており、それらは一貫して肯定的な論調を帯びたものである。

19) 折戸嗣夫「中国残留建築への愛情」1997年12月号 (K181)

q)コンペ：4 中国観

「コンペ」に関する中国観は、『建築雑誌』には分布が見られず、IV期の『新建築』、『日経アーキテクチャ』のみに見られる。この新しい論点の中国に対する態度は、肯定的なものと否定的なものの両方が見られ、短期間で振幅が大きい。以下に建築メディアを横軸、時期を縦軸にとり、中国観の論題種別と肯定的否定的態度の評価をつけた中国観の一覧(表 3.1.q-1)を示す。

建築雑誌(0)	新建築(3)	日経アーキテクチャ(1)
I (0)		
II (0)		
III (0)		
IV (4)	従来、中国の案には、伝統的建築形態を模するものが多かった S002-1-IV 黒川紀章 1985年 設計競技は審査の経緯が不透明で、評判が悪かった S084-1-IV 松原弘典 2003年 コンペの審査システムはクリアでクリーンという実感 S170-1-IV 大野勝 2008年	海外事務所には純粋にデザインを求めるのでコンペに参加容易 N112-1-IV J・スコット・ギルボーン 2003年

表 3.1.q-1: 「コンペ」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

1985年2月号の『新建築』には、前年1の日新工業建築設計競技「現代の方舟」の入選発表が掲載され、これに北京市建築設計院勤務の中国人が一等入選したために、審査講評において審査員の中国観を把握することができる。委員の一人で建築家の黒川紀章は、「1等の李案は、中国に伝わる伝統的な空間の概念を現代建築の中へ巧みに導入して、空間のもつ演劇性をうまく表現している、従来、中国からの応募案には、伝統的な建築形態をそのまま模するものが多かったのに比べて、たとえば天円地方説など、中国の宇宙観を現代建築の表現の中に封じ込めた点は高く評価したい」(S002-1)、と言う。当時の黒川は「共生の思想」を唱え、NHKの歴史番組を見て啓発され中国前漢時代の書『淮南子(えなんじ)』の中で述べられている天円地方説に注目して中国の宇宙観や意味論に着目していた時期である。このコンペと前後して北京の日中青年交流センターの設計にかかわり始め、また北京の清華大学の客員教授にもなっている。本コンペの応募案と黒川個人の関係がどのようなものだったかは不明だが、審査委員長の建築家芦原義信も「1等入選案は中国からのものであり、2等西尾案と最後まで競った。しかしこの1等案に淮南子の哲学があり、それが現代の方舟として見事に表現されている」といい、おおむね黒川の評価に沿っている。相田武文も「この案はコンセプト、空間構成ともに高いレベルを示していたように思える」とほぼ賛同しているが、建築家大高正人は「中国の精神生活の中に生きてきた東洋哲学を、円と正方形の空間に表現しているが、それが方舟になるのでしょうか？中国では、今ひとつの意味を持ってきているのであろうが、われわれの社会では、無原則な復古のように思われる」と、中国モチーフに対して必要以上に重きを置かない態度をとっている。宮脇檀はもっとはっきりと「1等の李案が明らかに中国伝説と気学に基づく中国人案と分かっていなかったら、はたして1等になっていたかどうか」と言い、中国の歴史的なものへの理解は示しつつも、「中国の彼、百万円もらって人生狂いはしないだろうかと心配」と日中の経済格差に触れるのも忘れていない。ここでの彼ら審査委員の中国観には、ポストモダン全盛のこの時代、日本の建築家の知識人としての振る舞いがそのまま現れている。その中国古典のいわれを他の人が知らないミステリアスなものとしてとらえ、結果としてそれを知る自分を相対的な高みに上げるために中国観が使われている。黒川のコンペに関する言説は、ここでの自分たちの判断を特化するために、対比的に今までの中国からのコンペ案が保守的であると否定的に位置付けている。

筆者は、北京大学建築学研究中心に所属しながら伊東豊雄と北京大学のJVで北京の中央電視台本社屋コンペに参加したときの経験を『新建築』紙上で回想している。当時はすでに2008年のオリンピックに向けて北京で国際コンペが多く実施され、オリンピック公園や国家大劇院などが設計者選定されていたが、筆者はそれらを踏まえた上で「中国の設計競技というと…審査の経緯から結果発表にいたるまで不透明でよくわからないことが多く評判が悪かった」(S084-1)と言っている。このコンペではレム・コールハースが勝利し、伊東チームは結局次席におわるわけだけれども、筆者によると結果発表の仕方はコンペ参加者に対してフラストレーションがたまるものであり、「競技の途中で主催者が

公正を期そうとしていたのは理解できたが、過程の公開性、透明性という意味では不満も多く残るものだった」と言っている。これも中国のコンペ一般に対する否定的な印象を表した記事だと言えるだろう。

一方5年後の2008年になると、佐藤総合計画の大野勝の印象はほぼ正反対の肯定的なものである。佐藤総合計画は2001年の北京オリンピック会場の全体施設計画コンペ以降中国とのビジネス上の関係が続き、いくつか実作を実現している。そうした経験を踏まえて大野は、「中国の「公共」施設の設計はすべてコンペによることとされ、大規模な施設では国際コンペが義務付けられてもいる。中国でスポーツ施設などの「公共」建築の設計コンペに多く参加してきたが、その経験からすると、コンペの審査システムは日本で考えられている以上に、クリアかつクリーンであるというのが実感だ」としている。「公共」という限定付きとはいえ、ここでの大野の中国のコンペ評は総じて高いものと言える。類似した積極的な評価は、アジア全般でプロジェクトを進める設計事務所 RTKL の日本事務所代表の J・スコット・ギルボーンも述べている。彼は2003年当時の『日経アーキテクチャ』の記事において、2、3年前から上海オフィスの設立を進めていることを明かしつつ、「日本ではほとんどが民間のプロジェクトで、主に商業施設を手がけてきた。公共の仕事はコントロールが難しく我々の力を発揮しにくいので、積極的に取ろうとは考えていない。逆に、中国では公共の比率が高い。彼らは海外の設計事務所には純粋にデザインを求めるので、コンペなどでも参加しやすい」という。最初の基本設計だけやってその実現はローカルに任せる、そう割り切れば中国の公共の仕事は、日本にありがちな各方面との折衝や根回しが必要なく、面倒なことなしに純粋にデザインフィーが取れる、という考え方である。大野やギルボーンの中国のコンペ観は、黒川や筆者のそれとは正反対であり、短い期間で大きく評価が入れ替わったことを示している。

4	否定的(2)	中立的(0)	肯定的(2)
I (0)			
II (0)			
III (0)			
IV (4)			

図 3.1.q-1: 「コンペ」論点における中国観の時期-論調散布図

このように見てきた上で各中国観を散布図上に配置すると図 3.1.q-1 のようになる。「コンペ」の論点においては、関連する中国観が1980年代後半からと新しいものしかなく、かつ学会機関誌である『建築雑誌』には記事がなく、2つの商業建築誌にのみ記事が分布していることがわかる。またそこでは短い期間に論調が否定的なものから肯定的なものへと入れ替わったことが観察された。

3.2. 繰り返される論調の傾向

ここまでで、繰り返される中国観における17の論点ごとに、各中国観が中国に対して肯定的否定的どちらの論調をとっているか、中立的な論調も含めてレビュー形式で言説分析を行い、その発現時期と論調の関係を散布図にして表示した。ここでこれらを比較し、繰り返される中国観の反復のパターンについて考察する。17の論点を、散布図における中国観の分布状況において比較すると、以下の3つにわけることができる。

1. 肯定的否定的論調のどちらかに一貫して中国観が反復する論点:7つ
 2. 肯定的否定的論調が混在して中国観が反復する論点:7つ
 3. 肯定的と否定的論調が一定期間ごとに交替して中国観が反復する論点:3つ
- である。

以下ではそれぞれを「一貫型」、「混在型」、「交替型」と呼び、各類型において繰り返される中国観の時間的な分布とその論調の関係を見ながら、反復のパターンと実際の中国観の内容の関係について考察を加えてゆく。

肯定的否定的論調のどちらかに一貫して中国観が反復する論点:「一貫型」7つ

肯定的ないしは否定的論調どちらかの中国観が一貫して反復する論点の散布図を以下にすべて示す(図 3.2.-1)。「e)スピード」「f)ものづくりへの態度」「g)将来の変化」「k)持続可能性」「m)まだこれから」「n)維持管理」「p)感情的親近感」の7つがこのカテゴリに分類された。

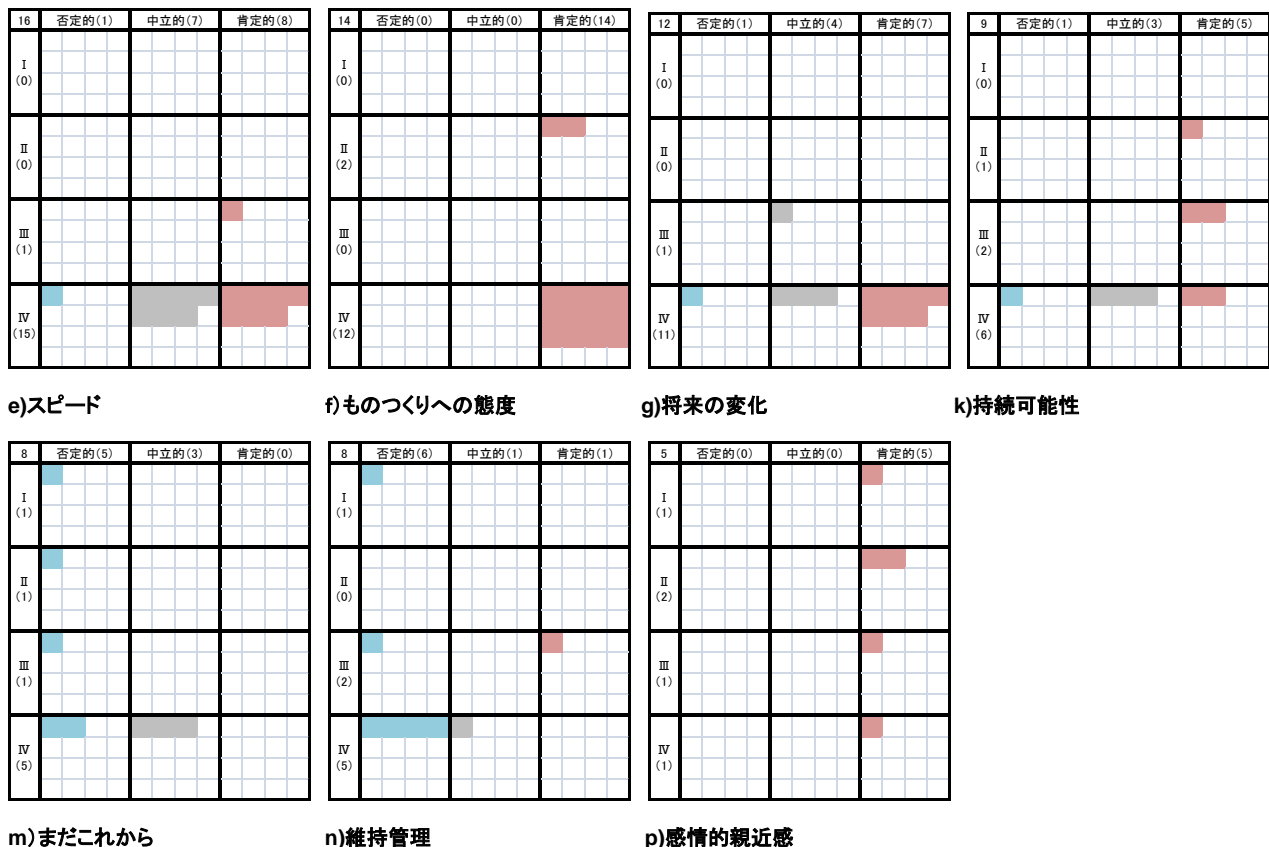


図 3.2.-1: 肯定的否定的論調のどちらかに一貫して中国観が反復する論点「一貫型」7つ

7つのうち一貫して中国観が肯定論調なのは「e)スピード」「f)ものづくりへの態度」「g)将来の変化」「k)持続可能性」「p)感情的親近感」の5つである。このうち、「e)スピード」「f)ものづくりへの態度」「g)将来の変化」の3つは、日本にない

ものを中国が持っているという言い方で中国に対する肯定的な評価を下している姿勢が明確である。それは「日本で30年かかった変化が3年でなされている感じでもあり」(e)におけるS165-1、+)や「日本で無理なシステムは、中国ではどこにもないからやりましょうとなる」(f)におけるS154-1、+)、「外国資本に市場を開放した成果は着実に実を結びつつある」(g)におけるS055-2、+)などの中国観において見ることができる。いわば日本からの「あこがれ」の中国認識でもあるし、同時に中国にはあるものが日本にはないという「ないものねだり」の日本認識の裏返しにもなっている。中国を肯定評価することが、日本という自我への否定的な評価とつながっていて、中国を手放しに評価するというよりは、日本の不足する部分を揶揄するために、あるいは日本への警鐘的な意味合いを持たせるために、中国観を肯定的な論調で語っているというようにもとれる。

「k)持続可能性」における中国への肯定論調は、上記3つほど明確にその中で日本との比較を明確にしているわけではないが、そのなかには日本の否定的評価の裏返しになっているものもある。「中国ならではの環境形成のパワーを見せられた」(k)におけるS161-1、+)は、(日本だと環境形成の合意に時間がかかるのに)中国では決断や施工の速度が速い、という主旨の中国観であり、そうしたもののなかに、間接的な日本卑下を見ることができる。

5つの論点のうち純粋に中国を取り出してそれに肯定的評価を与えているのは「p)感情的親近感」のみである。「身体的に身近な感じですべてのものが伝わってくる」(p)におけるK123-2、+)は、日中間の格差の大きかった発現当時の状況からは独立した、率直な中国印象として読める。逆に言えば、5つの肯定論調「一貫型」のうち、4つまでが何らかの日本の否定認識と関連しているということになる。

一方否定論調の中国観で占められている「m)まだこれから」「n)維持管理」の2つの論点は、確かに中国に対して一貫して否定的な論調をとっているが、それらは全面的に中国を否定するようなものではなく、むしろさりげなく、あるいは巧妙に、頭ごなしの中国否定を避けているように見える。例えば「m)まだこれから」の論点における「中国にはまだ自由に訪問できず儀礼的すぎる」(m)におけるK106-1、-)という中国観は、「今は遅れているがこれから変わる(かもしれない)」という、未来への可能性を想起させつつ現状での判断保留的な態度とともに語られた中国観である。「n)維持管理」でも同型の態度が見られる。「建築物の修繕とか改良とかいふことの出来て来ない」(n)におけるK017-2、-)は、「建築そのものにはいいものもある(かもしれない)のにその管理運用ができない」という、建築の本流への判断は保留し傍流である維持管理のみを批判しているようにも見えるからである。実際この記事の執筆者は、同時に同じ記事の中で中国の建築装飾そのものについては高い評価を残している。

すなわち「一貫型」のこれらの論点における中国観は、対象の肯定否定論調にあいまいさを残している。肯定するときには自己否定の裏返しとして行い、対象を否定するときはそこに肯定の余地を残してはっきりとは否定しない。あいまいな部分を留保することで、逆に肯定的否定的論調を明確にするという構図がそこにはある。

「一貫型」のパタンにおける各中国観の論調は、内容においてあいまいさを含んだ修辭を帯びながらも、一貫して肯定否定という論調に偏っているという点で、対中評価の態度において安定性をもっていると言える。

肯定的否定的論調が混在して中国観が反復する論点:「混在型」7つ

肯定的と否定的論調双方の中国観が同じ時期に混在して反復する論点の散布図を以下にすべて示す(図3.2.-2)。「b)建設ラッシュ」「h)施工精度」「i)アドリブ的」「o)よくわからない」の4つはその混在傾向が明確で、「c)古いもの」「j)中国の役所」は「一貫型」との混合、「d)大きい多い」は「交替型」との混合として、計7つがこのカテゴリに分類された。

これら7つの論点において特徴的なのは、肯定と否定の論調がはっきりわかるものとそうでないものがある、ということである。すなわちこの7つは、中立的論調の中国観の有無によってさらに2つに分類できる。「i)アドリブ的」と「o)よくわからない」の2つの論点は中立的論調の中国観が分布しておらず、これらの論点は、語る人ごとにはっきり意見が

わかれるテーマであるということになる。i)においては、アドリブ的な社会＝物事をその場で決めて進んで行くような社会が、「先が読めない」(i)における K147-2、－)とはっきり否定されるか「ここは世界に類例のない都市計画実験をしているのではないか」(i)における S049-1、+)と高くもちあげられるかしている。o)においては、今の中国のよくわからない社会＝変化が速くて将来の見通しが立たない社会が、「資本と時間を吸い込むだけのブラックホールかどうかはまだ不明」(o)における N053-1、－)とネガティブにとらえられるか、「とにかくトライしてみる」の精神である」(o)における S065-1、+)とポジティブにとらえられるかしている。つまり、記事執筆者ごとに、かなり明確な価値判断が行われて、はっきりとした肯定ないしは否定の論調とともに中国が語られている。一方それ以外の5つの論点では、肯定否定の各論調の混在に加えて、中立的な中国観も一定数の分布が見られ、竹を割ったようにすっぱり肯定否定で中国が語られることはない。

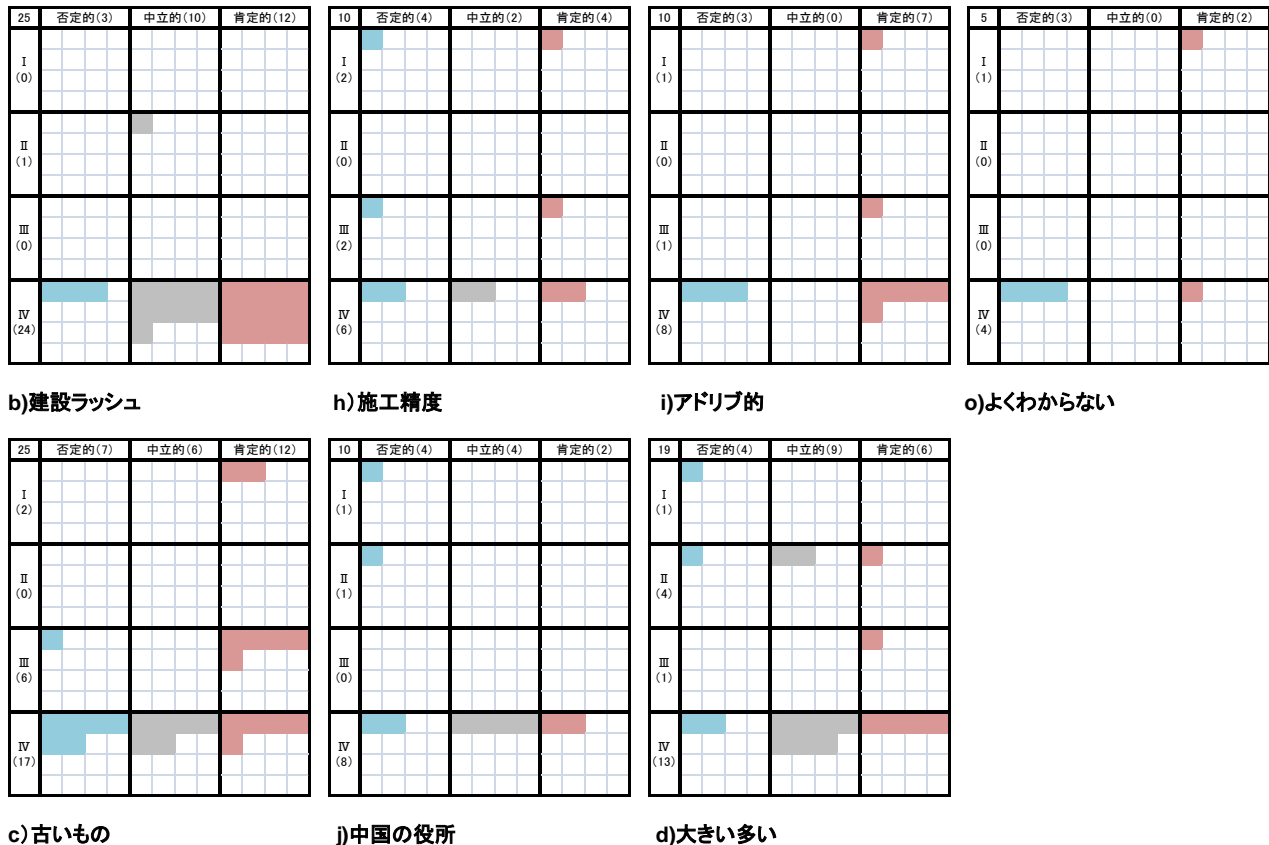


図 3.2-2: 肯定的否定的論調が混在して中国観が反復する論点「混在型」7つ

本節では、日本の建築メディアが中国を語るときに繰り返し着目する点を扱っている。「混在型」の論点においては、白黒をつけやすい、評価をしやすい着目点とそうでないものがあるというように理解できるだろう。白黒をつけやすいというのは記事執筆者がその論点に自身の判断を重ねやすいということであり、そうした論点はつまり、記事執筆者が自我とその論点との間の距離をうまく測れているようなものだ。例えば「i)アドリブ的」では「変化の多い社会を肯定するか否定するか」が、「o)よくわからない」では「先が見えない状態に未来を見るか不安を見るか」という問題が問われており、これらは、少なくともこの中国観が発現した当時の記事執筆者にとって、自我との関係で考えやすい、切実な問題として存在しえたと、それが執筆者の対中論調を明確にさせ、中立的な論調を生まなかった要因であると思われる。一方で白黒をつけにくいというのは、執筆者がその着目点と自我との距離を測りづらく、時代の中の大きな問題としてしかその着目点を扱えていないことに由来している。大きな問題は関係する利害も複雑で、責任の所在が明確でなく、個人には簡単には判断が下せない。「b)建設ラッシュ」という事象がいいのか悪いのかは個人の立場からは判断しづらいし、「c)古いもの」という論点において古いものと新しいものの矛盾や衝突がいいのか悪いのかは一概には言い難い。執筆

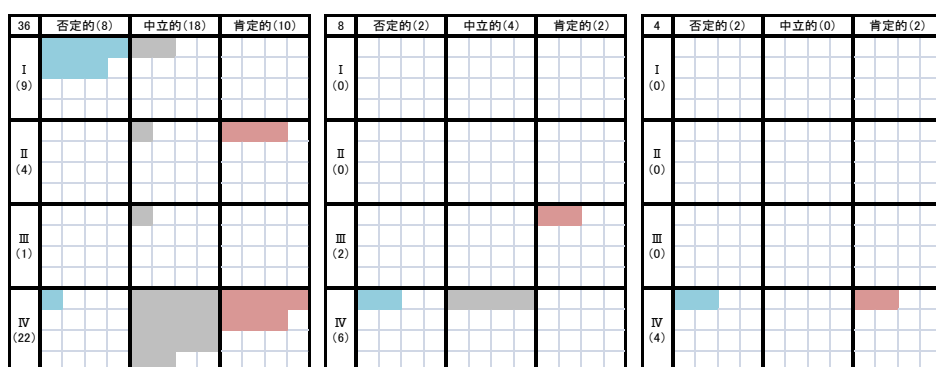
者はこれらの問題に自我との関係だけでなく、時代との関係についての解釈を述べなくてはならず、そこが各中国観の論調をあいまいにし、中立的なその分布を増やしていると理解できよう。

こうした「混在型」のカテゴリにある論点の中国観は、確かにそれは論点分布全体を見れば肯定否定論調の「混在」が見られるが、肯定否定の論調がはっきりわかるかどうか、という点から見れば、中立的論調が少ない個別の肯定否定の判断がはっきりしている論点是对中評価の態度が安定していると言え、一方で中立的論調を一定数含む個別の判断がゆらぐ論点是对中評価の態度が不安定であるとみなすことができる。

「混在型」のカテゴリにおける各中国観の論調は、それらはさらに中立的論調を含まない、対中評価の態度において安定している2つの論点(「i)アドリブ的」と「o)よくわからない」)と、中立的論調を含み、対中評価の態度において不安定なその他の論点に二分できるというように言える。

肯定的否定的論調が一定期間ごとに交替して中国観が反復する論点:「交替型」3つ

肯定的と否定的論調の中国観が一定期間ごとに交替して中国観が反復する論点の散布図を以下にすべて示す(図3.2.-3)。「a)中国の人」「l)部分と全体」「q)コンペ」の3つがこのカテゴリに分類された。



a)中国の人

l)部分と全体

q)コンペ

図 3.2.-3: 肯定的否定的論調が一定期間ごとに交替して中国観が反復する論点 「交替型」3つ

3つのうち「q)コンペ」はIV期の中での否定から肯定への論調の交替が見られるが、他の2つはおおむね期ごとに論調のまとまりとその交替を見ることができる。すなわち「a)中国の人」はI期で否定的だったのがII期で肯定的になって今に至り、「l)部分と全体」はIII期で肯定的だったのがIV期では否定的になっている。これら3つの論点では、ある時点で中国に対する印象がドラスティックに変わっているということができよう。縦軸での中国観の分布とともに各中国観の内容もさらに観察してみると、「a)中国の人」においては、I期に「支那人の言は日本でも同じでいつでも誇大すぎて居る」(K015-1, -)と中国人に対する蔑視的な中国観が否定的に語られているのに対しII期の満洲事変以降に日本人が大陸に渡航すると「満洲建築労働者は愛すべき使いよい労働者」(K059-1, +)と中華民国や中国東北部の中国人に対しては評価を高くしている。「l)部分と全体」においては、交流のチャンネルが限られていたIII期には「われわれよりも総合技術としての設備技術のありかたがある」(K121-2, +)、というような言い方がされていたのに対して、IV期に実際に両国のビジネス上の付き合いが始まると「すべてが縦社会で横の連絡がむずかしく日本のような管理が苦手」(K147-5, -)と言われるようになる。「q)コンペ」においては2000年代初頭までは「設計競技は審査の経緯が不透明で、評判が悪かった」(S084-1, -)のが、2000年代後半には「コンペの審査システムはクリアでクリーンという実感」(S170-1, +)とコンペへの印象が全く変わっている。

「交替型」のカテゴリにおける各中国観の論調は、時代の影響を大きく受けており、時代がかわれば各執筆者の論調もそれとともに変化が見られる。その意味では対中評価の態度としては不安定なものであると言える。

小括：反復する中国観における時期と論調の関係分析—3つの論調パタンのもつ安定性と不安定性

本節では、17 論点に分類された繰り返される中国観を、その繰り返しの 3 つのパタンごとに分析してきた。1 つ目のパタンである、肯定的否定的論調のどちらかに一貫して中国観が反復する 7 つの論点「一貫型」は、内容においてあいまいさを含んだ修辞を帯びていながらも、一貫して肯定否定という論調を守っているという点では、どちらの側の評価であれ、対中評価の態度として安定したものであると言える。2 つ目のパタンである、肯定的否定的論調が混在して中国観が反復する 7 つの論点「混在型」は、それらはさらに、中立的論調を含まない対中評価態度の安定している 2 つの論点と、中立的論調を含んだ対中評価態度の不安定な 5 つの論点に二分できる。3 つ目のパタンである、肯定的と否定的論調が一定期間ごとに交替して中国観が反復する 3 つの論点「交替型」は、その論調は時代の影響を大きく受けており、時代がかわれば各執筆者の論調も変化し、対中評価の態度としては不安定なものであると言える。

つまり、3 つの繰り返しパタンは、対中評価の態度において安定したもの（「一貫型」と「混在型」のうち中立的論調を含まないもの）と、不安定なもの（「混在型」のうち中立的論調を含むものと「交替型」）にさらに分類が可能で、前者は、執筆者が自我との関係で語ることでできる論点として発現しており、後者は、執筆者が時代との関係で理解している論点として発現しているというように理解できる。この関係を表にして以下に示す。

一貫型		安定した中国観 自我との関係で身近に語られる中国
混在型	中立的論調なし	
	中立的論調あり	不安定な中国観 時代との関係で大きく語られる中国
交替型		

表 3.2.-1: 繰り返される中国観の分類 3つの繰り返しのパタンと2つの対中態度

また、これらの繰り返される中国観は、古びて消えてゆくものや新しく出現するものがあることがわかる。たとえば「f)ものづくりへの態度」はⅡ期とⅣ期には中国観の分布が見られるのに、途中のⅢ期にはまったく分布が見られない。これはこの論点が時間をおいて再出現しているととらえられるし、こうした過去の分布を見れば、今頻繁に出現している論点、たとえば「e)スピード」の中国観が、いずれ消えていってしまうことや、今は分布が見られないが昔出現していた論点、たとえば「p)感情的親近感」の中国観が、また出現するかもしれないことは十分に予測可能である。ここで作成した論点ごとの散布図における中国観の分布状況は、21 世紀初頭の現時点で過去を見た、繰り返される中国観の現状であり、それはつねに動的であって、今までも変わってきたし、これからも変わっていくものである。そうした状況にあって、繰り返される中国観の論点には安定なもの不安定なものがある、という構造は今までの中国観において見られたものであり、この構造自体は今後もある程度有効であり続けるものと思われる。

3.3. 第3章まとめ:自我と時代との関係で規定される複層的な中国認識

第3章をまとめると以下ようになる。

3.1.節では第1章、第2章で抽出した『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』の3つの建築メディアにおいて出現が観察された合計311回の中国観について改めて通覧し、類似する説明や共通の述語をもつ中国観を取り出して整理したところ、全部で17の論点に分類できた。

3.2.節では、17の論点ごとに、繰り返される中国観の中国に対する論調を、肯定と否定の間の7段階評価でレビュー形式の内容分析を行い、中国観の時期-メディア-論調分布の一覧を作成した。そこからさらに時期-論調の散布図を作成し、17の論点における繰り返される中国観の比較分析を行ったところ、17の論点はその論調と繰り返しの関係において3つのカテゴリ、「一貫型」、「混合型」、「交替型」のパタンに分類することができた。「一貫型」は、肯定的否定的論調のどちらかに一貫して中国観が反復するものであり、内容においてあいまいさを含んだ修辭を帯びていながらも、一貫して肯定否定という論調を守っているという点では、対中評価の態度において安定したものであると言える。「混合型」は、肯定的否定的論調が混在して中国観が反復するものであり、それらはさらに、中立的論調を含まない安定な対中評価態度を持つ2つの論点と、中立的論調を含んだ不安定な対中評価態度を持つ5つの論点に二分できた。「交替型」は、肯定的と否定的論調が一定期間ごとに交替して中国観が反復するものであり、その論調は時代の影響を大きく受けており、時代がかわれば各執筆者の論調も変化し、対中評価態度は不安定であると言える。つまりこれらの3つの繰り返しパタンは、対中評価の態度において安定したもの（「一貫型」と「混在型」のうち中立論調のないもの）と、不安定なもの（「混在型」のうち中立論調を含むものと「交替型」）にさらに分類が可能で、前者は、執筆者が自我との関係で語ることで論点として発現しており、後者は、執筆者が時代との関係で語っている論点として発現しているというように理解できる。また本章の最後には、繰り返される中国観の論題は、今までもこれからも変化を続けて行くと思われるが、その中に安定なものと不安定なものがあるという構造自体は継続してゆくのではないかとすることも指摘した。

以上、『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチュア』の繰り返される中国観を検証した結果、当該建築メディアに見られる日本の建築界における中国情報の繰り返しの構造の傾向は、「自我と時代との関係で規定された複層的」なものであるとすることができる。

終章：日本建築世界の中国認識－建築メディアにおけるその構造

筆者は本書において、1887年から2008年の、日本建築界の建築メディアにおける中国観を三章にわけて検討した。そこで究明すべき研究の主題は以下の3点に集約されていた。

- 1.日本の建築界の中国に関する記述はだれがどのように伝えてきたのか
- 2.日本の建築界は中国のどの部分について着目してきたのか
- 3.日本の建築界が繰り返し持つ対中論調にはどのような傾向があるのか

以下、これらの主題をめぐる本書で論じてきた内容を要約するとともに、日本建築界の中国観について、若干の結論的考察と今後の課題・展望を記しておきたい。

4.1. 研究のねらいと成果

4.2. 研究の3つの主題についての結論

日本の建築界の中国に関する記述はだれがどのように伝えてきたのか

日本の建築界は中国のどの部分に着目してきたのか

日本の建築界が繰り返し持つ対中論調にはどのような傾向があるのか

4.3. 今後の課題と展望、動いて見える半他者

今後の課題と展望

動いて見える半他者

4.1. 研究のねらいと成果

日本の建築界は中国をどのように認識してきたのか、これが本論の中心の問題提起であった。この問題を考えるために、以下のより具体的な3つの検討すべき研究の主題を設定した。

1. 日本の建築界の中国に関する記述はだれがどのように伝えてきたのか
2. 日本の建築界は中国のどの部分について着目してきたのか
3. 日本の建築界が繰り返し持つ対中論調にはどのような傾向があるのか

日中の建築技術者の往来が増え、建設における両国関係も多様になりつつあるのに、従来の日本の建築界における中国認識は、専門化したアカデミックな限定的中国研究か、建築に特化していない簡便でジャーナリスティックなものを通してしかなされていなかった。日本の建築界にとって、今日に有用な、かつ全体的な中国認識を形成するには、中国論を、学術的と職能的な世界の間のふさわしいレベルで問い直す必要がある。

そこで本研究では、建築界の中で読者群という認識主体を擁する、複数の建築メディアを分析対象にすることとした。書かれた記録である建築メディアの記事を分析対象にすれば、分析の再現性を広く担保できるのと、複数の建築メディアを対象とすれば、建築界というあいまいになりがちな領域の一部分を明確に描きだして学術と職能の間での考察が可能になると思われたからである。読者のアクセスが容易で、建築に関する広い問題について扱い、主義主張に特定の偏りがなく、分析に多様性が確保できるように、3つの雑誌、すなわち日本建築学会の機関誌である『建築雑誌』、グラビアで最新の建築情報を報じる『新建築』、時事的に建築ニュースを集めた『日経アーキテクチャ』を選定し、これら进行分析の対象としている。3部構成からなる本論では、情報の送り手である中国とその受け手である日本の建築界との間でやりとりされる、中国に関する情報の形式と内容を吟味し、上記の3つの主題を検討してそれぞれ成果を出した。

1つ目の主題に対しては、建築メディアに掲載された中国に関する記事、すなわち中国関連記事を対象に、その「情報伝達手段」を把握することで検証を試みた。日本の建築界にとって中国情報を日本に伝達する手段である、執筆者と記事が、それぞれどういう属性を持っているのかを、明治から現代までの『建築雑誌』における区分された4つの時期ごと、1985年以降発行の『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の3つの建築メディアごとに、記事数の経年変化などの定量分析と、記事の論題論調の変遷をたどったレビュー形式の言説分析とで示し、中国関連記事の情報伝達手段の通時的・共時的特徴を描出した(第1章1節と第2章1節)。

2つ目の主題に対しては、各中国関連記事において中国に対する執筆者の要約的印象が述べられている箇所を中国観として摘出した上で、その中国観がいつ、どの雑誌で、どういう論題を持って発現しているかというその「論題布置」を把握することで検証を試みた。中国観の発現時期と論題、ないしは発現メディアと論題間の分布の関係をKJ法によって分類し、その定量分析から中国観がいつ、どこで、何を扱っているのかという論題布置の通時的・共時的特徴を描出した(第1章2節と第2章2節)。

3つ目の主題に対しては、明治以降の日本の建築メディアにおける中国観のなかで、繰り返し語られる論題群を17の論点として分類した上で、各論点の中国観が肯定的に語られているか否定的かというその「論調」を把握することで検証を試みた。中国観の発現時期と論調を論点ごとに散布図に示し、それらの比較分析から、繰り返される中国観の論調がいかなる傾向を持つのか描出した(第3章)。

4.2. 研究の3つの主題についての結論

日本の建築界の中国に関する記述はだれがどのように伝えてきたのか

日本の建築界の中国認識にとって、中国に関する情報は誰によって日本に運ばれ、それがどのような形で日本建築界の中で広く共有していったか、というこの主題について、本論文は、建築界における代表的な雑誌3つを対象に、その記事の執筆者がどのような人達で、記事はどのような形式をもっており、そこではどのような内容が伝えられようとしていたか、という、建築メディアにおける情報伝達手段を検証することで答えようとした。

第1章の前半1.1.節では、『建築雑誌』の1887年から2008年までの近現代の中国関連記事を通時的に分析することでこの問題を検討した。記事の論題の推移から勘案して4期にわけた時期区分ごとに、執筆者と記事形式の属性を観察すると、日本の大学所属の研究者や役人などの限定的な渡航者による、講演の口述筆記録を中心とした中国情報伝達手段がとられたⅠ期(1887-1920年)、満洲国機関や満鉄関係者など大陸にいる日本人が執筆者に加わった、口述筆記録のほかに論説や写真付き建物紹介などの記事形式も見られる情報伝達手段がとられたⅡ期(1920-1958年)、日本の大学所属の研究者が主たる執筆者で記事もほとんどが論説形式に画一化された情報伝達手段がとられたⅢ期(1959-1985年)、民間人や中国人の専門家が執筆者に加わり、多方向で相対的な情報伝達手段がとられたⅣ期(1985-2008年)というようにその属性の変化を整理できた。これら各期の執筆者と記事形式の属性を比較すると、Ⅰ期とⅡ期、Ⅲ期とⅣ期の間で、執筆者の属性は少数に限られていた状態から多様な状態に移行し、記事形式の属性も口述筆記録や論説に依存していた状態からコラムや文献抄録など多様な状態に移行していることが観察された。すなわち4つの時期はⅠ・Ⅱ期とⅢ・Ⅳ期に大きく2つに分けることができ、『建築雑誌』における通時的に見た中国情報の伝達手段は、執筆者や記事の属性が拡大しながら反復していることが明らかになった。

第2章の前半2.1.節では、『建築雑誌』、『新建築』、『日経アーキテクチュア』3誌の1985年から2008年までの現代の中国関連記事を共時的に分析することでこの問題を検討した。3つの建築メディアの執筆者と記事形式の属性を比較したところ、それぞれの情報伝達方法に相違がみられた。『建築雑誌』は日本の大学所属の研究者が執筆者の半数近くを占める一方で中国の機関に属する執筆者もいるなど国際性もある。また論説・口述筆記録・コラムの記事形式の比率が比較的高い。『新建築』は日本の大学所属の研究者も一定数含んでいるがほとんどの執筆者は日本の設計事務所すなわち民間企業の所属であり、作品紹介・論説・コラム形式の記事が多く見られる。『日経アーキテクチュア』は執筆者のほとんどが当該誌の編集部の記者であり、ニュースに加えて記者による論説形式の記事が多い。こうした状況を各雑誌の記事内容とあわせて見ると、それぞれの建築メディアは異なる伝達軸、すなわち『建築雑誌』は「執筆者の専門性」、『新建築』は「建物」、『日経アーキテクチュア』は「現場」を持っている、と言える。また3誌は日本の読者に向けてのメディアであるが、同時代の中国の状況をどこまで誌面に取り込むかという部分での相違があり、中国の状況に最も迎合的な『日経アーキテクチュア』、やや迎合的な『建築雑誌』、あまり迎合的でない『新建築』というような、対中態度における3誌の違いも指摘した。

また、1.1.節での通時的分析では、本論で明らかにした『建築雑誌』の中国関連記事の4期の分期が、一般的な政治経済史の分期とはおおむね対応しながらも建築メディア史としての独自性も見られること、2.1.節での共時的分析では、同じ建築メディアでも学会誌と商業誌で同時代の中国を発見する時期が異なること、をそれぞれ指摘している。

日本の建築界の中国に関する記述は、大学の専門家から民間組織の技術者までのさまざまな担い手が、論説や対談記事など多様な記事形式を用いて伝えてきており、『建築雑誌』における通時的観察では情報伝達手段の拡大とその反復が、3誌における共時的観察では情報伝達軸と対中態度のメディアごとの相違が、それぞれ明らかになった。

日本の建築界は中国のどの部分について着目してきたのか

日本の建築界の中国認識が、中国のどの部分を見ているのか、というこの主題について、本論文は、建築界における代表的な雑誌 3 つを対象に、その記事の中身が中国の何について語っており、それは他の記事とどういう関係にあるのか、という、建築メディアにおける論題の布置を検証することで答えようとした。

第 1 章の後半 1.2.節では、『建築雑誌』の 1887 年から 2008 年までの近現代の中国関連記事を通時的に分析することで、この問題を検討した。まず、執筆者が端的に中国についての要約的印象を示している箇所を中国観として抽出し、中国観全体の論題布置を KJ 法によって分類したところ、「技術」に着目した論題を持つ中国観と「社会」論題のそれの 2 つに大きく分けられる 3 段階の構造をしていることがわかった。その上でそれら中国観の出現時期と論題の関係を検証したところ、「技術」論題の割合は明治期から一貫して高いが、やがて「社会」論題の数が増え 1980 年代後半には追い越されていること、「技術」論題内部では職能的技術から学術的技術への論題の重心移動が起きており、「社会」論題内部では中国の国際関係への興味が過去 2 回にわたって反復していることが明らかになった。すなわち「技術」論題と「社会」論題の間、あるいはその 2 つの各論題内で、その布置が重心移動を起こしていることを指摘した。

第 2 章の後半 2.2.節では、『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の 1985 年から 2008 年までの現代の中国関連記事を共時的に分析することで、この問題を検討した。まず、3 誌の当該期間の中国観を KJ 法によって分類したところ、それらが「技術」、「社会」、「場所」の 3 つそれぞれについて着目した 3 段階の構造をしていることがわかった。その上でそれら中国観の出現メディアと論題の関係を検証したところ、3 誌とも「技術」論題の割合が一番高くある一方で、雑誌ごとに「社会」と「場所」論題の割合が異なり、『建築雑誌』は「技術」に加えて「社会」の、『日経アーキテクチャ』は「技術」のほかに「場所」に、『新建築』は「技術」論題があくまで主流であることが明らかになった。すなわち各誌においては「技術」論題が中心であると同時に、それ以外の「社会」と「場所」に関する 2 つの論題がそれぞれのメディアを特徴づけていることが明らかになった。また、『日経アーキテクチャ』は「場所」論題の中国観を、他の雑誌にはない明確な集中とともに配しており、その中国観の出自を見ると 1997 年の香港返還や 2008 年の北京オリンピック前後の現地取材に伴って発生した記事において見られることがわかった。これは現代の日本の建築界が、今までなかった現地取材による同時代の中国情報の獲得を可能にしている状況を示しており、現代の日本建築界においては、『日経アーキテクチャ』を通して、この時期に中国観における「場所＝現場」に関する論題を一般的に入手できるようになったことを指摘した。

日本の建築界は中国の「技術」「社会」「場所」のさまざまな側面に着目してきており、『建築雑誌』における通時的観察では「技術」と「社会」における論題布置の重心移動が、3 誌における共時的観察では「技術」以外の論題による布置の性格づけと現場情報の一般化が、それぞれ明らかになった。

日本の建築界が繰り返し持つ対中論調にはどのような傾向があるのか

日本の建築界が繰り返し持つ対中論調がどのような傾向をもっているのか、というこの主題について、本論文は、建築界における代表的な雑誌 3 つにおいて、日本が中国を語る時によく採用する論点はいかなるもので、それがいかに繰り返され、またその論点において中国がいかなる評価とともに語られているかを検証することで答えようとした。

第 3 章では、『建築雑誌』の 1887 年から 2008 年までの中国観、『新建築』と『日経アーキテクチャ』の 1985 年から 2008 年までの中国観をあわせて分析することで、この問題を検討した。まず、全中国観の中から、日本の建築界が中国を語る時に採用しやすい論題を持つ中国観、すなわち繰り返し現れる、類似する説明や共通の述語をもつ中国観を取り出し、それらを繰り返される論点として分類したところ全部で 17 に分類できた。さらに 17 の論点ごとに、各中国観がどのように中国を語っており、その中国観が中国に対して肯定的態度で語られているのか否定的態度で語られて

いるのかという「論調」に着目して各中国観をレビュー形式で内容分析にかけた。論調は肯定と否定各3段階に中立的な評価を含め7段階を設定し、すべての繰り返される中国観に肯定否定評価をつけて、その中国観が出現する時期と論調の関係を示す散布図を作成した。さらに17枚の散布図を比較分析したところ、それらは3つの繰り返しのパターン、すなわち「肯定的否定的論点のどちらかに一貫して中国観が反復する論点＝一貫型」7つと、「肯定的否定的論調が混在して中国観が反復する論点＝混在型」7つ、「肯定的否定的論調が一定期間ごとに交替して中国観が反復する論点＝交替型」3つ、にそれぞれ分類できることが明らかになった。

これらの3つの繰り返しパターンは、対中評価の態度において安定したもの（「一貫型」と「混在型」のうち中立的論調のないもの）と、不安定なもの（「混在型」のうち中立的論調を含むものと「交替型」）にさらに分類が可能である。例えば「一貫型」の「中国では建物のメンテナンスができない」という「維持管理」論点はほとんどの中国観が否定的論調であり、「混在型」の「中国は場当たり的で物事が決まってゆく」という「アドリブ的」論点は肯定否定が中国観ごとにはっきりわかれていて中立的論調がない。これらは執筆者が中国を当該論点において、自我との関係で語ることでできるものとして扱っていると理解できる。一方「混在型」の「建設ラッシュ」論点は中立的論調が多く、「交替型」の「中国の人」論点は時期によって肯定否定の論調が入れ替わっている。これらは執筆者が中国を時代との関係で語ることでできるものとして扱っていると理解できる。こうした自我と時代との関係で規定される複層性が、日本の中国認識の繰り返される論調に見られる傾向であると言える。

日本の建築界が繰り返し持つ対中論調には、一貫したもの、混在したもの、交替するものがあり、『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』3誌におけるその時期と論調の関係を検証した結果、それらはさらに安定した論調と不安定な論調に分類が可能で、自我と時代との関係で規定される複層的な中国認識があることが明らかになった。

4.3. 今後の課題と展望、動いて見える半他者

今後の課題と展望

ここで今後の課題と展望について述べておく。本論文は 2008 年までのデータを扱っている、この文章を書いている 2011 年の時点ではまだほぼ同時代の資料を分析対象として扱えていると言えるが、本文でも触れたように中国観というのは今も動き続けており、そうした動きの中にあるものを把握してゆくためには、今後も継続して情報を収集し、その内容の検証がなされてゆくべきであろう。

本論文は、性格の異なる 3 つの建築メディアに限定して分析対象を設定することで、19 世紀末から 21 世紀初までの日本の建築界全体の中国認識を類推的に把握しようとした。最初の探索的な研究としては一定の作業をこなせたと思っているが、本論文で取られた分析方法をさらに洗練させ、分析範囲を拡大して別の建築メディアを対象にした研究を行えば、この問題についてより多角的な知見を得ることができるであろう。本論文は、『建築雑誌』は創刊号から 2008 年までのものをすべて対象にしたけれども、『新建築』についても、長い歴史を持つこのメディアを活用して、もう少し長い分析対象期間を設定すれば、別の形での論考もありえたと思われる。また、第 2 章の分析期間を 1985 年から 2008 年として一つにまとめて 3 誌を比較したが、この期間の建築に関するメディア情報の変化は大きく、この時期だけに特化してもう少し細かい時期区画を行い、改革開放以降の中国に対する日本建築界の側からの微視的な認識分析を行う可能性も十分にあると思われる。そのあたりは今後の研究に期待したい。

また、中国の側からの研究にも期待したい。中国建築学会は 1954 年から機関誌『建築学報』を発行しており、ここには日本に関する記事も多数掲載されている。このメディアを通して中国建築界における日本認識を本論文と対照的に検証することも想定できるだろう。

動いて見える半他者

最後に、日本の建築界にとって中国はどのように位置づけられているのか、という点について若干の結論的考察を加えることで、本論文のまとめとしたい。

明治以降、日本では建築メディアの誕生とともに、多くの中国に関する情報が建築メディアによって日本の読者に伝達されてきた。そうした中国情報は、日本から中国への憧憬感と優越感、しばしば蔑視感までの認識の間で、重心を移動させながら並べ替えられては、日本建築界の中で共有されてきたと言える。中国に特化した特集が組まれ、海外でありながら旅行記や現地取材という形で情報が伝えられるなど、こうした中国情報は、本論文が分析対象にした 3 つの建築メディアにおいては、海外情報とは思えないくらいさまざまな形で、日本の建築界の内部で共有されてきた。

中国は日本から見れば外国であり、それは日本という主体にとっては独立した客体であり、日本が認識する自己であるとするそれは他者である。しかしメディア上の扱いではしばしば、日本の建築界は中国を完全な他者として扱わない、外部にある客体としてみなさない状況があったことを、本論文ではすでに見てきた。明治時代の『建築雑誌』では西洋に対して優位に立つために「中国をよりよく知るのは欧米ではなく日本」という言い方とともに中国を半ば主体の一部として取りこもうとしたし、2000 年代以降の『日経アーキテクチャ』では、その経済成長に引き寄せられるかのように中国の情報を国内情報と一緒に配列することなどで両国間の垣根を低くみせようとしていた。『新建築』の記事の中国観の中には中国は世界の建築家の実験場だという表現があったが、これも中国を日本の自分たちが利用する対象として取り込もうとする言説ととれるものである。日本の建築界のこうした振る舞い、中国を「他者」としてではなく「半他者」として位置付けるようなそれ、は、戦争中なら侵略的な言説としてとらえることもできるであろうし、遅れた中国を励ますというのであれば優越感や親近感の表出ともとれるし、追い上げてくる中国を批判的に見るのであれば脅威論ともみなすこと

ができる。

こうした建築メディアにおける中国の「半他者」的位置付けは、「技術」に着目した中国観が「社会」にまで着目点を拡大しているという事実と深く関係していると思われる。本論文では 3 つの建築系の雑誌を比較してそこで日本の建築界が中国の「どこを見ているか」という「論題の布置」を通時的、共時的に検討した。『建築雑誌』の近現代の通時的な分析では、中国観の論題布置が「技術」論題から「社会」論題にその主役をあげわたしつつあることを、他 2 誌を加えた現代の中国観の論題布置分析においては、「技術」以外の「社会」と「場所」論題が『新建築』と『日経アーキテクチャ』の性格付けに重要な役割を果たしていることを、本論文ではそれぞれ見てきた。時代とメディアを越えて日本の建築界の中国認識は「技術」論題を重視しつつも、同時にそれ以外の論題に目を奪われているというこの事実、中国の「半他者」的位置づけが与えている影響は大きい。そもそも建築の大本の意味とは建物を建てることであって、近代以降組織化された建築学もその由来は建築を作るための手段の集大成だったはずである。建築を語るとは本来的に「技術」論になりうるはずなのに、日本の建築界がひとたび中国について語り始めると、話は実際の建築からはじまって、建築にまつわる社会、建築の周辺の問題について論題が広がってゆく。建築についての言説を扱う建築メディア上に掲載されたテキストでありながら、そこで語られる中国観はなぜか建築の外の領域に拡散していつてしまうのである。中国を「半他者」として位置付けることは、あるいは「他者」として位置付けないことは、建築メディアにおける中国関連記事を、海外の知らない土地の情報とすることを認めずに国内情報に近いものとして扱わせ、それが「技術」論題を「社会」や「場所」論題へと拡大させているように見える。

また、この「半他者」的位置づけは、繰り返される中国観における中国認識が「自我」と「時代」の関係から決められる複層構造をしている、という本論で得られた知見とも分かちがたく連結している。本論文では、日本の建築界が中国を見るときに繰り返し語る論点において、そこに「自我」との比較のなかで身近に語る中国と、「時代」との関係のなかで大きく語る中国という認識の複層性があることを指摘した。本来、「自我」の外部にある「他者」には「時代」しか見いだせないはずなのに対し、日本の建築界にとって中国は愛憎交わる「半他者」の対象であるがために、そこに鏡に映ったような「半自我」も見いだしてしまう。そうした相互関係における日本からの中国印象には、個人的な感覚から決まる安定的な対中態度と、時代への判断を含んだ不安定な対中態度が混合することになる。

移ろいゆく中国認識について、長期的・横断的な視点を持ち続け、過去や現在の認識や、自分の属する集団以外の認識を把握し比較を続けること、つまりメタ認識的な視点を持ち続けることが、その認識の陳腐化を避ける唯一の方法である。中国が本当にライフスタイルのレベルで日本に追いつき追い越すのにはまだ相当の時間がかかると思われるが、日本社会が成熟化しその変化が緩慢になり、中国社会が急速な成長の波に飲まれている今、日本の建築界の中国認識は両国の相違の間でこれからも動き続けてゆくことになるだろう。中国も動き、日本も動いている。本論文は動き続ける両国の間の、日本の建築界の中国認識を、21 世紀の初頭の今の断面において見たものだが、ここでの「動いて見える半他者」としての中国の位置づけは、日本が地理的に中国のすぐ隣にある以上、これからも日本の建築界の、ひいては広く日本の、中国認識を強く支配してゆくことになるだろう。

あとがき

私は 2001 年に渡中し、以来 10 年近く北京に住んで建築設計事務所を経営しながら、日本と中国で建築の実務を続けてきた。この間自分は日本で様々な肯定的／否定的な中国観が現れては消えるのを直接目にしてきている。2005 年からは慶應義塾大学の教職ポストを得て以来ほぼ毎週のように日中間を往復してきているが、双方をそれぞれ現地で見ている人間として、両国があまりにもうまく相互理解ができないことに、驚きやもどかしさを感じることもしばしばであった。本論文は両国間を右往左往してきて、日中両国が相手に対してメディアの上でどういう態度を相手にとってきたかということ「皮膚感覚として」知っている筆者が、日本の中国認識を客観的に把握したいと動機から始まっている。

2006－07 年度にかけて、筆者は日本建築学会の機関誌『建築雑誌』の編集委員を務めた。この役職は 2 年半の任期の中で 30 人ほどの若手の編集委員がそれぞれ自分の学術的な興味を雑誌の特集として組み立てるということが要求される。私は編集幹事として 2007 年 12 月号で「中国－そこに日本の建築世界はどう関われるか」と銘打ち中国の特集を組んだ。そこでは当時の建築世界における日中関係の断面を描き出そうと、中国で仕事をしている様々な日本の建築関係者の話を集めた内容にした。編集時には、中国にここまで特化した学会誌を作ったのは浅薄にも自分が初めてだろうと思っていたのだが、編集作業がほぼ終盤にさしかかったところに、『建築雑誌』のバックナンバーをよく見てみると、過去に何度か中国が特集されていたり、様々な中国関係の記事があったりすることを知ることになった。古くは明治期の伊東忠太から、戦後は西山卯三や吉武泰水や尾島俊雄らが、実に様々な形で中国を注視し、そこに未来を見出し、非難し、憧れたり、疑念を抱いたりしてきていることを知った。中国建築の専門家だけではない、日本建築世界の様々な分野の巨人たちが、なんらかの形で中国と関係を持ち、それについて様々な形で言説を残している記事が『建築雑誌』のバックナンバーに埋め込まれていた。中国を注視する人が日本の建築世界の中にも今までたくさんいて、しかもその人物たちがそれぞれ違う中国観を同じメディアにおいて披歴していることを目にして、結局私はそのとき、自分の中国への興味が自分だけのものではないことに気付くことになった。過去の記事を目にすることで、中国をどう語るかということが、多くの日本人にとってきわめて普遍的な問いになりうる、ということを知ったのである。中国印象を語ることは日本人にとって、「隣人をどう語るか」ということ以上の、知らないものにどう接するか、ものごとを楽観的にとらえるか悲観的にとらえるか、古いものを尊敬するか切り捨てるか、などの抽象的な問いにまで置換可能な、大きな広がりをもたらす切実なテーマではないかと思い始めたのである。

執筆にとりかかったのは 2008 年末のことだったと記憶している。修士課程でお世話になった大野秀敏先生に主査をしていただく決めていたので最初に相談にうかがった。時期を前後して村松伸先生と清家剛先生にもご指導いただいて、作業は始めることができたが、なかなか思うように進まなかった。それでも作業が前進したのは、先行研究をあたっていくうちに、偉大な先達たちの中国に対する様々な視点を面白いと思えたからだろう。当初の計画よりだいぶ時間が経過してしまったが、2011 年の 7 月にこの文章を書いている。

主査の大野秀敏先生には、大学院修士課程のときからご指導を受けており、この博士論文に関しても拙文を読んでいただいた上に毎回真摯なご指導をいただけたことに大変感謝しております。私は修士課程 1 年のときに先生が博士論文を書かれていたのを目撃しておりますが、今になってようやく少し当時の先生の御苦勞を想像できるようになりました。修士論文で自分はソ連のマスハウジングに関する、あまり一般的とは思えないテーマを扱ったのですが、その時から先生はいつも率直な態度で、私の目を広げ、私の興味を明るい場所に導いてくださいました。そしてそうした先生の態度が、今回の 14 年後の博士論文のご指導に際してもまったく変わらなかったことは、私にとって感動的なことでした。

副査の村松伸先生には、大学院のときからその薫陶を受けさせていただき、今回の本論文では先生の書かれた過

去の記事が多数、分析対象になっております。それらを読むにつれ先生の当時のご興味の中心やご苦悩について考えさせられ、自分の学生時代の先生への態度が不謹慎ではなかったかと改めて反省しています。博士論文の執筆にあたって、目標を高く設定することを具体的にご教示いただき感謝しております。今回、戦後の日本で最も早く中国に学んだ先生にこの論文を読んでいただけることは私にとって大変光栄なことです。

副査の清家剛先生にも、大学院時代から社会に出て実務をするようになってから、また中国に渡って仕事をするようになってからも時々お声掛けをいただき、折に触れて先生のお話をうかがう機会がありました。先生には論文の構成を何度か見ていただいたのですが、中国への深いご理解の上に立って、明快な図式を立てることをご指導いただいたことに感謝しております。また、一緒の目線に立って構成を考えていただいたことには、大学に身を置く身として、大変勉強になりました。

副査の辻誠一郎先生には、マクロな歴史研究の専門家として、本研究の通時的分析が、意識過程の歴史を見ているものであるとご指摘をいただきました。またこうした分析においては、より広い立場にたったメディアと建築文化の間の関係性を見ること、建築以外の政治情勢や商工業の変化も含めた大きな変遷を観察することが重要であるとのことをご教示をいただき、これらの点は、このあとの書籍出版に向けての指針にもなると思っております。

副査の出口敦先生には、都市計画の立場から、通時的分析における分期の妥当性について、さらには論文作法上の指示代名詞の使い方について、修正点のご指導を頂きました。分析が出過ぎていて考察についての印象が弱いというご指摘もありました。中国の近現代の都市計画にも通じておられる先生の視点には気付かされる点も多く、本製本に前の本文の修正の際に参考にさせていただきました。

家族にも感謝を表したいと思います。日中の二重生活でしたが、妻と息子には生活面でも精神面でもさまざまに支えてもらいました。また陰日向に実家の両親にも支援してもらいました、これにも感謝します。

2011年7月30日

北京の自宅にて

松原弘典

付録 1: 引用・参考文献

<建築関連外>

辞典・統計・文献目録類

- 『明治以降本邦主要経済統計』日本銀行、1966 年
- 京大東洋史辞典編纂会『新編東洋史辞典』東京創元社、1980 年
- 『世界大百科事典』平凡社、1988 年
- 『日本史大事典』平凡社、1993 年
- 『建築大辞典 第 2 版』彰国社、1993 年
- 『文建協叢書 4 日本建築史文献目録 1987-1990』日本建築史研究会編 財団法人文化財建造物保存技術協会、1996 年
- 『建築学用語辞典 第 2 版』日本建築学会編 岩波書店、1999 年
- 『日本歴史大事典』小学館、2000 年
- 『建築統計年報 平成 21 年度版』国土交通省総合政策局情報安全・調査課建設統計室監修 財団法人建設物価調査会、2009 年
- 『海外在留邦人数調査統計 平成 20 年度速報版(平成 19 年 10 月 1 日現在)』外務省領事局政策課、2008 年 <<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/08/pdfs/1.pdf>>、2011 年 4 月 19 日閲覧
- 『平成 17 年国勢調査最終報告書 日本の人口』総務省統計局、2010 年
- 『財務省貿易統計 貿易相手国上位 10 カ国の推移(輸出入総額:年ベース) 1985 年-2009 年』財務省 <<http://www.customs.go.jp/toukei/suii/html/data/y3.pdf>>、2011 年 4 月 19 日閲覧
- 『日本の統計 グラフで見る日本の統計 21 着工新設住宅戸数』総務省統計局、2011 年 <<http://www.stat.go.jp/data/nihon/g2109.htm>>、2011 年 4 月 19 日閲覧
- 「18-1-a 輸出額 主要国(地域)別(昭和 37 年-平成 16 年)」と「18-2-a 輸入額 主要国(地域)別(昭和 37 年-平成 16 年)」『統計局ホームページ/統計データ/日本の長期統計系列/第 18 章 貿易・国際収支・国際協力』<<http://www.stat.go.jp/data/chouki/index.htm>>、2011 年 4 月 19 日閲覧
- 日本統計協会『日本長期統計総覧』総務省統計局監修、2006 年

中国概論、中国史

- 鈴木俊『中国史(新版)』山川出版社、1964 年
- 宮崎市定『中国史 上・下』岩波書店、1977 年
- 磯波護『地域からの世界史 第 2 巻 中国(上)・(下)』朝日新聞社、1992 年
- 中野謙二『中国概論[新版]』有斐閣、1995 年

日本の中国研究史、中国研究の方法論

- 新島淳良・野村浩一編『現代中国入門ー何を読むべきかー』勁草書房、1965 年
- 山根幸夫『中国史研究入門 上(増補改訂版)』山川出版社、1983 年
- フォーゲル、ジョシュア『内藤湖南 ポリティックスとシノロジー』井上裕正訳 平凡社、1989 年
- 伊藤一彦「日本の中国研究」『現代中国研究案内』野村浩一・山内一男・宇野重昭・小島晋治・竹内実・岡部達味編 岩波書店、1990 年
- 並木頼寿「日本における中国近代史研究の動向」『近代中国研究案内』小島晋治・並木頼寿編 岩波書店、1993 年
- 山室信一「アジア認識の基軸」『近代日本のアジア認識』古屋哲夫編 京都大学人文科学研究所、1994 年
- 子安宣邦『近代知のアルケオロジー 国家と戦争と知識人』岩波書店、1996 年
- 岸本美緒「中国とは何か」『世界各国史 3 中国史』尾形勇・岸本美緒編 山川出版社、1998 年
- 山田利明『中国学の歩みー二十世紀のシノロジー』大修館書店、1999 年
- 『20 世紀の中国研究 その遺産をどう生かすか』小島晋治・大里浩秋・並木頼寿編 研文出版、2001 年
- 石川禎浩「通史と歴史像」『21 世紀の中国近現代史研究を求めて』飯島渉・田中比呂志編、研文出版、2006 年
- 久保亨・村田雄二郎・飯島渉「日本の 20 世紀中国史研究」『シリーズ 20 世紀中国史 4 現代中国と歴史学』飯島渉ら編 東京大学出版会、2009 年

日本の中国観、アジア観

- 竹内好「日本人の中国観」『竹内好評論集第三巻 日本とアジア』筑摩書房、1966 年
- 安藤彦太郎『日本人の中国観』勁草書房、1971 年
- 野村浩一『近代日本の中国認識ーアジアへの航跡ー』研文出版、1981 年
- 溝口雄三『方法としての中国』東京大学出版会、1989 年
- 竹内実『日本人にとっての中国像 同時代ライブラリー120』岩波書店、1992 年
- 岡本幸治「「日本とアジア」か「アジアの日本」か」『近代日本のアジ

ア観』岡本幸治編著 ミネルヴァ書房、1998 年

片倉穰『日本人のアジア観—前近代を中心に』明石書店、1998 年

関志雄「日本における多様な中国観—対中政策にどう反映されるか—」『実事求是』2002 年 11 月 15 日掲載 <<http://www.rieti.go.jp/users/china-tr/jp/ssqs/021115ssqs.htm>>、2009 年 5 月 31 日閲覧

関志雄「揺れる日本の中国観—真の日中友好は可能か—」『実事求是』2002 年 12 月 6 日掲載 <<http://www.rieti.go.jp/users/china-tr/jp/ssqs/021206ssqs.htm>>、2009 年 5 月 31 日閲覧

子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか—近代日本のオリエンタリズム—』藤原書店、2003 年

浜口允子・岸本美緒『放送大学教材 東アジアの中の中国史』財団法人放送大学教育振興会、2003 年

溝口雄三『中国の衝撃』東京大学出版会、2004 年

横山宏章『反日と反中』集英社、2005 年

加々美光行『鏡の中の日本と中国 中国学とコ・ビヘイビオリズムの視座』日本評論社、2007 年

加々美光行「現代中国学の新たなパラダイム コ・ビヘイビオリズムの提唱」『中国の新たな発見』加々美光行編 日本評論社、2008 年

並木頼寿『日本人のアジア認識』世界史リブレット 66 山川出版社、2008 年

工藤泰志『中国人の日本観 日本人の中国観』工藤泰志編 認定特定非営利活動法人言論 NPO、2008 年

馬場公彦『戦後日本人の中国像 日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』新曜社 2010 年

日本以外の国の中国観

フェアバンク、J・K『中国(上)・(下)』市古宙三訳 東京大学出版会、1972 年

ラック、ドナルド・F「中国像の変容」『東方の知』高山宏・中村元・三浦伸夫訳 平凡社、1987 年

コーエン、ポール・A『知の帝国主義 オリエンタリズムと中国像』佐藤慎一訳 平凡社、1988 年

国分良成「アメリカの中国研究」『現代中国研究案内』野村浩一・山内一男・宇野重昭・小島晋治・竹内実・岡部達味編 岩波書店、1990 年

佐藤慎一「アメリカにおける中国近代史研究の動向」『近代中国研究案内』小島晋治・並木頼寿編 岩波書店、1993 年

フォーゲル、ジョシュア「日中関係とアメリカ」『20 世紀中国と日本 上巻 世界のなかの日中関係』池田誠・倉橋正直・副島昭一・西村成雄編 法律文化社、1996 年

グローブ、リンダ「アメリカの中国近現代史研究」『シリーズ 20 世紀中国史 4 現代中国と歴史学』飯島渉ら編 東京大学出版会、2009 年

白永瑞「韓国の中国認識と中国研究」『シリーズ 20 世紀中国史 4 現代中国と歴史学』飯島渉ら編 東京大学出版会、2009 年

中国人による日本の中国観研究

王晓秋『アヘン戦争から辛亥革命—日本人の中国観と中国人の日本観』小島晋治監訳 東方書店、1991 年

忻劍飛『世界的中国観—近二千年来世界対中国的認識史綱』学林出版社、1991 年

馮天瑜『“千歳丸”上海行—日本人 1862 年の中国観察』商務印書館、2001 年

王屏「日本人の“中国観”の歴史的変遷について」『広島大学マネジメント研究』西本志乃・盧濤訳 広島大学マネジメント学会、2004 年

劉家鑫『日本近代知識分子的中国観』南開大学出版会、2007 年

王敏『日本と中国—相互誤解の構造』中央公論新社、2008 年

史桂芳『近代日本人的中国観と中日関係』社会科学文献出版社、2009 年

中国から見た日本

小島晋治・伊東昭雄・光岡玄・板垣望・杉山文彦・黄成武『中国人の日本人観 100 年史』自由国民社、1974 年

ホワイティング、アレン・S『中国人の日本観』岡部達味訳 岩波書店、2000 年

李玉「中国の日本研究—回顧と展望—」『国際日本学とは何か？中国人の日本観—相互理解のための思索と実践—』王敏編 三和書籍、2009 年

日中関係、政治史、外交史

『日中関係史の基礎知識』河原宏・藤井昇三編、有斐閣、1974 年

安藤彦太郎『日中関係の視点』龍溪書院、1975 年

『近代日本と中国—日中関係史論集』安藤彦太郎編 汲古書院、1989 年

『原典中国現代史 日中関係』安藤正士・小竹一彰編 岩波書店、1994 年

王曉秋『中日文化交流史話』木田知生訳 日本エディタースクール出版部、2000 年

黄東蘭「日中関係の歴史」『現代中国への道案内』樋泉克夫・若代直哉編 白帝社、2002 年

『国境を越える歴史認識 日中対話の試み』劉傑・三谷博・楊大慶編 東京大学出版会、2006 年

斎藤道彦「総論 歴史認識と現実認識」『日中関係史の諸問題』斎藤道彦編 中央大学出版部、2009 年

アジアのなかの日中

藤間生大『近代東アジア世界の形成』春秋社、1977 年

『概説東洋史』堀敏一・山崎利男編 有斐閣、1979 年

『アジアの歴史』藤家禮之助編 南雲堂、1992 年

『新訂 東アジア史入門』布目潮風・山田信夫編 法律文化社、1995 年

『シリーズ国際交流 4 アジアのアイデンティティ』石井米雄編（財）国際文化交流推進協会（エース・ジャパン）

松枝到『アジアとはなにか』大修館書店、2005 年

『「東アジア」の時代性』貴志俊彦・荒野泰典・小風秀雅編 溪水社、2005 年

世界システム・文明史と日中関係

西村成雄「20 世紀東アジア政治空間における中国と日本」『20 世紀中国と日本 上巻 世界のなかの日中関係』池田誠・倉橋正直・副島昭一・西村成雄編 法律文化社、1996 年

『帝国とは何か』山内昌之・増田一夫・村田雄二郎編 岩波書店、1997 年

梅棹忠夫『文明の生態史観はいま』中央公論新社、2001 年

Negri, Antonio & Hardt, Michael [2000] “*Empire*” Harvard University Press（「く帝国」）アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート著；水嶋一憲ほか訳 2003 年 以文社）

上田信「文明史としての中国近現代史」『シリーズ 20 世紀中国史 4 現代中国と歴史学』飯島渉ら編 東京大学出版会、2009 年

東洋思想、思想史

坂出祥伸『東西シノロジー事情』東方書店、1994 年

蜂屋邦夫『中国思想とは何だろうか』河出書房新社、1996 年

武内義雄『中国思想史』岩波書店、2005 年

溝口雄三・池田知久・小島毅『中国思想史』東京大学出版会、2007 年

溝口雄三『放送大学叢書 010 <中国思想>再発見』左右社、2010 年

中国美術、東洋美術

松原三郎『改訂東洋美術全史』東京美術、1981 年

岡田健「龍門石窟への足跡—岡倉天心と大村西崖」『語る現在、語られる過去 日本の美術史学 100 年』東京国立文化財研究所編 平凡社、1990 年

小林恭二・刈間文俊・浅葉克己・中野美代子・孔健・和多利浩一 [1999] 『チャイナアート』NTT出版、1999 年

井手誠之輔[2005]「影響伝播論から異文化受容論へ—鎌倉仏画における中国の需要」『講座日本美術史 第 2 巻 形態の伝承』板倉聖哲編 東京大学出版会、2005 年

陸偉榮『中国の近代美術と日本—20 世紀日中関係の一断面—』大学教育出版、2007 年

人類学

末成道男「特集＝中国研究の視角 序」『文化人類学 8 第六巻第二号』末成道男編 アカデミア出版会、1990 年

瀬川昌久『中国社会の人類学—親族・家族からの展望』世界思想社、2004 年

そのほか

川喜田二郎『発想法 創造性開発のために』中央公論新社、1967 年

川喜田二郎『続発想法 KJ 法の展開と応用』中央公論新社、1970 年

ブラウン、A.L. 『メタ認知—認知についての知識—』湯川良三・石田裕久訳、1984 年

有馬明恵『内容分析の方法』ナカニシヤ出版、2007 年

Needham, Joseph [1970] “*Clerks and Craftsmen in China and the West*” Cambridge University Press（ジョセフ・ニーダム「ニーダム・コレクション」牛山輝代編訳 筑摩書房、2009 年）

<建築関連>

外国からの中国建築研究

伊東忠太「法隆寺建築論」『日本建築の研究・上 伊東忠太著作集 第1巻』原書房、1982年（初出は『建築雑誌』1893年11月号）

伊東忠太「支那建築史」『東洋建築の研究・上 伊東忠太著作集 第3巻』原書房、1982年（初出は『東洋史講座』1929年11月号）

尾島俊雄『現代中国の建築事情』彰国社、1980年

村田治郎「中国建築史より見たる法隆寺建築様式の年代」『村田治郎著作集一 法隆寺建築様式論攷』中央公論美術出版、1986年

村田治郎『村田治郎著作集三 中国建築史叢考（仏寺・仏塔篇）』中央公論美術出版、1988年

福山敏男『福山敏男著作集六 中国建築と金石文の研究』中央公論美術出版、1983年

飯田須賀斯『中国建築の日本建築に及ぼせる影響―特に細部について―』相模書房、1953年

竹島卓一『中国の建築』中央公論美術出版、1970年

Boyd, Andrew [1962] “*Chinese Architecture and Town Planning: 1500B.C.-A.D.1911*” The University of Chicago Press, 1962（アン・ドリュウ・ボイド『中国の建築と都市』田中淡訳 鹿島出版会、1979年）

尾島俊雄『現代中国の建築事情』彰国社、1980年

『中国建築の歴史』建築工程部建築科学研究院建築理論および歴史研究室中国建築史編集委員会編 田中淡訳 平凡社、1981年
中国建築科学研究院『中国の建築』鄧健吾・田中淡監訳 末房由美子訳 小学館、1982年

尾島俊雄『中国建築・名所案内』彰国社、1983年

村田治郎「3. 中国建築史叢考 仏寺仏塔篇」『村田治郎著作集』中央公論美術出版、1988年

審洞考察団『生きている地下住居：中国の黄土高原に暮らす四〇〇〇万人』彰国社、1988年

田中淡『中国建築史の研究』弘文堂、1989年

浅川滋男『住まいの民族建築学 江南漢族と華南少数民族の住居論』建築資料研究社、1994年

西澤泰彦『海を渡った建築家-20世紀前半の中国東北地方における建築活動』彰国社、1996年

村松伸「あとがきに代えて」『全調査 東アジア近代の都市と建築』藤森照信・汪坦監修 筑摩書房、1996年

徐蘇斌『日本对中国城市与建築的研究』中国水利水電出版社、1999年

西澤泰彦『日本植民地建築論』名古屋大学出版会、2008年

徐蘇斌『中国の都市・建築と日本―主体的受容の近代史』東京大学出版会、2009年

日本建築の記述における中国建築

伊東忠太「予の日本建築史観」『日本建築の研究・下 伊東忠太著作集 第2巻』原書房、1982年（初出は『工学と社会』1926年3月号）

太田博太郎『日本建築史序説 増補第二版』彰国社、1989年

『濱田耕作著作集第三巻 東亜古代文化（一）』、『同第四巻 東亜古代文化（二）』濱田耕作著作集刊行委員会 同朋社出版、1989年

関野貞「日本建築に及ぼせる大陸建築の影響」『日本の建築と芸術 上』太田博太郎編 岩波書店、1999年（初出は『岩波講座日本歴史9』1934年）

田中淡「関野貞の中国建築史学」『東京大学コレクション 20 関野貞アジア踏査』藤井恵介・早乙女雅博・角田真弓・西秋良宏編、東京大学総合研究博物館、2005年

藤井恵介「日本人は中国建築システムをどう受け止めたか」『中国歴史建築案内』TOTO出版、2008年

建築メディア、建築ジャーナリズムに関するもの

市浦健・清水英男・稲垣栄三・菅原肇・川添登・田中康男・菊地重郎・田辺員人・蔵田周忠・高橋寿男・小場晴夫・浜口隆一・清水一・宮内嘉久・森田茂介「建築ジャーナリズムの動きをたどる―関係誌20年の歩み」『建築雑誌』日本建築学会、1956年4月号

向井正也「建築ジャーナリズムの聖と俗―ジャーナリズムとアカデミズム」『建築雑誌』日本建築学会、1977年11月号

蜂谷真佐夫「建築ジャーナリズムについて」『建築雑誌』日本建築学会、1977年11月号

馬場璋造「建築専門誌はジャーナリズムではない」『建築雑誌』日本建築学会、1977年11月号

堀江文雄・松井勇「会員アンケート調査結果から」『建築雑誌』日本建築学会、1985年12月号

宮内嘉久「鏡のない世界―誰もその歴史を知らない建築ジャーナリズム」『建築雑誌』日本建築学会、1992年5月号

宮内嘉久「20世紀における建築ジャーナリズム思潮の変遷」『建築

雑誌』日本建築学会、1999年9月号

竹内正明「戦後日本における建築ジャーナリズムへの批判的言説について」『日本建築学会計画系論文集』第590号、日本建築学会、2005年4月

『日経BP書店』ウェブサイト<<http://ec.nikkeibp.co.jp/item/magazine/NA.html>>、2011年4月9日閲覧

「新建築、Net 出版物案内」<<http://www.shinkenichiku.net/shop/j/corporate/publishinfo.php>>、2011年4月9日閲覧

『建築雑誌』に関するもの

掬泉生「建築雑誌に就て」『建築雑誌』日本建築学会、1898年1月号

塚本靖「建築学会創立50年の回顧」『建築雑誌』日本建築学会、1936年10月増刊号

高杉造酒太郎「『建築雑誌』の歩みと変せん」『建築雑誌』日本建築学会、1968年8月号

「日本建築学会90年略史」『建築雑誌 臨時増刊号』第92集・第1117号 記念事業委員会・90年略史部会編 日本建築学会、1977年

宇野英隆・近江栄・木村俊彦・山口廣・相田武文「『建築雑誌』の役割を考える」『建築雑誌』日本建築学会、1985年12月号

藤上輝之「資料が語る建築学会・『建築雑誌』の片々」『建築雑誌』日本建築学会、1985年12月号

布野修司「『建築雑誌』と商業雑誌」『建築雑誌』日本建築学会、1989年8月号

青井哲人「第1回:アジア」「第2回:誌名-造家学会と『建築雑誌』」「第3回:危機と統計」「第4回:表紙」「第5回:1945」「第6回:火事と地震の明治」「第7回:辰野金吾の街」「第8回:関東大震災」「第9回:グラフ」「第10回:建築設計資料集成」「第11回:昭和10年の会誌改革」「第12回:『工学会誌』のなかの〈造家〉」「第13回:住宅調査」「第14回:近代都市計画の受容」「第15回:明治建築」「第16回:江戸への距離」「第17回:中村達太郎と初期の会誌編集」「第18回:防空建築学」「第19回:大東亜の建築論」「第20回:特集主義」「第21回:『建築雑誌』はジャーナリズムか」「第22回:読者の声…変わらぬ複層性」「第23回:『建築雑誌』をめぐる文献」「第24回:『建築雑誌』年表」「『建築雑誌』アーカイブス」『建築雑誌』日本建築学会、2002年1月号から2003年12月号までの連載

青井哲人「120年の歩み」『建築雑誌増刊 日本建築学会120年略

史』第122集・第1556号 日本建築学会、2007年

『社団法人日本建築学会』(印刷された配布用パンフレット) 日本建築学会、2009年7月1日

「建築雑誌とは」<<http://jabs.aij.or.jp/about/>>、2011年4月9日閲覧

研究方法に関するもの、建築におけるテキスト分析とKJ法

藤岡洋保・佐藤由美「建築雑誌に示された日本の建築界への『空間』という概念の導入と定着」『日本建築学会計画系論文報告集』第447号 日本建築学会、1993年

奥山信一・坂本一成「戦後『新建築』誌における建築家の創作論 建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル」『日本建築学会計画系論文集』第477号 日本建築学会、1995年

池田朋子・大貝彰「言説を分析対象とした空間イメージ研究の手法に関する考察」『日本建築学会計画系論文集』第492号 日本建築学会、1997年

姜涌・近藤正一・北川啓介・張健・若山滋「1950-1970年代の中国における建築雑誌に現れる建築用語の統計的分析—中国建築の近代化過程における建築家の言説に関する研究 その1」『日本建築学会計画系論文集』第516号 日本建築学会、1999年

姜涌・近藤正一・北川啓介・若山滋「1950-1970年代の中国における建築雑誌に現れる建築思想の変遷—中国建築の近代化過程における建築家の言説に関する研究 その2」『日本建築学会計画系論文集』第525号 日本建築学会、1999年

小島隆矢・古賀誉章・宗方淳・平手小太郎「多変量解析を用いたキャプション評価法データの分析—都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その2—」『日本建築学会計画系論文集』第560号 日本建築学会、2002年

そのほか建築に関するもの

『東京大学百年史』東京大学百年史編集室、1987年

茂木計一郎・片山和俊・稲次敏郎・東京芸術大学中国住居研究グループ『中国民居の空間を探る—群居類住“光・水・土”中国東南部の住空間』建築資料研究社、1991年

橋本喬行『論評建築界を考える』日刊建設通信新聞社、1995年

鈴木博之編著『伊東忠太を知っていますか』王国社、2003年

松原弘典「中国—そこに日本の建築世界はどう関われるか」『建築雑誌 2006年2月号』日本建築学会、2006年

松原弘典『中国でつくる 松原弘典の建築』TOTO 出版、2007 年

松原弘典「知らない環を見せてくれる「窓」としての中国」『建築雑誌
建築年報 2009』日本建築学会、2009 年

「中国における建設業・同関連産業の進出可能性」『北陸地域づくり
叢書 北陸地域における北東アジアとの経済連携』（社）北陸建設
弘済会、2010 年 <[http://www.hces.jp/project/project1/h21/
report/4.pdf](http://www.hces.jp/project/project1/h21/report/4.pdf)>、2011 年 4 月 19 日閲覧

木村建一「連載かんきょう随想 第 9 回はじめての新生中国」『建材
試験情報 5』（財）建材試験センター、2006 <[http://www.jtccm.or.
jp/library/jtccm/public/mokuji06/0605_rensai.pdf](http://www.jtccm.or.jp/library/jtccm/public/mokuji06/0605_rensai.pdf)>、2010 年 12 月 17
日閲覧

付録 2 : 図表リスト

序章:日本の建築界の中国認識—その所在と分析方法

図 0.1.-1: 日本の対中貿易輸出入総推移グラフ(1887-2008 年) 単位:百万円

図 0.2.-1: 複数の建築メディアとその周囲の読者群により構成される日本の建築界

表 0.4.-1: 分析対象の 3 つの建築メディア比較表

図 0.4.-1: 本章の構成と分析の対象の関係を示す図

図 0.4.-2: 通時的な中国認識分析における情報伝達手段と論題布置の関係

図 0.4.-3: 共時的な中国認識分析における情報伝達手段と論題布置の関係

表 0.5.-1: 本論の各章構成図

第 1 章:近現代の日本建築界における中国認識—『建築雑誌』の分析(1887—2008 年)

図 1.1.-1: 『建築雑誌』における中国関連記事数の分布(1887-2008 年)と仮説的時期区分 全 229 編

表 1.1.a.-1: 『建築雑誌』I 期の中国関連記事一覧 全 41 編

図 1.1.a.-1: 記事数の経年変化

図 1.1.a.-2: 執筆者の属性

図 1.1.a.-3: 記事形式の属性

表 1.1.b.-1: 『建築雑誌』II 期の中国関連記事一覧 全 42 編

図 1.1.b.-1: 記事数の経年変化

図 1.1.b.-2: 執筆者の属性

図 1.1.b.-3: 記事形式の属性

表 1.1.c.-1: 『建築雑誌』III 期の中国関連記事一覧 全 52 編

図 1.1.c.-1: 記事数の経年変化

図 1.1.c.-2: 執筆者の属性

図 1.1.c.-3: 記事形式の属性

表 1.1.d.-1: 『建築雑誌』IV 期の中国関連記事一覧 全 94 編

図 1.1.d.-1: 記事数の経年変化

図 1.1.d.-2: 執筆者の属性

図 1.1.d.-3: 記事形式の属性

図 1.1.e.-1: 『建築雑誌』における中国関連記事の分布・分期(1887-2008 年)と日中双方の国内状況の比較図

表 1.1.e.-1: 『建築雑誌』4 期の中国関連記事における情報伝達手段の通時的比較表

図 1.2.-1: 『建築雑誌』(1887-2008 年)に発現する中国観全 156 回の KJ 法による時期-論題分布

表 1.2.b.-1: 論題ごとの各期の中国観の数と割合(1887-2008 年) 『建築雑誌』156 回

図 1.2.b.-1: 大論題と『建築雑誌』の時期との関係(左:大論題ごとの各時期中国観数の割合／右:時期ごとの各大論題中国観数の割合)

図 1.2.b.-2: 【技術に着目】大論題における中論題と『建築雑誌』の時期との関係(左:当該中論題ごとの各時期中国観数の割合／右:時期ごとの各当該中論題中国観数の割合)

図 1.2.b.-3: 【社会に着目】大論題における中論題と『建築雑誌』の時期との関係(左:当該中論題ごとの各時期中国観数の割合／右:時期ごとの各当該中論題中国観数の割合)

図 1.2.b.-4: [より学術的技術]中論題における小論題と『建築雑誌』の時期との関係(左:当該小論題ごとの各時期中国観数の割合/右:時期ごとの各当該小論題中国観数の割合)

図 1.2.b.-5: [より職能的技術]中論題における小論題と『建築雑誌』の時期との関係(左:当該小論題ごとの各時期中国観数の割合/右:時期ごとの各当該小論題中国観数の割合)

図 1.2.b.-6: [社会の内部]中論題における小論題と『建築雑誌』の時期との関係(左:当該小論題ごとの各時期中国観数の割合/右:時期ごとの各当該小論題中国観数の割合)

図 1.2.b.-7: [社会の外部関係]中論題における小論題と『建築雑誌』の時期との関係(左:当該小論題ごとの各時期中国観数の割合/右:時期ごとの各当該小論題中国観数の割合)

図 1.2.b.-8: 【場所に着目】大論題における小論題と『建築雑誌』の時期との関係(左:当該小論題ごとの各時期中国観数の割合/右:時期ごとの各当該小論題中国観数の割合)

第2章:現代の日本建築界における中国認識—『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』の分析(1985—2008年)

図 2.1.-1: 3誌における中国関連記事数の分布(1985-2008年) 『建築雑誌』94編 『新建築』196編 『日経アーキテクチャ』200編

表 2.1.a.-1: 『新建築』の中国関連記事一覧 全 196編

図 2.1.a.-1: 記事数の経年変化

図 2.1.a.-2: 執筆者の属性

図 2.1.a.-3: 記事形式の属性

表 2.1.a.-2: 『新建築』(1985—2008年)の中国関連記事における「作品紹介」記事リスト 30編

表 2.1.a.-3: 『新建築』(1985—2008年)の中国関連記事におけるオリンピック関連記事リスト 12編

表 2.1.b.-1: 『日経アーキテクチャ』の中国関連記事一覧 全 200編

図 2.1.b.-1: 記事数の経年変化

図 2.1.b.-2: 執筆者の属性

図 2.1.b.-3: 記事形式の属性

表 2.1.c.-1: 『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』3誌の中国関連記事における情報伝達手段の共時的比較表

図 2.2.-1: 『建築雑誌』『新建築』『日経アーキテクチャ』(1985-2008年)に発現する中国観全 220回の KJ法によるメディア・論題分布

表 2.2.b.-1: 論題ごとの各建築メディアの中国観の数と割合(1985-2008年) 『建築雑誌』65回 『新建築』62回 『日経アーキテクチャ』93回

図 2.2.b.-1: 大論題と3誌の時期との関係(左:大論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各大論題中国観数の割合)

図 2.2.b.-2: 【技術に着目】大論題における中論題と3誌との関係(左:当該中論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

図 2.2.b.-3: 【社会に着目】大論題における中論題と3誌との関係(左:当該中論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

図 2.2.b.-4: 【場所に着目】大論題における中論題と3誌との関係(左:当該中論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

図 2.2.b.-5: [より学術的技術] 中論題における小論題と3誌との関係(左:当該小論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

図 2.2.b.-6: [より職能的技術] 中論題における小論題と3誌との関係(左:当該小論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

図 2.2.b.-7: [社会の内部] 中論題における小論題と3誌との関係(左:当該小論題ごとの各誌中国観数の割合/右:雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

観数の割合)

図 2.2.b.-8: [社会の外部関係] 中論題における小論題と 3 誌との関係 (左: 当該小論題ごとの各誌中国観数の割合 / 右: 雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

図 2.2.b.-9: [都市規模] 中論題における小論題と 3 誌との関係 (左: 当該小論題ごとの各誌中国観数の割合 / 右: 雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

図 2.2.b.-10: [超都市規模] 中論題における小論題と 3 誌との関係 (左: 当該小論題ごとの各誌中国観数の割合 / 右: 雑誌ごとの各当該中論題中国観数の割合)

第 3 章: 日本建築界における中国観の連関—3 つの建築メディアに反復する中国観

表 3.1.a.-1: 「中国の人」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.a.-1: 「中国の人」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.b.-1: 「建設ラッシュ」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.b.-1: 「建設ラッシュ」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.c.-1: 「古いもの」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.c.-1: 「古いもの」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.d.-1: 「大きい多い」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.d.-1: 「大きい多い」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.e.-1: 「スピード」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.e.-1: 「スピード」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.f.-1: 「ものづくりへの態度」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.f.-1: 「ものづくりへの態度」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.g.-1: 「将来の変化」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.g.-1: 「将来の変化」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.h.-1: 「施工精度」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.h.-1: 「施工精度」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.i.-1: 「アドリブ的」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.i.-1: 「アドリブ的」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.j.-1: 「中国の役所」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.j.-1: 「中国の役所」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.k.-1: 「持続可能性」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.k.-1: 「持続可能性」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.l.-1: 「部分と全体」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.l.-1: 「部分と全体」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.m.-1: 「まだこれから」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.m.-1: 「まだこれから」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.n.-1: 「維持管理」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.n.-1: 「維持管理」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.o.-1: 「よくわからない」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.o.-1: 「よくわからない」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.p.-1: 「感情的親近感」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.p.-1: 「感情的親近感」論点における中国観の時期-論調散布図

表 3.1.q.-1: 「コンペ」論点が繰り返される中国観の時期-メディア-論調分布

図 3.1.q.-1: 「コンペ」論点における中国観の時期-論調散布図

図 3.2.-1: 肯定的否定的論調のどちらかに一貫して中国観が反復する論点 「一貫型」7 つ

図 3.2.-2: 肯定的否定的論調が混在して中国観が反復する論点 「混在型」7 つ

図 3.2.-3: 肯定的否定的論調が一定期間ごとに交替して中国観が反復する論点 「交替型」3 つ

表 3.2.-1: 繰り返される中国観の分類 3 つの繰り返しのパターンと 2 つの対中態度

別表 K1:『建築雑誌』中国関連記事リスト(1887-2008 年) 全 229 編 (I 期 41 編 II 期 42 編 III 期 52 編 IV 期 94 編)

資料 番号	雑誌 発行 年月	号 数	著者	記事タイトル	記事サブタイトル/欄名	時 期 区 分
K001	189710	130	三橋四郎	清国遼東寺院建築説	論説及報告	I
K002	189803	135	三橋四郎	清国建築談	論説及報告	
K003	190209	189	伊東忠太	北清建築調査報告	説林-論説	
K004	190303	195	伊東忠太	支那内地古建築及古碑一覽表(自北京至成都)	説林-報告	
K005	190308	200	平野勇造	支那の家具	叢録	
K006	190605	233	伊東忠太	支那印度土耳其旅行談(第一回の上)	説林-演説	
K007	190606	234	大熊喜邦	滿洲の劇場	叢録	
K008	190607	235	伊東忠太	支那印度土耳其旅行談(第一回の下)	説林-演説	
K009	190607	235	大熊喜邦	滿洲の住宅	説林-演説	
K010	190608	236	大熊喜邦	滿洲の住宅(承前)	説林-演説	
K011	190609	237	大熊喜邦	滿洲の住宅(承前)	説林-演説	
K012	190610	238	伊東忠太	支那印度土耳其旅行談(第二回の上)	説林-演説	
K013	190612	240	伊東忠太	支那、印度、土耳其旅行談(第二回の下)	説林-演説	
K014	190701	241	伊東忠太	支那印度土耳其旅行談(第三回)	説林-演説	
K015	190702	242	伊東忠太	支那印度土耳其旅行談(第四回の上)	説林-演説	
K016	190702	242	佐野利器	滿洲旅行談	説林-演説	
K017	190703	243	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て	説林-演説	
K018	190704	244	伊東忠太	支那印度土耳其旅行談(第四回の中)	説林-演説	
K019	190705	245	伊東忠太	支那印度土耳其旅行談(第四回の下)	説林-演説	
K020	190705	245	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て(承前)	説林-演説	
K021	190712	252	伊東忠太	滿洲の仏塔(歴史地理轉載)	叢録	
K022	190803	255	伊東忠太	南清地方探検略記	叢録	
K023	190804	256	伊東忠太	支那建築	説林-論説	
K024	190810	262	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て(第二百四十五號の続き)	説林-演説	
K025	190811	243	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て(四)	説林-演説	
K026	190812	264	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て(五)	説林-演説	
K027	190902	266	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て(六)	説林-演説	
K028	190903	267	大江新太郎	滿洲に於ける建築裝飾に就て(七)	説林-演説	
K029	190912	276	記載なし	大連市南滿州鉄道株式会社近江町社宅	巻末附図説明	
K030	191002	278	伊東忠太	支那印度土耳其旅行談(第五回の上)	説林-演説	
K031	191003	279	伊東忠太	支那印度土耳其旅行談(五回の上続き)	説林-演説	
K032	191207	307	伊東忠太	支那印度土耳其旅行談第五回の下	説林-演説	
K033	191306	318	後藤朝太郎	文字上より見たる支那古代建築(一)	説林-演説	
K034	191308	320	後藤朝太郎	文字より見たる支那古代建築(二)	説林-演説	
K035	191309	321	後藤朝太郎	文字より見たる支那古代建築(三)	説林-演説	
K036	191311	323	後藤朝太郎	文字より見たる支那古代建築(四)	説林-演説	
K037	191312	324	後藤朝太郎	文字より見たる支那古代建築(五)	説林-演説	
K038	191512	355	関野貞	論説:支那六朝以前の墓に就て	説林-演説(考古学会大会)	
K039	191712	384	関野貞	西遊雜信 一	(旅行記)	
K040	191909	393	関野貞	西遊雜信 其二	(旅行記)	
K041	192001	397	関野貞	西遊雜信	(旅行記)	
K042	192001	403	記載なし	青島郵便局建築概要	巻末附図説明	II
K043	192001	403	記載なし	青島病院支那人治療分院建築概要	巻末附図説明	
K044	192101	415	記載なし	南滿州鉄道会社大連及奉天所在地独身宿舍新築工事概要	巻末附図説明	
K045	192206	431	記載なし	満州工人会設立趣意書	時報	
K046	192301	439	記載なし	南滿州鉄道株式会社設立 南滿州工業専門学校開設(所在地大連市伏見台)	時報	
K047	193104	544	村田治郎	東洋建築系統史論 (其一)	論説	
K048	193207	559	久留弘文	滿洲国の建築	講演	
K049	193302	567	岸田日出刀	滿洲所見	講演	
K050	193302	567	田辺平学	旅順爆撃演習見學の所感並に滿洲建築界の近況	講演	

資料 番号	雑誌 発行 年月	号 数	著者	記事タイトル	記事サブタイトル/欄名	時期 区分
K051	193307	573	大島義清	満洲の産業資源	講演	II
K052	193307	573	柴山兼四郎	最近の支那事情	講演	
K053	193309	575	佐野利器	満洲の国都建設	講演	
K054	193407	587	間瀬眞平	満洲の気象	資料	
K055	193504	598	城戸久	2) 江戸時代の学校建築に就て	(論文)	
K056	193609	616	古宇田實	最近中華民国及満洲國視察の所感	講演	
K057	193706	627	松浦助	満洲建築の凍害に就て	(報告)	
K058	193709	630	松浦助	満洲建築の防寒養生試験報告	報告	
K059	193710	631	松浦助	満洲に於ける建築労働者に就いて	資料	
K060	193804	637	曾磊・山下清吉(訳)	支那に於ける防空理論の探求	文献翻訳	
K061	193806	639	松浦助	満洲建築の防寒養生報告(第2報)	報告	
K062	193807	640	岸偉一	支那問題に就て	講演	
K063	193903	648	濱田稔	満洲国に於ける建築と研究(材料・構造・衛生方面)	(報告)	
K064	193904	649	笠原敏郎	満洲建築界の事情	講演	
K065	193904	649	桑原英治	満洲国政府関係官署に就て	講演	
K066	193905	650	室井修	煉瓦造建築の再検討	評論	
K067	193908	653	藤田元春	民家から見た日本と支那	講演	
K068	194006	663	佐藤武夫	現代支那の建築文化相	講演	
K069	194007	664	三條康昭・原本裕夫	満洲に於けるコンクリートに関する研究:1.新京に於ける碎石コンクリート	資料	
K070	194007	664	大川益司・伊澤龍暢	満洲に於けるコンクリートに関する研究:2. 満洲各地の骨材調査	資料	
K071	194109	678	笠原敏郎	満洲国規格型住宅の制定に就て	報告	
K072	194202	683	浅井新一・大前岩八	支那の穴居	資料(学術振興会研究資料)	
K073	194210	691	佐藤武夫	支那大陸に於ける外国建築とその政治表現	(論文)	
K074	194210	691	小池新二	中国旅行日誌	(旅行記)	
K075	194306	699	高原一秀	満洲開拓の建築	(論文)	
K076	194309	702	笠原敏郎	満洲国住宅政策経過概要	(報告)	
K077	194309	702	莊原信一	満洲に於ける住宅の最近の趨向について	(報告)	
K078	195405	810	岡大路	中共建築事情の概況	(報告)	
K079	195405	810	杉田和雄	中共の建設に従事して	(報告)	
K080	195604	833	周栄鑫	祝電(内外友好団体より寄せられた祝辞)	創立70周年記念特集(ニュース)	III
K081	195704	845	奥田勇	小野さんの満洲時代をしのぶ(故小野薫博士の追悼)	(論説)	
K082	195704	845	森徹	満洲国と小野博士(故小野薫博士の追悼)	(論説)	
K083	195704	845	前田敏男	小野先生の満洲時代の思い出(故小野薫博士の追悼)	(論説)	
K084	195904	869	劉敦・平井聖(訳)	中国住宅概説[建築学報 56. No.41/53]	文献抄録	
K085	196010	890	丁堅保ら・城谷豊(訳)	中国における「技術経済分析」(3つの中国の書籍から)	文献抄録	
K086	196103	895	西山卯三	新中国に旅して	(旅行記)	
K087	196201	907	平井聖	中国における建築遺跡の発掘調査状況	特集「建築遺跡調査の最近の発展とその成果」	
K088	196202	908	中国科学院・平井聖(訳)	隋唐東部(洛陽)城址の調査と発掘[考古 6103 127/135]	文献抄録	
K089	196602	964	郝英濤・平井聖(訳)	中国古代建築の年代判定[文物 6504,14/30, 文物 6505,6/15]	文献抄録	
K090	196702	977	郝英濤・平井聖(訳)	中国古代建築の年代判定-II 完 [文物 6505,6/15]	文献抄録	
K091	196901	1005	無記名	主集: 東洋建築史の展望	特集「東洋建築史の展望」	
K092	196901	1005	無記名	内容紹介	特集「東洋建築史の展望」	
K093	196901	1005	村田治郎	東洋建築史研究の展望と課題	特集「東洋建築史の展望」	
K094	196901	1005	福山敏男	中国石窟の展望: 西域から華北へ	特集「東洋建築史の展望」	
K095	196901	1005	竹島卓一	營造法式の価値: ものという資料	特集「東洋建築史の展望」	
K096	196901	1005	平井聖・八木清勝	中国の西域・西藏と雲南の建築	特集「東洋建築史の展望」	
K097	196901	1005	沢村仁	南禅寺大殿 唐・山西五台(新中国で発表された重要建造物)	特集「東洋建築史の展望」	
K098	196901	1005	沢村仁	仏光寺大殿 唐・山西五台(新中国で発表された重要建造物)	特集「東洋建築史の展望」	
K099	196901	1005	関口欣也	開善寺大殿 遼・河北新城(新中国で発表された重要建造物)	特集「東洋建築史の展望」	
K100	196901	1005	関口欣也	保国寺大殿 北宋・浙江余姚(新中国で発表された重要建造物)	特集「東洋建築史の展望」	

資料 番号	雑誌 発行 年月	号 数	著者	記事タイトル	記事サブタイトル/欄名	時期 区分
K101	196901	1005	伊藤延男	永楽宮 元、山西＝城 (新中国で発表された重要建造物)	特集「東洋建築史の展望」	III
K102	196901	1005	宮沢智士	中国の文化財保護と古建築の指定	特集「東洋建築史の展望」	
K103	196901	1005	文献抄録小委員会第七部会	東洋建築史文献目録	特集「東洋建築史の展望」	
K104	197009	1028	文献抄録小委員会第7部会	中国建築史年表	文献抄録に近い内容、日中の本をあわせて作成	
K105	197206	1053	中国科学院考古研究所・八木清勝(訳)	元大都の調査と発掘(原著データ不明)	文献抄録	
K106	197601	1102	無記名	中国建築の現状、内容紹介	特集「中国建築の現状」	
K107	197601	1102	吉阪隆正	貝はどんな子を生むのか	特集「中国建築の現状」	
K108	197601	1102	田中淡	中国建築学界解放後のあゆみ：新建設の民族的形式・建築史の研究と教育・文物保護工作を中心として	特集「中国建築の現状」	
K109	197601	1102	久保田正光	中国建築学会と建築に関する諸制度	特集「中国建築の現状」	
K110	197601	1102	稲垣栄三	建築教育：清華大学見聞記	特集「中国建築の現状」	
K111	197601	1102	宮野秋彦	建築教育：主として大学	特集「中国建築の現状」	
K112	197601	1102	市浦健	中国の都市計画	特集「中国建築の現状」	
K113	197601	1102	市川清志	都市と住宅	特集「中国建築の現状」	
K114	197601	1102	鈴木成文	中国の都市住宅	特集「中国建築の現状」	
K115	197601	1102	近藤正一	人民公社住居概観概感	特集「中国建築の現状」	
K116	197601	1102	近藤正一	紅星中朝友好人民公社見聞拾遺	特集「中国建築の現状」	
K117	197601	1102	片桐正夫	雁北の人民公社：大同市南郊区・北村人民公社を訪ねて	特集「中国建築の現状」	
K118	197601	1102	藤本昌也	長征人民公社	特集「中国建築の現状」	
K119	197601	1102	稲葉和也	上海・塘湾人民公社	特集「中国建築の現状」	
K120	197601	1102	久我新一	中国建築と環境問題	特集「中国建築の現状」	
K121	197601	1102	石原正雄	建築設備	特集「中国建築の現状」	
K122	197601	1102	宮野秋彦	地下建築：北京の人民防空壕と地下鉄	特集「中国建築の現状」	
K123	197601	1102	梅村魁・小堀鐸二・谷資信	耐震建築	特集「中国建築の現状」	
K124	197601	1102	河田明雄	材料・施工	特集「中国建築の現状」	
K125	197601	1102	清水正夫	雲岡石窟	特集「中国建築の現状」	
K126	197601	1102	鈴木嘉吉	文物修理	特集「中国建築の現状」	
K127	197601	1102	関口欣也	山西省南禅寺・仏光寺・晋祠の古建築	特集「中国建築の現状」	
K128	197601	1102	沢村仁	大同の古建築：華嚴寺と善化寺	特集「中国建築の現状」	
K129	197601	1102	横松宗治・平井聖	写真・中国の建築	特集「中国建築の現状」	
K130	197712	1130	田中淡	中国古代建築友好訪問記	旅行記	
K131	197808	1139	清水正夫	中国の文化財行政	特集「アジアにおける文化財保存の現状」	
K132	197908	1154	表俊一郎	中国の地震予知について	コラム「余滴」	
K133	198102	1175	田中淡	干欄式建築の伝統：中国古代建築史からみた日本	特集「日本建築の特質」	
K134	198311	1214	田中淡	中国の伝統的木造建築	特集「世界の木造建築」	
K135	198501	1229	前田敏男・加藤涉・河東義之	満州国大陸科学院	特集「わが回想、失われた昭和10年代」対談	IV
K136	198504	1232	清水正夫	日中交流の10年と今後の展望(建築雑誌展望1985年)	特集「中国建築界との交流」	
K137	198504	1232	尾島俊雄	激変する中国建築界の展望(建築雑誌展望1985年)	特集「中国建築界との交流」	
K138	198504	1232	石東直子	天津大学での教鞭：前期の都市計画の講義を終えて(建築雑誌展望1985年)	特集「中国建築界との交流」	
K139	198508	1236	須藤福三	中国第2回Civil Eng. 電算機利用国際会議日本建築学会論文発表団レポート	学会短信、NEWS	
K140	198508	1236	浅川滋男	1.中国住宅の研究：長江下流域における調査から	大会協議会「東洋の建築的伝統」	
K141	198508	1236	XiaoqiYe・水野智之(訳)	中国における防火安全のあゆみ [Interflam '85, Conference Workbook, University of Surrey]	文献抄録	
K142	198511	1240	許溶烈・渡辺 俊一(訳)	改革に直面する「中国」建築科学技術	学会短信LETTER	
K143	198511	1240	無記名	中国建築概説	特集「中国建築概説」	
K144	198511	1240	芦原義信・梅村魁・吉武泰水ら	中国建築学界展望	特集「中国建築概説」討論	
K145	198511	1240	浅川滋男・村松伸・茂木計・八代克彦・山口幸夫ら	日中学術交流	特集「中国建築概説」討論	
K146	198511	1240	李康寧・夏寅・張国慶・高小航・尹軍・戴吾明ら	中日学術交流	特集「中国建築概説」討論	
K147	198511	1240	小坂宏之・金子勇次郎ら	中国建設市場展望	特集「中国建築概説」討論	
K148	198511	1240	浦良一	中国の建築設計	特集「中国建築概説」	
K149	198511	1240	青木志郎・楠本侑司	1. 生活と住まい方 (中国の窯洞建築)	特集「中国建築概説」	
K150	198511	1240	茶谷正洋・八木幸二	2. 窯洞住居の地域差：横穴形態について (中国の窯洞建築)	特集「中国建築概説」	

資料番号	雑誌発行年月	号数	著者	記事タイトル	記事サブタイトル/欄名	時期区分
K151	198511	1240	宮野秋彦・稲葉一八・水谷 章夫	3. 窑洞式住居の内部環境: 主として温熱環境について (中国の窑洞建築)	特集「中国建築概説」	IV
K152	198511	1240	村松伸	朝鮮総督府と毛主席記念堂: アジアの建築を見る目	特集「中国建築概説」	
K153	198511	1240	堀込憲二	風水思想と中国の都市: 清時代の城市を中心に	特集「中国建築概説」	
K154	198602	1243	八代克彦	中国建築学会主催「国際生土建築学術会議」報告	NEWSLETTER	
K155	198607	1248	田中淡	中国建築からみた寝殿造(建築史研究方法論の再検討: 寝殿造を中心に)	大会研究協議会「建築史研究方法論の再検討」	
K156	198609	1250	戴念慈	海外招待者記念討論会(日本建築学会創立100周年記念事業報告・1)	特集「創業守成」(講演録)	
K157	198709	1263	阿久井喜孝	中国・重慶にみる河岸丘陵の都市集落	コラム「ヴァンキュラー建築」	
K158	198809	1276	陳從周	中国園林の世界	特集「アジアの建築」・インタビュー	
K159	198809	1276	生井英考	歪められた花: 19-20世紀転換期アメリカにおける<中国>と<日本>	特集「アジアの建築」	
K160	198809	1276	崔榮秀	人間生活の器を: 中国のホームレスと建築家	コラム「同時代のハウジング」	
K161	198812	1280	蕭燕	敦煌莫高窟の擁壁工事: 保存技術 (6)	コラム「技術ノート」	
K162	198911	1292	黃衛氏	《中国風景》か《世界風景》か	コラム「Critic by Under Thirty」	
K163	199006	1300	牛尾好孝	中国銀行頂上マストの施工とディール	コラム「でている」	
K164	199006	1300	阮儀三・孟令強 (訳)	中国における歴史文化名城保護の現状(<特集>まもる)	特集「まもり」(中文寄稿)	
K165	199105	1313	土田充義	中国のアーチ橋建設	コラム「建築再見」	
K166	199106	1314	藤田忍	中国小康住宅のバースペクティブ	コラム「建築再見」	
K167	199207	1329	ShuLiら・黒澤信之 (訳)	中国人青年男子の四肢の作業域, [Ergonomics, 1990, Vo1.33, No.7, pp.967-978]	文献抄録	
K168	199207	1329	GongxiaYangら・山添英順 (訳)	中国の台所設備機器のための最適高さ [Ergonomics, 1990, Vol.33, No.7, pp.945-957]	文献抄録	
K169	199212	1336	阿久井喜孝	中国西南少数民族に息づく伝統木構造: 風雨橋	コラム「記憶の風景」	
K170	199307	1344	高岡えり子	中国江蘇省の農村集落について(共生と現代: 東アジア集住文化を通底するもの)	特集「東アジア集住文化」・研究懇談会	
K171	199403	1355	高岡えり子・浅川滋男	中国貴州少数民族の住居と集落に関するシンポジウム	学会国際交流振興基金活動レポート(ニュース)	
K172	199405	1357	BiZhongzhen・村岡宏 (訳)	中国における森林火災の予防と消火 [Proceeding of Asian Fire Seminar, 7th-9th, October 1993]	文献抄録	
K173	199409	1362	斎藤賢吉	中国建築学会ならびに大韓建築学会との協力協定の締結ならびに中国建築学会訪問報告	活動レポート(ニュース)	
K174	199412	1366	山口幸夫	同済大学建築都市計画学院の建築教育: 90年代中国の建築教育	コラム「世界の建築教育39」	
K175	199501	1367	長田正至	武藤先生・中国の休日	コラム「人のいる風景」	
K176	199503	1370	相田武文	中国・大連の住宅	コラム「記憶の風景」	
K177	199510	1379	宮澤秀治	中国の天空と大地の景観から.....(どこで何から建築を学ぶか)	特集: 建築の学び方	
K178	199611	1397	呉慶州・高野 恵子 (訳)	中国古代の都市における洪水防御技術の研究, 中国古代城市防洪研究[中国建築工業出版社・北京 1995.8 334p.]	文献抄録	
K179	199701	1400	胡宝哲	日本と比較の視点からみた中国における建築デザイン教育: 清華大学建築学院を例として	コラム「世界の建築教育64」	
K180	199712	1415	郭献群	大連理工大学にみる中国の建築関連学科の教育事情(世界の建築教育75)	コラム「世界の建築教育75」	
K181	199712	1415	折戸嗣夫	中国残留建築への愛情	コラム「会員の声」	
K182	199806	1423	稲葉信子	北京での伊東忠太: 中国からインドを経てトルコへ、アジア探検旅行の始まり	コラム「人のいる風景」	
K183	199907	1441	佐々波彦彦・王郁・海老塚良吉ら	アジアの歴史的都市・住宅研究にどう取り組むか?	特別研究部門研究懇談会	
K184	199909	1443	阿久井喜孝	中国・雲南省・大理市: 大理天主堂(建築奇想天外)	コラム「建築奇想天外」	
K185	200002	1450	平尾和洋	アジアの歴史都市・住宅研究にどう取り組むか?(陣内秀信・友田博通・大西国太郎・王郁・東樋口謙)	特別研究部門研究懇談会	
K186	200003	1452	矢野和之	交河故城の保存事業中国・新疆ウイグル自治区: 砂漠地域における土構造物の遺跡保存	特集「アジアの世界遺産を語る」	
K187	200103	1469	TianT.Lan・西田明美 (訳)	UDC: 624.074 中国におけるスペースフレームの規約と規準 [Proceeding of Sixth Asian Pacific Conference]	文献抄録	
K188	200205	1488	中村慎一	中国新石器時代の都市(IV城壁集落と条坊都市(1))	特集「都市と都市以前: アジア古代の集住構造」	
K189	200208	1492	佐々木大	彝族平頂土掌房における住様式の特続と変容: 中国雲南省・伝統的陸屋根住居の空間構成に関する研究	学会優秀論文推薦文(ニュース)	
K190	200210	1494	中原まり	アーカイブいろいろ: 中国のアーキテクチュラル・アーカイブ事情	コラム「建築博物館が欲しい!」	
K191	200211	1495	田中重光	上海(中国): 日本最古の鉄筋コンクリート造小学校	コラム「建築のアジア 世界の植民地建築(11)」	
K192	200302	1500	無記名	創刊1500号記念 特集アジアのなかの日本建築(中扉)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念	
K193	200302	1500	鄭肘齡・李彦才・重村力ら	(1)アジア建築の未来: われわれにとって、サステイナビリティとは何か(I 鼎談)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念 討論	
K194	200302	1500	磯崎新・藤森照信ら	(2)アジアのなかで世界建築の将来を展望する(II 鼎談)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念 討論	
K195	200302	1500	稲葉佳子・佐藤浩司ら	(1)アジアの住居集落研究の課題: アジアの居住空間と環境整備(III 座談会)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念 討論	
K196	200302	1500	中川武・斎藤英俊ら	(2)アジア建築遺産の保存修復と技術協力(IV 座談会)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念 討論	
K197	200302	1500	川口衛・和田章ら	座談会(4)アジアへの技術援助と技術移転(VI 座談会)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念 討論	
K198	200302	1500	鈴木成文・李光魯・布野修司	アジアの建築交流: 回顧と展望 地に足をつけた多彩な交流を(VII 対談)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念 討論	
K199	200302	1500	胡惠琴	日本建築学会は研究者の描筆(VIII アジアからのメッセージ)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念	
K200	200302	1500	盧莘明	日中建築文化交流のブーム到来を期待する(VIII アジアからのメッセージ)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念	

資料 番号	雑誌 発行 年月	号 数	著者	記事タイトル	記事サブタイトル/欄名	時 期 区 分
K201	200302	1500	孫躍新	北京CBDと再開発される天津日本租界：日本建築家への期待(VIII アジアからのメッセージ)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念	IV
K202	200302	1500	鄧奕	志同道合、既往開来：日中共同研究の過去から未来へ(VIII アジアからのメッセージ)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念	
K203	200302	1500	王興田	日本建築士が中国の都市開発に何の経験を与えたか(VIII アジアからのメッセージ)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念	
K204	200302	1500	周若那	もっと中日交流を!(VIII アジアからのメッセージ)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念	
K205	200302	1500	林曉光	日本の建築技術と建築教育(VIII アジアからのメッセージ)	特集「アジアのなかの日本建築」創刊1500号記念	
K206	200308	1508	周南	中国における「非一明両暗」型住宅の平面構成及び住まい方に関する研究	日本建築学会奨励賞推薦文(ニュース)	
K207	200312	1512	西澤泰彦	中国・東北地方：「満鉄建築」の横綱	コラム「建築のアジア 世界の植民地建築(24)」	
K208	200402	1514	田中淡	中国建築の年代学的通史を如何に叙述するか(東洋建築史,III 論考：もしあなたが通史を書くならどうしますか?)	特集「通史をどう書くか?」	
K209	200405	1519	王伯偉・郭屹民	(2)同济大学キャンパス計画の特色(III ケーススタディ：海外)	特集「キャンパス計画の現在」	
K210	200501	1527	周暢	北京：伝統文化と現代文明の衝突の都市	第5回アジアの建築交流国際シンポジウム-基調講演(中国建築学会)	
K211	200511	1539	北原博幸	(2)中国における住宅の居住環境とエネルギー消費：中国の住宅におけるエネルギー消費と居住環境問題特別研究委員会	コラム「今伝えたいトピックス」	
K212	200611	1553	杜金鵬ら・高野恵子(訳)	中国古代、夏・殷の都市に関する考古学関連文献2題	文献抄録	
K213	200612	1554	村松伸	日本建築は中国といかに向き合うか：2,000年の交流の後に	特集「中国そこに日本の建築世界はどう関われるか」	
K214	200612	1554	迫慶一郎・東福大輔ら	個々人が認識する日中の建築世界	特集「中国そこに日本の建築世界はどう関われるか」討論	
K215	200612	1554	進藤憲治・千島義典ら	日中の差異から生まれる組織戦略	特集「中国そこに日本の建築世界はどう関われるか」討論	
K216	200612	1554	張欣	深さと若さ：中国のディベロッパーから見た日本	特集「中国そこに日本の建築世界はどう関われるか」インタビュー	
K217	200612	1554	呉京海	中国の設計事務所から見た日本人設計者	特集「中国そこに日本の建築世界はどう関われるか」インタビュー	
K218	200612	1554	許懋彦・王昀	日中は建築教育を通じてどんな明日が築けるか?	特集「中国そこに日本の建築世界はどう関われるか」インタビュー	
K219	200612	1554	隈研吾	ザラザラとした多様性を保つために	特集「中国そこに日本の建築世界はどう関われるか」インタビュー	
K220	200612	1554	梶原文生	日本のファンをどれだけつくれるかが鍵になる	特集「中国そこに日本の建築世界はどう関われるか」インタビュー	
K221	200612	1554	大西國太郎	中国で考える歴史都市の保存再生	特集「中国そこに日本の建築世界はどう関われるか」インタビュー	
K222	200612	1554	田中淡	中国で構想する建築史	特集「中国そこに日本の建築世界はどう関われるか」インタビュー	
K223	200612	1554	嚴綱林	都市を診る：中国での環境保全の実践	特集「中国そこに日本の建築世界はどう関われるか」インタビュー	
K224	200612	1554	松原弘典	編集後記	特集「中国そこに日本の建築世界はどう関われるか」	
K225	200708	1565	W.J.Xuら・若井修一(訳)	中国の虎跳峡地域における岩混り石の工学的特性	文献抄録	
K226	200712	1569	横山正	中国の民家	連載/切手に見る世界建築24	
K227	200807	1578	梶原雅人	北京はどこへいくのかー胡同の過去と現在	特集「OLYMPIC CITY」	
K228	200807	1578	是永美樹	小さな都市マカオの大きな賭けーカジノに託された都市再生への野望	特集「OLYMPIC CITY」	
K229	200812	1583	ZhaoQingzhuら・百田真史(訳)	中国における水蓄熱の適用について	文献抄録	

別表 K2 :

『建築雑誌』中国観リスト (1887 - 2008 年)

全 156 回 (Ⅰ期 30 回 Ⅱ期 26 回 Ⅲ期 35 回 Ⅳ期 65 回)

・各対中観の冒頭のKはほかの建築メディア情報である『新建築』(S)と『日経アーキテクチュア』(N)を『建築雑誌』(K)を区別するためのものである。前の数字は中国関連記事の記事番号、後の数字は1つの記事の中に複数の対中観がある場合の順序を示す番号である。

Ⅰ期 30 回

K002-1 支那人は非常に福を好みますから装飾に蝙蝠を好む

支那人は随分頭を撲かれても金が貰いたいと云うので非常に福を好みますからそれらが(装飾に蝙蝠を好む)原因であるように思はれる、(三橋四郎、1898 年)

K003-1 建築の形式が地理的に漸次に変化する、各国で同じ

余は北京を發して西北に向かうや、建築の形式が漸次に変化するを認めたり。而して其変化は大同附近に至りて其極に達したり...雲岡石仏寺に於いては、終に我が法隆寺の影を認むるに至れり。...余は是故に北清建築研究の甚だ重要なるを認め、且つ其最も趣味に富むを信ずるなり。...吾人は今只に東洋建築に就いてのみ之を言ふにあらず、各国各種の建築に就いて之を言わんと欲するものなり。(伊東忠太、1902 年)

K005-1 支那家屋は平屋造を多し

支那家屋は平屋造を多しとすれども上等社会にありては二階造のものなきに非ず。大抵煉瓦造りにして光線は出多き出庇しを通じて小なる窓(硝子なき古き家は大抵貝を寄せたるもの)より来る。劇場会堂等は天窓を取る。南方北方大抵相似たり。(平野勇造、1903 年)

K006-1 支那の全体地形は川に依って分ける...建築の性質も同じ

支那の全体の地形は...川の水域に依って分けるのが一番適當だと思ひます。斯の如く総ての点に於て南。中、北の三部分は著しく違つて居ります、建築の性質もそれと同じことで... (伊東忠太、1906 年)

K007-1 支那劇場の舞台の有様は日本と異なり大いに簡単

支那劇場の如何なる風に建築されてあるかは、... (支那の劇が)唱戲ろ云ふが如く重に「モノローグ」を以て成り、日本の劇よりは寧ろ能楽に近きが如しとは一般の言の如し、且つ書割もなく幕もなく、大したる道具とてものなきが如し、従つて其の劇場の「プ

ラン」並に舞台の有様も日本の劇場とは大に異りたる点多く且つ極めて簡單なる者なり。(大熊喜邦、1906 年)

K010-1 満洲の住家は長方形の各棟をバラバラに置き日本の様な変化は一つもなし

要するに満洲の住家と申します者は長方形の者を一つ又は一つ以上今迄御話致しました様にバラバラに置きましたので大な家になれば棟数を増します計りで至て單純のやり方で日本の様に外形の変化や間取りの変化と云ふ事は一つもありません様です。(大熊喜邦、1906 年)

K013-1 支那では婦人を監禁する悪習がある

支那では婦人を監禁する悪習があるから、斯の如き賑やかな公園地にも花のごとき婦人令嬢の姿は更に見えない、...婦人監禁の悪習を止めない限りは支那の天地は寂寞荒涼として...乾燥なるその心情、殘忍なるその行為は永く改まる時がないと思ひます。(伊東忠太、1906 年)

K013-2 支那の事は欧羅巴の書物には爪の垢ほどにも足りない

今日御演説になりました所の支那の事に付きましては、殊に欧羅巴の書物にはマダ爪の垢ほどにも足りない位いの説明に過ぎぬのであります。又欧羅巴人は幾ら調べませうと思ひましても言葉が違ひ又習慣其の他も違つて居ります、之に反しまして日本に於ける伊東君は其の道に多年御志をかけられて東洋の建築のことを御研究になり...今晚は特に細かにご説明を下さいましたことは実に我々建築者に取つて益するところは多大である、(妻木頼黄、1906 年)

K014-1 支那研究には何事にも隔靴搔痒の感

興平から北の方醴泉の間には古墳が多くあるのです。...周以後唐に至るまでの陵の建築の沿革は余程面白いものであらうと思ひます。若しこれ等の陵を発掘することが出来たならば支那芸術史上に恐ろしい大光明を放つことでありまじやうが、夫は当分到底出来なだらうと思ひます、支那研究には何事にも隔靴搔痒の憾が随伴します。(伊東忠太、1907 年)

K014-2 支那の塔は山河と諧調する様に形式を定めたもの

凡て支那の塔は山河と諧調する様に位置を選び形式を定めたものでありますから、単に一つ丈を取り離して日本人の嗜好を標準として形式手法の醜美、善悪を論ずることは無理であります。(伊東忠太、1907 年)

K014-3 支那の小児は他の国民より大きくなると段々に可愛さが無くなる

総じて支那の小児は実に可愛らしいものですが大きくなると段々に可愛さが無くなる、此変化は他の国民よりも顕著である様です、(伊東忠太、1907 年)

K015-1 支那人の言は日本でも同じでいつでも誇大すぎて居る

支那人の言はいつでも誇大すぎて居る、否支那斗りではない、日本でも同じことで、人は兎角物事を大袈裟に吹聴したがる動物である、(伊東忠太、1907 年)

K015-2 支那の仏教建築は粗末

(峨眉山の寺院建築について) 建築の粗末なことは以ての外です、...比較的純潔な峨眉山さへこの通りですから、その他の支那の佛寺の有様は思ひやられます。今や支那に佛教なしと云つても少しも過言ではありません。(伊東忠太、1907 年)

K016-1 北京の建物の本は其真髓を満洲に見ることが出来る

清朝は詰り満洲から起つて北京に乗込んだものでありますから北京の建物の本は其真髓を満洲に見ることが出来る訳である、例へ明の建物を模して造ったとした所が其の清朝化したものは満洲精神であらうと思ひます、(佐野利器、1907 年)

K017-1 満洲の建築装飾は仕上げが甚だ不手際

(満洲の建築装飾は) 色々と装飾的の細工をやつて居りますけれども総て仕上げが甚だ不潔であります即ち甚だ不手際であります(大江新太郎、1907 年)

K017-2 建築物の修繕とか改良とかいふことの出来て来ない

支那の沿革が御承知の如く昔から強食弱肉で...人間の頭脳に永久とか安心とかいう觀念が誠に乏しいやうに思はれます。...(建築物や土工物などの) 修繕とか改良とかいふことの出来て来ないのが抑も人間の頭に永久とか安心とかいふ觀念の無い所から源由した事かと私は考へます。(大江新太郎、1907 年)

K018-1 元来支那人はすごぶる残忍刻薄な性質を有て居り

元来支那人はすごぶる残忍刻薄な性質を有て居り、且つ死と云ふ事に対して極めて冷淡です、些細なことで人を殺し人に殺される、これは支那人が太古から好んで獸肉を食ふ慣習から来たものかと思はれる。(伊東忠太、1907 年)

K018-2 総じて支那人は人の物品を評価し代価を質問する癖あり

総じて支那人は人の物品を評価し又は代価を質問する癖があります、支那では之が決して無作法でも無礼でもない様です、(伊東忠太、1907 年)

K018-3 支那の男は妻を見ること玩弄具如くです

支那の婦人は一般に無知無識であるのはなほ善いのですが、無芸無能のものが多く、更に悪いことは一般に貞操の思想に乏しい、男は一般にその妻を見ること玩弄具如くです、斯の如くにしていかでか兒童を教育し得べき、実に憫むべく驚くべき人類です。(伊東忠太、1907 年)

K019-1 支那は皮相的の道德仁義に拘泥する国

支那は皮相的の道德仁義に拘泥する国で、今でも父が死ぬば子は三年の喪に服します...家長たるもの遠く出て他の地方に仕官し、若し一旦死んだ時には、その妻子は屍を故郷に護送することになつて居るが、土地の遠隔と交通の不便とで遺族は非常なる惨状に陥ることがある(伊東忠太、1907 年)

K023-1 世界建築術の中で支那建築は其最も珍奇なるものの一つ

凡そ世界の建築術の中に就て、支那建築は其最も珍奇なるものの一なるべし、欧州人の嘗て夢想し能はざる奇異なる形式は支那建築に於て縦横に経営せられたり、...由来支那及支那人なる問題は猶ほ世界に於ける未知数なるが如く、支那建築も亦た建築界に於ける未だ解決せられざる好問題なるが如し、(伊東忠太、1908 年)

K023-2 支那建築は色彩の建築なり

支那建築は色彩の建築なり、其内外何れの部分も無色なるはなし、(伊東忠太、1908 年)

K023-3 支那建築は仏教渡来と共に発達し今は観るに足るもの無きに至りたり

支那建築は遼遠なる古代に於て発生し、佛教渡来と共に急激なる発達を遂げ、唐初に於て其極致に到達し、宋以降漸次に墮落し來り、今日に至りては殆んど観るに足るもの無きに至りたり。(伊東忠太、1908 年)

K024-1 満洲建築の石瓦技術は、概して非常に優秀卓抜

(満洲における建築の材料について) 石材瓦材兩者共に、其技術は、概して非常に優秀卓抜でありまして、意匠の繁簡、高低凹凸の緩急が実に其当を得て居ります。(大江新太郎、1908 年)

K026-1 満洲の建築装飾は面白く、言ひ知れぬ味がある

色彩の種類は...意匠は実に豊富で、自由で、奇抜で、とぼけて、神出鬼没、譬え難きところのものがあつて、...満洲の建築的装飾は...一見して先ず無邪氣に嬉しい、再視して何んだか斯う腹立たしい、三察して之を巨細に觀察研究して行くと、段々面白い処、良い処が出て來て、其処に言ひ知れぬ味があるので御座います。(大江新太郎、1908 年)

K027-1 満洲建築は木割や型で束縛されて居ない

懸魚の垂り方は、至つて放埒で、...甚だ無造作な取りつき方を致して居ります。...我国中古以来の様に、木割や、型で、束縛されて居ないという此の一例が、普ねく、満洲建築の全斑を語つて居るのであります。詳言すれば、此故を以て、驚愕すべき傑作を出だし、その故を以て辟易すべき怪作を産するのであります。(大江新太郎、1909 年)

K028-1 支那人の建築は我邦が垂直的なものに対し周期的反復が水平的に展開

一般に対照(シンメトリー)という觀念は、実に支那人の天性でありまして、...打つて違い(オルターネーション)、反復(レペチション)も亦盛んに行はれて居ります。...尚此周期的反復が、軒先桷組などに、色彩を以て適用さるる例を見ますに、其方向が、普通は水平的であるといふことが、我邦の日光などの垂直的なものに異なつた点であります。(大江新太郎、1909 年)

K031-1 支那人は死に対して冷静ながら極端なる実利主義

一体支那人は死に対して甚だ冷静です。...その癖自己本位の極端なる実利主義であるのはすごぶる面白いことと思ひます。(伊東忠太、1910 年)

K033-1 支那古代建築の研究には古代文字研究が役立つ

支那古代建築の研究には先秦(西紀前二二一以前)の文字を研究するが便法である...先秦の文字による時は、周代はおろか支那元始的の建物の形式、手法、種類を或る程度まで推すことが出来る。(後藤朝太郎、1913 年)

K033-2 支那上代の建築は直線的で他の文明の影響を受けず

支那上代の建築は文字上に見えたところでは、單純な直線的性質を帯びて居る。...その形式が穴居より出て居ること...上代の支那建築は、他の文明種族の芸術的影響を受けたこともなかったらしく。又自發的に非常な苦心をする程のことも要らなかつたらしい。(後藤朝太郎、1913 年)

Ⅱ 期 26 回**K047-1 西方文化は支那を経ず東進したものもある**

西方文化の東漸、又はその逆が、従来信せられていたやうに支那本土を通じて行はれた事は勿論認めなければならないが、同時に支那本土を経ず、漢文化に接触せずして、Siberia 南部、蒙古の如き地帯を一路東進した文化があり得ることも、亦推察しなければならない。(村田治郎、1931 年)

K048-1 満洲は昔から日本の生命線

満洲は日本の生命線だといふ言葉は此一二年のことではありますが、併し昔から満洲が日本の生命線であることに变りはなかつた筈であります。(久留弘文、1932 年)

K048-2 満洲は耐寒建築のため煉瓦を主要建築材料として

満洲に於ては耐寒建築でなければならない。...建築規則に於きましても木造建築はほんの一時的なものでなければ許さないとふことになり、煉瓦を主要建築材料としての構造法が発達したのであります。(久留弘文、1932 年)

K049-1 日本は欧米を見るより満洲を見る方が当面は重要

満洲国の存在といふものは一つの厳然とした事実でありまして...日本の建築界として今後大いに考ふべき課題となるであらうと考へます。...今日の日本としましては、或る点で欧米を見ますよりは、むしろ満洲を見る方が当面の重要事だとさへ思ひます。(岸田日出刀、1933 年)

K049-2 満洲建築は独自に発展し日本と密接な関係をもつてくるだらう

満洲建築といふものも独自の発展をなし我々と密接な関係をもつてくるだらうと存じます。今のところ特にとり立てて申上げる程の建築上の大飛躍はないといふのが当つてをるだらうと思ひます。(岸田日出刀、1933 年)

K049-3 日本で煉瓦造を学べないのは満洲を控えた今日では問題

満洲の建築は耐寒といふことを何よりも必要の条件よしてをるといふことでありまして、このことは満洲の古い建築では勿論のこと、今後の満洲の建築に於いても第一に要求さるべきことでありませう。この点我が日本内地の建築と根本からちがつていることが注意されます。...満洲の家は全部煉瓦造といふことでした。...煉瓦造は非耐震的な構造だから教へない習はないといふやうな今日日本の建築界の一部にみられる現象は、満洲国を控えた今日些か認識不足の感がしました。(岸田日出刀、1933 年)

K050-1 満洲の建築界は新京を中心に活況

満洲の建築界は至る所活況を呈して居ると私は見たのであります。殊に活況を呈して居ると見られるのは新京を中心としてそれ以北であります。どう云ふ方面に建築が興つて居るか云ふと、...一つは満鉄関係であります。...第二は軍部関係の仕事でありまして...第三は新京を中心として行はれている新国家の国都建設に関する建築であります。(田辺不学、1933 年)

K050-2 満洲は頑健な請負業界の人間を要求する

満洲は将来どう云ふ人物を要求するかと云ふことを彼方にいる人たちに聞いて見たのであります。現在満洲に行けば至る所で砂金でも手に入るのではないかと云ふような考で、満洲へ押しかけて行つて居る人が沢山あるのであります。...第一の条件は健康であります。...第二は思想堅固なもの、...第三は係累が少ない人、...第四は学校の成績良好の人、...卒業直後の人は間に合はないから、内地で二三年若くは四五年実際の仕事に携つて基礎の出来た人に成るべく来て欲しい。...又将来満洲で必要なのは請負業界の人であらうと云ふような説も聞きました。(田邊平学、1933 年)

K051-1 満洲国の資源の開発は世界の人類の為

如何なるものが私が見て居る満洲資源の特異性であるかと申しますと、...其資源の中には、日本の国に甚だ乏しいものであつて、満洲に特に多量に存在して居ると云ふやうな一つの特異性が見受けられます。又之と反対に日本には相当豊富にあるものであつても、満洲には殆どないと云ふやうな両者の間に起る特異性があります。...満洲国の資源を開発することは、独り我国の為にすることではないでありませう。大にしては世界の人類の為でありませうし、小にしては満洲国の為でありませう。満洲が日本の生命線であるならば、満洲に於ける種々なる資源を開発し得るものは我々だけであります。(大島義清、1933 年)

K052-1 支那は土地が広すぎ二つか三つに分けた方が自然的帰趨に遡う

元来私は此支那の地形を観察して見まして、統一すべく余りに支那は土地が広過ぎる。であるからして支那が一つの色に全部塗られると云ふことが不自然で、矢張り二つか三つに分けた主権が分立して居ると云ふことが、自然的帰趨に適つたのぢやないかと云ふやうな気がするのであります。(柴山兼四郎、1933 年)

K053-1 満洲の民間建設は沢山出来なければならぬ

(満洲の民間建設について)唯建築が非常に沢山出来なければならぬと云うことだけは確かであります。(佐野利器、1933 年)

K056-1 満洲の百姓は中華民国のより裕福な印象

満洲と中華民国とを比べると何か支那の方は纏りが附かず何処かに淋しい感じがする様に認められることでもあります、...満洲に入りまして嘗て見た満洲、嘗て目に残つて居た関東洲と今日の関東洲とを比較して思ひ出しますと、まるで違つて人々即ち土着百姓の富の程度が違つて来たと思ひます、...支那の方で見ました百姓などに比べると実に裕福なやうな感じが致しました、(古宇田實、

1936 年)

K059-1 満洲建築労働者は愛すべき使いよい労働者

各職工の技術は中々うまい。指導さへよければ内地人はだしのものがある。...満洲建築労働者の生活組織、彼らの性情をよく理解して使用するならば、而して適当に之を指導するならば、恐らく愛すべき而して使いよい労働者であると思ふ。(松浦助、1937 年)

K062-1 支那は中央権力が弱くかつ世界の列強各国の市場

支那のやうな中央政府の権力が比較的薄くて、さうして或一国の植民地でなく、世界の列強各国の激烈な政治上、又経済上の市場であると云ふことは、(岸偉一、1938 年)

K064-1 満洲国内では労力が足りない

労力のことに就きましては、...満洲国内では労力が足りないのであります。殊に熟練職工は毎年外国方面—外国方面と申しまして、主に北支の山東、河北方面、其の他朝鮮からも参りますし、指導的な位置にあります職工は内地からも参りますのであります。(笠原敏郎、1939 年)

K065-1 満洲で働く青年建築家には日本代表の自負がある

皆さんも御承知の様に、満洲国は厳然たる独立国であります。日本が本当にそれこそ言葉では蓋されない様な非常に多くの犠牲を払つて独立させた所の満洲国であるのであります。...我々満洲で働いて居る青年建築家は、日本では職が無いからとか、或は満洲へ行けば収入が良くなるからとかさういふけちな考でなく、我々は日本から選ばれた処の選手の積りで居ります。又それだけの自負心を持つて働いて居るのであります。(桑原英治、1939 年)

K066-1 満洲では煉瓦造が無数に建っている

関東大震災に依つて欧米直輸入の煉瓦造の大部分が惨めにも崩壊し去つて以来日本の建築家の頭には煉瓦造が根本的に日本の土地に適しないのだといふ概念が植え付けられてしまつたが、...満洲では煉瓦造が内地の様に肩身の狭い思ひをする事無く無数に立つて居る。(室井修、1939 年)

K067-1 民家から見た所では支那と日本は同一の文化過程に入る

日本と云ふ国は其の文化のある一面に於ては支那に劣つたかも知れませぬ。或は支那文化の模倣であつたかも知れませぬが、我等の祖先は金匱無欠の国体をその肇国の始に確立し、同時に支那の文化を吸収するに吝かならざる達識を示したのであります。...支那人と我々と一緒にしてくれてはいかぬと言はれるかも知れませぬが、民家から見た所では、同一の文化過程に入るのであります。

...先ず海南島からその近傍に於てすべての米の獲れる所は皆日本のだと云ふことであると思ふのであります。即ち米の獲れる国なら皆日本でなければならぬと思ふのであります。(藤田元春、1939 年)

K068-1 支那人は日清戦争当時のときとは変って居る

支那人の民族性が、事大的であり尊大であるといふような一般の通念、それは事実大衆にはまだまだその性質が残つて居りますが、日清戦争当時の支那観、乃至は支那人観を以てそのまま彼等を見るやうな見では今日、今後は不可ないのであります。彼等は変つて居る、いや少なくとも変りつつある。(佐藤武夫、1940 年)

Ⅲ期 35 回

K071-1 満洲国は国民住宅建設がまだ不足

満洲国は建国以来...建国十年にならずして既に中外に誇るべき新国家の偉容を整え...ているのであるが、...国家活動の源泉たる人的資源を確保すべき国民住宅の建設に関しては聊か憂ふべき現実に直面していると云はざるを得ない。(笠原敏郎、1941 年)

K072-1 支那の穴居は防空施設、寒冷地の貯蔵庫の参考

(支那の穴居について) 特に近来洞窟式構造及防空施設に伴ひ防空壕、或は寒地に於ける野菜貯蔵、弾薬等の倉庫として之等構造は其必要に迫られている今日此種に属する穴居に就ても之を参考として調査する事は、あながち徒勞でなからうと考へ (浅井新一ら、1942 年)

K073-1 支那大陸における諸勢力を象徴する建築は雑多で多彩

支那大陸ほど過去に於て諸外国の勢力が角逐したところは史上にもめづらしく、従つてそこに建てられた諸勢力の象徴とも言ふべき建築の雑多にして多彩を極めることも一つの偉観と申すことが出来やう。(佐藤武夫、1942 年)

K074-1 支那の造形をよく知る日本の建築家こそ支那の造形にこれから魂を吹き込む

(南京の城壁について)「土」から生れた支那文化の根強い力と云ふものをしみじみ感じる。土木と云ふものから隔離された日本の建築家達は、恐らく先ず此の力に圧倒されるだらう。...併しそれは亡びた造形なのだ。...此の図太い造形の伝統に新しい精神と技術によつて魂を吹き込むこと一それは我々の仕事なのだ。日華の合作によつてこそ初めて出来る仕事なのだ。...支那の造形の価値を何人よりも最もよく知っている日本の建築家こそ、その適任者なのだと思う。(小池新二、1942 年)

K075-1 満洲において農業建築の確立が将来の重要な課題

(満洲開拓地において) 農業建築といふ建築学上の分野が、日本の農業経営規模と異なる満洲に於て、生育されると云ふも過言ではあるまいと思ふ。農業建築の確立は、建築技術者の将来の大きな重要な課題ではないかと思ふ。(高原一秀、1943 年)

K078-1 満洲に残してきた建築物が懐かしい

其の後の満洲は何うなつて居るか、我々が残して来た力作の建築物は、古跡建築などは何う取り扱われて居るかと懐しく思ふるでしょう。(岡大路、1954 年)

K081-1 限りなく懐かしい満洲時代

今憶い出しても限りなくなつた懐かしい満洲時代もすでに遙か遠い過去のものとなり... (奥田勇、1957 年)

K086-1 中国の人々は過去より現在と未来を問題にしている

旅行中のいたるところで感じたのであるが、中国の人々は、15 年の昔のことよりも現在と将来のことを問題にしているようであった。(西山卯三、1961 年)

K086-2 日本のような工業材料はないがスミズミまで丁寧に作られた建築

(建国 10 周年を祝う大建築について) 日本の現代建築のように目新しいプラスチックだとかその他の工業材料がつかわれているというわけではない。しかしその工事はスミズミまで非常に入念にされていて、手ぬきなど全然感じられないキチウメンさが注目をひいた。(西山卯三、1961 年)

K087-1 遺跡発掘は日本より中国の方が速い

新聞は外電が唐の長安城の発掘が完了したことを伝えた。その整理報告がまたれるのであるが、それにつけても、我国における唐長安城を模した奈良の平城京跡の発掘が、国柄が異なるとはいえ、奈良国立文化財研究所の方々の努力にもかかわらず遅々として進まないのははなはだ遺憾なことである。(平井聖、1962 年)

K093-1 中国建築史研究は戦後ようやく中国学者の進出が顕著に

中国建築史研究の開拓には日本とヨーロッパの学者の努力によるところ多大であったが、1930 年以降の中国营造学社の活動とともに中国学者の進出がようやく顕著になってきたのであった。(村田治郎、1969 年)

K095-1 营造法式を日本古建築と比すことが日本建築技法の検証

营造法式を確める上に必要な遺構さえ極めて寥々たる今日、更に

それ以前に遡る事実を立証することは、殆ど不可能に近い難事業をいわなければならない。幸い日本には、营造法式以前の遺構が沢山ある。それらに营造法式の言葉がどこまで通じるか。...これは日本の建築技法の依存性・独立性を決定する重要な鍵となるものとする。(竹島卓一、1969 年)

K098-1 新旧の様式が共存し日本への影響が考えられる

(山西仏光寺大殿について) 我国のようにほぼ一系の様式変化がたどれるものどちがい、細部では我国の 8 世紀以前のものと、大仏様や禅宗様ではじめて移入される様式の先駆的なものとが共存していてとまどいを感じさせる。また、従来わが国で独自に発達したと考えられていた構造や細部なども中国の影響を無視して立論するのは誤りなのではないか、と考えさせるものである。(沢村仁、1969 年)

K102-1 文化財保護を強力に進めている

われわれが関心をもっている問題の一つは、文化財の保護と国家の建設にともなう諸開発との関係である。中国が文化財保護を強力に進めていることは確かなようで...このような保護がどのような議論をへて行われたか、はなはだ興味がある。(宮沢智士、1969 年)

K106-1 中国にはまだ自由に訪問できず儀礼的すぎる

現在まだ我々が中国を自由に訪れて、見たいものを見、聞きたいことを聞くという段階ではない。...ありのままの中国の姿にふれたいという我々の考え方からすると、中国の儀礼的習慣は隔靴搔痒の感をまぬがれない。(無記名、1976 年)

K107-1 中国の建築は点の建築

中国の建築を、点の建築だと表現したい。小物を中心として、そのこものが支配する周囲に依拠してその庇護の中に生活の場の安全をはかるのが、彼らが一番最初に発見した空間概念だったのではないか。(吉阪隆正、1976 年)

K107-2 今の中国は貝の生まれかわりをしている

貝はその子孫をつくる時、表裏が反対になるのだという。...今中国でやっていることは、ちょうど貝の生まれかわりのようなものだ。もしそうだとすれば素晴らしい世界が期待される。だがもし、過去の延長的成長であるならば、ただ昔の姿の延長として、バカでかい貝に発展するだけだろう。(吉阪隆正、1976 年)

K108-1 明治維新まで日本はつねに中国から学びとってきた

明治維新にいたるまでの日本の文化・芸術・科学技術のあゆんだ道すじをふりかえると、そこには必ず中国のあたえた多大な影

響が見出される。建築においてもそれは例外ではなく、しかも両者の関係は他の分野と同じように、日本が中国から学びとるというパターンに終始した。(田中淡、1976 年)

K110-1 実践の中で理想を具体化していく最中の大学教育

(中国清華大学の建築教育制度は) 毎日教育実践のなかで理想をどのように具体化していくかについて、いまはさまざまな試みを実施している最中というふうにみてよいであろう。(稲垣栄三、1976 年)

K112-1 中国から長年受けている感化は他のどの外国より大きい

中国から吾々が受けている長年の間の感化が他の何れの外国のそれよりも大きいことにも今更ながら驚く。(市浦健、1976 年)

K112-2 日本の将来に参考になる偉大なる実験が行われている

中国が日本の将来にとって最も参考になる外国であるということである。そこでは人間の改造が社会の改造と併行して行われている。...これは実に偉大なる実験であり、私にとっても最も興味のある「みもの」でもある。(市浦健、1976 年)

K113-1 高密度の大都市に悩みはある

中国は 36%の地域に 95%の人口が集中しており、...部分的には高密度である。...巨大都市の包蔵する種々な問題は日本の諸都市のように公害問題などは顕著ではないが大都市の悩みはない訳ではない。(市川清志、1976 年)

K114-1 大原則に従った計画と大衆の自発的な実施による建設

中国の建設に見られる特徴は、おどろくべき計画性と自発性である。行政にせよ生活指導にせよ、何が大事で何があとまわしでよいか、その判断が的確であり、しかもその判断の基準が大原則にもとづいて下される。そしてその実施は、大衆の自発性に依拠して行われる。これが中国の発展の原動力になっているように思われる。(鈴木成文、1976 年)

K115-1 人民公社環境整備の不画一さは手法の絶えざる見直し

(中国の人民公社の住居環境整備の) 不画一さは、単に試行錯誤の過程とばかりに断言するわけにはゆかない。それは、先進的な手法が盛んに見直され、...漢方術が、西洋の近代的な治療と相俟って行われているこの国独自の進み方によって大きく影響されている所でもある。...あてもないほど広い中国の各地に、本来の住居の作り方の土法がこれからも伝えられてゆくことは、...なかなか含蓄のある部分である。(近藤正一、1976 年)

K118-1 人民公社の狙いは農業都市の実現

中国の農村の素晴らしさは、今回の中国住宅見聞旅行で私が受けた最も印象的な事柄の一つであった。...中国の場合はすべてが農本主義的な思想で貫かれていた...中国農村自立化の究極の姿は“農業都市”であり、人民公社の究極の狙いは、その実現にある、と私には思われるのである。(藤本昌也、1976 年)

K120-1 大国だが経済環境は貧しい

中華民国は大国である。...しかし中国の最大の問題は、経済環境であろう。ほぼ 5 年ほど前の資料であるが、...一人当たりの総生産は著しく小さい。(久我新一、1976 年)

K120-2 労働者中心の国家で公害対策は日本より進む可能性あり

中国において工場はすべて国営の形をとっており、労働者の指導する国家であるだけに、労働環境・居住環境についての保全是、わが国よりも一層高いレベルで徹底して行われるであろうから、わが国の公害対策の不徹底な現状を省みると、逆に借りてきて範例としなければならないような新しい試みを強力に実現させてゆく可能性もある。(久我新一、1976 年)

K120-3 新しい建物に近代化への挑戦

中国では古来大規模なものを作り上げる歴史的風土を持つように感じさせられるが、...新しい建築物では、大規模さと共に近代化への挑戦が併せ感じられた。(久我新一、1976 年)

K121-1 資本主義国と違い必要とするところに重点的に設備技術が適用

資本主義国では設備技術の高いレベルが商業建築に集中するが、中国では設備技術を必要とするところへ重点的に適用される。(石原正雄、1976 年)

K121-2 われわれよりも総合技術としての設備技術のありかたがある

設備技術の面からみれば...個々の機器や材料の進歩が技術の進歩であるようにみられがちな、われわれの技術にとって、中国の総合技術のあり方は貴重な示唆を与えている。(石原正雄、1976 年)

K123-1 耐震建築の技術水準は今日かなりの水準

正直いって中国の耐震建築の技術水準は今日かなりのところまで到達しているとの印象を深くした。(梅村魁、1976 年)

K123-2 身体的に身近な感じですのでものが伝わってくる

3 時間少しで北京に着いて見ると、遣唐使、遣隋使の苦闘は全く夢の世界で、何とはなしに文が読めるということは、他国を感じないまま十日間をすごしてしまった。...西欧文明が我々にとって、

直接肌から感じにくいのに反して、極めて身近な感じですのでものが伝わって来ることに驚いた。これはイデオロギー以前の問題である。(梅村魁、1976 年)

K123-3 新旧のものを取り入れて成長しつつある

革命以後中国は新しい形に生れ変わりつつあると聞いていたが、事実種々の現状を知らされた。しかし、科举制度に根付く組織造りのうまさ、規模の雄大さ、人々の天性の器用さ、などはそのまま現在に生かされている。...現在のエネルギーをもってすれば容易に世界の水準に達するであろうし、特に組積造関係の耐震構造に期待したい。(梅村魁、1976 年)

K125-1 日本建築に深い影響を与えた中国の歴史的文物

私は洛陽の竜門石窟にも行ったが、さらに敦煌に足をのばし、日本建築に深い影響をおよぼした歴史的貴重な文物をみたいと思う。そこには中国の労働人民の創意と造形精神の深さがある。(清水正夫、1976 年)

K126-1 文物の管理体制は日本より整備

詳細な数量や件名が発表されていないので全くの感想であるが我国の県や市町村段階に比べると、中国のほうが地方ごとの指定ははるかに進んでいるように思われる...文物の管理体制は日本よりずっと整っているようだ。(鈴木嘉吉、1976 年)

K126-2 古建築修理工事の技術的内容は日本の方が細かい

この工事の直接的な技術指導までは、中央では行われなかったらしい。このへんは、日本の古建築修理工事のほうがキメ細かく技術的チェックをしているように思える。(鈴木嘉吉、1976 年)

K128-1 日本建築には絶えず中国の影響があったのではない

以上の二寺をみると...構造の大要の進歩の方向と細部の両面をみると、この時期にも我国に絶えず中国の影響があったのではないかと、との感想を抱かざるを得ない。...従来わが国独自に発展していたとされていたものに問題がある。(沢村仁、1976 年)

K130-1 中国は都市整備に歴史的建造物の価値を認めつつある

正陽門（前門）が、彩色も新たに補修を終えていたのは印象的であった。中国がいま、新生都市における古代都城建設に、一定の歴史的記念物のもつ有効性を見出しつつあることを、よく物語っているような気がした...中国の国务院が第一批全国重点文物を規定したのは 1961 年だが、以来、文革を経て、いま古代文物にたいする保存修理事業はますます盛大となり、各地の著名な古代建築は、ほとんどが面目を一新しつつあるかのようだ。故宮も天壇も、雲岡も竜門も、修理の完了したところは、ことごとく人民

のための公園や遊覧の地として開放されている。(田中淡、1977 年)

K132-1 地震予知に成功して世界を驚かせた

1975 年 2 月 4 日、中国は海城地震 (M7.3) の予知を的中させて一躍世界の檜舞台に跳り出ることとなった。...誠に世界を驚倒させた大成功であったというべきである。(表俊一郎、1979 年)

K133-1 日本の古墳装飾にもつながる中国の木造建築の形式

(高床をそなえた中国純木造建築の一形式「干欄式」について) その形態が日本古墳時代の埴輪家、家屋文鏡に描かれる画像、伝讃岐国出土銅鐸に描かれる高床倉庫などにあまりにも類似していると感じ、日本古代建築の失われた祖系を眼前に見るおもしろいのは、けっして、わたしだけではあるまい。(田中淡、1981 年)

K134-1 早い時期からの建築構造の規格化

建築構造の規格化という方向が、非常に早い時期から追及されていることは、中国建築の伝統における注目すべき特色のひとつである。(田中淡、1983 年)

K134-2 「穿闘式」の日本建築への影響

中国木造建築における架構形式の類型について... (柱・梁・束を組み重ねることによって形成している)「撓梁式」と(柱と柱を繋ぐのに、梁ではなく「穿」すなわち貫を多用して柱を母屋桁まで立ち上げる)「穿闘式」があり、わが国の建築が「穿闘式」の影響をすくなく受けているという、わたし自身の感ずる印象 (田中淡、1983 年)

IV 期 65 回

K136-1 友好都市、友好大学の増加

日中両国の友好都市が 100 に近づいてきたが、最近両国間の友好大学もではじめた。これからさらに太いパイプが出来ることと思う。(清水正夫、1985 年)

K137-1 今日の中国は日本そのものを学ぼうとしている

(アニメや日本の映画女優などを指して)歴史上、日本の文化が、中国の隅々にまで浸透した時代はなかった。今日の中国は、単に日本から西洋の科学技術を学ぶだけではなく、日本そのものを学ぼうとしている様子が見えてきた。(尾島俊雄、1985 年)

K137-2 中国は眠れる獅子だがいつか目覚めるときがくる

中国が世界に向けてテークオフした第 1 回目の辛亥革命 (1911 年)、第 2 回目の解放 (1949 年)、そして今日の開放都市政策 (1984 年) である。ホップ・ステップ、そしてジャンプによって 21 世紀に突

入する。...日本国家が常に恐れてきた隣国の中国は常に眠れる獅子であった。しかし、いつか眠りから目覚める時がくるであろう。その時の備えをし続けていることが日本国民の歴史的教えでもあった。(尾島俊雄、1985 年)

K138-1 日本 60 年代と似たスピード重視の都市計画

(都市計画の) プロジェクト案策定に際しても、現在のわが国の策定過程とは、かなり異なっている。広域的な関連調査や、将来の生活様式の変化を見込んだような検討は少なく、速効性と即効性が重視されている (このような状況は、ちょうどわが国の 1960 年前後のそれと似ているような気がする)。(石東直子、1985 年)

K140-1 中国の住宅研究が再開したのはつい最近

(中国の) 住宅・民家の研究は、中国建築史のなかでもっとも未開拓の領域のひとつに数えられるだろう。...文化大革命の発動によって長い停滞期に突入する。再び住宅に関する論文が誌上に登場するのは、1980 年ごろ、つまりほんの数年前からである。(浅川滋男、1985 年)

K142-1 開放政策は日本の行財政改革と似た競争を前提に

現在、(中国の) 開放政策の主要目標は生産の効率化に向けられている。建設業についてみると、それは基本的に、上部機関によって生産が計画的に指示される方式から、複数の企業による競争を前提とした自主的生産方式への移行である。...中国におけるこのような改革への動向は、公共セクターはとかく非効率に陥りやすいという「政府の失敗」の観点から、行財政改革を進めているわが国の場合とも、一脈通じるものがあり、比較論的にも興味ある論点を提起している。(渡辺俊一、1985 年)

K144-1 中国の発想は西欧寄りで全体から部分を造る

設計の立場、あるいは発想の立場からいうと、中国は西欧のほうに入り、日本は独特で、中国と日本の間に川が流れている。...中国の設計の思想は、全体から部分に迫るものです、われわれは部分から全体で、「たし算の建築」とぼくは言っているんです。...われわれの考え方はフレキシブルな柔構造で、中国はおそらく西欧といっしょで剛構造だと思います。だから剛構造のすきまに入りうる知識は入れるでしょうが、全体構成のメカニズムを変えることはないでしょう。(芦原義信、1985 年)

K144-2 日本文化を学ぶ気はない

(中国は) おそらく日本文化を学ぼうなんていう気はないでしょう。日本に代表される最先端の科学技術を知りたい。だから逆に、アメリカに対するあこがれはものすごいですよ。...ぼくは東南ア

ジア諸国を特によく知っているというわけではないけれど、中国とは全然違います。同じ貧しいにしても、中国にはやはり何かがあります。おそらく西欧に匹敵する何かがあるんじゃないでしょうか。(芦原義信、1985 年)

K144-3 中国文明とは排他的である原理を貫き通す

(中国は)理論とか基本的なものの考え方については、ほかの国から学ぶ必要はないと考えているのではないか。それが本当の中華思想かもしれないですね。...偉大な文明というのはそういうものだという気がしますね。排他的で、ある原理で貫き通す。日本の場合は立派な文化ではあるけど、世界に通用する文明ではない。自分たちのなかだけで楽しんでいるというふうで。(藤森照信、1985 年)

K144-4 日本のように民間のいないところで末端まで技術が伝えられるか疑問

われわれが(中国で構造の)話をして、なかなか一致しにくいのは、向こうは国がやるわけです。こっちは今は民間の方がレベルが高いですから、民という感じで、そこがお互いになかなか通じ合わないところなんです...日本のように民間に普及させるということはあまり考えていない。逆に言うと、末端までそれがほんとうに通じるかどうかという問題が一方であるような気がします。(梅村魁、1985 年)

K144-5 結果を使うだけで方法を考えない

(中国の建築専門家たちは)どうして出てきたのかというアプローチについては関心がなくて、結果だけを使おうとする。...結果が使われるのは早いですが、(中国で日本の)方法が使われるようになるまでにはまだまだ時間がかかると思います。(吉武泰水、1985 年)

K145-1 宝の山

今のところは広く見てみたいということで向こうへ行っているんですが、何か宝の山に入ってしまったようで...あれだけの広さであれだけの人たちがどういうに変わっていくか。非常に日本に近いところでどういうふうに変わっていくかということを...そういうことを知りたい。(茂木計一郎、1985 年)

K145-2 非常に大きな、これからの根源的なパワーがある

これからわが国はどうなるんだというときに、中国のマーケットを考えておかないと、将来はありえないのではないか。あそこは非常に大きな、根源的なパワーがあって、日本に限らず、世界がこれからどういう方向へ動くか見極めるためにも、そこを確認し

ておく仕事が必要だ。(尾島俊雄、1985 年)

K145-3 中国で日本を研究している人はほとんどいない

たとえば法隆寺とか唐招提寺に皆さん興味を持っていますが、それはあくまでも中国の唐代の建築で残っているのが非常に少ないということで、たまたま興味があるわけです。...中国で日本を研究している人はほとんどいません。(村松伸、1985 年)

K146-1 いろんな建設を実際に進めながら検証するので浪費多い

いま、中国は日本より 30 年ぐらい遅れていますね。だけど、30 年後に現在の日本の社会に追いつくかという、絶対にそうなるとは言えないとおもうんですよ。...中国の国民性もあって、中国は問題を直視する場合、1 本しか見ないんです。...その結果がもし悪かったとき、どういう方法で補うかということはほとんど考えていない。...だから、いろんな建設をやってきて、失敗している。失敗したらもう一度やりなおす。これが今の中国の手法なんです。そのためにたくさんの浪費が出てきている。(日本にいる匿名中国人留学生、1985 年)

K147-1 外国の技術は欲しいが外国企業に儲けに来て欲しくない

基本的に中国は自分で工事ができるという前提を持っている。...技術は欲しい。能力の向上には協力して欲しい。だけど、請負工事をやって儲けて帰るというかたちで出てきてもらう必要は毛頭ない。そういうのはかなりはつきりしている。...お金が人民元であって、われわれにとってはそれをもらっても意味がないというところで、商売に本当に入っていくのは来世紀になるのではないか(日本の匿名建設実務者、1985 年)

K147-2 先が読めない

(外国企業から見れば中国は)政治体制が違っているので、先が読めない。(日本の匿名建設実務者、1985 年)

K147-3 これから外国に追いつくスピードは速い

中国の建設技術水準のキャッチアップについてだが、(日本の戦後スタートの状況と比べると周りの国が進んできているので相対的に)スピードは速い。トータルで追いつく期間は短いと思う。(日本の匿名建設実務者、1985 年)

K147-4 ソフトで使いこなせない、メンテナンスができない

(中国側のパートナー企業は)CAD システムが欲しい。コンピューターが欲しいという。...先端技術のものを持っていても、...それをソフトで使いこなせない、あるいはそのメンテナンスがで

きない。...現在はソフトのレベルが（日中で）全然違う。...そのソフトおよび欲しい技術を、どういふかたちでわれわれの商売として売れるかという方法論がまだ見つかっていない。...ビジネスとして技術移転をしたい。（日本の匿名建設実務者、1985 年）

K147-5 すべての縦社会で横の連絡がむずかしく日本のような管理が苦手

日本の管理には非常に驚異の念を持っていて、管理を学びたいとおっしゃる。向こうはすべてが縦社会で横の連絡がなかなかむずかしい。（日本の匿名建設実務者、1985 年）

K147-6 中国を通じての開発途上国事業の展開を考えられる

中国はアフリカ諸国をはじめ第 3 世界から多くの留学生を迎えていることから分かるように、これらの国々への影響力が極めて強い。...中国を通じてのアフリカその他開発途上国での建設事業の展開を、日本の建設業も考えてよい。（日本の匿名建設実務者、1985 年）

K148-1 海外の新しい技術を取り入れて発展を図っている

中国は今経済開放の影響もあって...海外の新しい建築技術を取り入れ、建築の発展をはかろうとしている。そのようななかで、早く西欧の技術を取り入れ発展させた日本の今までの経験が紹介されることは大事なことで、わが国の種々の試みの過程で発生した問題点を克服して、中国が中国的路線です新しく発展することを期待したい。（浦良一、1985 年）

K149-1 居住環境が見直され審洞研究が盛んに

どちらかといえば審洞住居は、前時代の遅れた住まい方と考えられていたが、その...快適な居住環境が見直されはじめ、審洞撤退計画から審洞改良計画へと向かい、中国での審洞研究も盛んになりつつある。（青木志郎・楠本侑司、1985 年）

K152-1 別の価値観をもつ、日本とは違う中国

中国と日本の歴史的背景や、社会主義国家という異質な条件から、中国の現状に対して、我々はまだ、別の価値観、別の美学を認めやすい。...（中国は）日本とは同じではないし、...それぞれの価値観で、1980 年代という同時代を生き続けている。（村松伸、1985 年）

K155-1 日本の寝殿造りは中国の三合院の形式に属する

寝殿造りは、従来日本住宅史の枠組みでのみ理解される場合が多いが、その配置は、じつは中国でいう三合院の形式に属するものにほかならない。彼此の影響関係についてあまり論じられないのは、いまひとつ、中国側の資料が十分でなかったこともあろう。

（田中淡、1986 年）

K156-1 外国のよい経験を吸い取る

総じて言えば、改革は（中国の）経済と社会の発展を促進しました。それと同時に、私たちは国外の同業者に学び、外国のよい経験を吸い取らなければなりません。（戴念慈、1986 年）

K158-1 今の作庭は日本と違い本物を壊して贋物を造り出しているよう

日本には唐代に相当する古い時代の建物が保存されていて、見るだけでも勉強になります。とりわけ、修復の仕方には感服させられました。...日本の（古建築の）専門家の微に入り、細を穿った技術は、今の中国では難しく思います。中国の場合、本物を壊して、贋物を造り出しているようで、技術的にも中途半端です。（陳從周、1988 年）

K159-1 近代の中国イメージはジャポネズリーと同じくヨーロッパの捏造

近代初期までの西洋人を熱狂させた<キャセイ>という「幻の古代中国」のヴィジョンが実は「ヨーロッパが自分を見つめるために捏造した」「恣意的かつ擬人的な虚像」だったのと同様、フェノロサからシカゴ博覧会の中年婦人たちに至るまでを魅了した<ジャポネズリー>もまた、ふたつの面から歪力をかけられた世界像の落とし子であった。（生井英考、1988 年）

K160-1 今の住宅団地の建設ブームに住民の参加なし

国は住宅難を解消するため、全力をあげて住宅を建設すると同時に、あらためて住宅の福祉論を反省し商品性をみとめた上で、住宅の商品化や家賃の値上げなどの実験を行っている。...中国の住宅事情は一見転換期を迎えたように見える。...いま中国ではいたる所で住宅や住宅団地の建設ブームである。...これらの計画と建設のほとんどが住民の参加なしで進められている。...今、何よりも大事なことは、...「あげる」「もらう」関係でない、新たな住民との関係を築きあげていくべきだと思う。（崔榮秀、1988 年）

K165-1 現在でも日本には少なくなった石造アーチ橋を造っている

日本では洪水でアーチ橋が流されだんだん少なくなっている。...石造のアーチ橋を造る技術がすたれ石工がない。一方中国では現在も建設中である。それに風土の違いで河に対する考えも異なる。（土田充義、1991 年）

K166-1 今の中国の住宅はまだ水準を引き上げなくてはいい部分が多い

(北京の新しい中密度開発小後倉小区について) まあまあ水準を中国では小康状態と呼んでおり、ファサードのデザインについていえばそのレベルに達していると言えそうである。しかしながらその一方で...なんとかしてほしい問題点も数多く残されている。(藤田忍、1991 年)

K180-1 建築関連の学科は外部の市場経済と深く関わり新体制を確立しつつある

現在の中国の大学特に建築関連の学科は、概して開放的で外部の市場経済と深く関わっている。そして今、より健全な新体制がその関わり方を調整しながら、確立されつつある。(郭献群、1997 年)

K186-1 日本と違い伝統工法が残っていて遺跡保存事業にも使える

中国では(遺跡保存事業において)、計画段階が重要であることの認識がまだ薄いようである。...また日本ではさほど難しくない技術が、現地では簡単にできないことがある。ただ日干しレンガや版築など、現在でも伝統的工法が残っており、この伝統技術をうまく活用することが一つの打開策となり得ると考えられる。(矢野和之、2000 年)

K190-1 先進的なアーキテクチュラル・アーカイブの活動

(アーキテクチュラル・アーカイブについて) 中国は先進的に活動を行っており、参考にすべき点が多い。今後、日本と中国が協力して、東南アジアにおける建築資料保存問題のリーダーシップをとれるような環境を形成することが望ましい。(中原まり、2002 年)

K193-1 異なる文化を結合してひとつの型をつくる

異なる文化を結合してひとつの型をつくる、それが上海建築の特質でしょう。...(19 世紀後半と比べて) 現在の方が、かつてよりも海外建築家の関与が深くて大きいということでしょうね。(鄭肘齡、2003 年)

K194-1 まとめる人が出てくるんじゃないか

日本はいろいろやろうとして、極端に言えば分裂しています。だけれど中国では、まとめる人が出てくるんじゃないか。そういう条件が社会的にあるかもしれないという印象を持ちます。...アジアの国境を外し、国という概念をなくす。(磯崎新、2003 年)

K194-2 設計スピードが速く考える暇がない狂乱状態

とくに中国の場合は設計スピードが猛烈に速い。...だから設計事務所の連中は考える暇がない。...現代とは議論のあげくにつくら

れるものではなく、コピーで瞬間的にできる。...上海はまさにそうで.....中国はとにかく桁外れで、まるで狂乱状態に陥っている。(磯崎新、2003 年)

K196-1 東南アジアと違い前アジア的要素が文明に覆い尽くされて残っていない

東南アジアはインド文明と中国文明の周辺に存在することによって、インド文明・中国文明に覆われる以前のもので残っている。...中国やインドでは、そのような前アジア的要素が全部文明に覆い尽くされて残っていない。(中川武、2003 年)

K196-2 日本と違って圧倒的に古代の繰り返しでいつのまにか近代

世界のなかで日本を考えるときの重要さは、古代、中世、近世と確実に社会が変化してきているところだと思います。中国にそのような変化がないとは言わないけど、やはり圧倒的に古代の繰り返しなんです。それがいつの間にか近代になっている。(中川武、2003 年)

K197-1 知的著作権に対する観念が薄い

最近の付き合いでいうと中国が多いですが、やはりだいぶ価値判断が違って、知的著作権に対する観念が薄い。(川口衛、2003 年)

K197-2 見えないところにはお金をかけない合理性

中国人は非常に合理性を持っていて、見えないところにはお金はかけないというのが徹底しています。...もし日本が援助しなければ、彼らはドイツに行くでしょう。(川口衛、2003 年)

K197-3 興味があるのは日本の技術以外の部分

いま中国でとくに若い人が興味を持っているのは、日本の技術というよりも日本のファッションとか、若者の遊び方です。...いわゆる「技術」だけをしこしこ輸出するという発想ではなくて、豊かになった中国国民が求めるものを輸出すること、をもっと考えるべきでしょうね。(川口衛、2003 年)

K197-4 文革前にはいいデザインがあった

中国では現在、構造エンジニアのオペレータ化が急速に進んでいる。...中国に行って調べてみると、文化大革命の前の段階では、なかなかいいデザインの建築がつくられていたことに気づきます。...私は、中国の若い人が、一度文化大革命の前までさかのぼって、そこからもう一度スタートしてくれると非常にいいなと思っています。(川口衛、2003 年)

K199-1 研究資料は日本より遅れている

環境のひとつである研究資料の充実度ひとつとっても、日本と比

べ中国は遅れている。私の学位論文の研究テーマである中国の伝統的な住居に関する資料を調べたが、中国より日本のほうがはるかに多く... (胡恵琴、2003 年)

K200-1 最近外国建築設計事務所も受け入れられている

最近、外国の建築設計事務所も中国で国民待遇されつつある。今まで中国で日本勢によって設計された建築は全体的に言えばまだ少ないが、今後の交流の拡大によって、第三回目の建築交流チームが来るような気運がする。(盧莘明、2003 年)

K204-1 価値観がかわり日本より欧米に興味が行

人々の価値観が変わりつつある。とくに若い世代の価値観は明らかに欧米に移行している。留学生派遣の人数、学術交流の頻度、共同研究の数からみても、中日間の交流が占める割合は(欧米と比較して) 下降傾向にある。(周若祁、2003 年)

K207-1 かつての「満鉄建築」は満鉄の植民地経営の能力を示すもの

植民地建築は、総じて植民地支配に呼応した建築である。「満鉄建築」は 20 世紀初頭の満鉄にとって、当時の欧米列強と同じような支配(植民地経営)能力を示すものであった。(西澤泰彦、2003 年)

K208-1 中国建築の概説は容易ではない

資料的には、文献・遺構とも激増する一方、悠久の歴史を有する中国建築を概説するのは容易ではない。モンゴル、満洲、チベット、トルキスタンなどを視野から外すことも許されない。(田中淡、2004 年)

K213-1 日本建築の今後の戦略思考を鍛える大きなアリーナ

実は中国は日本建築の今後の戦略思考を鍛える大きなアリーナのようなものである(村松伸、2006 年)

K214-1 中国では周辺状況より自分が何をつくるかが一番大切

中国では本当に何も無い所に、ドンと開発が行われます。日本では周囲の状況などからさまざまな制約を受けますが、中国ではそうではありません。自分が何をつくるかが一番大切で大きなことなのです。(迫慶一郎、2006 年)

K214-2 中国では外国人にも機会が開かれている

現在の中国は都市計画までも外国人に任せてしまう。これは本当に開放的だと感じます。...現在の中国は、野球、サッカーに例えるならば「たくさん試合が行われている」状況ではないかと思います。...開放的で、現在出場回数はさまざまな人に与えられています。...年間 200 試合もやっていたら練習をしていなくても必ず

伸びていくのではないのでしょうか。(迫慶一郎、2006 年)

K214-3 粗雑な急ごしらえのイメージは急速に薄れていくだろう

まだ日本では「中国では粗雑なものを急ごしらえでやっているだけだ」という印象を持っている人が多いのも事実でしょう。今後そのようなイメージは急速に薄れていくのではないかと、そしてもっと日中間の交流が進むのでは(松原弘典、2006 年)

K215-1 メンテナンス意識が根付かない

私がすごく感じたのは、メンテナンスを意識するという発想が中国に根づきにくいことです。というのは、中国では目の前のことを最優先するんです。...品質などはたしかに大事だけれども、それが説得材料にならないんだなあ、と思ったことがあります。(樋口幸紀、2006 年)

K215-2 中国は吸収だけでなく外国に影響も与える

中国は世界中から建築デザインや技術を吸収している一方で、逆に影響を与えてくれるものもあると思います。例えば...分離発注です。...今後、経済的な理由から日本のマーケットもゼネコン主導の時代からどんどん変わっていくと思うので、今、中国で経験している機動力・現場の対応の技術というものが、実は今後日本にも与える影響があるのではないかと思います。(陸鐘驍、2006 年)

K215-3 ランドスケープや都市計画は日本より優れている

住宅環境におけるランドスケープ。環境としての住宅の素晴らしさ、これは日本が見習っていかなければいけないかな。...都市計画とランドスケープも中国の方がはるかに良いですね。(中本俊也、千鳥義典、2006 年)

K216-1 現代建築を表現する中国人建築家はまだいない

厳しく言うと中国には現代建築を表現できる建築家がまだいません。...文化大国として、中国の建築はこの段階を早く乗り越える必要があります。中国人建築家のより早い成熟を期待します。(張欣、2006 年)

K217-1 途上国において競争力がある

中国のゼネコンは発展途上国において非常に競争力があります。もちろん人件費が安いということが大きな理由ですが、品質を保持しながら驚くほど速いスピードで施工するのが得意なのです。(呉京海、2006 年)

K218-1 建築教育に於いて社会との接触が容易

(中国の建築教育の特徴について) 社会との接触が容易なこと

す。学生が指導教官と一緒に、第一線で実際のプロジェクトを扱う機会が多い。その反面、細かな研究に携る機会は少ないですね。(許懋彦・王昀、2006 年)

K219-1 日中間は完全なコラボ、対等が長い目では必要

私の場合は、教育というよりは完全なコラボ、対等だと思います。長い目で見れば、日中関係というのはそういう上下関係のないフラットなチームというものがあるのが日本と中国の間でどこまで面白くデザインできるかということではないですかね。(隈研吾、2006 年)

K220-1 中華系の人たちは決断や行動が速い

少しずつ消費者の目が肥えてきていますし、...中華系の人たちはビジネスには非常に敏感ですし、次の動きは速いですよ。...ハングリー精神とか、そういった感覚は間違いなく持っていますし、決断や行動もとても早い。(梶原文生、2006 年)

K221-1 日本文化は中国からかなり大きな恩恵

書物ではわかっているけど、日本の文化は中国からかなり大きな恩恵を受けていますよね。共同研究で実際に中国の文物や都市などを見て回るとそれを実感しますね。(大西国太郎、2006 年)

K222-1 文献は古いが実際の建築が今は残っていない

中国は 4、5 千年の歴史が継続した、とても古い文明ですが、実物の建築については比較的新しいものが残っているにすぎません。...しかも歴史上一流のものがほとんど残っていない。一方で文献は文字の国なのでたくさん残っている。...今まで文献でしかわからなかったことが、遺跡として発見されている。しかし、実物はないという、ちょっと畸形的な残存状況だと思います。(田中淡、2006 年)

K222-2 建築史研究が新しいものに偏っている

『营造法式』は非常に貴重な遺産であると同時に、それがあったために中国建築史研究がかなり偏ったものになったともいえるのです。...建築史研究がかなり新しいものに偏っている。(田中淡、2006 年)

K223-1 日本と違って政府の政策によって大学の研究方法が決められる

日本と中国の研究教育の環境は大きく異なります。...中国では共産党の指針があって、政府の政策によって研究方法が決められることがあります。...日本の方が学者の人たちも好きなことを研究しているように思います。(嚴網林、2006 年)

K224-1 日本にはない速度での変化

現在かの地でわれわれの隣人が直面しているのは、今の日本に

るだけでは実感しづらい規模や速度のグローバリゼーション、アーバンゼーションであり、とても現代的な問題がそこにはあると思う。これをそのまま見過ごす手はないだろう。(松原弘典、2006 年)

別表 S1 :『新建築』中国関連記事リスト (1985－2008 年) 全 196 編

資料番号	雑誌発行年月	号数	著者	記事タイトル	記事サブタイトル/欄名
S001	198501		西澤文隆	明媚な蘇州	旅の手紙
S002	198502		黒川紀章ら	第11回日新興建築設計競技「現代の方舟」入選発表	コンペティション
S003	198506		相田武文	香港	旅の手紙
S004	198507		金子勇次郎	国際化の時代	時評
S005	198507		横溝真	上海の古い街を訪れて―「魔都」への憧憬	海外ネットワーク
S006	198507		相田武文	上海(シャンハイ)	旅の手紙
S007	198508		相田武文	吐魯番・烏魯木齊・喀什	旅の手紙
S008	198509		相田武文	哈爾濱(ハルビン)	旅の手紙
S009	198510		金子勇次郎	日本への期待	時評
S010	198612		(編集部)	<中国・客家のすまい>展	しんけんちく・にゅうす
S011	198703		(編集部)	中国で国際シンポジウム	しんけんちく・にゅうす
S012	198705		深尾精一	南蛮渡来の囲われた空間	茶室のルーツを推理する
S013	198708		あべ木勇	中国建築事情レポート 北京・天津の図書館訪問記	海外ネットワーク
S014	198804		あべ木勇	天津市建築設計院を訪ねて 中国・天津の建築事情	海外ネットワーク
S015	198905		(編集部)	神戸・天津大学建築設計展	ja News Gallery
S016	198905		張在元	place中国 中国建築界における新しい動向	ja News Gallery
S017	199008		米山隆	花園飯店(上海):大林組東京本社ら	作品グラビア
S018	199009		島田靖久	香港上海銀行・中国銀行視察団レポート モダニズムの叫び	ARCHI-NET
S019	199010		張清嶽	北京東苑公寓(高層棟):エイ・エス・エスら	作品グラビア
S020	199103		波多野哲次	日中青年交流センター:黒川紀章建築都市設計事務所ら	作品グラビア
S021	199103		黒川紀章	共生の思想	
S022	199301		相田武文	相田武文 上海の同済大学顧問教授に	PEOPLE
S023	199311		(編集部)	上海市浦東区政府庁舎コンペでフジタが最優秀に	NEWS REPORT
S024	199406		楊元宜	毛沢東のビッグプロジェクト―天安門広場改造計画と十大建築の道程Ⅰ	研究室レポート1
S025	199407		楊元宜	毛沢東のビッグプロジェクト―天安門広場改造計画と十大建築の道程Ⅱ	研究室レポート2
S026	199408		石井和紘	自己変革時代の建築Ⅲ―歴史	連載
S027	199408		楊元宜	毛沢東のビッグプロジェクト―天安門広場改造計画と十大建築の道程Ⅲ	研究室レポート3
S028	199409		(編集部)	大室幹雄著「中世中国の世界芝居と革命―檻獄都市」	読書室
S029	199409		楊元宜	毛沢東のビッグプロジェクト―天安門広場改造計画と十大建築の道程Ⅳ	研究室レポート4
S030	199412		高野恵子	アジアの都市・建築と設計方法Ⅲ 中国雲南省ダイ・ル一族の村―十字路の向こうに	研究室レポート7 早稲田大学理工学部中川武研究室
S031	199412		(編集部)	木津雅代著「山水の錬金術―中国の庭園」	読書室
S032	199501		拓和秀	中国シルクロード・ウイグル族のすまいⅠ 中庭と縁台の生活空間―カシュガル	研究室レポート8 法政大学工学部陣内秀信研究室
S033	199502		(編集部)	設計者に日本設計 上海東方音楽ホール国際指名設計競技	NEWS REPORT
S034	199502		拓和秀	中国シルクロード・ウイグル族のすまいⅡ アイワンの生活空間―ホタン	研究室レポート9 法政大学工学部陣内秀信研究室
S035	199502		拓和秀	中国シルクロード・ウイグル族のすまいⅢ チャイハネの生活空間―イーニン	研究室レポート10 法政大学工学部陣内秀信研究室
S036	199511		(編集部)	香港の都市計画と現代建築展	EXHIBITION
S037	199607		(編集部)	ロナルド・ゲリー・ナップ著「中国の住まい」	読書室
S038	199611		気賀沢俊之	上海市北外灘地区都市デザイン国際コンペにRIA案が当選―歴史的建造物や自然環境と共生した都市づくりがテーマ	トピックス
S039	199701		(編集部)	「香港―1997年のための記念碑」国際コンペ―等は徳島の中井正剛氏	NEWS REPORT
S040	199703		北京フォーラム1997実行委	北京フォーラム1997	ツアー広告
S041	199706		大江匡	北京フォーラム1997 <革命と建築>に関する証言	ARCHI-NET
S042	199708		村松伸	中国で成功する法	時評
S043	199802		田熊利哉	上海ゴルフクラブ:清水建設設計本部	作品グラビア
S044	199904		加藤義夫	中国・活気の報告	ARCHI-NET
S045	199909		(編集部)	中国、海口国際展示センター国際コンペ―石本グループが最優秀に	NEWS REPORT
S046	200002		(編集部)	日建設計が中国深圳市羅湖税関周辺地区総合計画コンペで1位入選	NEWS
S047	200003		(編集部)	中国杭州オペラハウス国際設計競技で黒川哲郎氏らが最終案3組に入選	NEWS
S048	200004		(編集部)	西澤泰彦著「図説大連都市物語」	読書室
S049	200006		渡辺豊和	透明から無限入籠へ	
S050	200010		(編集部)	西澤泰彦著「図説満鉄」	読書室

資料番号	雑誌発行年月	号数	著者	記事タイトル	記事サブタイトル/欄名
S051	200101		(編集部)	JianWaiSOHOマスタープランコンペー山本理顕設計工場が最優秀に	NEWS
S052	200103		(編集部)	中国・広州市珠江口地区都市計画コンペー黒川紀章グループらが優勝	NEWS
S053	200105		(編集部)	中国・天津博物館設計コンペー川口衛+高松伸案が最優秀に	NEWS
S054	200105		(編集部)	中国・広州国際展示場コンペーAXS佐藤総合計画案が最優秀に	NEWS
S055	200112		横谷英之	上海の都市と建築の21世紀	特集上海
S056	200112		横谷英之ら	中国銀行上海ビル(中銀大厦):日建設	特集上海、作品グラビア
S057	200112		横谷英之ら	上海信息大楼:日建設	特集上海、作品グラビア
S058	200112		青沼克明	上海新天地:日設計インターナショナルら	特集上海、作品グラビア
S059	200112		青沼克明	都市の記憶の再生 都市再開発によりかえる里弄	特集上海
S060	200112		(編集部)	上海へ行こう! 建築家のための上海建築ガイド	特集上海
S061	200112		邢同和	邢同和氏に聞く最新上海建築事情	特集上海
S062	200202		(編集部)	天津市「泰達広場(仮称)」国際設計コンペに川口衛+高松伸グループが選定	NEWS
S063	200202		(編集部)	鄭州市「新都市計画国際設計コンペ」で黒川紀章建築都市設計事務所を選定	NEWS
S064	200203		佐藤尚巳	南通英瑞会館:佐藤尚巳建築研究所	作品グラビア
S065	200204		迫慶一郎	北京の「メイウェンティ」精神	STAND POINT
S066	200205		松原弘典	消費の満は新しい建築を生むのだろうか	STAND POINT
S067	200206		(編集部)	中国「城科センター」設計国際コンペー久米設計が一等に	NEWS
S068	200206		隈研吾	Commune by the Great Wall, GREAT (BAMBOO) WALL:隈研吾建築都市設計事務所	作品グラビア
S069	200206		古谷誠章	Commune by the Great Wall, 水閣の家:古谷誠章/STUDIO NASCA	作品グラビア
S070	200206		坂茂	Commune by the Great Wall, Case Study House-12 竹の家具の家:坂茂建築設計	作品グラビア
S071	200208		(編集部)	香港・九龍の埋立地におけるアーバンデザインオープンコンペー竹山夷氏入賞、1等はノーマン・フォスター氏	NEWS
S072	200209		馬衛東	上海で新建築講演会「零度」接近-安藤忠雄上海講演会から見たもの	REPORT
S073	200209		(編集部)	AXS佐藤総合計画が北京五輪施設を設計-天津市スポーツセンターとオリンピック公園マスタープラン	NEWS
S074	200210		(編集部)	北京電視台中心、設計は日建設	NEWS
S075	200211		国広ジョージ	mAAN国際会議とアジア建築の行方	REPORT
S076	200211		磯崎新	漢字文化圏における建築言語の生成-磯崎新氏(日本館コミッショナー)に聞く	ヴェニス・ビエンナーレ第8回国際建築展:NEXTこれからの建築を探る
S077	200212		(編集部)	The 2002 Shanghai Biennale "UrbanCreation"	Information
S078	200301		(編集部)	The 2002 Shanghai Biennale "UrbanCreation"	Information
S079	200302		長谷川祐子	ジャンルを越えた「アーバン・クリエーション」の試み 上海ビエンナーレ「アーバン・クリエーション」報告	COLUMN
S080	200303		(編集部)	北京・CCTV設計者にCOMAが正式契約-2008北京お論ビックに向け設計開始	NEWS
S081	200303		香山壽夫	メタセコイアよ、中国奥地へ帰れ	ESSAY
S082	200303		白井順二	北京大学のエネルギー	COLUMN
S083	200303		(編集部)	中国国家大劇院にチタン複合屋根-三菱化学産資が受注	NEWS
S084	200303		松原弘典	中国の設計競技で経験したこと-北京CCTVコンペから	
S085	200304		村松映一	台湾・高雄アリーナに想う	ESSAY
S086	200307		小嶋一浩	グローバル・デザインはあるのか F1とソーラーカーレースの中で	インタビュー
S087	200309		(編集部)	上海デニスセンター国際指名コンペー仙田満氏らの案が当選	NEWS
S088	200310		(編集部)	Ocean Terminalの増改築設計競技-横総合計画事務所+東京大学工学部建築学科大野秀敏研究室が1等	NEWS
S089	200310		関野宏行	広州国際会議展覧中心:佐藤総合計画	作品グラビア
S090	200310		大野勝	中国で仕事をする-中国の建築事情	
S091	200310		(編集部)	中村晋太郎著「最後の九龍城砦(完全版)」	BOOKS
S092	200311		川口衛	阿咩	ESSAY
S093	200312		(編集部)	中国の現地法人強化-竹中工務店、大林組、戸田建設	NEWS
S094	200312		レム、コールハース	資本主義社会と建築	インタビュー
S095	200401		(編集部)	中国・仏山市の総合体育館の設計者に仙田満+EDI+SDG	NEWS
S096	200401		(編集部)	西九龍文化地区プロポーザル-提案募集集中	NEWS
S097	200401		(編集部)	mAAN特別東京国際会議2004アジアの都市とその遺産	INFORMATION
S098	200401		古谷誠章+早大古谷研	ハイパー・コンプレックス・シティーズ03 以て非なる都市/香港vsシンガポール	アーバンスタディーズ
S099	200403		鈴木恂	水郷蘇州見ずに庭を見る	ESSAY
S100	200404		(編集部)	中国・長春市の地区開発国際コンペで日本設計グループが最優秀	NEWS

資料 番号	雑誌 発行 年月	号 数	著者	記事タイトル	記事サブタイトル/欄名
S101	200404		(編集部)	承孝相と張永和展 融合する東アジア世界から:BEYOND THE BORDER	EXHIBITION
S102	200404		承孝相・張永和・村松伸	同時代のアジア	(対談)
S103	200405		(編集部)	大連医科大学国際設計競技で新井清一+三井住友建設案が1等	NEWS
S104	200405		(編集部)	中国にデザイナーズ・タウン生成中 SOHO CHINAによる開発	COLUMN
S105	200401		古谷誠章+早大古谷研	ハイパー・コンプレックス・シティーズ03 似て非なる都市/香港vsシンガポール	アーバンスタディーズ
S106	200406		(編集部)	松田平田設計が北京オリンピック馬術競技場の設計者に	
S107	200406		(編集部)	伴山人家ー天津ハウジングプロジェクト:山本理顕設計工場ら	作品グラビア
S108	200406		山本理顕	関をキーワードとした都市のつくり方	インタビュー:山本理顕
S109	200407		小嶋一浩ら	建外SOHO:山本理顕建築設計工場ら	作品グラビア
S110	200407		山本理顕	Instant Neighborhood	
S111	200407		渡辺真理+木下庸子	予言としての建築型ー建外SOHOが意味するもの	批評
S112	200408		(編集部)	第1回中国国際ビエンナーレ開催	NEWS
S113	200408		野老朝雄	日本・中国 超級市場的展覧会	EXHIBITION
S114	200409		張永和	磯崎新、革命の建築家	Exhibition
S115	200409		(編集部)	The 1st Architectural Biennial Beijing 2004	INFORMATION
S116	200409		(編集部)	ARATA ISOZAKI UNBUILT展	INFORMATION
S117	200409		迫慶一郎	北京フェリシモ生活提案店:SAKO建築設計工社	作品グラビア
S118	200409		松原弘典	北京市新華書店中関村図書ビル:松原弘典	作品グラビア
S119	200410		(編集部)	シリーズ客家の住まい 広東省囲籠屋型民居ー開きながら守る	INFORMATION
S120	200410		黒川紀章	都市の思想 環状都市へ	巻頭論文
S121	200410		(編集部)	上海国際賽車場:膜構造施工 上海太陽膜結構有限公司	WORKS
S122	200411		木下光	mAAN上海工業遺産再生ワークショップ	COLUMN
S123	200501		(編集部)	天津博物館:川口衛構造設計事務所+高松伸建築設計事務所	作品グラビア
S124	200501		高松伸	SWANIUM	
S125	200501		川口衛	中国での構造デザインの試み	インタビュー
S126	200502		塚本由晴	マイクロ・パブリック・スペース	巻頭論文
S127	200503		(編集部)	A+U中国語版創刊ー記念に上海で伊東豊雄氏が講演会	NEWS
S128	200503		松原弘典	中国の建築状況の新局面 金融引き締めの現場から	COLUMN
S129	200503		国府田茂 +柴田隆之	香港沙田競馬場 バレードリング改築計画:松田平田設計	作品グラビア
S130	200504		太田 隆信	あの戦争ー真実は細部に宿る	ESSAY
S131	200506		(編集部)	台州大劇院国際設計競技でAXS佐藤総合計画案が最優秀に	NEWS
S132	200506		大松俊紀	資本主義と共産主義の狭間で揺れるコンペが描く香港/中国の未来像 フォスター勝利の香港西九龍文策芸術エリア設計競技、そのコンペやり直し	COLUMN
S133	200507		(編集部)	フォロー・ミー! 新しい世紀の中国現代美術	INFORMATION
S134	200508		丹下憲孝	香港西九龍文策芸術地区計画への提案	COLUMN
S135	200510		岡本賢	個人が試される場・中国	ESSAY
S136	200511		(編集部)	Modern Style in East Asia 2005 建築/風景の生成	INFORMATION海外情報
S137	200512		(編集部)	上海市浦東新区唐鎮新市鎮の基本構想コンペは三菱地所設計に	NEWS
S138	200512		(編集部)	純粋な形態ー中国の伝統が区とヨーロッパ・モダニズム展	INFORMATION
S138	200603		陸鍾麟	世界へ拡張する「環境思想」「環境と建築」上海安藤忠雄建築展レポート	COLUMN
S140	200604		(編集部)	広州国際照明見本市+エレクトリカル・ビルディング・テクノロジー・チャイナ	INFORMATION海外情報
S141	200604		迫慶一郎	KID'S REPUBLIC 蒲蒲蘭絵本館:SAKO建築工社	作品グラビア
S142	200604		鈴野浩一+禿真哉	UDS上海オフィス:トラブ建築設計事務所/鈴野 浩一+禿 真哉	作品グラビア
S143	200605		(編集部)	広州国際照明見本市+エレクトリカル・ビルディング・テクノロジー・チャイナ	INFORMATION海外
S144	200606		(編集部)	広州国際照明見本市+エレクトリカル・ビルディング・テクノロジー・チャイナ	INFORMATION海外
S145	200606		(編集部)	第4回NISSCイソバンドデザインコンテスト審査委員賞 鈴木博之賞 上海美建鋼結構有限公司	コンペ結果報道
S146	200609		(編集部)	第2回北京国際建築ビエンナーレ	INFORMATION
S147	200610		迫慶一郎	天津科零度スケープ:迫慶一郎+清水淳+藤岡務/東方設計公社	作品グラビア
S148	200610		迫慶一郎	CHINA RUSHING SAKO建築設計公社の中国における設計活動	
S149	200612		(編集部)	OMA イン北京	INFORMATION海外
S150	200612		今井公太郎	第11回 巨大建築がまとう高性能な薄膜ー旭硝子ETFEフィルム	先端技術探偵団がゆく

資料番号	雑誌発行年月	号数	著者	記事タイトル	記事サブタイトル/欄名
S151	200701		(編集部)	OMA イン北京	INFORMATION海外
S152	200702		(編集部)	深圳証券取引所の設計はOMAに	
S153	200702		(編集部)	上海旗忠森林体育城デニスセンター: 仙田満+環境デザイン研究所	作品グラビア
S154	200702		仙田満	上海市の発展を象徴する国際スポーツイベントセンターの設計	
S155	200706		高田浩一	最新技術が可能にするオルタナティブ・ネイチャー ETFE 二重皮膜に包まれたウォーターキューブ(北京オリンピック水泳競技場)	COLUMN
S156	200712		ジャック・ヘルツォーク+ビエール・ド・ムーロン	建築の受容/「北京」の現実 世界文化賞受賞インタビュー・講演会	COLUMN
S157	200801		(編集部)	REALIZE 立脚中国展開世界 迫慶一郎/松原弘典	EXHIBITION
S158	200801		(編集部)	2010年上海国際博覧会 日本館建築・施工管理業務に関わる入札	INFORMATION
S159	200802		(編集部)	香港で第6回ビジネス・オブ・デザイン・ウィーク開催	NEWS
S160	200802		渡辺邦夫・長谷川一久	仏山伶南明珠体育館: 仙田満+環境デザイン研究所	作品グラビア
S161	200802		仙田満	亜熱帯型地球環境建築スポーツドーム	
S162	200803		川口衛	選者の眼力	ESSAY
S163	200803		松田直則	背中合わせの2都市ビエンナーレ 香港と深圳で開催された、同時期、異場所、反意図のビエンナーレ	COLUMN
S164	200804		(編集部)	ビルディング・チャイナ 5事例、5ヒストリー	INFORMATION
S165	200804		磯崎新	ネオリバリズムに対抗する「文化」: 磯崎新 インタビューア: 太田佳代子+トッド・リース	巻頭インタビュー
S166	200804		(編集部)	上海征大ヒマラヤ藝術センター: 磯崎新アトリエ	プロジェクト
S167	200804		豊田泰久・川口衛・助川剛	深圳文化センター: 磯崎新アトリエ	作品グラビア
S168	200804		鍾岩崇	天津オリンピックセンタースタジアム: 佐藤総合計画	作品グラビア
S169	200804		進藤憲治	瀋陽オリンピックスポーツセンタースタジアム	作品グラビア
S170	200804		大野勝	中国展開 - スポーツ施設を通して	
S171	200804		原田鎮郎	21世紀アジアの循環型都市へ 愛・地球博から上海万国博覧会へ	特別記事
S172	200804		(編集部)	ジョン フリードマン著「中国 都市への変貌」	BOOKS
S173	200805		(編集部)	團紀彦氏が双流航都文化芸術中心のコンペで一等に	NEWS
S174	200805		藤岡務	研究と直覚の間に「a+u」中国語版発刊3周年記念講演会レポート	COLUMN
S175	200805		(編集部)	ビルディング・チャイナ 5事例、5ヒストリー	INFORMATION海外情報
S176	200805		(編集部)	広州国際照明展覧会	INFORMATION海外情報
S177	200805		(編集部)	チャイナ・デザイン・ナウ	INFORMATION海外情報
S178	200806		(編集部)	中国・四川省で大規模地震	NEWS
S179	200806		(編集部)	中国・呉江の新都心コンペで岸和郎氏らのチームが最優秀に	NEWS
S180	200806		(編集部)	広州国際照明展覧会	INFORMATION海外情報
S181	200806		(編集部)	チャイナ・デザイン・ナウ	INFORMATION海外情報
S182	200806		(編集部)	シティスケープ・チャイナ	INFORMATION
S183	200807		(編集部)	チャイナ・デザイン・ナウ	INFORMATION海外情報
S184	200808		(編集部)	SAKO建築設計工社が四川大地震被災地で小学校建設プロジェクト	NEWS
S185	200808		孫玉平	1ヶ月後の四川から 四川大地震被災地調査	COLUMN
S186	200808		原野泰典	四川大地震復興建築 坂茂、松原弘典研究室(SFC)の提案	COLUMN
S187	200808		(編集部)	ドキュメンタリー映画 鳥の巢 北京のヘルツォーク&ド・ムーロン	INFORMATION
S188	200809		(編集部)	中国・広州の文化展覧センターコンペに遠藤秀平建築研究所+SDG・構造設計集団+武田計画室グループが当選	NEWS
S189	200809		(編集部)	松原弘典著「北京論 10の都市文化案内」	BOOKS
S190	200809		(編集部)	国際太陽エネルギー建築設計競技	INFORMATION
S191	200811		黒瀬陽平	磯崎新の漢字文化戦略	BOOKS
S192	200812		(編集部)	建築研究所が四川大地震の被害・復興状況の調査報告をまとめる	NEWS
S193	200812		猪熊純	震災仮設住宅のシステムデザイン	COLUMN
S194	200812		白井宏昌	オリンピック年の野望と苦悩	特別記事
S195	200812		川口衛	オリンピック建築の夢と危うさ	特別記事
S196	200812		坂茂	成都市華林小学紙管仮設校舎: 慶大坂茂+松原弘典研究室	作品グラビア

別表 S2 :

『新建築』中国観リスト (1985 - 2008 年)

全 62 回

・各対中観の冒頭の S はほかの建築メディア情報である『建築雑誌』(K)と『日経アーキテクチュア』(N) を『新建築』(S) を区別するためのものである。前の数字は中国関連記事の記事番号、後の数字は 1 つの記事の中に複数の対中観がある場合の順序を示す番号である。

S001-1 建築がごつてりと力強く出来上がっている

中国では建築がごつてりと力強く出来上がっているから、伸び伸びと生育した大樹に拮抗し得る。...それは日本のように控え目にバランスをとるのでなく、互いに叫び合い自己主張をする中で、勢力を伯仲させているのだ。まさに動的均衡のなかにある。(西澤文隆、1985 年)

S002-1 従来、中国の案には、伝統的建築形態を模するものが多かった

従来、中国からの応募案には、伝統的な建築形態をそのまま模するものが多かったに比べて、たとえば天円地方説など、中国の宇宙観を現代建築の表現の中に封じ込めた点は高く評価したい。(黒川紀章、1985 年)

S005-1 現在上海に都市という名は似つかない

上海に限らず中国の治安は極めて良い。その健全さが、かえって私に不気味さを感じさせたのだ。...都市とは欲望・消費・情報の洪水・犯罪・矛盾・闇の部分と光の部分などを孕んだ、ある種の運動状態のことをいうとすれば、現在上海に都市という名は似つかないといえる。(横溝真、1985 年)

S006-1 数世紀前に影響を受けた日本建築は、再び中国の影響を受けるかも

(上海同济大学の) 学生の課題の内容やドローイングは二、三十年前のわが国のそれと同じ印象を受けます。現在の国家体制では量が第一議だと思うのですが、将来、中国においても質やデザインの問題が必ずクローズアップされてくるに違いありません。そして、世界をリードすることになるかもしれません。その時、日本はどうなっているのでしょうか。数世紀前に、中国から影響を受けたわが国の建築は、再びその影響を受けることになるかもしれません。(相田武文、1985 年)

S007-1 広大さが単なる自然の連続ではなくそこに歴史の密度を感じざるを得ない

中国の場合には、その広大さが単なる自然の連続といったものではなく、そこに歴史の断面の累積を感じとるわけですが、中国にはこのような事例が無数にあります。(相田武文、1985 年)

S007-2 古建築や遺跡の保存状態は良いとはいえません

この「交河故城」にも半地下室があった痕跡が見られますが、保存の状態が悪く判断がつきかねます。一般的に言えば、中国の古建築や遺跡の保存状態は良いとはいえません。残念なことです。(相田武文、1985 年)

S008-1 「大人の風格」をそなえた中国人に会うことが自分の人生勉強になった

一旅行者の眼で見た都市や建築は、それなりに興味をひかれるものがありましたが、私にはモノよりも、むしろヒトに心をひかれました。「大人の風格」をそなえた中国人に会うことが、自分の人生勉強になったように思います。(相田武文、1985 年)

S009-1 今外国の経験に学ぶ姿勢が明確で、その意欲も驚くべきもの

数年前に大きな改革に着手した中国では、今外国の経験に学ぶ姿勢が明確で、その意欲も驚くべきものがある。今回の交流会議でも中国側の希望は、日本の建築技術、住宅建設、住宅部品産業などの発展の経緯を説明してほしいとか、日本における技術評価の実際を詳しく教えてほしいとかということであった。われわれも、戦後 40 年のわれわれの努力と成果は、失敗の事例や歪みの実状も含めて、すべて中国の参考になり得るものと考えているので、できるだけ率直に話すつもりでこの交流に大きな期待をもって迎えたのである。(金子勇次郎、1985 年)

S012-1 日本の寺院建築は中国から渡来した技術によっている

寺院建築が明らかに中国から渡来した技法によっており、寝殿造りや書院造りもその流れの上で理解しやすいのに対し、数寄屋は茶の湯に始まるらしいというだけで、その生い立ちがはっきりしていない分、神秘的に語られている。...建築史上大きな変化があったのが、6 世紀末、12 世紀末、16 世紀末、19 世紀末であり、そのうち 16 世紀末以外は明らかに異文化の導入吸収があったのである。...時を超えて本質的に日本的なものなどあるのだろうか。数百年ごとにつくり上げられるイメージだけが、その時ごとの日本的なものなのであろう。(深尾精一、1987 年)

S013-1 仕上げは今ひとつながら人海戦術による現代建築の建設がある

仕上げの精度は今ひとつというところであるが、全体は簡素にま

とめてある。この日の工人(労働者)はおおよそ 3000 人。馬も運搬作業の重要な役務である。...ここには人海戦術による現代建築の建設がある。(あべ木勇、1987 年)

S014-1 物価が安いから、日本の生活と比較するのは容易でない
中国ではすべての物価が安く、衣・食・住が賄われているから、われわれの生活と比較するのは容易ではない。同行の人たちにコーヒーをふるまおうとしたところ、陸副館長が「非常に高いことを知っているから飲む気になれない」といって応じて貰えなかった。(あべ木勇、1988 年)

S016-1 眠れる獅子は世界的な古典建築を持つが、世界的な建築家はまだいない

ナポレオンは次のような言葉を残している。“中国は眠っている獅子だが、いったん目覚めると、その声は世界を揺るがすだろう”。...しかし長い間、世界に中国建築家の声がまったく聞こえてこなかった。中国は世界的に有名な古典建築を持っているが、世界に知名度の高い建築家がまだいない。世界建築の舞台において中国建築家の声の聞こえる日が早く来ることを願ってやまない。(張在元、1989 年)

S021-1 カーテンウォールの高層建築に伝統的屋根の安易な作品が多い

いま中国やイスラム世界で実現している現代建築には、カーテンウォールの高層建築に伝統的な屋根を直接載せるという安易な作品が多く見られる。これに対して私の提起している方法は、中国の長い歴史の中にあるより抽象的なレベルの伝統を再発掘できないかというものであった。(黒川紀章、1991 年)

S022-1 ものすごい建設ラッシュだが日本人の目からみれば施工精度は今一歩

だんだん日本語ができる人が増えてきて、今はデザインもわかって日本語ができる先生が数人います。...ものすごい建設ラッシュです。デザイン的には、技術的な問題もありまだまだのようですが、基本的にはモダンの流れです。しかし大きい建築は、日本も含めた外国の建築家が参加していますが、日本人の眼からみれば施工精度も今一歩ですね。(相田武文、1993 年)

S022-2 10 億人の人口があるんだから優秀な人がたくさんいる
経済だけでなく、いろいろな意味で中国と交流したほうがいいでしょう。われわれは西洋のカテゴリーの中から建築の歴史を学んできました。つまりギリシャの建築はよく知っているが、もっと古い中国の建築を習っていない。東洋建築史の講義も昔に比べて

少なくなりました。西洋と東洋の歴史を少なくとも均等に教えるべきなんです。中国の教授を招いて、授業をしてもらえたら素晴らしいし、学生間の交流もそろそろ考えていい時期ですね。10 億人の人口があるんだから優秀な人がたくさんいます。(相田武文、1993 年)

S026-1 今の変革の時をサポートしているのは、アジア、中でも中国の存在

今、近代が過去の文明のように歴史に組み込まれていこうとしている。その大きな変革の時をサポートしているのは、近代化を成し遂げようとしているアジア、中でも中国の存在である。今までわが国だけがアジアで突出して西欧近代化を果たしてきた。ために、ほかのアジア諸国との落差が、近代に対しても強く緊張をつくって乗り越えてきたように思う。伝統とはその緊張の近代がくり出した創作物でもあった。今、近代化の諸問題を 12 億もの人口を抱え、アジアの磁場を歴史的に作ってきた中国と語れるようになった。(石井和紘、1994 年)

S041-1 北京と比べ日本人の民主主義は都市景観を創出し得るのか

北京と比べるとわれわれ日本人が現在身を置いている民主主義・資本主義・商業主義というものはたして都市景観を創出し得るのだろうか。...パリ・イタリアの街並み、ピラミッド等々世界の都市景観はすべてこれらの論理の範疇にない。...日本人自身ももっと突き詰めて文化とは何かを考えなければ、日本はすべての点でアジアに劣る可能性を秘めている。(大江匡、1997 年)

S042-1 中国での交渉は駆け引きの技術。名と実を適切に分配する技術

実は「名」を尊ぶという大人のこの態度、中国人はもっとも尊敬する。「実」に関係なさそうにして、しかし最後はがっちり「実」を取る。1 割の成果の「名」には、充分なる「実」が詰まっている。これが、中国で成功する法である。(村松伸、1997 年)

S044-1 中国滞在時のカルチャーショックは日本の影の薄さ

私がいた 3 カ月の間、清華大学建築学院に講演あるいは国際会議と称する欧米人建築家あるいは建築評論家の来訪が引きもきらず毎週なのに、日本人は不肖の私だけだった。...欧米人の未来に中国での仕事が組み込まれていて、彼らは中国を欧米式に導く使徒の役なのかもしれないと思えた。しかし教授の中には欧米とのコミュニケーションはやはり難しいという人もい、過渡期のエネルギーと困惑を感じた。(加藤義夫、1999 年)

S049-1 ここは世界に類例のない都市計画実験をしているのではないか

この思いは翌日さらに確信へと変わった。中国は他国を侵略はしない、朝貢を求めるだけである。したがって、将来中国は覇権を握ることはないであろうが、欧米は圧倒的人口を誇りかつ急速に近代化を成就しつつある中国を恐怖するであろう。その恐怖感が、結局は欧米の完全なる没落を招くはずである。2010 年にはそうなっているに違いない。...上海をニューヨークの単純な模倣とは見てはならない。(渡辺豊和、2000 年)

S055-1 市場経済へ移行しても、建築生産は既存システムが残存
市場経済へ移行したとはいっても、すべての社会制度が一新されたわけではなく、そこかしこに旧体制の名残が残っている。とりわけ膨大な就業者人口を抱える建築生産システムは急転回しにくく、基本的にはこれまでのシステムが残存している。... (これは) 本来中小規模の建築をつくるためのシステムなのだから、プロジェクトの規模が大きくなればその限界が露呈してくる。(横谷英之、2001 年)

S055-2 外国資本に市場を開放した成果は着実に実を結びつつある

海外資本に市場を開放し、国際コンペで海外の設計者を招き、施工にも門戸を開く、そのそれぞれに国内メンバーと提携させることで、海外のシステムと技術を導入する。...その成果は徐々にではあるが着実に実を結びつつある。日本とは比べものにならない多様で膨大な建設量が、旧来のシステムの変革を促し、洗練し、優秀な人材を育まないはずはない。(横谷英之、2001 年)

S055-3 上海市政府の実行力は印象深く、今の日本にないと思う
この 7 年間の経験でもっとも印象深かったのは、上海市政府の意思決定の迅速さと実行力である。共に今の日本に欠けているものだと思う。...既得権益も、それを守ろうとする抵抗勢力も存在しないからこそ可能な、無地のキャンパスに自在に描く都市の未来像。その爽やかな自信に満ちた楽天性に、私たちは大いに勇気づけられてきた。(横谷英之、2001 年)

S064-1 派手を好む一方で洗練された詳細には関心を示さない国民性

文化的な違いもあり、派手で目立つ建築を好む一方で洗練された詳細や高品質な仕上げといったことにはあまり関心を示さない国民性がある。(佐藤尚巳、2002 年)

S064-2 現地素材は安価で品質もそこそこ安定している

ここ数年の上海およびその近郊での仕事を通して学んだこととして、現地の素材と工法の有効活用が挙げられる。(佐藤尚巳、2002 年)

S065-1 「とにかくトライしてみる」の精神である

うまくいっている民間企業はその不陸だらけの今の状況を利用しているように見える。...高い位置でフラットになっている社会よりも、この状態が時には、より高いものを生み出す可能性をもっているように思える。(迫慶一郎、2002 年)

S066-1 今の中国は「渦」があちこちにあるような状態

僕は今の中国は「海」というよりは「渦」があちこちにあるような状態だと感じている。...今この社会主義国は世界一不平等な国家のひとつだとすらいえる。老百姓(庶民)の生活のあいだで、それとまったく別世界のひとと金が束ねられて建物がつくられている。それはあたかもおだやかな水面のところどころに突然渦が水中深くまで渦巻いているのと似ている。(松原弘典、2002 年)

S072-1 市場原理の建設志向と建築家の理論志向の矛盾する方向性あり

現在の中国には一見矛盾したふたつの方向性が見られる。ひとつは市場原理に従った開発に次ぐ開発という建設志向であり、もうひとつは建築家を中心とした建築意匠を目的とする理論志向である。後者は前者によって生じた「量」に対して「質」を求めるという志向である。(馬衛東、2002 年)

S082-1 わが国はすでにいくつかの部分で中国に追い越されているのだと実感

中国はアジアの新たな威嚇だという国際政治学者もいるようだが、振り返って日本を見ると、わが国はすでにいくつかの部分で中国に追い越されているのだと実感する。少なくとも若者のエネルギーに関しては残念ながらそう認めざるを得ない。(白井順二、2003 年)

S084-1 設計競技は審査の経緯が不透明で、評判が悪かった

中国の設計競技というと、磯崎さんが参加された北京のナショナル・オペラやオリンピック公園など大規模なものがここ数年日本でも伝えられたが、審査の経緯から結果発表にいたるまで不透明でよくわからないことが多く評判が悪かった。(松原弘典、2003 年)

S085-1 中国の台頭が構造的デフレを生み、設計事務所をグローバル化

中国経済の台頭で低価格の製品が流入する一方、生産拠点の中国

シフトがアジアの企業にも浸透し、賃金や不動産価格の低下を招くなどの経済のグローバル化による物価下落が続く構造的デフレがアジア各地に広がっている。2008 年の北京オリンピック開催に向けての施設投資や天津地区の再開発計画等が意欲的に進められている。(中国・香港・台湾などの投資家が米国や日本などの設計事務所と組んで入札に応募しているが)単純に考えれば大変厳しい事業ともいえるこれらのプロジェクトにグローバルな視点で取り組もうとする応募者の姿勢には、デフレ状況にある国内需要の停滞に新たな活路を見出そうとする想いを重ね合わせることができる。(村松映一、2003 年)

S086-1 建築家としてのエッセンシャルな部分では本当に手応えがある

(北京のプロジェクトの施主は) デザインは信用してくれていたのですが、とにかくプランニングに OK が出なかったのです。... 哑然とするようなことはたくさんありますが、建築家としてのエッセンシャルな部分では本当に手応えがあると思います。(小嶋一浩、2003 年)

S090-1 当時は設計作業において中国の設計事務所と合作 (JV) する必要あり

設計フィーについては、日本の同規模施設に比べ、料率はやや高く、そのベースとなる工事費 (日本の 4 分の 1 程度の工事単価) の安さはあるが、スケールメリットを考慮すれば、ほぼ満足のできるフィーになったといえよう。...WTO 加盟により、設計コンサルタントに関しては、近年中に海外の設計事務所にも全面的に、「開放」されるであろうが、当時は設計作業において中国の設計事務所と合作 (JV) する必要があった (大野勝、2003 年)

S092-1 阿吽の呼吸で幸福を追求している中国人は生活力に満ち溢れている

信号機の少ない中国の都市で...阿吽の呼吸によっておたがいの衝突を回避しながら、自分にとって最も効率的で有利な結果を得ようとする中国人の行動原理は、なにも交通の流れの中だけに限ったことではない。社会主義国家の中に自由経済原理を導入することになった中国では、多くの社会ルールが未整備である。このような社会の中を生きのびていく中国人の姿は、信号機の少ない道路をいろいろな方向に進む人びとの姿に似ている。郷里。姻戚、同窓、友人関係など、あらゆるつながりを利用し、常に相手との距離を注意深く測りながら、阿吽の呼吸で自己の幸福を追求している彼らの姿は、生活力に満ち溢れている。(川口衛、2003 年)

S098-1 湾仔の古い賃貸住宅は、混沌の中に自己組織的秩序あり

香港で訪れた湾仔の古い賃貸住宅では、低所得者層が多数集まって暮らし...過酷な居住条件であったが、それだけに皆が共有で使う炊事やシャワーなどの空間は清潔に整理整頓されていて小気味よかった。すべてがイリーガルのように見えて、その混沌の中に自己組織的に生成された秩序がある。(古谷誠章、2004 年)

S102-1 今や、中国は世界で一番元気で、破壊力をもった資本主義

80 年代、米国に行ってから、私の政治的なスタンスはどちらかというと保守的なものでした。米国の建築家とか大学人というのは、だいたいリベラルというか左派なのですが、私はとくに資本主義を批判するつもりはありませんでした。なのに、今は中国において社会主義を信奉しているというのはまったく皮肉なことだと思います。今や、中国は世界で一番元気で、暴力的で、そして一番破壊力をもった資本主義ですからね。それに振り回されないためには、社会主義が必要かもしれない。(張永和、2004 年)

S102-2 国家以外土地を所有しないはずが実際は急速に私有化

中国では国家以外本当はだれも土地を所有していないことになっています。でも実際にはものすごいスピードで土地は私有化されている。ですから、土地を所有しているクライアントの仕事をやるときは、クライアントの要求を損ねるというわけではありませんが、クライアントの利益と一般の人がアクセスできるパブリックスペースをどのように両立させるか、ということを考えています。(張永和、2004 年)

S102-3 ここにきて日本の相対的な力が落ち、中国、韓国の活力が顕在化

日本は情報でも、仕事でもこれまで国内で充足してしまうだけの巨大さをもっていた。外国は、私たちにとって多くの場合、学ぶべきモデルが存在している場所であって、勝負の場所ではない。だが、ここにきて日本の相対的な力が落ち、反対に中国、韓国の活力が顕在化してきている。(村松伸、2004 年)

S108-1 中国では四合院の伝統があり、大きさは特別なことではないようだ

日本の感覚でいうと 600m² というのは、大きいと思いますが、中国では四合院の伝統があるわけですから、大きさは特別なことではないようです。西沢さんが最初に平屋を提案したときは、われわれ建築家は面白いと思ったのですが、中国では全然驚かれなかった。(山本理顕、2004 年)

S109-1 あらゆることが決定不能な中での可能性に向けて突っ走っている

このプロジェクトにつきあって分かってきたのは、今の中国ではあらゆることが決定不能な中での可能性に向けて突っ走っているということだ。わずか数年先のことが誰にもこうだと語れない。

(小嶋一浩、2004 年)

S110-1 外的な制約がないので多くの外国建築家にとって魅力的

建築家にとってはまったく新しい真っ白な紙に自由に絵を描くようなものである。つまり周辺環境との関係など何も考える必要がない。もちろん歴史にも脅迫されない。...それは外的な制約がないということである。...逆にいえば、そうした外的な制約が建築をつくる時の手掛かりにならないということでもある。...自由に自分自身の表現が可能だとすれば、それは建築家にとっては、とくに外国の建築家にとっては、確かに願ってもないチャンスだと思う。多くの建築家にとって中国が魅力的なのはまさにその一点にあるように思うのである。そして、それは今の都市環境をリセットして国際的にも最先端の都市をつくらうとする中国政府の思惑とも一致する。(山本理顕、2004 年)

S111-1 ここでは前例のなさが必ずしも否定的な意味をもたないように見える

北京は今、大変な建設ブームである。...ここでは前例のなさが必ずしも否定的な意味をもたないように見える。建築基準法や都市計画決定などの制度からして都市改造プロジェクトの進行と共に改編されているというのだ。(渡辺真理+木下庸子、2004 年)

S111-2 現在市場経済の初期段階にあるので小規模な会社が沢山あり

中国は現在、市場経済の初期段階にあるので小規模な会社が沢山あります。...従業員 20 人以下の小規模事務所のメンタリティと SOHO の考え方が呼応したわけです。小規模な会社の経営者は効率を求めています。(張欣、2004 年)

S113-1 新たな生活様式の組み合わせの候補を中国は今選んでいる

今、中国の表現者たちは短期間で自由な表現方法を手に入れ、多様性を増す対象との対峙が始まっている。(野老朝雄、2004 年)

S120-1 都市化が労働力の都市移動、内外資本の工場進出と住宅投資をうむ

私にとって中国との交流は既に 20 年近くになる。...中国をはじめ

アジアの諸都市の急速な都市化はふたつの側面がある。ひとつは農村からの大量な労働力の都市への移動である。そしてもうひとつの側面は、外国および国内の資本による活発な工場の進出、そして内外の資本の旺盛な住宅への投資である。(黒川紀章、2004 年)

S125-1 中国独特の歴史、事情でスペースフレームは安い

中国では長い間、原則として鉄は使わないという政策だったので、通常の鉄骨造の歴史をとばして、いきなりスペースフレームが出てきた。...棒とジョイントさえつければよいので、どんな小さな工場でもできる。中国人の思考パターンと中国の産業のあり方にマッチしていたわけです。また、中国ではコンピュータがあつという間に普及しました。コンピュータがあれば「最適化プログラム」も出回っているので計算は簡単で、素材も棒と塊をつくるだけ。さらに、組み立てる人ではいっぱいいる。ということで中国のスペースフレームは安い。中国独特の歴史、事情がありますから(川口衛、2005 年)

S132-1 中国人には今までの資本主義的価値観を持ち込んでも通用しない

資本主義社会とはいえ、香港人は中国人なのであった。...以上の状況はいかにも中国的アンチテーゼで、彼ら中国人には今までの資本主義的価値観をそのまま持ち込んでもまったく通用しないのである。今後まさにこの「中国的アンチテーゼ」が今まで常識だった世の中のままさまざまな価値観を変えていくのかもしれない。(大松俊紀、2005 年)

S135-1 中国の都市開発の特徴は官の意向が強く働くことがあるところ

中国の都市開発の特徴は、もともと計画経済型の社会にあつて、基本的に政府が土地を所有・管理していること、開発に当たっては既成市街地にしても新規開発エリアにしても、官の意向が強く働くことなどがあります。(岡本賢、2005 年)

S135-2 中国の都市開発は「そこに何をつくりたいか」で始まるから単純で容易

一方で視点を変えれば、中国の仕事は単純で容易と言うことができます。中国の都市開発は「そこに何をつくりたいか」で始まります。...このような中国的状況に身を置くには差異を認識し...互いのストレスの軽減化を目指すことが重要ですが、私たちの計画そのものの強度を増して、中国の官やクライアントをその中に巻き込んでいくことも必要です。魅力のある提案を行い、計画をリ

ードしていくことが重要です(岡本賢、2005 年)

S135-3 中国的状況とは設計者個人の力が試される場である

日本での感覚の延長で乗り込むと、中国プロジェクトの規模とスピード、不確定要因の中で混乱し、設計者が身に備えたさまざまなコンテキストは完全に潰されてしまいます。中国的状況とは設計者個人の力が試される場であると感じます。(岡本賢、2005 年)

S142-1 上海は今ものすごいスピードとエネルギーが渦巻いている

ストライプ状のミラーにより手前の空間と奥の空間とが混在した風景はあたかも、対立的なものが隣り合わせになっている上海の風景そのものであるように感じる。(鈴野浩一+禰真哉、2006 年)

S148-1 日本の失われた 10 年とは対照的に、中国には加速された 10 年

日本の「失われた 10 年」とは対照的に、中国には「加速された 10 年」とでも言えるような希望と欲望が満ち溢れている。そしてその一翼を担っているのは間違いなく建設業界なのである。...中国は今まさに音を立てて国を形成していると言っても過言ではないだろう。(迫慶一郎、2006 年)

S148-2 中国のプロジェクトは総じてスケールが大きい

これは社会制度と深く関係している。...小さなものでもその面積の単位は万 m² となり、大規模な開発では 100 万 m² を超えるものも少なくないのである (迫慶一郎、2006 年)

S154-1 日本で無理なシステムは、中国ではどこにもないからやりましょうとなる

日本ではこのシステムはたぶん実現できなかっただろう。日本なら「どこかこのシステムでやった実績はありますか」と審査員は聞くだろう。中国では「どこにもないですね、やりましょう」と言う。この差は日本の建築家・技術者である私たちにとっても考えなければならないきわめて大きな問題だ。(仙田満、2007 年)

S160-1 中国の地方都市ではいまだに環境負荷低減意識が低い
環境建築設計として建築・設備・防災などの統合効果を考慮し設計・工事に至っているが、中国の地方都市ではいまだに環境負荷低減意識が低く、理解を得るには努力を要した。(長谷川一久、2008 年)

S161-1 中国ならではの環境形成のパワーを見せられた

地下道はたった数カ月で竣工という、中国ならではの環境形成のパワーを見せつけられた。(仙田満、2008 年)

S165-1 日本で 30 年かかった変化が 3 年でなされている感じで

もあり

日本では考えられないようなスピードです。中国独自のやり方があり、もちろんその方が効率がよい。...要するに短い期間の中でもかなり様相が変わってきている。日本で 30 年かかった変化が 3 年でなされている感じでもありますね。(磯崎新、2008 年)

S165-2 アメリカ的マンハッタン、ラスベガス、ディズニーの 3 つしかない

(アメリカ帰りのエリートが) 突然、中国の未来の都市を考えないといけなくなった時に、その判定モデルを「マンハッタン」と「ラスベガス」と「ディズニー」に求めるしかなかったのではないかと、というのが僕の推論です。今の中国にはその 3 つのバリエーションしかない。言い換えると、この中国の状況は、エリートがアメリカに留学し、アメリカの大都市生活や文明を見たがゆえに起きているのではないかと思うのです。(磯崎新、2008 年)

S165-3 汚職対策で非効率だが、それはビジネス論理に対抗する文化たりうる

汚職をなくすために...建築の各部位をバラバラにして、それぞれを個別に入札にけることで中間の工程をディスクローズしました。...日本の常識では考えられないくらい無駄が多いのですが、...早く売って利益を得るというデベロッパーの論理はあり得ないことだったのですね。要するにこれはビジネスではなく「文化」だということかもしれません。汚職も考えようによっては、ビジネスの論理に対抗する手段と言えます。(磯崎新、2008 年)

S169-1 驚異的な建設期間の短縮は、まさに現代中国のスピード感を表徴

昨年 7 月、多くの瀋陽市民は約 1 年半で完成した新スタジアムを観覧し、「瀋陽の奇跡」として驚異と歓喜をもって迎えてくれた。(進藤憲治、2008 年)

S170-1 コンペの審査システムはクリアでクリーンという実感

中国の「公共」施設の設計はすべてコンペによることとされ、大規模な施設では国際コンペが義務付けられてもいる。(大野勝、2008 年)

S170-2 シンボリックで恣意性が高いデザインは、今日中国で受け入れられない

シンボリック性が強く、恣意性が高いデザインのためのデザインは、今日中国で受け入れられる土壤にない。この視点が中国での評価基準の唯一無二の尺度となっており、その原理原則は徹底してきていると感じられる。これが中国で進行中の今日的コンペ状

況なのだ。(大野勝、2008 年)

別表 N1:『日経アーキテクチャ』中国関連記事リスト(1985-2008 年) 全 200 編

資料番号	雑誌発行年月	号数	著者	記事タイトル	記事サブタイトル/欄名
N001	850311		橋本結・東敦生	ケーブルを芯にしたRC格子梁でスパン80mの曲面屋根を架ける 香港・尖沙咀カルチャーセンターにみる構造の工夫	海外工事
N002	850520		(編集部)	中国の百貨店近代化に鹿島建設が協力	建築・設計界
N003	850603		柴養義	北京のシンボリック建築に日中共同で設計進む京城大厦	談話室
N004	850603		(編集部)	中国のクリーンルーム設計 日本設計事務所が受注	建築・設計界
N005	850923		稲村純	中国で旧日本建築再生の動き 現地に情報提供求める声	海外情報
N006	851118		(海外配信)	ワシントンの中華街に中国建築風の複合ビル	海外情報
N007	851202		(海外配信)	13層ごとのブレース架構で超高層の偏心荷重を克服 中国銀行(香港)の独創的構造手法	構造
N008	860127		(編集部)	中国建設業界の大手と大成建設が合弁会社を設立	建築・設計界
N009	860224		(編集部)	香港上海銀行 先端技術の大胆な導入図り、建築の可能性を問いつ直す	
N010	860421		(編集部)	中国銀行香港支店ビル本体工事 熊谷組が250億円で受注	海外情報
N011	860421		(編集部)	不二サッシが中国のアルミサッシ工場建設に全面協力	建築・設計界
N012	860519		ノーマン・フォスター	デザインと生産過程は不即不離な関係にある フォスターが香港上海銀行で設計思想を語る	海外報告
N013	860630		(編集部)	話題の建築がめじろ押し いずれも香上銀行を横にらみ	香港サウ
N014	860630		(編集部)	中国・飛来峡ダム建設で日本工営が事業化調査受注	建築・設計界
N015	860908		(編集部)	鹿島建設が香港に金融子会社 海外事業の資金調達狙う	建築・設計界
N016	870309		(編集部)	大手セメント各社 対中技術協力に積極姿勢	建築・設計界
N017	880125		ノーマン・フォスター	手工業のアプローチが建築の豊かさを生む ノーマン・フォスター氏 クオリティ追求を先端技術に託して	Interview
N018	880222		東孝光	香港の街並みに学ぶ	私の視点
N019	880418		(編集部)	藤原恵洋著「上海 疾走する近代都市」	新刊、近刊情報
N020	881017		(海外配信)	再開発で昔の栄光取り戻す"東洋の宝石"上海	海外情報
N021	881226		(編集部)	大胆な造形が難工事を生む 慎重な施工で開門を突破 IMペイの設計による東洋一の超高層ビルが上棟	現地報告 中国銀行香港支店ビル
N022	881226		(編集部)	中国銀行香港支店ビル	表紙の周辺
N023	890109		(編集部)	密洞考察団著「生きている地下住居 中国の黄土高原に暮らす4000万人」	新刊、近刊情報
N024	890306		市川宏雄	急速な都市化の波に対応し中国の都市政策に一大変革 中国政府が土地と住宅の商品化を実施	海外
N025	890306		(編集部)	川島宙次著「稲作と高床の国 アジアの民家」	新刊、近刊情報
N026	900416		(海外配信)	上海展覧館、3月一部オープン 地元の景気回復はいまひとつ	海外情報
N027	900611		(編集部)	中国銀行香港支店ビル 新時代を迎える香港を象徴 東洋一の高さを誇る新摩天楼	海外特派報告
N028	900611		(編集部)	中国銀行香港支店ビル	表紙の周辺
N029	900903		(海外配信)	香港にネオンビル建設中 高さでも中国銀行と競う	海外情報
N030	901224		(海外配信)	香港で高層ビル世界大会開催 不況到来で高層計画は困難に	海外情報
N031	910708		(編集部)	茂木計一郎著「中国民居の空間を探る 群居型住一"光・水・土" 中国東南部の住空間」	新刊、近刊情報
N032	920217		村瀬千文	名門ラッフルズはよみがえったか 東南アジアホテル最新事情 香港	海外報告
N033	920525		(編集部)	古代中国の大都市をCGで表現 よりリアルな表現を模索した6カ月 建築設計者がつくった大モンゴルのシーン	Computer eye
N034	920525		(編集部)	上海市城市規劃管理局ら企画編集「上海近代建築ガイド」	新刊、近刊情報
N035	930118		波多野哲次	北京最新建築事情 開放政策と外資の流入で急変する1000年の王城	海外報告
N036	930215		(海外配信)	上海市が巨大開発を計画	海外情報
N037	930510		(海外配信)	香港の競技場、試合と並行し改築	海外情報
N038	931220		小川昭彦	実戦に見る中国コンペ事情 上海・浦東新区庁舎設計競技 地元事務所と競ってフジタが当選	海外
N039	940103		(編集部)	ケース5 氷上町立植野記念美術館 石材、職人ともに中国で確保	特集 円高時代の輸入材活用術
N040	940103		(編集部)	陣内秀信著「中国の水郷都市 蘇州と周辺の水の文化」	図書室
N041	940131		(海外配信)	中国で世界一の超高層ビル計画	海外情報
N042	940131		(編集部)	上海でレジャー施設の計画 日本設計が基本設計を	建築設計界
N043	940801		(編集部)	みなぎるドラゴンバワー 深圳、上海、香港に行く	海外特派報告
N044	941121		(編集部)	木津雅代著「中国の庭園 山水の錬金術」	図書室
N045	941219		(編集部)	アジアの建築ブームに日本勢も参入	News
N046	941219		(編集部)	張在元編著「中国 都市と建築の歴史」	図書室
N047	950116		(編集部)	上海の音楽ホールで国際コンペ 日本設計案が当選	News
N048	950130		田中克憲	Uターンする設計者たち	世界の都市から 香港
N049	950213		笹原正次	開放路線貫き中国一の国際都市へ	世界の都市から 上海
N050	950327		(編集部)	清水建、中国で建設業許可取得	News

資料 番号	雑誌 発行 年月	号 数	著者	記事タイトル	記事サブタイトル/欄名
N051	950703		(編集部)	希望社、株式会社店頭公開で資金調達 中国で住宅分譲など新規事業を計画	News
N052	950703		黒川紀章	アジアの時代	視点
N053	950814		アンドリュウ・ミラー・三宅 章	上海の超高層ビルをフォスターが設計 大林組もデザインで共同	海外報告 中国
N054	950911		(編集部)	村松伸著「超級アジア・モダン 同時代としてのアジア建築」	図書室
N055	951023		池上俊郎	抜きつ抜かれつ、アジア摩天楼時代	海外報告 マレーシア、中国
N056	960422		(編集部)	ビッグプロジェクトinアジア 高度経済成長に支えられ建設活動が活発に	
N057	960506		木下光	軍駐屯地跡が人気の公園に変わる	海外ランドスケープ 香港 香港公園
N058	961202		(編集部)	上海北外灘地区の再開発コンペでアール・アイ・エーが当選	News
N059	961202		樋口正一郎	ビッグプロジェクトinアジア 高度経済成長に支えられ建設活動が活発に	海外建築動向
N060	970210		(編集部)	アジアで力をつける日本のサブコン 「ゼネコン抜き」で大プロジェクトに挑む	海外報告 香港・上海
N061	970714		(編集部)	フォスターの新空港を核に安定を狙う建築ラッシュ	香港返還建築事情
N062	971020		村松伸	現代亜州城市観察 香港－多層都市	著者に聞く
N063	971103		(編集部)	アジアに飛び込め	特集 12人が体験したそれぞれの「国際貢献」
N064	980406		(編集部)	陣内秀信著「北京 都市空間を読む」	新刊
N065	981214		(編集部)	上海市、ガラス張りビル建設禁止へ 照り返しや温度上昇などを問題視	NEWS
N066	990906		(編集部)	コンペ 中国・海口市の展示施設で石本グループが当選	NEWS
N067	000207		(編集部)	コンペ 中国・深圳の都市再編、日建が当選	プロジェクトナビ
N068	000403		(編集部)	6月: 海口展示センター、石本建築事務所ら当選	主要コンペ・プロボザール結果
N069	000403		(編集部)	12月: 羅湖口岸/駅地区総合計画	主要コンペ・プロボザール結果
N070	000724		(編集部)	国際ワークショップ: 中国における住宅建築のエネルギー消費と環境問題	Information
N071	000724		(編集部)	建築ミュージアムツアー「中国の木造建築と江南の水郷村を巡る」一少少数民族トン族の集落・風雨橋	Information
N072	000904		(編集部)	コンペその後 北京のオペラハウス、実現に暗雲	プロジェクトナビ
N073	001030		(編集部)	沖縄海洋博のアクアポリス 米国企業に売却、上海で解体へ	News
N074	001113		(編集部)	フォトニュース アクアポリス、中国に向けてえい航	News
N075	001225		磯達雄	アクアポリス(1975年竣工) 海上都市の夢、水平線の彼方へ	写真ファイル
N076	010219		(編集部)	コンペ 中国の新都市で黒川チーム当選	プロジェクトナビ
N077	010402		(編集部)	コンペ 中国・広州のコンペで佐藤が当選	プロジェクトナビ
N078	010402		(編集部)	コンペ 天津博物館、川口・高松JVに	プロジェクトナビ
N079	010528		(編集部)	海外連携で「早く」「安く」を模索 時差と給与格差を利用する	グローバル化
N080	010625		(編集部)	プレビュー 山本理顕氏が北京で超高層28棟設計	プロジェクトナビ
N081	010903		(編集部)	展示会・ツアー 「亜細亜散歩－AFTER KITSCH」展	INFORMATION
N082	011210		(編集部)	コンペ 川口衛・高松伸グループが中国で当選	プロジェクトナビ
N083	020204		(編集部)	コンペ 中国の都市計画コンペで日本2勝	プロジェクトナビ
N084	020819		(編集部)	コンペ 佐藤総合案が天津スタジアムの最優秀に	プロジェクトナビ
N085	021125		イオ・ミン・ペイ	重要なディテールを選び出す	私のディテール論
N086	021223		(編集部)	パレス ド レオナルド 手工業品を海外で安くオーダーメイド	CLOSE-UP住宅
N087	030120		(編集部)	天津博物館 設計: 川口衛・高松伸	プロジェクトナビ
N088	030120		(編集部)	天津泰達広場 設計: 川口衛・高松伸	プロジェクトナビ
N089	030120		(編集部)	Shanghai Pudong Chrysanthemum Park Phase 3 C・D棟 設計: 丹下都市建築設計	プロジェクトナビ
N090	030203		(編集部)	構造から仕上げまで竹づくり	フロントライン
N091	030317		(編集部)	プレビュー 上海の超高層オフィス建設再始動	プロジェクトナビ
N092	030317		(編集部)	災害 中国・新疆の自身で数万棟が被害	ニュースクリップ
N093	030331		(編集部)	ILBMC企画主催2003年テクノ中国市場調査(Bコース)	情報交差点 展示会・ツアー
N094	030512		(編集部)	中国がすごいことになっている	フロントライン
N095	030512		(編集部)	北京五輪施設、設計者選定進む	中日建築新報
N096	030512		(編集部)	川口衛・高松伸氏の天津博物館 派手好き中国人も驚く三次元建築	特集: 驚人的中国
N097	030512		(編集部)	山本理顕氏の中国建外SOHO 混とんから生まれる「北京になかった風景」	特集: 驚人的中国
N098	030512		(編集部)	RIA上海の高速設計 CGは翌日仕上がり 日本の3割の期間で設計	特集: 驚人的中国
N099	030512		(編集部)	大和ハウス工業の住宅内装 セルフビルド型住宅市場に日本流のサービスで挑む	特集: 驚人的中国
N100	030512		(編集部)	TOTOのブランド戦略 高級品が入れる懐の深いマーケット	特集: 驚人的中国

資料 番号	雑誌 発行 年月	号 数	著者	記事タイトル	記事サブタイトル/欄名
N101	030512		(編集部)	日本の設計者による進行中プロジェクトMAP	特集: 驚人的中国
N102	030512		(編集部)	上海新天地と日建設 廃れた路地裏空間を高級店が並ぶ商業施設に	特集: 驚人的中国
N103	030512		(編集部)	松原弘典氏の書店内装 「北京一長い家具」で個の力をアピール	特集: 驚人的中国
N104	030512		(編集部)	前田建設工業の三峡ダム 日本なら5年かかる工事をわずか6カ月で	特集: 驚人的中国
N105	030512		(編集部)	中国ビジネス事情	特集: 驚人的中国
N106	030512		張欣ら	視点 中国から見た日本、中国から見た中国	特集: 驚人的中国
N107	030512		迫慶一郎	特別編1 北京市	地元の名建築
N108	030512		仲本尚志	特別編2 上海市	地元の名建築
N109	030526		(編集部)	コンペ 北京五輪スタジアムがヘルツォーク案に	プロジェクトナビ
N110	030623		松山岩生	バブル期の日本のような中国	読者の広場
N111	030915		(編集部)	仙田満グループが上海でテニスセンター	プロジェクトナビ
N112	030915		J. スコット、キルボーン	RTKL 最適なデザイナーを米国オフィスから選ぶ	建築界2003
N113	031124		レム・コールハース	超高層のテレビ局をランドマークに北京に新たな自由を与えたい	インタビュー
N114	031222		(編集部)	中国広東省の総合体育館は仙田グループ	プロジェクトナビ
N115	040112		(編集部)	重慶龍湖・水晶麗城一期 設計: 久米設計	プロジェクトナビ プレビュー
N116	040126		(編集部)	天津博物館、天津市政広場 設計: 川口衛 + 高松伸	プロジェクトナビ プレビュー
N117	040126		(編集部)	上海銀行本社ビル 設計: 丹下都市建築設計	プロジェクトナビ プレビュー
N118	040322		(編集部)	第1回中国建設市場の調査視察団(仮称)	情報交差点 展示会・ツアー
N119	040517		(編集部)	コンペ 中国の修景コンペに昭和設計が当選	プロジェクトナビ
N120	040517		(編集部)	北京五輪施設、構造の正体	特集海外の注目プロジェクト
N121	040614		(編集部)	コンペ 北京オリンピック馬術競技場に松田平田設計	プロジェクトナビ
N122	040809		(編集部)	ここが、北京の仕事場です	フロントライン
N123	040823		(編集部)	迫慶一郎 SAKO建築設計工社 独立後数カ月でスタッフ10人の事務所へ	特集 中国で生きる
N124	040823		(編集部)	注目建築 建外SOHO 人と広告が白い建物群を彩る	特集 中国で生きる
N125	040823		(編集部)	松原弘典 松原弘典建築設計工社 特注品でつくりこみ現代デザインを持ち込む	特集 中国で生きる
N126	040823		田中奈美	建築事情 北京建築耳寄り話	特集 中国で生きる
N127	040823		(編集部)	萬谷健志ら HMA建築事務所 日中の経験生かし好景気の波をつかむ	特集 中国で生きる
N128	040823		(編集部)	五十嵐雄介ら M.A.O. (上海) 建築設計 「修行」より「実践」を選び中国事務所に飛び込む	特集 中国で生きる
N129	040823		(編集部)	建築事情 上海の商業建築	特集 中国で生きる
N130	040823		(編集部)	注目建築 「建築師」編集長が選ぶ中国新進建築	特集 中国で生きる
N131	040823		(編集部)	注目動向 不動産市場 内装済み、SOHOなど多彩に	特集 中国で生きる
N132	040823		(編集部)	先駆者たち	特集 中国で生きる
N133	040823		森省五	異邦人(東京都新宿区) ネオン街に古代中国の「砂漠」を再現	CLOSE-UPインタビュー
N134	040823		立松和平	中国・天童街 千年間何も変わらない	街並み見聞録No.9
N135	041101		柳雅人	まず日本の都市を見直してほしい	読者の広場
N136	041129		林静	ベネチアビエンナーレ第9回国際建築展 第1回北京国際建築芸術展 現代建築の「変容」を占う国際建築展	CLOSE-UP海外
N137	041129		上利益弘	CASBEE活用したGOBASで北京五輪施設の計画を見直し	TOPICS環境
N138	041227		(編集部)	回顧 2004年の十大ニュース 中国の需要拡大で鋼材価格が急騰	NEWS
N139	050221		(編集部)	暢想大塚、上海HQビル、上海旗忠森林体育城テニスセンター、好世鳳凰城など	プロジェクトナビ 海外編
N140	050307		(編集部)	国際フォーラム「持続型都市に向けて: アジアの都市の記憶と未来」	情報交差点 講演会・シンポジウム
N141	050321		曾我部昌史	曾我部昌史氏(みかんぐみ共同主宰)が注目するU35 迫慶一郎 松原弘典	私が注目するU35
N142	050418		実相寺昭雄	中国・青島 東洋につくられたヨーロッパ	街並み見聞録No.16
N143	050418		(編集部)	作品展「黒川紀章ーメタボリズム(新陳代謝)と共生」	情報交差点 展示会・ツアー
N144	050530		(編集部)	避けられない中国の影響力 巨大市場が建材価格や働き場を揺さぶる	国際化
N145	050613		(編集部)	内装用の型板ガラスをファサードに 日本橋弥生ビルディングー東京都中央区	close up建築
N146	050627		(編集部)	TNブロープ・サロン 松原弘典 講演会	情報交差点 講演会・シンポジウム
N147	051003		(編集部)	海外建築家の目に映る都市づくりとは?	topics都市景観 海外建築家の目に映る都市づくりとは?
N148	051031		宮川浩	中国の発展映す純鉄骨造の超高層 北京電視中心ー中国・北京市	close up海外
N149	051114		(編集部)	Modern Style in East Asia 2005「建築/風景の生成」	情報交差点 展示会
N150	051226		(編集部)	安藤忠雄建築展「環境と建築」	情報交差点 展示会

資料 番号	雑誌 発行 年月	号 数	著者	記事タイトル	記事サブタイトル/欄名
N151	060123		(編集部)	天津オリンピックセンタースタジアム、鄭州国際会展中心、内蒙古大劇場・博物館、北京テレビセンターなど	プロジェクトナビ 海外編
N152	060123 Next-A		(編集部)	stripe 迫慶一郎 人と空間を色の帯でつなぐ	グラフィカル・アーキテクチャ
N153	060213 Next-A		(編集部)	鄭秀和が注目するU35 東英樹	私が注目するU35 (前編)
N154	060213		(編集部)	上海環球金融中心	close up海外
N155	060227		(編集部)	設計やコストを管理して構造技術の可能性を広げる	元請けへの飛躍
N156	060327		(編集部)	中国で納得のいく「ものづくり」を 言葉の壁をイラストで乗り越える	マイチャレンジ
N157	060710		(編集部)	特別セッション隈研吾氏 アーキテクト&テクノロジー	創刊30周年記念シンポジウム採録
N158	061211		(編集部)	プロジェクト 表参道ヒルズに続き、上海にもヒルズが誕生	ニュースクリップ
N159	070212		(編集部)	北京国際空港ターミナル3、中央美術学院現代美術館、北京五輪スタジアム、滄州市新聞中心、Pazhou Shangri-La Hotel Projectなど	プロジェクトナビ 海外編
N160	070423		迫慶一郎	グローバリズム	往復書簡22世紀への海図
N161	070514		(編集部)	16 石山修武	内からの視点
N162	070528		迫慶一郎	超高層	往復書簡22世紀への海図
N163	070723		迫慶一郎	都市のゾーニング	往復書簡22世紀への海図
N164	070827		迫慶一郎	オリンピック	往復書簡22世紀への海図
N165	071112		(編集部)	急成長するアジアでチャンスをつかむ 東英樹	海外への進出
N166	071126		東英樹	中国/上海 古きを壊し新しきをつくる 革命のような乱開発に高まる批判の声	海外 この国の建築論議
N167	071126		(編集部)	REALIZE 立脚中国展開世界 迫慶一郎/松原弘典	イベント情報
N168	071220		(編集部)	REALIZE 立脚中国展開世界 迫慶一郎/松原弘典	イベント情報
N169	071224		(編集部)	松原弘典 迫慶一郎「とにかく建築が建つ」中国の現実に立ち向かう“ナナゼロ”世代の2人	PEOPLE FILE018
N170	071224		(編集部)	中国・大連のCADセンターには50人の現地スタッフ 月刊100棟の申請を下ろす	外注設計
N171	071224		大井智子	隈研吾氏 小から大へと発想を膨らませる	「建築の未来」トラック講演
N172	071224		(編集部)	募集 「2010年上海国際博覧会」日本館建築・施工監理五Y無にかかわる入札(日本貿易振興機構)	建築掲示板
N173	071224		モサキ	北京市規劃展覽館 過渡期の北京を一望できる巨大施設	展覧会 イベント巡礼
N174	080128		(編集部)	中国中央電視台(CCTV)本社ビル 設計:OMA	Archi Graph
N175	080128		(編集部)	上空でつながる 2本のタワーをチューブ構造で覆う 中国中央電視台(CCTV)本社ビル(中国・北京)	特集 フォルムへの冒険
N176	080211		(編集部)	Linked Hybrid、中国中央電視台(CCTV)本社ビル、厦門海峡交流中心・国際会議中心など	プロジェクトナビ 海外編
N177	080414		(編集部)	隈研吾建築都市設計事務所	事務所研究
N178	080414		(編集部)	ジョン・フリードマン 著「中国 都市への変貌」 中国の加速する都市化を読み解く	読書 新刊ピックアップ
N179	080512		長井美曉	仙田満氏 北京大学体育館建築設計案	未完のプロジェクト03 陽の当たる場所へ
N180	080609		(編集部)	四川大地震 死者6万8000人超、建物倒壊が被害を拡大	緊急特派報告
N181	080609		長井美曉	石山修武氏 瑞麦斯海濱花園城	未完のプロジェクト03 陽の当たる場所へ
N182	080811		(編集部)	北京首都国際空港第3ターミナル 設計:フォスター&パートナーズ	Archi Graph
N183	080811		(編集部)	パート1 都市化を先導 花開く五輪建築	特集:北京再誕 現代建築が歴史都市を塗り替える
N184	080811		(編集部)	パート2 過渡期の魅力とひずみ	特集:北京再誕 現代建築が歴史都市を塗り替える
N185	080811		(編集部)	REPORT 被災地・四川を駆け回る日本の設計者たち	特集:北京再誕 現代建築が歴史都市を塗り替える
N186	080811		(編集部)	パート3 開発手法に変化の兆し	特集:北京再誕 現代建築が歴史都市を塗り替える
N187	080811		(編集部)	世界が見た中国 国際水準に向けて着々と	特集:北京再誕 現代建築が歴史都市を塗り替える
N188	080811		(編集部)	映画 鳥の巣 北京のヘルツォーク&ド・ムーロン 実は大いなる妥協の賜物か 手こずるH&Mを密着撮影	INSIDE OUTSIDE
N189	080414		(編集部)	松原弘典著「北京論 10の都市文化案内」 テーマ別に読む北京ガイド	読書 新刊ピックアップ
N190	080825		東英樹	海外 この国の建築論議 中国 四川大地震が変えた耐震性への意識 過剰反応で建築設計に大きな制約も	INSIDE OUTSIDE
N191	080908		長井美曉	古谷誠章氏 上海朱家角計画	未完のプロジェクト11 陽の当たる場所へ
N192	081013		(編集部)	上海環球金融中心 設計・監修:森ビル、建築設計:コーン・ペターゼン・フォックス・アソシエイツ	Archi Graph
N193	081013		(編集部)	上海環球金融中心 完成まで14年、高さ492mの超々高層ビルの実力	海外特派報告
N194	081013		(編集部)	萩野谷昭二「過去の経験が生きた、中国・上海で2棟目の超高層ビル建設を先導	PEOPLE FILE037
N195	081013		野崎寛司	中国の成熟に期待	読者の声
N196	081027		安藤忠雄	アジアに出て就職する気概を 日本の技術は世界最高水準だ	談話 安藤忠雄
N197	081110		松井直樹	上海環球金融中心の設計で3Dを活用	BIMシンポジウム レビュー
N198	081124		(編集部)	環境 国産技術を盛り込んだ上海万博日本館	TECH-NEWS フォーカス
N199	081208		(編集部)	幻の北京都市計画 王軍著「北京再造 古都の命運と建築家梁思成」	読書 新刊ピックアップ
N200	081222		(編集部)	7 世界の注目集めた中国	2008年の10大ニュース

別表 N2 :

『日経アーキテクチャ』中国観リスト (1987 - 2008 年) 全 93 回

・各対中観の冒頭の N はほかの建築メディア情報である『建築雑誌』(K)と『新建築』(S)を『日経アーキテクチャ』(N)と区別するためのものである。前の数字は中国関連記事の記事番号、後の数字は 1 つの記事の中に複数の対中観がある場合の順序を示す番号である。

N002-1 日本の建設業界が中国各地に建設する計画が相次ぐ

昨年来、日本の建設業界では対中国熱が高まり、ホテル、オフィスビルなどを中国各地に建設する計画が相次いでいる。こうした中で今回のように資金や経営ノウハウを含めて日本の建設会社が、計画をとりまとめ、中国の商業近代化に協力するのは初めてのケースとなる。(編集部、1985 年)

N003-1 外国企業が続々と進出してきているが、オフィスビルが不足

中国には今、外国企業が続々と進出してきています。しかしオフィスビルが少なく、多くの進出企業はホテルの部屋を借りて事務所にしています...そのホテルにしても入居希望が多く空室がないという状態で、オフィスビル建設が待ち望まれているのです。(柴斐義、1985 年)

N003-2 中国でも世界各国の建築家などの活動は紹介されている

中国でも、世界各国の建築家や、そうした人々の活動は紹介されています。こうした中で、何とんでも知名度が高いのは日本の建築家です。丹下健三先生、黒川紀章先生、磯崎新先生などは特に人気があります。中国と日本は同じ文化を共有しているため、日本の建築は中国人にとってもなじみやすいでしょう(柴斐義、1985 年)

N005-1 中国東北地方では日本人による多くの建物が今も活用されている

中国東北地方には日本人の手になる多くの建物が今も健在で、活用されている。改修され、新しい用途の建物に生まれ変わるケースも多い。その場合、それらの建物の建設当時を知る日本人からの情報提供が、極めて重要なのだが提供される機会はずまい、というのである(稲村純、1985 年)

N009-1 香港は現在、政治的、社会的な緊張感にあふれている

香港はいまさら説明するまでもないが、英国の植民地として、又、

東南アジアの自由主義経済の中心として繁栄してきた。現在、1997 年の租借期限切れを目前にして、政治的、社会的な緊張感にあふれている(編集部、1986 年)

N013-1 中英交渉の妥結以降、香港は一種のビル建設ラッシュ

1997 年の租借期限を過ぎても、その後 50 年間は自由貿易港として存在できる。中英交渉の妥結で、その将来が保証されて以降、香港には一種のビル建設ラッシュが訪れている。(編集部、1986 年)

N016-1 セメントの年間消費量は世界一だが生産設備は前近代的

中国はセメントの年間消費量が 1 億 5000 万 t と世界一だが、前近代的な生産設備が大多数を占めるため、生産が需要に追いつかない状態が慢性化している。(編集部、1987 年)

N017-1 香港は生産の地ではなく「時は金なり」の地

香港というところは生産の地ではなく、「時は金なり」の地です。ですから建物を建てるための素材を全く生産していない。そこで、あらゆるものが外部から運び込まれた。その意味では、香港上海銀行ビルは初めからグローバルな建物だったわけで、日本からも多くの企業が参加したことはご承知のとおりです。(ノーマン・フォスター、1988 年)

N018-1 香港の町は想像するよりはずっと清潔だった

全般に、香港の町は想像するよりはずっと清潔だった。通りにも講演にもそれほどごみや紙屑などは散らばっていなかった。地下鉄なども同様だった。(東孝光、1988 年)

N018-2 香港が薄汚れた感じなのは、各住戸がバラバラに継ぎ足しているから

どうやら香港の町が薄汚れた感じなのは、各住戸が勝手にバラバラに外部に継ぎ足しを行い、1 棟のどこかで必ずといってよいほど、竹の足場を付けてペンキ塗りなどを行っていることが原因のようだ。一棟が一斉に化粧直しをするようなことはどうもお手上げらしい。(東孝光、1988 年)

N021-1 自由主義体制が保証されているが、香港の将来はまだ不透明

これらの批評は、超高層ビルが立ち並ぶ近代都市香港にあっても、依然大きな影響力を持つ「風水」の思想を感じさせる。自由主義体制が保証されているとはいえ、香港の将来はまだまだ不透明な部分が多い。そんな不安から、建物のデザインにも敏感になっているのだろう。(編集部、1988 年)

N024-1 日本と比べると現在の中国は一大農村社会である

農業に代表される第一次産業就業者が 70%、第 2 次産業就業者が 15%、第 3 次産業就業者が 15%という比率が最近の大体の目安となる。同じ分類を日本で見てみると、第 1 次 10%、第 2 次 35%、第 3 次 55%となり、その差が歴然としてくる。(市川宏雄、1989 年)

N027-1 香港は現在、政治的・社会的な緊張感に包まれている

150 年もの間、英国の植民地として統治されてきた香港は、租借期限の切れる 1997 年、中国に返還されることが決まっている。(編集部、1990 年)

N027-2 香港は天安門事件のショックから立ち直り活気を取り戻しつつある

香港の将来には依然として不透明な部分も多い。昨年 (1989 年) 6 月に中国で起きた天安門事件は香港を大きく動揺させた。...だが香港は現在、天安門事件のショックからも立ち直りつつあり、街は以前の活気を取り戻してきているようだ。(編集部、1990 年)

N032-1 時間的金額的にも国内旅行感覚でいける香港リゾート

今、地図上に引かれた国境ラインが意味を持たない時代が到来している。時間的にも金額的にも“国内旅行感覚”で行ける東南アジア圏は、日本のリゾートにとってはもはやひとつの競合マーケットとして考えなければならないだろう。(村瀬千文、1992 年)

N035-1 環境問題を確実に内包しながらも、北京は加速度的に成長

西暦 2000 年のオリンピック誘致もあって、都市基盤の整備は重要課題となっているのだ。しかしながら、一方では市内の車の増加率は年率 10%に上り、自転車に代わって自動車の洪水が市内を埋めつつある。既にインフラ問題は顕在化しつつある。さらに、大気汚染、騒音等の環境問題を確実に内包しながらも、今、「北京」は加速度的に成長している。(波多野哲次、1993 年)

N035-2 「伝統と現代」という課題が最近の北京動向

北京の現代建築における「伝統論争」は当然続くであろう。日本と比してかなりの制約、束縛を受ける条件下の設計活動の中でも「伝統と現代」という重要な課題に果敢に取り組む中国の建築家の息吹が十分に感じられるのが最近の北京の動向である。(波多野哲次、1993 年)

N035-3 開発と保存の問題が重要な課題だ

今回の JIA 訪中団との交流会の席上、設計院副院長の張学信氏は、「...城区を低く抑え外周に高層建築を建てるという原則にもかか

わらず、既に二環路の内側にも高層建築が建っており、開発と保存の問題は重要な課題だ」と、北京の建築家の抱える問題を率直に語ってくれた。(波多野哲次、1993 年)

N039-1 中国では乾式工法はごくわずかで湿式工法が圧倒的多数

中国では金物は鉄ぐらいしかなく、非常に高価なため乾式工法はごくわずかで、湿式工法が圧倒的に多い。(編集部、1994 年)

N039-2 中国人の技術力を高く評価

清水氏は中国人の技術力を高く評価する。「アールや細かいジョイント部分まで本当にきれいに取り付けてある。またびしゃんやのみの使い方がうまく、小たたきや割肌などの表面加工もきれいに仕上がっている」。(編集部、1994 年)

N043-1 人海戦術と外国最新鋭機械の合理的施工法こそ中国建設現場

作業員の日当は平均すると約 180 円。...掘削作業などは、すべて“手掘り”である。...建設機械はほとんど (ドイツやオーストラリアなどの海外) メーカーから直接購入した。日本のようなリース契約はしていない。...労働力を惜しみなく投入した人海戦術、そして各国のメーカーから導入した最新鋭の機械による合理的な施工法。両方の混在は、中国の建設現場ならではの光景だろう。(編集部、1994 年)

N043-2 日本の投資家は香港企業より天安門事件以後の投資に慎重

香港企業の対中投資は天安門事件の翌年から活発化したという。...一方、日本の投資家は天安門事件を中国政局の不安定さを象徴する“負の教訓”として受け止め、以後の投資に慎重になった。その差は現在はっきり現れている。(編集部、1994 年)

N043-3 中国は最初に井戸を掘った人を優遇する国

日本では二番せんじの企業が利益をさらうこともあるが、中国人はそれを許さない。先手必勝だ。(編集部、1994 年)

N043-4 2010 年ころには中国が“アジアの USA”になる

2010 年ころには中国が“アジアの USA”になると確信している。この国が、アジアの生産量の相当部分を消費する巨大マーケットになるだろう。(藤田一憲、1994 年)

N043-5 中国でのプロジェクトの採算性は非常に厳しい

一般に都市部の建築コストは日本の半分程度と言われており、設計報酬を料率方式だけで決めることはなかなか難しい。(柴田陽三、1994 年)

N043-6 基本的な設計と条件が設計の途中で変わることも珍しくない

中国では、敷地境界線や容積率、施設内容など、基本的な設計と条件が、事業の推移によっては設計の途中段階で変わることも珍しくない。だからといって日本のシステムや価格を押し付けようとしても、それは通用しない。現地の考え方を尊重し、オーナーや中国側の協力事務所の懐に飛び込んでやるくらいの気持ちが必要だ。(柴田陽三、1994 年)

N043-7 長期的には日中両国の建築コストの価格差は縮小していく

日本の建築コストは現在低下傾向にあり、逆に中国の沿海経済発展ゾーンは、相当なインフレーションに見舞われている。(柴田陽三、1994 年)

N043-8 建築の許認可手続きも、簡素化されていくのではないのか

中国の行政当局は、諸外国の建築法規を非常によく研究しており、地方の条例も最近急速に整備されてきた。...中国側の設計事務所との役割分担についても、ケース・パイ・ケースで柔軟に対応できるようになった(柴田陽三、1994 年)

N048-1 海外に移住した香港人に、次第に家族と共に帰国する人が増加

現在、香港は 1997 年の中国返還に向け大きな時代の転機を迎えようとしている。...(15 年前の) 当時は、香港の設計者や技術者の多くが海外に生活拠点を移し、家族とその国でグリーンカードを取得した。その後、本人が単身で香港に戻って仕事に付くケースが目立っている。そして次第に家族と共に帰国する人も増えている。(田中克憲、1995 年)

N049-1 近代化の最先端を担うべく、上海は大規模な変革に向かっている

中国近代化の最先端を担うべく、上海は大規模な変革に向かってひた走っている。...建設ラッシュを眺めていると、上海の時代の移り変わりを実感させられる。(笹原正次、1995 年)

N049-2 上海の本質とは、他国の文化を吸収しながら発展する国際性

かつて上海は「FAIR OF WORLD ARCHITECTURE」と称されたことがある。過去この街で、世界のさまざまな建築様式が展開されたからだ。...この街の本質が、いつの時代も他国の文化を巧みに吸収しながら発展する国際都市であることを認識させられる。(笹原正次、1995 年)

N053-1 資本と時間を吸い込むだけのブラックホールかどうかはまだ不明

米国のある大手設計事務所の極東担当ディレクターが、「中国はブラックホール。資金と時間を注ぎ込んでも吸い込まれる一方」と嘆いていた。...現在の仕事は、中国市場における第二第三のプロジェクト獲得につなげていくための努力であることは確かだ(アンドリュー・ミラー・三宅章、1995 年)

N055-1 アジアの超高層ブームは、言い換えればアジアの香港化

九龍側から見た街の、超高層ビルが次々と高くならんでいく光景は雨後のタケノコのようなものである。...インスタント・シティーとして、短期間に伝統も文化もない街が生まれるという構図はなんとか避けてほしいところだ。(池上俊郎、1995 年)

N056-1 今後上海は日本や欧米から企業が集まってくることが想定される

今後の経済発展に伴い、上海には日本や欧米から多くの企業が集まってくることが想定される。(森ビルは) 規模も質もトップレベルで、入居する企業がステータスをもてるようなオフィスビルをつくれば必ず需要はある、と見込んでいる。(編集部、1996 年)

N060-1 アジアではゼネコンが施工を一括発注することはめったにない

主要な業種については、オーナーが直接サブコンと契約を結び、コンサルタントを介して自分でコントロールする。彼らは自分が叩いて、本当に“安い”と思えるところとしか契約しない(三村正明、1997 年)

N061-1 香港返還式典後ここでは建設ラッシュ

香港返還式典が終わった。当地では新しい体制に橋渡しするように...インフラ整備が進んでいる。大型開発に引っ張られるかのように、市街地でも建設ラッシュの状況を呈している。その風景は香港市民に安心感をもたらし、不安を取り除く効果もあるようだ。(編集部、1997 年)

N061-2 香港の建築家たちの舞台はすでに中国に広がっている

むしろ、気になるのは「バブル」より、中国経済の行方である。1980 年前後、広東省南部に香港からの工場進出が始まり、返還の前から香港と中国は経済的に密接に結びついている。設計事務所やデベロッパーも同じだ。...ほとんどの設計事務所が中国大陸で設計業務に携わっている。(編集部、1997 年)

N062-1 香港の都市の魅力は、西洋と東洋がうまく合体しているところ

英国の植民地だった香港はもともと、住宅地域、商業地域、工業地域という具合に、機能別にゾーニングする西洋近代の都市思想によってつくられた。だが、その歴史は、分類、整理された空間のスキマを中国人が埋めていく過程だった。そこには、都市居住を望み、空間があればどこにでも住むという中国人の論理が働いている。(村松伸、1997 年)

N062-1 風水を重視する中国の都市空間とは「私」空間の弱肉強食論理

それを最も象徴していたのが九龍城だ。風水や九龍城などには西洋近代の都市計画を乗り越える何かがあるはずだと期待される。しかし、風水には自分さえ良ければいいというエゴイスティックな面もある。それには西洋的な「公共」という概念はあまり見られない。(村松伸、1997 年)

N063-1 海外の情報がほとんど入らない一方で海外建築家の登用増加

8 年前から日本の事務所で働いている構造設計者・徐光氏は、中国の建築界を「鎖国状態」と表現する。海外の情報はほとんど入ってこないからだ。(編集部、1997 年)

N096-1 東京オリンピックや大阪万博のときのような面白さがある

まるで 40 年くらい前の日本にタイムスリップした感じだ。...僕らが若いころ、東京オリンピックや大阪万博に寝食わすれて取り組んでいたときのような面白さが、今の中国にはある。(川口衛、2003 年)

N096-2 今の日本ではない、大スケールで構造的な洗練が志向される

中国にも構造家の知り合いは多いが、あまりレベルは高くない。そういうものを国が求めてこなかったから仕方ない。今の日本では「大きい」ということにほとんど関心が持たれなくなったが、中国では大スケールで構造的に洗練されたものが求められている。(川口衛、2003 年)

N097-1 今の中国には「中間」がないと言われる

新旧の建物が混在し、高所得者と低所得者が同じ街で暮らす。そんな両極化する中国を象徴しているかに見えるのが、山本理顕設計工場が設計・監理を進める「北京建外 SOHO」だ。(編集部、2003 年)

N098-1 以前と変わり、発注者も良い設計にはお金がかかると認識

当社のような外資系の設計事務所に頼むと設計料は高くなるが、せいぜい事業費の 1% ほどにしかならない。以前は設計料を一銭でも安くしたいという発注者が多かったが、良い設計をするにはそれなりのお金がかかるということが認識されつつある。(曹煒、2003 年)

N099-1 上海にはアフターサービスが根付いていない

2 年間の保証を付けていても、にわかに信じられないようだ。(小倉満、2003 年)

N099-2 中国人は日本人のようにパンフレットでなく実物で選ぶ

客と一緒に建材市場に行き、建材を選ぶのが一番大変。中国の人は、日本人のようにパンフレットで選ぶことでは満足しない。実物を見て選ぶ(小倉満、2003 年)

N100-1 マクロ政策に沿って動くので五カ年計画を見ていれば外れない

中国はマクロ政策に沿って動いていく。五カ年計画をにらんでいけば、大きく間違えることがない。強権を発動して一夜で政策が変わる国だから恐ろしいという向きもあるが、当社はそういうひどい目に遭ったことはない(野田光一、2003 年)

N102-1 「保存も利益に結びつく」と中国のデベロッパーの意識に変化

中国ではこうした保存再生の例(上海新天地)はほとんどなかった。デベロッパーや施工者と価値観を共有するのには苦労した。私自身、本当に客が来るのかという不安もあった。それほど着工前の状態はひどかった。だが、この施設が成功したことで、「保存も利益に結びつく」と、中国のデベロッパーの意識が変わった。(青沼克明、2003 年)

N102-2 中国は、目的のためには制度まで組み替えてしまう

中銀大厦はコンペから 5 年で完成した(2000 年竣工)。同じものを日本でつくろうとしたら、諸々の調整作業で完成に 10 年にかかる。...そのスピード感は快感だ。(横谷英之、2003 年)

N103-1 北京の若い建築家の中にも、個人で活動する人が増加

北京の若い建築家の中にも、個人で活動する人が増えてきている。...大組織に属していたのでは「やっぱり中国の建築は粗い」という評価から抜け出ることができない。(松原弘典、2003 年)

N104-1 世界に例を見ないスピードだ

同規模の本格的なダムを日本で施工する場合は 5-7 年ほどかかる。...中国の工事は合理的で学ぶべき点も多い。(山本隆、2003 年)

N105-1 中国で求められる集合住宅の水準がようやく日本のものに接近

中国市場に改めて本腰を入れる時期がきた (竹田秀道、2003 年)

N105-2 設計の仕事は、こなせないほどたくさんある

人件費の格差を利用して中国で図面などを作成するのもいいが、本質的には中国で設計の仕事をした方がいい。(曹煒、2003 年)

N105-3 中国は制度と実態が違うことがあるなかなか難しい国

中国はなかなか難しい国だ。制度と実態が違うことがある。表面的なことを追いかけてと失敗する。経験の積み重ねが重要だ。(稲田英昭、2003 年)

N106-1 中国は有望な市場だ

確かにリスクはあるが、現地で信頼のできるパートナーを見つければうまくいく。すべての条件が整ってから進出しても、既にビジネスチャンスはなくなっているだろう。今こそがチャンスなのだ。(肖宏、2003 年)

N106-2 近代史や構造への理解が足りない

中国の設計レベルはまだまだ低い。根本的には建築教育に問題がある。...近代建築の歴史を...中国では先生も学生も分からない。...また中国では...構造のことは土木を学んだ人の方がよく知っている。...土木出身者は建築のことをあまり分かっていない。(黄居正、2003 年)

N107-1 真ん中がぽっかりと空いているのが今の北京

とても古いものと新しいもの、とても小さいものと大きいもの。時間と規模の 2 軸で見た場合、真ん中がぽっかりと空いている、それが今の北京だと思う。(迫慶一郎、2003 年)

N110-1 中国の建築現場を見ると、バブル期の日本と似ていて危機感

箱モノ行政を増長させた一因である建築業界の甘えが輸出されているのではないだろうか。(松山岩生、2003 年)

N112-1 海外事務所には純粋にデザインを求めるのでコンペに参加容易

中国では(日本でのそれがコントロールが難しく仕事の比率が低いのにに対して)公共の比率が高い。彼らは海外の設計事務所には純粋にデザインを求めるので、コンペなどでも参加しやすい。(J. スコット、ギルボーン、2003 年)

N113-1 美德のある独自のシステムを維持しつつ、新しいものと融合

北京はコンペを始めて、予想以上に組織立てられた都市であるこ

とが分かりました。(レム、コールハース、2003 年)

N113-2 現在の米国よりも、建築自体をまじめなものとしてとらえている

建築デザインの主体が民間の方に移りつつある。そうになればなるほど、長期的にみると、公共のものに対する郷愁や関心が高まってきます。(レム、コールハース、2003 年)

N123-1 日本では高価でできないつくり方を中国では大規模なスケールで実現可能

中国では人件費が安いので...日本ではお金がかかってできないようなつくり方を、中国では大規模なスケールで実現できる。中国で建築をつくるだご味のの一つだ。(迫慶一郎、2004 年)

N123-2 中国ではハイペースで経験が積める

中国ならではのスピードとスケールが、ある種の興奮状態を持続させるのかもしれない(編集部、2004 年)

N124-1 中国の施工精度では良いものができる、とは思わない方がいい

現地に事務所をつくる勢いで相手と付き合えば、彼らを動かして質の高いものができる。頑張り次第でいくらでもチャンスがある中国には、年齢を問わず、どんどん行った方がいい。(山本理顕、2004 年)

N125-1 こんなにたくさん建物が建っているのに、いいものが全然ない

学生時代から中国に興味を持ち、よく旅行に来ていた。こんなにたくさん建物が建っているのに、いいと思えるものが全然ない。そのヘンなところが面白かった。(松原弘典、2004 年)

N125-2 特注品づくりは失敗すると痛い、中国で設計する面白さだ

既製品の市場が発達していないので、必然的に自分でつくることになる。特注品づくりは失敗すると痛い目にあうが、中国で設計する面白さの一つだ(松原弘典、2004 年)

N131-1 中国の住宅販売価格は上昇し、政府は“バブル対策”を実施

90 年代後半から中国政府が持ち家政策に転換して以降、ローンを組んでマイホームを購入する人が増え、販売価格は年々上昇している。...価格の上昇を抑えるため、政府は高額物件に対する融資や転売を規制するなど“バブル対策”を実施している。(編集部、2004 年)

N136-1 スピード重視で、生産行為に終始し研究行為が少ない

西欧では、構想段階で模型などをたくさんつくる建築家が多い。デザインが同時に研究行為になっている。(許義興、2004 年)

N137-1 サステナブル建築の展開が急速に広まっている

中国では現在、巨大な建物が猛烈な勢いで計画され建設されている。この過熱気味の建設投資の一方で、環境への憂慮が早々に決定的となり、国の建設政策は持続可能な開発へと急旋回し始めた。(上利益弘、2004 年)

N141-1 いろいろな情報に自分自身をさらし続けるには北京が合理的

絶えず色々な情報に自分自身をさらし続けながら、新しい建築の方法を構想しているに違いない。そういうスタンスを維持するには、北京のような場所を拠点にするのが合理的なのだろう。(曾我部昌史、2005 年)

N144-1 中国がくしゃみをする、日本が風邪をひく時代になっている

至近の例では、中国市場に端を発する鋼材価格の急騰が格好の例だ。...中国の需給環境の変化に伴う建材価格の急騰や急落には要注意だ。(編集部、2005 年)

N145-1 日本の生産技術や管理技術が伝わり、品質的にも安心
(中国福建省の石材団地をめぐった経験で)日本の生産技術や管理技術が伝わる中で、品質的にも安心できるものになっている。欧州に探しにいかなくても、世界中の石が集まってきていることもわかった(鈴木弘樹、2005 年)

N147-1 北京は一部の歴史的部分だけを公共の場としその他は一律

アジアの都市は、一部の歴史的な部分だけを公共の場として残し、その他の大半の部分は一律同様のつくりとすることを目指しているように見える。これは東京だけでなく、北京やバンコクなどアジアのどの都市にも共通だ。(ニコライ・レメンティエヴ、2005 年)

N147-2 北京ではヒューマンスケールの街づくりが忘れられている

近代都市への試みを急ぐあまり、古い文化に対する意識が低くなっているのが問題だ。(アントニオ・オーチャ、2005 年)

N148-1 建築構造は「均質で安定したものが理想だ」という思想あり

中国では建築構造について「均質で安定したものが理想だ」という思想がある。したがって、対称形でセンターコアタイプの建物

が最も望ましい形だとされている。...日本では、鉄骨造の超高層建物の構造は柔構造であり、地震や風に対して柔らかに変形しながら安全性を確保するのが常識だ。(宮川浩、2005 年)

N153-1 デザインは討論していたら中国では間に合わない

彼らが中国、それも上海の第一線で活躍しているという事実は、東京というホームタウンで仕事をするとはまったく別の位相のことなのである。彼らが言い放った「デザインは討論しない。設計スピードの速い中国で、討論していたら設計が間に合わない」という言葉が、とても印象的かつ彼らしさを物語っている。...彼らにこそ「スピードマスター イン チャイナ」の称号を与えたいと思う。(鄭秀和、2006 年)

N154-1 2003 年以降外国資本の建設会社は工事を直接受注不可
日本企業から中国企業に施工者を変更した背景には、中国が WTO (世界貿易機関) に加盟した影響があった。2003 年 10 月以降、外国資本の建設会社は国内工事を直接受注できなくなった。(編集部、2006 年)

N160-1 中国の「輸出」が始まる

建設ラッシュの中国では、建築を実践する機会に恵まれており、国際的にも知名度のある若い建築家が出てきています。...これから建設ラッシュに沸く中東に、自分たちのデザインの「輸出」を始めたようです。(迫慶一郎、2007 年)

N161-1 規模の大きな仕事は中国の方が向いている

自分の欲望ごとに、必要に応じて軸足を動かせばいい。(石山修武、2007 年)

N162-1 中国でもマンションの高層化が確実に進んでいます

しかし、15 年ほど前まで北京の街は低層の建物で覆い尽くされていました。超高層マンションが主流になったのは、ここ 10 年くらいの出来事です。(迫慶一郎、2007 年)

N163-1 中国では莫大な数の開発行為が行われています

そのため目まぐるしく変わる社会の需要からズレていることもよく起こっています。(迫慶一郎、2007 年)

N165-1 経済的な急成長で日本に比べ設計のチャンスが多い

日本の設計者はどんどん海外に出てきてほしい。中国のように経済的に急成長している国では、日本に比べて圧倒的に設計のチャンスが多いからだ。(東英樹、2007 年)

N166-1 乱開発に対する市民の批判の声が高まってきている

中国では、土地は国の所有物であり政府の立ち退き命令は絶対だ。しかし最近、強制退去を命じる政府側と、たてこもる市民との衝

突が何件か大きくメディアで取り上げられ、乱開発に対する市民の批判の声が高まってきている。(東英樹、2007 年)

N173-1 何でもでかい！

天安門のすぐそばにある北京市規劃展覽館は、都市計画がテーマの珍しい博物館だよ。地上 4 階、建築総面積 1 万 6000 平米という体育館並みのスケールも、北京にいと見慣れてくるなあ…。何でもでかい！（モサキ／田中元子＋大西正紀、2007 年）

N180-1 四川大地震の被災地では、被災者への生活支援が急務

中国政府は被災地の再建に乗り出したが、相次ぐ余震やダム決壊の恐れなど二次災害リスクは高く、思うように進んでいない。復興に向けた課題は多い。(編集部、2008 年)

N181-1 日本ではできないことがすべて実現できるような気がした

相手が中国の会社のため、どこかで危うさを感じながらも、日本ではできないことがすべて実現できるような気がして、心を躍らせながら案をまとめた。ところが、プレゼンの後、先方からの連絡がぶつりと途絶えた。…こんなことは中国では珍しくないと聞く。(石山修武、2008 年)

N184-1 外国人設計者と出稼ぎ労働者の「よそ者」が北京の発展を支える

五輪開幕に向けて工事が中断するために、彼ら（農民工）は北京から締め出されて、故郷の農村に帰ることになる。(編集部、2008 年)

N184-2 国際社会に美しい北京をアピールする試みは人海戦術で達成

国際社会に向けて美しい北京をアピールするという中国の試みは、人海戦術を駆使してなんとか達成されそう。しかし、問題は五輪の後。突貫工事で作った上げた幾多の成果を、引き継げるかが課題だ。(編集部、2008 年)

N186-1 中国で設計する際には、メリハリが大切だ

ポイントを押さえないままメリハリのないデザインをすると、施工精度の悪さに飲まれてしまう。(隈研吾、2008 年)

N186-2 中国人には時間がたつと分かってくれる懐の深さがある

日本人は中国人を誤解している面がある。それに、日本人は外交が下手。自分と同質の人間を良い人と判断して、異質な人を拒否する。外交というのは、異質な人からハートを取り出す行為だ。(隈研吾、2008 年)

N187-1 北京が本当の意味で変わるのはいくらからか

五輪によって加速した都市開発は、北京の地図を一気に塗り替えた。中国の設計者は急速にデザイン力を付けている。建設会社の施工精度は数年前に比べると上がり、単調だったデベロッパーの開発手法にも変化の兆しがみられる。(編集部、2008 年)

N191-1 アイデンティティーを生かそうとする動きはつい最近

2001 年春当時の中国は、「発展」や「刷新」に食欲だった。アイデンティティーを生かそうとする動きが出てきたのは、つい最近のことである。(古谷誠章、2008 年)

N196-1 アジアの国々との連携はもっと必要だと思う。もちろん中国とも

中国が注目されているが、アジアは中国だけではない。韓国や台湾、タイ、シンガポール、マレーシア、多くの国々と連携した方が良い。(安藤忠雄、2008 年)

別表 X1：日本の対中貿易輸出入額推移表（1987－2008 年）

単位：百万円

年		輸出	輸入	輸出入合計
1887	M20	11	8	19
1888	M21	11	10	22
1889	M22	5	9	15
1890	M23	5	9	14
1891	M24	6	9	14
1892	M25	6	13	19
1893	M26	8	17	25
1894	M27	9	18	26
1895	M28	9	23	32
1896	M29	14	21	35
1897	M30	21	29	51
1898	M31	29	31	60
1899	M32	40	29	69
1900	M33	32	30	62
1901	M34	43	27	70
1902	M35	49	41	89
1903	M36	65	45	110
1904	M37	68	55	123
1905	M38	99	53	151
1906	M39	118	57	175
1907	M40	106	68	174
1908	M41	78	64	142
1909	M42	89	65	154
1910	M43	109	78	187
1911	M44	111	83	194
1912	M45	142	81	223
1913	T02	184	92	277
1914	T03	185	90	274
1915	T04	163	114	277
1916	T05	230	143	372
1917	T06	384	186	571
1918	T07	476	382	858
1919	T08	597	484	1082
1920	T09	524	415	939
1921	T10	365	304	668
1922	T11	405	317	722
1923	T12	340	353	694
1924	T13	421	413	834
1925	T14	570	391	961
1926	T15	521	396	918
1927	S02	425	358	784
1928	S03	483	385	868
1929	S04	471	376	847
1930	S05	348	283	631
1931	S06	221	236	457
1932	S07	276	205	481
1933	S08	411	281	693
1934	S09	520	311	831
1935	S10	575	350	925
1936	S11	658	394	1052
1937	S12	791	437	1228
1938	S13	1166	564	1730
1939	S14	1747	683	2430
1940	S15	1867	756	2623
1941	S16	1659	855	2514
1942	S17	1513	1222	2735
1943	S18	1299	1322	2621
1944	S19	1122	1707	2829
1945	S20	372	854	1226
1946	S21	221	273	494
1947	S22	761	182	943

年		輸出	輸入	輸出入合計
1948	S23	287	1275	1562
1949	S24	928	5587	6515
1950	S25	7068	14158	21226
1951	S26	2098	7778	9876
1952	S27	216	5365	5581
1953	S28	1634	10692	12326
1954	S29	6875	14677	21552
1955	S30	10277	29080	39357
1956	S31	24200	30100	54300
1957	S32	21800	29000	50800
1958	S33	18200	19600	37800
1959	S34	1300	6800	8100
1960	S35	1000	7500	8500
1961	S36	6000	11100	17100
1962	S37	13800	16600	30400
1963	S38	22500	26900	49400
1964	S39	55000	56800	111800
1965	S40	88200	80900	169100
1966	S41	113454	40843	154297
1967	S42	103786	37363	141149
1968	S43	117158	42177	159335
1969	S44	140689	50648	191337
1970	S45	204796	73727	278523
1971	S46	208148	74933	283081
1972	S47	190592	59655	250247
1973	S48	313927	94806	408733
1974	S49	591374	176229	767603
1975	S50	677573	203272	880845
1976	S51	507083	154660	661743
1977	S52	521068	415710	936778
1978	S53	633035	425240	1058275
1979	S54	803877	647743	1451620
1980	S55	1140787	977794	2118581
1981	S56	1114601	1170117	2284718
1982	S57	871723	1326521	2198244
1983	S58	1167551	1209149	2376700
1984	S59	1720803	1411271	3132074
1985	S60	2991151	1552365	4543516
1986	S61	1666511	965839	2632350
1987	S62	1198213	1075383	2273596
1988	S63	1213931	1264214	2478145
1989	H01	1164719	1534283	2699002
1990	H02	883510	1729858	2613368
1991	H03	1156768	1913713	3070481
1992	H04	1510321	2144777	3655098
1993	H05	1911297	2278026	4189323
1994	H06	1913705	2811395	4725100
1995	H07	2061960	3380882	5442842
1996	H08	2382363	4399676	6782039
1997	H09	2630721	5061673	7692394
1998	H10	2620905	4844135	7465040
1999	H11	2657428	4875385	7532813
2000	H12	3274448	5941358	9215806
2001	H13	3763723	7026677	10790400
2002	H14	4979796	7727793	12707589
2003	H15	6635482	8731139	15366621
2004	H16	7994233	10198963	18193196
2005	H17	8836853	11975448	20812301
2006	H18	10793696	13784370	24578066
2007	H19	12838997	15035468	27874465
2008	H20	12949899	14830405	27780304

1887 年から 1965 年までは『明治以降本邦主要経済統計』日本銀行、1966 年を参照、1966 年から 2004 年までは「18-1-a 輸出入額 主要国(地域)別(昭和 37 年－平成 16 年)」と「18-2-a 輸出入額 主要国(地域)別(昭和 37 年－平成 16 年)」『統計局ホームページ／統計データ／日本の長期統計系列／第 18 章 貿易・国際収支・国際協力』(<http://www.stat.go.jp/data/chouki/index.htm>, 2011 年 4 月 19 日確認)を参照(うち 1966 年から 76 年はドルレートなので当該年の 1 月 1 日の円ドルレートで円に換算)、2005 年から 2008 年までは財務省貿易統計(<http://www.customs.go.jp/toukei/info/index.htm>)を参照して筆者が作成。

